

UFOLOGY 資料

UFO RESEARCHER VOL.3 No.1 1991 特別号 改定版



UFO—知識・体験・探求

- UFO知識：空飛ぶ円盤からUFOまでの歩み
航空機によるUFO遭遇例など
- UFO体験：空飛ぶ円盤との出会いから
天宮家族によるUFO目撃記録など
- UFO探求：地震・津浪とUFO記録
伝承の中の空中機械と搭乗者
ワシントンUFO事件の意味
核兵器とUFOなど

天空人協会西日本統合部・奈良支部 天宮清編著

■台湾で撮影されたUFO

1990年、台湾の台南県白河町関子嶺で、前台南県長李雅樵氏の長男李立宇氏がビデオカメラに撮影したもの。

撮影地点の関子嶺は台南市の北東約45kmにある温泉地で、嘉義からは28km。関子嶺温泉は海拔270mの山中にある。

3枚の写真は1994年に台湾のテレビで放映されたUFO番組を録画したVHSビデオテープ（中華不明飛行物科学協会理事長江見栄博士提供による）の映像から写真撮影したものだが、同博士著『神秘宇宙大探索系列1-UFO』231ページによると、左手に見える建物は「大仙寺の七宝塔」の一部と思われる。昭文社刊『台湾の旅』136ページの関子嶺温泉には「釈迦をまつる大仙岩寺」と記載されている。

この映像は前述の江博士著書によると「約20分間」撮影されたという。

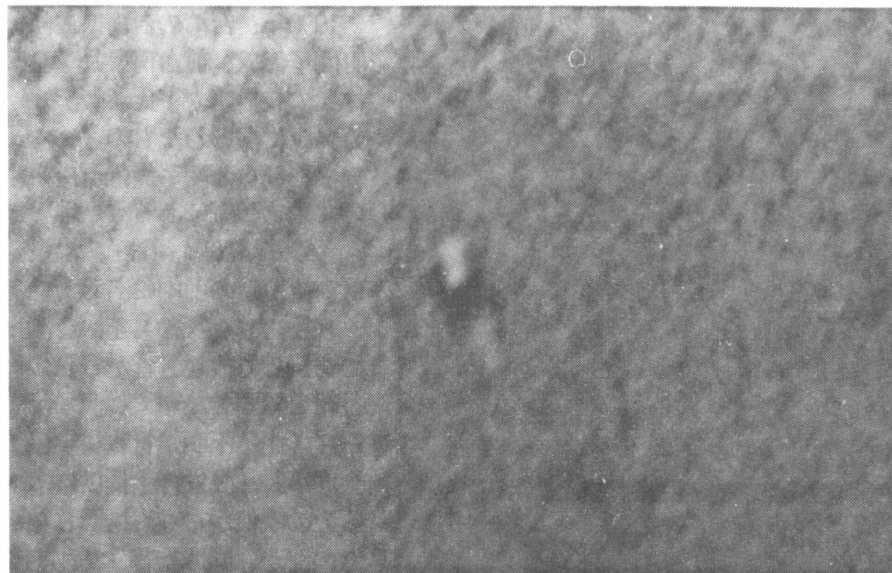
テレビ放映された映像は、その一部と思われるが、実に不思議な現象を見せている。

まず音声には、撮影者の周囲に複数の目撃者がいるらしく、現象を見て騒いでいる様子がわかる。撮影時刻は日没後らしく、陽が沈んだ後の西空を思わせる薄明かりの上に、底辺が直線的で上部がドーム状か三角状になった白色に光る物が6個静止しているのが認められる。

中央の1個を囲んで五角形を形に囲むような配置である。どうも中央の1個は周囲の5個よりやや小さく円形に近い。

そのシーンの後は位置を少し建物寄りの空間に横V字に配列を変えた光体が写っており、それが一つづつ消えて行く。そして、最後の1個が消える頃、さらに建物寄りの空間に、一つの輝きが現れ、それが再び横V字の光体隊形へと形成されるのだ。

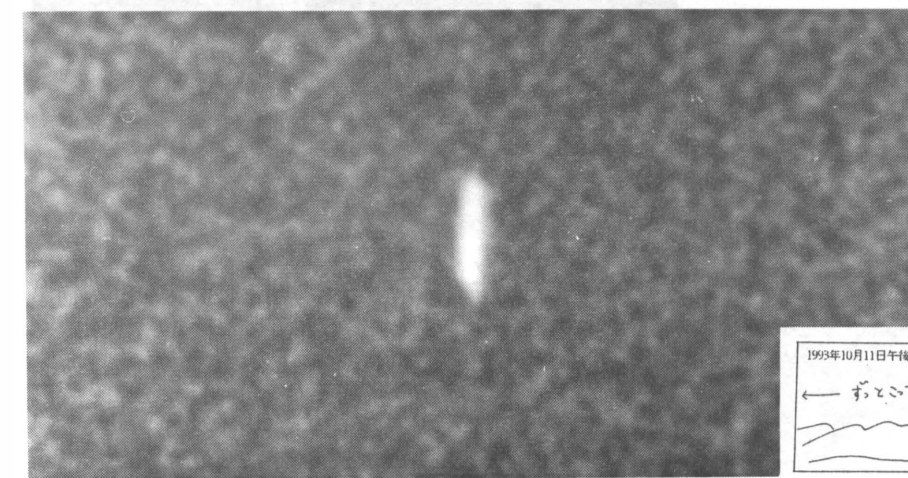
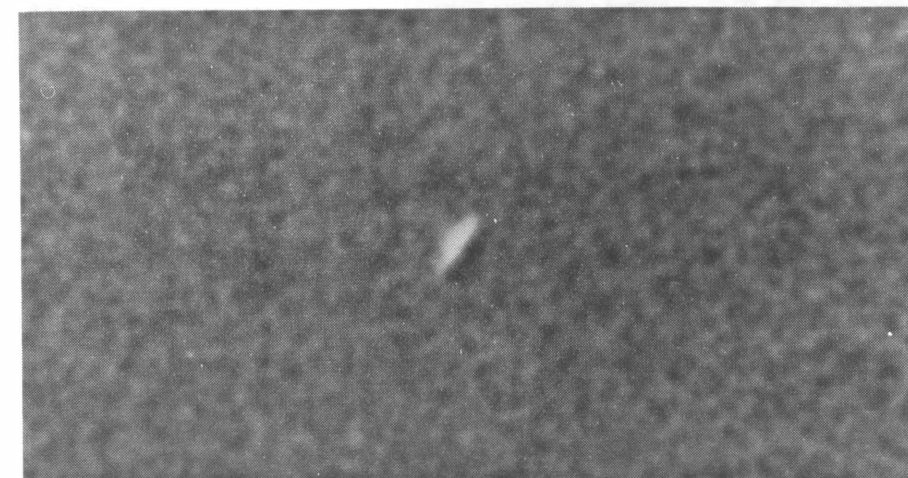
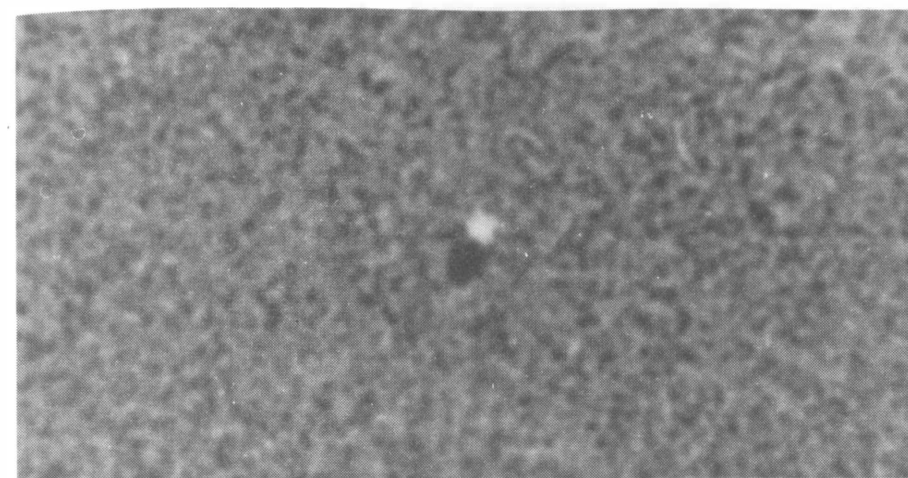
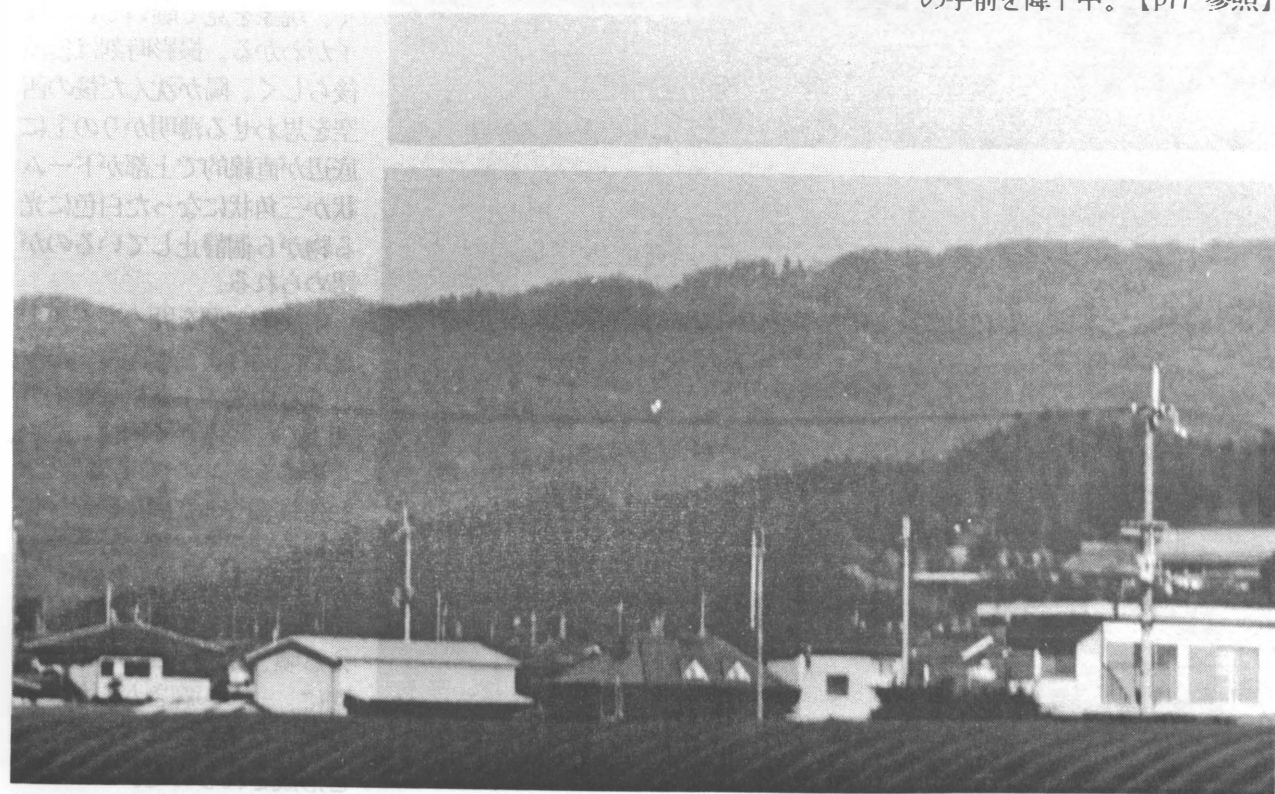




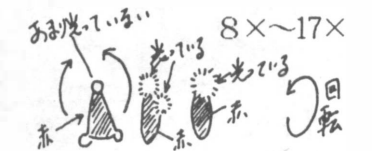
■上空から直線的に降下した
変化する物体の連続14枚撮影
1988年1月1日午後1時半
すぎ頃から、天宮清、ユキ、志
麻の3人は、自宅近くの周囲を畑
に囲まれた路上で、毎年恒例の
元旦UFO観測を開始した。

午後2時頃、天宮ユキが北方
の方向に凧とみられる物体を見
つけた。天宮清はユキの指差す
方向、仰角10度付近にそれを確
認。すぐカメラ（アサヒペンタ
ックスME・シグマズーム100mm
～200mm・フィルムASA 100 ネ
ガカラー）でとらえると共に、
通常の凧と異なり、少しづつ移
動している事で異常を感じ、撮
影を開始した。

天宮志麻は6倍の双眼鏡に物
体を捕捉。それは緑、赤、白の
三色の色彩を持つ三角状の物体
に見えた。同様に肉眼と6倍双
眼鏡で観察した天宮ユキも物体
があざやかな色彩を持つ光の強
い物体に見えた。200mm ズー
ムでは物体が定速で右に降下し
つつ時折折光を強くするのが見
られたので、その時を狙ってシャ
ッターを切った。上2枚の写真は
拡大した最初の2コマ。下は山
の手前を降下中。【p77 参照】



■回転する小飛行物体を 300mm で連続26枚撮影



天宮志麻による 双眼鏡観察図

1993年10月11日午後4時05
分、天理市杉本町の農地で空
中観測中の天宮ユキと天宮志
麻は、東北東の空から南東に
向かって水平飛行する白く輝
く物体を発見した。

天宮ユキは手にしたアサヒ
ペンタックスMEシグマ300mm
ズーム（フィルムASA 400）で
撮影を開始。天宮志麻はズー
ム双眼鏡を8倍から17倍にし
てピントを合わせながらこれ
を観察した。

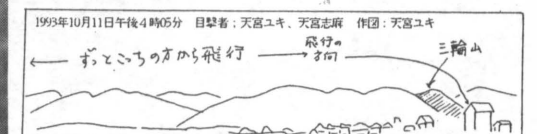
物体は見かけ上、観測地点
から数キロ先に横たわる高さ
500m前後の山々の上方、仰角
20度付近を回転しつつ姿勢や
形態を刻々と変化させた。

その間、天宮ユキは物体の
輝きが強烈になる瞬間を狙っ
てシャッターを切り続けた。

龍王山上空を通過し物体は
三輪山にさしかかった。

すると物体は三輪山上空を
通過した当りから降下を始め
山の右手稜線に沿って降下し、
建物の陰に隠れた。

この間、約40秒。建物の隠
れる直前を撮影してフィルム
を使い切った。撮影した全コ
マ数は26コマ。平均2秒に1
コマの割合で撮影したこと
になる。撮影された物体は大
きさ、形状、色彩を変化させ
ているが、大きさの変化は発
光の面積の変化によるのかも
知れない。





■雲状のUFOか？ 論議を呼んだ弓形の黒雲

1993年7月15日午後、札幌発大阪行き全日空(ANA)772便に搭乗中の天宮ユキは、機の進行方向左手の窓から見える富士山の横に、上下2本の弓形の雲を発見。これをアサヒペンタックスMEシグマ200mm ズーム(フィルムASA400)で撮影を開始した。

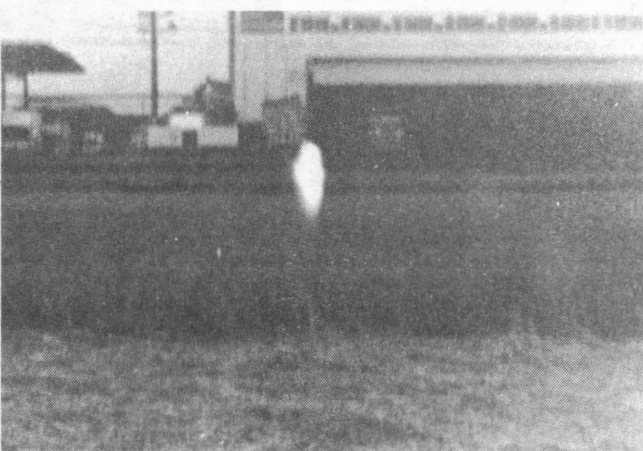
2本の“弓”は雲海から突き出た積雲と機体の間にあり、機体が進行するに従って背後の雲もずれて行く。

連続撮影された11枚の写真をみると、上の“弓”はやや茶色を帯びたグレーで下部に白色の部分がある。この写真を見た研究者の一人は、この部分が反射している部分ではないか、と指摘した。見掛け上の大きさは、長径約2度。9枚目から“弓”は一つになる。そして、11枚目を撮影直後、弓形の黒雲は突然消失し、12枚目は背後の雲だけが撮影されている。この写真を何人かのUFO研究者に送ったところ、「これは雲とは思えず異常だ」という意見や、6枚目に円形のUFOらしき像が写っていると指摘する意見があった。



■ミステリーサークル撮影時に写り込んだ光体

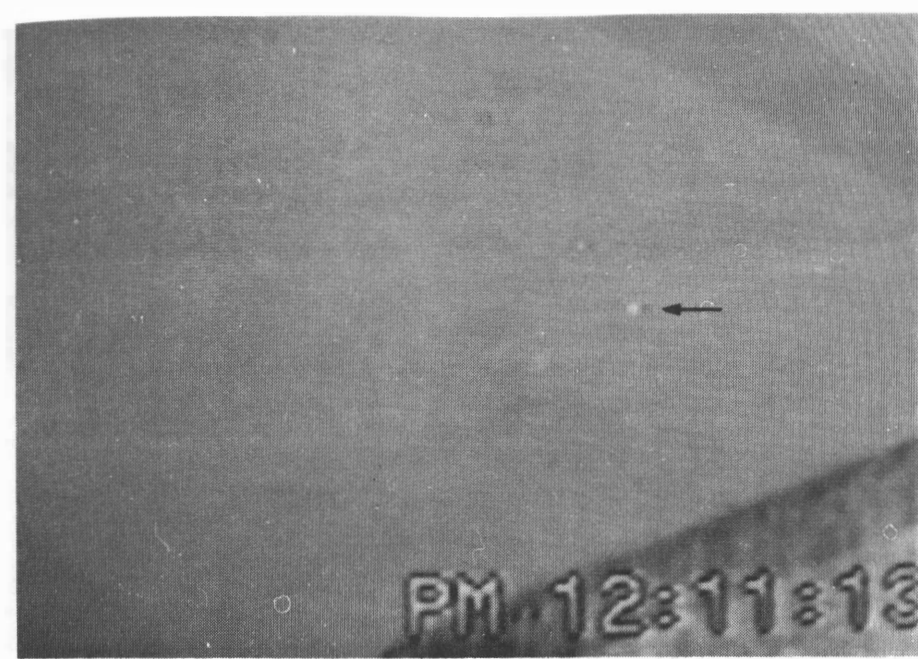
1991年6月2日午前6時頃、兵庫県稲美町の麦畑に出来た直径14mのサークルを、大阪UFOサークル代表の乾達也氏が撮影、そのフィルムに写っていた謎の映像。本場英国でも光体とサークルの関係がみられる。



■発光粒子?を発射した海面を移動する謎の物体

1991年9月7日午後6時半頃、熊本県千束蔵々島より不知火観測の準備中、近くの海面を浮遊するポリ袋状のものを天宮ユキが発見。これを天宮清が8mmビデオに撮影した。物体は3度現れて同じコースを移動。最後の物体から発光粒が発生。

PM 6:25:59



■定速移動の白球をビデオ撮影

1989年11月5日午後12時10分頃、吹田市千里万博公園の陸橋を渡りかけた時、2個の白い球体が西の空仰角30度を北から南へ飛行するのを天宮家族3人が目撃。天宮清が8mmビデオカメラ8倍で撮影した。2個の白球が同時に同一視野に収まったのは一瞬で、不馴れな技術のため良好な映像とはならなかったが、その後、同一と思われる白球が午後3時半までに5度出現し、最後は良好な映像を撮影した。

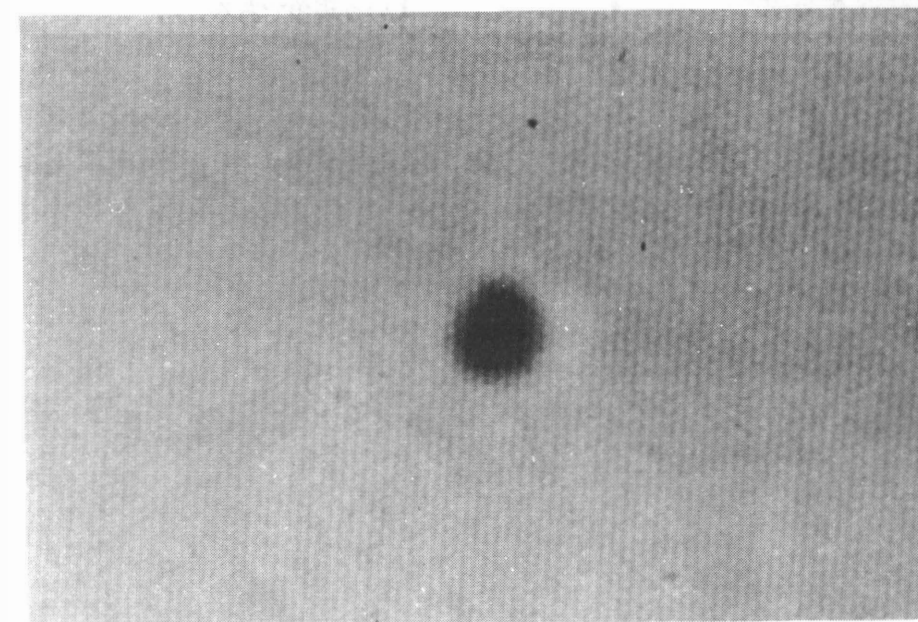
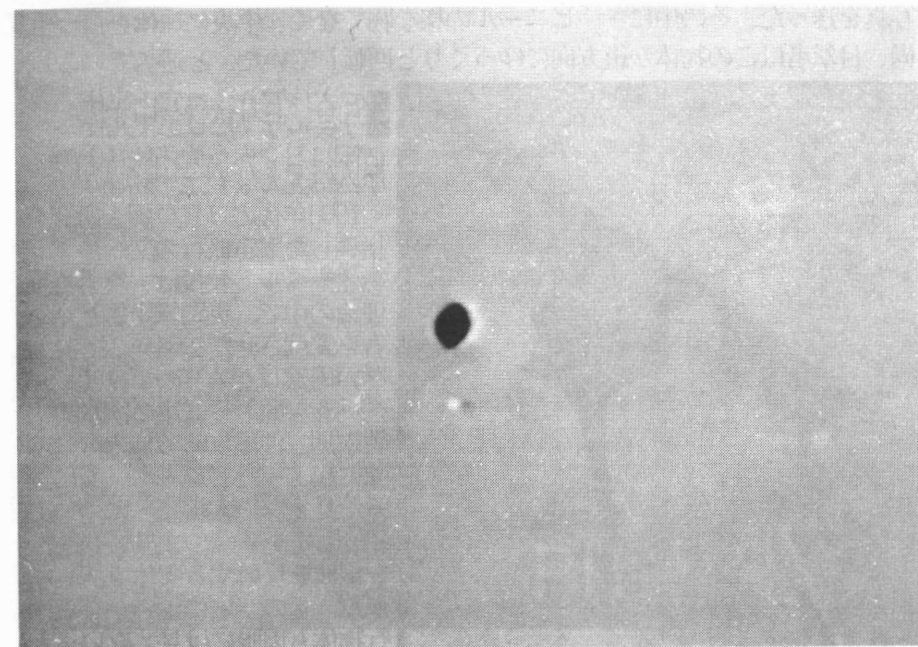
写真は最初の頃のもので、斜め上の小さな白点は遠方の飛行機である。【86ページ参照】

■金星近くを通過した楕円物体

1991年5月5日午後6時35分頃、天理市杉本町の自宅付近で空中観測中の天宮家族3人は、北の空から接近する楕円形の黒い物体を発見。天宮清が8mmビデオ16倍で撮影した。この日は微風だったが、物体は急速に飛行。ちょうど見え始めた西仰角40度金星の上を通過して南へ向かった。8倍双眼鏡で観察した天宮志麻は物体に赤い色が認められ遠方に去る頃は横長に見られた、と報告。肉眼で観察した天宮ユキは、姿勢を変えずに形が変化した事から、風に流される風船とは異なると述べている。

■松原で目撃撮影されたUFOが天理の天宮家観測地に飛来!

1991年9月29日(日曜)午後松原市三宅小学校の運動会を参観中の山野夫妻と多数の父兄が上空に出現した真っ黒な球体を目撃した。山野氏はこれを8mmビデオに撮影。黒球はしばらく停止後動き出した。山野氏は帰宅後もまだ見えていたこの物体を撮影すると共に、生駒方向に向かうのを見て、天理市の天宮宅に連絡。天宮家族3人は、飛来した黒色球体を目撃撮影した。写真はビデオ映像の拡大。



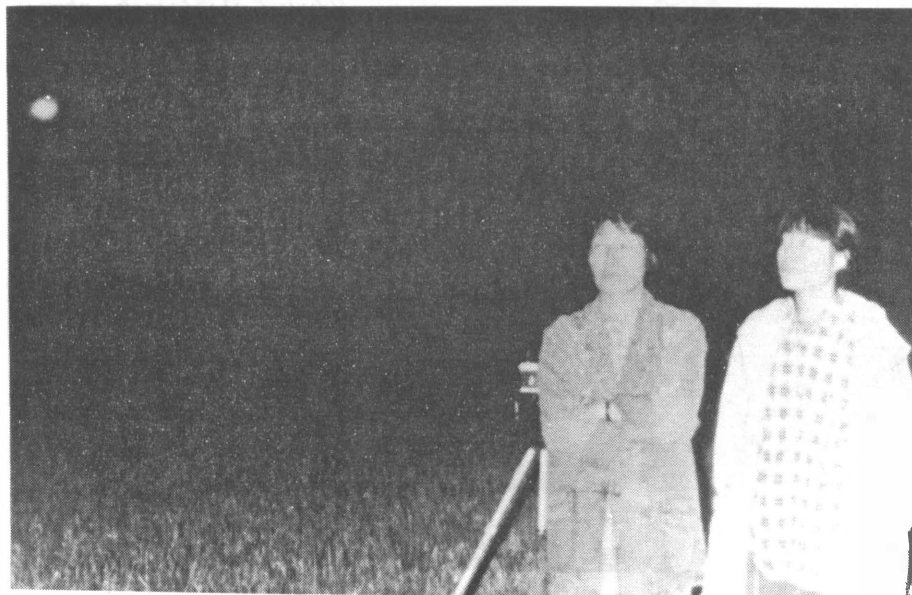
■奈良テレビ局との合同観測で 観測陣の上を通過した謎の物体

1994年5月19日夕刻、地元の奈良テレビ局長期番組『ざっくばらん』のUFO特集のため訪れた旭堂南海氏らレポーター等取材陣と天宮夫妻による合同UFO観測が行われた。

午後6時半頃、天宮ユキが北仰角25度に黒色の細長い物体を発見。「ビニールの様な物！」と皆に知らせた。

天宮清は飛行中の物体を認めて300mm スチルカメラで1枚撮影し、8mm ビデオでも撮影した。

目撃直後、目撃者4名が現場で再現スケッチを描いた。この写真は5月27日の『ざっくばらん』でも発表された。また、近隣のUFO研究者に写真を送った。その中に、「ビニールの様な物でなく、中央に球体を持つ土星形に見える」との意見があった。尚、目撃者はこの物体が縦方向にゆっくりと回転していた、と述べている。



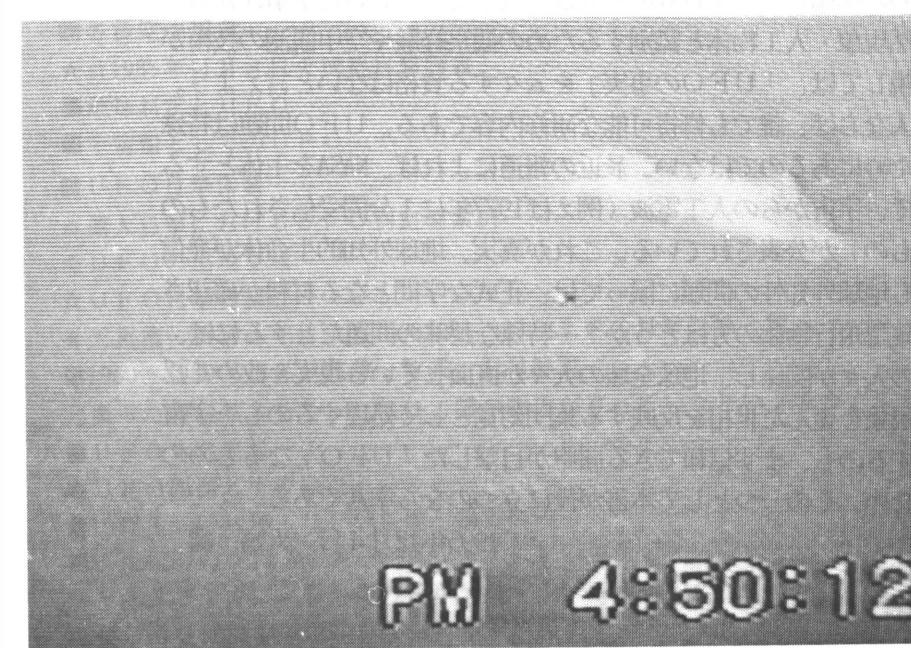
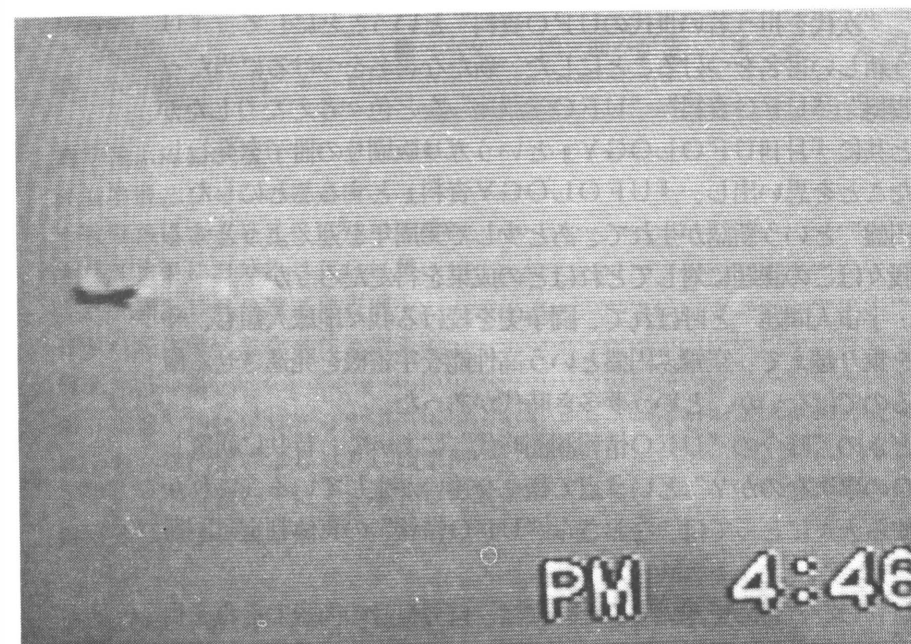
■写真に写り込む空中光体 原因は見えない空中物体か？

1950年代のUFO調査研究を指導した宇宙旅行の父ヘルマン・オーベルト教授は、重力推進理論の中で、英国軍事省と空軍省を驚倒させた1954年の“見えない円盤U=Z”の事件【234ページ参照】や、第2次世界大戦末期、沖縄攻略参加米機動部隊に起こった“レーダー面に写った見えない大編隊”について紹介している。つまり、レーダー電波を反射する実体でありながら、その空域にはいかなる飛行物体も肉眼には見えない、という現象である。

一方、肉眼には見えないが写真に写る、あるいはビデオカメラに映像となる、という現象もある。ビデオカメラは、肉眼の感じる波長380~780nmより赤の領域にずれており赤外線リモコンの信号も光としてとらえる。

スチル写真の場合は昼間は空中の黒丸が位置を変えて連続4コマに写っていたり、人物付近に写り込むケースが多いようだ。

写真は1993年8月13日午前4時頃、ペルセウス座流星群観測中のスナッフ写真（撮影は乾達也氏）中の光体2個。色彩はやや黄色味オレンジ。カメラはコニカ-35。2つの光は撮影位置から仰角10度以下にあるが山や建物のない空間である。



■光度を変化させた白色球体 8mm ビデオ16倍で10分間撮影

1994年10月23日午後4時半頃、天宮清と天宮ユキは、購入した方位測定器「コンパスグラス」の使用試験のため、ビデオカメラを持っていつもの自宅裏手の観測地へ出かけた。空に積雲がまばらに浮かび、傾いた陽光で西空の雲はオレンジ色に輝いていた。

コンパスグラスで周囲の山の方位を測定し、西に向かって歩き始めた時、前方にピカッと白い光が見えた。天宮清は即座にビデオカメラの録画ボタンを押し、オートフォーカスを解除して16倍ズーム一杯にし、雲を見ながら焦点を合わせた。天宮ユキが肉眼で光体を認めて位置を教えるのを聞きながら、天宮は視野の中に光体をとらえた。それは白色に発光する円形の面積が認められるもので、かなりゆっくりと南に向けて移動していた。飛行機のランディングライトを正面から見た場合のような放射状の光線のない、円形の面積全体が白色光に満たされた状態で、陰影部もなかった。写真は画面からスチルカメラで撮影したものだが、光体右の黒い陰はビデオ映像特有のノイズである。

写真上は雲の手前にある状態で、雲の高さは2000m前後と思われる。しかし、見掛けの仰角は5度付近であり、この物体までの直線距離は不明である。

写真中央は、光体が消えている時に飛行機（B-747）が光体の出現空域付近を通過中のもの。

写真下は、光体の輝きが最高となった時のもの。輝きを発した時と、薄れて雲の一片の様になった時の差は、この現象の最も特徴的な部分だ。

UFOLOGY資料

UFO RESEARCHER 1991 特別号
改定第2版の発行に当たって

本書は1989年10月から発行を始めたUFO研究者向け個人誌『UFO RESEARCHER』の特別号として1991年6月に発行されたものの再版である。この時はB4判という大きさに100部印刷し、永年世話になった旧知や親戚、近隣のUFO愛好家・研究家、海外のUFO研究学者、一部の政治団体、政治家、教育者、核廃絶運動活動家、地方新聞社、取材に協力して頂いた方々に送付して品切れとなった。その後も、問合せの度に「品切れです」と返答してきたが、最近になってある研究者から「コピーさせてくれ」と依頼があり、ボロボロになった見本を送ったところ、A4判にコピーして製本して下さった。それを見た結果「A4判に縮小しても十分いける」と判断し、A4判で再版することにした。以前と同じではもったいないので、前身の『特別号』を発行後に撮影したUFO写真・ビデオ映像などから自家製版した写真を「口絵」として追加し、若干の訂正を行なった。

また本書の再版趣旨を、“次代を担う若い世代のUFO資料”ということにして、『UFOLOGY資料』という新しい書名をつけることにした。新たな書名をつけるに当たっては“未確認飛行物体の資料”“UFO資料”“UFO学講座”など色々考えたりしたが、10代の頃UFO愛好仲間と共に『月刊UFOLOGY』というガリ版刷りの冊子を発行して全国の同志から喜ばれたことを思い出し、『UFOLOGY資料』とすることにした。

思い起こせば“空飛ぶ円盤”という新語が生れて、あと少しで50周年を迎えようとする半世紀近い年月の期間、我々はこの課題に対してどれほどの成果を得たのだろうか？

かつては“空飛ぶ円盤・宇宙人問題”と呼ばれて、闘争史を続ける我々地球人類も、やがては様々な危機や困難を乗り越えて、空飛ぶ円盤という高性能な宇宙機を発進させる優れた宇宙社会に参加できるのではないか、という夢多き時代があった。

しかしながら、SFもどきの“昨今の“UFO情報濁濁時代”にあって、昔共に研究した同志も“一体何がUFOの事実なのか？”という点で様々な迷いが生じている。これからUFOに取り組もうとする人々にとっては、なおさら“UFO情報”の真偽判定は困難になっている。

まず基本的に、個人がUFOなるものを認識するためには、自分自身の肉眼でそれを目撃するしかない。そのための準備として全世界の先人達が残した“UFO目撃事件知識”があり、それを既知の自然現象・人工物体と識別するための観察経験や空中観測の技術がある。そうした基礎を無視しては、“UFOの事実”を云々する資格はないと言えよう。これは通常の生活を営む人ならば、誰でも修得可能な研修内容である。UFO問題は特殊な能力を持つ変人だけのためにあるのではない。最近の報道によれば、NASAを主体とする“ET探査”の成果として、宇宙からの人工電波（例えば1977年に1分間受信されたものや、1990年に受信されたもの）が公表されている。これが真実、地球外知的生命体が発信した電波なら、少なくとも地球外知性の問題に限っては、正式な学問となる材料が確認されたと言える。では、未確認飛行物体の方はどうか？…特殊な趣味の問題だとするには、あまりにも広範囲の分野の人々が関係し、地球全域の人々が直面している現実を改めて認識すべきだろう。UFO現象を歪んだ世相を反映する集団幻覚として処理するのも、宇宙からの知性の接近と認識するのも、まず信頼できる同胞が目撃した「UFO」なるものの内容を知らなければならない。その一つとして本書が役に立つのなら幸甚である。

1995年12月4日 天宮 清



「私は諸君に事実を与えるーすべて事実をー
そしてあなた方が答を決定するのだ。」

1955年7月

E・J・ルッペルト

(ルッペルト大尉は、米空軍UFO調査機関プロジェクト・ブルーブックの初代主任で、米空軍のUFO調査活動や目撃資料をまとめた『Report on Unidentified Flying Object』の著者。

上の言葉はその序文にむすばれている。彼は、この本の出版後、1960年11月上旬、37才の若さで世を去った。大尉が軍事用語として考案した「未確認飛行物体UFO」の言葉は、今なお世界に生きている。)

目次

(■=本文 □=囲み記事 ★=表 ☆=図解)

■ 本書のねらい	天宮 清	3
----------	------	---

第1章 UFO知識

■ 空飛ぶ円盤からUFOまでの歩み	4
★ 航空機とUFOの遭遇例	7
★ 戦闘機によるUFO追跡・迎撃例	8
★ パプア島におけるUFO目撃	10
☆ 航空機とUFO遭遇地点例	14
UFO現代史(主な事件と調査)	15
■ 発言集	20
■ 有史前~1946年UFO史	22
★ 学者・専門家によるUFO観察例	24
★ 米・ソ宇宙飛行士によるUFO目撃例	25
■ 内外UFO資料特選	26

第2章 UFO体験

■ 空飛ぶ円盤との出会いから	37
■ 各種空中現象	41
★ ☆ 1985年11月8日火球群目撃図表	46・47
■ 地球科学とUFO	49
■ 宇宙船としてのUFO	51
■ UFO目撃体験	53
☆ 個人目撃におけるUFO判定要素例	61
☆ UFOの出現空域	62
☆ UFO目撃の統計	63
★ 天宮清・天宮ユキによる1960年~1989年までの目撃記録一覧	64・65
■ 1960~1989 UFO目撃一覧表 記号解説	66
□ 撮った時は見えなかったのに、謎の物体が写っていたという場合、まず調べる事	68
■ UFO体験概説	69
■ UFO問題と宇宙探査	71
■ 1987年~1989年 UFO目撃・撮影	74
■ 連続撮影の検討『イメージスキャナによる解析』 S氏寄稿	80
■ 8ミリビデオによる撮影の白球	86
■ 快晴の空に出現の物体を200mmで連続撮影	92

■ 走行中の車に接近したU F O	島田隆雄氏取材	96
■ U F O 現代史発掘		98
■ 懐中電燈の合図に反応したU F O	井上保人氏寄稿	102
■ U F O 観察1983年～1988年	S氏寄稿	106

第3章 U F O 探求

■ 地震・津浪発生にU F Oはどう活動したか	108
□ 関東大震災に出現した光物	115
□ 関東大震災発生までの諸現象	116
□ 関東大震災と日本人の心理	117
☆ 地震に伴う飛行物体表現例〈明治以前〉〈明治以後〉	120・121
□ 神話時代と近代の“火の柱”	132
■ 紀伊南部一神火に救われた町を歩く	133
■ 発光と飛行体一松代地震・えびの地震	遠藤 修氏遺稿より 135
■ 1982年9月17日一不知火海で撮影の光跡	136
■ 伝承の中の空中機械と搭乗者一アイヌ文化神オキクルミカムイから学ぶもの	140
☆ 雷神の物語	149
☆ アイヌ神話の世界	150
□ 一人の神が各地で神話を生む仮説	151
□ レイニア山から空へ逃れた人々の伝説	163
□ 彼方の世界へ出発して、3週間暮らし、故郷へ帰ったら、300 年経過していた伝説	167
☆ 過去の人々が遺した神話と美術は宇宙人來訪を語るか?	169
☆ 空中物体の出会いから、作品が生れるまで	170
☆ 古代日本美術の中のU F O図形	171
■ オキクルミカムイ物語	172
☆ 古代U F O記録再現画	175
★ 世界の文化英雄一覧表	176
☆ 過去の人々は未知なるそれを経験に基づいて表現した	179
■ 古代世界の太陽崇拜と太陽船一空から降った神々は文化を教示した	180
☆ 神々の船	181
☆ 古代と現代の空	182・183
■ U F O の日本史	184
■ UFO 考古学とUFO 考現学の間一機械的な怪火は地表配置された地球外超小型 調査機か?	192
■ 太平洋戦争開戦時、米国本土に謎の空襲	195
■ 核分裂の発見から原子爆弾投下まで	196
■ ワシントン事件の序曲一ナッシュ機長のU F O 遭遇	198
■ ワシントンU F O 事件の意味	200
■ THE DAY THE EARTH STOOD STILL	202
□ 米の原爆使用に懸念を示すべく訪米したアトリー英首相の後を追う如く首都に接近した不明機	203
■ グアム基地U F O 騒動	219
■ SAUCERS RIGHTIN SAC'S BACKYARD	222
■ 北爆の米軍を混乱させた未確認飛行物体	226
□ ベトナム上空のミサイル誤射とは?	229
■ 核兵器とU F O	230
□ 米空軍コンピュータでU F O 実在証明	236
□ 1枚の写真をめぐる常識と非常識	237
■ U F O の意思表示	243
■ 未確認飛行物体の検討	245
■ 1991年新春U F O 討論	253
☆ U F O 画集	天宮ユキ 258
□ 編集後記・表紙説明	259

★★★★本書のねらい★★★★

■本書はU F O 未確認飛行物体の目撃者の30年に及ぶ体験と考察の集大成である。U F O 事件の厳選した知識、執筆自身と家族および友人知人の目撃体験、そしてU F O への限らない探求を広げる3部に分かれている。

単なる読み物ではなく、各種図表や報道記事切抜きなどで資料としても使用に耐える工夫をした。また、生のU F O 資料を文字を読まなくても分かるような図解表現に、様々なアイディアを盛り込んでみた。いつか、カラーのオリジナル資料を加えて本格的な体裁にするのが夢である。

■本来、自分が生を受けた瞬間から、人間として学ぶべきものは、すべて自らの体を通して得るのが原則であろうかと思う。つまり、自ら実践して得るべき経験を、書物などの知識を得て“代用”することは、理解不足、誤解や誤認を生じるものである。しかし、実際問題としてU F O 知識を成り立たせている「他人の体験を、厳密に検討し、否定せず理解し、かつ信頼する姿勢」や、既成の学問体系が築き上げた無数の成果から、U F O 解明にヒントを与える資料を無視して、筆者個人の貧弱な体験ですべてを表現することはできない。

■従って、本書の役目は、筆者など“自分たち”の体験により得たU F O 像を、過去数千年から1990年までの材料を使用して“表現”することにある。

■U F O 現象が、古代からの継続として、はるかな宇宙社会からの地球担当船団による計画的飛行活動であって、地球周辺が自動化された遠隔コントロール飛行物体（無人円盤）の活動範囲にあり、人類との距離を少しづつ縮めることで理解者を増加させる事に重点が置かれているのなら、本書もその役目を果たしたいと願うものである。

■市民によるU F O 実像へのアプローチ■

本書において「U F O 著作物」とは、U F O （空飛ぶ円盤を含む）について書かれたすべての出版物、研究者の報告書類を指す。これはU F O 目撃体験者が自ら書いたスケッチ・記述そのものや体験記とは厳密に区別されるべきである。

つまり、U F O という未知の現象を扱う者は、当事者と当事者の得た体験の発表行為の間に、第三者が介在しているか否かについて重視しなければならない。

また、新聞報道やラジオ・テレビニュースでのU F O 事件報道は、それらが第三者の手で調査され、担当記者、調査機関、調査員などによって実名の報告行為が何らかの形で行なわれるまでは、進行中の「U F O 情報」であり、報道内容が調査によって書き換えられる可能性を含んでいる。

U F O 知識が一般化する過程で、犯しやすい過ちがある。特に、我々市民の手の届かない海外でのU F O 事件は、当時国に有能な研究者がいた場合にのみ、それらU F O 事件の詳細が著作物に盛られて日本に輸入され、その翻訳物を購入することで海外でのU F O 事件を知ることができる訳だが、それらの著作物が出版されて年月がたつと、その本に書かれている知識が日本の研究者によるU F O 著作物に引用され要約される過程で、当初の内容が削られ、“解釈”が「事実」となり、年代や日付さえ

も変化していくことである。

これに対して、自ら目撃したU F O は、世界に1枚の記述しか存在しない。家族、友人などから集めたものも同様である。それらの目撃者は筆者と一時期協同作業をしたりして何をどう表現するかを確認している。また、再点検できる。このような作業を繰り返すことで、知識としてのU F O から現実のU F O へと認識の深度が深まる。そして、1947年以後の目撃事件について、その現象面での共通性から、体験との比較で他の目撃者に対する信頼度にむすびつく。

それらのボタンはソ連でも米国でも似たような様相を呈し、地球規模の広がりを見せる。

U F O 目撃を文献等で紹介する際、要約や想像作業が報告者の生々しい供述や表現を変質させ、強調されない部分が拡大解釈される危険を含む場合がある。

従って、U F O について何かを論じるための資料となるものは、目撃者自身の供述やスケッチにあまり手を加えない、そのままを提示することが望ましいと言える。

また、文献類からの引用も、紙面の都合で要約や縮小がつきものだが、解釈を加えないで原典に忠実な要約を行なう必要がある。

更に重要なのは、引用する資料がどのような経過で著作物に登場しているかが明らかなものを使用

すべきだ、ということである。

新聞記事なら紙名日付。単行本ならば前述したように、著作者が直接集めた資料の文献が望ましい。

筆者がU F O 知識の基礎として必読書をあげるとしたら、とりあえず以下の文献を推薦する。

- A・ミシェル著 田辺貞之助訳 『空飛ぶ円盤は実在する』高文社
- マックス・B・ミラー著 『空飛ぶ円盤は事実か虚構か』より 平野威馬雄編『これが空飛ぶ円盤だ!』高文社
- ビル・コールマン著 中村省三訳 『米空軍U F O 機密ファイルの全貌』グリーンアロー出版社
- エメ・ミシェル著 後藤 忠訳 『U F O とその行動』暁印書館
- アレン・ハイネック著 南山宏訳 『U F O との遭遇』大陸書房
- ロバート・エメネガー著 南山宏訳 『U F O 大襲来』ワニの本
- アレン・ハイネック著 青木栄一訳 『未知との遭遇リポート』二見書房
- アドルフ・シュナイダー、フーベルト・マルターナー共著 金森誠也訳 『U F O の世界』啓学出版
- 森脇十九男監修 『CIA U F O 公式資料集成I』スプリッツアベニュー
- フェリックス・Y・ジーゲル著 伊藤清久・藤木伸三訳 『ソ連のU F O 研究』東洋書院



レイニア山

アーノルド事件

1947年6月24日、米国ワシントン州カスケード山脈の上空を飛行中の1機の自家用機があった。国内認可番号NC33355、パイロットのライセンス番号333487。自家用機は高高度飛行用に設計された単発機であった。操縦士はケネス・アーノルド34才。アイダホ州ボイラ市に自家用発着所を所有し、アイダホ救難飛行隊のメンバーで、アダ郡航空民兵用の飛行副団長でもあり、Great Western Fire Control Supply Companyの経営者であった。彼はレイニア山の南西山腹に墜落したらしい海兵隊輸送機の機体を捜索してチェハリスからヤキマへ向かって飛行していた。

空は晴れ上がり、あくまで澄み切っていた時に午後2時59分、捜索をあきらめたアーノルドが、機首を元のコースに向けた時、機体表面にキラリと強い閃光が反射した。光の方向に顔を向けると、9機の奇妙な外観をした飛行物体が、まるで連結されたように1本の線状になり、それが尻下りの状態に編隊を組んで飛んでいるのが見えた。各々D-C-4程で、アーノルドはこれを最新型のジェット機かと思ったが、それには尾翼がなかった。編隊は猛スピードで山の峰々に見え隠れしながら飛んでいく。

アーノルドは1列に並んだ編隊の長さをおよそ5マイル(8000m)、物体との距離およそ20マイルと推定した。

編隊がレイニア山の南側の山腹を出て、アダマス山の最北端の峰に隠れるまでにかかった時間は1分42秒。山の地理に詳しい彼は、峰と峰の距離から物体の速度を割り出し、時速1200マイルと見積もった。

編隊はほぼ一定の高度を保ち、まるで雁の群れのように飛んで行った。全目撃時間は約3分間である。方向はレイニア山を指し、北から南へと高度9500フィートを飛行した。

アーノルドは目撃後、いったん遭難機捜索に戻ったが20分程すると、先の物体の目撃で動転してしまい、まっ直ぐヤキマの飛行場へと向かった。



▲アーノルドの描いたスケッチ

▲「空飛ぶ円盤」の「名付け親」として知られるケネス・アーノルド



▲1947年7月4日、ユナイテッド航空のSM5機長は5機の円盤を目撃



▲米空軍UFO調査の科学顧問となったアレン・ハイネック博士

第1章UFOの知識

000「空飛ぶ円盤」から「UFO」までの歩み0000000

「FLYING SAUCER」

ヤキマ空港に帰還するアーノルドは友人に「とんでもないものを見た」と告げた。このときそばにいた新聞記者たちがこれを聞きつけ、アーノルドは質問攻めにあった。

「私の見た物体は全部で9個。まるで水面をスキップするように飛んでいた。型? そうコーヒークップの受け皿を重ね合わせたようだった。」と語ったといわれる。

同じ頃、カスケード山中で仕事をしていた鉱脈調査官フレッド・ジョンソンはアーノルドが見たのと同じ物体を6個空中に認め、しかも彼は双眼鏡で数秒間その行動を追った。不思議なことに、この物体群が通過する間、彼の持つ羅針盤の針が箱の中でめちゃくちゃにうごいていたのである。

6月26日の「ワシントンタイムズ」は『時速1200マイルで飛ぶ9機の"皿"目撃さる……だがその正体は?』と報じた。

それはやがて『FLYING SAUCER』日本では『空飛ぶ円盤』となった。この新単語は世界に広まり、日常用語となり、辞書にも載るに到った。

米空軍調査を開始

6月24日から数週間後、米空軍はすべての「ソーサー」報告を研究分析するためのプロジェクトを組織した。

1947年12月30日、フォリスタル議院はプロジェクトの設立を許す法令に署名。

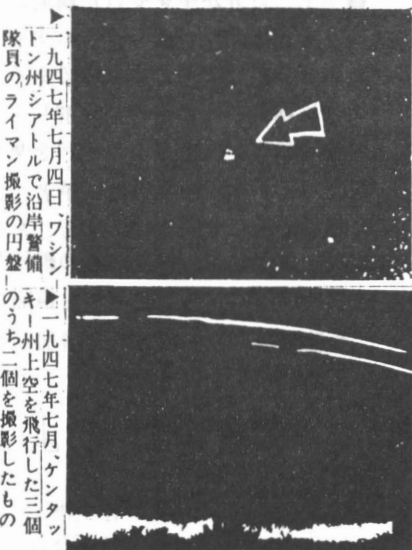
プロジェクトはライトパターソン空軍基地・航情センターの統率下に置かれ、天体物理学者ジョセフ・アレン・ハイネックを委員長として、国立気象研究所やその他陸・海・空の各省の協力を得て、国防省のあらゆるスタッフのうちに必要な専門家を求める自由をも与えられた。

プロジェクトは鳥類移住の専門家から天文航海学の技術家まで、一切の知識が動員され、問題解明のために精神学者や精神分析学者にまで助力を求める権限を与えられた。

従って、プロジェクトは原則的には理想的な機構をそなえたもので、徹底的な調査を行なって民衆の好奇心を満足させると共に、国家の安全を保障するアメリカ政府の責任を十分に果たす事ができる訳である。しかし、フランスの研究者エイメ・ミッシェルはこう指



▲アーノルドの目撃を報じた現地新聞



一九四七年七月四日、ワシントン州シアトルで沿岸警備隊のキー州上空を飛行した三個の円盤を撮影したもののうち二個を撮影したもの

摘している。「このプロジェクトは、フライング・ソーサー現象の解決が、これらの専門家の範囲内に限定してしまったことで、過去の偉大な発見がそれぞれの時代の専門家と正面から衝突しており、当時の専門家はその発見に狼狽して、容易に承認しようとしなかったではないか、フレネル、バスタードール、ニュートン、カルノがそうであった」と。

アメリカ政府は、極度に専門化した技術者を集めることにより、「フライングソーサー」の現象が、まったく新しい何かであるかもしれないという仮定を最初からまったく度外視してしまうことになった。

プロジェクトの設立法令は1947年12月30日に出された。ところがその1週間後の1948年1月7日、ケンタッキー州フォートノックス、ゴッドマン空軍基地において、一大事件が発生したのである。

マンテル事件

基地指令塔の時計が午後3時少し前を指していた。空は折りしも雲の層に覆われ、時折青空がのぞく程度だった。

ゴッドマン基地の上官たちは30分ほど前から熱心に空をにらんでいた。というのは2時30分頃フォートノックスのMIPから得体のわからない大きなものがゴッドマンの方へ向かっていてという通報あったからである。基地から150K m離れたインディアナ州マディソンの町ですでに何百という市民が空をいく巨大な物体の目撃でわきたっていた。

すなわち午後2時10分すぎ、かなり寒い冬のその日、街路にいて空を仰いだ人々は、奇妙な円い金属性の物体がかなりの速度で東



▲トーマス・マンテル大尉



マンテル事件を報じた記事

方へ飛行していくのを見た。人々は驚き呆然となった

群衆の中に国家警察の警官が何人かいて上官に報告。上官はフォートノックスのMIPに電話してその現象を説明。2時25分、MIPの事務所から例の物体が依然東へ進路をとって町の上空を飛び去るのを確認。2時30分MIPは近くの空軍基地ゴッドマンへ通報。基地指令塔に警報が入った。

指令塔には隊長ガイ・ヒックス大佐ほか上官がいた。2時48分、突然南方の雲の切れ間に一見金属性の巨大な物体が現れ、一瞬太陽光線を受けて輝いたかと思うとすぐ見えなくなった。

この時、トーマス・マンテル大尉が指揮する訓練飛行中のドーラムスタング4機編隊が基地に近づいていた

指令塔はマンテルに謎の飛行物体の正体をつきとめるべく追跡を命令した。4機のマスタングのうち1機は燃料切れのため帰投。マンテルは2機をひきいて上昇、追跡をはじめた。物体は金属性の外観をそなえ、巡洋艦ほどの大きさを持ち、上部は円錐形で、その頂点に赤い光が明滅していた。物体は高度4000mにあって更に上昇をつづけていた。3機のマスタングパイロット達は酸素マスクなしで4500m以上上昇するのは危険と承知していた

午後3時5分、2機のマスタングは物体を見失い、マンテル機は僚機と離れ単独で物体に向かった。指令塔の拡声器からマンテルからの無線連絡がひびいた。

「私は物体をよく見るため接近しつつある。その物体は私の直上にあり、私の機のおよそ半分速度で飛行している。それは金属性と思われ、大きさは恐るべきものだ。私はさらに上昇する。」

午後3時13分：マンテル連絡「例の物体は上昇している。速度を増し、私の機と同じスピード、時速360マイル(約580km)だ。私は2万フィート(6000m)まで上昇する。それでも捕捉できないなら追跡を断念する。」

この連絡を最後にマンテル機は消息を断った。そして、午後4時15分、マンテル機の死骸が基地から90マイルの所で発見されるのである。「ルーイビル・クーリヤー」紙はフォートノックス1月8日UPとして「円盤追跡中のマンテル大尉、ドーラム機もろとも惨死」と報じた。

後に、当時のゴッドマン基地指令塔職員により明らかにされたマンテル最後の通信は「お、お！中に人間がいる！」であったといわれ



▲ゴーマン事件想定図



フランスの研究者 エメ・ミッシェル

た。ゴーマンは眼下にその軽飛行機を見たが、突然、1個の光が右方へ通過した。彼は別な飛行機の尾燈と思い、管制塔に苦情を言った。彼はその光体を追跡することにした。

パイパー機が街の燈火を背景にくっきりと黒く浮かび上がるのが見えたが、謎の光は個体に付属したもののようには見えなかった。ゴーマンは最高速度で接近、彼は900mの距離から、それが直径15~20cmで脈動しているのを見た。満丸で純白の球であり、周囲に一種の光輪があった。機が接近すると光は急に固定し、急旋回して上昇を始めた。

ゴーマンも機を急旋回させたが、「一時気を失った」ほどであった。決闘がしばらくつづくと球体はゴーマン機を避けて2350mまで上昇、互いに向き合って衝突コースに入った。球体が逃げないことを知ったゴーマンは急降下した。球体はわずか数mの距離で機の上をかすめた。こうしたゴーマンと発光球体の空中戦は27分続き、パイパー機の搭乗者2名と地上の係り官2名も、この様子を見守った。

光球は規則的に鼓動する光をなげかけているが、急旋回をするときは方向を変更する間光が固定して輝かしい白色になるのである。球体は牛を引き寄せる闘牛士のように、激突を決意して突進するゴーマンに、あややという一瞬身軽な動作で時には右、時には左、時には直上という風に身をかわした。

最後に球体は急に垂直上昇を行なって北北西に向かい、数秒間で姿を消した。時刻は午後9時27分であった。

ゴーマン中尉が空軍技術情報センター(ATIC)へ提出した報告書には「その光体の動きは、想念または理性でコントロールされているという、はっきりとした印象を受けた」と記述している。

ゴーマン事件の6週間後1948年11月18日、H. Gコンプス中尉も、ワシントンから遠くないアンドリュース空軍基地上空で光る球に出会った。

円盤に発砲!

最初の事件

午後9時45分だった。そしてゴーマンと同様にそれを闇夜の中かで追跡、10分以上紐弄され、急旋回ひきまわされた。

直線コースでの追跡で、彼はその物体が自分の機より速いことを認め、時速950kmと測定した。球体はすぐ姿を消すべきであったろうに、コンプスを待っていた。彼はゴーマンの思いつかなかった行動に出た。

る。ゴッドマン基地GODMAN Fieldの空中での出来事は何を教えるものであろうか?

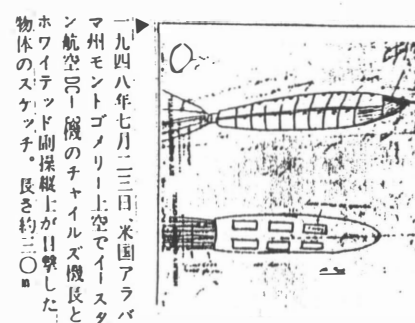
「プロジェクト・サイン」発足

マンテルの死から15日後、米空軍の正式調査が開始された。これは「プロジェクト・サイン」と呼ばれ、1月22日発足となった。一方、陸軍の方でも異変が起こっていた。

今にして思えば世界を恐怖させる核運搬のミサイルと人類の宇宙進出を可能にしてしまった実験場……ニューメキシコに1945年建設された米陸軍ミサイル性能試験場ホワイツンズにV-2号と同伴して上昇する円形の器械が姿を現わしたのは4月のことであった。

ホワイツンズでは1946年から1951年まで67のV-2号が打上げられているが、発射されたワケットを追い、周囲を旋回する直径50cmの円盤が終極機で測定され、ワケットを追い越した速度は時速2万8000km、高度100kmに到達するものであった。これらの事件は「トルック」誌1950年4月号にワート・B・マクローリン中佐手記として掲載された。

1948年は米空軍パイロットと円盤の対決の年といえるかもしれない。民間機では、その年の7月23日アラバマ州モントゴメリー上



空においてイースタン航空のD-C-3機が、長さ約30mの金属性葉巻型飛行物体とすれちがうという事件にとどまったが、3カ月後の10月1日、北ダコタ州ファーゴ空軍基地上空では「円盤との決闘が演じられたのである

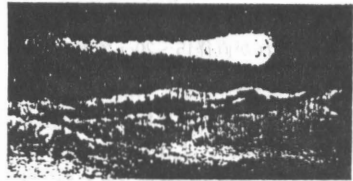
ゴーマン事件

その夜午後9時ごろ、ノースダコタ航空整備隊のジョージ・ゴーマン中尉は、平原上空の飛行を終えて基地に接近していた。着陸の指示を求めて彼が無線連絡したとき、管制塔は付近にパイパーカブ1機だけと伝えてき

すなわち、2回にわたって機関銃の掃射を
あびせたのである。しかし、球体は素早く脇
へ飛びのき、決闘に見切りをつけるかのよ
うに、途方も無い速力で東方へ遠ざかってい
った。

米空軍「ソーサー」プロジェクトのメンバ
ー（円盤委員会とも言う）はゴーマン事件と
同様の調査を行なったが、同じ結論に至り、
「説明しがたい事件」と最終の評価を下した。
事件の舞台はその年末、原子力関係施設の
あるニューメキシコに移る。

12月8日夜、緑がかった光が101の2人
によって目撃報告されたこの現象は、流星の
世界的権威リンカーン・ラ・バス博士等によ
って調査され、流星ではないと結論づけをさ
されたのみならず、ラ・バス博士自身もこれを
目撃してスケッチを残している。



▲ラ・バス博士と婦人
が目撃した濃い緑の火
球の目撃画



▲リンカーン・ラ・バス博士

クライド・トンボー
博士と博士が1949年に
家族と共に目撃した光
体群の想定図 ▶



「グリーン・ファイア・ボール」と名付け
られたこの現象を目撃したもう一人の科学者
、天文学のクライド・トンボー博士は、翌19
49年に独特の現象を観測している。

米空軍は2月、「ソーサー」調査の秘密
プロジェクト名「プロジェクト・サイン」を
「プロジェクト・グラッジ」と改称した。

「ソーサー」の正体は、地球外の天体から
飛来した宇宙船である、と断言した退役米海
兵隊少佐ドナルド・キーホーの記事が雑誌「
トルウ」に掲載されたのは1949年のクリスマ
スが終わった12月27日のことであった。歴然
たる論争の渦が全米に巻き起り、狼狽した空
軍は「プロジェクト・グラッジ」を閉鎖して
しまった。

ルッペルトの登場

米空軍がふたたび調査を開始するのは、そ
の2年後となる。ここで一人の人物が登場す
る。第2次大戦中F-29のレーダー手兼爆
撃手で、1951年空軍に復帰した当時28才の
エドワード・J・ルッペルトである。

彼は1951年6月頃、空軍予備役から復帰、
オハイオ州デイトンにあるライト・バターン



AN UNUSUAL AERIAL PHENOMENON by Clyde W. Tombaugh

I saw the object about eleven o'clock one night in August, 1949
from the backyard of my home in Las Cruces, New Mexico. I happened
to be looking at zenith, admiring the beautiful transparent sky of
stars, when suddenly I spied a geometrical group of faint bluish-
green rectangles of light similar to the "Lubbock lights." My wife
and her mother were sitting in the yard with me and them also. The
group moved south-southeasterly, the individual rectangles became
foreshortened, their space of formation smaller, (at first about one
degree across) and the intensity duller, fading from view at about
35 degrees above the horizon. Total time of visibility was about
three seconds. I was too flabbergasted to count the number of rec-
tangles of light, or to note some other features I wondered about
later. There was no sound. I have done thousands of hours of ni-
ght sky watching, but never saw a sight so strange as this. The
rectangles of light were of low luminosity, had there been a full
moon in the sky, I am sure they would not have been visible."



■冥王星発見の天文学者クライド・トンボー博士のUFO目撃声明文

元米空軍UFO調査機関プロ
ジェクト・ブルーブック主
任エドワード・J・ルッペ
ルト大尉。当時彼はUFO問題
のスポークスマンとして、
ワシントンからの照会や、
国防総省や議員からの報告
要求を一手にこなしていた



▲退役軍人ドナルド・キーホー少佐

ン基地内の航空技術センター（ATTC）勤
務を命ぜられ、配属された彼が新情報グル
ープを組織した時、カバル空軍少将より過去の
ソーサー報告を再検討せよとの命令がATTC
に伝えられた。

ATTCのローゼンガーデン少佐はこれを
受領、ルッペルトにその作業を依頼した。

ルッペルトは調査報告書を完成させてベン
タゴンにおもむき、既にカバルと交代してい
た情報部長サムフォード少将に提出した。

その後まもなく、ATTCはソーサー報告
を研究・分析するためのまったく新しいプロ
ジェクトを設立するよう命令され、過去の実
績から「ミスター・フライング・ソーサー」
と呼ばれたこの問題のエキスパートであるル
ッペルトに新たな部署が与えられた。

その部署は略号名「プロジェクト・ブルー
ブック」といい、空軍としては「プロジェク
ト・グラッジ」の改名となった。

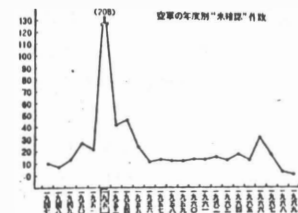
1952年3月25日、ルッペルトはそれまで
「FLYING SAUCER」と呼ばれていた
件の物体に、空軍として正式の名称を与え
た。「Unidentified Flying Object=未確認飛
行物体」略称「UFO」である。

彼はブルーブックの責任者を1953年末まで
つとめ、その期間中部下やスタッフと共に50
万マイルを飛び廻ってUFO報告を調査し、
数千件の報告書を通読分析した。彼は退役後
1955年7月、空軍の拘わったUFO事件を記し
た「Report on U.F.O.」を出版。1960年11月

中旬、37才の若さでこの世を去った。

UFOがワ シントンに飛来

1952年、アメリカ本土におけるUFO目撃
は空前のピークに達した。米空軍ブルー
ブック特別報告14号発表によると、1947
年から1952年のUFO出現分布はニューメ
キシコ州ロスアラモスとワシントンDCに
集中した。



▲1952年のUFO目撃ピークを示すグラフ

7月28日の新聞報道はすべてトップに
ワシントンUFO事件を掲載した。

7月29日、ジョン・サムフォード將軍は
報道関係者に記者会見を通知。ルッペルト
大尉、ロイ・ジェームス大尉、ドナルド
・バウアー大佐等が出席し、空軍として
は第2次大戦後最も大規模かつ長時間に
わたる記者会見が行なわれた。

ドナルド・キーホーは「Flying Saucer
from Outer Space」の中で「わが国の上
空は異星の宇宙船により制圧されている

」と指摘、空軍もこの事実を認めるべき
であったが、円盤を否定してこの難局を
切り抜けることとなった。

英「U=Z」事件

1954年5月、英空軍のドゥディンゲン師
は記者会見を行ない「私は他の遊星の人
々々、空飛ぶ円盤を操縦して現今の我が
世界の危機に、援助の手を差し延べんと
していることを確信する。」と声明。

この発言に呼応するかのように、4ヶ月
後の9月、イギリス各地のレーダーに謎の
現象が発生した。

毎日正午になるとレーダースクリーン
に40から50個のブリップ（輝点）がアルファ
ベットの「U」の字形編隊で現われ、次に隊
形を解いて2本の平行線となり、最後に「Z」
字形になって消失したのである。

初めの2日間には悪天候のため上空は確
認できなかったが、3日目は晴れ上がった。
正午ちょうど、ブリップがレーダー面に
現われると、ジェット視察機がその空域
を捜索した。ところが、物体が飛んでいる
筈の空域には何も発見できなかった。
ブリップ群は7日間にもわたり、連日「U=Z」
「U=Z」と謎のサインを繰り返した。事件
は「サンディーディスパッチ」紙がスク
ープしたが、直ぐ報道管制が敷かれ、事件の
詳細は今日も尚謎に包まれている。

しかし、当時者によって、「Uはウラニウ
ム、Zはアルファベット最後の文字だか
ら」最後「U」両者をイコールで結んだの
だから「原子爆弾を使用すると地球の最
後が来る」という宇宙からの警告ではな
いか？..という解釈はこの事件に付随し
て広まった。

ブラジル海軍省 公認の円盤写真

1958年1月16日、真昼のことである。南大西
洋の孤島、トリネード島沖に停泊していた
ブラジル海軍のICV観測船 アルミランテ・
サルダナ号 上では、100余名の科学者達が島
を去る準備を進めていた。1人の将校が広い海
原のかたに移動する黒影を認めたのはその
時である。

「Olha o disco!」「円盤だ!」即座に口を
ついて出た叫びに、皆はいっせいに彼の指さ
す方向をながめた。はるかな海上より一機の
巨大な土星型円盤が島めがけて接近しつつあ
るのを、乗組員全員が確認した。それは午後12
時15分の事であった。――

その日、国際地球観測年に於ける、海洋学的
研究の為リオデジャネイロ港からトリネー
ド島に到着、数日間の任務を終えたブラジル

航空機とUFOの遭遇例

年月日	発生国	所属	機種	遭遇状況
1947.7.23	アメリカ	イースタン航空	D C-3	長さ300mの金属性葉巻型物体が機に接近し、側面を通過して去る。
1952.3.29	日本	米空軍	F-84	F4の円盤が機を追尾、機体近くを飛行して追い越した後、急上昇して去る。
1952.7.14	アメリカ	パンアメリカン航空	D C-4	一列になった8個の円盤が機に接近、並んで飛び、機が灯火をすべてつけるとターンして上方へ飛び去る。
1952.12.6	メキシコ	米空軍	F-29	レーダーでUFOを捕足、UFOは真正面から衝突コースで機の下を通過、続いて3機編隊のUFOが接近、衝突寸前でターン、これらを6分間に数10回繰り返した後、直径400mの巨大UFOに合体して去る。
1953.1.9	アメリカ	米空軍	F-29	F4のV字形編隊が接近、機が方向を変えると編隊は減速、方向転換して去る。
1953.3.25	モロッコ	米空軍	訓練機	発光飛行体が真正面から機に接近、上方を通過して旋回、急加速で降下して去る。
1955.11.14	アメリカ	フライング・タイガー	パイパー・トリベーター	衝突コースで接近する白色光体に対し、ライトを点燈すると物体はライトを消す、これを繰り返す。
1957.11.4	ブラジル	バリアック航空	C-46	発光飛行体が機に接近。
1965.3.18	日本	東亜航空	コンバツ240	直径300mの発光円盤が前方から飛来、ライトで合図すると急進に接近、主要3分の1を光化で覆いつつ飛行する。
1965.9.6	ナリ	ナリー国営航空		機の周囲を飛び廻りながら10分間追尾。
1967.2.2	ペルー	フォービット航空	D C-4	直径70mの円盤2機と縦行飛行。
1971.12.28	ナリ	ナリー航空	ボーイング727	30分間に亘り12機のUFOの編隊と飛行。
1973.10.18	アメリカ	米空軍	ヘリコプター	金属性物体が機の直上で静止、緑色光線を照射。
1979.11.11	地中海	スバニニス航空	カラハル	4機の赤色UFOが機から800mまで接近。
1981.11.27	日本	全日空 全日空	ボーイング727 上ライスター	一列に並んだ20個の光体、機と平行飛行。
1981.12.18	日本	航空自衛隊	F-104	機前方を斜めに斜行物体が飛行。
1982.2.8	ブラジル	VASP航空	ボーイング727	色彩を変える円盤型UFOが機を追尾。
1982.10.29	日本	全日空	ボーイング747	前方に静止する400mの葉巻型物体の下を通過。
1984	米	ソビエト	ソ連邦民間航空	機に急接近、全体を雲の飛行機形に変化、並行飛行。
1985.6.11	中国	中国民航	ボーイング747	巨大発光円盤と約2分間に亘り並行飛行。



▲1959年1月25日、DC-6旅客機が
メキシコ上空近くでUFOと遭遇



▲スウェーデン上空を飛行中の
DC-3機と遭遇、機体の下を
通過したUFOの図

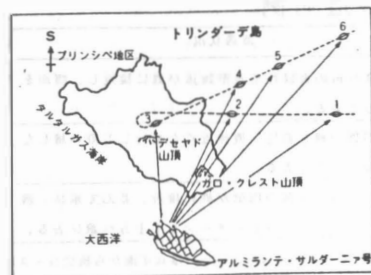


1981年7月19日午後3時8分、北海道千歳
空港付近を飛行中の東亜国内航空YS-11
機のパイロット2名が円盤状の物体を発見。

海軍の観測船 アルミランテ・サルダナ号
には、100余名の科学者達がICV計画の為乗り
組んでいた。ちょうどその時、デッキに出てい
たカメラマンのアルミロ・バラウナ氏は突然
の出来事である円盤の接近に緊張した。しか
し次の瞬間写真専門家の自己の立場にすると
く反応を起こし、興奮にふるえつつ円盤の連
写を試みた。懸命に円盤を追って6回シャッ
ターがおされた。あまりの高速と手がふるえた
為、バラウナ氏は4枚目と5枚目の撮影を失敗
した。その間みのがせない事態として、円盤が
船に最も接近した時、船内の全電気系統がス
トップした事を述べねばならない。このこと
より、円盤が何か強力な電磁波を発生してい
たのではないかと、後に推測されるようになった
のである。円盤は東海上より接近、島の中央
のデセヤド峰上空に一瞬停滞した後、方向を
反転し、元来た東の方へ飛び去った。円盤が地
平線上へ去り、劇的な事件の舞台となったト

リネード島周辺は、何事もなかったかのよ
うな静けさにつつまれていた。しかしその短
い時の中に、円盤目撃事件の中でも、その実在
を証明する決定的データーがそろいつつあっ
たのである。
艦上では、艦長や多くの将校らが写真の結果
をみたいと望んだので、フィルムは彼等の立
ち会いのもと、即座に船内で現像され、そのネ
ガは乗組員全員によるチェックがなされた。
そして...人々の間には、自分達の目撃した
ものをネガに再度確認した感動のどよめき
が波の様に伝わっていった....

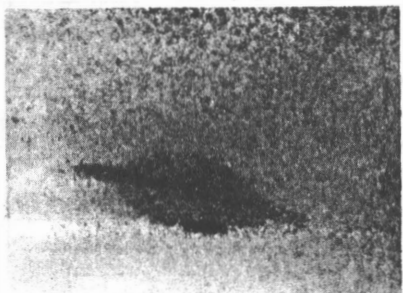
バラウナ氏は「この物体は無音で飛行し、濃
い灰色をしており、周囲は一種の緑色燐光性
の蒸気又は霧状のものによって囲まれていま
した。しかしその物体は完全に固体であり島
が飛ぶように、空を波状運動しながら飛行し
たのです」と後に報告している。また他の目撃
者の一人は、円盤は燐光を発しており、明か



るく、見かけは満月大で、数秒間見られ、空をバックに輪郭のはっきりとした皿を2枚重ねた形をしていた。それは水平線の方へ向かう途中、一度戻ってから再び遠くへ去っていった」と述べている。

このようにしておさめられた4枚の写真が、後に世界へ報道され人々に多大の影響を与える事になったのである。

2日後、船はリオデジャネイロへ帰港、そのネガは海軍省写真研究所で視覚研究、連続的な引き出し、顕微鏡検査、粒子検査、像の明暗の測定を含む分析が行われた結果、真性なものであるとの評価が下されたのである。



また民間のクルセイロとドウ・サル航空写真研究所でもこの写真を徹底的に分析した結果偽物やトリックの余地は全くないという判定を下した。2回目に海軍省をバラウナ氏が訪問した際、撮影当時の状態を再現したテストが行われた。その結果物体の速度は時速900~1,000Km、大きさは直径36m、高さが7.2mと推定される数字が出されたのである。このような厳密な分析がなされ、その信ぴょう性が認められたトリニダード島事件は、何故か、海軍省がひと月以上も公表をはばかっていた。

大統領、公表を許可

しかし、ブラジル大統領その人が一彼は海軍がUFOの存在を認めた証拠として、海軍大臣アルウェカマラ海軍大将から数枚の写真を手に入っていたのである。この事件に関して、海軍に何ら意見を求めていなかったのがもとで写真の公表に同意してしまったのである。

このようにして、事件は2月21日付、リオデジャネイロの「コレイオ・ドウ・マナ」紙の報道を初めとして、ブラジル中の新聞が一斉に第一面で報道するところとなった。この、一回の大統領が公表を認可し海軍省が公認して発表さ

戦闘機等によるUFO追跡・迎撃例

年月日	発生国	所属	機種	追跡状況
1948.1.7	アメリカ	米空軍	F-51	ゴッドマン空軍基地からUFOの追跡を命令された4機のF-51のうち隊長マンテル機のみ1000mの高空まで物体を追跡。マンテルは酸素欠乏により失神し墜落死した。
1948.6.16	ソビエト	ソビエト空軍	戦闘機	テストパイロットのアブラクシンは「キューリ形」で後方に光線を放つ物体を発見。基地レーダーも確認。接近すると電気系統が狂い、エンジンが停止したため不時着した。
1948.10.1	アメリカ	米空軍	F-51	フォージ基地に出現した小球体を追跡したゴーマン機は、何回も球体に突進したが球体はそれたびに回避した。
1948.11.18	アメリカ	米空軍	複座戦闘機	アンドリュース空軍基地上空に出現した小球体に向かってコンプス機は10分以上追跡。球体は回避を繰り返す。2回にわたって機関銃掃射をあげた。球体は素早く離れ回避し飛び去った。
1953	アメリカ	米空軍	F-84	レーダーでUFOの出現空域に誘導された2機のF-84が追跡にうつるとUFOは消失。再び発見し追跡。A4銃の標靶を含ませて固定すると、物体は急上昇した。
1954.7.1	アメリカ	米空軍	F-94	ニューヨーク上空に出現したUFOにスクランブルし、接近したが、熱気を感じたパイロットが緊急脱出。コントロールを失った機は墜落した。
1957.11.4	ブラジル	バリッダ航空	C-46輸送機	2000m上空で赤色UFOを発見した機長が進路をUFOに向けると、UFOも機に近路を向けた。両者は互いに接近。押れ合う新なおもUFOの方向に旋回しようとした時、機内の計器が狂ってきたので消火を始めた。その後UFOは飛び去る。
1967.3末	キューバ	キューバ空軍	ミグ21	キューバ領空1万m上空に出現した「ボギー」に向かって2機の戦闘機が迎撃進出。隊長機が地上命令を受けて空対空ミサイルで破壊するため照準を合わせた直後、機は事故発生。
1976.9.19	イラン	イラン空軍	F-4	テヘラン上空に輝く光体が発見したという市民からの通報で基地レーダーも確認。それはめまぐるしく色彩を変化させる円盤で、機内計器が不能となり、UFOが遠去かると機長は回復した。これを繰り返した機は燃料切れで帰投。別のF-4が発進し、一定の距離を保って追尾。次にUFOから小UFOが現れ、機に向かってきたので、AIM9ミサイル発射態勢をとった。そのとたん、すべての通信装置が不能。ロックオンを解除すると機長が回復。小UFOはUFOに帰還し、収容された。(以下略)

れたトリニダード島事件は、二度とない位の決定的な影響を国民に与えずにはおかないものであった。事実「円盤実在」のゆるぎがたい確信と、関心をブラジル国民の中にうつけることになったのである。このような動きの中で、本事件がブラジル議会でのように問題化されたかを一部述べてみたいと思う。

ブラジル議会、事件を審理

1958年、2月27日の国会において、議会の要請はブラジルの法律に従い国会議員セルジオ・マガルヘスが海軍大臣に対し、トリニダード島事件に関して事実を説明するよう要求した。

「ブラジル下院での公開質問」

1、トリニダード島上空の不思議な物体の日撃に関し、アルミランテ・サルダナ号の乗組員が証言したというのは本当かどうか。
2、不思議な物体の写っている写真は、アルミランテ・サルダナ号の乗組員の面前で撮影されたという海軍大臣官房による公式声明から

考えて、次のことがいえる。まず一通りの調査をしたのかどうか。海軍士官及び水夫等の報告は記録してあるかどうか。
3、多分、明確な解答は期待していないが、海軍大臣がこの事実をたいして重要ではないとする理由は何であるのか。
4、写真が現像されたのは、アルミランテ・サルダナ号の士官達のいる前で行なわれたこと及び、写真に見える不思議な物体の像は始めに調べるときからあったというのは正しいかどうか。
5、そのネガは、一般に見せる以前に、いかなるトリックも使っていないかどうかを調べるために厳重な検査がなされたかどうか。
6、海軍の幹部達は何故情報をおよそ1カ月もの間秘密にしておいたのか。
7、他の同じような現象が海軍士官達により観測されたというのは本当かどうか。
8、海軍けん引船、トゥリダダンテ号の艦長が円盤と呼ばれる不思議な物体が現われたと証言したのは正しいか。
以上の質問に対し海軍省当局は、秘密文書に

その写真の真実性を公認したのである。

歴史的撮影までの経過

第二次世界大戦中、ブラジルの軍艦が、ドイツのUボートと戦う為の軍事基地として使用され1957年10月迄は完全に不毛の荒涼とした島になり、忘れられていたトリニダード島にIGY(国際地球観測年)に関連した研究の為、海洋研究所と気象台が建造されたのは11月初旬の事であった。絶海の孤島、しかも、IGY準備の為人々が島に降りた直後より、即ち公式に記録されているだけでも7回もUFO目撃が続いている中で、1月16日の出会いとなったのは、単なる偶然のつみ重ねと断定してしまうわけにはいかない要素を含んでいる。

世界への影響も大きく「円盤実在」を決定的ならしめたその日をさかのぼる1カ月前より、トリニダード島でたびたび発生したUFO目撃事件は、「アルミランテ・サルダナ号と巨大円盤との遭遇」の序奏の如く、その働きかけを高めてつあったのである。

この目撃事件の経過をたどってみれば、11月下旬には観測気球を打ち上げ中、卵型で銀白色の変形する物体が3時間にわたって目撃され、また12月5日午前8時頃、1,800m上空を無音で飛行する円形銀色物体が目撃されていた。更に12月31日、翌年1月1日、2日と三日連続して円形UFO目撃が起こった。1月1日は、午前7時50分頃明るいう光点がものすごいスピードで海上に出現し、空中に90度の軌道を描いて水平線の彼方に消えてしまったが、この飛行の真中あたりで、それは太陽の光を反射して2、3秒間鏡のように明るくなった。次の日1月2日は夜だったが人々は、うち続くUFO目撃のため興奮していた。UFOらしきものは、ほんの数秒しか現われなかったがこの事件はおさわざにはいたらなかった。しかし同夜、トリニダード島から約400マイルのバビア海岸沖を航行中の海軍引航船「トリウンフォ」号は10分間にわたって未知の物体が周囲を飛行するの遭遇したのである。UFOは円形で、不思議なオレンジ色の灼光でまわりをつつみ、高速度で操縦され、突然進路をかえたり、鋭角ターンをしたりした。しかし国会議員セルジオ・マガルヘス議員に送られた海軍の秘密記録によれば1月6日、信じられないほどの事件が続いて起こったのである。

その日の朝、いつものように気球が上げられ地上から観測員がその動きを追跡していた。空は真青に晴れわたり、霞もかかっておらず、ただ、たった一つ積雲が研究所の真上に浮かんでいただけであった。バセラー長官は室内に居て、気球から送られてくる信号音によって気球の位置を確かめていた。が突然、信号音が微しいいきおいでだんだんと消えはじめて

トリニダード島における連続UFO事件一覧

1957.7.1	国際地球観測年(IGY) 始まる。
1957.10	ブラジル海軍コルベット艦(駆逐型護衛軍艦の一種、フリゲートより小型のもの) カルロスの艦長アルベルト・バセラー指揮により海軍引航船部隊がトリニダード島に上陸。
1957.11 下旬	朝、打上げられた気球からの発信音を聞いていたバセラー長官は、それが落下を示す連続音になったため、外に出て確認したところ、仰角80度非常な高空にある気球のそばに輝く点状で銀色の物体を目撃した。それは往復運動を行ないつづき、円型と形を変化させ、約3時間にわたり同じ位置にとどまっていた。最後はだんだん小さくなって見失った。同時に多数の観測員が目撃。午前8時頃、トリニダード島の一人の労働者が、上空6000フィートを満月と同じ視直径の銀色円形の物体が島を横切って飛行するのを目撃。
1957.12.5	午前7時50分、5人の労働者、一人の水夫、島上6000フィートを横切る、先の目撃物体と同じか非常によく似た満月と同じ視直径の銀色円形物体を目撃。
1957.12.31	午前7時50分、バセラー長官をはじめとする島の駐屯部隊殆ど全員と、労働者、水夫は、明るい光点が、ものすごいスピードで海上に出現し、空中に90度の経路を示して水平線にかくれたのを見た。物体は飛行経路の真ん中付近で、太陽の光を反射して2、3秒間鏡のように光った。
1958.1.1	夜、島の多数の人々が、UFOらしきものを数秒間目撃し人々は興奮した。
1958.1.2	同夜、トリニダード島より400 マイルのバイア・ブランカ水岬で、ブラジル海軍曳船船トウリウンフォ号の乗組員全員が、高速度で操縦され、突然進路を変えたり鋭角ターンをしたりする円形でオレンジ色の光で周囲を包まれた物体を約10分間目撃。
1958.1.6	朝、打ち上げたラジオ・ゾンデからの信号音が、急に消えたのを聞いたバセラー長官が、外に出て気球を観察。気球は真上の積雲へと入り、雲から出た気球から器械がなくなって、積雲からUFOが現れた。それは磨かれたアルミニウムか白色の半月状。長官は双眼鏡で観察。技術員20倍経緯儀で観測。無線局ではラジオ・ゾンデのデータ検知。船上のデッキからは6分間、長時間、光学的測定を行なった。物体は12時15分頃、巻雲の中に消えた。
1958.1.13(14)	島の低空に出現した輪をもつ楕円球体は、高速度で気象観測所の上空に飛来して、局の上空に2、3秒間とどまり、それから島の上空を旋回し、デゼジャード峯の上にもとどまり、超スピードで水平線の彼方に消えた。
1958.1.15	地球観測年参加の観測船としてブラジル海軍練習船アルミランテ・サルダナ号が、トリニダード島水岬に接近したとき、同船のレーダーに島の水岬を飛行している謎の飛行物体をキャッチした。
1958.1.16	トリニダード島水岬に停泊中のアルミランテ・サルダナ号の乗組員48人は、西の水平線から接近してきた輪を持つグリーン色の円盤を目撃。カメラマンのアルミロ・バラウナが撮影を開始した。円盤は波状の軌跡を描いて飛行。島の中央にあるデゼジャード峯(600m)の背後で反転し、洋上に向かった。この瞬間の時のサルダナ号に最も接近し、写真も鮮明に撮られた。円盤の直径は40-50m 高さ8-10m と見積もられた。
1958.2.21	「コレイオ・ドウ・コンナ」紙と「オ・ジョルナル」紙が事件を発表。ブラジル中の新聞がこのニュースを報道した。

しまったので、心配になった彼は調べるために外に出た。最初見たときには別に異常はなかったが、気球はすでに相当高いところまで上昇し、なおも外り続けていた。それは頭上約4千フィートのところに浮かんでいる積雲にゆっくりと近付いていった。気球の器械はこの高さで落下することになっていた。しかし気球は突然雲の中に入ってしまった。約10分後に再び現われ、前よりも速いいきおいで上昇をはじめた。それは気球が雲にかくれる以前よりも軽くなったせいである。実際、気球が雲に入るときは、まだ器械をつけたままだったのに、それは器械なしで雲からでてきたのである。気球の器械は、雲に入ったときにパラシュートで落下してしまったのであろうか。だが誰も、パラシュートが器械をつけて落下するのを見たものはいないのである。誰も見たものがないのだから、誰も落下したのだと確実に言いきることは出来ない。しかしすぐに事情がわかった。気球に続いて不思議な物体が出て来たではないか！経緯儀を操作していた技師や、バセラー長官らは、太陽光線に輝くアルミニウム状の銀色の物体がゆっくりと姿を現わし、南西から東へ向け動いていくのを観測、長官らが、20倍の経緯儀を通して見ると、それは明るい白色の半月状UFOであった。長官は技師を呼んで、無線局でUFOを観察し、ラジオ・ゾーンのテータを検討するように指示すると、船へ行ったら六分儀を使い、デッキから長時間観測を続けた。12時15分頃、UFOは巻雲の中に姿を消していった。

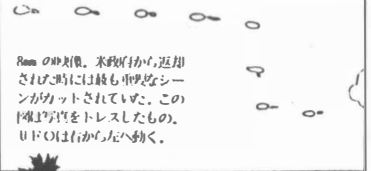
バセラー長官は非常に有能な士官であり、ブラジル 最初のラジオ・ゾンデによる組織的研究を始めた人で、気象現象や大気現象に熟知していたということである。従って無論、彼の目撃観察は大変正確なものである。このように次々と事件が続くなかで、遂に、1月16日の決定的瞬間がやってきたのである。

このトリニダード島に於ける円盤遭遇事件は、現代UFO史の流れに於ける、地球人類への意図ある接触を強く感じさせた事件の1つとして、それ自体のある重要な役割をはたしたといえるのである。「その事実」は、すでに「円盤実在か否か」の領域を通りすぎ、他進歩文明の接触が、その時、その場所、何故起こったかを、合わせ究明してゆかねばならない段階へと、人々の関心を押し進めてゆく力以外の何物でもないと考ええる事が出来るのである。原因が結果をうむように、重大なる結果、出来事には重大なる原因があると考えねばならない。

バプアのUFO集中飛来多数の住民ついに搭乗者を目撃牧師ら円盤乗員と挨拶を交す！

1958年はまた、ニューギニア島バプア地区にUFOが飛来した年でもある。古来、巨石の川法やかんがい農耕を教授した天からの異人神話話にあって、UFOの集中したボイアナイは、ペーリー著「太陽の子」にみられる如く古代文明道蹟があり、マウント・ハーゲンに発掘された2300年前のかんがい遺構は現代と同じ形態をもつなど、地球の古い文化を継続する土地柄である。1955年当時、ラバウル空港とボートモレス

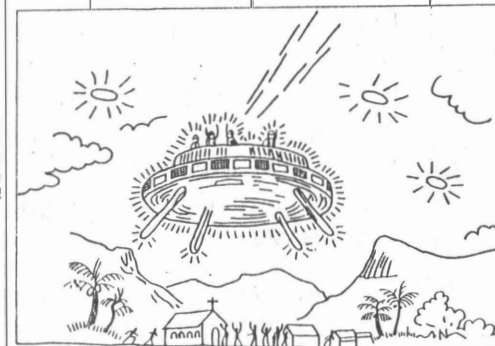
■パプア島におけるUFO目撃

年月日	時刻	継続時間	目撃場所	目撃者	目撃前職	現象
1953.8.23	AM11頃	数秒以上	ボートモレスビー飛行場 基地近くの海岸道路	T.P. ドルーリー	元パイロット 32年の飛行機を操縦 現パプア地区民間航空局長	
1955.5	晩	約1分	パプア湾内のユール島	E. ネスバーと夫人	医師 (博士)	月半分の円盤が緑色に輝きながらゆっくりと動いて消える。
1955or1956	AM10or2	30分程	パプア湾イディア島	クリフォード・ジャクソンと仲間	パプア航空乗組員	月より大きい輪郭のボンヤリした赤く光る丸い物体が、海上約15度に出現。目撃者達に近付いたり遠ざかったりして消える。
1957.8.24	夜間	20分以上	ニニエ諸島 アフ水道航行中	F.V. エスデル 他4人	政府パイロット 元船工 巡視官	大きい黄色い星状の光が、約20分の静止後、色を赤そして緑にそして青緑に変えて動き始め狭い湾奥を非常に勢いで動き回った。
1958.2.10			ボートモレスビー ジャクソン空港	空港職員	空港職員	輝く光球がソググ (北東) から高度400m まで降下し、その高度を保って空港上空を横切り、急上昇して消える。
1958.6		5分以上	ミルン湾地区 シディア島	ドイル 他5人の生徒	カトリック神父	大きさも色も月のような円盤状の物体が、太陽よりも明るい光を放ちながら南方から飛来し、伝道本部敷地上空に5分静止後上空に消える。
1958.6	PM7頃		グッドイナフ湾	パプア人の子供達		北西から南東へ水平線を横切る星のような白い光
1958.10.8	PM6:30		ワミラ	パプアの人々		南から北へ、なかり高速で動き規則正しく明滅する星状の光
1958.10.8	夜遅く		ワミラ	パプアの子供達		海上を動いていく怪光
1958.10.8	夜		ワミラ伝道本部	J.R. ヒューストン 博士		信号弾のような明るい緑色の閃光が40度移動 (図2)
			ドグラ伝道本部	ブライアン・スイート		緑の火球が飛行
1958.11.22				子供達		
1958.11.29			メナビ			
1958.11.30	PM6:50	約3分間	メナビ	ノーマン・クラット ウェル神父と子供達	カトリック神父	15秒間隔で明滅を繰り返す白銀色1等星大輪郭のボンヤリした光球が巻戻雲の上空を飛行。双眼鏡で観察。
1958.12.1(月)	PM6:45	約3分	ボートモレスビー 郊外ブニコ	住民多数		明るい星に似た白色の光球。数秒おきに明滅。東から西へ飛行する。
1959.3.19	PM6:45	10分間	メナビ	アルバート・M. リリカ神父 オーガスティン・ボギノ	神父 教師	オーエン・スタンレー山の上空に月より少し小さい白い光が浮ぶ。本物の月は半月で別方向。それはティリーランパが雲の中に隠れている様で動かず、10分後に消え、2度と現れなかった。
1959.3.27(金)	PM5:30-6:00の間	5分	ドグラ近くの聖アイダ学校	アイダン学校生徒		海上に現れたティリーランパ状の光が、目撃地上空を横切って南方の地平線上に消える。
				ジョージ・アウイ パプア人	技師	星よりずっと明るい白い光がドグラの沖を飛行。急に消滅。
1959.3.27	夜		ダガバミメディアノ	高地土民の1人		ティリーランパ状の白い丸い光球が頭上低空を通過して南東へ直線飛行。
1959.4			ギワ・ドクラ メナビ・サマライ サリバ コンフリクツ シューデスト諸島 陸上・海上	白人 パプア人		明るい星に似た、船の灯のような、ティリーランパのような光が、ある時はまっすぐに、ある時は上下に波状飛行をした。音は無く、誰かの手に握られていると思われるような飛行ぶりをするようになった。
1959.4.9	PM6:50	5分位	ボイアナイ	ウィリアム・ブース・ジル	神父	標高2200m のアディ山の山腹、山頂から1500m ほど下った位置で輝くティリーランパ状の白い光。5分後に消え、その5分後に反対側の山腹に出現。目撃者は5分程で1500m も東に移動した光が、人の手で持つ光では不可能と気付く。
1959.4.21	PM 7頃	5分~10分位	ギワ	D.L. グラヴァー	商人	山の上空に1800m 離れて見たティリーランパ状の白い光が見え、ゆっくり東北へ移動し海上から目撃者を接近。いったん停止してしばらく器空後、旋回もしないで元来たコースを逆に動き、最初に目撃されたアディ山上空で点滅のスイッチを切ったかのように消えた。遅い飛行機位。
1959.5.24(日)	PM 7頃	約1時間 5分	パニアラ島	ロナルド・オーウィン	地方行政官 補佐 巡視官	西空に見えた青い星がゆっくりと南東へ動き、数分して暗くなり消失。次に最初の位置よりやや低い空に青緑色の光が現れ、赤味オレンジに変色し、再び青緑に輝くという変化を何度も繰返し、ドグラ上空で消滅。色を白、赤、緑、青緑と変化させる光球
1959.5(土)			サマライに近いシディアの17-マカトリック 伝道本部	9人の生徒		緑色をした大きな長円形の物体が北の空を北西に移動。

ビー間にはDC-3が飛んでいた。子供達は石投げや楯投げ、ケガの数で勝負を決める格闘技、相撲で遊び、自分達でニワトリをむしり、たき火で石とタロ芋で料理した。原住民は日本兵の残虐行為の的になり多くの大人が殺された。そしてここは、わずか40年で石器時代から宇宙時代を経験した。さらに人々は外国からのキリスト教を学ぶなかで、教えの一つ「天の国」の証拠を目撃したのだ。彼らは見たこともない現象を魔法や幽霊に結びつける習慣はない。子供たちでさえ人工衛星をよく知っており、自分たちの見たものをそれと比較している。パプア人が我々以上に「科学的」なエピソードがある。この記録は「皇軍」によるもの

■パプア島におけるUFO目撃

1959.6.16(火)	PM 7頃		ドウムラ峡谷	16人の山の住民		黄色に輝き、比較的底空をホタルのように飛んで、山腹を月よりも明るく照らした光球
1959.6.16	PM6頃		標高2100m のマイクワリツ	狩人達		稲妻程の閃光がきらめき、月よりは小さいがずっと明るいウリケツ・ボール状光球が、緑、白、赤と変色し、逆時計方向に回転。その周囲の放射状光線も同じ方向に回転しつつ飛行。推定4分
1959.6.17	PM 8頃		マナマン山山腹 標高2400m	マイケル・ブモック アウナク	教師とその友人	雨の川を白と赤の閃光が、雲の間を矢のように飛び去る。
1959.6.21	AM 11頃		ボイアナイ	スティーブン・ジル・モイ	パプア人教師	高空から白い光が音もなく降下。海岸沿いに東方へ飛び、伝道本部東高度90m に停止。輝きが現れ、コーヒー皿を覆かしたような形が見え、下側に黒い丸い点が見えた。やがて円盤は上昇して雲の中に消えた。
1959.6.24	PM 9頃		ドナアイ山 標高2400m	11人の山男		ティリーランパのような明るい光が、山頂上空から出現、たいまつのような長い尾を引きながら、目撃者の頭上300mを北から南へ高速で飛行。雷のような轟音が一度聞こえた。
1959.6.26	PM6:45-6:50-6:52-6:55-7:00-7:04-7:10-7:12-7:20-8:28-8:29-8:35-8:50-9:05-9:10-9:20-9:30-9:46-10:00-10:10-10:30-10:50-11:04		ボイアナイ	ウィリアム・B.ジル スティーブン・モイ エリック・ラングフォード 他35名の住民 目撃者署名25名	神父 パプア人教師	玄壇から北西方向約45度に白い光を認める。スティーブンとエリック・ラングフォードを呼ぶ。オレンジは黄色の光球が、150m位の高度まで降下。円盤状物体。スティーブン到着。星ではないと確認。円盤の上部で人影が動く。乗員3人が光りながら作業。隠れる。人々を呼びにエリックが行く。円盤の上部に乗り2人見える。円盤上部の2人、隠れる。雲が400mの高さまで空を覆う。円盤上部に4名の乗員見え、淡い電光石火な青いスポットライトが45度の角度で空に照射。人々いなくなり、スポットライトはそのまま。人が1、2、青い光の川に現れる。スポットライト消える。人々去る。円盤、雲を通り抜ける。ドグラ上空は重なりだが、ここは暗し。円盤は頭上。駅の人々を呼ぶ。円盤、降下するように見え、大きくなる。2番目のUFOが海上に出現。時々滞空。3番目のUFO、ワドブナ村上空に出現。4番目が東方に出現。雲が出る。円盤は静止したまま大きくなる。他のUFOは雲中を行ったり来たり。雲中を降下すると、光が大きくなる後光のように雲に反射。高度400mかそれ以下。UFOはどれもはっきり見える。 “母船” (円盤を指す) は大きく止まったまま。雲が散らばり、2、3、4番機消える。円盤、赤く輝き、頭上の雲中に消える。 “母船” (円盤) 戻る。 “母船” (円盤) 去る。海を渡ってギワ (北西) の方向へ。頭上にUFOの再出現。滞空をつづける。まだそのまま。滞空。雲の向うへ (移動) 雲と雲の間非常に高高度で滞空。一面の曇り空。UFO見えず。大雨どしどし降りとなる。
1959.6.26	PM7:00 4分間以上		ボイアナイの対岸ギワの沖合に停泊中のシリウス号上。ボイアナイから240mの海上。	アーネスト・イブネット	サマライの貿易商	明るく輝く緑色の光球が、白い炎の尾を引きながら北東から飛んできて、仰角45度、およそ150m上空で静止。同時に光も消えたが、窓だけは明るく見えた。全体のシルエットはラグビーボール形。4分後、“ウーン” “ウーン”と聞こえる音を発して、明るい緑に輝き、矢のように飛んでボイアナイ西方の山影の麓方に消える
1959.6.27	PM 6頃		ボイアナイ	アニー・ワリー・ボレワ ウィリアム・B.ジル アナニウス・ララタ 他住民多数	パプア人看護婦 神父 教師	昨日と同じ位置に大型UFOを発見。ジル神父を呼ぶ。ジル神父は教師のアナニウス・ララタを呼ぶ。円盤の上部に人影が見えた。4人だ。たしかに人間だ。昨夜の母船と同じものかなと私は思った。付近には小規模な円盤も2機静止していた。大型円盤の乗員の一人は、手すりにもたれて、こちらを見下ろしていた。私が手を上げて振ると、驚いたことにその人影も同じ動作をするではないか。アナニウスが両手を上げて振ると、今度は2人が同じことをした。アナニウスと私が手を振ると、4人も手を振ってこれにこたえた。皆、大きなため息をついた。(喜びのあまりか、驚きのあまりか、



■パプア事件にみるUFO目撃者の条件■

- ①航空、天候、気象、自然などの観察を経験し、空中の出来事について表現できること。
- ②観察体験を脚色したり、嘘をつかないこと。
- ③勇気をもって、隣人に体験を語ることができ、必要なら報告書を作成できること。

だが、信仰にあつく天国を信じている彼らが、一度、漳州軍の飛行機に乗せてもらって、百花咲き乱れ、翼の生えた天使の飛んでいる天国を見にいった時、宣教師の云っていることがすべて嘘であったことを発見した(空や雲の上に国士はない)この時彼らが言うことをきかなくなったという事件があったという。 “文明人”を自称するキリスト教徒が、飛行機で雲の上を飛び、「どこにも天国なんかないじゃないか！」と騒いだという事件があ

						たぶん両方であつたろう。）」 何分間か交戦を繰返し、乗員は姿を消した。青いスポットライトが数秒間づつ、2度点灯された。 目撃者全員、夕方の1時半に出席。 「 教会から出てきたとき空は雲に覆われ、月照は見えず、窓の外で耳をつんざくような爆発音が轟いた。
1959, 6, 27	PM7:00 PM7:45 PM10:40	65 分間	バニアアラ区	ロナルド・オーウィン R.L. スミス オーウィン夫人	バニアアラ区副知事 巡回士官	北北西上空に丸い光体が白く輝くのを見え、オーウィン夫妻も救えられてこれを目撃。光はゆっくり動き始め規則正しく明滅する緑色の光線を3本下に放射。光る光体の下方には青銅色の円盤が周囲を一定に保ちながらついてきた。2つの光体は西空の低い雲の間に消えた。(オーウィン) 大きさは、腕を一本に伸ばして見た6ペンス貨幣位。下部の光は緑色で、針のように細く、1本は垂直。他は左右それぞれ約15度の角度で放射され、出したり引込んだりしているように仲間を繰り返していた。
1959, 6, 28	PM6:20 PM8:05 PM9:15	175 分	バニアアラ区	ロナルド・オーウィン オーウィン夫人 R.L. スミス 加わる		前日と同じ怪光が同じコースを、昨夜は30分かけて進入した洞窟を1分で通過し、その間に1500mほど降下した。怪光が高度を下げた時、下方に従っていた青銅色の円盤は、本体(怪光)の川へ飛び込むように姿を消した。 怪光は速度を落として、西に空に静止し、21:15分に姿を消した。
1959, 6, 28	PM6:45 PM11:00 PM11:20 PM11:30					1機のUFOが出現し、次第に数を増す。 全部で8機のUFOが高空を乱舞。 鉄板を落としたような鋭い金属性の音響が上空に響き渡る。 目撃者達が皆教室へ入っても、UFOはまだ上空を飛び回っていた。
1959, 6, 28	PM8:30	約10分間	シデア(ボイアナイの南東14km)ローマカトリック伝道本堂	2名の大人	ローマカトリック教区長	満月の半分ほどのある火のような光体が、西空を遠くから。小さくなったところ、再び明るく輝き、青い色に変わって消える。
1959, 7, 6	PM8:40 9:00	20分間	ドグラ聖アイダン校	デビット・デュリー神父 デュリー夫人 エドワード・ダムズ神父 ジル神父 10数人の学校職員	航空兵聖アイダン校 校長 学校付牧師	北西グバナナ岬の上空数度の位置に、雲に隠れた月のようなぼんやりした白い輝きが見え、やがて、輝きはまぶしい白色になって少し南に移動し、再びぼんやりした白光からぼんやりした微光にまで衰えた。5分後に光体は再び明るく輝き、反時計方向に円運動した後、南に移動して山の後に隠れる。双眼鏡で見ると、形は円盤状で色はオレンジだった。
1959, 7, 6	MO:50 1:50	60分	バニアアラ区	R.L. スミス		は物体がまた出現しないかと空を見ていた。 目を覚ますと、明るい光が空に見えた。271の光と光と同じものに違いないという確信を得た。青銅色の円盤は見えなかった。15分程ながめてみると、流星のような光が物体の下部から地上めかけて約45度の角度で矢のように飛んだ。さらに5分後、同じような光が逆の方向に飛んだ。1時間経過後、光体は西の空に消えた。
1959, 7, 8			ドグラ			詳細不明
1959, 7, 9			ドグラ			「
1959, 7, 18			ディディク			「
1959, 7, 20			トロール船			「
1959, 7, 21	AM9:15		メナビ	オーガスティン生徒100人 男性教師2人 女性教師6人	教師	輝く光が教会に接近。金網のように光る円盤で、周囲に黒い煙が取り巻く。見かけは太陽より少し小さい位。飛行機より速く無音で飛行。
1959, 7, 22	PM 8 頃		メナビから1.8kmの入り江	ジョージ	漁夫	丘の上空から巨大な物体が現れて、海上を低空で飛行し遠くへ。形は上部にドームをもつ暗い円盤。ドームの頂点にチェリーランプのような光があった。
1959, 7, 23	夜					円盤出現
1959, 7, 24	夜					「
1959, 7, 25	PM7:30		メナビ近くのガイアワナギ川岸	ピラモンテンクテ	高地土民	海の方から来た巨大な丸い物体が、ヤシの木のすぐ上空をかすめて、奥地の方へゆっくりと飛び、木陰に消えた。形はドーム付の円盤で、縦になってドームを進行方向に向けて飛行した。
1959, 7, 27				エドワード・ヤカワ	薬局員	1機の白く輝く円盤。
1959, 7, 28				エドワード・ヤカワ	薬局員	「

々より卓越していたと思われる。もし、宇宙から自分自身が宇宙船で地球に飛来し、確固たる計画に基づき、姿を見せるとしたら、小説家やSF作家は絶対に敬遠する。彼らはウソを生産して生計を立てているからである。

また、見た事実を自分の理論に取り込む習性の生命体も敬遠する。事実を証言する能力がないからだ。宗教家も同様に、奇蹟を自分の信仰に結び付けるから「不可」である。もし、筆者が宇宙から地球を訪れ、最も自分を理解

できる生命体を選択するとしたら、事実を正確にとらえて証言し、いかなる困難や誘いになっても証言をかねない人格を選ぶ。金銭や名声のために簡単に証言を変えたり、目で見えた事実以上に空想を加えたり、脚色したりす

1959, 8, 3	PM 6頃	30分	マボウナ	R.L. スミス	巡回士官	真北の高空に3本の光線を下部から放射する白い光体が出現して、30分静止。3本の光線のうち1本は垂直に、他の2本はその左右約5度の角度で広がり、明滅というより、その物体の川に引込んだりまた出したりを繰り返していた。
1959, 8, 4	PM 7	15分	ワクアア	R.L. スミス	巡回士官	前夜と同じ位置に同じ光。同じ輝き方。
1959, 8, 5	夜		メナビの東1.6km バラエバエバラ		薬局員	星のような光点が5コ、山線形の輪郭で、赤、緑、白と変化しながら地上から海上へ飛ぶ。
1959, 8, 8	PM6:30 頃		ビニグニ	R.L. スミス パプア人数人	巡回士官	北東の空に3条緑色光線を放つ円光。パプア人達は「ここひと月ずっと出ている。今頃出て、9時過ぎると山の方へ行く」と話す。確かに、9時10分になると、その光はいきなり東へ動き始めて、メナオ山の方へ消えた。その間、大きさを、腕一杯伸ばして見た6ペンス大に大きくなったり、豆粒程小さくなったりし、接近したり遠くかたりしているようにも見えた。
1959, 8, 10	AM3:50 頃 5:30頃	約100 分	バニアアラ区	オーウィン夫人 オーウィン		赤ん坊が泣く所で夫人が目を覚ますと、明るい光が上空にあった。夫を起こし、二人でこれを観察。光体は仰角20度まで上昇し、白、緑、オレンジ、青銅、赤と規則正しく、急激に変色を繰り返した。形は球状だが円盤に変色しない光球があり、7.27~28と同じ青銅色円盤が見えない糸で結ばれているように、同じ間隔で付き随った。運動は、上下、左右、振り子、ジグザグを行ない、その間少しづつ上昇。AM:15頃、もう1機同じ様な球体が出現したが、青銅円盤はついてなく、2機は同じ間隔のまま激しい運動を続け、2番機、1番機の順で消えた。消失位置は仰角35度位になっていた。
1959, 8, 14	PM7:30 頃		ムカワ	R.L. スミス	巡回士官	西空に現れた怪光は30分静止後、不規則な動きを見せ、色もオレンジに変わる。8:50頃、いきなり2シリング貨幣大にふくると、血のような赤い光を放って爆発し、消失。音はなかった。
1959, 9, 14	AM 2頃		サマライ	アーサー・ジョブ	建設業者	ドイニ島方向上空に目くらむような長軸を縦にした長円形の輪郭はハッキリしないが、アセチレン灯のように青みがかった光を放つ光体が降下し、島の前方で右に進路を変え、隣の島との中間で静止、約10分後、再びゆっくりと右に動き、島の前面を通過して上昇、西へ遠くへ。
1959, 10, 23	PM10頃		アマニ	ミカ・アイガバ	教師	東から丸い光体が飛来。低空をグオイラ山めがけて飛行したが、山に近付くと急上昇し、山頂に1時間ほど静止。その後、北東に移動してモナリとミディノ両部上空通過後、方向を転じ東の空に消えた。光体は丸く、動くときはまぶしいほど明るく、緑、赤、黄の三原色をもとに変色。大きさは月の半分位だがずっと明るく、軽飛行機よりも遅かった。
1959, 11 頃	PM7:30	60分以上	コヤバギラ	アルバート・M・リリカ セシル・マタボイア シャフェット・キラカカ	神父 病院夫 教師	ボイアナイ方角上空に月または月の半分位の真っ白な円球が見え、その少し下方に黒い流線形の物体があった。一見、雲のようにも見えたが、最後まで形を変えなかったのと、動きかたから雲ではなさそうだった。光体はやがてゆっくりと下降して黒い物体の川へ消えたか、背後にかくれて見えなくなった。光体が背後に隠れる時、黒い物体の輪郭がクッキリ見えた。黒い物体は1時間経過後、目撃者3人が寝室に入るまで動かなかった。

る人格は「危険因子」とマークして、姿を見せないようにするだろう。
パプア目撃者達の対処の仕方や、牧師らの正確な観察、目撃直後現場で目撃図を描き合ひ署名し合う的確な行動。これらは現在の我々においても簡単に実行できるものではない。
また、事件の報告者ノーマン・クラットウェル神父がこう書いている「最初の頃は星かせいぜいティリー・ランプほどにしか見えなかったものが、しだいに大きく見えるようになり、末期には明らかに大きな円盤が円球となってきたことはどうだろう。初期の偵察は高空から慎重に実施し、安全を確認したのち低空で記録や観測を行なうようになったのではなかろうか」

この神父は、UFOの出現に計画性を感じとったようだ。しかしその推測はまだ踏み込み不足である。「安全の確認」とはUFO側の問題であろうか。パプアはミサイル基地ではないのだ。人々の対処が適性か、高空から姿を見せて彼らがパニックに陥るか冷静に観察するかを見届けた、という方が当たっているだろう。ハイネック博士もかつて、人間が猿に近付く場合の例をあげてUFOの段階的接近を説明している。UFO搭乗者は期待通りのパプア住民反応に更に接近距離を詰め円盤から姿を見せるに到ったといえる。牧師はこの模様を秒刻みで記録。住民も異星宇宙船を頭上に見て取り乱すことはなかった。それでもUFOは接地することなくギリギリの

空中接近をもって終止符を打ったようだ。
近未来の我々にこのような事が果たして起こるのだろうか？

■古代パプアの伝説と道路■

探検家ベリー著『古代文明研究-太陽の子』によると、ユーオン湾(フォン湾)近くのカイ族に伝わる「ネムNemu」と称する半神半人が、人類以前からいて、人間を創造し果実を食用に適さしめ、野に耕作をはじめ、住むべき家を建てたという。ベリーは「或る生物によって人間の文明が創始されたといふ上人の説話には、明らかに真実がある」と書いている。リーダーズ・ダイジェスト刊『世界最後の証』には、ポートモレスビー北530kmにある2300年前の農耕川かんが「道路から発見された農耕具の形態が、今日の高地パプア人と殆ど変わらないことを述べている。



航空機とUFO遭遇地点例

1947年6月24日のアーノルドによる軽飛行機とUFOの遭遇、ユナイテッド航空スミス機長とスチュワーデスに始まる民間旅客機とUFOの遭遇、1948年1月7日マンテル大尉に始まる軍用機によるUFO追跡事件という具合に、空中における未知の飛行物体目撃や遭遇は、その物体がいかなる性質のものであり、どこから何のために我々に接近しているのかについて推理する材料として、最も確実な資料となるものといえるだろう。今やこのような図を、航空機取扱い事務所のすべてに掲示して未来とは何かを自問すべき時代となっている。

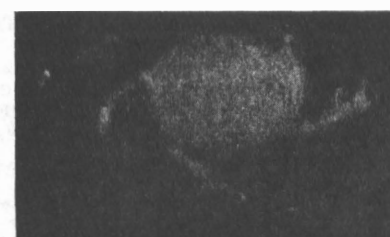


F.Y. ジーグリー

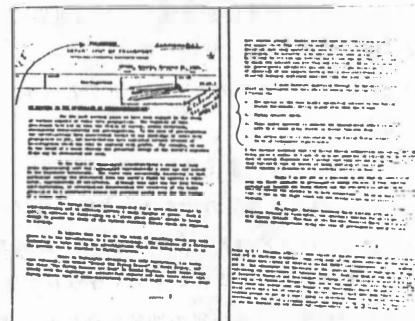
「ソ連で科学的なUFO研究が始まったのは1946年、第2次世界大戦が終わった翌年であった。その年、お月島のUFO研究に火をつけたのは作家のA. カザンツェフであった。彼はこの年、ソングース大爆発は他の惑星から飛来した物体が何かの原因で地上に落下して起きたもの、という大胆な仮説を発表したのである。ソングース大爆発というのは1938年6月30日朝、中東部ペリアのボトカーメンナ・ソングース川に沿ったタイガで起きた謎の火災で、その原因は不明で、その火災がごとくなく倒れ、火災は遠くヨーロッパの各地でも観測され、程の火災となった。当時から軍隊や警察が何度も現場に派遣されて、原因不明が行なわれたが、カザンツェフがUFO説を発表するまでは、巨大な岩石が落下したものだという説が主流であった。さて、カザンツェフの仮説は当時、全く空想的なものとみられていたが、時と共に科学的根拠によって裏付けられることになった。その火災をきっかけに1947年にモスクワ・プラネタリウムで開かれた科学討論会であった。この討論会で「ソングース大爆発の謎について」という報告を行なったのは仮説の提唱者である作家のカザンツェフと私であるF.Y. ジーグリー「ソ連のUFO研究」

UFO現代史（主な事件と調査）

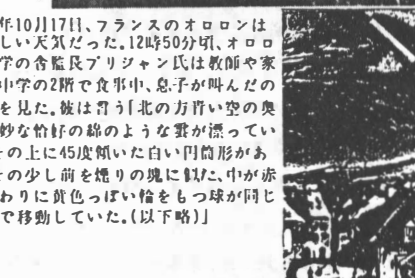
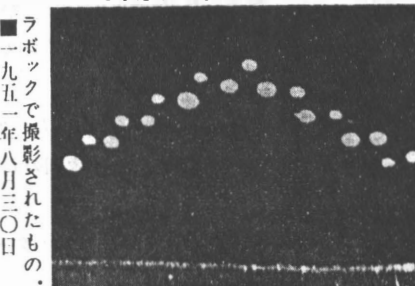
- 1947年6月24日米国ワシントン州レイニア山上空で、ケネス・アーノルドが9個の円盤編隊を目撃。以後、「空飛ぶ円盤」(Flying Saucer)が世界的な話題となる。
- 1947年7月4日米国ユナイテッド航空のスミス機長等は5個の円盤を45分間観察。
- 1947年7月4日米国ワシントン州シアトルで沿岸警備隊員リマンがUFOを撮影。
- 1947年9月23日米国空軍非公式のUFO調査機関を発足。
- 1948年1月7日米国ケンタッキー州ゴッドマン空軍基地でマンテル大尉円錐形UFOを追跡し、墜落死。
- 1948年1月22日米空軍UFO調査機関「プロジェクト・サイン」発足。
- 1948年7月23日米国イースタン航空旅客機、青色の葉巻型UFOと遭遇。
- 1948年10月1日米国デコタ州ファーゴ空軍基地でF-51戦闘機ゴーマン中尉が、直径20センチのUFOと空中戦を展開。
- 1949年2月米空軍、「プロジェクト・サイン」を「プロジェクト・ブラッジ」と改称。
- 1949年8月20日米国ニューメキシコ州ラスクルセルで冥王星発見者クライド・トンボー博士が自宅で家族と共に6~8個の光体群を目撃。
- 1949年12月23日米国雑誌「TRUE」誌にドナルド・キーホー少佐が「UFO=宇宙機説」を発表。全米で大論争が巻き起こる。
- 1949年12月27日米空軍「プロジェクト・ブラッジ」を閉鎖、UFO否定を声明。
- 1950年3月14日メキシコ市空港上空でUFOが30時間行動。多数の市民が目撃。
- 1950年3月~4月スペイン各地に円盤が度々飛来。
- 1950年4月米国のトルーマン大統領、記者会見で「伝えられるところの空飛ぶ円盤は地上のいかなる国の製品でもないことは断言できる」と述べる。
- 1950年5月20日米国ロウエル天文台ハル教授、白い泡に閉じ込められた金属的小形UFOを望遠鏡で観察。
- 1950年5月22日米国フラグスタ天文台ヘス教授、金属的円盤を観察。
- 1951年2月19日アフリカ、キリマンジャロ上空にて東アフリカ航空機が巨大な砲弾状物体と遭遇。
- 1951年8月30日米国テキサス州ラボックにて学生カール・ハートが10数個の光体群を撮影。
- 1951年10月27日米空軍UFO調査機関「プロジェクト・ブラッジ」を再開。
- 1952年3月25日米空軍、「プロジェクト・ブラッジ」を「プロジェクト・サイン」と改名。空飛ぶ円盤に代わり「UFO」が正式に軍用用語になる。
- 1952年3月29日、青森県三沢基地上空で訓練飛行中のブリガム中尉、小形UFOと遭遇。
- 1952年7月10日~26日、米国ワシントン上空にUFO群が頻繁に出現、レーダーにもキャッチされ、空軍機がスクランブルしてUFOに接近すると消え、引き返すと再び現われるということを繰り返した。
- 1952年7月14日米国バージニア州上空でパンアメリカン機のナッシュ機長8個のUFO編隊を目撃。
- 1952年10月17日フランスのオロロン上空で円筒状UFOと土星型円盤多数が飛来。エンゼル・ヘアを降下。
- 1952年10月27日フランスのガイヤック上空でオロロンと同様の事件発生。
- 1953年1月14日米国CIAが科学者を集めてUFOの査問会を開催。
- 1953年2月28日レバノン、バイルートの技術5人が赤い円盤10個の乱舞を目撃。
- 1953年5月23日南アフリカ空軍レーダーが希望峰上空を6回通過したUFOを捕捉。
- 1953年8月5日米国北デコタ州ビスマークで飛行体が空軍レーダーにキャッチされる。



1950年4月24日、ニュースリール誌のカノラン、エンリク・H・ミューラーがスペインで撮影した回転するUFO



1950年11月21日、カナダの科学者ウィルバート・スミスがカナダ運輸省にUFO調査プログラムの認可を求めた申請書。同書の中で「本政府は円盤問題を水浸し以上の最高機密として扱っている」などが述べられている。カナダ政府は翌月、スミスの申請を許可し、400万ドルの研究資金を与えている。



■1954年仏上空のUFO例

- 8.22 直立し、葉巻型物体から円盤が現れて飛び回る。
- 8.22 円盤の周囲は、燃える光の輪になっていた。
- 9.22 巨大な雲のような物体から沢山の小球体が放出される。
- 10.1 葉巻型物体が垂直になつて、急激な速度で飛行。
- 10.2 葉巻型物体から小円盤が現れ、再び中にくる。
- 10.12 木の葉のような運動をしなから、球体が地面すれすれに降下。
- 10.16 4個の円盤が編隊から1個が離れ、ジグザグ飛行で地表に接近。
- 10.16 ビレオー山頂より楕円形物体が上昇、再び降下し、隠れる。
- 10.18 雲の中でダンスをする数個の白色物体の活動。空域から「凝結した水蒸気」と呼ばれたエンゼルヘアが降る。

1952年10月27日、やはりスペインに近いガイヤックで、午後5時30分、オロロンと全く同じ現象が繰り返された。45度に傾斜した円筒形がゆっくりと南西へ向かい、それを20個ほどの円盤が取り巻き、太陽にきらめきながら2つずつジグザグに飛行。あるものは3~400mまで降下した。20分後、葉巻も円盤も地平に去った後、白い糸の網まりが長い間落ちてきた。

▲米ロサンゼルスの日ド(1)日撃を取り上げた日本国内紙。



Giordano Bruno



K.E. Tsiolkovsky



Charles Fort



Desmond Leslie



Herman Oberth



Frank Edwards

「無数の太陽とそのまわりを回っている無数の地球が存在している。〔われわれの〕太陽のまわりを7個の惑星が回っているのと同じように……これらの世界には生物が住んでいる。」
(ブルーノ著『無限、宇宙と諸世界について』より)

ジョルダノ・ブルーノ

「時が流れるとともに、各惑星は1つに統合され、不完全なものとは排され、非常に強大な見事な社会機構をつくるようになる。最高議会は各惑星を統治するものを1人選び出す。それに選出されたものは、惑星の全住民のうちでもっとも完全なものである。彼はその徳を全住民におよぼして、徐々に人々に感化をあたえていく……空間に住むこういう住民は、惑星上に住む住民よりも数十億倍も多いようになる。彼らを統治するのは、やはり選抜議会と大統領である。大統領は1惑星の最高議会の代表よりもはるかに完璧である。

統合はさらに、隣り合う太陽のグループ、銀河系、鳥宇宙同志というふうにだんだんおもしろげられていく。これらの社会単位の代表たちは、上へいけばいくほどますますその完璧さをましてくる。こうして、一般宇宙の住民のほかに、惑星の代表とか、太陽系の代表とか、恒星グループの代表とか、銀河系や鳥宇宙の代表といったような選ばれたものたちがでてくるようになる。これらの選ばれたものたちの高い徳性は、想像を絶するほどのレベルに達している。彼らは、宇宙の神々に近い。

太陽系や恒星グループの統合があつたところで何のたしにもなるものか／なんていう者があるかもしれない。太陽系の惑星に生物がいたところで、そんなことは何の関係もない／なるほど、一応はそうかもしれない。しかし、太陽や惑星はけつして永遠のものじゃない。爆発したり、光が消えたり、またどんな破局にであうかも知れたものじゃない。こういう破局がくる前に、住民に適したまだあいている場所を探さなくてはならない。われわれは別の太陽系のことについては何でも知っていないではない。

また、太陽系グループの代表は、一般の利害関係を調整したり、どこへいつたらいいかという必要な指示を与えてくれたりして、われわれに協力してくれるだろう。隣同志の恒星間の交信などというものが、可能であろうか？大丈夫、もう今でさえも、かれらから何らかの報知が我々に達している。……」

(ツオルコフスキー『わが宇宙への空想』より) ツオルコフスキー

★1860年7月28日インド・ドルムサラに木に置かれたいん石が落下、翌日、飛行機の煙火に似た火の玉が低空を飛び回り、ベナレスでは生きた魚が降り、太陽に黒点、地震、昼間の闇黒、発光現象…の事件について「私は1860年夏のインド上空に、一つの世界または超構造物がただよっていたと考える。」

空の光については「地球への訪問者」「……地球はその歴史のさまざまな時点で、多くの“訪問”を受けた」

米著作家 チャールズ・ホイ・フォート
(1919年刊『呪われたものの書』より)

「レーダー面にはっきりと姿をあらわし、レーダー装備のジェット戦闘機によって追跡され、しかも技術者たちが公案作製したいかなる飛行機も絶対不可能な鋭角回転(sharp angle turn)を無造作にやっける時速5000マイルの飛行物体を、いったいあなたはどのように“しんきろう”だなどと書き得ましようか?…」

元米空軍報道官アルバート・M・チョップ
(1952年『デイリー・ニュース』のcolumnist マット・ヴァインストックに対する発言)

「私の祖父の時代には、疾走する馬の速さ以上の速度で人間が動けば、きっと体が破壊されるだろうと思っていたものであった。しかし、汽車はこの予想を簡単に破った。また、つい数年前には音速を超えて飛ぶことは不可能だと考えられていた。しかし、これも超音速飛行機によって打破された。この超音速飛行機の出現は、今までの限界説を完全にくつがえたものである。今日では、光の速度が物体の耐えうる最高の速度であると信じられている。しかし、私たちの子孫は、超光速の物体が何の破壊作用も受けずに、時間を超え、殆ど無限に近い距離さえも飛破することのできる第4次元(他に呼び名を持っていないので便宜上そう言っておこう)として知られる非常に興味深い時間・空間の状態に飛び込む時代に落ち合わせるかもしれないのである。」

「……原子の構成物が中心核の回りを駆け回り、月が惑星の周囲を回り、惑星は太陽の周囲を回り、太陽は銀河の周囲を回り、そして恐らくその銀河さえも無限に大きな成る物の周囲を回っている。そのすべての廻転の不思議な原動力は何であろう。また、この驚くべき巨大な力(古代人の宇宙力といったもの)を利用して、空飛ぶ円盤が我々の知識の限界を遥に超えた速度で宇宙を自由に飛行することが出来たとしたらどうであろう。……」

英国考古学者 デズモンド・レスリー
(1953年著書『Flying Saucers Have Landed』より)

「わたしは現今の世界的危機に直面し、空飛ぶ円盤を擁護して、わが地球救済のために活動している他の遊星の人類の存在を確信している」

元英国空軍 ドッディング長官
(1954年5月26日の記者会見にて)

「数世紀間にあつて、空にかがやく物体が多くの人々によって観測されてきた。その最古の記録は、かれらが「輝く所」と呼んだ大プリニウスの『ラテン』の中にみいだされ、第2次大戦までには、約10例が入手された。当時この現象はひんびんに発生し、連合国側は、ドイツの秘密兵器だろうと思っていた。1947年以後というもの、肉眼による目撃レポートがとんとん拍子で増殖し、空軍長官ドッディングによれば、1953年にはすでに1万件以上に達していた。(略)……この未解決の9%あまりに関する私自身の見解は、そうしたUFOは、すくなくともこの地球ではない別のところと建造されたもので、地球人が宇宙旅行の準備に余念がない時、すでに、宇宙旅行の方法を発見していた他の遊星の人類がいると考えられる……という見方なのである。」

ドイツ科学者 ヘルマン・オーベルト教授
(1955年英国誌『Flying Saucer Review』より)の一部



U Thant



James E. MacDonald



Downing



Jacques Vallee



Jimmy Carter



Frank Salisbury

「じぶんは遊星間を飛行する円盤の存在を信じているのはむろんのこと、かれらが地球から観測できない遊星から飛来してくるものと考えている。」
米国際ア社社長 ウィリアム・P・リアー
(1955年コロンビア州ボゴタにて発言)

「10年前には、幻想的だと考えられていた多くのことが、今日では普通の事であり、50年前には、考えられも認められもしていなかった多くのことが、我々の日常生活の一部となっている。」

「現在の我々を面くらわしていることの多くは、いつかは、おおらかな心を持った人々によるたゆみない研究の前に屈服することであろう。そして、我々のまわりにいま存在している多くの謎を解くにつれて、いまや我々が弱々しい足どりをやっと進めかけた、宇宙それ自身の無限の謎を理解する機会がふえていくのだ、とわかるであろう。」

米ニュース解説者 フランク・エドワーズ
(1956年著書『STANGEST OF ALL』より)

「UFO問題は国連にとって、ベトナム戦争に次いで、最も重要な問題である。」

元国連事務総長 ウ・タント
(1966年当時の個人的見解)

「あなたもご存じのように、私は仏教徒だから、地球以外にも生物がいるということ信じますね」
(事務総長当時アレン・ハインツ博士との対談で)

「必ずや人々はUFO問題に関心をもち、それが宇宙から飛来したという可能性を重視するようになるだろう」

米気象物理学者 ジェイムス・マクドナルド教授

「…通常は超自然力のせいとされる聖書の奇蹟類が、間違いなく大気圏外のものと解釈される。…天使というのは、精霊とかではなく、宇宙よりの来訪者であつたと考えられるし、聖書を発した神とは、危機に面した地球人を指導しようと、別な惑星から来た人間であつたのかもしれない 米長老教会牧師・物理学者バリー・ダウニング
(1968年著書『聖書と空飛ぶ円盤』より)

★創約聖書「エリヤ昇天」について……「このような文章を解釈するには、原典訳読者の問題と共に、最初の執筆者や目撃者本人の問題をも考慮しなければならない。当時の目撃者、執筆者、あるいは訳読者たちがUFO現象を描く適切な言葉を持っていたとは、ほとんど想像もできない。彼らの一人ぐらいはそのような言葉なり、それに相応する概念なりを持っていたらどうか、持っていなかったとは奇妙だと考える人がもしいるならば、アーノルド事件の時に、なぜ適切な言葉がみつからなかったかを、ひとつじっくり考えて見て頂きたい。私たちは仕方なしに“空飛ぶコーヒー皿”という表現を採用したが、これ以上バカげた名前はまだ二つ見付かるまい」
米天文・数学者 M.K. ジェサップ教授
(1956年著書『UFOと聖書』より)

「UFOの研究者にとっては、これまで論じてきた範囲を超えて、推理をさらに一歩先まで進めたいという気持ちを抑えることはむずかしい。UFOが「知能をもった地球外からの訪問者のものであるとすれば、それはどういう意味をもつのだろうか?彼らは私たちのものの考え方や、私たちの住む世界にどのような影響をおよぼすのだろうか?」

「多くの科学者たちが、しだいに真剣に、UFOの謎と取り組むようになりつつある。」

「科学者としては、一般大衆がある問題についてどのような考え方をしようとする、そのことをその問題が科学的研究に適するものであるかどうかを判断する基準としてはならない。重要なのは、その問題を研究するのに科学的な方法を適用しうるかどうかである。すなわち、意味のある仮説を立て、観察を行ない、その仮説を検討していくという方法を取ることができるか、そして客観的であることができるかということだ。

UFOはたしかにいくつかの特殊な問題を含んでいるが、注意を払いさえすれば、科学的な方法で研究を進めることは可能だと私は思う。要は外部からの圧力に屈することなく、常に客観的な立場を守ることということになる。例えばしばしばくり返される“あなたはUFOを信じますか?”という質問に答えようになる誘惑に負けてはならない。」

「科学はものごとを信じない。客観的データに論理を適用して真理を追求するだけだ。UFO学者は、UFO目撃者をはじめ、さまざまな人々と密接につき合い、影響をおよぼし合いながらも、このような生き方を守らなければならない。しかし、目撃者のほうでは、科学者がどうしてこれほど明白なことをすなおに認めようとしないうるか理解できないだろう。」

米ユタ州立大学 フランク・ソールズベリー教授
(1975年『BIO SCIENCE』論文「RECENT DEVELOPMENT S IN THE SCIENTIFIC STUDY OF UFO'S」より)

「私はUFOを見たという人を笑う気にはなれない。なぜなら私自身も見たのだから。」

「もし、当選のあかつきには、政府の持っているUFO情報をすべて国民に公開する。」

米 ジミー・カーター元大統領
(1977年大統領選挙運動中での発言より)

「人類の急務は未確認飛行物体(UFO)の正体解明と対話である」

「ますます世界の多くの人がUFOの存在を信じ、もっと深い調査をすることが地球の幸福に重大な貢献をするとなつて多くの国が信じているようになって以上、ぜひ具体的な常設専門調査機関の(国連)設置を」

グレナダ国 エリック・ゲーリー元首相
(1977年11月28日国連総会特別政治委員会演説より)

「今日、世界には宇宙人の来訪を期待するという感情的な新しい社会現象が起こっており、また昔、宇宙人が地球を訪れて人類を導いたという説が大衆に広まっている」……「……この社会的変化がどう処理されるかは、UFO現象がどう真面目に研究されるかにかかっている。」

仏天体物理学 ジャック・バレー教授
(1978年5月27日第33回国連総会第35回特別政治委員会発言)



■約8000年前に描かれたタッシリ岩絵の一つ



■ボナベ島に遺る「輝く船」の彫刻の一つ



■上：古代インド叙事詩に登場する空飛ぶ車「フシユバカ」
■右：ペリスボリスにあるダリウス記念碑のアフラマツダ像
■下：シャカ族生図の空中の「車」と「ホッス」神話に基づくもの、車輪の起源である。



「神々は、多くの音あり、千の叫喚ある車輪（天の叫喚 Dildasso-lucallu）を空に飛ばした。黄金の輪のある馬車を上下に飛ばし、しがしと子や車輪を手にとっている者は見えなかった」ブッダ生誕伝説



1561年4月14日、ドイツ、ハンブルグ上空で観測された円盤状、球体など



宋の詩人陳東坡「UFO見た」

「金山寺」に新解釈
同時代に光る玉記述

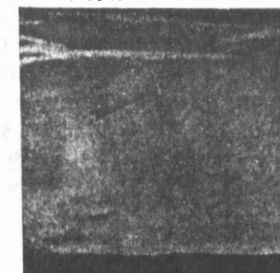
上海の新聞が紹介

（以下略）

有史前～1946年UFO史

BC. 10000頃チベット：コンロン山脈にドロバ族「空を滑る機械」で到着。
 BC. 4000頃シュメール：大洪水後、「王権」天より降りキシュにあり。キシュ王天へ昇る
 BC. 3000頃メソポタミア：ヘブル人エノク天使に連れられ天界へ行く。
 BB. 2300頃中国：堯の時代、毎年「空飛ぶ浮差」が去来。夜輝き、昼は滅す。
 BC. 1800頃バビロニア：ハムラビ王「輝く戦車」の主シャマシュより法典を受ける。
 BB. 1600頃エジプト：オシリス「天を移動する炎の船」に乗り、地上へ降下。
 有史前インカ：コンチキ・ピラコチャ、「太陽」と共にチチカカ湖に到着。文化を教示
 有史前マヤ：ククルカン、又はケッアルコアトル、ユカタン半島原住民に文化を教示
 有史前南太平洋諸島：洪水後、空から「天降人」が来訪、人々に石器など文化を教示
 有史前インド：2大叙事詩に、空を自由に飛行する「ビマナ」の記述あり。
 有史前北アメリカ：飢饉に瀕した民族に「サンダーバード」がクジラを空中輸送。
 有史前シベリア：「赤いトナカイ」に乗り空を駆ける英雄、人々を悩ます怪獣を退治。
 有史前オーストラリア：文化英雄「マーツムレ」、人々に狩猟技術などを教示する。
 有史前アイヌ：文化神オキクルミカムイ、シンタという空中を飛ぶ乗り物に乗り活動
 BC. 1500頃中国：初代皇帝湯王、飛行戦車でコンロン山脈やゴビ砂漠上空を飛行。
 BC. 1504エジプト：トトメス3世と学者達、飛来した「炎の輪」を数日間目撃し書き記す
 BC. 1400エジプト：アメンホテプ4世「イクナトン」と改名。唯一神「太陽円盤」を崇拜
 BC. 1300頃ヘブライ：「昼は雲の柱」「夜は火の柱」の主、ヘブライ人を解放カナンに至る
 BC. 600頃バビロニア：バビロン捕囚のユダヤ人エゼキエル、飛来した輝く物体に遭遇
 BC. 537ベルシャ：キュロス王、天の神マルドゥークの助言により、バビロン捕囚を解放
 BC. 522ベルシャ：ダリウス王、天空神アフラマツダの教示を受け、ベルシャ帝国を統治
 BC. 500頃ネパール：シャカ族にブッダ誕生の時、王宮上空に傘状の物体多数出現
 BC. 222イタリア：アドリア海リミニ島に巨大発光体出現。深夜を真昼のように照す。
 BC. 216イタリア：ローマ上空に船の形をした物体が出現。ローマ兵の武器炎に包まれる
 BC. 170イタリア：ローマ近くのラスピアで、天空に「艦隊」が見られた。
 BC. 122イタリア：ガール地方に3つの太陽と2つの月が出現。
 BC. 90イタリア：アンブリア地方で金色の火球が降下旋回、上昇して太陽を覆った。
 BC. 41イタリア：ローマで夜、太陽の様な光りが輝き、多くの人々が群がり錯覚し起きる
 BC. 4パレスチナ：ローマ支配下のベツレヘムに動く星が降下しイエス、マリアの手に。
 西暦28年パレスチナ：イエス、ヘルモン山頂にて「輝く雲」に搭乗。モーゼ、エリヤと会談。
 29年パレスチナ：イエスははりつけの刑場に2機の「輝く雲」出現。イエス、「雲」で昇天
 80年イタリア：ボンベイ埋没翌年、ローマ帝アグリコラ不思議な焰を目撃
 89年イタリア：カンパニアで「燃えるたいまつ」が空一面に出現。
 314年正月中国：3つの太陽並び、西から東へ進む。
 375年北アジア：フン族、天空神「ハズール」の示唆で西に移動を開始。
 384年イタリア：ローマ上空に「恐怖の徴」として「槍の形」空に現われる。
 395年イタリア：夜間輝く多数の球体出現。それは双刃の剣の形となり40日間燃え続け、
 408年イタリア：フン族、ローマ帝国に進行、上空に流星の様に「印」出現帝国滅亡へ向う。
 577年フランス：北から西へ「槍」のような物が横切る。
 610年アラビア：ヒラー山で天の声を聞いたマホメッド、「人頭天馬」で天門に到達。
 655年5月日本：葛城山から生駒山へ「竜」に乗る唐人が空中を飛行。
 773年イギリス：目没後「赤い十字」出現。
 776年イタリア：籠城のキリスト教徒をサクソン人が攻撃しかけたとき、空に「赤い盾」
 形をした物体が出現したためサクソン人は混乱、教徒は難を逃れる

796年イギリス：太陽の周囲をグルグル回る小さな球体の群れが出現。
 919年ハンガリー：「燃えるたいまつ」の様なもの、星状の球（複数）が空中を動き回る。
 989年日本：「太陽三方に現われ、後合して1つになる」
 1096年7月日本：空に数10個の光体が数珠つなぎとなって出現。
 1254年1月1日フランス：真夜中、大きな船の形をした物が現われ、次第に消える。
 1271年日本：日進、鎌倉竜の口で処刑の際、火の玉出現し、難を逃れる。
 1322年11月4日イギリス：ウスクブリッジで「火の柱」が天空を横切る。
 1478年スイス：様々な種類の十字形や火の鉢が空から降下。
 1501～1503年：ヨーロッパ：各国で多数の十字が空から降下、ドイツで26日間続く。
 1509メキシコ：臣民達が泣き叫ぶ最中、尾をひく隼の火の玉が上空を旋回。
 1547年12月13日イタリア：午後3時頃、ローマ上空に赤い十字出現、仏独英で暗太陽
 1561年4月14日ドイツ：ニュールンベルグ上空にハマキ形から球体が出現。
 1566年夏スイス：バーゼル上空に白と黒の球体多数出現。修道院の古文書に描かれる。
 1577年日本：長崎26人処刑の上空に「火の柱」が出現、大地震あり。
 1677年イギリス：天文学者ハレー、空中に現われた大きな光を観測して報告。
 1697年ドイツ：ハンブルグ上空に「炎の輪」出現。絵画にも描かれる。
 1749年9月24日日本：関東に火の玉東北に飛来。大きさマリの如し。
 1801年6月19日イギリス：ハルの市民は夜中、黒い横線をもつ月の如きものを目撃。
 1801年7月14日フランス：モンセラ上空で巨大な雲状物体が青い焰で燃え続いた。
 1806年7月17日イギリス：ロンドン上空に円錐形の円盤出現。
 1807年12月22日イギリス：北部でロケットのような輝く物体出現。
 1809年8月10日イギリス：ロンドン上空で多数の流星状物体が黒雲に出入りした。
 1820年9月7日フランス：アンブランで編隊を組んだ物体が直線から直角ターン
 1824年10月20日オランダ：月面学者グルトウィゼンは月の暗部に明滅光を観測
 1925年春ポーランド：「刈り込みバサミ」形物体、70分間も目撃される。
 1836年1月12日フランス：シュルブール上空にドーナツ状の回転する物体が滞空
 1838年インド：長いオレンジの円筒物をもつ円盤の飛行が目撃された。
 1845年5月11日イタリア：ナボリの天文台で西～東へ動く多数の光体を観測
 1849年スイス：天文学者アングリ、何千もの輝く物体が夜空を通過するのを観察。
 1869～1870年イギリス：天文学者達は月面プラトーンに変化する光や動く物体を観察
 1873年6月17日ヨーロッパ：オーストリア、ハンガリー、チェコの天文台で、火星から発
 射された光体が地球大気圏上層で爆発するのを観測。火星接近中のこと
 1879年イラン：ベルシャ湾で回転する車輪状物体が船上から目撃された。
 1880年1月17日イギリス：グリニッジ天文台で60～320キロ上空に緑色の円盤を観測。
 同時にオランダ、ベルギーからも観測された。
 1883年8月12日メキシコ：ザカテカス天文台で太陽面を横切る283個の物体を観測撮影
 1897年4～9月アメリカ：シカゴを始め各地上空に葉巻形物体出現。連日新聞報道さわる
 1901年イラン：ベルシャ湾で回転する車輪状物体が目撃される。
 1908年6月30日シベリア：インド洋から大気圏に突入した円筒状飛行物体が爆発
 1917年5月ポルトガル：ファチマで3人の牧童、天からの貴婦人と会見。以後毎月続く
 1917年9月13日ポルトガル：ファチマで貴婦人との会見上空に卵形飛行物体出現
 1917年10月13日ポルトガル：ファチマ上空にジグザグ飛行する円盤が出現。
 1929年8月日本：飛行船ツェッペリン号近くを丸い物体が横切るのを群衆が目撃
 1942年2月25日アメリカ：ロサンゼルス上空に15個の円盤群飛来。
 1944年太平洋・ヨーロッパ：第2次大戦の戦闘機などのパイロット、小球体と遭遇
 1946年夏北欧一帯：「ゴースト・ロケット」目撃事件続発。



■1944年、第2次世界大戦末期、ヨーロッパや太平洋の戦場上空を飛行する爆撃機や戦闘機

機は空中で謎の物体に出会った。それらは戦場に接近したりしたが敵意は感じられずおどろきに陥る兵器としたが、戦後後それらが地球外のものであることが判明した。さらに1946年6月10日に「ドイツのV兵器に似た」物体がフィンランド上空を通過した。2、3週間止という短期間に、UFOタイプの飛来、円筒状の物体、正体不明の翼のあるマシンガンルウェーとスウェーデンの列国とで無数の人々により目撃された。



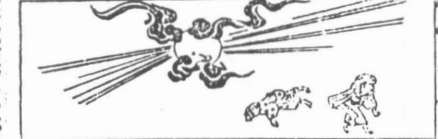
Silver Balls Floating in Air
Nazis' Newest War Device



日月並び出す



光り物より西に飛来



月を出現する



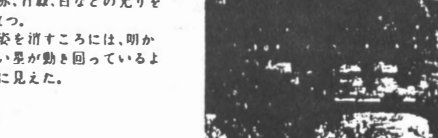
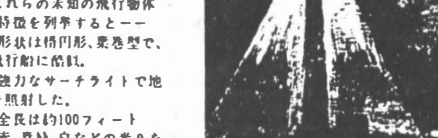
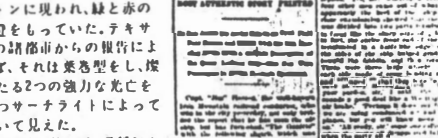
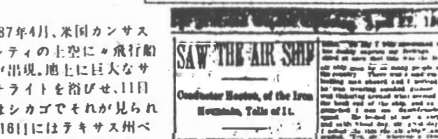
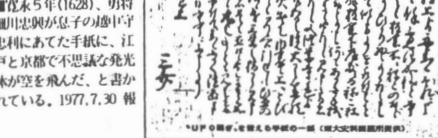
その光線が眼を刺す



月面の光り物、人の顔とし

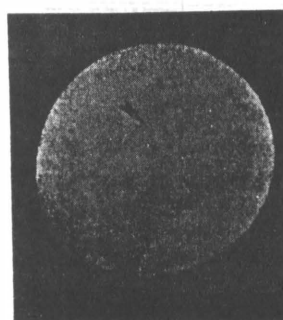


四角な月をみる



学者・専門家によるU F O 観察例

年月日	国名	観察者	分野	観察物体
1777, 6, 17	フランス	シャルル・メシエ	天文学	空中を旋回する多数の黒い物体
1802, 2, 7	ドイツ	フリッツ	天文学	太陽面を覆う真っ黒い円盤状の物体
1818, 1, 16	イギリス	ロフト	天文学	太陽付近の異様な物体。約3時間半飛行
1835, 5, 11	イタリア	コキアトール	天文学	輝く円盤
1845, 5, 11	イタリア	カッポシー	観測所	西から東へ飛行する輝く多数の円盤
1870, 10, 12	イギリス	ウィリアム・D・デニス	天文学	気球より速く流星より遅く遊動する輝く球体
1871, 8, 29	フランス	トルーベル	天文学	空中を飛行する三角、円、多角形の物体
1882, 11, 17	イギリス	E. ウォルター・マンダー	天文学	超スピードで飛行する緑色の光を放つ円盤
1883, 8, 12	メキシコ	M・ボニラ	天文学	太陽の中心軸に向かって、光を放ち飛行する物体
1887, 8, 19	フランス	コード・ペヤン	天文学	日蝕時、太陽直径の10分の1の丸い物体
1890, 10, 27	南アフリカ	エディー・レイモン	天文学	すい星のような光を放つ物体
1893, 3, 7	フランス	R.F. センゼン	天文学	灼光を放って飛ぶ流線状の物体
1947, 6, 25	アメリカ	レオン・バウアー	歯科	満月の半分程の円盤型物体
1947, 6, 26	アメリカ	ジョー・デインジャー	医学	高速で移動する銀色の球型物体
1947, 6, 27	アメリカ	C.J. ゴーデン	電気工学	地上に接近する円盤型物体
1947, 6, 29	アメリカ	マクローリン	宇宙工学	曲芸飛行を演じる銀色の円盤
1948, 4, 6	アメリカ	ムーア	誘導爆弾	V2号に同伴して上昇する直径35mの円盤
1949, 4, 24	アメリカ	トンボー	気象学	飛行・停止・垂直上昇する楕円形物体
1949, 8, 20	アメリカ	ハル	天文学	緑色に輝く6〜8個の矩形
1950, 5, 20	アメリカ	ヘッス	天文学	泡にかこまれた金属的な円盤
1950, 5, 22	アメリカ	ロビンソン他	地質学	30数個の数珠を半月形に並べた光体群
1951, 8, 25	北アフリカ	ボシユ	気象学	白い花火の筒のような筋を残して降下する半円形
1953, 11, 5	デンマーク	E. グラハム他	交通	地平線を横切る回転する輝く2個の物体
1954, 6, 30	ニュージーランド	M.J. クラーク	天文学	楕円形で短い光跡を残す回転物体
1956, 7, 26	アメリカ	シャビエ	工学	卵型に配置された5個の白色光
1957, 11	アメリカ	C. フェア	言語学	90度方向をかえる巨大な円盤
1958, 8, 11	ソビエト	ザイツェフ	天文測地学	直角に方向を変える平らな円盤
1964, 7, 12	ソビエト	ツェハノビッチ	宇宙線	夜空を動き回り滞留したりする光体
1965, 9, 24	チリ	アビアル他	古生物	約50000m上空に滞留、ビームを地上に照射する物体
1978, 8, 28	モンゴル	マナンコフ他	土木	経緯儀で測定した高空へ遠ざかる物体
1980, 6, 14	ソビエト	ゾロトフ他	地球物理	尾部から輝くガスを噴射する満月のような球体



■ザカテカ天文台■
1883年8月12日、M・ボニラが望遠鏡で太陽を撮影していた時、輝く物体が太陽面を3〜4秒間で通過するのを観測。13日もこの情景を見た。太陽を背景にして見たこの物体は、小さな暗い円型をして光のような噴射物をもっていた。その中の1つは数秒

間停っていた。彼はこれをすかさず撮影したが、恐らくこれは空飛ぶ円盤の最初の写真であったろう。ボニラはメキシコ市の天文台に「早く観測するように」と電報を打った。その観測からの返事によると、観測はできたが、視差のため物体は太陽面から少しずれているということであった。

この事実から三角法で物体の高度を割り出すことができた。しかし、ボニラは「比較的地球に近い距離で、月よりずっと近距離にある」とのみ語った。

天文学者 トンボー教授の観察
1893年8月20日の夜、午後10時45分にニューメキシコにあるラスクリセスの自宅前に、妻と妻の母といた。彼は何気なく空を見たとき、天頂の近くに、6ないし8つの矩形のものが緑色の光に輝きながら南東25および30度の地平線の1点に向かって移動するのを見た。

それらは遠ざかるに

したが、進行方向に向かって次第に縮んでいった。6または8つの矩形の全体は、2つずつ相次いで並び、空中に約1度くらいの面積のくきりした形をえがきだした。1度くらいの面積

という、満月の2倍に相当する。

彼は「私が夜の空を眺めて過ごした何千時間のあいだに、これほど奇妙なものを見たことは1度もない」と語っている。

■天文学者トンボー教授の観察■
1949年8月20日の夜、午後10時45分にニューメキシコにあるラスクリセスの自宅前に、妻と妻の母といた。彼は何気なく空を見たとき、天頂の近くに、6ないし8つの矩形のものが緑色の光に輝きながら南東25および30度の地平線の1点に向かって移動するのを見た。

それらは遠ざかるに

したが、進行方向に向かって次第に縮んでいった。6または8つの矩形の全体は、2つずつ相次いで並び、空中に約1度くらいの面積のくきりした形をえがきだした。1度くらいの面積

という、満月の2倍に相当する。

彼は「私が夜の空を眺めて過ごした何千時間のあいだに、これほど奇妙なものを見たことは1度もない」と語っている。



■宇宙線観測所が撮影■

1968年5月17日、アンデス山中にあるチリ大学エル・インフェルニョ宇宙線観測所で午前1時35分に撮影されたもの。この物体は0等星から1等星の明るさで夜空を動き回り、あるいは滞留したりした。

米ソ宇宙飛行士によるU F O 目撃例

ウォストーク号						目撃された物体・現象	
打上げ年月日	観測年月日	宇宙飛行士	回数	飛行時間	備考		
2号	1961. 8. 6	1961. 8. 7	ナトフ	17	25時間18分	宇宙で1日間生活した。	飛行中、6個の丸い光体を撮影。
3号	1962. 8. 11	1962. 8. 15	ニコラエフ	64	94時間25分	ウォストーク4号と編隊飛行。	飛行中、しばしば宇宙船のそばを非常にゆっくりと飛び過ぎていく光る粒子を目撃。
マーキュリー衛星船							
名前	打上げ年月日	観測年月日	宇宙飛行士	回数	飛行時間	備考	目撃された物体・現象
フレンドシップ	1962. 2. 20	1962. 2. 20	グレン	3	4時間56分	アメリカ初の人間軌道飛行。	黄色がかかった緑色の粒子「宇宙ボタル」を観察。「グレン効果」ともいわれるその光は、宇宙船に向かってくるものもあった。
オーロラ7	1962. 5. 24	1962. 5. 24	カーペンター	3	4時間56分	着水地点が320キロ離れた。	白い雲片のように見える宇宙ボタル。1ミリ〜1センチ大と目測、カプセルに付着した氷の結晶だと考えた。
シゲマ7	1962. 10. 3	1962. 10. 3	シラー	6	9時間14分	同軌道飛行の近くに着水した。	インド洋上空で輝く大きな塊を目撃。
フェイス7	1963. 5. 15	1963. 5. 16	クーパー	22	34時間20分	マーキュリー計画完了。	オーストラリアのバース上空を通過中、衛星軌道と逆に飛ぶ、赤い尾を引く緑がかかった光体を目撃。ムチア追跡ステーションも観測。
ウォスホート号							
打上げ年月日	観測年月日	宇宙飛行士	回数	飛行時間	備考		目撃された物体・現象
1号	1964. 10. 12	1964. 10. 13	コプロフ、フエオク、チストフ、エゴロフ	16	24時間17分	史上初の3人乗り衛星船。宇宙船を着ないで飛んだ。	数回、衛星船に沿って動く、小さな発光体を目撃。
2号	1965. 3. 18	1965. 3. 19	ベリヤエフ、レオノフ	17	26時間2分	レオノフが史上初の宇宙遊泳をおこなった。	故障の起こる直前、正体不明の「衛星」を目撃
ジェミニ衛星船							
打上げ年月日	観測年月日	宇宙飛行士	回数	飛行時間	備考		目撃された物体・現象
4号	1965. 6. 3	1965. 6. 7	マクディビット、ホワイト	62	97時間56分	ホワイトが宇宙遊泳。	「腕のような突起のあるシリンドラー状の物体」を目撃し、16mmで撮影
5号	1965. 8. 21	1965. 8. 29	クーパー、コンラッド	120	190時間55分	約8日間の飛行で医学実験。	地上レーダーに衛星船近くに飛行体を捕捉したが、飛行士には見えず
7号	1965. 12. 4	1965. 12. 18	ボーマン、オルドリ	206	330時間35分	約14日間の宇宙飛行。ジェミニ6号と史上初のランデブー。	ボギー（正体不明飛行体）の極軌道通過を目撃。また、船首上に2つの光体を撮影。反響を呼ぶ。
10号	1966. 7. 18	1966. 7. 21	ヤング、ゴリンズ	43	70時間47分	ドッキング、ランデブー。宇宙遊泳に成功。ジェミニ8号から宇宙じん検知器を回収。	軌道上に明るい物体が出現。星ではなく、すぐ消えた。翌19日も再び明るい物体を目撃。
11号	1966. 9. 12	1966. 9. 15	コンラッド、ゴードン	44	71時間17分	ドッキング、宇宙遊泳、メリーゴーラウンド実験に成功。	9月13日、18日、ある飛しょう体(Wingman)を発見。それは並んで飛び、目没方向へ飛び去る
12号	1966. 11. 11	1966. 11. 15	ワベール、オルドリ	59	94時間35分	ドッキング、日食観測、宇宙遊泳に成功。	一列に並んだ4つの物体を目撃。廃物袋と説明されている。
アポロ宇宙船							
打上げ年月日	観測年月日	宇宙飛行士	飛行時間	備考			目撃された物体・現象
8号	1968. 12. 21	1968. 12. 27	ボーマン、ラベル、アンダース	146時間59分	史上初の有人月面帰還飛行。月を初回した。月までの最接近距離は112.6キロ。		月に向かう軌道上で、並んで伴走飛行する円盤形飛行物体を目撃
11号	1969. 7. 16	1969. 7. 24	アームストロング、コリンズ、オルドリ	195時間19分	初めての有人月着陸。着陸地点は「静かの海」の東緯23.49度、北緯0.67度。月面滞在は21時間36分20秒。月面活動は2回。2時間32分、持ち帰った月の石は22.6グラム。		7月19日午後6時頃、LM月着陸船「イーグル」に移ったオルドリ飛行士がカメラのテスト中、突如飛び込んできた物体を16mmフィルムに撮影。それは大小の球が連結した「雪ダルマ」の形を呈し、時折中央部より液体状のものを放射。アポロ宇宙船と類似した形態を示し、自らアポロと同じ宇宙船であることを示した。
12号	1969. 11. 14	1969. 11. 23	コンラッド、ゴードン、ビーン	244時間36分	2度目の有人月着陸。着陸地点は「あらしの大洋」の西経23度24分58秒、南緯3度2分10秒。月面滞在は21時間32分。月面活動は2回。2時間32分、持ち帰った月の石は32.76グラムとサーベイヤー3号のテレビカメラなどを持ち帰った。		発射直後、12号を追跡中のヨーロッパ全域の観測所は、宇宙船の軌道に明るく輝く2個の物体を発見。大望遠鏡を通して見ると、1個は宇宙船のあとを追いつ、もう1個は前方を先導するかのよう移動していた両物体とも急速に光を明滅させていた。また、24日地球帰還時、インド上空通過中、真下に赤色に輝く光体が発見。大騒ぎとなった。それは地球のほぼ真ん中に固定し、金星以上の明るさをもち、10分後消失
ソユーズ宇宙船							
打上げ年月日	観測年月日	宇宙飛行士	回数	飛行時間	備考		目撃された物体・現象
9号	1970. 6. 1	1970. 6. 19	ニコラエフ、ビバキヤノフ	288	424時間59分	史上初の有人夜間打上げ。最長飛行記録をたたえた。	8月14日、3個のオレンジに輝く謎の物体が出現。宇宙船と編隊を組むようにビタリとついてきたが、10分後垂直に離脱して飛び去った
11号	1971. 6. 6	1971. 6. 30	ドロボルスキー、ボルコフ、バツァエフ	384	570時間22分	軌道科学ステーション・サリュートとドッキングして、3飛行士はサリュートへ移乗した。最長飛行記録をたたえたが、帰還の途中、宇宙船の気密保持ができず、飛行士は死亡。	6月25日、サリュートステーションの周囲に赤く輝く4個の物体が、何か信号を発するかのように輝度を変化させるのが目撃された。「位置は331.14度。すぐそばのように見えるが、相当離れているようで奇妙だ」と飛行士は通報してきた。
宇宙ステーション							
名前	打上げ年月日	消滅年月日	宇宙飛行士	備考			目撃された物体・現象
スカイラプ1号(アメリカ)	1973. 5. 14		ヒーン、ルスマ、ギャリット	7月28日にアポロ宇宙船から移乗。その果敢な試みとして59日半間生活し9月25日に帰還。			ギブソン飛行士から管制センターへ「小さな赤い光体が発見。ボーグ飛行士、カー船長とともに観察しているが、その光体はスカイラプの軌道に沿ってゆっくり移動している」と報告。
			カー、ボーグ、ギブソン	11月16日にアポロ宇宙船でドッキングして帰還。84日間生活して、1974年2月8日に帰還。			

THE MAN WHO STARTED IT ALL

By MARY ANN REESE, UPI BOISE, IDAHO

Solid-citizen Kenneth Arnold was the first to report mysterious objects that "flew like a saucer." Today he believes UFO's are "alive rather than machines."

THE AGE of the flying saucer began for most Americans on June 24, 1947. That was the day that Kenneth Arnold saw nine of them. Describing the objects that evening to a newspaper reporter, Arnold said they "flew like a saucer could if you skipped it across the water."

That was the origin of the words that have stuck for 20 years—flying saucers.

Arnold's story held credence because he had absolutely no axe to grind and was a qualified observer. He was an experienced pilot of his private plane, and a representative of a fire-control equipment firm in Boise, Idaho.

His story perhaps can be best summed up in the actual words of the official account of the Air Force report on its investigation:

"On 24 June 1947 at 1400 (2 p.m.) Mr. Kenneth Arnold took off from the Chehalis, Washington, airport in his personal plane and headed for Yakima, Washington. Mr. Arnold's trip was delayed for an hour in search of a large marine transport (plane) that supposedly went down near or around the southwest side of Mt. Rainier at an altitude of approximately 9,500 feet, which is the approximate elevation of the high plateau from which Mt. Rainier rises. After a fruitless search, Arnold headed again for Yakima."

"Mr. Arnold reported that the air was so smooth that it was a real pleasure flying and, as most pilots do when the air is smooth and they are at a higher altitude, he trimmed out the aircraft and simply sat in his plane observing the sky and terrain."

"Mr. Arnold reported that there was a DC-4 to his left and rear at approximately 14,000 feet. The sky was reported to be as clear as crystal. He hadn't flown more than two or three minutes on his course when a bright flash reflected on his airplane. He couldn't find where the reflection came from, but to the left and north of Mt. Rainier he did observe a chain of nine peculiar looking objects flying from north to south at approximately 9,500 feet. They were approaching Mt. Rainier very rapidly, and he assumed that they were jet aircraft."

"Every few seconds two or three of the objects would dip or change course slightly, just enough for the sun to strike them at an angle and reflect brightly. The objects being quite far away, he was unable to make out their shape or formation."

"As they approached Mt. Rainier he observed their outline quite clearly. Mr. Arnold stated that he found it very peculiar that he couldn't find their tails but assumed they were some type of jet aircraft. The elevation of the objects was estimated to have varied approximately one thousand feet one way or another but remained very near the horizon which would indicate that they were near the same elevation as the witness."

"Mr. Arnold stated that the objects flew like geese, in a rather diagonal chain-like line as if they were linked together. They seemed to hold a definite direction but swerved in and out of the high mountain peaks. The witness estimated the distance between him and the objects to be approximately 25 miles."

"Using a Zeus fastener, or rowing tool, he estimated the size of the objects to be approximately two thirds that of a DC-4. He observed the UFO's passing a high snow-covered ridge and reported that as the first object was passing the south crest of this ridge, the last one was entering the northern crest of this ridge."

"Later measurement of a length of this particular ridge revealed it was approximately five miles, so it was estimated the chain of objects was five miles long. Mr. Arnold timed the objects between Mt. Rainier and Mt. Adams and determined they crossed this 47 miles in one minute and forty-two seconds. This is equivalent to 1656.71 miles per hour."

The Air Force lists Arnold's sighting as

one of its unexplained cases. Its official theory is that "the objects of this sighting were due to a mirage."

Whatever the objects were, Arnold's story got tremendous newspaper and radio publicity. And flying saucers have been with us ever since.

Arnold, now 51 years old, still lives in Boise, Idaho, and is president of his own fire equipment control company, Great Western. He entered politics in 1962 as a Republican candidate for lieutenant governor of Idaho in 1962, but was defeated. He made a second unsuccessful bid for public office in 1966 as a Republican candidate for congress.

He still is in constant demand as a speaker to re-tell his story which has brought him fame if not fortune. In an interview in Boise he had this to say:

"What I saw over the Cascade mountains that day, as impossible as it may seem, is fact."

"I never asked, wanted or expected any publicity for accidentally being in the right spot at the right time to observe that chain of nine mysterious objects. I reported something any

pilot would have reported."

"If, reasoning along patriotic lines alone, I had not reported my observations, I would have been rightfully considered disloyal to my country."

"My observations were not due to any particular sensitivity of eyesight, or to abnormal or supernatural ability. I am positive that any pilot at the same place at the same time would have observed what I saw. By no stretch of the imagination did I observe balloons, mock-ups, ice crystals or clouds and I certainly would not classify my observations in the categories of illusions, hallucinations, apparitions, temperature inversions, or mirages."

Arnold says that since that time he has sighted several other UFO's. He concludes:

"The impression I have held after observing these strange objects a second time was that they were something alive rather than machines—a living organism of some type that apparently has the ability to change its density similar to fish that are found in our oceans without losing their apparent identity."

Crack Air Force flyer's last words before crashing: "I'm closing in now to take a good look. The thing looks metallic and is tremendous in size."

By ELOISE FEOLA, UPI LOUISVILLE, KENTUCKY

CAPT. THOMAS MANTLELL, Jr., has been enshrouded as a sort of martyr by flying saucer believers. He was killed after he closed in on a UFO in an Air Force fighter plane over the frigid skies above Kentucky in January, 1918.

Mantlell, 25, was an expert pilot. In World War II, he was one of the first to bomb the Cherbourg peninsula in advance of the invasion forces on D-Day. He had won the Distinguished Flying Cross, awarded for a mission over the Netherlands in which enemy fire cut the rudder and elevator controls of his plane and set the tail sections ablaze. He completed the mission and got his crew and plane to safety.

Early in the afternoon of Jan. 7, 1918, Mantlell was in command of a group of P-51 fighters being ferried from Marietta AFB, Georgia, to Stanfield Field near Louisville, Ky.

Dozens of persons on the ground in the area of Madisonville, Ky., had been telephoning police to report seeing a circular object hovering overhead and giving off a brilliant red glow.

State police alerted Godman Field, an air

base at Fort Knox. Fifteen minutes later the UFO was spotted by the Godman Field tower crew who notified the base operations officer, the intelligence officer and, eventually, Col. Guy F. Hix, base commanding officer.

Hix contacted Mantlell by radio and asked his squadron to investigate. Flying with Mantlell were Lt. Robert Hendricks, Lt. Buford Hammond, and Lt. Albert Clements. A short time later, Mantlell reported he had spotted the UFO and that he and his plane were in pursuit.

Hendricks today is a lieutenant colonel with the Kentucky Air National Guard in charge of operations in Louisville.

"We were told there was an object up there," Hendricks recalls. "And we were told to go up and take a look. I never saw it. But the others apparently did. And Tom (Mantlell) stated plainly, I returned to the base because I didn't have any oxygen."

Hammond and Clements also gave up the chase but Mantlell went on. He reported to the tower that the object seemed to "rest," then pick up a burst of speed, always outdistancing his

plane.

After half an hour of pursuit, Mantlell's voice cut in again:

"It's chieftly ahead of me and moving at about half my speed. I'm closing in now to take a good look. The thing looks metallic and is tremendous in size."

That was at 3:15 p.m. It was the last transmission from Mantlell. Less than an hour later searchers found his crashed plane. His watch had stopped at 3:18 p.m. Parts of the wreckage were strewn over an area of more than half a mile.

Mantlell's death brought excited speculation. But some facts were quickly established. There were no bullet wounds. The plane had not burned and was not radioactive. The left wing had broken off.

In that year, the United States Navy was conducting a secret operation called Project Skyhook in which it sent up Skyhook balloons to collect information about the atmosphere high above the earth. These balloons expanded in size to 250 feet in length and 100 feet in diameter. They reached altitudes of more than 70,000 feet and could travel thousands of miles. Their existence very likely was unknown to Mantlell.

The Air Force says it believes that Mantlell saw a Skyhook balloon. In its report on the investigation of the incident, the Air Force concludes that Mantlell lost consciousness because of lack of oxygen at an altitude of between 25,000 and 30,000 feet. Air Force investigators believe the aircraft continued to climb for a time, then went into a steep dive during which it partially disintegrated. Mantlell never regained consciousness.

"The UFO was in no way directly (Air Force underlining) responsible for this accident," the report says. "However, it is probable that the excitement caused by the object was responsible for this experienced pilot conducting a high altitude flight without the necessary oxygen equipment."

The Air Force does not attempt to explain why Mantlell thought the object was "metallic" or how it could move at speeds much faster than his plane, then stop and start up swiftly again.

Other scientific observers have said the sheen of a Skyhook balloon could give off a metallic appearance and that a balloon, caught in the tremendous winds at high altitude, could play strange tricks on vision.

Mantlell's mother still lives in Louisville.

"He was a calm, bright young man," she says. "I don't know what happened."

MYSTERY OF THE LUBBOCK LIGHTS

By CHARLES RICHARDS, UPI LUBBOCK, TEXAS

On a hot, cloudless August night in 1951, three professors from Texas Tech were gazing at the sky in the backyard of geologist Dr. W. L. Robinson's home at Lubbock, Texas.

He and his guests, Prof. W. L. Ducker and Dr. A. G. Oberp, both teachers of engineering, were discussing and counting "shooting stars," which had been more numerous than usual in recent days.

About 9:20 p.m. their attention was caught by a group of 15 to 20 faint yellowish-white lights, passing overhead from north to south. An hour later, a second group appeared, moving in a semicircle formation. Shortly before midnight a third group passed overhead.

The professors' first estimates were that the lights were 50,000 feet high and traveling at a speed of 10,000 miles per hour, or five miles a second.

Robinson, curious as were his friends, telephoned the local newspaper, the Lubbock Evening Avalanche. He gave the editor an account of what he and his friends had seen, hoping it might produce more information from others who might have seen the phenomena.

The scientific qualifications of the three men lent authority to the sighting. Then the affair bounced into national publicity several

days later when a teenager took pictures of formations of triangular objects in the sky which were to become known nationally as the Lubbock Lights.

Carl H. Hart, Jr., 18, said he had been lying in bed next to an open window on Aug. 31, 1951, when shortly before midnight he observed a formation of brilliant lights moving rapidly across the sky. He grabbed his camera, a Kodak 35mm, and rushed out into the yard where he photographed two similar flights. The pictures were printed in the Evening Avalanche and then were distributed across the country by United Press.

The subsequent stir brought Air Force investigators to the scene. At first the case was listed as one of its prime unsolved sightings, but several years later the Air Force announced it had an answer: the Lubbock Lights were birds.

The professors, somewhat embarrassed at being identified with "seeing strange lights in the sky," had conducted experiments trying to reconstruct the sightings. They decided that what they had seen was nothing more than migrating flights of plover.

The town of Lubbock had installed new mercury vapor lights on a downtown street and

when the birds came into the cone of the light, their white, oily breasts became illuminated. One professor spotted a string of "lights" again with binoculars. This time he said he was certain they were birds because he could see their feet.

The professors said the birds were at an altitude of about 1,000 feet and were traveling at approximately 50 miles an hour.

That solved the sightings, at least to the satisfaction of the Air Force. But it did not explain the objects photographed by Hart. They were far brighter than could possibly have been the reflection of plovers.

The pictures remain in the category of unknowns in the Air Force files. The late Capt. Edward J. Ruppelt, who then headed the Air Force investigation of UFO's, said that the Lubbock Lights "were never proven to be a hoax but neither were they proven to be genuine."

Hart, now 33, a utility company employee in Amarillo, Texas, has contended steadfastly that he took a picture of "something" in the sky and that he perpetrated no hoax.

Whatever the explanation, Lubbock has become a favorite spot for UFO sightings ever since. A total of 39 more UFO's have been reported in the intervening years.

1951年8月31日、米国テキサス州ラボックの市民はキラボック・ライトと呼ばれる光体群の出現に騒いでいた。その夜テキサス工業大学学生カール・ハートは自宅庭に出てカメラを構え、出現した光体群の撮影に成功した。カメラ：コダック35、絞り3.5、シャッター10分の1

The day the saucers visited Washington, D.C.

Seen both on radar and by observers, the Air Force scrambles F-94 jet fighters to protect the nation's capital.

WASHINGTON was sweltering in one of its more oppressive summer heat waves. A blanket of warm, moist air from the Gulf of Mexico lay over the eastern United States and reached up to about 10,000 feet. On top of this layer there was a hot, dry air mass flowing in from the southwest. There was no cloud cover.

Atmospheric conditions, it was soon to be contended, were just right for mirages.

The time was July, 1952, the most sensational month in a year that still eclipses any other for the number of reported sightings of flying saucers.

It was 20 minutes before midnight on July 19 when eight UFO's danced into the capital area and appeared on the radarscope in the Civil Aeronautics Administration's Air Route Traffic Control Center (ARTC) at National Airport. This visitation set off a 10-day period of visual and radar sightings, worldwide headlines, confusion, and, in the end, an official debunking that restored calm even if it did not solve the mystery to everyone's satisfaction.

Inquiries poured in from everywhere, including the office of President Harry Truman.

The special significance of the Washington sightings was that they were among the few in which

there seemed to be both radar and eyeball sightings on the same targets.

There were sightings July 19-20, July 23, July 26-27, July 28 and July 29.

Numbers of targets picked up by radar ranged at various times from one to "many," appearing mainly but not entirely in the mid-night-to-dawn hours. Speeds were estimated at 100 to 130 miles an hour, sometimes slower, sometimes with sudden accelerations. One UFO was reported tracked at 7,000 miles an hour.

Both witnesses on the ground and military and civilian pilots reported visual sightings. An Air Force summary said these observers' descriptions were in general agreement that objects changed from orange to green to red. There appeared to be no set formations. Three objects were reported to have left trails.

Finally, as the pressures and publicity continued, the Air Force decided to act. The public was given some explanation from the organization entrusted with the air defense of the United States.

On July 29, Maj. Gen. John A. Samford, Air Force director of intelligence, met about 40 newsmen in the Pentagon and fielded questions about UFO's. There emerged two main points which quieted the nation's apprehension and the world's curiosity, at least for a while:



Brazilian Navy floating scientific laboratory provided one of the most famous photographic sequences of a UFO.

DURING ITS participation in the International Geophysical Year of 1957 to 1958, Brazil converted one of its Navy training ships, the Almirante Saldanha, into a floating scientific laboratory.

Early in 1958 the ship was on station on an assignment to observe and track weather balloons launched from Trinidad, a six-mile-square mountainous island 600 miles east of Brazil in the South Atlantic. The ship carried both military and civilian personnel.

Shortly after noon on February 21, a Brazilian Air Force officer aboard was reputed to have spotted the object and shouted, "Olha o disco!" (flying saucer).

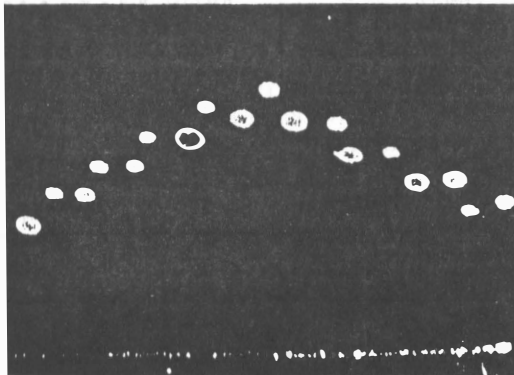
A civilian professional photographer, Almiro Barauna, happened to be on deck with his

camera at the time. He snapped off six exposures before the UFO disappeared from sight in less than half a minute.

Barauna developed the negatives in a darkroom aboard the ship. He said he was not able to make prints at the time because there was no photographic paper available.

After his return to Rio de Janeiro, he made prints and enlargements and turned them over to the Brazilian Navy. The then President of Brazil, Juscelino Kubitschek, was sufficiently impressed by the photographs to order the Navy to release the pictures to the press. It created an international furor. But the UFO has remained unexplained. The Brazilian Navy has never released the negatives and will no longer comment on the incident.

By LANCE BELLEVILLE, UPI RIO DE JANEIRO



Priest Takes Photos of UFO's

BUENOS AIRES, Dec. 5—A Roman Catholic priest has claimed here that he photographed three unidentified flying objects which could have come from another planet.

The Reverend Benito Reyna, a Jesuit and mathematics professor who directs a privately-owned observatory on the outskirts of Buenos Aires, said he photographed the objects passing across the surface of the moon. He added they "might possibly have come from Jupiter."

At a press conference here yesterday he produced copies of the photograph he took at the observatory. It showed three circular black spots of different sizes against the background of the moon's illuminated surface.

Father Reyna said he had previously sighted unidentified objects through the observatory's telescope. One sighting was in November last year when he was observing the passage of the United States Satellite Echo II.

A cigar-shaped object appeared in a path at right angles to the satellite's trajectory, and on approaching Echo II it veered away in a semicircle. The object appeared on the horizon later, followed the Echo's path and disappeared again, he said.

From Across the Seas

Aussie Savant Invents Flying Saucer

CANBERRA, Jan. 25—An Australian physicist claims he has invented a flying saucer which whirls through the air like a spinning plate.

He is Mr. R. M. Rabbidge, a research officer with the Commonwealth Scientific and Industrial Research Organization, a government agency.

Explaining his invention's flying principle, he said: "It works like a saucer spinning upside down with air drawn in through a hole at the top, spun to the sides over a stationary cabin in the middle, and forced out at the bottom."

A sugar cane farmer in North Queensland has reported finding two flying saucer "nests" in a swamp. One of the nests was a floating platform of roots and weeds ripped from the swamp bottom, he said.

Last week a farmer and cane grower in the same district 950 miles (1,530 kms) north of Brisbane, reported finding three 30-foot (10-meter) nests of dry reeds.

The reeds were all flattened in a clockwise direction and surrounded by healthy green scrub.

The farmer claimed he saw a blue-gray spaceship shoot upwards from the swamp and streak off into the sunlight.

Jets Chase UFO

FREIBURG, West Germany, Aug. 28—United States Air Force jets chased a huge, brilliant mystery object across the sky over Bavaria tonight—but whatever it was it got away before it could be identified.

Two F-102 jets were sent up from Ramstein Air Base after hundreds of telephone calls to astrological observatories and police by people who spotted the object—mostly described as dragon-shaped.

Bright UFO Scares Hundreds in Ruhr

BOCHUM, West Germany, Sept. 19—Hundreds of excited telephone-callers flooded Bochum Observatory switchboard tonight after a brightly-gleaming triangular object was sighted in the sky over West Germany's Ruhr industrial area.

The observatory said it had sighted and photographed what it thought to be a balloon probe of about 230 to 260 feet (70 to 80 meters) in height, shining in the northern sky as brightly as the star Venus, before it disappeared this evening.

From Across the Seas

3 Unidentified Objects Orbiting Earth

GREENBELT, Maryland, Nov. 1—The United States revealed today that there are three small objects orbiting the earth which do not appear to have been launched by any nation.

The satellite situation report, published every two weeks by the U.S. Space Agency's Goddard Spaceflight Center here, reported that there has been "debris discovered in orbit which has not been identified with any launching or country of origin."

"It is the first time since the report began in 1958 that unidentified objects have been reported in earth orbit."

The report is compiled by the space detection center of the North American Air Defense Command (NORAD) at Colorado Springs, Colorado. NORAD, a joint operation of the U.S. and Canadian Air Forces, is assigned the task of keeping track of every man-made object over North American skies and in space.

Informed sources said NORAD believes the objects are meteoroids from outer space caught in orbit. They said NORAD hesitated about announcing their presence for fear of causing talk of flying saucers.

Two of the unidentified objects are orbiting at an angle to the earth often used by the United States in launching both secret and classified satellites from California.

In addition to the unidentified objects, there were 1,112 known man-made satellites or pieces of satellites in earth orbit as of today.

The report also revealed that the Soviet Union launched a satellite on Sept. 17 which exploded into 52 pieces shortly after entering orbit.

The Soviet spacecraft was launched on a path and height that indicated it was a spy-in-the-sky satellite.

Recent Photos of UFO Are Real, Expert Says

By The Associated Press
DETROIT, Jan. 16—One of America's leading experts on unidentified flying objects said Monday that photographs of a "flying saucer" taken near here last week are apparently authentic.

Dr. J. Allen Hynek, chairman of the astronomy department at Northwestern University, also said the pictures were strikingly similar to other pictures of UFO's he has investigated.

Hynek, a scientific adviser to the Air Force's Project Blue Book, which coordinates all UFO reports for the military, commented in an interview with the Detroit News.

Hynek had examined negatives copied by the News from the original polaroid prints taken last week near the Detroit suburb of Mount Clemens.

"Analysis so far does not show any indication of an obvious hoax," Hynek said.

"The striking thing to me is the similarity these pictures have to other photos I have seen and also to verbal descriptions I've taken from ostensibly reliable people," he added.

The disc-shaped object fits into a definite UFO class, Hynek said.

"To the best of my recollection even the 'antenna' shown on the back has been previously reported, as has the tail structure," he said.

The pictures were taken around 2:30 p.m. last Monday by two youths, Grant Jaroslaw, 15, and his brother Dan, 17.

The youths said the object hovered over Lake St. Clair behind their home before speeding

off to the southeast. The Jaroslaw brothers said they snapped four photos of the UFO and one of Air Force helicopters, which reportedly was in the area at the same time, although its crew reported seeing nothing.

One of the four pictures has not been examined. The brothers said they couldn't find it at the time they permitted the others to be rephotographed. They said, however, it has since been found.

UFO Reports Sought

To the Editor: new information and knowledge including their flight characteristics and patterns of maneuverabilities and intelligent control.

Flying Saucer Boom, Again—all over the world, and numerous stories are prevailing, including hoax photographs of UFO's, under cover of the biggest boom, today.

According to International UFO Observer Corps (IUOC), headed by Dr. Hermann Oberth, "Father of Modern Space Travel," requests here any kind of UFO or something similar to UFO-sighting reports from anyone who witnessed UFO's all over the world.

IUOC expects now UFO-sighting reports containing all data of date, location, type, shape, color, heading, speed, altitude and conditions visible around UFO's with sketch or pictures for promoting cultural progress of mankind, not for military purposes.

IUOC says it is a world-wide civilian professional UFO investigating organization which includes world-famous scientists.

Send all the information—you can to: IUOC, c/o CBA International Center, Naka P.O. Box 12, Yokohama, Japan.

Authentic UFO-sighting reports from general public should be seriously presented through scientific analysis, which will bring forth

Yusuke J. Matsumura
Chief Investigator
IUOC

UFO's Are Real, Scientist Says

By The Associated Press
MOSCOW, Apr. 17—A Soviet scientist says there may really be such things as flying saucers from outer space.

Soviet radar screens have detected unidentified flying objects (UFO's) for 20 years, he says.

But Soviet scientists, like their colleagues in the West, are still puzzled over what such UFO's really are.

The scientist, identified only as F. Zigel, was writing in the current issue of the illustrated Soviet youth magazine "Cmema."

He offered five possible explanations for UFO's, including visitors from outer space. He called this alternative "extremely speculative."

The article took the lid off a subject rarely discussed in the press here.

In the 1950's the Soviet press scoffed at American reports of flying saucers sighted as just so much Cold War propaganda.

Reports of flying saucers sighted in the Soviet Union, in the Caucasuses and in Central Asia, were also ridiculed here.

Then for several years the Soviet press remained silent on the question. The Cmema article

showed the UFO issue is being reopened now, this time as an object of serious scientific study.

Zigel was identified as one of the editors of a book, "Inhabited Cosmos" being prepared for publication here. The book will discuss the possibility of living beings in space, and efforts to communicate with them.

In his magazine article, Zigel said the "Angel Echo," a UFO detected by radar, is constantly observed by scientists at the Central Aerological Observatory near Moscow.

Similar observations, he said, have been made in the United States, Australia, India and Japan. The phenomena of the UFO today should be considered global, he said.

He rejected the idea that birds, insects or plant seeds could cause such a reaction on radar screens.

Zigel said there could be no doubt that UFO's exist, "but the nature of these objects is still not understandable today."

Then he listed these five possible explanations:

1. NONSENSE OR INVENTION. He said there was some truth here, citing reports of people who claimed to have ridden in flying saucers and others who threw hats in the air and the photographed "saucers." But he rejected this alternative as killing the question rather than solving it.

2. AN OPTICAL ILLUSION, related to the distribution of light in the earth's atmosphere, such as a rainbow. The UFO, he said, is more complicated than that, however.

3. A NEW SECRET FLYING APPARATUS of one of the military powers on earth. "No one holds this view now," he said.

4. AN UNKNOWN PHENOMENON of nature, just as radioactivity was unknown until the end of the last century. In this context, ionized particles and charged particles of dust in the atmosphere were given as a possible explanation, but Zigel said, this does not explain the color or maneuverability of UFO's sighted or their appearance in good weather.

5. SPACESHIPS from an advanced civilization on another planet. Zigel said the speed of UFO's supports this theory.

Zigel called for "an all-sided thorough scientific exploration" to clear up the origin of UFO's once and for all.

Hundreds See UFO's Over S. Carolina

UPI
CHARLESTON, South Carolina, July 26—Hundreds of police along the east coast reported seeing stationary vertical lights in the sky tonight.

The Charleston Station of the U.S. Coast Guard, the Federal Aviation Agency and the Charleston Air Force Base said they had received over 250 phone calls in an hour-long stretch from 10 p.m. EDT (0200 GMT) about the "flying saucers."

The callers said they had seen a vertical light hovering in the sky. Most said when they turned their head, then looked again, the strange light was gone.

The Coast Guard said it had received radio reports of similar sightings over most of the eastern coast and as far west as the Louisiana gulf coast.

In Dunn, North Carolina, two local patrolmen on their normal rounds in a police cruiser said they saw a large orange ball of fire descend slowly from the sky and settle behind a row of trees tonight.

'Flying Pyramids' Buzz Michigan Areas

Worried Congressman Rushes to Washington

ANN ARBOR, Mich., Mar. 22—A Michigan Congressman has gone to Washington determined to find the truth about strange "flying pyramids" sighted in the night sky over this area.

Unlike so many vague reports of flying saucers, the mysterious pyramids have been vouched for by reliable witnesses including policemen.

More than 20 people saw on Sunday night over the nearby village of Dexter. It was the third appearance in a week.

Sheriff Douglas Harvey of Washtenaw County said today he had not at first believed the reports.

"But with so many trained police personnel and reliable citizens having seen them, I must believe something is in the Washtenaw skies," he added.

After discussing the sightings with the sheriff, Democratic Representative Weston Vivian left for Washington last night to question Defense Department and Air Force officials about the pyramids.

From a composite description pieced together from eyewitness accounts, police said the object seen on Sunday night was triangular in shape with a V-shaped antenna protruding from its underside.

Armed with Geiger counters, Sheriff Harvey and his men searched the Dexter area yesterday but found nothing.

Selfridge Air Force Base said there was no military activity in the area during Sunday's reports, and officers at nearby sightings.

Army Releases Photo of UFO

FT. MONMOUTH, New Jersey, May 12—Pictures of a "flying saucer" taken by a 13-year-old boy have been released by the army at Ft. Monmouth and the Monmouth County Civil Defense Department.

The pictures were taken by Robert J. Salvo of wall township last March when a rash of unidentified flying objects was reported in New Jersey.

The pictures show an elliptically shaped object with a knob sticking out of the middle of its top.

The youngster said he was walking with his dog when suddenly he heard a loud whistling, humming noise and thought it might be a plane.

UFO's Come From Mars, Savant Says

UPI
MOSCOW, Apr. 20—A Soviet astronomer reports that Russian scientists have spotted many flying saucers and theorizes they might have come from Mars.

Astronomer Felix Zigel wrote in the youth magazine Smena (Younger Generation) that the "phenomenon known as unidentified flying objects (UFO's)...does exist"—but that no current attempt to explain its nature is completely satisfactory.

But the hypothesis which Zigel comes closest to accepting is that "unidentified flying objects are vehicles arriving from other planets for research purposes."

While conceding that this "extreme point of view may seem to be absolutely improbable," Zigel says its backers "call our attention to the fact that these objects move with enormous speeds and accelerations so far impossible for earth-made flying machines and unbearable for earth organisms."

"Another argument in favor of this hypothesis," he says, is "that the number of observed UFO increases regularly when Mars approaches the earth."

He added: After repeated sightings by Americans; Russians, Australians, Indians and Japanese during the past 20 years, "no doubts remain of the existence of UFO's."

All-Night Int'l Watch for UFO's Set

UPI
LONDON, June 15—An all-night watch around the world will be held June 24 to spot unidentified flying objects and track their course, an organizer of the sky watch said today.

Keith Palmer of the International Sky Scout Association said more than 40,000 persons in 23 countries would gaze upward all night to see if anybody or anything might be gazing back.

Any unidentified object spotted, he said, will be reported to a central control room in London. Its reported course will be plotted and other "sky watchers" in its path will be alerted, Palmer said. Countries taking part include Australia, New Zealand, Japan and Ceylon, he said.

June 24 is the 20th anniversary of the first UFO sighting, over a mountain in America's Pacific northwest.

U Thant and UFO's

(Today's column is by Drew Pearson and his associate, Jack Anderson.)

Washington. In the very middle of the Near East crisis, UN Secretary General U Thant took time to do a very significant thing. He arranged to have one of the top advocates of the theory that flying saucers—UFOs—are from another planet, speak before the Outer Space Affairs Committee of the UN.

Interesting fact is that U Thant has confided to friends that he considers UFOs the most important problem facing the UN next to the war in Vietnam. U Thant made this statement before war in the Near East, so it's not known how he rates this last international incident compared with UFOs.

'Saucer' Seekers Sight Several

By The Associated Press
LONDON, June 26 — The saucer seekers stood and stared and saw what they wanted to see. Several sightings of unidentified flying objects (UFO) were reported by some of the 600 Britons who took part in the 24-hour International Sky Watch over the week end.

The mass game marked the 20th anniversary of the first UFO sighting in America, and was conducted by an estimated 40,000 people in 23 countries.

Britain's best included 15 reported appearances of a "cigar-shaped object" over the Epping Forest in London's suburbs.

A group at Manchester reported seeing two UFO's, and others were reported from Reading,

Yorkshire and Paddington Road Station in London.

Kenneth Rogers, General Secretary of the International Sky Scouts, which helped organize the event, discounted the last.

"It was reported by a woman, it could have been anything," he said.

Meanwhile, reports of flying saucers over Argentina and Paraguay poured in Monday from varying quarters.

All reports agreed UFO's overflew Paraguayan and Argentine territory Saturday night, around 10 p.m. The reported number of UFO's ranged from six to 16.

The control tower of Stroessner Airport at Asuncion, Paraguay, reported its radio and radiotelephone equipment was heavily jammed for several minutes while round, brightly-lit objects flew over in a north-south course at an altitude of around 2,500 feet (760 m.).

In Argentina, reports from the provinces of Santa Fe, Tucuman, Corrientes, Resistencia, Cordoba, and Misiones said the UFO's flew over shortly after they were sighted at Paraguay.

The newspaper La Nacion said a pilot at Camba Punta Airport, Corrientes, described the UFO's as "a perfect formation led by one big unit and followed by 15 smaller ones, all giving out a bright and changing luminosity."

6 UFO's Reported Sighted Over P.I.

By The Associated Press
MANILA, June 3—Six unidentified flying objects (UFO's) in the shape of glowing disks were sighted Thursday over a town in the Philippines, the Manila Times reported Friday.

The Times said some 50 persons saw the UFO's hovering over Agdagan Town in Quezon Province, southeast of Manila, at an altitude of 10,000 to 15,000 feet.

The newspaper quoted an eyewitness, university student Roberto Estacio, as saying the UFO's "started circling as if they were performing a show," remained visible for seven minutes, then vanished one by one.

The crowd had started shouting and the UFO's disappeared as though "they heard us," Estacio said, according to the report.

The sighting was made in clear weather at mid-afternoon, the Times said.

'Scientific Ufologists' Meeting in New York

By The Associated Press
NEW YORK, June 25—Many people can't get used to the idea of unidentified flying objects (UFO), but those who can't get away from them are meeting in New York to declare themselves "scientific ufologists" — and to plead for understanding.

Those conical and cigar-shaped mysterious things — and perhaps strange green men in them — may really exist, they concluded, and should be taken seriously by the U.S. Air Force or, if not, by the United Nations.

"There is proof, good photographic proof all over the world that these things exist," ufologist Gary Barker told his fellow-believers and over a thousand curious New Yorkers Saturday night.

"Witnesses you can't discount have proof," he claimed, adding that 46 per cent of Americans now "believe there is something to it" and about five per cent have seen UFO's.

Sightings, visitors were told, are not confined to the United States. The curious and the faithful were shown "authentic" slides and saw reports in scores of flying saucer publications displayed

at the convention. For example: —A "reckless driving saucer" in Carnarvon, Australia, collided with the car of Antonin Kulka. Damage to the car was slight. But the saucer vanished.

—A "flying saucer nest" have been reported in Queensland, Australia.

—A UFO landed near a Madrid, Spain, ranch and was seen by "reliable witnesses."

And many more from Brooksville, Florida, to Korea.

The aim of the convention — coinciding with the sighting of the first flying saucer by Kenneth Arnold near Mount Rainier, Washington, two decades ago — was to present "in an entertaining manner" the latest news and views of flying saucers.

—ASUNCION, Paraguay, June 25—Six unidentified objects which flew over Asuncion at great speed last night disrupted communications at the International Airport here for several minutes, the director of the airport's control tower said today.

—BUENOS AIRES, June 25—An unidentified flying object (UFO) glowing reddish was seen Saturday night in three Argentine provinces, flying in a northeastern course.

Of Flying Saucers 40,000 Sky Watchers Fete 20th Anniversary

London, June 23—Sky gazers around the world will settle down for an all-night session of neck craning tomorrow night to mark the 20th anniversary of the first flying saucer.

According to the London branch of an organization known as the International Sky Scouts, something like 40,000 people will be taking part in 23 countries.

Their objective is, of course, to observe and report on flying saucers cruising around the sky on the night which is midsummer in the Northern Hemisphere.

It was on June 24, 1947, that an American pilot called Kenneth Arnold sighted nine gleaming objects sailing through the sky as he flew over the Cascade Mountains in Washington state.

"They moved like saucers skim-

ming over the water," he told newsmen afterward — unwittingly coining the name that moved into history.

Since then countless thousands of sky watchers claim to have seen these skimming saucers all over the world.

Air Force authorities in various countries took reluctant note of the sightings and applied the term unidentified flying objects (UFO). Most authorities say the vast bulk of such sightings are attributable to natural phenomena.

In recent times, even Russian scientists, who once dismissed saucers as Western press imaginings, have begun to look into the matter.

Britain's foremost saucer enthusiast is Brinsley Le-Poer-Trench, 56-year-old half brother of an earl. Formerly editor of the magazine Flying Saucer Review, Mr. Le-Poer-Trench now styles himself international chairman of the International Sky Scouts.

He will be taking part in the all-night watch. "We are confident," he said, "of recording many sightings."

"Flying saucers are to be seen in the sky any night but most go unnoticed. A concerted watch like this will yield substantial results."

UFO's Over Mexico

MEXICO CITY, Aug. 8 — Scores of Mexicans reported seeing a fleet of flying saucers Monday.

The witnesses, which included a pilot and airport control tower dispatchers, said they zig-zagged at high speed across the country from the southwest and headed out over the Gulf of Mexico.

U.N. considers searching for UFOs
UNITED NATIONS — The United Nations (or really took up the question of unidentified flying objects Monday and "the world's interest in," declared Sir Eric N. Gurney, prime minister of the Caribbean island of Grenada.

He is co-chairman to get the United Nations to study UFO phenomena throughout the world. Gurney believes UFOs are space vehicles used by extraterrestrial beings and has secured numerous nations of studying information on sightings.

U.S. sources said Washington will oppose creation of a U.N. agency to study UFOs.

Thursday, Dec. 1, 1977

Surveyor's Double Bounce Is Blamed On Mysterious Rocks

By The Associated Press
PASADENA, Calif., July 9 — Mysteriously reflective rocks were blamed Sunday for Surveyor-3's nearly disastrous double bounce in landing on the moon last April 19.

Officials of Jet Propulsion Laboratory said the radar system of the spacecraft—which hopped into a crater at the end of its quarter million-mile flight—was confused by unexpectedly high reflectivity at a critical point in the touchdown.

First official explanation of the accident, originally attributed to possible electronic failure, came with release of plans for the flight of Surveyor-4, scheduled for launch Thursday from Cape Kennedy, Florida.

Other Mysterious Happenings Reported

By The Associated Press
ALAMOSA, Colo., Oct. 8—The mysterious death of Snippy the horse—whether at the hands of celestial invaders in a flying saucer or earthbound culprits—has summoned fourth tales of other strange happenings in Colorado.

A judge in Denver reported sighting orange-red, ring-shaped objects, flying faster than jets, about three hours after a Houston man telephoned a woman here that UFO's (unidentified flying objects) were heading from Texas toward Colorado.

An amateur painter in southwest Colorado said she has had one visit—and was promised another this month—by a strange-looking man who said he was "not of this universe" but wanted to buy her painting of a UFO. He said he would come back, since he didn't bring along any earth money for the first trip, she reported.

Reports of UFO sightings in

not uncommon. One woman said eight UFO's were sighted one evening last week. Other recent reports tell of a football-shaped object following a car and a cigar-shaped craft hovering over a field.

But until the death of Snippy, whose mutilated carcass was found in a remote area near here, all the reports indicated the objects—though weird—kept their distance.

Snippy's owners, Mr. and Mrs. Berle Lewis, said they believe a flying saucer was responsible. Every trace of flesh had been stripped from the animal's head and neck, and they said high radiation readings were recorded at the scene.

Officials of the U.S. Air Force—University of Colorado, apparently not wanting to kick a dead horse, didn't say what they thought, but they are aware of the situation. It was a year ago Saturday, incidentally when that project en-

Eerie, Pulsating UFO Moving at Incredible Speed Astonishes Veteran Airline Pilots, Traffic Controller

'Oh, my God — look at the speed of that thing!' — Braniff Airlines pilot.
'It's huge! I don't know what the hell it is!' — Eastern Airlines pilot.

Two veteran jet captains reacted in shock and disbelief as a flashing red ball — like nothing they'd ever seen before — shot past their planes with incredible swiftness.

The pilots' startled comments came in a crackling three-way conversation with an air traffic controller watching the encounter on radar in a control tower below — and all three men have agreed that the strange pulsating ball was a UFO.

As traffic controller Jim Stevens put it: "There's absolutely no doubt in my mind that this was a real unidentified flying object."

The fantastic incident — also witnessed by several other airline personnel — took place as the two pilots were preparing to land at San Antonio International Airport in Texas.

The sighting occurred last October 23, but UFO experts didn't learn of it until Robert Gribble, head of Phenomena Research in Seattle, Wash., published a preliminary report in the latest newsletter of his organization.

Traffic controller Stevens said he first became aware of the UFO's presence about 2:30 a.m. when the San Antonio Dept. of Public Safety phoned to say the department had been flooded with calls about an unusual object in the sky near the airport.

"I scanned the sky, but couldn't see a thing," Stevens said. "Then, just as I was shrugging my shoulders and dismissing the reports as figments of people's imagination, there it was — an eerie, brilliant ball of light."

"A shiver went up my spine as it dawned on me that I was probably looking at an object that had come from outer space. I was glued to my seat. I just couldn't move."

"It would light up and then switch off at irregular intervals as it moved slowly along. Suddenly, it stopped a mile west of the airport at about 1,000 feet. Then it began to climb gradually to the northwest."

"That movement completely ruled out the possibility of the object being a balloon because the wind that night was blowing eight or nine knots from the northwest. No balloon will travel against the prevailing wind."

"I glanced at our radar screen — it had suddenly begun picking up the object. Four times, at four-second intervals, the radar recorded a blip exactly in the position of the object."

"About this time, two 727 jets came into the area,



SECURITY GUARD Chester Blanchard. "I was riveted to the ground by shock. I saw it myself . . ."

one Eastern and the other Braniff International," said Stevens. "I radioed to the Eastern pilot and he answered, 'I see it. It's huge. I don't know what the hell it is.' Then the Braniff pilot came on the radio and said he was going to take a look at it."

Piloting the Eastern jet was Jerry Noyes, 42, of Jacksonville, Fla., an 18-year veteran airline captain. "It was a clear night," Noyes told The ENQUIRER. "My crew and I first spotted the object at 3,500 feet, approximately 1,500 feet off our left wing. It was a bright red ball of light, flashing on and off erratically."

"As we passed the object, it suddenly shot up 2,000 feet at an incredible speed. We were amazed. Its vertical speed was much, much faster than that of any airplane."

"By this time the object was between our airplane and the Braniff jet, which was at a higher altitude. The object then dove vertically to about 3,000 feet below us — at the same incredible speed. Then we lost track of it as we prepared to land."

"I had been in contact with the Braniff pilot — I don't know his name — and he told me over the radio, 'Oh, my God — look at the speed of that thing!' As far as I am concerned the object was a UFO. And I know my



CAPTAIN JERRY NOYES
"We were amazed . . . It was much faster than any airplane."

crew felt the same way," said Noyes. Said his co-pilot, C.A. Nickerson, 35, of Atlanta: "It was the speed that amazed us, the incredible vertical speed. I'm still baffled."

Chester Blanchard, the sergeant in charge of airport security that night, said: "I saw it myself. It came down toward earth and hovered at about 2,000 feet, then shot off toward the northwest. I was riveted to the ground by shock."

San Antonio police officer Wayne Davis, 44, talked with both Noyes and the Braniff pilot — who refused to give Davis his name — after the incident.

"You expect pilots to know most things that fly around the sky at night, but they had no idea about this one," said Davis. "They both swore it was a UFO."

Air controller Stevens related for The ENQUIRER what happened after the busy pilots lost sight of the UFO: "The red light started flashing on and off very quickly. It looked as if it were going to crash into the ground. But suddenly, the light stopped. Then . . . nothing. The area was in darkness again. The object had vanished. The whole thing is totally baffling. I'd never seen a UFO before, but I'm convinced I've seen one now."

— ROBERT G. SMITH

Clocked at 10,000 MPH

Texas Group Woos UFOs

AUSTIN, Tex. (UPI) — The UFOs are back!

A colorful circle of lights in the remote Texas hill country is said to be attracting alien aircraft that travel at 10,000 miles an hour, and a research group studying UFOs has released a photograph purporting to prove it.

Members of "Project Starlight International" say the photograph was taken the night of Oct. 2, and shows a brilliantly lighted Unidentified Flying Object traveling more than 10,000 m.p.h. about 100 miles above Earth.

They report that the craft made two sharp turns within 2 to 4 seconds — maneuvers that would tear a manmade object to shreds.

Ray Stanford, director of the group, said the UFO was photographed on ordinary

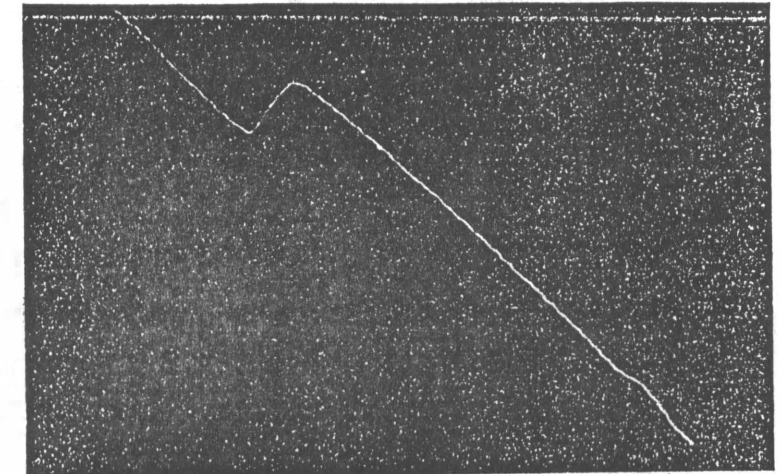
black-and-white film through a 300 millimeter lens with the shutter left open for several seconds.

The picture shows a trail of light along a wavy line moving east to west with a sharp left and a sharp right turn in the center. Stanford said the UFO shut down its lights before the camera's shutter closed.

"This is a typical maneuver for UFOs," Stanford said. "We believe UFOs have some control over gravity and inertia."

Stanford's group constructed a circle of about 100 lights in the seven colors of the spectrum during a number of reported UFO sightings in the fall of 1973.

In the center of the display west of Austin is a spotlight which blinks "dot-dot-dot-dash," the numerical equivalent



An Austin, Texas, group studying unidentified flying objects released this photo it said was taken Oct. 2 of a brilliantly lighted UFO streaking

in excess of 10,000 miles an hour. Project Starlight International said the object made two 30-degree right turns as shown on the line of light.

lent of the Greek letter pi, which, they believe some intelligent creature might identify.

He said on Oct. 22, 1973, his crew of observers spotted two lights in the sky where stars were not supposed to be.

"They were oval shaped white objects. The four of us aimed our camera lenses at them and they turned down their lights just like a rheostat. Then they disappeared."

"Within four minutes two Phantom jets from Bergstrom Air Force Base came zooming in closer to our site than they ever had come before. They

were followed by a prop plane. It's quite possible they sighted the same things we did."

Stanford says he has seen dozens of UFOs since he began his research project in Arizona in 1964. He said most sightings can be explained. It's the others that interest him.

"I cannot rest at ease until this thing is solved," he said. "We are not interested in collecting UFO stuff, but scientific data and we are attempting to see if a UFO will respond to intelligent signals." The Air Force, which is the U.S. government's official investigatory agency for UFO's,

doesn't take data from civilians, Stanford said, so his information is shared with other UFO research groups in California, Arizona, Illinois and Maryland.

He said he believes creatures that pilot UFO's aren't necessarily super-intelligent and haven't developed means of flight incomprehensible to man. "They don't have to be any more intelligent than we are, just about 10 years ahead of us. This kind of work is going on in highly secret projects today, and we'll probably have something like this in 10 to 15 years," he said.

UFOs Were Sighted at U.S. A-Missile Sites

By Ward Sinclair
and Art Harris

WASHINGTON, Jan. 19 (WP) — During two weeks in 1975, a string of the nation's supersensitive nuclear missile launch sites and bomber bases were visited by unidentified, low-flying and elusive objects, according to Defense Department reports.

The sightings, made visually and on radar by air and ground crews and sabotage-alert forces, occurred at installations in Montana, Michigan and Maine, and led to extensive but unsuccessful Air Force attempts to track and detain the objects.

Air Force and Defense Department records variously describe the objects as helicopters, aircraft, unknown entities and brightly lit, fast-moving vehicles that hovered over nuclear weapons storage areas and evaded all pursuit efforts.

In several instances, after base security had been penetrated, the Air Force sent fighter planes and Airborne Command planes to carry on the unsuccessful pursuit. The records do not indicate if the fighters fired on the intruders.

The documents do not give any indication that the airspace incursions provoked much more than local command concern.

1975 Directive

But a Nov. 11, 1975, directive from the office of the secretary of the Air Force instructed public information staffers to avoid linking the scattered sightings unless specifically asked.

The Defense Department's position, cited in that memo and reiterated yesterday by a departmental spokesman, is that formal investigation of unidentified flying objects (UFOs) ended in 1969 and that there were no plans for renewed Air Force investigation.

Another Air Force intelligence report indicated extensive interest in a 1976 incident over Iran, when two Iranian Air Force F-4 Phantom fighter planes were scrambled to encounter a brightly lit object in the skies near Tehran.

The object was tracked by Iranian ground radar, seen independently by the crew of a commercial airliner and pursued by the F-4s, which, according to the report, experienced a breakdown of their electronic communications devices when they neared the object.

The report, compiled by U.S. officials, said that the electronic weapons system of one of the planes went dead when its pilot prepared to fire an AIM-9 missile at a smaller object that appeared to roar out from the larger vehicle.

Colored, Flashing Lights

The planes' electronic equipment reportedly became operative after they veered away from the smaller object, which had returned to the larger light, the report said. Iranians described the larger object, with colored, fast-flashing lights, as the size of a Boeing 707 jetliner.

The information on the 1975 and 1976 sightings — records from the Air Force and the North American Air Defense Command (NORAD) — was turned over to Ground Saurer Watch, a Phoenix-based organization that monitors UFO reports.

The Phoenix organization obtained the information through a Freedom of Information request to the Air Force, one of a number of requests made to government agencies involved in UFO investigations.

A similar request to the CIA, made by the organization and the Washington Post, resulted in the CIA turning over almost 900 pages of documents related to its monitoring of UFO reports since the 1950s.

The CIA was directed by a U.S. District Court judge last year to turn over to Ground Saurer Watch UFO data unrelated to national security.

The agency, according to Ground Saurer Watch officials and attorneys, apparently has withheld some UFO records, and Ground Saurer Watch says it intends to seek further court action in the case.

The CIA documents are largely a collection of worldwide intelligence reports, newspaper articles and agency memoranda relating to UFO sightings and theories of extraterrestrial life.

The CIA's position, reiterated yesterday by a spokesman, is that it (Continued on Page 3, Col. 1)

'UFOonauts' and Flying Saucers Top Debate in House of Lords

LONDON, Jan. 19 (AP) — With the House of Commons in an uproar yesterday over a crippling strike, the House of Lords took a longer view of things and held a debate on unidentified flying objects.

"It is time that the government informed our people what it knows about UFOs," said Lord Clancarty, who is chairman of Contact, an international UFO movement. "Just suppose the UFOonauts decided to make mass landings tomorrow in this country. There could well be panic here because our people have not been prepared." Parliament, he said, should keep a continuous watch on the situation. He suggested that the House of Lords set up a study group.

Conservative Lord Trefgarne rejected Lord Clancarty's suggestion for an governmental study of UFOs because it would add to public spending. He said the only evidence he has seen are hazy photographs which could be fake or genuine.

The Earl of Kimberley, a Liberal spokesman, retorted that the favorite science fiction theme of war in space is now known to be nearly a fact. He said that the three American balloonists who flew the Atlantic last year had been warned by the U.S. government not to discuss a UFO that allegedly followed them for several hours.

The only Labor peer to take part, Lord Davies of Leek, noted that "some lords believe in angels without having seen one, and we are asking them to believe in the phenomenon of flying saucers that have been seen by hundreds of thousands of people."

Speaking for the government, Lord Strabolgi said, "There is nothing to convince the government that there has ever been a single visit by an alien spacecraft, let alone the numbers of visits Lord Clancarty claims are increasing all the time."

参考: 1979年1月21日 毎日新聞朝刊より UFO 米当局 こっそり調査

——UFOC——ベ——ジ——の調査——「UFOC」の調査——

UFOC (本誌記者) は大々的の調査——「UFOC」の調査——

を呼んでいる。同文は米国の有名なUFO研究者、ジョージ・ソラー・ウォッチ (G.S.W.) が中央情報局 (CIA) や空軍に提出した情報に基づいて、ワシントン連邦地裁に起こして入手したもので、資料は100ページ以上になる。(ニューヨーク、山崎新聞社)

G.S.W.が最も興味ある事例として文書から取り上げているのは、米軍とイランの空軍がそれぞれ接点された、

つの事件。米軍の基地は75年モンタナ、メイン、ミシガン州のミサイル発射基地、核格納庫、核爆弾貯蔵施設など、一連の軍事施設が二週間にわたって、米軍の飛行機、ミサイルの発射、空軍が全力を挙げて追跡したが、何も捕まえることができなかったという。

イランのケースは、75年テヘラン近くの上空で二機のイラン空軍F4ファントムが、巨大な物体に遭遇。地上のレーダーや目撃証言もそれを確認した。やがてこのUFOからも一つ一つの小型の物体が飛び出し、機銃の火を浴びながら直進していった。AIM-9ミサイルを発射しようとしたところ、発射装置も油圧装置も利かなくな

ったという。

G.S.W. (本部アリゾナ) のスポンサーは「CIA」やホワイトハウスが世界中の米在外館に情報をひそかに収集させていることがわかった。今後も全資料を公開するよう要求し続ける」とい。UFOの現象が軍事施設や科学施設に集中していることは、UFOが何らかの監視施設を持っていると信ずる」と述べ

ている。

INTERNATIONAL HERALD TRIBUNE, SATURDAY-SUNDAY, JANUARY 20-21, 1979

UFOs Reportedly Sighted Near U.S. A-Missile Sites

(Continued from Page 1)

has had no involvement with UFOs since 1953, when a special study panel concluded that they presented no threat to national security.

While memos from as recently as 1977 are included in the data, the CIA spokesman said that the agency continues to be a passive recipient of UFO data, even though none of the material is analyzed.

Todd Zechel, a Ground Saurer Watch investigator and director of another organization, Citizens Against UFO Secrecy, said, "We've had to pry loose every item of information we have. I am inclined to believe the government doesn't know any more about UFOs than we do, but if UFOs are what they say — nothing — why don't they open their files totally?"

Mr. Zechel and William Spaulding, a Phoenix engineer and director of Ground Saurer Watch, said that the Defense Department, the Air Force and the National Security Agency have refused to turn over certain other information that would shed more light on military encounters with unidentified flying objects.

Pentagon Leak

Mr. Zechel, a former National Security Agency employee, said that the 1975 incidents around the

missile and bomber facilities would not have been revealed had it not been for a leak from a Pentagon source.

That tip, he said, led to the information request that resulted in the reports on the flap, as a rash of UFO incidents are called, in the last days of October and the first two weeks of November, 1975.

The Air Force and NORAD data provided detailed accounts of sightings of unexplained objects from Loring Air Force Base in Maine, Wurtsmith AFB in Michigan and Malmstrom AFB in Montana, all within a two-week period.

At those and other missile-launching sites in the northern tier of states, military personnel reported that the objects hovered over nuclear weapons storage areas, in some cases as low as 10 feet from the ground, and missile silos, before they departed.

The reports referred to the objects in some cases as "helicopters," although no witness made a positive identification. The sounds that the objects emitted were described as being similar to helicopter noise.

Like a Helicopter

In one such instance, on Nov. 7, 1975, at Malmstrom AFB, Capt.

Thomas O'Brien, who had just left duty as a missile launch officer, said an aircraft resembling a helicopter approached the silo area.

He and his deputy heard what they thought was a helicopter rotor over the building where they were resting. The deputy looked out the window and saw "the silhouette of a large aircraft hovering about 10 to 15 feet above the ground" and about 25 feet from the launch-area fence.

He reportedly saw two red and white lights on the front, a white light on the bottom and another on the rear. Darkness prevented him from seeing markings or personnel on the object. The object left after a minute or so of hovering, the report said.

Military crews at two other nearby launch facilities reported seeing moving lights in the air on the same evening but said they heard no sounds.

NORAD commanders during that period reported another sighting at another unidentified launch facility in which witnesses said they saw the object "issuing a black object from it, tubular in shape."

Standard radar surveillance provided no clues as to the presence of

anything other than known craft in the area.

'Unidentified Helicopter'

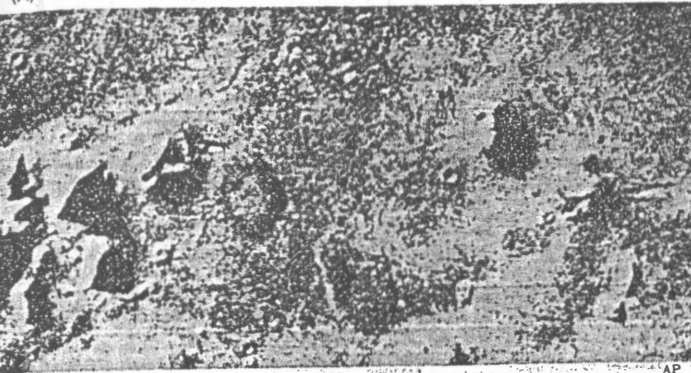
More details appeared in reports of sightings on Oct. 30 and 31 over Wurtsmith AFB, where an "unidentified helicopter" flew around the base and hovered over weapons-storage bunkers.

Investigators subsequently determined that no military, commercial or private helicopters known to be based in the area could have been around Wurtsmith at those times. The crew of a KC-135 tanker plane, already airborne, spotted the object near the base and attempted to give chase but could not keep up with it.

Several sightings occurred at the Maine air base as well, where objects hovered over the weapons area. Radar and visual sightings were made, and another KC-135 was sent aloft to oversee pursuit efforts by a helicopter borrowed from the Maine National Guard — Loring had none of its own.

The object eventually disappeared toward the Canadian border, where Canadian Air Force jets were on alert. There was no indication whether the Canadian planes spotted the object.

(A) 第3号衛星撮影 Monday, February 4, 1985 The Japan Times



A 2-km-long monkey's face (slightly right of center) stares silently at the stars from its perch on Mars in this view sent back in 1976 by the Viking spacecraft. To the 30 scientists of the Mars Investigation Group, the face and what appear to be four huge pyramids situated a parallel with Britain's Stonehenge, but to NASA officials it parallels the "man on the moon."

Thursday, May 31, 1984 The Japan Times

Special Commission Established

Soviets Said Investigating UFOs

MOSCOW (Reuter-Kyodo) — The Soviet Union has set up a commission to investigate unidentified flying objects (UFOs) following an incident last year involving a "flying cigar" near Gorky, a Moscow newspaper reported Tuesday.

The trade union daily Trud said the commission had been established in February to vet all sightings of moving objects or flashing lights in the sky and was headed by Pavel Popovich, a former cosmonaut.

Popovich told the paper there were hundreds of reports each

year in the Soviet Union and that most could be explained away. But scientists had been disturbed by the events which defied rational analysis in Gorky, 400 km east of here.

In the evening of March 27, 1983, air traffic controllers at Gorky Airport had located a craft flying toward them which did not respond to radio signals, he said.

The controllers saw the object with their own eyes as it approached the airfield and described it as a steel-gray "cigar" about the size of an

airliner but without wings or a tail fin.

It was flying at an altitude of about 1,000 meters and at a speed of 180 to 200 k.p.h.

Popovich said the craft was visible on radar screens for about 40 minutes and then vanished after traveling about 40 km north of the city.

The sighting was being taken seriously because the witnesses were trained aircraft experts who could be relied on to give an accurate and dispassionate account of what they saw, he said.

He reported that the new organization, called the Commission on Abnormal Atmospheric Phenomena, had found a much more straightforward explanation for a phenomenon witnessed by hundreds of people six months ago.

On Dec. 2 a bright sphere followed by several smaller lights swept across Byelorussia and central Russia. Trud reported some who had seen it were terrified.

Exhaustive analysis revealed that the object was a satellite burning up after re-entering the Earth's atmosphere, Popovich told the daily.

14 — THE TASMANIAN MAIL, Tuesday, October 23, 1984

ALL QUIET ON THE UFO FRONT

1984 will not go down as a busy year for the Tasmanian Unidentified Flying Object Investigation Centre.

Nonetheless, there have been several good sightings, the best report being the Greenleaf sighting of July (see page 14).

The thing about UFOs

By REG WATSON

is that you never know when it is all going to start again. Perhaps there will be a repeat of great UFO activity as during the mid 70's.

Scarf at them if you will but one thing is for certain. The phenomenon will not go away and Tasmania is not left out of the picture.

According to Investigations Officer, Keith Roberts, recorded Tasmanian sightings go back to 1931.

In that year a "mystery plane" was seen in the sky over the Western Tiers. The "plane" appeared to nose dive to

the ground. A search by residents failed to locate any wreck and authorities confirmed that no plane was in the area at the time.

Since then, of course, there has been a worldwide surge of interest in UFOs or "flying saucers" — a term first applied in 1947, when an American, Mr. Arnold, saw something like a

"saucer skipping on water".

One of the most startling reports was the one from the Rev. Lionel Browning in 1960. It was while he was pastoring at Gressy that he witnessed the intriguing sight of a cigar shaped mother ship and four or five small flying ships, shaped like saucers.

The Rev. Browning's report is now known

throughout the world. He testifies that it actually shook their houses.

Could it have been the sound barrier broken? Lionel now lives in retirement in the South and states that "probably the ships were either Russian or American — or something".

Well, just what does the UFO investigation Centre do — and what explanations do they of-

bang or explosion. Witnesses said that it actually shook their houses.

Could it have been the sound barrier broken? Lionel now lives in retirement in the South and states that "probably the ships were either Russian or American — or something".

Well, just what does the UFO investigation Centre do — and what explanations do they of-

bang or explosion. Witnesses said that it actually shook their houses.

Could it have been the sound barrier broken? Lionel now lives in retirement in the South and states that "probably the ships were either Russian or American — or something".

Well, just what does the UFO investigation Centre do — and what explanations do they of-

bang or explosion. Witnesses said that it actually shook their houses.

Could it have been the sound barrier broken? Lionel now lives in retirement in the South and states that "probably the ships were either Russian or American — or something".

Well, just what does the UFO investigation Centre do — and what explanations do they of-

bang or explosion. Witnesses said that it actually shook their houses.

Could it have been the sound barrier broken? Lionel now lives in retirement in the South and states that "probably the ships were either Russian or American — or something".

Well, just what does the UFO investigation Centre do — and what explanations do they of-

bang or explosion. Witnesses said that it actually shook their houses.

Could it have been the sound barrier broken? Lionel now lives in retirement in the South and states that "probably the ships were either Russian or American — or something".

Well, just what does the UFO investigation Centre do — and what explanations do they of-

bang or explosion. Witnesses said that it actually shook their houses.

Could it have been the sound barrier broken? Lionel now lives in retirement in the South and states that "probably the ships were either Russian or American — or something".

Well, just what does the UFO investigation Centre do — and what explanations do they of-

bang or explosion. Witnesses said that it actually shook their houses.

Could it have been the sound barrier broken? Lionel now lives in retirement in the South and states that "probably the ships were either Russian or American — or something".

Well, just what does the UFO investigation Centre do — and what explanations do they of-

bang or explosion. Witnesses said that it actually shook their houses.

Could it have been the sound barrier broken? Lionel now lives in retirement in the South and states that "probably the ships were either Russian or American — or something".

Well, just what does the UFO investigation Centre do — and what explanations do they of-

bang or explosion. Witnesses said that it actually shook their houses.

Could it have been the sound barrier broken? Lionel now lives in retirement in the South and states that "probably the ships were either Russian or American — or something".

Well, just what does the UFO investigation Centre do — and what explanations do they of-

bang or explosion. Witnesses said that it actually shook their houses.

Could it have been the sound barrier broken? Lionel now lives in retirement in the South and states that "probably the ships were either Russian or American — or something".

Well, just what does the UFO investigation Centre do — and what explanations do they of-

bang or explosion. Witnesses said that it actually shook their houses.

Could it have been the sound barrier broken? Lionel now lives in retirement in the South and states that "probably the ships were either Russian or American — or something".

Well, just what does the UFO investigation Centre do — and what explanations do they of-

bang or explosion. Witnesses said that it actually shook their houses.

Could it have been the sound barrier broken? Lionel now lives in retirement in the South and states that "probably the ships were either Russian or American — or something".

Well, just what does the UFO investigation Centre do — and what explanations do they of-

bang or explosion. Witnesses said that it actually shook their houses.

Could it have been the sound barrier broken? Lionel now lives in retirement in the South and states that "probably the ships were either Russian or American — or something".

Well, just what does the UFO investigation Centre do — and what explanations do they of-

bang or explosion. Witnesses said that it actually shook their houses.

Could it have been the sound barrier broken? Lionel now lives in retirement in the South and states that "probably the ships were either Russian or American — or something".

Well, just what does the UFO investigation Centre do — and what explanations do they of-

bang or explosion. Witnesses said that it actually shook their houses.

Could it have been the sound barrier broken? Lionel now lives in retirement in the South and states that "probably the ships were either Russian or American — or something".

Well, just what does the UFO investigation Centre do — and what explanations do they of-

bang or explosion. Witnesses said that it actually shook their houses.

Could it have been the sound barrier broken? Lionel now lives in retirement in the South and states that "probably the ships were either Russian or American — or something".

Well, just what does the UFO investigation Centre do — and what explanations do they of-

bang or explosion. Witnesses said that it actually shook their houses.

Could it have been the sound barrier broken? Lionel now lives in retirement in the South and states that "probably the ships were either Russian or American — or something".

Well, just what does the UFO investigation Centre do — and what explanations do they of-

bang or explosion. Witnesses said that it actually shook their houses.

Could it have been the sound barrier broken? Lionel now lives in retirement in the South and states that "probably the ships were either Russian or American — or something".

Well, just what does the UFO investigation Centre do — and what explanations do they of-

bang or explosion. Witnesses said that it actually shook their houses.

Could it have been the sound barrier broken? Lionel now lives in retirement in the South and states that "probably the ships were either Russian or American — or something".

Well, just what does the UFO investigation Centre do — and what explanations do they of-

bang or explosion. Witnesses said that it actually shook their houses.

Could it have been the sound barrier broken? Lionel now lives in retirement in the South and states that "probably the ships were either Russian or American — or something".

Well, just what does the UFO investigation Centre do — and what explanations do they of-

bang or explosion. Witnesses said that it actually shook their houses.

Could it have been the sound barrier broken? Lionel now lives in retirement in the South and states that "probably the ships were either Russian or American — or something".

Well, just what does the UFO investigation Centre do — and what explanations do they of-

bang or explosion. Witnesses said that it actually shook their houses.

Could it have been the sound barrier broken? Lionel now lives in retirement in the South and states that "probably the ships were either Russian or American — or something".

Well, just what does the UFO investigation Centre do — and what explanations do they of-

bang or explosion. Witnesses said that it actually shook their houses.

Could it have been the sound barrier broken? Lionel now lives in retirement in the South and states that "probably the ships were either Russian or American — or something".

Well, just what does the UFO investigation Centre do — and what explanations do they of-

bang or explosion. Witnesses said that it actually shook their houses.

Could it have been the sound barrier broken? Lionel now lives in retirement in the South and states that "probably the ships were either Russian or American — or something".

Well, just what does the UFO investigation Centre do — and what explanations do they of-

bang or explosion. Witnesses said that it actually shook their houses.

Could it have been the sound barrier broken? Lionel now lives in retirement in the South and states that "probably the ships were either Russian or American — or something".

Well, just what does the UFO investigation Centre do — and what explanations do they of-

bang or explosion. Witnesses said that it actually shook their houses.

Could it have been the sound barrier broken? Lionel now lives in retirement in the South and states that "probably the ships were either Russian or American — or something".

Well, just what does the UFO investigation Centre do — and what explanations do they of-

bang or explosion. Witnesses said that it actually shook their houses.

Could it have been the sound barrier broken? Lionel now lives in retirement in the South and states that "probably the ships were either Russian or American — or something".

Well, just what does the UFO investigation Centre do — and what explanations do they of-

bang or explosion. Witnesses said that it actually shook their houses.

Could it have been the sound barrier broken? Lionel now lives in retirement in the South and states that "probably the ships were either Russian or American — or something".

Well, just what does the UFO investigation Centre do — and what explanations do they of-

bang or explosion. Witnesses said that it actually shook their houses.

“我們見到的UFO” ——訪民航CA933航班機長王書亭

本報記者 高常詩 馮軍軍

本報七月二十八日報道了民航CA933航班飛機在飛越蘭州地區上空發現不明飛行物的消息後，引起國內外讀者的興趣，人們關注這廣袤天空中忽隱忽現的“自由之神”，要求能獲取更詳細一些的報道。為此，我們走訪了曾與這神秘的客機飛兩分鐘之久的目擊者之一，民航CA933航班的機長王書亭。

記者來到民航飛行大隊時，王書亭機長恰好剛從歐洲回到北京。近二十年的飛行生活，使他的舉止、談吐帶有標準的空中作業色彩，行動機敏而穩重，語言簡練而清楚。聽我們說明了來意，他便以飛行員特有的語言開始了“目擊者”的自述。

“我們CA933航班的波音—747飛機，六月十一日從北京飛往巴黎。當晚起飛向西飛至內蒙古中西部後，飛機飛高到一萬公尺。當時雖然是夜間飛行，但氣象條件很好，飛機以九百公里的時速平穩飛行。

在飛過內蒙古口，距離雅布賴還有近三十七公里時，坐在左側的駕駛員鄧紹銘發現右側空中有一個很亮的物體。這時是北京時間二十二點四十三分。我向右望去，只見在飛機右前方320°方向有一個光點，它比通道的星星亮，比我十幾年飛行中所見到的星星都亮，是黃色的，還在閃光，看上去有核狀大小。

“約二十秒後，我看到在這個閃光光點的四週還有一個橢圓形的藍白色光環，直徑約有一

米，面朝著飛機的邊緣比較清晰，後部則比較暗。開始時我們以為它的高度與飛機高度相等，後來隨著越來越接近，我們目測，它的高度大約在一萬五千米至二萬米之間，從側面接近飛機航線，相對速度較快。隨著距離越來越小，發光物體中心光點越來越大，看上去約有成人一個拳頭大，周圍藍白色光環的直徑已約有四十至五十公里了。

這時，我們還發現，在這個藍白色光環的後部，還有一個很微弱的“尾巴”，在“尾巴”與光環的銜接處，光很暗。

“我們一邊向地面調度報告，一邊監視發光物體，做好了緊急降落的準備。在我發光物體逼近航線後，我們感到藍白色光環向外擴散，光環越來越大，中心光點也消失了，從駕駛艙右側望去，右側空中仍舊很亮。又過了約三十秒，天空恢復了正常。

分別的時候，王書亭機長又告訴我們，這個航班的另一個機組人員在一週後飛行這條航線時，於我國新疆羅布泊以兩地空中曾再次與不明飛行物正面相遇。

The Aeroflot flight from the Georgian capital of Tbilisi to Tallinn in Soviet Estonia was approaching Minsk when “what appeared to be a large, unblinking star suddenly shed a thin ray of light which fell plumb down on the ground” from an altitude of 40 to 50 km above the earth, the newspaper said. The date of the flight was not given.

“Ground control at the time

州軍區、北京軍區聯繫，得知在這個地區沒有其它飛行和活動，因而我們斷定，它是一個不明飛行物。

他說，在他近二十年的飛行生涯中，見到這種東西還是第一次，“真遺憾，當時手邊沒有相機，沒能把它攝入鏡頭”。說着，王書亭機長還輕輕地敲了敲桌面，表達了他惋惜的心情。

在發現這個發光物體的過程中，我們自己沒有什麼異常的感覺，飛機的儀器、儀器也沒有出現異常情況，與地面的通訊聯絡始終保持正常。我當時還隨手畫下了一張草圖，標出了簡單的形狀、位置。

王書亭機長告訴我們，“在發現發光物體後，機組曾與蘭



人民日報 Aug. 9, 1985

本報訊 六月十一日晚，中國民航CA933航班，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

民航航班發現巨大飛行物

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

波音—747飛機，從北京飛往巴黎途中，進入蘭州指揮區內，北京時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分，一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓，光環範圍有四十分之三層，厚藍白色，中間有一極強光點，光環外圍有一層薄藍色光環，物體非常亮，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

人民日報 Jul. 28, 1985

Friday, August 30, 1985 The Japan Times Page 5

China Sees 600 UFOs Since '80

BEIJING (AP) — More than 600 unidentified flying objects have been spotted in China in the past five years, according to a report from the country's first UFO seminar.

The meeting of 40 scientists in the northeast port of Dalian ended Tuesday, the official

Xinhua news agency reported Wednesday. One scholar said the first UFO picture in the world was taken in China's northeast city of Tianjin 40 years ago.

Others presented papers about UFO research and hypotheses on their origin.

China set up its first UFO research society in 1981 and it now has 30,000 members, the report said.

The overseas edition of the People's Daily (Renmin Ribao) quoted the pilot of a CAAC state airline Boeing 747 jetliner as having encountered a UFO whose brilliance extended for 40 to 50 km.

The pilot said he spotted the object in June as he flew over western China's Gansu province on a flight to Paris.

"The object traveled extremely fast, pacing the aircraft in a southerly direction for about two minutes," the paper reported.

In a later press report, pilot Wang Shuting was quoted as saying the yellow UFO appeared only as large as a walnut when viewed from the cockpit. He said it glowed much brighter than other stars in the sky.

Others presented papers about UFO research and hypotheses on their origin.

China set up its first UFO research society in 1981 and it now has 30,000 members, the report said.

The overseas edition of the People's Daily (Renmin Ribao) quoted the pilot of a CAAC state airline Boeing 747 jetliner as having encountered a UFO whose brilliance extended for 40 to 50 km.

The pilot said he spotted the object in June as he flew over western China's Gansu province on a flight to Paris.

"The object traveled extremely fast, pacing the aircraft in a southerly direction for about two minutes," the paper reported.

ジャパントイムズ 1985年8月30日 金曜日
1980年7月より中国で600のUFOを目撃

北京(AP) — 中国最初のUFOセミナーの報告によると、過去5年間で、600以上のUFOが中国に目撃された。公式の報道機関であるXinhuaは水曜日、北東部の港都市大連で開かれた会議は火曜日終了したと報じた。その会議の席上、ある学者は、世界で最初のUFO写真は40年前に中国の北東部の都市、天津で撮られたと述べた。他の学者は、UFOの調査と、それが何物から来たるのかについての理論に関する論文を提出した。中国は1981年に同国最初のUFO調査協会を設立し、現在は30,000人の会員を擁していると云う。

最近の目撃は驚きであった。人民日報の海外版は、国営のCAAC航空ボーイング747のパイロットが伝えたこととして、同機が、高さ40kmから50kmに及ぶ一機のUFOに遭遇したと報じた。

そのパイロットによれば、その物体は約2分間、南方へ飛行中の同機に合流した(訳注: pacing the aircraftが英文で飛行の事か?) 極めて高速で飛行した。

後の新聞報道の中で、パイロットのWang Shutingは、コックピットからそれを目撃した時は、ほんの、くるみ程の黄色いUFOであったが、空中の他の星よりも、際立って明るく輝いていたと述べている。

(1985年10月2日 島田隆雄訳)

Friday, February 1, 1985 The Japan Times 5

— Provided 'Honorary Escort' on Flight —

Soviet Airliner Has UFO Encounter

MOSCOW (AP) — Pilots and passengers aboard a Soviet airliner reported a close encounter with a UFO that illuminated the ground with a powerful beam and escorted the plane on its flight to Tallinn, a Soviet newspaper reported Wednesday.

The newspaper Trud (Labor) quoted a scientist who specializes in research into anomalies as saying the occurrence was "undoubtedly abnormal."

The Aeroflot flight from the Georgian capital of Tbilisi to Tallinn in Soviet Estonia was approaching Minsk when "what appeared to be a large, unblinking star suddenly shed a thin ray of light which fell plumb down on the ground" from an altitude of 40 to 50 km above the earth, the newspaper said. The date of the flight was not given.

"Ground control at the time

registered splashes on its screens in the same airspace," Trud said. Co-pilot Gennady Lazurin told an air controller in Minsk about the sighting. All four crew members on the flight reported that they "could see distinctly everything down in the sector of the ground illuminated by the cone-shaped shaft of light — the houses and the roads."

Suddenly, the ray shot up and focused on the plane, the newspaper said.

"The pilots saw a dazzling white spot surrounded by concentric colored rings," Trud said.

The object reportedly flared up, leaving a green cloud in its wake, and approached the airliner "at flashing speed."

The UFO pulled beside the plane at a height of 10,000 meters and accompanied it for the rest of the flight "like an honorary escort," one of the

pilot told the newspaper. Nikolai Zheltukhin, a corresponding member of the Soviet Academy of Sciences and deputy chairman of a state commission on anomalies, said the occurrence "is indeed of interest although the commission already knows of similar cases."

"That the object reversed course instantaneously and reached the ground with a ray of light of unusual intensity from a very high altitude is undoubtedly abnormal," Zheltukhin said.

In 1967, the Soviet government established a special air force commission to investigate UFO sightings but few details of its work have ever been released.

Belief in supernatural phenomena has in the past been officially discouraged, although Soviet media periodically report unusual sightings.

1985年2月1日 金曜日 ジャパントイムズ

—— “家畜ある運搬” 飛行機 ——

ソ連航空客機がUFOと遭遇

モスクワ(AP) — ソ連の新聞は水曜日(訳注: 1月30日)、ソ連客機のパイロットと乗客が機上から地上を照射してTallinnへ向かう途中、機上から一機のUFOと遭遇したと報じた。同機はTbilisiからTallinnへ向かう途中、機上から一機のUFOと遭遇したと報じた。同機はTbilisiからTallinnへ向かう途中、機上から一機のUFOと遭遇したと報じた。

同機はTbilisiからTallinnへ向かう途中、機上から一機のUFOと遭遇したと報じた。同機はTbilisiからTallinnへ向かう途中、機上から一機のUFOと遭遇したと報じた。同機はTbilisiからTallinnへ向かう途中、機上から一機のUFOと遭遇したと報じた。

同機はTbilisiからTallinnへ向かう途中、機上から一機のUFOと遭遇したと報じた。同機はTbilisiからTallinnへ向かう途中、機上から一機のUFOと遭遇したと報じた。同

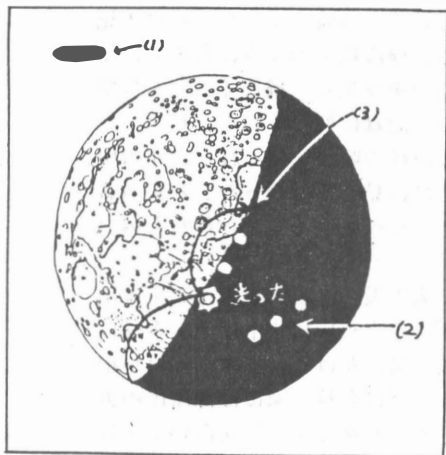
—37—



大正12年9月1日墨田川の惨状

れたのであった。そして、“弁天ヶ原”という避難場所まで逃げていたある日、「お月様が出たよ、あい子や拝みなさい」と言われて真っ黒な空を仰ぐとパーッと光が射したので、慌てて拝んだという。以上は、母の幼少時の体験談によるものである。

この「月を拝んだ」という話が気になって、震災当日上野や神田で観察された巨大火球の描写と関係はないかと、この話を聞いてから2、3年後、気象台技官だった旧知に10数年ぶりの便りを出して聞かされたところ、氏は東京天文台に聞かされて「9月1日の月齢は19.7、したがって満月より4.7日経過しているのだから、かなり欠けてはいるが半分は残っていることになる」という解答を戴いた。母にこのことを話すと、地震発生から何日後かがはっきりせず、考察の材料がとぎれた形で終わったが、9月1日が月齢19.7であれば、次第に欠けていく訳だから、4、5日後に暗い空から地上を照射する月が存在したかどうかはやや疑問ということになる。

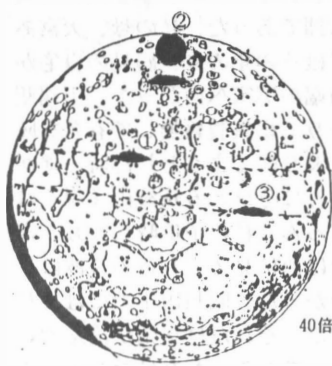


月面観測時の記録：1960年9月30日午後9時15分頃
(1)「時々この辺にこのような物体が見えがくれしていた。40倍」(2)「3つの光が見えた。40倍」
(3)9時30分「まぶしい光がバウンドした。40倍」
観測者：天宮壮吉

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
1960年夏、高校進学と共に空飛ぶ円盤の研究団体に加入したところ、従兄弟と弟は、七夕の笹を取りに田端の山に登った時、蛍光色に光

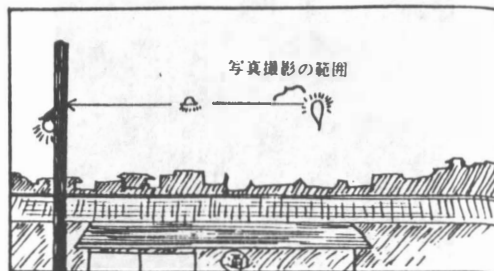
る5個の楕円形物体の編隊が空を飛行するのを目撃したと私に話してくれた。私は、早速話をまとめて研究団体に報告した。これは機関誌に掲載された。

この頃から、私と弟は競って手製の天体望遠鏡作りに取り組み、組立キットは高額なのでレンズだけを買って筒をボール紙で作って、なんとか月を観測できるものが出来上がった。しかし、色消しレンズなしなので、月面の輪郭は虹色がかって見えた。この手製望遠鏡で弟は月面付近と月面上に異常現象を観測。この記録も報告して研究誌に掲載された。「空飛ぶ円盤」を見たいという欲求と月面観測が結びつくのは、やはり、子供の頃に読んだ小学生学習雑誌に掲載された月面のクレーターに出没する人工的建造物や移動物体の観測話に影響を受けたものと思われる。その年、私は小遣いのため、天体望遠鏡を買った。その望遠鏡を屋根に設置する台を作り、観測を開始し、いくつかの異常を月面に認めた。中でも、小さな黒っぽいものが次々と月面をかすめて飛行するのを観察した強い印象は今でも脳裡に焼き付いている。



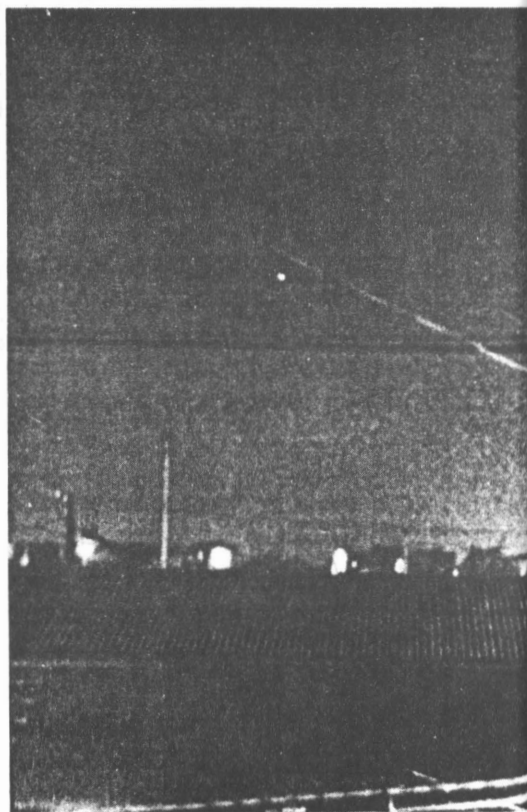
月面観測時の記録：1960年11月6日(1)
午後8時40分：天宮壮吉 (2)午後8時50分
：天宮清 (3)午後9時45分：天宮弘彦

1961年8月30日夜、田端の自宅において初めて「空飛ぶ円盤」を目撃した。その夜、私が下の部屋にいたとき、2階から弟の叫び声がして急いで階段を駆け上がった。弟が指差す西の窓の外を見ると、何とすぐ目の前にオレンジ色に光る見慣れない物体がジワジワと左に移動しているのだ。上部がドームのようになって下部は楕円形に見える。小さいが肉眼でそう見えるのである。窓の西方は障害物がほとんどなく、田端の高台まで見



1961年8月30日午後9時15分のUFO目撃図

通せる。貨物駅の屋根が目の高さより下、その上は200m離れた高台の町の灯がいくつか見え、視野の半分は空である。オレンジの物体は高台の灯より手前に感じられた。ドームをもつ円盤の下部は光がにじむように短い帯状の光帯を呈している。高台の灯のすぐ上の空間を突如とゆっくりと移動したそれは、家のすぐ近くに立っている電柱の陰に入った。通常のものならすぐ電柱の左端から現れる筈であった。ところがいくら待っても光体は現れなかった。目撃中、私は震える手で双眼鏡で観察しようとしたが何故か弟に双眼鏡を投げ渡してせつかくのチャンスを失った。肉眼でどのように鮮明ならば当然15倍の双眼鏡ならばより細かな部分が観察できた筈であった。弟も受け取った双眼鏡を使用する間もなく物体は陰にかくれ、再出現の期待もむなしく消えた。しかし、弟はこの現象を写真に撮影していた。更に私を呼ぶ前の状態は、



1961年8月30日午後9時15分頃目撃と共に撮影。オリジナルプリントから拡大複写したもの。

まず遠方から接近して明るくパーッと輝き、その輝きが薄れてからドーム状の物体が出現してゆっくりと移動を始め、「これならばすぐには消えないだろう」と思って私を呼んだのだと話してくれた。後日出来上がった写真を見ると、確かにビントは手前の日本通運貨物付近の照明より高台の灯の方がボヤけて写り、光体の輪郭は高台の灯より鮮明であった。ということは、我々目撃者と、光体の距離は高台までの200mより手前であることは間違いない。

光体が見掛け何度程だったかは、もはや当時の記録には記されていない。そこまで精度を求めるような観察記録はつけていなかった。目撃したものが大きかった場合のみ「月の2分の1」といったように、また、「金星の2倍」といった記録しかしていなかった。たぶんこの時の見掛けは、腕を伸ばして親指の爪の先ほどであったろう。広角35mmのハーフサイズ写真に写った映像は光度の強い段階のもので、その光からうっすらと左上に細い線の光がオリジナルプリントでは認められるが、そのうっすらと写った段階になって、私も目撃に参加した訳である。

しかし、肉眼に焼き付けられた正に「空飛ぶ円盤」そのもののような形態は生涯脳裡から離れることはないであろうと思う。その後様々な現象を目撃することになるが、疑問の余地なく「これがそうか！」と確信し得る最初の体験は、極めて鮮烈である。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
1975年8月、私は単身、京都と奈良の中間にある新田辺の山荘に滞在していた。ある日の夕刻、山荘付近を散策していると、川べりに小さなイエズス教会の建っているのを見て好奇心が沸き上がった。中に入ってみると集会の最中で、新訳聖書ルカ伝第5章のシモンの言葉「…しかし、お言葉ですから、網をおろしてみましよう」の部分を繰返し繰返し朗読していた。祈りの集いが終わり、人々が帰った後、その教会の婦人と少し話をしてみた。

「随分変わってますね」というと、「新教ですから」と答えられた。色々話そううちに私がファティマの

事件について「あなたは太陽が降下したという事件を本当のことだと思いますか？」と尋ねると「本当です」と確信に満ちた答えが返ってきた。彼女は奥の部屋から折りたたんだ印刷物を出して私にくれた。「これはローマ法王が各国の首脳に送ったものの日本語版です」ということであつた。今でもこの印刷物は私の聖書にはさんであるが、これが後にテレビや本で取り上げられて騒がれ、果てはハイジャック犯が法王に公開を迫るという事件にまでなった「ファティマ第3の秘密」の公開用のものであつた。この文書はパウロ六世が各国の主権者に送った「一般向けにやわらげた挨拶」とされている。

山里の小さな教会でもらったこの文書とはほとんど同じ内容のものが、数年後、五島勉著の『ファティマ第3の秘密』なる新書本に紹介されて一般に知れ渡ることになる。五島氏は文書の入手をあたかも極秘文書の入手のように書いているが、その筋ではかなり広く出廻っていたようである。ただ、五島氏の文書と私が教会でもらった文書とは、訳者が違うためか内容に幾つかの相違が認められる。

核戦争を連想する前半部分はほとんど変わらないが、後半、即ちルチアの追加文の箇所はかなり調子が違っている。五島版で「ロシアがいましめの鞭となるであろう」が教会版では「ロシアが神の審判によって最初に滅びられる」となっており、五島版では次に続く「どの国でもロシアと同じ運命となる」が抜けている。

また、「悪魔が多くの靈魂や宗教者に働きかけて神から離れさせ人々を地上的なものに引き込んで、無信仰、官能主義が信奉される」などの文句も欠落している。

私はこの文書を読む度に、ソ連が「人類の滅び」の開始となるような事件の有無について考えるようになった。

奇妙な符合だが、ルチアが「第3の預言」の追加文「ロシアの滅び…」を告げたのは67歳の1974年であったという。(私の文書入手はパウロ六世時代の1975年)

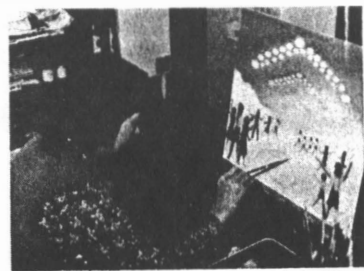
ファティマの3人の牧童が“天”から降下した貴婦人と会見を開始

したのは1917年の5月13日である。その日から67年後の1984年5月13日、ソ連のセベロモルスクにある核基地で大爆発事故があり、各種ミサイル約1000基が消滅。少なくとも死者200名という大惨事となった。「5月13日」発生という事実にファティマを思い浮べたのは私、一人だけではない。しかし、ソビエトは近年ゴルバチョフ大統領により古い体質を脱しようと改革を進めて努力を重ねているように見える。何故その国が「滅び」の対象として名指しされなくてはならないのかよく判らない。だが、現実に古くは1957年頃に起こったとされる原発事故「ウラルの大惨事」やチェルノブイリ原発事故などの実情をみると、どうしても普通の事故というよりも運命的な何かがあるような気がしてならない。「チェルノブイリ」というロシア語の意味が「苦よもぎ」だという新聞のコラムを読むと、ヨハネ黙示録の預言に世界が本当に突入しているのではないかと思われてくる。その視点から見ればソ連は人類全体がやがて経験する被災を一足先に経験している、と言えなくもない。

そして、「どの国もソ連と同じ運命になる」という意味は、今日誰に聞いても同じ答えが返ってくる死の灰の恐怖という現実を照らして評価できる。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
1975年、様々な事情で奈良県大里市に住むことになってから、以前にも増して空飛ぶ円盤に遭遇するようになった。大里に足を踏み込んだ直後、廻転しながら飛行する黒っぽい楕円形の円盤を2度も目撃。また杉山繊維工業に勤務し始めてから自転車で帰宅途中、発光体が後ろから追い付いて飛び去ったり、指柳のアパート付近でオレンジ色のちぎれ雲に似た物体が滑るように夕空を移動するのを見た。

詳しくは後述するが、こうしたUFOの目撃に対処するため、一眼レフカメラと望遠レンズを購入した。しかし、望遠は安物過ぎて一度、札幌へ向かう機上からUFOを一枚撮影しただけでこわれてしまい、現在のシグマという100~200mmのズームを購入した。



1983年古代岩絵から油彩でUFOを再現する天宮ユキ

1978年5月、杉山繊維工業の宿直となってから、宿願だったスライド2編を制作。数十枚の絵を描いた。このスライドはUFOと古代文化を題材にしたもので、会社の従業員である天理高校2部生（女子）に何度か見せた。その延長で20人ほどの生徒を「十戒」の映画に連れて行った。さらに、1982年秋の天理高校2部文化祭でUFOの展示が実現。その後、スライドを見た女子生徒が顕著なUFOを日撃。そのことが生徒の親子の問題に発展したところ、私はインド旅行で肝炎ビールスに感染、発病入院となり、さらに娘（小学4年）の志麻に感染して父子共天理市立病院に入院。これを機に会社を退職して、大阪の現金問屋マサキに勤めることにした。この社長とはUFOの研究を通じ旧知の間柄で昔話をよくしたが、1985年4月、共にアフリカ難民救援調査行で海外に出かけた後、以前から悪化していた胃癌のため翌年の夏51才の若さでこの世を去った。その頃、私は正木栄一社長が芦屋に購入したテナントビル、ステラ21の管理を任されていたが、通勤時間が往復4時間で日曜祭日もないため、退職。1987年2月より妻の勤める小山産業に勤務することになった。天理に来た時クルクルと廻転するUFOに2度も遭遇したが、この飛行に象徴されるような変化に富んだ12年であった。私の寝起きした場所は長期出張や長期旅行を除いて8回変わり、職場は4回変わった。

そんな時、「天宮君、日本史をUFOLOGYでやってみてはどうか？」という言葉を書の先輩から戴いた。

しかし、休閒勤務しながらの制作作業は実に大変である。何人も学者が何十年もかけて取り組んできた無数の成果を学ぶだけでも残された人生を何倍しても追い付

かないのに、未だ未公認のUFOを日本史に融合させるというのは無謀に等しい企てである。

それでも、とにかく、私の行動はその実現に向けて走り出した。

今から日本全国を歩くことは不可能なので、20年前近畿地方その他を歩いたときに撮影したプリントがあったのでそれをネガ起こしたり、古いアルバムの写真を複写したり、天理大学図書館と天理市立図書館に通ったり、増刷方法を考案したり、ワープロを修理に出したり、紙屑のようなメモを整理したり、ほとんど非生産的な毎日で一年が過ぎた。

1987年11月22日、勤務先の小山産業社内旅行で山梨へ向かった際、長野県駒ヶ岳付近の中央自動車道を走行中の観光バス後部座席から、輝く連結状の飛行物体を2枚連続撮影した。この写真を検討した結果UFOに違いないという結論に達し、サービス判に焼き増したものを友人知人に送った。その際、これはと思う未知の人にも送り、そのうちの一人である大阪の核廃絶運動家から早速電話をもらった。そしてその後、同氏自宅と私の家とで会い、意見を交換した。

70才をこえ、最近大手術を受けながらも、米ソ核戦略に対する鋭い批判と事実認識は到底若年の及ぶところではなく、同氏の核保有国への手紙作戦に対して寄せられた当時国首脳からの返書にも努力の成果が表れているように感じた。私は新聞で同氏の活動を知り、自作の絵葉書を送ったのが最初であった。同氏のUFOに対する関心度は知る由もなかった。

ところが、この老核廃絶運動家はすでに1965年3月瀬戸内海上空で発生したUFO事件で、この現象に着目。その頃は感じなかったが、1986年11月にアラスカ上空で日航のジャンボ貨物機が遭遇した事件で、「UFOと地球人とは大変な開きがある」と思ったという。

第2次世界大戦中、戦艦大和の巨大部品を造った同氏は、その経験から、「容積にしてジャンボ機の何十倍、何百倍もある構造物が、その大変な量の材料自体の重みで潰れてしまわない謎」「超スピードで方向転換できる」ということは中に乗っている搭乗者が無事でい

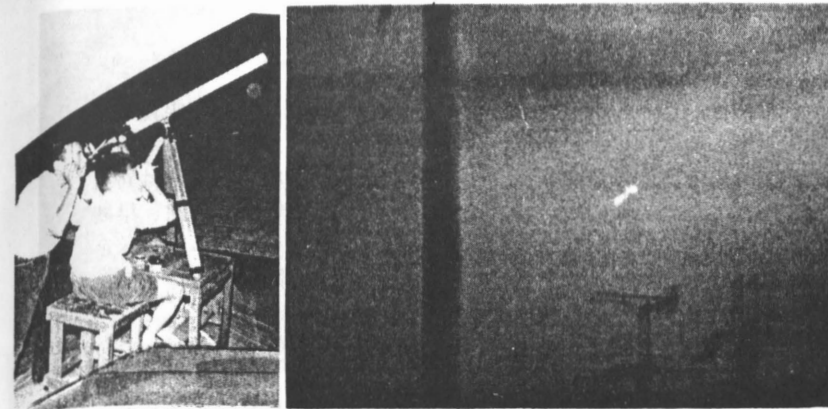
ることであり、これは慣性の法則を無視したものである。どうしてそういうことが出来るのか」「相当の力がありながら、世界中を飛び回って墜落事故やばみ出した行動がなく統率がとれているということは、UFOの乗員が長期にわたる訓練を受けた人々であり、そのような人材の育成はこの地球とか小さな惑星の上でできることではなく、宇宙における連合体がなければならぬのではないか」などを指摘された。そして更に「地球人がこのまま何百年何千年と進歩していけばUFOの科学力、文明に到達できるのか……しかし、今のままではとてもそうは思えない」

「人間の持つ欲望をどう解決してきたのか。たぶん、地球に来ていたUFOの人々も地獄のような苦しみを経過して、地球のような星にまで出掛けることの出来る惑星全体、太陽系、島宇宙規模の宇宙平和を確立したのに違いない。」

この話をそばで聞いていた妻が「この方と同じ事を誰かが言ってなかったか」と聞いたので、私は即座に思い当り「そうだウォルフスキーだ」と答えた。

次の方で私自身のUFOの日撃を分析し、UFOとは一体どのようなものかを模索することになっているが、その前に我々地球科学技術の最先端として、軍事用衛星の地上探査能力、情報収集能力、それらを解析するコンピューターなどの最新情報を知っておく必要があると思う。日進月歩で、次々と新しい技術が開発される分野だが、例えば我々のそばに居るいない、見える見えないにかかわらず、超高空の人工衛星の地上調査能力が「解像力30センチ」とか、電波や音声、通信の傍受技術。人対人の間に交換される意識無意識の情報交流といったものは新聞などを読む程度で十分である。「地球の技術でここまで可能。ならば、航空機やロケットの飛行技術の上をゆく技術とは？」という現実的なUFO観は、UFOが空想(SF)の産物ではなく他の惑星の生身の知性が乗る現実の物体であるという基本線を逸脱しないためにも必要であろうと思う。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆



月面観測中の筆者（1960年）1989年1月夕刻飛行機を手持ち1秒で撮影したもの

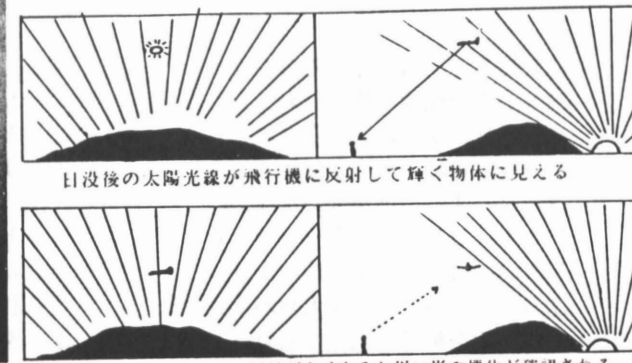
☆☆☆☆☆☆☆☆ 各種空中現象 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

UFOについて述べられる一般の書物は、驚異的な事実で読者を圧倒させてくれるが、現象としてUFOと既知の現象とを比較したり、既知の現象でUFOに誤認され易い実例をあげたりした本は皆無に等しい。

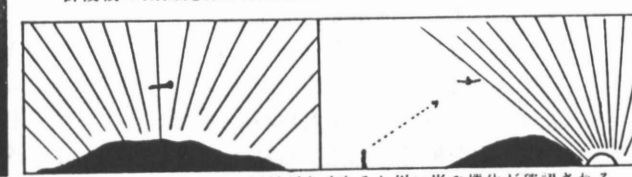
実際、この課題について述べても読者にとっては面白味がないのである。しかし、ここではUFOの問題に入る前に下準備として、堅苦しい記述にも目を通して頂きたい。私自身はそれらの専門家ではないが、人一倍空を観察した結果、空の様々な現象の実際に出合い何度も「あれはUFOか、そうではないのか？」といった判断に迫られたことが多いので、自己体験として、解説してみたいのである。

◆航空機◆ かつて米空軍が誤認の例として写真解説に取上げられていたのは、飛行機を真横から見れば胴体が葉巻形に見えるとか巨大な楕円形のレーダーを搭載した特殊なタイプが、太陽光線の反射で本体が見えにくくなり、楕円形のアンテナのみの反射が目立つためにUFOに見られる、といったものがあった。しかし、今では子供でもこの程度の誤認は避けられるであろう。

1974年頃、山梨県塩山で夜空を無音で飛行する光を望遠カメラでキャッチしたところダイヤ形の光が連続した光跡に写り、新聞にも写真が掲載されて多くのマニアが現地に詰めかけるという騒ぎがあった。この光跡が何であるかを証明するために、羽田空港で夜間、飛行機の離着陸を何秒か露出して撮影したところ、塩山とまったく同じ光跡が得られた。ダイヤ形の連続光跡は回転燈火によるものであった。塩山市では、飛行機が遠



日没後の太陽光線が飛行機に反射して輝く物体に見える



飛行機が角度を変えて、反射がなくなると黒い影の機体を確認される。

方を飛ぶため音が聞こえず騒ぎとなったということが判った。判ってみれば「何だ」という騒ぎだったが、私自身、遠くでオレンジの光が右往左往するのを見てUFOと思い、観察を続けて記録をとり、双眼鏡で舷窓に似た光の集合体をスケッチした報告をまとめて研究団体に送ってから「あれはヘリコプターだったんだ」と判明した経緯がある。もう30年ほど前のことだが、その当時は夜間のヘリコプターの望見に慣れていなかったわけである。

天理市に住むようになって始めの頃、東と西の窓に金星の倍以上もある白黄色の光がまるで空中で燃え上がる感じに見られたので「UFO？」と思って観察したことがある。

この現象は航空機が日撃者に対して真っ直ぐのコースで接近してくるために、見掛け上、空中で静止したように見え、ライト（前照灯）が一つの光の塊のようになって目に入るためであることが判った。この現象を目撃前の明るい時間帯でたまたま見たときは、双眼鏡で観察しても機影が識別できず、空中に静止した自然光から虹の七色のような光が上部に放射されて、その状態が5分以上続いたため「これはUFOか！」と色めきたった。しかし、観察にくたびれた頃ちらりと機影が見え、ようやく飛行機であることが確認されたこともある。

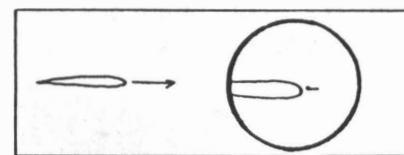
また、日没直後の西空では通常機影は黒いシルエットで見られるが、地平線からの太陽光線が飛行機の機体の下部で反射して目に入るとオレンジ色、白熱状の発光体に見られる。これは双眼鏡で観察すれば機体が認められるほか、角

度が変わって黒い機影に見られるのでしばらく観察すれば確認できる現象である。

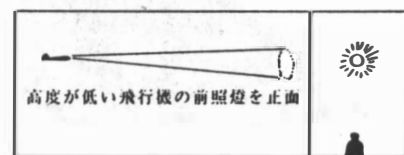
飛行機雲も時としてUFOに間違われることがある。通常飛行機雲は長くなびくものだが、ある条件下では機体の数倍ほどの飛行機雲をひきずって、その雲の長さが変わらないので白く輝く葉巻形のUFOといった外観を呈するのである。

この現象は定速直線飛行であり曲線を描いたり加速したりしない限り、UFOの範ちゅうにはない。それで、こんなことがあった。1984年大阪勤務のとき、私は職場の輸入手続きで銀行の外務に行くことが多くなり、その支店長代理と親しくなってUFOの話をするまでになった。そんな時、同氏が夜街頭で立話をしてる際、楕円形の光物が頭上を通過したので「これが天宮の言うUFOなのか？」と話してくれた。次に彼の自宅近くの尼崎駅で白い棒のようなものが高空をゆっくりと飛行していた」という日撃談になった。私は「それは飛行機かも知れない」と答えたが、彼は「飛行機ではないと思う」と言って何日か過ぎた。と、ある日彼の方から「あれは飛行機だった」と言ってきたので、たぶん同じ現象をふたたび日撃して確認したのであろう。

とにかく、航空機というものは



一定の長さの飛行機雲の移動



高度が低い飛行機の前照灯を正面

定速である。目で分かる急激な加速や、方向転換は出来ない。UFOが当然のようにジグザグに飛行できても地球の航空学にはそのように飛行する原理が分からないのである。急加速、UターンなどもUFOの特徴として当然のように語られているが、我々人類の常識では空中分解等、即死に直結する無謀な行為であるという現実をしっかり認識しておきたい。尚、一定の長さの飛行機雲の場合、双眼鏡で真横から観察すれば先端に黒い機影が確認できる。しかし、後方からの観察では識別できないことが多い。

◆風・空中のゴミ◆

風が見られるのは正月前後がほとんどなので、誰でもそれと判る。大抵定位置で浮遊し、急速に移動する事は糸が切れた風を除き有りえない。ただ、写真上では単なる黒点として写るので、正月前後の風景を撮影する際は視野内に風が上がっているかどうかを確認しておく位の注意は必要であろう。

空中のゴミ、それも肉眼で見られる程の大きさのものは、かなり強い風が吹く条件がなければならない。稀に遠方で巻き上げられて空中を漂った紙片などが、運ばれて見える場合もある。筆者はスーダンのガダレフの町でこれを見た。最初の発見者、正木栄一氏は空を指差し「あそこに光った物が見える」と叫んだ。アフリカ難民救援調査隊の隊員は全員目を凝らして観察。しかし、光ったのは太陽光線を反射した紙片のようなもので、それは次第に降下しているのが確認できた。

このようなものが写真に写るとまた問題である。エジプト最大のピラミッド、ギザにあるクフ王のピラミッドで、大阪千速無線の根岸邦明氏と砂嵐の中をピラミッドのそばまで接近、根岸氏が8ミリビデオで撮影する姿を入れて一枚



ピラミッド上空のUFOを思わせるが正体は紙片のようなもの(1985.4 カイロにて)

撮影した。帰国後、この時の写真に一見「土星形」のUFOがピラミッドの石組みの上空に滞空するかのようには写ったので驚いた。

「ついに、世界で初めて、ピラミッドの上にUFOがキャッチされたか！」と喜んだ。早速四つ切で2枚注文し、出来上がったプリントを改めてルーペで見ると、どうもUFOではないらしい、と思えてきた。「土星形」と見えたのは、紙のような平面的な物体がねじれて、そのような形になっているようにルーペでは見られたのである。

根岸氏にもこの写真を渡して検討を依頼したところ、この写真が撮られた当時ピラミッドの周辺は、ビデオを再生して見ると、たくさんゴミが舞い上がっており、そのゴミの一つが写ったものに間違いない、との見解であった。

「紙片」と関連して、「紙片のように見えたUFO」について述べてみたい。

宇宙開発実験の初期、X15という大気圏外飛行のロケット飛行機の実験飛行が行なわれていた1962年の7月17日、ロバート・ホワイト飛行士はX15と共に動く灰白色の紙片状の物体2個を目撃した。事例がまったく異なるが、私の妻は、1973年頃のある日の昼間、黒い四角い紙片状のものが回転しながら次第に上昇して雲に突入したのを目撃している。果たしてUFOのタイプにこのようなものがあるのか不明だが、自然現象とも言えない。

◆渡り鳥の編隊◆

単なる鳥の飛行は誰でも見馴れているが、夜間、渡り鳥の群れが編隊を組んで市街地上空を飛行する場合、下界の光に照らされて、遠方から肉眼で見ると、三日月形の発光体が夜空を移動しているように見えることがある。筆者は東京港区のビル屋上から、これを観察した。仰角が低くほとんど日の高さに三日月形の光がゆつくりと移



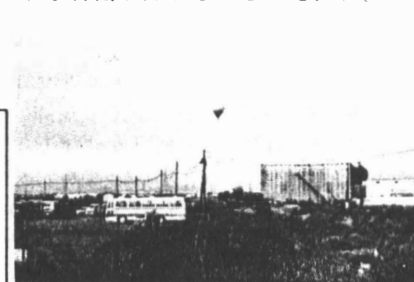
渡り鳥の群れが隊形を組んで市街地の上を飛ぶと下界の光に反射して、白い物体の移動に見られる。

動するのを発見して、双眼鏡で観察したところ、無数にはばたく鳥の動きが見てとれた。性格は異なるが、米ソの核戦略最前線、早期警戒レーダーでも渡り鳥の編隊を敵側ミサイルと誤認しかかったことがあるそうである。

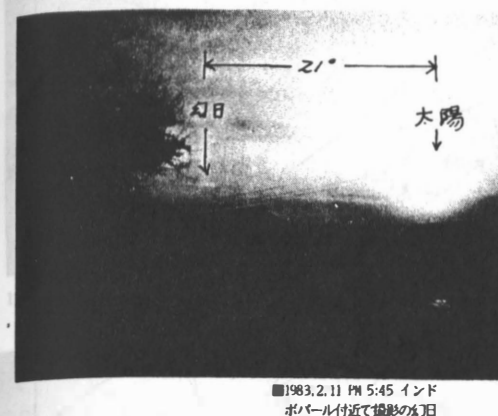
また、写真に妙な物が写っていた、という場合、まず鳥の可能性を疑ってみることが肝要である。スローシャッターで景色などを撮影した場合、雀が瞬間横切ったのに気づかず、「黒い物体が写っているが翼もないし、鳥とは思えない」といった写真となる。

◆飛行船・風船・気球◆ 最近、宣伝用の飛行船を見掛けるようになった。低空を自在に飛行し、色彩もシルバーグレーのものからカラフルな広告そのものといったものに至るまで様々。大きさも様々だが、全長50m 前後直径10m 前後で数百mの上空をゆつくり飛行する。肉眼で見てもすぐそれと判るが、遠方のもを写真に撮った場合、楕円形や球体に写るので形の上では紛らわしいものである。また、催物の際、大量に放たれる風船の一つが単独で風に東って高空を流される場合、ハッとすることがある。しかし、風船は付属物の空気抵抗のため、やや揺らめきながら流れるので、肉眼で捕らえられる高度のものはすぐそれと判る。風船の飛行は以外と遠方まで届くもので、1987年10月19日正午、福岡県宗像市の小学生が放ったヘリウム風船が、甲府までの約800kmを途中3000m級の山を越えり時間後に到達したという実例があり、この場合は放たれた直後西風が強く吹き時速80kmで飛行したものと推定されている。

観測気球、ラジオゾンデ、レーウィンなどは飛行中を目撃したことがないので解説しにくい。風に流されるという点で風船と似たような特徴があるものといえよう。



天理市上空の熱気球(1989)



1983.2.11 例 5:45 インド
ホテル付近で撮影の幻日

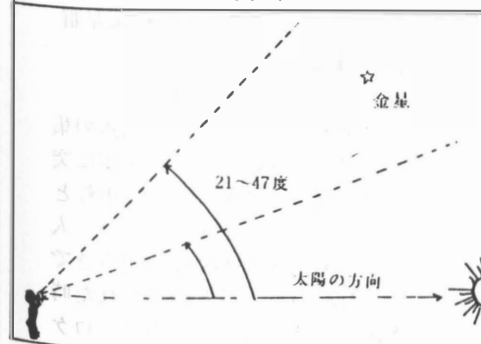
◆幻日・幻月◆

太陽や月から半径22度(腕を伸ばして手の平の半分)の位置に薄い同じ色をした輝きの強い点が見ることが稀にある。これは「日(月)の傘」と同じ現象で、気温が低く空気が澄んで、約10000mの上空に空中の氷の結晶でつくられる絹層雲によって太陽光線が屈折して起きる現象と説明されている。1984年1月24日午前9時15分頃姫路市で観測されている。この時の近畿地方は、大陸から張り出した高気圧が西日本を覆い、雪が降り続いていた日本海側でも青空がひろがり、放射冷却のため、奈良氷点下1.4度、神戸同0.7度、大阪1.2度となった。私自身は太陽の片側に現れたものを何回か観測しているが、いずれも淡いもので雲の一部がオレンジ色の強い虹の切れ端状に輝き、10分前後で消えた。最近の例では1987年7月25日午後6時頃に偶然目撃、撮影した。

この幻日現象を引合いにしたUFO現象否定説もあったが、実際は直ぐそれと判るものである。ただ、日本や中国の古記録によくみられる「2つの日」「3つの日」あるいは「3つの月」がすべて幻日幻月なのか、という問題は残る。

■昼間の金星■

初めて金星を見た人が「UFOか?」と言って騒がれた事がある。この誤認は金星の見える範囲や見える時刻を知ることによって防げることができる。(下図参照)



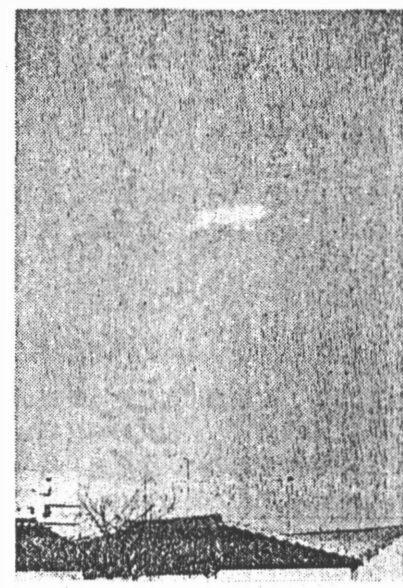
昼間の金星が見られる範囲

◆彩雲・蝶々雲・レンズ雲◆

太陽から少し離れた一片の雲が赤、黄、青などに彩られた「五色の雲」を中学生時代に見たことがある。他の雲は白いのにそのばかり浮いた雲だけに色が付いているのである。この現象は10分以上続いた。やがて色も薄くなって、白い雲となった。それ以降幻日や部分的な虹は見たが、あのような雲は2度と見たことがない。しかし、幻日と同じ原理によるものであろう。

澄みきった青空に孤独な雲が浮かぶことがある。「蝶々雲」と呼ばれ、雲の底が平らでない。春から秋に現れることが多い。同じ位置で消えたり現れたりを繰り返す、大都会の真只中でも山の頂の上空でも現れる。「UFOの滞空?」といった雰囲気もあるので注意したい。

レンズ雲は有名な話にツェッペリン飛行船の来襲と間違えられたという程、左右対象で、まばらな積雲の上空にあって動かないでいると、積雲の中の葉巻形UFOの滞空と間違えることがある。逆に一見レンズ雲のようなものが、積雲の中を形を崩さず移動したらUFOの可能性もある。強風下では本当に美しいカッコリとしたものが出現する。しかし、本物のレンズ形UFOも同じように見える場合があり、とにかく移動、変化などに着目して観察することが大切である。



晴れた空に一点の雲。「蝶々雲」と呼ばれる。

◆球雷・火の玉◆

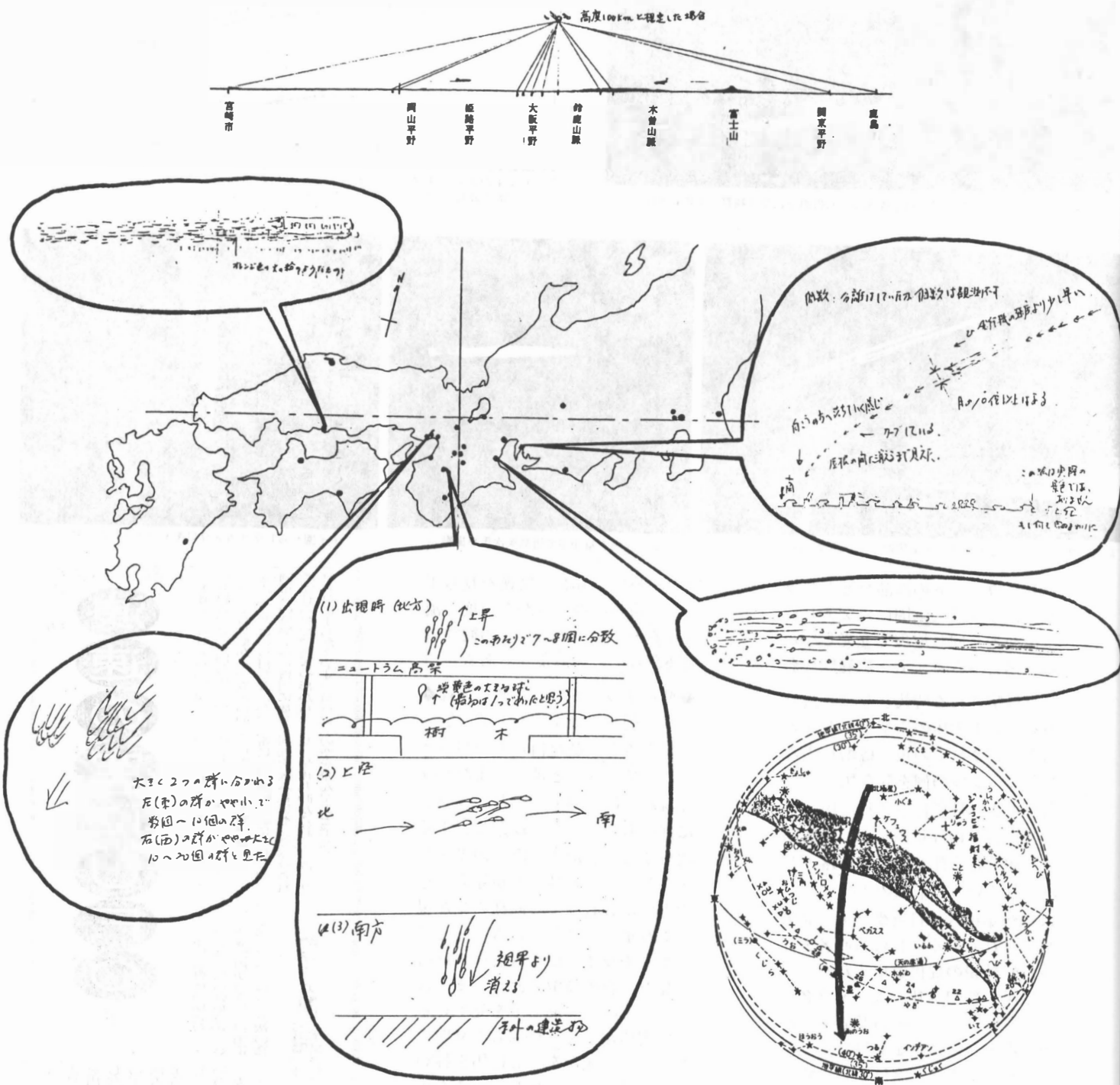
早稲田大学の火の玉研究観測情報センターの大槻教授によると、雷の最中に火の玉が出現することがある、と幾つかの写真や実験で説明「雷を発生しやすい地形や気象条件が火の玉の発生とも関係しているらしい」(1987.6.14 朝日)「とくに林間だと、火の玉が放射する短い波長の光は、火ではなく金属的なものに見える。飛び方にもいろいろなバリエーションがある。」(1987.2.25 日経)と述べ、報告されるUFO目撃の八割が火の玉だとみている。(日経)

火の玉の理論は原子の中の電子と原子核とがバラバラになった、プラズマと呼ばれる高エネルギー状態のガスだと考えられているが、高エネルギー状態がなぜ長続きするのか物理学者にとって大きなナゾ(朝日)としている。テレビで紹介された大槻教授の実験では放電の際、火花の一部のような小球が瞬間生じたのをカメラが捕らえている。これが、自然下では何分も継続し空中を飛ぶ球体になる、というのが同教授の主張である。

果たして、この理論が事実と合致するのかまだ分からないが、1987年9月、東京板橋区で雷雨の中、20枚もの雷の写真撮影した電子工学の専門家は「球雷なんか一個も写らなかった」と筆者への書簡の中で述べておられる。

また、「球雷」とされる現象は、雷の発生と同時に観測された例はなく(朝日)本当に落雷の放電に関係した現象であるのか、雷発生の地方に多いというデータの収集方法に問題がないのか、同教授の活動が「国際火の玉シンポジウム」の開催など広範囲に及んでいるだけに、誤った理論であれば社会への影響が懸念される。

古来、「怪火」として、古記録や伝承にあるものは、現象としても全く異質で、分裂や集合の繰返しパターンが多く、これはどちらかという、九州八代湾の「不知火」に近い現象であり「天狗火」「龍燈」「狐火」といったものの系列である。これについては後章で述べる予定である。



人工天体再突入例

1985, 10, 8 火球群目撃図と目撃地点

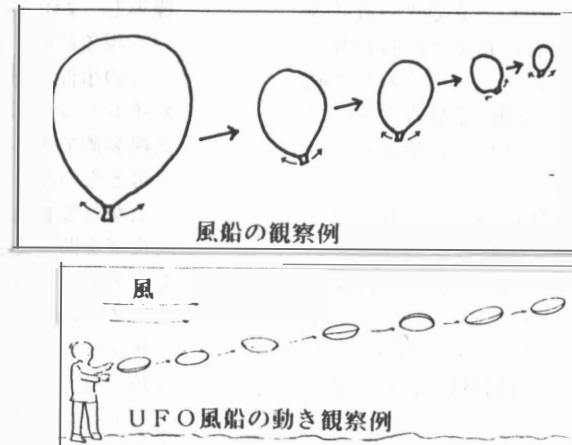
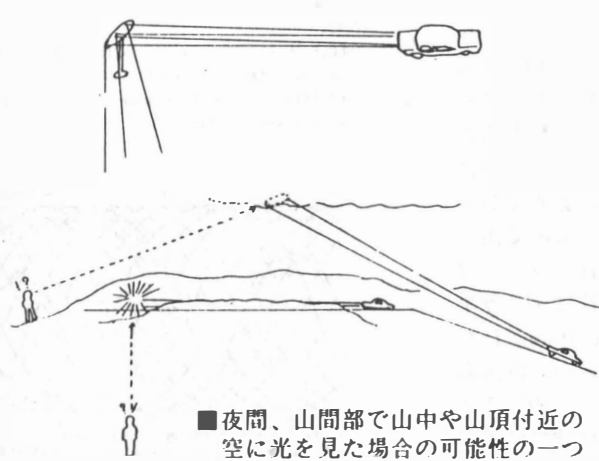
光体群の飛行経路に近い目撃地点では、光体の一つ一つが分離し、広がりをもち集団として見られている。目撃地が経路から離れるほど、広がりはなくなり、細長い一つの光物として見られている。写真撮影でもこの事が確認されている。ビデオでは火球群を真下から撮影しており、最初まとまっていた集団が、次第に速度の違い（大きさや形状の違いによる空気抵抗の差が原因と考えられる。）を生じて前後にバラけていく状態が認められる。

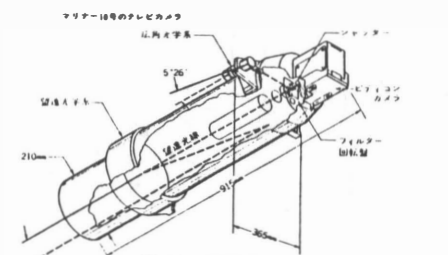
見掛けの経路は、真下の地点から見ると、最初、北の空から上昇するように天頂に迫り、天頂を過ぎると降下するように南へ向かう。しかし、実際の経路はほぼ水平である。こうした現象は高空を飛行する旅客機の場合にも見られ、飛行機雲が下から上に伸びるように山影から現れ、頭上を通過した後は次第に降下するように見える。

人工衛星大気圏再突入と判定された火球目撃一覧表

	午後7時55分 1分間	午後7時53分 2分間	午後7時54分 30秒間位	午後7時50分頃 約10-15秒間	午後7時55分頃 1分間	午後7時53分 15-20秒間	午後7時55分 10秒間程	
目撃場所	広島県福山市 南土城町自宅	兵庫県芦屋市 花園高校屋上	兵庫県西宮市 甲子園球場内	大阪府住之江区 港南高校正門	和歌山県東牟婁 本宮町渡瀬	三重県志摩郡 三雲村国道23	愛知県豊田市 花園町自宅	
目撃者	野島英次(36) 野島志人(38)	下田孝(37) 他生徒7名	佐野隆夫(44) 他カメラマン多数	大和昌夫(41)山崎誠(52) 鈴木重幸(50)酒井孝(37) 中島英夫(48)柳川支雄(50) 他30名(25)	小門春巳(39) 他30名	岸谷幸太郎(45)	加藤宏(49) 加藤宏子(45)	
発見位置	東仰角25度	西仰角80度	南西仰角70度	北仰角30度	大垣付近	北仰角30度	北北西仰角45度	
見えた位置	南南東	南10度東仰角5度	南西仰角30度	南仰角30度	南西へ	南仰角30度	南仰角10度位	
形状	長方形 窓の様なものあり	すい星状	流星又は火花状	最初一つのものが分散する	燃えている に見える	雲の中に白点などの星の様なツブが無数に見えた		
見かけの大きさ等	腕を伸ばした時の 広げた親指と 人差し指の間隔	群の幅、 太陽時で5度以上	月	大小あり 大で月1/4 小で星(1-2等)		水平よりやや下向きに 流れ星の軌跡状	光の山が 月の10倍以上	
数	1	20-30個	10個以上	7-8個	数個	10数個	分離はしていたが 個々の確定不可 飛行軌跡のよう	
尾流	本体の5-6倍	尾の長さ約10度 で自ら消滅						
色	尾流:オレンジ色 (暗くて 本体:黒 そう感じた)	本体:オレンジ色 尾:青白色	橙色あり 青色あり	白色・黄色(淡い オレンジ色)	一瞬大きなもの オレンジ色、その後は星(白 っぽい)に見える	白、赤	全体が青色、その中に 無数の白色の高輝度 現象あり	
明るさ	火花のように 明るかった	キラキラと変化。 一つ一つがマイ ナス2等級多数	相当暗いようでも明るい、 何と表現すればよいか	打上げ火花のよ うに明るかった			かなり明るい (金星よりも明るい)	
見かけの速さ	ジェット戦闘機位	人工衛星位	流星より速く、 航空機より速い	流星より速く 航空機より速い	流星より速く 航空機より速い	飛行機程度	流星より速く 航空機より速い	
高度	30m位に感じた						通常の飛行機(ジェット) の3-5倍位の高空	
消え方	建物等にかくれて	雲にかくれた	仰つくり南西へ	自然に観望から 消えていった	少しづつ光が 小さくなった		南の方で 観望より消失	
音	なし	なし	なし	なし	なし	なし	建物の騒に隠れる	
天候	晴	快晴	晴	晴	晴	夜のためはっきりせず 晴	晴	
視程	良	悪、視程200m位	良	良	最良		最良	
カメラの有無	なかった	あった	少しあった	なかった	なかった		なかった	
見解	説明不可能	人工衛星	流星・いん石 説明不可能	その時点では不明 強いて言えば流星群	説明不可能		流星又は飛行機の 残骸のような感じ	
状況	ロケットのように 一直線に飛んで行 った。物体の形は 長方形で、中にも 火花が飛び、それ が雲のようになっ て見えた。窓のよ うなものはいくつ も横にならんで見 えた。北の窓をふ と見た時にオレンジ 色の火の玉が飛 んで来るのが見え た(雲天)と一緒に 外に飛び出した 見の「写し」を撮っ ておいた。その時に 上ルにあったカメ ラで撮影した。 物体は、本体の5倍 の長さのオレンジ 色の明るい火の 筋を曳きながら北 から南へ飛んでい った。	一つ一つが青白い 半透明な尾をもち それが群れをなし ていた	目撃時は説明不能 で、流星・いん石 にしては多すぎる し、火花にしては 時間的に同じ様な 状態が続くので不 思議と感じました	校門付近で7名の 教員が下校途中、 1名が北方に打上 げ火花の様な物が 上っていくのを発 見。全員が確認 その物体は仰角約 40度くらいまで上 昇した時、7-8個 に分散、そのまま 白色又はオレンジ 色で尾を引きなが ら、真上の空を無 言で、かなりの 速度で南方へ進み 仰角30度付近で、 他の建物に視角 をさえぎられてし まった	30名(3チーム)で ソフトボールの 試合中7:55ごろ 火花の様なものを 全員が確認、一 つが大きく、その 他周囲に数ヶ所 をひいて飛んでい った。(南東)数分 後、ドンドン と3度、地震の ような感じがした	発見した時は遠く にヘリコプターが 右なめトヘライ トを照らしている のかと思った。近 づくにつれ、車が 広くオレンジの帯 の中に白点などの 星の様なツブ(物 体)が無数に見え た。	全員帰り、外にも なく直ぐな道路を バイクで走行中、 上空がなんとなく やや明るくなった ので、見上げたら かなり幅広い光り 輝く帯状の物体を 見つけた。	飛行機が飛んでい くよりも少し速い 速度で、かたまっ て落ちていくとい う感じ。屋根がな かったらかなり、 下まで見えたと思 う。

既知現象の観察例





地球製宇宙機に使用されたテレビカメラ。高性能宇宙機UFOはどんな監視装置を搭載しているのだろうか？

向けて無人視測船を発進させている地球人としては、UFOが他の世界からの宇宙船であると仮定した場合、当然その視点に立ってUFOの探査能力を推察することが可能である。例えば生物を調べるためにサンプルを捕獲するという方法は初歩的調査手段であり、“ありのまま”を調べるならば、我々が子供時代ガラスビンに蟻の巣を作らせて観察したように、地球環



現代医学の先端技術CT（超音波CT，X線CT，核医学CT）

境に仕切られた“人類”の生態ならびに言語、思想、習性、文化水準、科学技術水準、危険度などを我々がそれと気づかぬ内に調査されていて当然である。しかし、単に調査目的の飛来だろうか…？

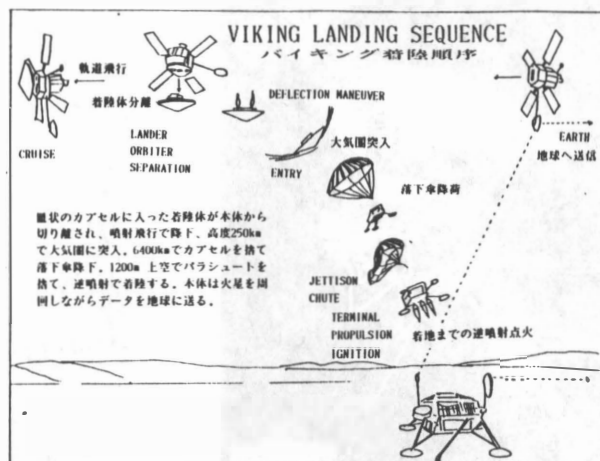
“地球の機械（航空機・宇宙船）には出来ない動きをする事実から地球にはない装置を使って、地球の技術では測定できない要素を計

測しているかも知れない”という推測は目撃体験からもいえる。我々には“動機不明”と映る不可解な行動も意味があるのであって我々が気づかないだけなのかも知れないのだ。

現在我々の医学技術は、メスで切らなくても体の内部を知る方法を実用化しているし、唾液や髪の毛一本、細胞の一片からでも相当な情報を引き出すことが可能になっている。コンピュータと組合せてゴミや老廃物から現代地球文明の姿を再現するくらいの技術は手の届く範囲にある。

地球の人工衛星による、地表偵察能力の向上も、UFOの能力を考える上で、参考になる。最近は何雲を透過して地表が観測できるようになったという。

偵察機U-2は、低空を飛行して撃墜されたが、地球製の航空機体は任務を終了しても機影を隠す能力がないので撃墜される。最近のレーダー波に対処する技術はあくまでレーダー波からの回避であって、姿は可視光線下から逃れることはできない。しかし、U-2Oの場合は出現までの経路は不明で突如現れ、(任務終了後?)即座に消える。従って何処へ「帰投」していくのか不明なのである。



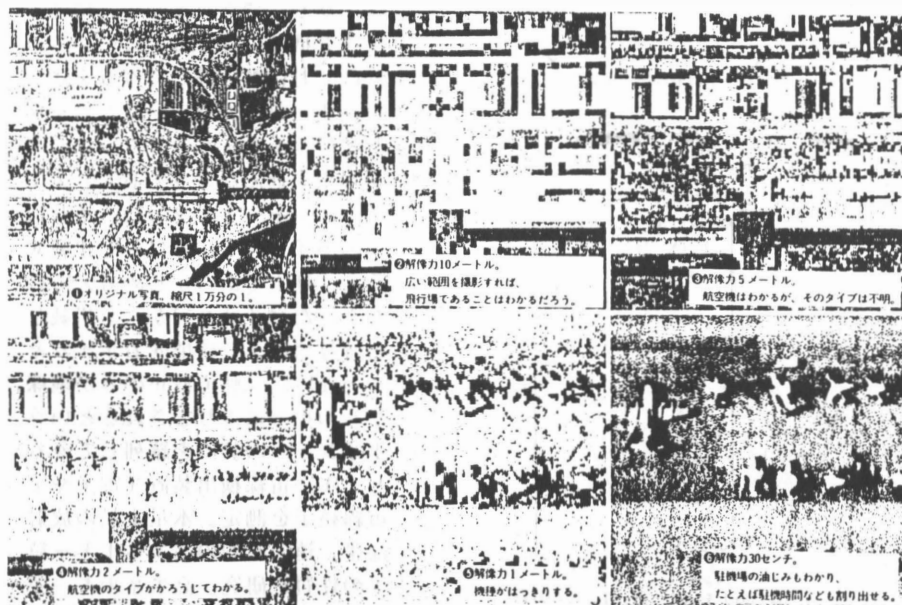
火星探査機パイキングの名降ろし惑星。火星に知的存在による前進基地があったとしたら、パイキングの着地ポイントが既に火星飛行段階で割り出されていると覚悟しなければならないだろう。物機不純な地球行爲（火星にとっては侵略される側）を遠ざけるには火星が地球にとって無価値に映った方が無難といえるかも知れど、

■ UFOと地球技術の差

巡航ミサイルは目標に至る地形がデジタル信号で記憶され、地表近くの低空を地形を読みながら目標に到達する。また、電子の目CICDは映像を電気信号に変える。東芝と防衛庁が開発した地对空ミサイル、携行SAMに使われる。この技術をSDIに応用する動きもある。

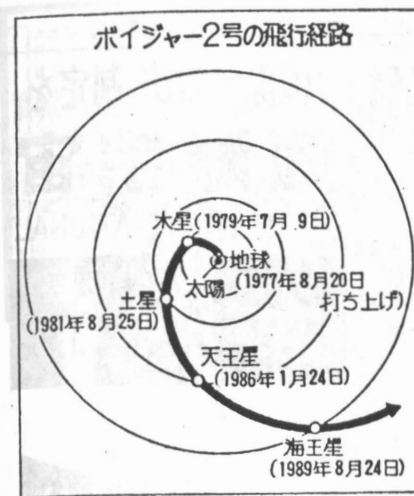
これら軍事的科学技術は、UFOにおける地上の任意の一点での出現、接近、飛行、消失の技術と比較すると、原始の丸木舟対水陸両用ホバークラフト以上の開きに感じられる。

“大衆が宇宙人の死体話題に気を取られている間、密かにUFOの破壊技術を完成させ、UFOを捕獲して技術を盗もう”などという目論みが、大国の年部で進行していたとしても対決できる相手ではないと考えた方が無難であろう。



地球上空を周回する人工衛星が何をどのような装置でどのように観測しているかを知ること、少なくとも我々自身を知る基礎となる。UFOの科学が地球科学の延長にあるとは言えないとしても同じ宇宙を共有する者同士としての発想は可能である。

■写真:『Quark』1986年8月号
「これがSDIだ!」より



宇宙船としてのUFO

UFOを単に現象と捉え、類似現象や人間の心理、果ては霊界・異次元を持ち出すのは個人の自由だが、あくまで飛行物体、さらには宇宙船として考えていこうというのが本書の立場である。

「理論」の可能性は限り無く広大無辺だが、地球上に人間という種は一つしかないのと同様に、宇宙における可能性に複雑多岐を求めるよりも、簡単明瞭な真理を求める方が生命として健全なような気がする。

UFOのを、目撃されるその驚異
的飛行形態をもって特定すると
「高性能飛行物体」「高性能宇宙
船」ということになる。「宇宙船
である」という証拠がないではない
か」と言う方があるかも知れない
が、ジェミニ宇宙船やアポロ宇宙
船が、宇宙空間において遭遇した
のであれば、相手は飛行機の類で
はなく、宇宙船の類になる。

ということとは、「次元」からでも「時間」からでもなく、空間からの訪れを意味している。「宇宙船」が宇宙に進出する背景を地球式に考えてみると、「出発惑星系」「知的生命体文明で、宇宙に進出する余裕をもつ内容」「宇宙船建造離着陸設備」「建造技師集団」「開発設計技師集団」「乗員教育訓練機関」「宇宙進出計画立案組織」「宇宙進出行動隊編成に伴う指令系統、各種指令書、事前調査各種プログラム」などがなければならぬ。

そして、最大問題が、地球という惑星に進出する動機である。UFOの研究学者の多くが指摘するようにUFOの行動の意味が不明ということから動機不明とされ、この点がUFOの「地球外仮説」という単純明解な結論を遠ざける理由

[illegible]

「宇宙とは究極的に他の種と対面する場」

になっている。U.D.()の行動は、自分達地球人が他の惑星を訪れる図式を考えた場合と余りにもかかけ離れているというのである。

米宇宙計画推進者フォン・ブ라운が生前来日し、講演の後記者会見が行なわれ、私も同僚と出席した時のことである。ブ라운博士が火星への飛行をコロンブスの新大陸発見になぞって答えた際、同僚が「コロンブスは新大陸で原住民と出合ったが、火星でそのようなことが起こったらどうするのか?」と聞いたところ、日本人記者団はドッと笑った。

“他の天体上に到達した宇宙飛行士が原住民と出会う”…これに果たして非現実的な予測だろうか。

地球における宇宙進出の動機は第一に「そこに宇宙があるから…」といった知的好奇心の満足。これは古来からの真理探求行為の延長

として位置づけられる。第二に地球外領土の獲得。これは人口爆発・資源涸渇の解決策としての位置を占めつつある。前者の動機を批判することは困難である。しかし、後者の前提となる“地球是認”には問題が多い。地球人類が今のままでふえつつけること、今の人類がもつ主義、思想、習性、犯罪、病氣などが宇宙に拡大していくことを意味するからだ。果たして、現状における地球人の“種”は、宇宙社会の建設と拡大にふさわしいものだろうか…。米宇宙船による月面着陸にしても、この意味からすれば、月に降りた宇宙飛行士は「ヨーロッパから新大陸に進出し、原住民を制圧して都市を築いた歴史と生物学的因子」を背負って月に立ったのである。幸か不幸か、月面に降下した着陸船に走り寄った生物はいなかった。もし、今後の地球製宇宙船が他の惑星の生物圏に着陸した場合はどうするのか…。「あまりにバカバカしい」というのでは答えになっていない。この問に対して明解な答えが出されないうまま、宇宙に進出していくことは、我々の地球内で繰り返されてきた異種との出会いにおける犯罪行為（濫獲、殺りく）を他の惑星にまで持ち込むことを意味するものである。

こうした“取り越し苦労”をあざ笑うかのような“地球唯一説”（宇宙では地球のように生命が芽生える環境は偶然の産物とする考え方）も一部にあるが、1983年の米NASAによる原始惑星系の撮影はそうした主張の根拠を薄めている。

人類の宇宙進出に関する実務が科学技術者だけに限定されているのも問題である。中世ヨーロッパで「宇宙の諸世界」を主張したブルーノは哲学者であつたし、「ガングジス河の真砂粒にひとしい諸世界について論じているのは『大無量寿経』という仏教経典の一つである。つまり、我々以外の世界に対する我々の態度の決定を、科学技術者や軍人のみに依ることは果たして適切であろうか」という問題提起をしておきたい。

■地球人類は真剣に
宇宙社会参加を前提とした
正しい宇宙観を持たなければ
宇宙での生存は困難になる■

米国の全国世論調査によれば、一億人以上のアメリカ人が「UFOは実在し、乗っているのは宇宙からの訪問者だ」と信じている。(Richard Hall著邦訳『UFOに関する極秘ファイルを手に入れた』P.225)という。また、UFO実在を信じる人は教育程度に比例し、大学教育を受けた66%がUFOの存在を認め、この割合は毎年人口の1%ずつふえているという。

日本においても、近年総理府の国民意識調査にUFOの項目が登場したり、公立のUFO資料館設立が決った羽咋市の例にみられるように、“UFOに関心を持つのは限られた個人”は過去になった。

これらの現状は、UFOが継続して出現している事実の表れであると言え、商社やマスコミの仕掛けたブーム的な現象ではないと考えられる。

UFO目撃が個人的あるいは小教の集団により体験されるものであっても、体験者が全世界に及ぶのであれば、個々の問題と同時に全世界の問題となる。すなわち、UFOは、無作為的に絶えず空を飛び回ったり、公衆の前、国家の元首を指定して着陸したりせず、何らかの計画に基づき、何らかの選択を経て姿を現わしているのだから、その対象の選択が、地球文明における他国間の接触とは別の基準でなされている、と表現することができる。

これは、国家ならびに為政者による管理、統括が不可能な領域における「変動」であり、国家の運営に關係する機関がこの「変動」にどう対処するかが今問われているとも言える。

地上にいる人間は、UFOを単に目撃するのが一般的であるとすれば、対処の仕方は個人の自由意思にゆだねられるのは必然である。だが、空中で遭遇する軍・民間の航空機要員は、多数の人命を左右する立場にあり、その対処の仕方は個人的な範囲を越えている。これは大気圏外を周回する宇宙飛行

士にも当てはまり、彼ら宇宙飛行士がS.O.A.的防衛手段として、接近するUFOに対し武器を使用したならば、「宇宙人來訪を認める一億人」の意思に關係なくUFOを敵とみなしたことになる。



「宇宙は人間の利己的開発の場にしてはならない」と述べ、「国際宇宙法」の制定を呼び掛ける一橋大学の中川孝教授。「人間以上の人間的存在」についても発言。我々人類の宇宙における立場を今一度、客観的に見直す時期が到来したようだ。ガリレオ・ガリレイ、ジョルダーノ・ブルーノの勇氣は時代を越えて存在する。

「宇宙は人間の利己的開発の場にしてはならない」と述べ、「国際宇宙法」の制定を呼び掛ける一橋大学の中川孝教授。「人間以上の人間的存在」についても発言。我々人類の宇宙における立場を今一度、客観的に見直す時期が到来したようだ。ガリレオ・ガリレイ、ジョルダーノ・ブルーノの勇氣は時代を越えて存在する。

ひと



火星への有人飛行は、現在米ソが急ピッチで進めている宇宙ステーション建造のあとに控えているようだ。しかし、地球人としての宇宙に対する規律も確立せず、技術だけで進出する行為には問題が多い。

98年にロボット対SD

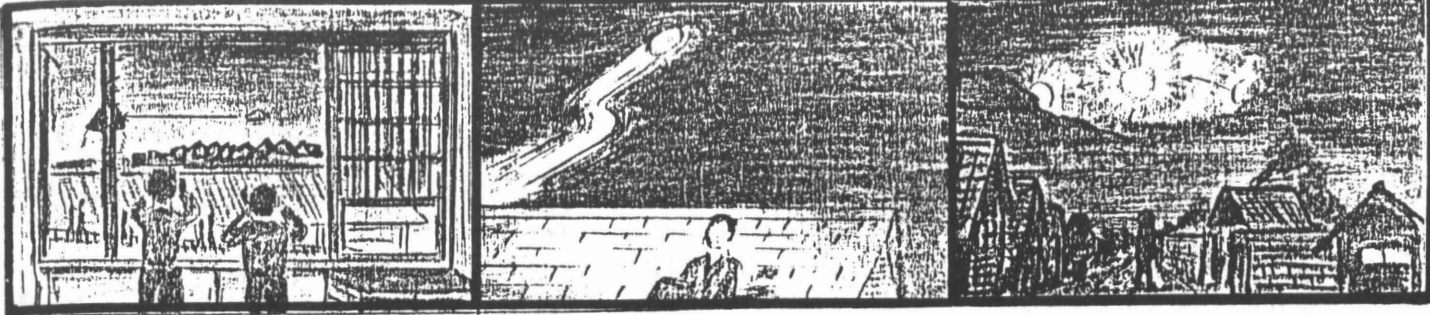
「地球外知性も必ずや電波を使用している筈」と電波による知覚信号の受信を目指す天文台は、片道数千年の通話に期待しているという。この間接的な実験(宇宙飛行を「直接」として)に年間24億以上をかけ、たとえ否定的に終わっても意義があるとしている。

あるいはまた、今日のCIAなどによるUFO情報操作の段階で、UFOを嫌悪せざるを得ない「UFO情報」が「公開」されることにより、あくまで宇宙を開拓地とみなし、宇宙利用、宇宙開発という行為の是認に利用されることも考えられる。

果たして宇宙は人類の「開拓」を待っているのか？ それとも、宇宙空間を無断で侵犯するのをじっと見守る巨大な宇宙社会が待っているのか？

この重大課題が、一握りの小教により決定推進されるのであれば地球上の山間僻地に及ぶ無数のUFO目撃者の存在はどうなるのだろうか？

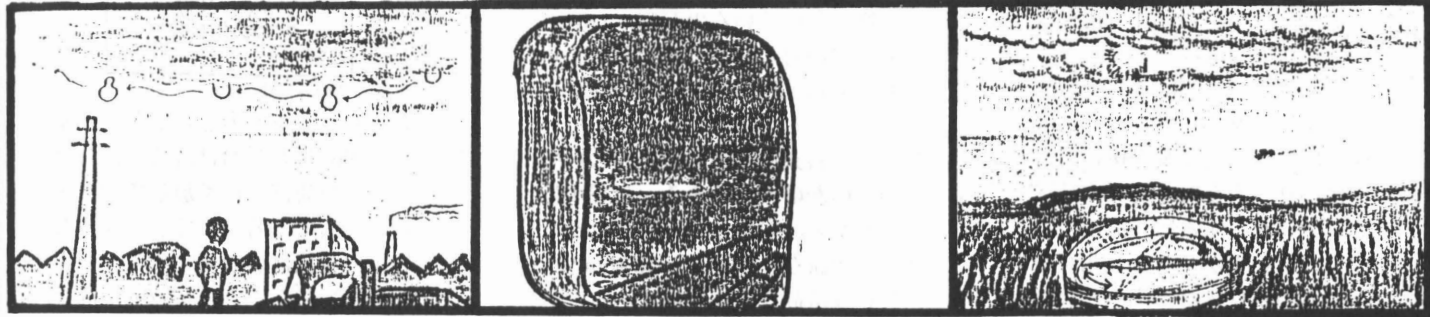
1982年(昭和57年) 10月23日 土曜日
「E.T.」との遭遇 夢じゃない
宇宙電波の受信装置網を



UFO目撃体験

「未確認飛行物体は、再現性がなく第三者が再確認することができない。また、実験で確かめることもできない。目撃者の報告があるだけである。そのため、科学誌での扱いは難しい。」(『サイエンス』1988,9日本版40頁より) この言葉にみられるように、未確認飛行物体(Unidentified Flying Object-UFO)という概念が今日のわれわれの文明社会の中で座を占めている根拠は、目撃者の報告である。従って、目撃内容と共に、それを「見た」と主張する目撃者自体も研究対象とされるべきであろう。その目撃報告が一体いかなる状況でどんな物を見たのか、また、見た人物は信頼し得るか、見た物を正確に述べる能力があるか?…等である。

私は過去28年間、様々な状況下で、既知の現象で説明出来ない空の現象を目撃してきたUFO目撃者の一人である。私はパイロットでもレーダー手でもないが、ごく普通の民間人として、主に地上からUFOを目撃、観察した。この体験を否定することは、自分自身をも否定することである。同じ様な体験をもつ無数のUFO目撃者の一人として、目撃体験の中からなるべく長時間、接近を選んで文章にしてみた。これらのUFOは私に危害を及ぼしたことは一度もなかったし、地上近くを飛行しても墜落するような気配は感じられなかった。



UFOを目撃するという場合、そのほとんどが、精神的、技術的に何の準備もしていない日常の中で、だしぬけにその瞬間が訪れる。これはUFOを目撃しようと空を観測している場合にも当てはまる事で、たとえUFO出現受入れOKであれ、一体いかなるUFOが出現するのかについては予備知識も、予告も受けてないのである。

この様な状態の時、何か異常を感じる空中現象が目に入った瞬間から、UFO目撃はスタートする。そして多くの場合、それが果たして何であるのか、確認できないまま消失などにより、視界から消え去る。ルッペルトが「未確認飛行物体」と名付けた所以であろう。その間、短くて2、3秒。長くて数分から30分といったところだ。この間に、目撃者は出来る限りの能力で観察し、記憶する。同時にカメラを持っていたら連続撮影し、ビデオがあれば最大ズームで撮影する。

この瞬間的対応作業が難なく行なわれれば「UFO目撃資料」として価値あるものとなる訳である。

この観察記録作業は長期的訓練を必要とする程、かなり高度な技術に属すると思われる。このことが理解されないと、「目撃者」の言い分を鵜呑みにする、という過ちを犯すことになる。人間の目はビデオカメラの6倍ズームでも写らない空中の小さな物体を観察する精巧なレンズである一方、見掛け上30分の月を「盆のような月」と詩的に表現するなどによる科学的資料となりにくい主観的作業しやすい機械である。主観や先入観の個人差に至っては、鶏の足を4本に描く最近の児童画の例を引合いにだすまでもなく、個人が記憶を再現する場合、「事実にとどれだけ忠実であるか?」を確認することは極めて難しい。

■定時出現のUFO■

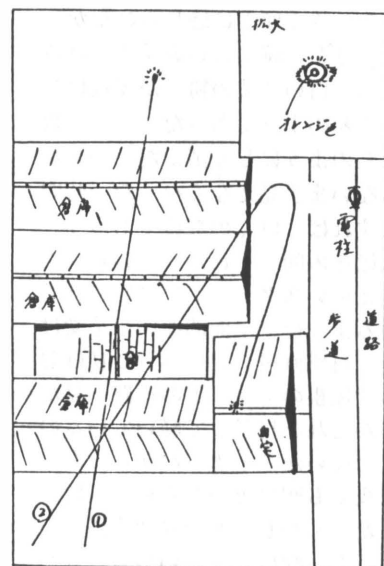
1961年秋頃、私はUFOを目撃するために光をモールス符号で空に向ける装置、音声光の波に変えて空に向ける装置などで毎夜のように観測していたが、次に定刻に観測しようと決め、毎夜午前0時を開始とした。観測は自宅に隣接する倉庫の屋根で、時に応じて

広い屋根の上を移動して場所を設定した。時刻を0時と決めた直後、のある夜、屋根の斜面に座って腕時計を見ながら時刻到来を待っていると、突然バツと周辺が明るくなり、屋根のスレートが青白い光に満たされた。私はハッと顔を上げた。するとブルブルと振動しているような純白の光の塊がジグザグに上昇していくのが目に入った。すぐ頭上に感じられたが、大きさを正確に言い表すことは難しい。白い「火の粉」が屋根に落ちるかのようであった。この光物はどのようにして消えたのか分からないまま見えなくなった。時間にすれば、ほんの数秒であろう。私はその間、それが空に張られた見えないスクリーンに投影されているような、平面的な印象を受けた。目撃直後、我に返った私は急いで屋根の上から下の道路を見た。誰かこれを目撃して騒いでいるのではないか?と思ったからである。深夜でも駅に近いため通行人はあった。しかし、何か異常を感じたような気配はなく、いつもと変わらぬ通行状態に思えた。田端駅か

ら陸橋をわたり、下田端へと向かう通勤者の流れの一部は、陸橋から下る人道の坂の上からちょうど大宮建材の建物を見下ろす感じで下ってくる。その位置からなら、発光体が屋根の上近くまで飛来した状況を客観的に見られる筈であった。私が天理市に来て、天理大学体育学部の前で発光体に遭遇した時は、学生達が「UFOだ!」「UFOじゃないか!」などと騒いでいたのである。

もう1件、0時の観測開始と同時に現れた現象について紹介したい。これらの目撃は、克明に記したデータを控えもとらず発送してしまい、その事に気づいた時は数年が経過していた。それで、最も古い目撃ノートに記録されている前後のデータから1961年秋を割り出した次第である。

さて、次の目撃はこうである。その夜、午前0時少し前、私は2棟の屋根の谷間にある狭い斜面に横になり、西を向く姿勢で星空を仰いでいた。すると、流星のような白っぽい光がサーッと北から南へ走るのが見えた。するとまた、サーッと同じ光が流れたが、すぐ上空に感じて私はあわてて立ち上がり、今の光を目で追うと、何とすぐ近くの電柱の真上でUターンして戻ってきたのである。それは流星ではなく、小さな光るものであった。しかも、一つではなく、2個あるいは3個程が私の立っている周囲を飛び回っているのである。「こんな時間にコウモリか?」



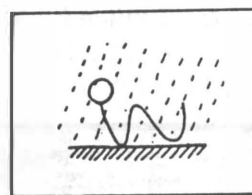
1961年秋、東京田端の自宅にて

と思った。なぜかという、光体の中心部に「目」を思わせる同心円のオレンジ色のものが光っており、それを何故かコウモリが目だと思った訳である。しかし、その大きさは数センチ〜10センチの面積をもつ門に感じたから、鳥の目とは考えにくい。フクワウが目を光らせて飛ぶのは見たことがないが、テレビで見たとき少し似ているとは思った。しかし、そんな巨大な鳥ならば、バサバサと羽音がするであろうし、私がコウモリと思った程の無音性、急旋回の飛行は有り得ない。動きは滑らかであった。それが数メートルと感じるまで接近した時、目をこらして観察すると、オレンジに光る同心円の周囲に振動するような、「何か」が取り巻いているのが判った。この目撃の再現スケッチで最も古いものでは、円の左右にオレンジ色をはみ出して翼のように描いているが、振動する部分に色がついていたのかは不明である。目撃中はそれがUFOだという意識はなく、「不思議な小物体、一体何か?」という冷静な意識状態であった。観察の中で特筆すべきは、同心円の本体はどこから見ても、そのように見られ、ある物体や生き物の一部であれば、見る角度によって隠れる場合が有り得るが、終始発光部分には変化なく飛び回っていたのであり、何かの生き物ならば、何故どこかに飛んで行ってしまわないのか?…などと考えていた。

私の懸命の観察はここまでである。それらは、瞬時にして消え去ったのだ。飛び去ったのではない。あれほど盛んに飛び回っていたものが、全部書き消すように見えなくなったのである。一つくらい残るとか、どこかへ飛び去っていくのが見られたならば、「変な鳥がいたものだ」くらいの気持ちで済んでしまったかも知れない。しかし、「消えてしまった…」とボカンと立っている意識の中に「あれは、UFOだったのではないか!」という衝撃がどっと押し寄せた。状況を整理すると、観測開始の0時に突如流星のように出現。推定高度数メートル〜10数メートル、100メートル以内の空域で目撃者を中心に巡回飛行し、やく30分後瞬時に消失。ということになる。

夜飛ぶ鳥や夏の夕空に乱舞するコウモリは見慣れたものであり、それらの誤認でもなかったと確信している。

UFOの、特に小型で地上に接近してくる種類は、案外こうした何気ない外観で現れるのではないだろうか。妻ユキの体験で、1966年11月のある夜、札幌市内藻岩山付近を車に乗って雪降る中を走行中、前方の雪道の上を飛び跳ねる雪のように白い球体がヘッドライトの光の中に浮かび上がったのを目撃している。50m くらいの至近距離であったが、2、3秒で消



1966年11月、札幌

えてしまったとのことである。また、1963年6月23日筑波山におけるUFO観測会に参加していた筆者の友人で、若くして亡くなった豊田慶雄氏は、観測する人々が上を向いていたとき、足元の隙間を縫うようにして、小発光体が飛行していくのを、もう一人それに気づいた女性と共に目撃。「誰も気がつかないようだった」と語って



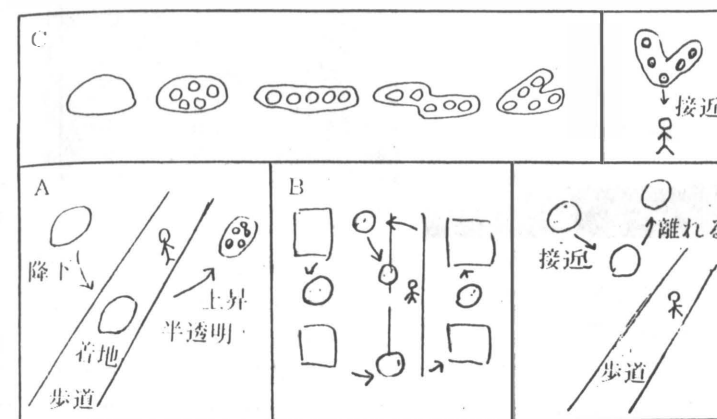
1963.6.23 茨城県筑波山

くれたことがある。このようなものが人の行き交う町中で現れたのを妻の兄蝦沢松雪氏が目撃している。時に1965年の秋頃の夕方、松雪氏25才であった。以下は筆者宛書簡の何通かを整理したその驚くべき内容である。

■至近距離からの目撃■

札幌駅前から南へ大通りに至る道路の歩道でバスを待っていた。位置は五番館と北海道建設開館の中間付近である。

ビルの谷間の車道上空に、突然セウハン（ほとんど透明で、わずかに反射光が確認出来た）が風に吹かれた状態で現れ、歩道に降下、着地した。路面を二転三転し、再び舞い上がったと思った時、その



1965年秋、札幌駅前におけるUFO地上接近の目撃。隊形を変えながら目撃者を中心に旋回、一度は目撃者に向かって接近するこのパターンは、1986年12月21日、調査船開洋丸のレーダーによる遭遇時における軌跡と酷似している。同一の意思表示とも受けとれる貴重な目撃である。

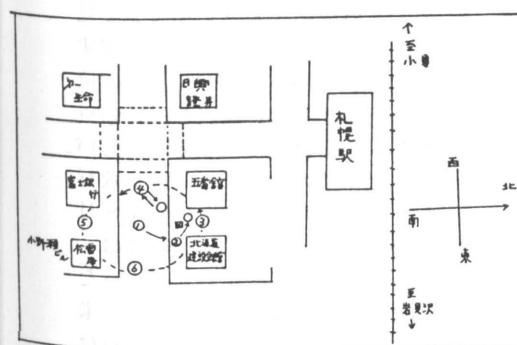
“セウハン”の中に数個(約5個)の発光体(蛍光グリーン)が出現した。(A)

そして、それは私の回りを、接近したり離れたたりしながら旋回し始めた。(B)

“旋回”といっても、ビルの谷間なので、ビルとビルの間の四ヶ所の空間での飛行状態を確認した。飛行範囲は高さ10数メートルのビルより、低空。かつ車道をはさんだビルとビルの間よりも外ではなかった。旋回中、UFOは四つの編隊のパターンを見せた。(C)

中でも、それが私に向かって接近してくる様子は、隊形がV字あるいはハート形になっていた。発光体は野球ボールが5個並んでいる感じで、上空にあるとき常に振動を続け、“生きている”という感じを受けた。

町なかをUFOが旋回しているのに、他の人々は時間が止まっているかの様であった。私は声を上げようとしても声が出ず、バスに乗ろうとしている最後の一人を引っ張ってきて、「あれが見えるか?」と聞き、「見える」と確認してもらったのが精一杯であった。バスの中で、私はその若者に名刺を渡しただけで、証言記録を得ることを逸してしまった。



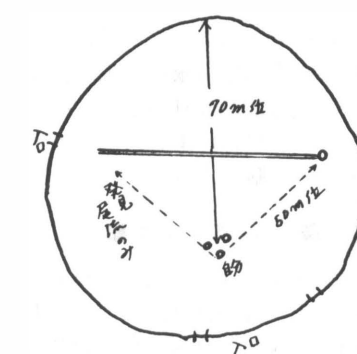
1965年秋、札幌駅前UFO出現の位置関係を示す。



1966年冬の札幌市円山公園で、2人の友人とUFO観測をしていた大宮ユキは、友人越しにオレンジ色の光の帯を目撃。即座に目を先端に走らせると黄色の球状頭部が確認できた。

至近距離でのUFO出現例としてもう2件、妻の目撃から紹介してみる。

まず、1966年冬のある夜、札幌市円山公園の広場において2人の同僚とUFO観測を行っていた時の事。「私は2人の後ろから左手の地上1.5mの空中にオレンジ色に光る細長い光の帯を見た。ハッとして、その帯の先端(右手)に目を走らせると、真円で面積をもった直径10cm〜20cmの本体があった。それを確認した直後、本体も尾流も消失してしまった。」



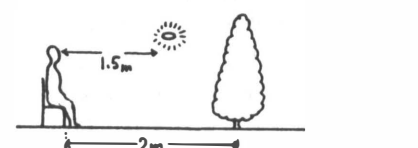
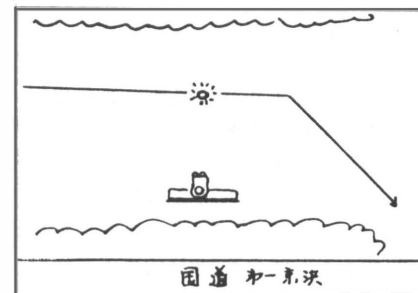
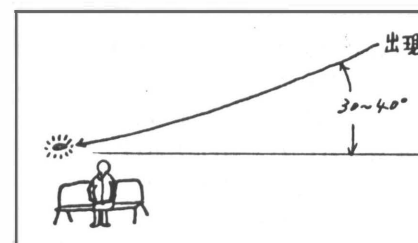
1966冬、札幌市円山公園で目撃した小球体。

次は1969年9月、妻が独身時代に東京の品川区に勤めていた時の目撃である。

「その日、私は昼間、南大井4丁目付近の公園のベンチに座って考え事をしていると、左斜め上空より、弾丸のように黄色の太い光跡を引きながら、楕円形の小さな物体が出現した。それは、私の前でターンして右後方の国道(第一京浜)へ出かかる直前で消失した。この時、不思議なことに車の流れの絶えない国道が、その時だけ車の流れが途だえ、“空白状態”になって騒音もなく、静かだった。私の真ん前でターンした時の物体

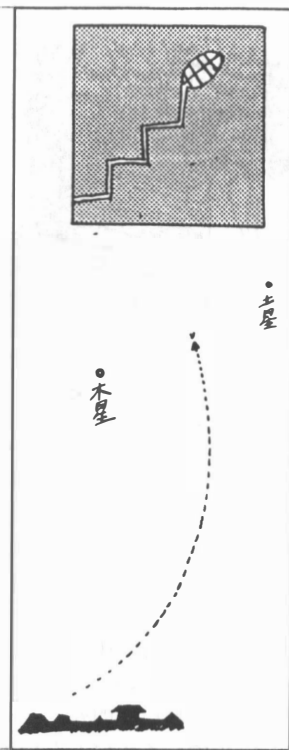
までの距離は1.5mほど。驚きで動けず、息を止めて見つめた。消失後もしばらく身動きできなかった」

この場合の飛行物体は上空から地上に接近したというよりも、すぐ近くの何も無い空間から“発射”された感じで、その何もない地上近くの空間にこれを発射した目には見えない、より大型のUFOが降下していたのか、小物体(10cm前後と思われる)自体が姿を消して降下し、“発射”されたかのような出現を見せたかのどちらかであると言える。



1969年東京品川区における地上スレスレのUFO接近の位置関係を示す。飛行物体の大きさは10センチ前後、遠隔コントロールによる飛行と考えられる。出現時は車の流れがとだえた空白が生じていた。

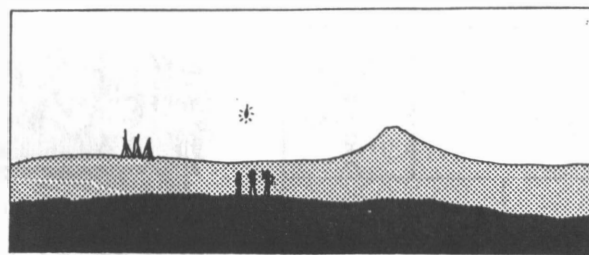
1961年9月4日夜、いつものように自宅に隣接した倉庫の屋根に上って、UFO観測を行っていた。空は晴れて全天星が見えた。午後8時55分、北の空から小さい



1961.9.11 PM8:55東京田端の自宅から観測。土星と木星の中間から大気圏外へ遠ざかるように見えた。この16年後の同日ボイジャー1号が木星と土星に向けて打上げ

光が現れて、次第に仰角を上げていくのが見えた。飛行機でも人工衛星でもなく、見掛けは飛行機よりいくぶん速く感じた。それは全体として楕円形でオレンジ色。楕円の中に光の点が集まっていて、それが2分の1秒ごとに明滅し、その度に細かくググザグに揺れていた。ふと、夜空を走る急行列車を思い浮べた。昔、空想科学映画でよく似た飛行物体が登場していたが、それ自体にとってはごく自然の飛行に思えたが、既知のどんな飛行物体をもってきてもこの飛行は無理といった感じだ。はじめ金星ほどの大きさに見えた光体は、角度が上昇するとともにロケットの打上げのように小さくなっていき、木星と土星の中間あたりで大気圏外へ飛び出したように本当に小さくなって星の彼方へと去っていった。この間約30秒である。発見位置は北仰角15度。天頂を経て南仰角70度の木星と土星の真ん中に向かって上昇したかたちで姿を消した。消えたというより、超高空へ飛び去ったという表現が的確である。ジグザグ飛行の様子は、振幅が狭く、ほとんど“首振り運動”に近かった。“首振り”の度に明滅して飛行する様子はビッピッと機械的な動きに感じられた。

近年、私はUFOの飛行形態から意思表示を読み取る研究に没頭していた。1988年11月24日夜、ふ



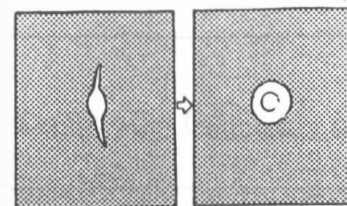
1963.1.4 神奈川県保土ヶ谷にて

と土星の中間で消えたことから、木星と土星の軌道の間に何があるのか調べたところ、HIDILGO（スペインの下級の貴族の意）という小惑星が土星と火星にまたがる長円軌道で回っていることが分かった。次に土星探査機ボイジャーについて調べた。ボイジャー1号は1977年9月5日に打上げられていた。偶然にも、土星と木星の中間に消えたUFO目撃と同じ日である。私は当時16才であったが、目撃から16年後のその日ボイジャーが木星と土星に向けて打ち上げられたのであった。

これらの符合は偶然であろうか？UFOが飛行船時代の幕開け直前に飛行船に似た姿で北米各地に大挙現れ、ロケット時代到来の直前にロケットに似た姿で北米を騒がせた事実、UFO研究者の間で周知のことだが、1961年は4月12日ソ連のヴォストーク1号による人類初の人間宇宙飛行が現実になり、米国はまだ5月のシェパード、7月のグリソムによる15分余の弾道飛行の段階であった。

■ある目撃の考察■

1963年1月4日午後4時45分、横浜保土ヶ谷の横浜国大グラウンド西側で、現在写真家の萩原新八氏と鈴木昌男氏とで夕陽を見ていた。はじめ目の良い萩原氏が発見して我々に教えた。一見それは小さな三日月に見えた。私は20倍の双眼鏡で観察した。すると、三日月と思っただけで、空飛ぶ円盤の側面が縦になって空中に静止している状態であることが判った。すなわち真ん中が楕円でその上下に翼とみられる突起が三日月の両端のようになっているのである。暗くなりかけた濃紺の空を背景に、白く光り、肉眼では金星の輝きに似ていた。鈴木氏に双眼鏡を渡し、再び目にあてて見ると、どういつ訳か前と違ってボヤッとした“ドーナツ状”に見えた。「もう消えるのかな？」と単純に考えて双眼鏡から目を離した。萩原氏は「撮



1963.1.4 双眼鏡で観察した静止物体の変化

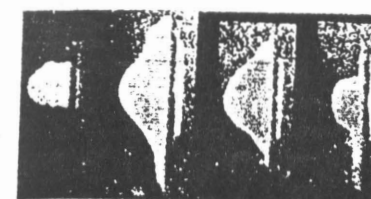
影はちょっと難しい」と望遠レンズを覗きながら言った。この後少ししてそれは見えなくなった。

私はこの時の目撃を土星形タイプのUFOが縦になって滞空しているのを見た。と簡単に考えて何年かが過ぎた。そして、ドーナツ状に変わったことに疑問も持たなかった。ところが、ある時、妻が土星形UFOの側面と平面の想定図を描いているのを見て、「あの時のUFOは90度体勢を変えたのではないだろうか？」という考えが浮かんできた。簡単に言えば、断面を見せて縦になった円盤が丸い面を向けた、という具合である。ただ、UFOの場合、中央の本体と周囲の翼の境目が円の中の円、ドーナツ状となって見られた訳であった。私はようやくこの事実が気づき、なぜあの時、最後まで双眼鏡を覗き、果たして単に“ドーナツ”状だったのか、多重円ではなかったのか観察すべきだったと反省している。

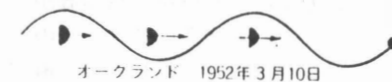
この目撃を言葉を変えて表現すれば、地上に対して垂直の姿勢で滞空した土星形UFOが、側面と同心円状の平面を静止位置で90度向きを変えることによって示した……となるのである。

しかし、それだけでは説明のつかない気がかりな点がある。それは、スケッチにもあるように、三日月状の形態から、ドーナツ状になった時、大きさが小さくなっていったのである。また、鮮明に見えた“空飛ぶ円盤”の側面像が、円形の“平面”を見せたときに何故ややボヤけて見えたのか。また、消失状態は序々に小さくなって見えなくなった。この現象を説明するには、このUFOが見かけの位置はそのままで、遠ざかっていったという事以外には考えられない。

垂直体勢の円盤状UFOが飛行した実例として有名な1954年8月3日アルプス上空の4機編隊は、東から北西へ水平飛行していったと撮影者は述べている。また、米オークランドで1952年3月10日に



1954年8月3日アルプス上空の4機編隊

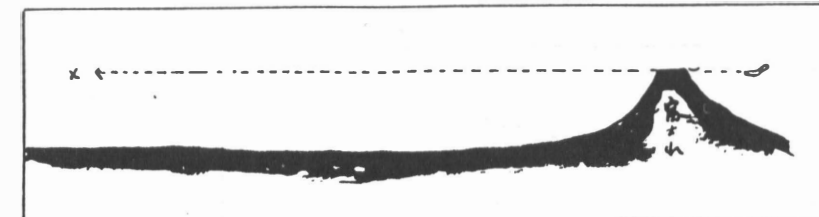


オークランド 1952年3月10日

目撃された例は円盤の上部を進行方向に飛行している。アルプス上空のものはどちらかに飛行したか特に述べられていないが、写真上の常識的印象としては右から左に、ドーム状の上部を進行方向にしているようだ。このことから、我々の目撃したUFOが、垂直になって、円盤の側面を見せ、次に90度機体をバンクさせた時、底部をこちらに向け、上部を向こう側に向けて、後退していったものと思われる。完全な水平飛行で左右のブレもなかったことから、我々目撃者の目には、次第に小さくなっていくようにしか映らないのである。円形ドーナツ状の底部を見せながら後退する物体を“ボヤけたドーナツ”と見ていた訳である。この事実が気づいたのは実に、目撃から26年目のことである。

■巨大輪郭の移動■

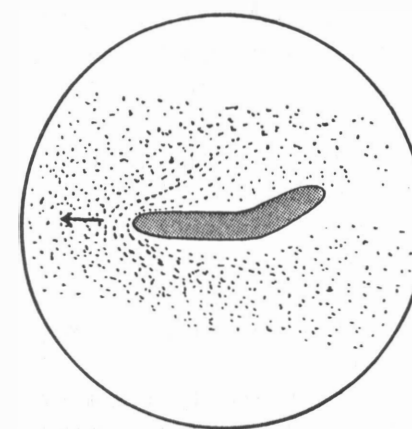
1963年10月12日夕刻、横浜市保土ヶ谷の横浜国大グラウンド西端斜面で日没の光景を見ていた。そこはコンクリートブロックを積み上げたまま放置されている宅地造成の一角で、人気のまったくない石段や区画の中に立って、黒々と横たわる富士山周辺の山並みを眺めていると、富士山のやや右に巨大なブーメランのような形が現れていた。富士の山頂と比較して、その巾と同じほど巨大であり、薄く半透明の灰色で、見かけは富士山と同じ位の距離にあるように思われた。私は20倍の双眼鏡で観察。それが富士山頂の向こう側を通過したのを確認した。ブーメラン型のもので、始め“空の一部が移動している”という感じであった。物体がそこにある、というよりも、輪郭があって、それが移動しているのである。“巨大な垂直尾翼をもった葉巻形”という表現もできるだろうか、この見方から言えば形態は米海兵隊進取用輸送ヘリコプター、ボーイングバートルCH-46シーナイトが最も近い。しかし、双眼鏡の視野でゆっくりと南へ進



1963.10.21 PM5:23-27 神奈川県保土ヶ谷から見た富士山の付近を移動した輪郭の経路

行する半透明のそれは非物質的な外観を呈し、丸みを帯びた先端部から中央までの葉巻部分が地平に対して水平を保っていることで何とか人工的な現象に間違いないという印象を確かめた程なのである。

双眼鏡観察で私が驚いたのは、その先端で大気を押しのけて進んでいる様子が見られたことである。目の高さ付近の空は、上空の大気が澄んでいても、やや濃んだ様になってチリ状の雲が漂っている帯が見られる。双眼鏡の中で、その輪郭の先端部は、確かに“チリを上下はじきとばしながら”進んでいた。一見、飛行機の風洞実験の断面を連想するが、風洞実験における気流ほど激しい現象ではなかった。



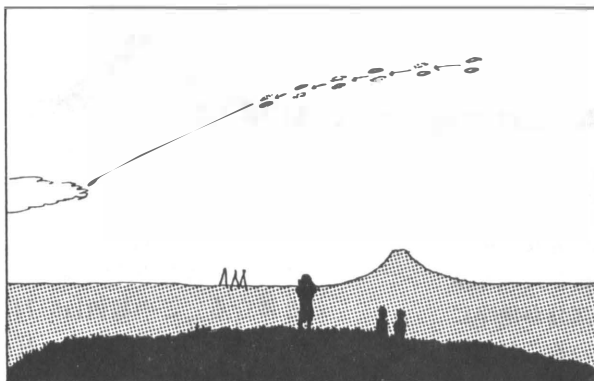
1963.10.21 PM5:23 保土ヶ谷から双眼鏡で観察した巨大な輪郭は、大気の浮遊物を押しつけて移動した。

この物体は富士山から南へ約10度まで進み、消失した。時刻は午後5時23分から27分までの4分間である。この数値は絶えず時計を見る習慣であった頃から誤差は少ない。見かけの大きさは「飛行機の10倍」と記録されている。自分で書いておきながら、この時、何を根拠に10倍としたのか定かでない。また、この物体が富士山の向こう側を通過したという、重要な点についても、シルエットになった山の頂上をかすめるような位置関係で、山の手前か否かを判定することは難しい。しかし、ここで仮定として、目撃地点から80Km離れた富士山の頂上と同じ位の巾

の飛行物体が通過したとすると、その大きさは長さ700m前後ということになる。この数値はB-747ジャンボ機の約10倍である。従って、目撃時に記した「飛行機の10倍」という数値は、保土ヶ谷の南、相模湾上空付近を飛行する定期旅客機を観察した上での比較であったとすると納得いく。この場合における10度分の長さは約15Kmとなる。この数値は富士山頂の巾700mの20倍ほどになるが、目撃当時のスケッチにもそれが表現されている。ちなみに、この距離を4分かかったとすると時速225Kmとなる。この速度は巡航速度880Km/hのB-727-100の約4分の1である。これも目撃時の見かけ状況に一致している。しかし、雲の移動とは比較にならない速度なのである。ところで先に触れた米海兵隊ヘリコプターは最大速度250Km/hである。すると、速度と輪郭はこのタイプのヘリコプターに近い。ただ大きさと空に融け込むような“質感”が異なるだけである。また地球製の航空機に欠かせないライトの類、ローターもない。ここで思い出すのが、この目撃から10年後の1973年10月18日、米国オハイオ州で軍用ヘリコプターが遭遇したUFOで、その形態が遭遇したヘリコプターの“物真似”的形態であった。

■UFOの特殊飛行■

1964年2月14日、保土ヶ谷へ向かう横須賀線の車内から夕刻迫る空の色を見ながら、何かが待ち受けている気がして、下車してから一気に富士見ヶ丘の高台まで駆け登った。時刻は5時を回り、陽は既に没していた。富士山が黒くシルエットを見せる西の空を観察。空は澄み渡り大気が肌に冷たい。5時15分頃である。仰角70度の高空に針のようなものがキラリと2つ光ったのが見えた。私はすぐカバンから20倍の双眼鏡を取り出してそれをとらえた。2つの光るものは視野一杯に入った。両端が鋭く尖ったレンズ型をしていた。空は暗くなりかけていたが、まだ青さが残っていた。その組習を背景



1964.2.14 神奈川県保土ヶ谷から目撃した純白の針状物体は、双眼鏡観察により凸レンズに近い面を持つ物体で、2個が各々独自の運動を繰返し、また交互に姿を消して輪郭だけになるという特殊な飛行をみせた。

にそれは純白の輝きを呈してくっきりと見え、上下にペアを組んでいた。上の方がやや前に出る恰好である。

それらはゆっくりと南へむかっていった。しかも、各々両端を上下させ、ちょうどシーソーのような運動を繰返し、しかも、片方の物体が次第に薄れていき、やがて輪郭を残してすっかり背後の空と同じになり、白い糸で型どったようなレンズ形の輪郭だけが両端を上下させてシーソー運動を繰返しているのである。そして今度は、その輪郭の中が次第に白く染まっていき、再び輝く純白のレンズ形になると、もう一方の物体の白さが薄れて背後の濃い青になり……とこうした現象を繰返しながらかつていくのである。この“出現”と“消失”の周期は3秒ほどであった。片方が白く染まり姿を元通りにするや、即座にもう一方の中心部から白さが薄れて全体に広がり、輪郭の白線で形とられたレンズ型になるのである。時間の経過と共に2つのUFOは遠ざかるためか次第に小さくなっていった。

この時、偶然2人の小学生が通りかかった。私は彼らに「あそここの光ったものが見えるか？」と尋ねた。一人は首を振ったが、もう一人は「見える！」と答えた。

物体はさらに仰角が低くなり、発見から約5分後、仰角10度付近にたなびく白雲の中に突入し、2度と現れなかった。

20倍双眼鏡の視野は3度ある。2つのUFOは、3度の視野に余白を残して収まり、その中で、不

思議な現象が克明に観察できたのである。発見時は少なくとも見掛け20分はあったと考えている。30分は月の直径である。従って、この場合“月の3分の2の長さがあった”ということになる。私はこの目撃の後、多くの内外UFO目撃資料に眼を通して見たが、私の見たような例はまだ見当たらない。少しこの現象について考えてみたい。

2つのUFOが輪郭を見せているのは、まだそこに実体があり、あるが眼には空しか見えないという“空の保護色”とも言えるものをまとった状態を示している。輪郭もなく、“完全に消えてしまっている”状態であったならば、UFOがまだそこに存在しているという証明にはならない。しかし、輪郭を残して本体が“消えている”ということは、“全部姿を消しても位置は変化しない”という技術を目撃者に教えていることになるわけである。

よく、UFOが見ている前で消失してしまう事実を説明する理論として、「異次元」を持ち出して、その世界に入ることで説明してしまう理論があるが、もし「異次元」に入って消えるのであれば“全体”か“半分”かといった状態になると考えられ、輪郭だけを残すという現象は説明しがたい。空間のもつ神秘的側面の問題はさておいて、この場合に限って話を進めれば、UFOは異次元に入らなくても、技術的に姿を見えなくすることが可能であり、「見える」という状態と「見えない」という状態の境

界で様々なコントロールが可能という、地球科学では到達しえない技術が示されているように思う。当然、上空のUFOが“戦闘機からは見えず、レーダースコープのみに映る”という現象もこの技術を物語る。

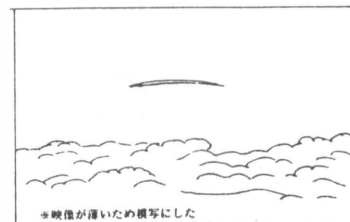
一方、“何も無い空中での見え隠れ”については、UFO自体のコントロールによるのか、空中における未知の処理条件によるのか、どちらとも言えない現象もあり、簡単に見える見えないの問題を結論づけることはできないが、私の目撃した事例はUFO側のコントロールによる見え隠れと受けとることができる。

この目撃に関連して、出現中のUFOが、カメラのレンズやフィルターによって肉眼とやや異なった像に変化するケースについて述べておきたい。

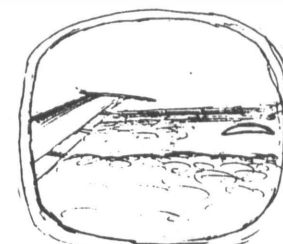
■UFOと光学機械■

1967年2月、札幌でテレビ出演のため大通公園に集まった現在の妻ユキと友人達は、テレビ局へ向かうとした時、上空に2段になって整然と並ぶ弓形の雲を見つけて「UFOか？」と観察し、カメラで補捉したところ、肉眼では黒い弓のように見えたが、黄色フィルターを付けた標準レンズを通して、ファインダーをのぞくと“弓”の“弦”に当る直線がクッキリと見られたのである。

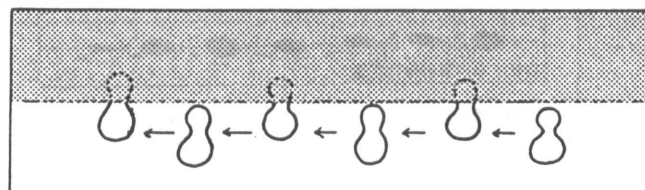
また、これと逆の場合もある。1980年7月24日午後1時35分、大阪発札幌行日航B-747（定刻より30分遅れて離陸）、雲海の上にくっきりとした三日月形の雲を見つけた。「形の綺麗な雲だ」と言いながら私は最高200mまでのズームで焦点距離を変えながら3枚撮影した。同時に妻ユキ長女志麻もこれを観察。我々の座席50Kは進行方向に向かって右側座席で左が日本海。右に陸地を見ており、“雲”の方向は西である。このときの飛行機の位置は時間的に津軽半島付近と思われた。三日月形の



1980.7.24PM.1:35津軽半島付近上空で機上から撮影した“三日月雲”



肉眼で見たその形の目撃直後のスケッチ。



1964.8頃東京にて

雲は形を変えることなく次第に後方へ移動。私が観察の目を何秒かそらしていると、「消えるから見てごらん！」と言うユキの声で再びそれに目をやると、後退しつつあるその形全体が薄くなりたちまち消失した。時に1時40分。約5分間の出来事であった。

ユキによると、私が目を離している時、“雲”から飛行機の窓ガラスに向かって放射されている様な光を感じ、それが短い時間にパッパッと青と白の交互発光に感じられ、これが5〜6回続いたので「これはもうすぐ消えな」と直感。それを口にしたのだと述べた。

後日、フィルムを現像してみると、以外なことに、あれほど鮮明な三日月形の輪郭を見せていたのにそれが消え、雲海の上には薄い弓形に近い、空にとけ込むような像が写っていたのである。3人の目撃証言と、出来上がった写真とは確かに一致しない。この現象を説明するとしたら、肉眼に映じる像と、フィルムに映る像とはなんらかの物理的な違いがあるという事になる。人間の目と一口に言っても、生活習慣、職種、様々な訓練の有無、機能差などがあり、色彩に対する個人差もある。カメラの機能が機械的に均一であっても、生身の機能は基準があいまいであるから比較は難しい。

このとき使用したカメラはアサヒペンタックスME、レンズはコムラズーム80mm-210mm、フィルムはネオパン400、1Wフィルター、絞り22、500分の1秒で撮影した。

■彗星形物体の見え隠れ■

1964年8月頃、私は家の仕事で軽トラックに資材を積み高門寺付近を走行していた。空は晴間が広がっていたが、薄い層雲に覆われていた。

井の頭線の踏切りを越えた当りで、フロントガラス越しに白い物体の浮かんでいるのが見えた。それは球が2個上下につながった彗星のような形で、静止しているようだった。私は車を安全な所に停

めて、車外からそれを観察した。

仰角は50-60度、縦になっていた。彗星を下から見上げている感じである。表面に光沢はなく、雲の白さに近いが比較できる雲はなかった。「変わった形の風船だな」とも思ったが、空中にクギづけされたような状態は風船ではない。

ただ見ているだけでは果たして静止しているのか、動いているのか判らなかったのが、電柱の垂直線に物体を重ねて見た。するとわずかに確認に移動していることが判った。さらに観察を続けると、物体は上空の薄い層雲に頭を突っ込んだり出たりして、彗星の上の球が見え隠れしていた。これをゆっくりと繰返しているようであった。高度は500m前後であろうか。空は見た目には青い、いくぶん白みがかった漠然とした状態に見えたが、この物体が、層雲とその下の大気の境目で上下に動き、姿を一部隠すのを見て、空にはかなり明確な密度の境界があるのだな、と思った。“彗星形”の見え隠れを目撃したことで、突然現れて消えるUFOの大気の密度差を利用した“出没技術”もありえるのではないかとと思う。

この目撃はデータを書いたものを人に渡してしまったので、これ以上は書けない。消失時は次第に小さくなっていった。観察時間は少なくとも10分はあった。大きさはかなり小さいものである。上下運動は自然の成行きにも感じられたが、コントロールされていたのかも知れない。波間に見え隠れするグイのようでもあったが、周期はもっとゆっくりしたものである。

■自転する“円盤”■

1975年5月18日午前8時頃、石上神宮の境内から山辺の道を北に向かって歩いていた。空は薄曇り、風もない。しばらくして上空をジェット旅客機が東から西へ、ちょうど真上を横切るのが見えたので、仰いで眼で追っていたが、突然、飛行機の付近から黒い小さな物体が現れて飛行機の経路と交叉する

コースで飛行してきた。空に見え隠れしながら降下するように見えた。物体の大きさは飛行機よりずっと小さく、出現当初、飛行機と同高度と仮定すると1m前後の大きさに感じられた。形状は楕円の扁平な、“円盤状”であった。それが進行方向を軸として廻転していたため、その全体像が確認できた。このとき私は手にしたコニカC-35 28mmカメラで、物体をファインダーの真ん中に入れて連続10枚撮影した。

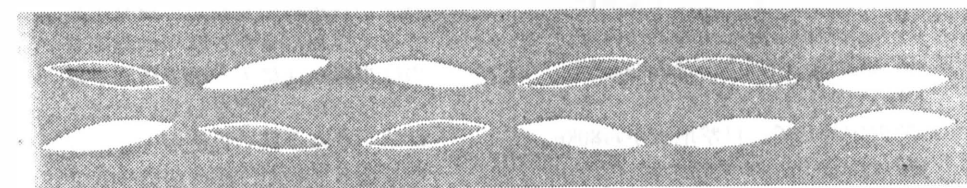
物体の目撃地点は天理市布留255山辺の道路上。物体は直線飛行で道に沿って建つ浄土宗大念寺の屋根上空（見掛け上）で停止して数秒間滞留し、その後やや上方に垂直移動。そして再び元の位置に急降下したが、この頃になるとかなり見にくくなり、いつの間にか見失った。

発見から見失うまでの総目撃時間は約60秒。この間、撮影に要した時間は後日現場を訪れて、ストップウォッチを押してカメラのシャッターを10回切り、計ってみたところ30-35秒であった。発見から視認、カメラを構えるまでの時間と、ファインダー内で見にくくなり、肉眼で消失までを目撃した時間が残り20秒前後ということになる。目撃時刻は8時06分と記録されている。

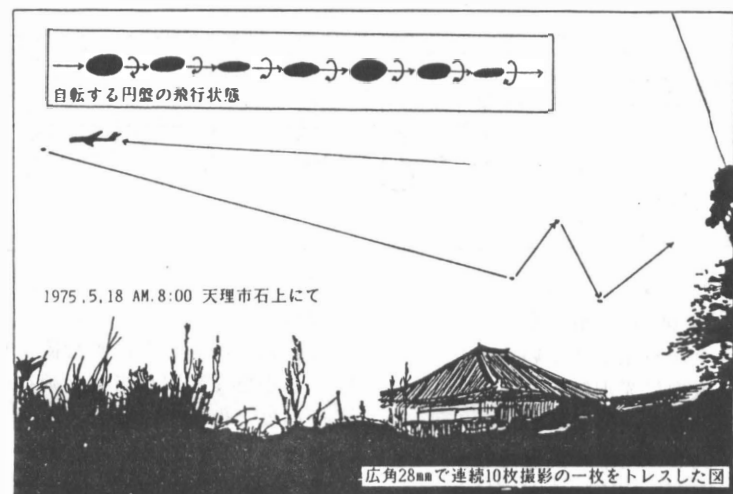
発見位置はやや南仰角40度付近、見失った大念寺の上空は10度あった。物体の飛行経路は約30度。従って連続シャッターで10枚撮影したが背景は少しづつズレているだけである。望遠レンズであれば優秀なUFOの飛行状態が記録できた筈である。

この時上空を飛んだ旅客機を、早速調べたところ、東京発大阪行日航131便のDC-8が該当した。目撃時に見た機体の形状とも一致する。私は「もし、パイロットが目撃していたならば新聞に載るかも知れない」と思い、2、3日新聞に注意したが、それらしき記事は掲載されなかった。

それから3日後の5月21日午前7時15分、私は再び同一の飛行物

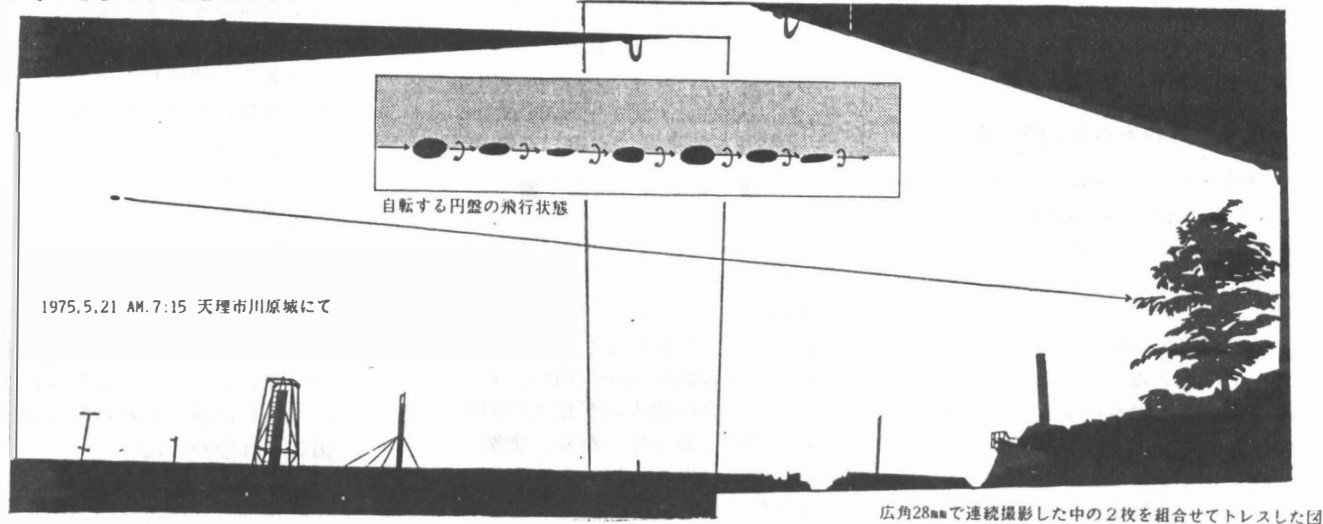


1964.2.14のUFO飛行を再現したもの、右から左へ変化の様子を示す。背後の空と同じ色彩に変わる保護色的な現象が、本体の90%以上の任意の部分を通して消してしまうことのできるテクノロジーの表示か、いずれにしても、UFOが姿を消しても存在する証明になった。



体を目撃した。現在は取り壊されてないが、天理市川原城町にあった天理教日本橋詰所の南向きの部屋にいたとき、ふと窓の外が気になったので、空を見た。すると薄い層雲（おそらく高度500m前後）の下を見え隠れしながら黒っぽい楕円形の飛行物体が、進路を軸にした回転をみせながら窓枠と平行、つまり水平に東へ向かい、天理教の館の屋根の上空を山の方へ飛行していった。速度は飛行機よりも速く、目撃時間は約30秒。私はこのときもカメラのシャッターを切り続けた。

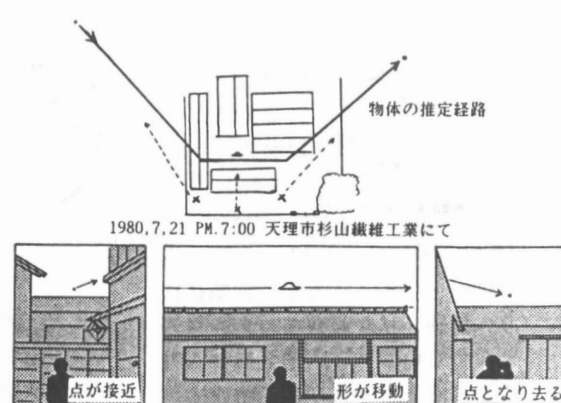
この2つの目撃によって得られた撮影ネガ（白黒）のサービス判プリントには、それらしき像が写ってなかった。私は数年後、引伸し機を購入してネガを四ツ切に拡大し、プリントを焼いてみたがそれらしき像は確認できなかった。やはり28mmの広角では無理であつようだ。こうした失敗はもう一度繰り返すことになって、ようやく望遠を手にするのだが、今やビデオでUFOを撮影する時代になった。UFOはいつの時代でも我々の最新技術によるアプローチを待っているようにも思える。



■接近し遠去かる物体■

1980年7月21日午後7時頃、天理市前裁町の杉山繊維工業に宿直中の体験である。

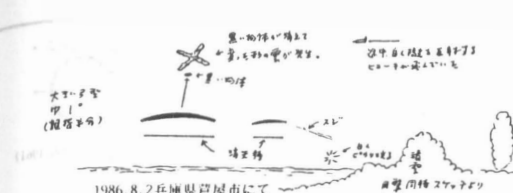
私は宿直室南側の物干して、軒下に張った蜘蛛の巣を見たとき、巣を通して空に黒点を見た。普通なら見過ごす“点”であったが、私は妙に引き付けられて凝視をつづけた。“黒点”は次第に大きくなり、丸みを帯びた面積が認められるまでになった。やがてそれは屋根に隠れた。もし、それがこちらに向かってきているのなら、しばらくして姿を現わすだろうと思い、位置を変えて待った。すると屋根の向うから何と“空飛ぶ円盤”を真横から見たスタイルのグリーンがかった物体が現れたのである。それは事務所の屋根に対して平行に東へゆっくりと、わずかに波打つように飛行した。私の立っている位置から屋根の棟までおよそ5メートル。その先数メートルに物体があると仮定して、10数メートルの至近距離である。上部はドームを思わせ、下部は厚みのある円板を真横から見ている感じで、波打つ“ゆらめき”で低部の楕円が目



に入ったようであったが、至近距離で、物体は手の届く位置にあるにもかかわらず、輪郭が判然とせず、いくら目をこらしても表面の状態や確かな輪郭が判らない。私はこれを子供の玩具にある円盤形の風船と思い写真に撮る考えが浮かばなかったが、物体が屋根から離れた瞬間、急速に遠去かり始めたのに異常を感じて、すぐカメラを取りに部屋へもどり、もはや点となった物体に向かってシャッターを切った。

発見時これが「接近するな」と感じた時点で、カメラを用意して待つべきであった。後日、フィルムを現像し、引伸してみたが50mmレンズでは像になる限界を越えた大きさであったらしく、それらしきものは写っていなかった。

この目撃状況を発見から消失まで、地図上に表してみると、どうも風船などの空中浮遊物体では説明できない飛行コースが表れた。この事実気づいたのは目撃後数年たって目撃資料の点検を始めてからである。目撃当時、この話を妻にしたところあまり問題にしてくれなかったのが、UFO目撃資料のファイルには記載しておらず、近年「そういえば、こんな事があった」と手帳を片々端から調べ



て捜し出した次第である。

目撃時間は約5分前後と思われる。至近距離で見えていた時間は15秒前後である。発見から接近までが2、3分。急速に遠去かるまでが1〜2分（この間、目撃位置から10m離れた部屋に行き、カメラをつかんで目撃位置に戻るまでに要した時間である）であった。

■弓形から出現した黒い物体 空に雲の十字を作る■

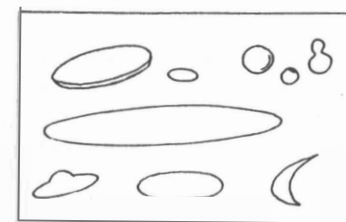
1986年5月末より、芦屋市のテナントビル管理のため、単身管理室に泊り込んで2ヶ月余、日曜祭日もない日々を過ごしていた頃の体験である。

8月2日早朝、夢の中で葉巻形のUFOがV字隊形で空を悠然と進行するのを見ながら、カメラを用意していなかったことを悔やみながら目が覚めた。

私はその頃、単身赴任生活を脱却するべく、早朝時間の掃除人を捜して老人センターや職安に足を運んでいた。つまりビルの開館と掃除をやる人が見付かれば私は自宅から通勤できるのだ。この日も、老人センターから婦人が面接に来た。しかし「これでようやく通勤できる」と喜んだのもつかの間、「たぐさんの鍵を預かる仕事は私には出来ない」と断られ、ガックリとして管理室の窓から外を見た。この時、弓の形をした雲が一つ現れていた。それはクッキリと黒く、雲というには濃密過ぎた。そして見る間にそのままの形で黒い線になって消失。時計を見ると午後6時30分だった。そして再び目を窓の外にやると今度はその倍の同じ形のものが現れた。周囲の白い雲の中で黒く形の整った様は誰でも異常に感じると思う。この頃私はテナントオーナーの一人、プロスキーヤーの関曹氏に度々UFOの話をしていたので、これを見た瞬間「これはどハッキリとした形なら…」と知らせようと思った。しかし、「もうしばらく様子を見よう」という思いが優先して観察を続けた。すると、その弓形の当りから黒い物体がこちらに向かってくるのが見えた。いつも見る飛行機のコースとは違うが、

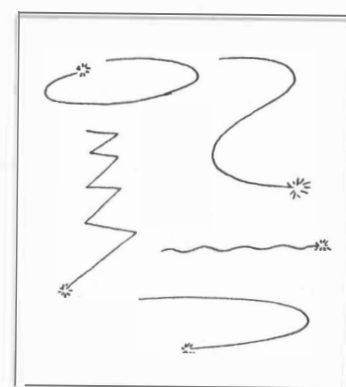
個人目撃におけるUFO判定要素例

A：形状が既知の飛行物体と異なる



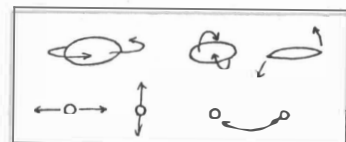
- A a 皿状
- A b 球状
- A c 葉巻・紡錘形・円筒形
- A d 楕円形
- A e 円形
- A f 半円形
- A g プーマラン形・一日月状
- A h その他の人工的外観で既知の物体に該当なき形状（ドーム付側面状等）

B：飛行状態が既知の飛行体と異なる



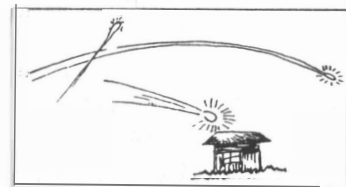
- B a 一見して飛行機以上の超高速で、夜間の場合、流星よりずっと遅い。
- B b 高速で直線以外の曲線を描く飛行。「蛇行」と表現され、「旋回」を除く
- B c ジグザグ、鋭角ターン繰返し、波状の飛行を呈するもので大気の揺れによる錯覚を排除したもの
- B d 目撃者を中心に円軌道を描くか、単に「旋回」「周回」「円を描く」と表現されるもので、B bを除く
- B e 高速でUターン、Vターン、鋭角ターンなど急激な方向転換をする
- B g 進行と停止の繰返し急激に行なわれるもので直進、ターンを含む

C：空中物体の運動が既知の物と異なる



- C a 物体自身の自転・回転運動
- C b 静止・飛行中に振り子運動、シーソー運動、往復運動、上下運動を行なう
- C c 出現と消失の繰返しを行なうもので、航空機のライト明滅とは厳密に区別される。

D：外観は流星・火球に似るが……



- D a 明度の減少がなく経路が異常に長い
- D b 一見して明らかに上昇と判るもので角度の閃滅で「そのように見える」超高空の流星とは区別される
- D c 地上付近を飛行、または地上の一部を照射させて低空であることを示すもの大きさによる至近距離錯覚とは区別

飛行機だろうとあまり気に止めなかったが、突然十字形の雲を作った。その黒い物体は見えなくなった。“十字形”は時間と共に風に流されて刻々と姿を変えていったが、当初は確かに十字形だった。そのため私は物体が爆発したのでは？と何気なく感じた程である。こちらに向かっていて黒い影はどこにもない。「すると、あれはUFOだったのか！」とここではじめて気がついた。飛行機がこのとき自ら陽光を反射させて飛行していた。たった今、飛行機と思った黒い物体と比較して飛行機は形が明瞭であったが、黒い物体は楕円のような判然としない形で、黒いちぎれ雲にも似ていた。それが私の方に向かって飛行してきたのだ

から見失う筈はない。しかも、十字の黒雲の出現とその物体の消失は同時であった。これに気づいた直後、黒い弓形の雲は急速に細くなり、一本の黒い横線になって空に溶け込んだ。時計を見ると6時48分であった。私がカメラを家に置いてきたことを悔やんだのは夢の通りである。黒い物体は弓形から出現したUFOであり、十字の雲で何かのサインを示したのか？と思うのと、これは人の生死にかかわるサインかも知れないと感じたのは同時であった。その14日後の早朝、日本のUFO界に多人の真実をしたステラ21ビルのオーナーでもある正木栄一氏が51才の生涯を閉じた。知らせが私のいる管理室に届いたのであった。

■天宮清・天宮ユキによる1960年～1967年までの目撃記録■天宮清・天宮ユキによる1970年～1989年までの目撃記録

1960~1989 UFO目撃一覧表 記号解説

■UFOの発見に情熱を燃やし、青春時代をこの問題に注ぎ込んだ多くの先駆者達は、常識では考えられない程の数多いUFOの遭遇を経験している。彼らの多くは周囲の同僚から冷笑の視線を浴びつつ一寸した“受難”を経験した。しかし、時代の持つ潜在的な力は、UFO問題に浴びせられた様々な言葉の塵を吹きとばしつつ、日の当たらない谷底から世間の希求する機微の高みへと押し上げていくようだ。それだから何、という性質の問題でもない。暗闇でささやかれた言葉が、屋根の上から大声で叫ばれたとしても、聞く耳を持つか否かは個人の自由意思の問題であって、誰も強制的に時代を押し付けている訳ではない。

ここに、冒頭に述べたようなUFOの探求に情熱を燃やした一人と自負する筆者の目撃記録を掲げる。後年、妻とそして娘が参画するので、一個人というより、一家族のUFO記録である。ただし古い記録は、筆者自身の未熟から、既知の空中現象についてすべてを経験したわけではないので、見て異常を感じたものは観察してメモを残し、後日見限りと判明したものは捨てていったが、判定を保留したため残ったものもある。また、記憶に鮮明に残っている確実なUFOでも、年月を決定する何らの控えも散逸したものは割愛した。30年近い年月の記録を、“一覧”できることを狙ったので、共通した要素を記号化した。その記号化も語句をアルファベットにする際、英語にして頭文字を使用する方法ばかりだと混乱する場合があるので、ローマ字読みの頭文字も使用した。

さらに数字とアルファベット記号だけの表では味気ないので、漢字も使用して潤いをもたせた。画一的な変換より見やすいと信じる。

これは、集計図表の基になった資料として御覧頂ければありがたい。この表から更に何かを導き出した

いは、以下に述べる記号の意味を正確につかんで活用されたい。

前述したように、古いデータは未熟な判断のため後年誤認と判定されるものもある。普通なら、そうした不純物を取り除いて、純粋なUFO記録のみを掲載するのだが、個人のデータはまた、世間のデータと対比することで収穫を得る価値もあるので、あえて「確認現象」も記録のまま掲載した。例えば、今日、通信衛星エコーに匹敵する大きさや高度の衛星を、予備知識なく目撃したならば、UFO騒ぎになること必定である。その場合、エコー観測の経験者であれば、衛星の誤認を考慮してエコー観測のデータと対照することができる。

■項目と記号の意味■

※No: 表における整理番号。筆者への問合せはこのNoが便利である。

※年: 西暦下2桁を示す。

※月・日: 数字がそのまま月日を表す。空白又は数字以外での記入は、メモが目撃後相当時間を経過して作成されたことによる不明部分で、記憶により補ったものもある。

※午前・午後: 午前をA、午後をPで表示。

※時・分: 数字がそのまま目撃時刻を表示。

例:A 0 06 は午前0時6分である。

目撃時刻に目撃時間を加えれば、消失又は見失った時刻になる。発見瞬間の正確な時刻の測定は実際難しい。最近になって観測中にビデオカメラを回し、状況を録画しておけばタイム表示に秒単位で記録されるので、UFOの観測にはこれを活用している。昔はテープレコーダーと放送局発信音の組合せを試みたことがある。ただし、突発的な目撃に際しては、「気を取られて時計を見なかった」という失敗がつきものである。

※目撃時間: 未知の現象に気づいた瞬間から、見失うか現象の消失までを示すが、正確度は一定していない。通常は目撃直後に状況を再現しながら、時計がストップウォッチで計測する。しかし、10分以上に及ぶ目撃は、時刻を確認する時点が様々で、数分の誤差は有りうる。分をM、秒をSで表示。1秒以下を>1で表示した。

例: 2M は2分間 30S は30秒間

※状況: どのような状況下で目撃したかを表す。

状況は2つに大きく分かれる。空に注目して観察を続けている状態。これを“観測中”の目撃として記号Kで表示。次に歩行中、乗車中など日常行為の最中に目撃するもので、“偶然”の意味で記号Gで表示した。更に、観測は、月や星など天体観測とUFOを目撃するためのUFO観測に分かれる。表ではこれを2つの項目に分離し、次のようにした。

状況 { 偶然→野歩・室内・車・飛行機等
観測中 { 星・月面・流星
 UFO

「野歩」とは単に野外を歩行中だけではなく、自宅から戸外に出た場合も含まれる。「室内」とは文字通り建物の中からの目撃である。「車」通常自分で運転中。「バイク」「自転車」も同様で、「バス」は路線バス、観光バス乗車中。「機上」は航空機搭乗中。

※方法: 目撃が肉眼のみか、双眼鏡など光学器械を使用したかを区別した。肉眼をN、双眼鏡をS、望遠鏡をB、各記号に付く数字は倍率を示す。

例: N S15 は肉眼と15倍双眼鏡で観察したという意味である。

※場所: この欄は地名場所をそのまま記すと長くなるので、表では地名の頭文字で簡略化した。

TT= 東京都田端(自宅) TE= 東京都江戸川区京葉道路入口 TK= 東京都蔵前 ST= 埼玉県所沢 KH= 神奈川県平戸 KY= 神奈川県横浜 TA= 東京都阿佐ヶ谷 HH= 北海道日高(以下Hは北海道) K= 神奈川県上空 KM= 神奈川県向ヶ丘 HSS= 札幌市新琴似(妻自宅) HSM= 札幌市丸山 HSO= 札幌市大通り HE= 恵庭市 HSK= 空知郡栗山 TS= 東京都品川 KK= 熊本県熊本市 NT= 奈良県天理市 KT= 京都府田辺 A= 秋田上空 M= 三重上空 YS= 山形県酒田市 KS= 熊本県千束蔵々島

FA= 兵庫県芦屋市 NK= 長野県駒ヶ岳 尚、天理市のみ目撃地点は自宅周辺5Km 以内の様々な場所である。

※同時目撃者: 数字が本人以外の人数を表す。

※仰角: 目撃した物が単に空の一角に静止していた場合でも、目撃者に接近した場合でも、最も近付いた時の仰角を表す。不審な物が空のどの位置に見えたか、ということとは、目撃した物が、よく観察で

きる位置にあったか否かを知る材料になる。方位はこの場合意味がないので省いた。物体が天頂つまり頭上に近いほど、目撃者と最短距離の位置にあるのだから、当然観察も細くなければ不自然である。また、地平に近い仰角の低い位置の現象は遠方であるから双眼鏡などの補助なく観察した場合、よほどの“奇妙度”がなければ観察の理由がない。

※形 タイプ: 形のスケッチをできるだけ記入した。形が識別できるのだから、当然「見かけ大」の欄を見て、月との比較で表示されていれば矛盾がない訳であるが例外もある。

次に「タイプ」について説明する。まず発光体Hだが、月のように大きく光るものも、星のように小さく光るものも、すべてHに統一した。これは殆ど夜間であるが、昼間雲の中で光る場合もHである。また、夜間の発光で、特にガス状に見えたものをHGとした。昼間、太陽光線を反射させているものをHN。反射や影のない純白の物体をWH。光を反射せず黒く見えたものをBとした。これは昼間だけではなく、夜間、月などの光源を背景にした場合も含まれる。さらにガスを伴うものをBGとした。従って、一般によく表現される“金属色”はHNに含まれる。

※数: 通常一度に見えた数を表示するが、特殊な場合、回数もある。

※数変: 数に減少や増加があった場合である。

※見かけ大: 地上にある物体と異なり、空中にある物体の大きさを正確に数値化することは大変難しい。従って空欄が目立つ。物体の背後に建物や樹木があれば、目撃が可能となり“5m先のバレーボール位”“1Km 先の信号の青と同じ大きさ”といった表現ができる。しかし、比較するものが何もない空中における物体・光体の大きさを正確的確に表すには、昼夜航空機や天体の観察に慣れおく必要がある。肉眼は注目した物体を大きく感じさせるものである。試しに「これは!」と思ったものを50mm標準レンズで撮影してみるとよく判る。「大きい!」と思ってもカメラに撮ると以外と小さいのである。大きさ測定については、別項を御覧願いたい。

※距離(高さ): 大きさ以上に、よほどの根拠がなければ数字にはできない。前述したように、背後に確認物があれば、その確認物までの距離以内ということで、かなり正確な数値は出る。この確認物とは通常、建物、山、雲、航空機などである。これはしかし、夜間には適用されにくい。頭上を飛ぶホタルを流星と間違える極端な例が夜間には起りうる。一方夜間でも薄曇りで星が見えない条件下、頭上付近を形がよく判る大きさでUFOが飛行した場合、「かなり低空」という実感から高度を推定した場合もある。また、筆者は天理に来てからジェット旅客機のそばに出現したUFOを2回目撃したが、飛行機との比較でおおよその高度を知ることができた。また、筆者はよく層雲と下の大気との境目に現れたUFOに出合うが、層雲が高度の決める根拠となっている。しかし、それでも殆どが空欄である。天理は盆地特有の霞により水平距離数キロ先の山もかすむことが多いが、上空は天頂に近いほど透明度が高く、東から大阪方面に進入するジェット旅客機が様々な高度で飛行するのが克明に観察できる場所である。

※見かけの速さ: 空中の物体を見てすぐ異常を感じるのが、この速度であることは多い。航空機は高度が高くなるほど見かけの速さは遅くなるが、絶対に停止しないし、突然倍以上の速度に加速することはできない。UFOと判定される飛行物体にはこれができるのである。高速…首を右から左へすばやく動かして目で追う速さ、と表現できるだろうか。低速…空中にひっかかったように、微動だにしない。人工衛星でさえゆっくりと定速移動するのにである。昼間には衛星は見えないし金星を誤認するほど素人ではない。しかし、よくよく観察するとジワジワと僅かに動いている…これも異常がよく判る。つぎに突然の加速である。筆者は加速前と加速後の差が「人工衛星速度」から「流星速度」になったのを目撃した経験がある。また、2つ前後して緩やかに飛行している卵形の白体で、突然後者が急加速して前者を追い抜く、という飛行も目撃した。鳥とか地上の現象では日常的な現象であっても、

丸く純白の物体が行なうと、天の啓示を受けたように緊張したのを覚えている。

さて、表では速度表示を8段階に別けた。人工衛星速度をA、微動をB、静止をS、飛行機速度をH、飛行機より遅い(大きさに比べて、飛行機としたら遅いと判定)を<H、飛行機以上の速度を>H、飛行機とは比較できないほど高速だが、流星よりはずっと遅いものを<R、流星速度をRとした。速度がRなのに何故UFOか?をみる場合、形、経路が目安になる。筆者は5個程の星が横に並んでサーッとRで降下するのを見たことがあるが、中世ヨーロッパの銅版画にも同じ様な絵が描かれていたので、驚いたことがある。

※尾流・タイプ: UFO特性の一つとして、飛行中、本体から尾をひく現象がある。飛行機の航跡(飛行機雲)に似たものはこの場合除外する。UFOの尾流は必ずしも高速飛行に伴うとは限らず、殆ど静止状態でも長く尾を曳く場合がある。また、ロケットやジェットのような推進機関により生じるものとは考えにくい場合が多いのも特徴である。尾流を分類することはむずかしいが、ここでは次のようにしてみた。

R=噴流状(ロケットのように一見、本体から火炎が吹き出ているように見えるもの)

K=霧状(夜間はガス状、昼間は文字通り薄く白い尾、それに準ずるもので、本体に付き随い、空中に残らないもの)

H=火花状: 花火の打上げに似た火の粉の尾である。普通末広がりが、尾の形状は次の分類とする。S=光跡状: あいまいな表現だが、上記3種に該当しない光の尾である。

つぎに尾の形状を2種に分類した。本体より次第に細くなる尾を>。逆に扇状に広がる尾を<で示した。従ってH<とは、火花状で末広がりの尾という意味になる。

※色彩: B=黒 W=白 R=赤 BL=青 GR=緑 OR=オレンジ GY=灰 Y=黄 GO=金 BR=茶 P=ピンク BW=青白 UFOの色彩は特定できない事も多く、感覚的な部分や個人差も多少認められる。

※変化：色＝色彩変化
速＝速度変化
形＝形変化
大＝大きさ変化
経＝経路変化

UFOの出現状態は、その消失と同じく謎が多い。空に雲など何の障害物もない条件で、航空機は必ず物陰から現れる。ところが、UFOは必ずしも物陰から現れるとは限らない。ふと気がつくと思議な物が飛んでいるとか、目の前にいつの間にか現れていた、という場合が多い。その出現の仕方を4種にしてみた。

※出現タイプ：1＝すでに出現
2＝見ているところに出現
3＝遠方から接近
4＝突然出現

UFOが消え去る時、航空機のように遠くから行くとは限らない。「いつの間にか消えた。どうやって消えたのか判らない」という場面に出くわすことは多い。ここではその状態を6種に分けてみた。

※消失タイプ：1＝陰に入る
2＝雲に入る
3＝いつの間にか消える
4＝見ている所で消える
5＝遠くから
6＝爆発状

※経路：発見から見失うまでの空中における飛行経路を6種に別けた。
1＝直線（文字通りまっすぐのコースを飛行）
2＝蛇行（曲りくねる飛行で、カーブを描くものも含む）
3＝ジグザグ（Vターン繰返し、波打つ飛行、細かい首振りなどが含まれる）
4＝方向転換（直角、U、V、180度の各ターンなどにより方向を変える）
5＝連続円弧繰返し（地上におけるバウンド運動である）
6＝静止、浮遊（ほとんど同じ位置に見えている状態）

※飛行状態：飛行機は一定の速度で機影を見せながら飛行する。ところが、UFOは時として本体が薄れたり、消えたりしながら飛行する場合がある。また、自転しながらの飛行。夜間では全体の発光を強めたり弱めたりしながらの飛行（脈動）。前進停止繰返しも飛行状態に含めた。これらの多くは航空機には該当しない現象である。光を明滅させるだけの現象は航空機のそれと混同されるので省いた。
1＝出現消失繰返し
2＝脈動（昼間の場合、反射光を強めたり弱めたりする現象も含めた）
3＝自転（物体全体が回転して飛行）

※判定：目撃記録が既知の現象か未確認かを自ら判定した欄である。UはUFO。その他は明示した。
※理由：UFOとした理由を別表「空中現象におけるUFOの特定要素一覧」から該当する要素を選び、AaからDcまでの記号で記した。
※その他：特筆事項、人体への影響や物理的痕跡、電気機器や車などへの影響、また音などがあれば記入した。

「撮った時は見えなかったのに謎の物体が写っていた」

という場合、まず調べる事

UFOが大衆文化の中に融け込むと共に、「これはUFOではないか？」と写真上の映像に着目する意識が高まった。

フィルムは、人間の肉眼では感じられないX線、放射線に影響を受ける。従って、不可視状態で上空にあるUFOがフィルムにのみ感光する事も充分有りうる訳である。しかし、写真のスナップに異常な空中物体が写っていたとしても、常識的な手続きで、ネガを調べてみる事が何よりも先決だ。以下に筆者が日常行なっているネガの検討方法を紹介します。これは誰にでもできる簡単な方法である。

■白い点や丸など■肉眼で空中に目撃した白色物体を撮影した場合は別だが、通常はネガ上のホコリ、ゴミが白いボヤけた映像になる。普通の人物や空のない写真では背景に打ち消されて目立たないが、空を主体に撮影した場合、現像所がホコリの多い場所で作業をやっている場合は白点だらけになる。これらに疑問の点があれば、ネガを明るい所で見れば、白点の位置にゴミが見つかる。また、小さいものは他へ移動している。

■黒っぽい筋■一時期UFO専門誌とうたわれた市販雑誌に、よくこの映像がUFOにされたが、一見クッキリしているのが特徴で、これはネガのキズである。ネガをただただ見ただけでは判らないので、電燈に透かしてネガの角度を変えながら見ると、ネガにわずかなキズのついていることが確認される。

■輪郭のハッキリした半透明の丸（白いもの黒いものなど）■現像ムラ（気泡や薬品附着など）である。ネガのザラザラした方を光に当ててルーペで見ると、その部分がネガの映像から浮かび上がって見える。

■「一や」の形をした黒い像。白黒ネガに多いが、フィルムに凹みや折れ目が生じたばあい、プリントの時、その部分が影となって映像化する。ネガを水平に持って観察すれば判る。

■赤味、青味、黄味を帯びた丸、楕円■フィルムに均一に塗られている感光乳剤に大きな粒子が混入し、それが像になるもので、ルーペで観察すると、他の映像にみられる粒子で構成された荒目の像と異なり、密度の高い映像となっている。映像は拡大するとボヤけるが、これは拡大してもクッキリしており、異質な感じを与える。

体験的UFO概説

【UFOとは】30年近くUFOを目撃して、このように一欄表にし、第三者から「それで、何か判りましたか？」と問われた場合、「謎だらけです」とは答えるににくい。UFOのタイプについては、文章と図表を御覧頂けばある程度理解してもらえらるだろう。UFOの外観は金属質に思える光の全反射、光を透過させるような半透明や純白さ、昼間でも影のように黒いもの、ちぎれ雲にしか見えないのに滑るように空を移動するもの、目に痛いほど強烈な光を発するもの、実に様々であるが、それが知られていない超自然現象とか、異次元からの何かというよりは、優れた性能の地球外飛行物体であり、明確な「意思」を持って我々に臨んでいると確信できる。

彼らが地球人の満足する方法で接触するとしたら、その文明レベルは地球に近いレベルということになる。しかし、現実はまだで“飼犬”が“飼主”の意図を計りかねるようにUFOの出現には計りかねる部分が多い。それでも依然として彼らは“言葉なき黙示の飛行”続けている。

こうした事実を直視すると、我々はUFOの「意思」を“飛行姿勢”の中に求めるべきではないのか、と考えざるを得なくなってくる。

結果として表れる“姿勢”の前に、目的が4種ほどある。まず「運搬」である。通常の民間旅客機、貨物機、軍事用輸送機がこれに該当する。つぎに調査・研究のための飛行。コンコルドが初観測の科学者を乗せて飛行する例がこれに該当する。航空写真撮影、気象観測も同様である。他の2種は軍事用で、「偵察」は話題になったU2のソ連偵察機飛行、実戦では偵察・哨戒飛行といったもの。司令もこれに含める。そして「攻撃」は爆撃、攪乱、迎撃、戦闘、追撃など。

こうした我々の世界に属する飛行

目的と、UFOのそれがどれほどの近似値で語れるか、ということは実に大きな課題である。よく、迎撃戦闘機の対UFOミサイル攻撃がマヒ状態に陥った事件を指摘して、UFOの攻撃性を説く研究者がいるが、戦闘機自体の存在する目的は攻撃・戦闘にあるのだから、その機能を封じる高次の行為は、砕いて言えば“兄弟喧嘩の仲裁”である。狭い有限の地球上で領土争いや敵襲の前に手を叩く、といった愚かな行為に対して、地球人最高科学の攻撃システムが無能になるほど強力な力が宇宙には存在していることを実戦パイロットに知らせるという意味がまず認められる。そうした攻撃力無能化発動力を示しながら、UFOは地球上の軍事基地を制圧するとか、ミサイルを爆破して強制的な平和実現の手立てを押し付けることはしない。

そこに筆者のこれから述べる「飛行体勢」による「明確な意思」の問題が横たわっているのだ。

ある人物の行為の前方の障害が、本人に気づかぬ状態で存在し、それが知らぬ間に取り除かれても、取り除いたことを決して吹聴しない義人的な行為は、以外と“物事をよく知らない連中”からの誤解を受け易いものである。

我々は物事を現象面だけで判断する習慣に馴らされている。言葉の美学や、清らかな映像に同意しているうちに世界は破滅を迎えつつある。誰がこの事態を画策したかは名乗らない。しかし、「人類の平和と繁栄」のために世界が取返しのつかない事態を迎えつつあることは事実だ。誰も大量虐殺を計画した訳ではないのに、我々はいつ襲うかも知れぬ恐怖の大量死の影におびえている。しかし、巧みな言葉の美学は、放射能なんか怖くありません、と自信を持って我々に迫るかのようだ。ミサイルはきちんと管理されているから、核弾頭が頭上に飛来することは有り得ない、と言っているようにも聞こえる。人間の理性は決して戦争を招かないから安心せよ、とも聞こえる。それらをベールをはがして観察し、「これは何だ!」、と当事者だけに判る圧力をかけていても、表面に表れたものしか見えず、それでしか判断できない我々は、何故そこにUFOが現れるのか判らない。些細な心配事に心を奪われている我々は、その心配事の尺度からしか世界を計れないのだ。誇張ではない。例えば報道がある。テレビと新聞が主な媒介だが、我々はほとんどこの媒介を通してしか、事件に接することができない。報道されるような事故や事件の当事者となることはごくまれだからである。報道というものは、媒介が選択し、整理したものである。外国の事件は外電や特派員により送られてくるが、外電の流し手も選択し整理して打ち出している。それらの媒体は巨大資本の管理下にあり、選定の基準、配列、重点の置き方、評価の仕方など受けての我々に届くまでの手続きや命令系統は、我々の知らない世界である。しかし、こうしたマスコミの流す報道が、現代史となるものを形成し記録されていく。それに基づいて各種テキストや資料が作られる。宇宙からの知的存在の接近資料の多くは、軍関係機関で門外不出の扱いを受け、筆者のように長い年月UFOに目を向けていないと、既成の「現実」にすべてを呑み込まれてしまうようだ。UFO事件の扱われ方で、世界の裏側が見えると言ったら憤慨する方があろうかと思うが、テレビで見かけるUFOの否定論者の言い分を見聞きしていると、UFO反対論各説が個人に反映されている印象を受ける。つまり、独自の考えで、現象を否定している論客は少ない。マスメディアの成果としての否定論客誕生現象という訳である。「UFOを見たいと願うと体から光子が出て、空にUFOを形成する」という理論を自分の大学の教授が言った、という友人の話を聞いたことがある。現実から離れて“理論の海”に遊ぶのは個人の自由だが、皆の否定論にも肉眼では識別できない土星の輪が雲を通して“つばを持つ円盤”に見えるという図もあった。土星というものを実際に見たことがなければ「円盤は土星の輪の誤認」となる訳である。ここで述べているのは否定論の弱点などではない。人間の性質の問題である。空の星を眺めるという行為の現象面に大差はない。しかし、カントやブルーノ、シラー（ベートーヴェン合唱交響曲歓喜の歌の作詩者）のように星々の中に広大な世界を感じ思索した心理と、鉱石や標本などの配列を観察するような心理には大きなズレがある。後者の多くは現代天文学大勢の姿勢であり、人の生死を数字としか見ないような学問を職（食）とす限り陥り

見現象であると言えるだろう。面白い本を出版するのが学問の役目でもなければ、そのための観測機器の開発でもない。入手所持貨幣の量が人生を決定する限り、この足かせから開放される日はないだろう。巨大設備により得られた大量の知識が本当の宇宙像を解明するのだろうか。知る手懸かりは38万キロ先の月面観測にこそある。この隣の別世界での現象を素通りして、いくら高倍率の観測に取り組んだとしても、月面に降り立った飛行士以上には何も確かなものは得られないだろう。これがUFO観測者の「実証世界」である。UFOの世界は事実が先行し、理論とは「空想」の域を出ない代物としての扱いを受ける。厳正な事実の検証に、空想好きな“狼少年”はいらない。しかし、体験した事実を人はどれほど忠実に語れるか。筆者は100件に及ぶUFO目撃体験の中に“目のつりあがった緑の小人”との出会いは一度もないが、UFO目撃だけの段階で、UFO搭乗者の姿を全然想像したことがない、ということはない。UFOの飛行姿勢から受けた“黙示”の背後にある人格は、子供の頃から親しんだ聖書の登場人物とどうしても重なってしまう。これは、染み付いた偏向体質と言われても仕方のないものであり、客観性を重んじる科学では歓迎されない要素である。実際に目の前にUFOが着地し、その中から搭乗者が現れない限り、現象の背後にある知性のイメージ化は個人の希望的期待であって、“UFO目撃努力”の分野が学術的に確立されない時点では期待感と現実現象との結び付きを論じたならば、それこそ幻覚・錯覚との混同は避けられない。

ハイネックやバレーといった職業研究者達は、ＵＦＯ情報の洪水に呑み込まれた感がある。大量の資料を投入すれば、機械は必ず正しい答えを出す筈という“思い込み”がそうした自己破滅的結論に至らしめている。彼らは「ＵＦＯは宇宙から来るとは限らない」という結論に到達した様である。「同じ座標を占める別世界」といった理論を構築せざるを得ないのは、厳密な事実の検証が不可能な他人の情報をすべて均一に取り扱った事による悲劇である。自分という又とない媒介を徹底的に「使用」せず、学問に没頭した結果、余りに多種多様の現象を統一方程式に

当てはめようとしたからである。

世界に「私はＵＦＯに搭乗した」「宇宙人と何度も会見している」と言い体験を本にした人々が多い。それら「コンタクトマン」を中心に多様なグループが結成されている。精神的疎外が問題視される世相にあって、共感意識をわかしあい討論の輪を広げる行為自体に批判は無用である。しかしＵＦＯを科学的にとらえようとする場合、全世界的現象としてのＵＦＯが、多種多様な宇宙人会見談を生みだしているとは考えにくい。宇宙は広いのだから、地球という点のような片隅に訪れる知性も様々ある、と言ってしまえば簡単だが地球がそれほど宇宙に向かって開放された宇宙の寄留地なのだろうか。それともハイネックやバレーの理論のように、同じ座標に座を占める無限の異空間人が空中にわき出すのか。この理論は近年益々話題になっている心靈現象を思わせる。霊が宇宙人を名乗る、というのなら宗教的連繫が教祖的コンタクトマンを中心に次々と誕生するのも当然である。こうなると、素人にはさっぱり分からなくなる。ＵＦＯさえも、疑似ＵＦＯが多数認められ、誤認ＵＦＯと双峰を成すようにして、本物ＵＦＯの座を狙っている感がある。既成知識の積み重ねを金科玉条として長い年月を過ごしてきた者にとり、ＵＦＯに手を染めたとたん、混乱し、頭脳を引き裂かれることになるかも知れない。しかし、何ら利己的な思惑のない純粋な研究態度には悪魔の誘惑を

跳ね返す力がある。世界の現実を離れ、SFやロマン、小説の感触でUFOの事象に接触し思考しようとする時、そうした心理的周波数に同調するエネルギーが引き寄せられるのだろうか。これは物理の法則のようなもので「類は類を呼ぶ」の格言に代表される現象として我々は認識しており、長い人生経験のなかで経験している。真理探求の活動は単なる知識の集積や技術の場数ではない、もっと高度の倫理性あるいは人間性とでも言える個人にとっての最も最小単位（地位、名誉、財産、経験、血縁、身体能力などを取去って残るもの）が問われるような気がしてならない。もし、UFOの搭乗者が、地球文明の数万年先を歩む人々に構成されているとしたら、生物学や精神・物質の把握についても、我々以上のレベルに達している筈であり、UFOを目撃し続けた感想として、こうした感慨を抱くのはごく自然の成行きである。そうでなく、宇宙船の巨大さや力を見せ付けて、我々を脅かすのであれば、別な感想が生じたであろう。これは知的生物間にとって微妙な表現の形式を堅持しながら明確な意思を提示する…戦闘機が主翼を振るのとは相当違う。長い人類の歴史を通して、世界の国々でUFOがこれほど多く目撃され、地球自体を考える人々が増加した時代があったであろうか？UFOの存在は益々現実世界との接点を広げつつあるようだ。



■「光斑拥有四十至五十公里」と報じられた中国の宇宙
 的スケールのUFO事件と「目三」耳四の異星人
 が市の公館に降りたUFOから出現」という局地的な事
 連のニュースとは、だいぶ差がある。1990年暮れにソ連
 を取材した羽野高野氏によると、ボロネシ事件は、マス
 コミによって大幅にねじ曲げられて報道されたもので
 「ただ単にUFOが現れたし消えたりした事件があった
 だけ」(『OIC・NEWS』No5)という。

1985年7月28日 星期日 第四版

人 民 日 報 (海外版)

本報訊 六月十一日晚，中國民航CA933航班波音二飛機，從北京飛往巴黎途中，進入閩州指揮區內，飛機時間二十二點四十分，在東經一百零三度三十分，北緯三十九度三十分的一萬米高空，機組發現飛機右側有一巨大不明飛行物。形狀橢圓形，光範圍有四十至五十公里，厚度約十公里，中間有一極光亮點，光圈分三層，呈藍白色。該物速度非常快，由北向南與飛機平行飛來。持續時間約兩分鐘。

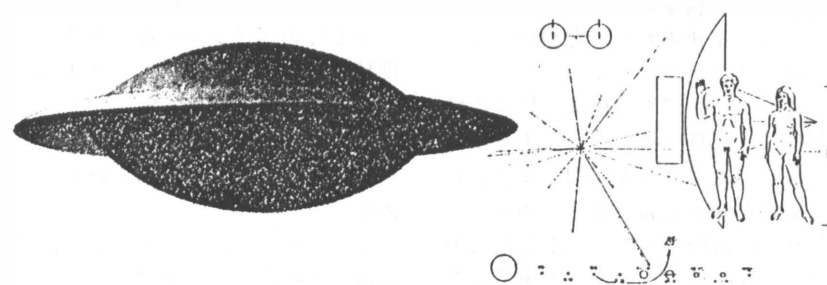
（重昌龍）

民航班機發現巨大飛行物

UFO問題と宇宙探査

◆宇宙人とのコンタクトに期待し

UFOを拒否する心理について考える◆



人間の体験や知覚より、学問上の知識を優先させ、知識の階襲を中心に据えた研究者と、UFOの現象に直面し、そこから宇宙を模索する研究者が真っ向から対立することは、“二人のドナルド”、ドナルド・メンゼル対ドナルド・キーホーの時代からあった。軍民公民問わずUFOという話題に関係した人々は、この二人に代表される“認識の山”を選ぶことによって、自己とUFOとの関係を位置づけるようである。

二つの山の麓で迷う、あるいはその山の存在すら目に入らない、といった態度保留の時代は過ぎたかに見える。日本ではマスコミが「信じる信じない」のレベルで大衆をあおるのも一因だろうし、時代の趨勢なのかも知れない。とにかく、「地球が丸い」という「真理」は誰もが受入れるのに比べ、宇宙から宇宙船が飛来している、そのような現象が目撃されているという社会現象についての評価は、個人差が著しい。前述しように、ＵＦＯを自分の目で目撃あるいは、他人の目撃例から「有りうる事」とする人々のグループと、ＵＦＯの存在をとにかく「理窟に合わない」という理由で拒絶する人々のグループがあって、事あるごとに対立している。前者には多種多様な職業階層の人々が含まれるのに対して、後者が表面化する場合、天文学、宇宙実験といった分野の権威筋からの発言を通じてなされることが多いようである。

この二つの流れをもうすこし言い方を変えてみる。

まず空に「UFO」と言わざるを得ない現象を目撃し、「本当にそのような物があるのだな」といった心境に到った人、また「UFOの事例を読み「多数の信頼できる人々が目撃しているのだから、たぶんあるのだろう」という心境を持続している人は、特にUFOを否定しなければならない、義務感、衝動の生じない

グループである。

つぎに、UFOの話題と相対する場においては絶えず「否定の義務」「否定の衝動」「拒絶」「排斥」を抑え切れず、それら否定的態度を持続するグループというものがある。

UFOに対する態度を二つに別けるなど乱暴極まりないと、反発されるかもしれないが、40年以上、空飛ぶ円盤とUFOの話題には、絶えずこの2大要素が絡み合ってきた事は誰にも否定できないのである。

円盤を実験室で作ろうとしたメンゼル博士、人間心理の深層にある円で円盤を説明したユング、沼のガスでUFOを説明したが、ついに実在論者に転向したハイネック博士等の亡きあと、UFO否定の流れを引き継いでいるのがカール・セーガンであろうかと筆者は考えている。

“天文学のショーマン” セーガン博士の著書は多く、UFOについて触れた部分も広く散見されるが、ここでは1973年版『宇宙との連帯』を用いてみる。彼はこう書いている。

「UFOの宇宙人説は非常に複雑な構造を持っているが、目撃者の証言の信ぴょう性にそのほとんどすべてがかかっているといってもいい。」
(同書河出文庫刊P.267)

「私自身は、円盤目撃例には、非常に信頼性が高く、多数の目撃者がそれぞれ独自に報告したというよう（な）、かつ全く異様だ（何らかの現象——たとえばサーチライトから気象観測機、給油機などにいたるさまざまなもの——の見まちがいがいと説明されないような）というケースはない、という意見を持っている。例えば、奇怪な飛行物体が着陸し、また飛び立ったという信頼できる目撃例は、全くない。」（同書P.268）

IFOLOGY のイロハとして、本書冒頭に紹介した現代UFO目撃資料を見ていただければ一目瞭然だが、「UFO目撃」の検証は、個人の肉眼観察、航空機との遭遇、天文学者

等による光学機器による観察、軍民レーダー技師による観察と空中における同時視認、上空からの降下、着陸、上昇の警官を含む複数の目撃、写真撮影、シネ撮影、ビデオ撮影といった資料によってなされており、「私は見た」という証言がすべてではない。

セーガン氏が「私は天文学の啓蒙活動で多忙のため、ＵＦＯまで手が回らない」と実情を正直に告白すれば、彼とＵＦＯとは学問的にも無関係ということで、何ら触れる必要はないのだが、このように記述する以上、ＵＦＯ証言者からの糺弾は免れないものとみるべきであろう。

つまり、UFOの証言者や報告書、映像の分析にかかわった事実からの否定とは思われない、極めて底の浅い見識を述べていることは歴然としており、「自分には分からない」というのではなく「こうだ」と述べる人間性の問題がある。異常な体験をした当事者に対して「それはこうだ」と言い切る通常の事例を当てはめてみればその精神面の歪みが分かる。これは日常すべてにおける「生活態度」の表れであって、学問以前の問題であることに誰も気づかず、「権威」とか“博識の姿”というレッテルの過大評価、過信といえる。政治家や警察官、教師といった“社会的信用像”の仮面が次々と剥がされている今日、この問題は将来の地球文明正常化にとり、重大な要（かなめ）となるに違いないと筆者は感じている。人間は知識を納めた本ではない。生きている人の一員である。つまりここが重要なのだが、あるイメージで考えてみる。……「来てごらん！ここに来れば変なものが見えるよ！」と言われた子供が、「いまは読書に夢中なので、そんなものは見に行けないね」と拒否するのであれば、たぶん永久に“変なもの”を見る機会は失われる。生きていれば、現場へ足を運べる。しかし、行く「意思」がなければ、そこへ行くことはたぶん永久にできない。それなのに、本を読みながら紙の上に「彼の見た“変なもの”とは」などと書く。本を投げ出して仲間の言う「変な物」を共に、現場へ行くこともせず、身の回りに「装置」を造り、“変なもの”を知るために無限に近い目標に通信を送る。……ざつとこの様な風景が浮かんでくる。

こうした心理が「宇宙人は宇宙の

電波の害に安全基準

人体への影響 認める
電通省
答申案

TV・レンジも対象

米で動物実験成功

頭にFMの装置 やがて洗脳機の恐怖?

1970.9.16(朝日)

電算機で脳波を操る

■電磁波公害 という問題が 生じている地 球の現状→

電波帯域	電磁波の電場強度 (V/m)	電磁波の磁場強度 (A/m)
10 kHz - 30 kHz	0.14	0.14
30 kHz - 300 kHz	0.14	0.14
300 kHz - 3 MHz	0.14	0.14
3 MHz - 30 MHz	0.14	0.14
30 MHz - 300 MHz	0.14	0.14
300 MHz - 3 GHz	0.14	0.14
3 GHz - 30 GHz	0.14	0.14
30 GHz - 300 GHz	0.14	0.14
300 GHz - 3 THz	0.14	0.14
3 THz - 30 THz	0.14	0.14
30 THz - 300 THz	0.14	0.14
300 THz - 3 PHz	0.14	0.14
3 PHz - 3 EHz	0.14	0.14
3 EHz - 3 ZHz	0.14	0.14
3 ZHz - 3 YHz	0.14	0.14

■「宇宙人も電波を使う筈」 という思い込みはないか?

宇宙に信号電波を発射して宇宙の知的存在に受信してもらい、応答の電波を受けようという試みは、1960年頃より開始されている。この実験の前提になっているのは「宇宙に地球程度あるいはそれ以上の文明が存在していたならば、通信手段として電波を使用している筈である」という推測である。果たして「高度な文明を築いている我々が電波を使用しているのだから、宇宙のどこかに文明が発生したならば、その文明は必ずや電波を使用しているに違いない」という推測は当たっているのだろうか?

近年、人体に及ぼす様々な電磁波障害が問題視されてきた。「電車の座席に座ると眠くなるのは、電気回路が鉄の箱を巡っているのが原因」「カラーテレビスクリーンから強力な電磁波が出ている」という「古典」に属する問題から、最近の電子文明で広がるコンピュータ、電子レンジ、各種レーダーなどによる神経、脳髄、遺伝子などへの電磁波障害が浮上している。

世界がこのまま電磁波の大量使用を続けていくと将来、人間や生態系への悪影響が懸念されるという、今まで予測し得なかった事態へ進行している。

このような地球文明の機械化に伴うエネルギーの大量消費が招く弊害の増大は、決して「人間の社会が進歩した姿」とは言い切れない様相を呈しているのである。

宇宙において、何らかのエネルギー使用による移動手段や建造手段を有する文明が開花し、少なくとも一万年以上の安定を維持しているならば、地球文明が直面している汚染・廃棄物問題を生じない方法でのエネルギー摂取あるいはそれに類した行為を基盤とした文明維持が成されていると考えるべきと思うが、どうだろうか?

例えば、UFOである。この飛行物体が正しく宇宙からの宇宙船であるならば、様々な記録からみたその飛行距離あるいは活動範囲の広さ、何百年何千年という飛行活動の年月の長さは計り知れない。もし、我々が彼らUFOと同様な活動を地球の大気圏内で展開したとしよう。この仮定の問題は数値的根拠に乏しいが、

筆者にとっては驚異である。

本題に戻るが、無人とはいえ、宇宙空間で無防備の地球機械のサンプルとしてのボイジャー探査機である。地球人を誘拐したり、サンプル採取に熱心な宇宙の知性であったならば、当然「サンプル」となって、そうした宇宙人の資料室に陳列される筈である。

ところが、あたかも太陽系宇宙空間はまったくの無人無塵であるかのように、何の力学的遮蔽も持たないハキ出しの機械は何事もなく外宇宙へと旅立っていくようである。

UFO=外宇宙飛来否定論者にとっては、探査機に何の手も加えられなかったとして、太陽系内の知的要素が皆無である証拠と指摘するかも知れない。

しかし、知的=介入という図式が地球外知性にも適用されるかどうか。UFO現象の多くが、「地球人を避けているのではないか?」と云われる程、地球の大気中における出現の度合いは「稀薄」とも表現できる様相を呈している。だからこそ、「UFO否定論」の存立する余地がある訳である。これは、UFO肯定側の言い分ではある。

もし、UFOが、圧倒的な出現と強行着陸、SF映画もどきの実力行使を展開するのであれば、その動きは当然太陽系内空間にも波及している筈であり、地球発進の宇宙探査機にも影響が及ぶものとみるべきである。しかし、事実はそのような形跡がないように感じさせている。

SFもどきの「侵略行為」「身体検査」が真にUFOのカテゴリーに属するものならば、地球外空間でも同様なことが言える筈である。

もし、宇宙探査機を「武器を搭載してない」「純粋な科学的動機による」という理由で看過するのであれば、そうした意思の発信者は「高度な知性」によるもの、と考えるべきであり、地球の探査船航行は「釈迦如来の手の中の孫悟空」に例えられるのかも知れない。

思考と実践で到達する真実とは、誰でもいつかは一点に集まるのであるが、我々は公開されていく宇宙探査データの行間の奥に目をつける必要がありそうである。SDIの相手をついてUFOに切り換えるかも知れない、「我身かわいさ」の世界に我々は住んでいる。

差ない物質至上主義が見え隠れする情景となる。そうした物質的規模の大小や、情報量の大小で「優位」「劣位」を決めたがる悪癖が地球人にはあるようだ。

こうした物質的「権威」による情報操作、教育操作によって大量生産される「大本営発表信仰」を打ち砕く素材を発する装置としての位置をUFOは占めつつある。旧約聖書の神が実在していた、という衝撃を多くの偽善的牧師が受けるのと同様、もし、宇宙からの知性が、いわゆる「神」に近い存在であったならば、各界に与える衝撃は核戦争勃発以上のものとなるかも知れないし、すでに「有りうる事」と考えている人々にとっては「既知」のことであるので、周章狼狽するのは限られた一部の人間だけになるかも知れない。

こうした事態が発生せず、「未知のUFO」と「それを目撃する人々」が永遠に平行線のまま将来の地球を共に歩むことになるのだろうか?

そう確信し、自ら進めている宇宙探査とそれによって得られる情報の彼方への未来の地球があるとしているのがアンチUFOの基本的姿勢であり、その情報を絶えず疑いの目で受けとめているのが、UFO証言集団である。

UFOが地球外文明により建造された宇宙船の、地球大気圏内飛行の目撃であるならば、当然宇宙空間は彼らUFOの活動領域である。我々が頭に描く方法で宇宙航行をするのかどうかの問題は別として、宇宙に地球製の探査機が進んでいる状態は、当然UFO側でキャッチされていることになる。立場を変えて、現在の地球式思考と行動で、その探査機の進行に対処する姿を予想すると、捕獲ないし回収により、探査機を分解・分析という行動が起こり得る。地球式思考と行動の知性が地球発進探査機を待ち受けていたら、探査機の飛行計画は飛行半ばで挫折していたであろう。しかし、事実は星間物質との衝突による被害もなく12年間の飛行を無事果たして海王星の近接写真を撮ってきている。

この事実を「当然」と受け止めるか、「奇蹟のようだ」と驚歎するかは個人の勝手だが、太陽系の空間がどうなっているか実際に知る者でなければ何とも言えない。例えばアステロイドベルト。この小惑星や流星物質ベルトを無傷で通過できたのは

どこかにいるだろうが、地球の周辺にきているなんてナンセンス」発言と共に、それでも宇宙人との出会いを描くSFを人に読ませる奇妙な姿がある。身辺に続発する「異変」には目を向けず、遠い遠い彼方の世界に間接的な出会いを期待する、という心理がそこに認められる。

誰しもが子供時代から持っている未知なものへの好奇心が、科学進歩の原動力であることは誰も否定できない事実である。学んだ知識をそのまま信じるのでは永遠に進歩はない。我々は学問を信仰としてでなく、絶えず変転するものとして疑い、自ら考え、実験などの体験で検証しつつ、知識を単に文章ではなく、自分の肉体を通じて自由に使える力として貯え、錬磨する本能的衝動がある。

ニュートンは「自分は真理の海を前に、足元の小石を拾ったのに過ぎない」と言ったと云われる。物理学に限らず、物事は「知れば知るほど、未知の地平線が広がる」ものであろう。そうでなければ、人間は「すべてを知ったと錯覚した有限の世界」と同じこめられてしまう。少なくとも、今の我々には、自ら訪れなければ解決のつかない、惑星世界が、数えられる恒星の数だけ存在すると思われる。それらの世界をすべてを巡り、そこに展開される事実についてすべて説明できたときに、「真理の海の半ばまで泳いだ」ということになりはしないか?

「UFOなんかクソ喰らえだ。あんなものが世間を騒がすから、俺の本が売れないのだ」とセーガン氏が言うのなら、動機が明確であり、整然とした理窟であるから非難はできない。

しかし、「地球文明の代表として宇宙からのコンタクトを受けるのは自分であり、他の天文学の知識もない連中が自分より先に宇宙人とコンタクトする筈がない」という理由から、未確認飛行物体の目撃者達を愚弄するのであれば身の程知らずの極みと言わざるを得ない。

宇宙については月面に足を踏み入れた宇宙飛行士の方が、地球に縛られている我々より「確実なもの」を身をもって会得している。UFOについては遭遇回数が多い航空機パイロットの方が専門家である。

宇宙との「密接度」を光学機械の性能や設備の巨大さによってランク付けするのであれば、軍拡競争と大

100機のコンコルド定期便が1000年間営業した場合の自然破壊を想像することはできる。UFOは出現時間が短い、つまり現象的に「巡航時間」が短いと思われがちだが、3000年前のエジプトを出発したイエラエル集団の上空には昼は雲の様に見え、夜は火の様に発光するUFOが帯空し、彼らと共に何年間も同行したという聖書の記述をエネルギー使用の視点で考えれば、発光、帯空、推進の使用エネルギーは莫大である。

ライト兄弟による初の動力飛行を発展させたジェット旅客機までの歴史は短い。なのに早くも公害原因の一角を担うまでになった。考えれば、ごく少数の発明家によって、地球の「文明が築かれた」感がある。他の「発明に手を染めなかった」より優秀な人々の存在は退けられた。故に危機公害文明となった、というのは短絡的かも知れないが、自然民族を「未開」と決めつけ「文明人」が地球の強者になった時から、地球上で何万年もの間保たれてきた自然の造形が急速に変貌したことは紛れもない事実である。

さて、電磁波使用の悪影響が生態系の正常な安定を脅かす可能性が浮上した。この事実に立脚し、他の惑星文明に適用してみよう。我々が使用し、便利だと思われた電磁波に有害な要素が認められた…地球と同じレベルで宇宙を考えても、我々が気づく以前に、宇宙で地球より早く文明を発達させた知性も当然気づいた筈である。そして、その難問を解決した文明を築く先に恒久文明があるとして間違いないだろう。そのようにして完成した文明形態が、「電磁波という危険なものより、生物本来の持つ最も自然で基本的な疎通手段を人間世界にも適用させることにより、空間媒体の通信による弊害は皆無」というものであったなら、我々が強力な電波を発信して何万年先の応答を夢みて莫大な労力と資金を投入することは、宇宙の知的存在を探索する目的には不適当である、という結論に至らざるを得ない。「宇宙には我々だけが知的存在ではない」と遥か彼方へメッセージを送る努力より、差し迫った我々の頭上にこそ、宇宙の真の姿があるように思えてならない。



1987~1989年UFO目撃・撮影



1987年後半頃より、UFO資料集制作への必要性を感じ、写真やメモなど今まで筆者が集積した資料の整理をはじめたが、遅々として進まず、現在3年目を迎えた次第だが、この間様々なUFOを目撃撮影した。

これらのUFO目撃は、前述の20数年分と比べて、目撃報告を構成する情報量も増え、第3者の研究材料としても、筆者にとっては現時点における最も密度の高い資料として発表できるものと思う。

■1987年の経過■

本誌の制作に着手したのは1987年の後半である。その直前にも目撃がある。

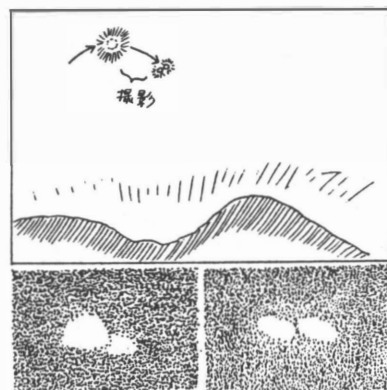
5月5日夕刻、黒っぽい球状物体の飛行を200mmで連続撮影し、半年後の11月22日の社内旅行では長野を通過中に発光体の飛行を連続撮影した。

この日、長野県下伊那郡喬木村でも午後12時30分頃から3時にかけて上空をゆっくりと通過する謎の物体群が陸上自衛隊勤務の「東原」氏により8ミリビデオに撮影されていた。この事実を知ったのは、この出来事が一年を経過した1988年11月3日、毎日テレビ系で「驚異！長野に出現したUFO大群・謎のVTR公開」と題して放映されたからである。

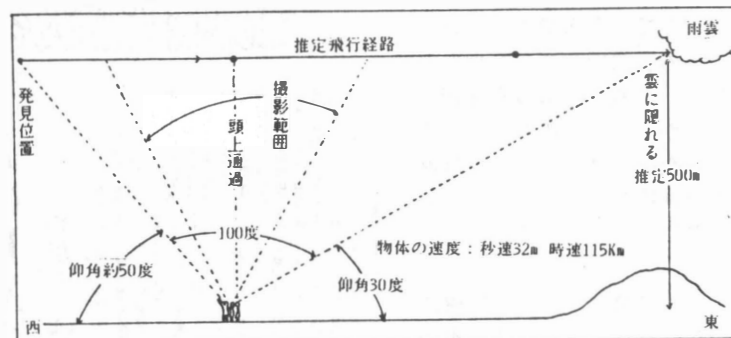
これらの映像は、高空のためか物体自体が小さいためか不明な点が多いが、目撃者家族の「証言」からすると、北方向から飛来した物体群は喬木村上空で東に進路を変えている。

この事が事実なら、筆者が駒ヶ岳付近で撮影した光体と関係あるようにも感じられる。

さて、翌1988年元旦には家族全員で空から降下した謎の物体を観察、カメラにも連続撮影した。この現象については検討材料が多いので、詳しく紹介してみたい。



1987年11月22日午後4時30分頃、長野県諏訪から甲府に向かう中央自動車道を走行する観光バスから駒ヶ岳方向に発光体を確認、200mm望遠で連写した状況図



頭上通過の球体を連続撮影

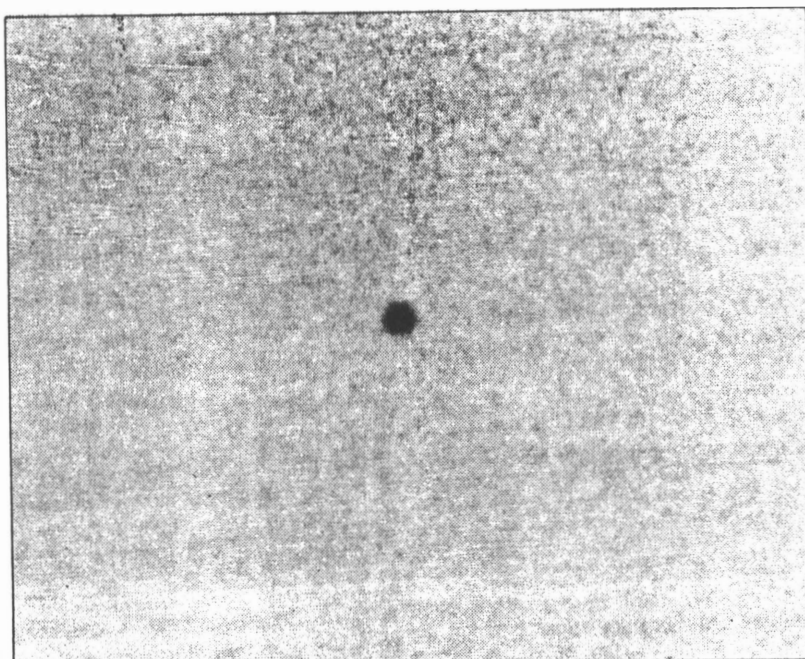
1987年5月5日夕刻、家族3人で自宅裏の農地に開かれた小路より日没を見る。今日は望遠レンズを付けたカメラ（アサヒペンタックスME・シグマズーム90・200mm）を手にした。しばらく日没を見ながら雑談し、午後6時40分頃、妻ユキが「あれは鳥か、ヘリコプターか？」と言うので200mm望遠で見ると、完全な球体で風船のように感じた。しかし、ほとんど無風状態なのにその球体の速度は速く、ぐんぐん接近して我々の真上を通過、私はカメラのシャッターを切りながら振り返る形で連続撮影。体勢を変えて物体を捜したが見えず、妻と娘（14才）は物体が雲に入るのを確認した。

飛行経路が直線で、恰もコントロールされているかのように頭上を通過していること、速度があり、風に流されるというより推進力で飛行している印象であった。

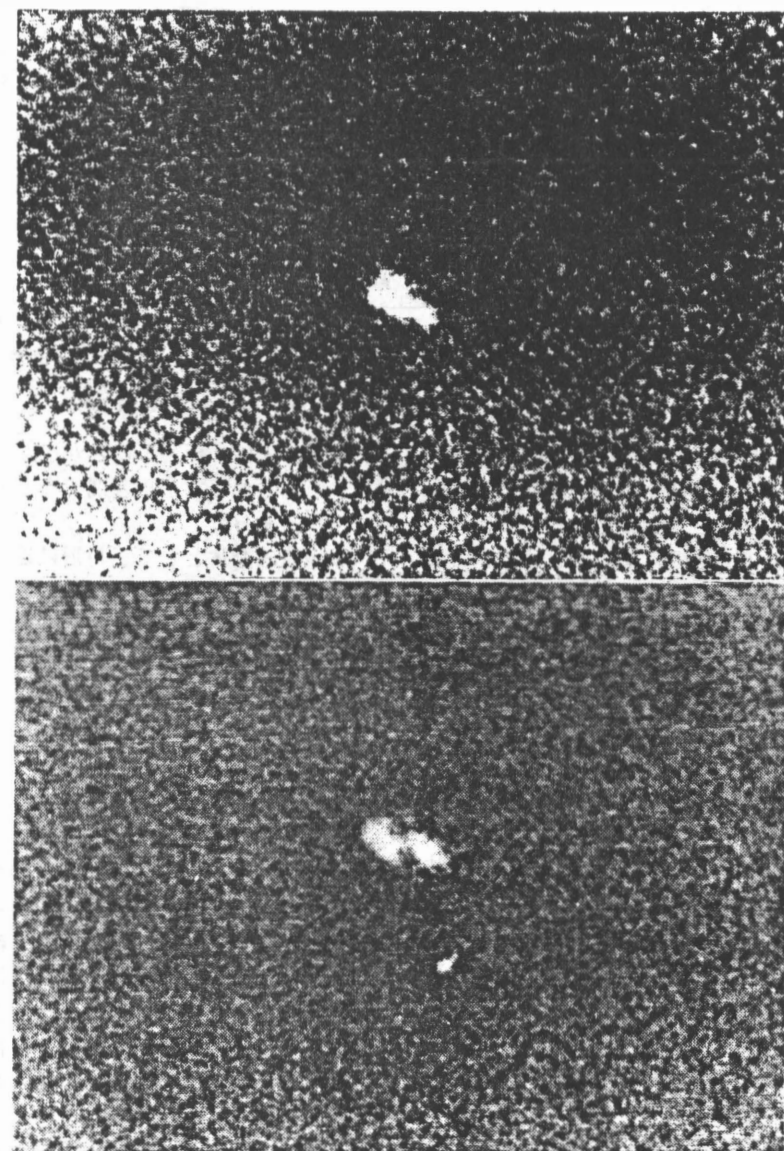
物体が突入した雲は雨雲で、高度は500m前後であろう。目撃後、何度も状況を再現してストップウォッチで目撃時間を計った。約40秒という数値を得た。また、発見位置の仰角、消失（雲に突入）位置の仰角から見掛けの経路の長さを約100度とした。これを縮尺図にして、推定飛行経路の長さを1300mとすると、物体の移動速度が秒速32m、時速115kmとなった。

当日の穏やかな気象状況において、この速度の風船に類した既知の物体は考えられない。高度がずっと高ければ、地上付近とは異なる風が吹く場合もあるが、

従って、未確認飛行物体目撃例に加える次第である。



1987年5月5日午後6時40分頃、天理市の自宅裏で目撃。200mm望遠で連続6枚撮影した1枚目。色は川にバクエンジ色が認められる。完全な球体で直線飛行。雲に突入するまでの40秒間観察。



駒ヶ岳上空の発光体

1987年11月22日（日曜）勤務先小山産業（株）の社内旅行で、山梨県石和温泉へバス2台で向かう。出発地天理の空は曇っていたが、名古屋を過ぎる頃から晴れ間が広がってきた。中央自動車道に入り、左右に深々とした木並の山並を見ながらバスは快速に走行する。私は後から2番目の右窓側座席で車酔いを心配したが、アルコールが少し入ったせいか気分は良く、午後1時頃諏訪湖に到着した。

諏訪から目的地甲府への走行に入って、バスガイドさんが「ニセヤツガタケ（ハケ岳）」の説明をし、前方にうっすらと富士山が見え始めたころ、フィルムを1本撮り終え、2本目を詰め替えて、再び富士山を1枚撮影。辺りは陽が西に傾いて夕闇が迫る。右手にそそり立つ駒ヶ岳周辺の山々は澄んだ空をバックに逆光となっている。しばしその黒々とした山のシルエットを見ていると、突然、確く物体が現われてフワッと弧を描くように降下するのが目に入った。とっさにカメラをつかみ200ミリ望遠で連続シャッターを切った。2コマで一瞬視界がさえぎられ、再び光体のあった付近をみなが、何も見えず、しばし凝視し続けたが何も発見出来なかった。

腕時計に目をやると4時30分を指していた。発見から撮影まで1~2秒。シャッターの間隔も1秒以内である。その間、光体はサービス料プリント上で2ミリ移動（降下）している。望遠を通して見た感じでは、始め一つの光体に見えたが、降下したとき2つの光の連結状に見えた。これは撮影された光体にも認められる。色彩は黄みがかった白色光だった。見掛けの大きさは金糸より大きく、シャッターは125分の1で切れていたと思う。疾走する車内からの撮影で景色が余りブレていないからである。

■1988年元旦の降下物体撮影■

1988年1月1日午後1時半すぎ、天宮清、天宮ユキ、天宮志麻の3名は、毎年恒例の新春UFO観測のため、自宅から外に出た。

空は快晴で雲一つないが、盆地特有の霞が、周囲の山をわずかに被っている。無風に近いが、南西の微風が感じられる。我々は自宅から東に50mほど離れた地点で観測に入った。

周囲を畑に囲まれた巾1.5m程の路上だが、人はほとんど通らない。近くでは親子が凧上げに興じる姿が見える。しかし、風がないため、凧はなかなか上がらない。駆け出してあがったと思っても風がないため、すぐ落ちてしまう。遠くを見渡しても凧は見えない。このような日は珍しい。

空には時おり爆音がとどろく。目をこらして見ると白い点のように小さい軽飛行機が飛行していた。6倍

の双眼鏡で形を確認しなければならないほど、それらは小さい。大晦日から元旦にかけての取材帰りと思われる、それらの小型機は大阪方面へと向う。

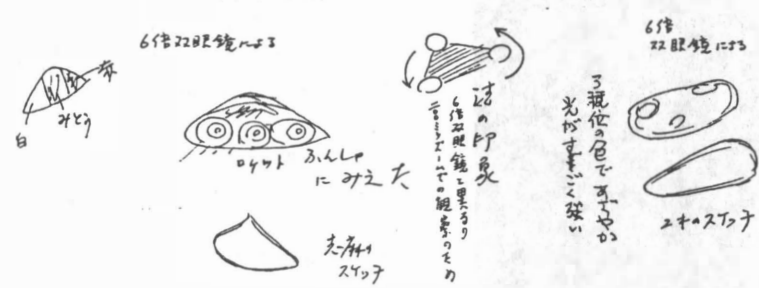
午後2時頃になったとき、ユキが「あそこにタコが見える」と言った。指さした方は、奈良の若草山より左手、真北にちかい方角だった。確かに、鳥や飛行機とは異なる「タコ」らしきものが目に入った。カメラ（アサヒペンタックスME・シグマズーム100・200）のズームをいっぱいにしてこれを観察。同時に「参考のため」とシャッターを切った。しかし、凧にしては位置が少しづつズレていく。異常を感じた私は、再びシャッターを切った。「凧」は陽光を反射して光っていたが、その反射光に強弱が見られた。つまり、物体は移動しながら姿勢を変化させ、そのことにより反射部分の面積が変化するらしく、際立った輝きを呈する時と、識別が困難になるほど薄くなるという状態を、あたかも定期的に繰り返すようにして移動していた。

その「凧」状の物体は、光る部分が3ヶ所あるように見え、それが回転しながら飛行している感じを受けた。妻は「タコだから、あまり撮るな」と言った。しかし、私はその声を無視してシャッターを切りつづけた。6倍双眼鏡で、娘と交互に観察していた妻もついに、「いや、あれはキソク正しく回転している」「自分の力で進んでいるように見える！」と言いはじめた。（このセリフは当時の記録にはもれていた。この言葉が目撃最中の発言として追加されたのは22ヶ月後の1989年11月10日である。

光が強くなる瞬間を狙って、私はシャッターを切った。物体は次第に速度を早め、山の稜線から、山より手前の空間に入った。この頃になると、物体は当初の複雑な色合いがうせて白一色となり、まるで白い鳥が滑空するように建物の陰に隠れた。スーッと着地するような滑らかな動きであり、タコを手繰り寄せるとか、糸の切れたタコが墜落するといった動きでは絶対なかった。

われわれは、何かわからないものが町の中に吸い込まれた現象に、とまどった。妻は「糸の切れた凧ではないか」「模型飛行機ではないか」と言った。これに対して私は「凧があんな長い距離（50度以上の経路が

目撃後30分以内のスケッチ



あった)を流されるか」「模型にしる本物の飛行機にしる、本体自体を回転させながら飛ぶ航空機はない」と反論。「それならば光る風がクルクル回転していたのかも知れない。光るものを付けている風を捜さなくては」など、ああだこうだで20分くらい議論に費やした。このころ、ようやく、記録をとらなくては!と、志摩の志摩に時計と紙、筆記用具を自宅まで取りに行かせた。「観測」ならば当然の道具を持参していなかった事実は「ぶらりと外に出た」という態度に起因するが、カメラと双眼鏡だけで観測し、何か目撃したら自宅から記録道具を持ってくるという習慣になっていたことは事実である。しかし、時計さえも持たなかったのは観測者として失格だ。

発見位置、継続時間、観察スケッチなど記録をとり、次に「着地地点に行かなくては!」と私が言うと、「また上がるかも知れない。しばらく様子を見よう」という妻の意見で、約1時間、目撃地点を動かず付近を観察。変化が見られないので、志摩が自転車で降下地点の方向に出発した。10分くらいで戻り、「風上げの形跡はない」とのこと。この時、妻

と娘は、お互い「あの四角い屋根の向うだね」と見方が一致していたが、距離については不明なので物体が降下した地点を調べたことにはならなかった。元旦なので我々のようにゆっくり空を見上げている人は皆無に近いので他の目撃者捜しはあきらめた。

このあと、私も自分なりに降下方向とと思っている(実はだいたいおそれていたが)シャープの工場を目指してバイクをとばした。シャープ工場の守衛室で「この辺に妙な物体が落下してきませんでしたか?」と聞くと「見なかった」とのこと。また「この辺でタコを上げている人はいませんか?」と聞くと「この辺で、そんな人はいない。それはUFOではないのか?」と逆に言われてしまった。

目撃直後、われわれは飛行機が太陽光線を受けて白く光る様子と比較してみたが、われわれの見た物体の光はやや黄色オレンジがかって見られ、飛行機の方は完全なジュラルミンの白色光であった。また、低空飛行のセスナ機の翼端灯がチカチカしている状態とも比較してみたが、物体のライトは相当明るく、セスナの10倍以上あった。

目撃直後の印象をまとめてみると、以下ようになる。

- ◆光った部分、またはライトに相当ものは複数で、移動中に回転するように変化した。



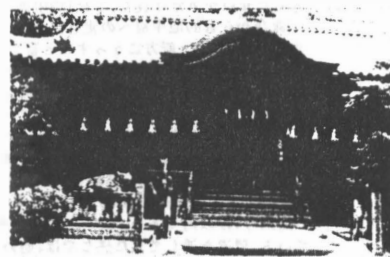
降下物体の見られた範囲を示す地図

- ◆その光は、消えることがなく、ただ強くなるときと弱くなるときがあった。
- ◆物体は全体として三角形に近く、刻々と変化して、姿勢を変える状態、あるいは形自体の変化を示した。
- ◆最後、地上への接近は、落下ではなく、滑空状態を示した。

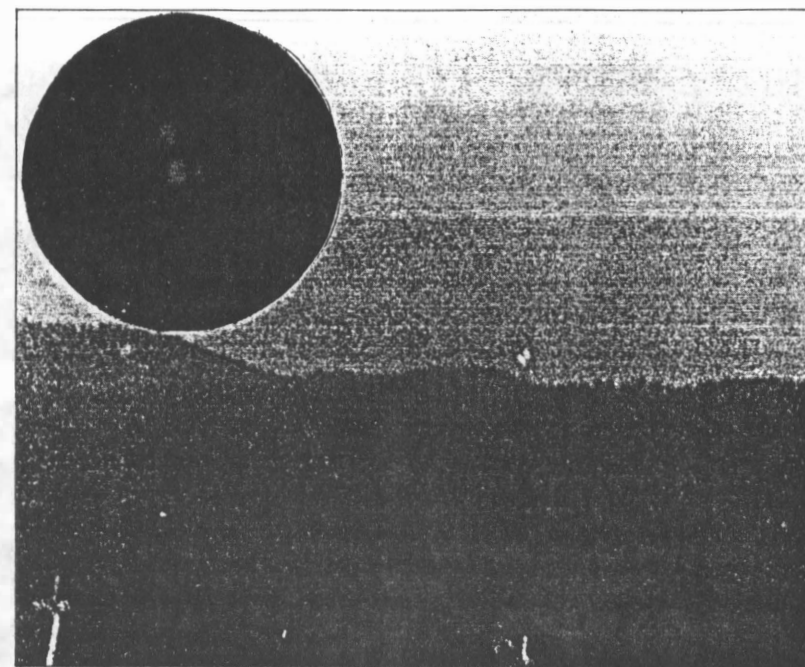
■写真の検討経過■

目撃2日後の1月3日、写真はまだ出来上がっていないが、妻の目撃証言から、物体が隠れた「四角い屋根」の建物の向こう側にある、緑色の屋根(天理教の建物)を目標に自転車を走らせて妻と向かったところ、その手前の木立が「和爾下神社古墳」という前方後円墳の場所であった。

祭神はササノウ、オオナムチ、稲田姫。山鹿灯籠に似た新年の飾り物が14個、軒下にキラキラと黄金色に輝いていた。



和爾下神社古墳詳説



10枚目の映像。山の稜線にかかる瞬間。円内は2枚目の映像。3つの光った部分が見られる。下は12枚目。

1月4日夕刻、出来上がったプリントには確かに何かの像が写っていた。ズームレンズや双眼鏡で観察したより鮮やかさは落ちるが、9センチ×12.5センチのプリントの上で最大長径1ミリ弱、最小8分の1ミリの、刻々と変化する物体がとらえられている。形、色、大きさの変化がわかるが、実際の形は不明である。

2コマは空だけの背景に写り、他はそれぞれ背景が写っていたので、各コマの背景を合わせて1枚のトレーシングペーパーに写し取ってみると、物体の位置は、ほぼ一直線上に並んだ。地上との角度を計ると22.5度になる。

しかも、各位置は直線上で規則的な印象を与える。これは、物体の輝きが強まった瞬間をとらえてシャッターを切ったことに原因していると考えられる。つまり光の強弱に規則性があらわれている。

地上に向かって22.5度の直線降下を維持できる飛行物体とは、一体何であろうか? 考えられる現象を列挙してみる。

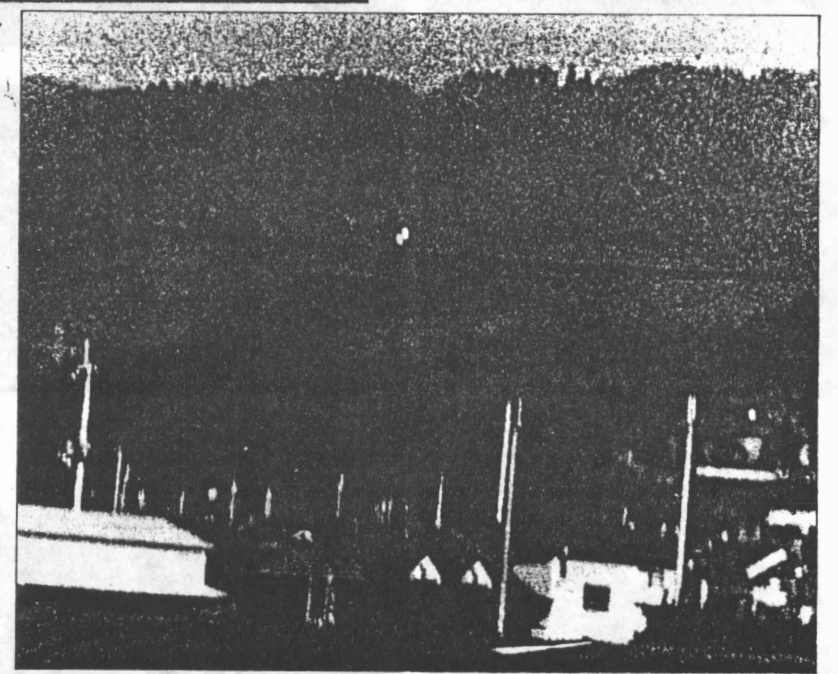
1. 糸の切れた風船の降下
2. 模型飛行機の着陸
3. 気球、風船の落下
4. 大型の鳥の着地
5. UFOの一種

1月6日夕、小キャビネ判に拡大したプリントが出来上がってきた。物体の撮影コマ数は全部で14コマである。映像は各コマの中央に写っていた。キャビネ判に写し出された

※※ここに掲載の写真は、ASA100ネガカラーからプリントしたものをモノクロ接写し、そのネガから印刷製版用100線マゼンタコンタクトスクリーンを通して焼き付けた印画を、さらにコピーしたものを使用した。

“物体の質感が稀薄になる”という状態をみせている。これはなぜだろうか。物体の回転とおぼしき周期的な変化も、木立を背景にするところから見られなくなり、屋根に隠れる瞬間は、いままでのすべての特徴を失ってめだたない鳥の滑空に似た状態で終わっている。消滅直前の姿なのだろうか?

妻と娘とで、これらの状況を話し合ったが、始め風のような模様のついた人工物、あるいはロケットの噴射を思わせる発光が、次第に自然界の一部として溶け込むかのような姿



像をルーペで拡大し、順番にスケッチを描く。これは妻が担当した。

物体の映像は、細長い棒状から丸楕円と様々に変化しており、見かけ上の面積も数倍に変化しているのがわかる。この事実は、肉眼および双眼鏡による観察に合致している。

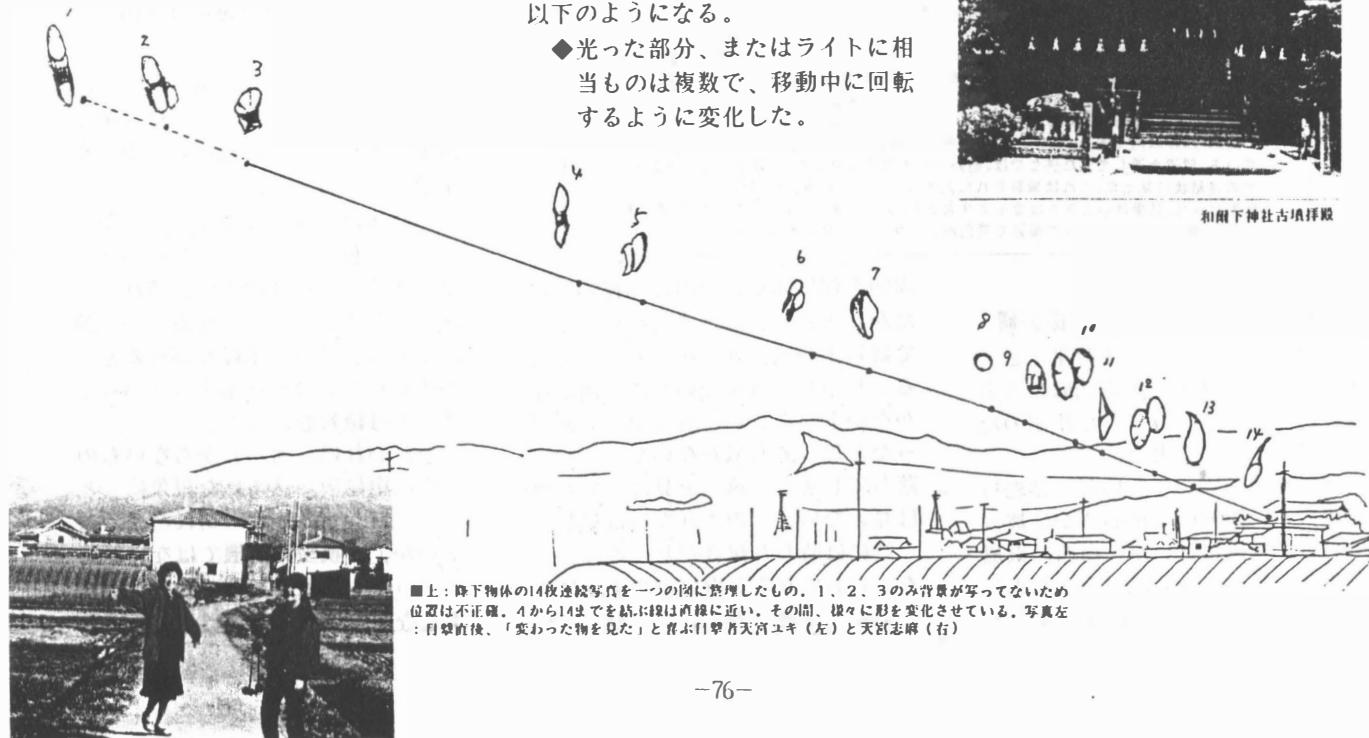
物体が地上近くまで降下し、建物の屋根に隠れる瞬間の映像は、かなり小さくなっている。また、色彩も発見当初の青や赤、緑のカラフルな色彩が消滅し、また発見当初、棒あるいは三角形の人工的形状もなくなって、単なる白いボヤッとしたものになっている。もし、空から目撃者に対して距離が縮まる形で降下したのなら、物体の形は大きく鮮明になるはずなのに、この物体は、山の稜線から降下する際が最大の大きさで、そこから町中に降下するに従い、

に変わっている。これは物体自体が形を変えているとしか考えられない、という意見が出た。また、旧知のS氏からは「このような物体ではなかったか?」という考察と模型が送られてきた。この模型は、三角盤状の3点に光源がついたものと、三角錐の3点に光源がついたものの2種あった。

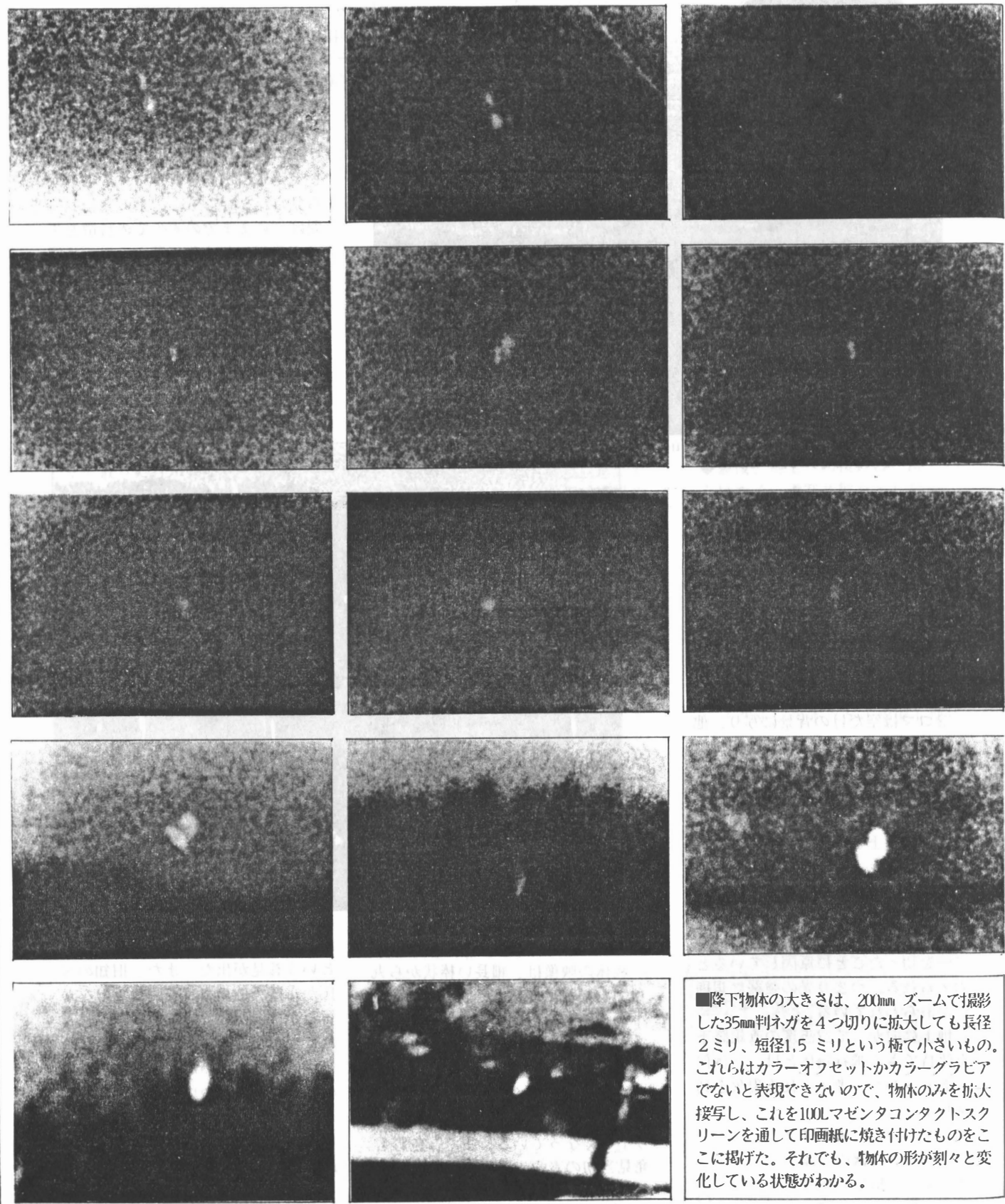
確かに、このような物体の飛行が最も説明しやすい。

1月7日夜、更に検討を深めるため、キャビネ判から物体の映像部分を接写拡大する作業を行なった。ベローズに接写レンズをつけ、コタツのテーブルの上で照明をセットし、ギリギリまで近づけて撮影。フィルムがASA100なので絞り5(開放で4)4分の1秒。

この作業をやるうちに、「これは



■上: 降下物体の14枚連続写真を一つの図に整理したもの。1、2、3のみ背景が写っていないため位置は不正確。4から14までを結ぶ線は直線に近い。その間、様々な形に変化させている。写真左: 目撃直後、「変わった物を見た」と語る目撃者天宮ユキ(左)と天宮志摩(右)



■降下物体の大きさは、200mmズームで撮影した35mm判ネガを4つ切りに拡大しても長径2ミリ、短径1.5ミリという極めて小さいもの。これらはカラーオフセットかカラーグラビアでないと表現できないので、物体のみを拡大接写し、これを100Lマゼンタコンタクトスクリーンを通して印画紙に焼き付けたものをここに掲げた。それでも、物体の形が刻々と変化している状態がわかる。

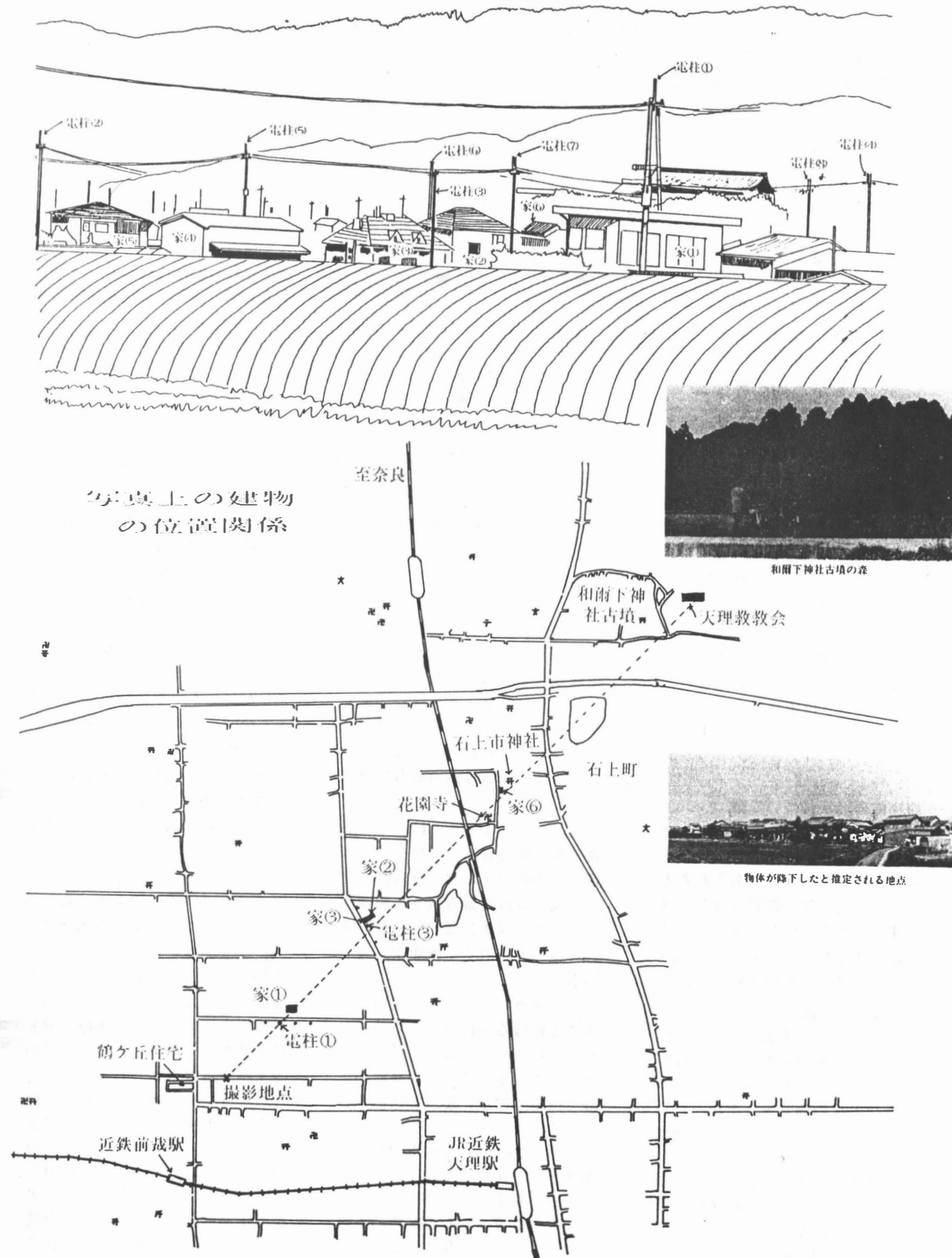
UFOではないか！」という気持ちが起こってきた。

これ以上は自分だけの判断より、他の人の意見を聞いてみよう、全体の写真と物体の拡大連続写真を一枚の紙に貼り付けた資料を、何人かの旧知に送ってみた。

その結果、一人の研究者が、この写真をプロの元通信社カメラマンやコンピュータ技師に見せて、この現象に関する討論を行なってくれ、更に同氏が自ら画像解析のプログラムを作成して、この現象に応用した結果を送ってくれた。

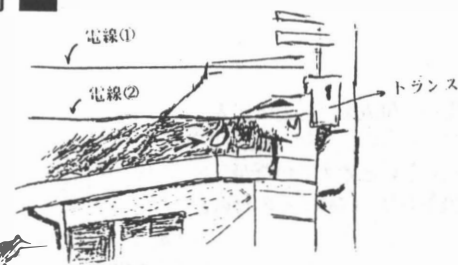
コンピュータの処理過程は8ミリビデオで送られてきたので、その模様を誌面に表現するにはこのような単色刷りのものでは意味がないので、S氏が色別にドットで表現されたプリントを送ってくれたので、同氏の論考と共に、以下に紹介する。

■降下物体の背景を図にして、建物や電柱の位置を地図上に記入。降下物体がどの付近に向かったかを検討したもの。当初、見掛けの状況から和雨下神社古墳当りに降下したらしいと考えていたが、S氏より「家⑥の付近ではないか」と指摘があり、改めてその付近を調査し、家⑥に当る松村家を確認した。



イメージキャナによる解析

|||||S生|||||



撮影された地区を実際に見たわけではないので、各々の位置関係を写真から見た限りで考えると、電柱①よりも、もう一列向う側に位置する電柱は、電柱②及び③である。更にもう一列向う側の電柱が⑤⑦⑨で、写真14コマ目の拡大写真中(図参照)画面中央より上に写っている電線①は、電柱②と③との間のものと思われる。

写真14拡大写真中、画面中央の電線②については写真12及び後日撮影写真から、電柱②に重なっているように見える事、さらに電線②を左画面に伸ばして行くと、電柱⑤にも重なっているように見える事から、電線②は電線①より手前の電線と思われる。

物体は写真10及び12から見た限りでは、少なくとも電柱⑤及び⑥のより向こう側にあり、家⑥のあたりかそれより向こう側に降下しているように見受けられる。

写真14拡大写真では、画面の左端に家①の雨どいと家⑥の一部が写っている。それから考えると、物体の大きさは電柱に設置されているトランスよりも大きい事は明らかである。(電柱⑤のトランスと比較)

■物体の形状について■

次に、撮影された物体の形状を考えてみたい。この形状解析が今回の最も難解な部分であると考えられる。何故ならば、撮影された14コマすべてが奇妙にも形状を様々に変化させており、通常の3次元的な図法はほとんど役立ちそうにもないからである。

撮影者である天宮氏、及び同時目撃の御家族の方々の目撃報告を検討しても、この物体が一体どのような形状の物であったかが判断しかねてしまう。また後日描かれた写真からの拡大スケッチからも、その物体をなかば常識的な三面図に示して表現することは極めて難しいようである。

そこで今回、試行錯誤的にコン

ピューターによって写真解析を行なってみた。使用したのは処理速度の速い高性能な大型コンピューターではなく、汎用のパソコンによって行なってみたものである。従って、精度の面では大型マシンに比べ疑問視される部分もあるものと思われるが、何分、開発途上の分野として御了承願いたい。

■システムの原理■

ここで使用したのはあくまでも一般的にアマチュアが使用できるマイコンとしてNEC製PC-9801を使用した。最近市販されているパソコンは、同社製品に限らず画像処理の上でかなり取り扱える画像が細かくなっているの、次の実験ではそうした最新の機種を使ってみようと考えているが、残念ながら今回は手持ちの旧機種で実験を行なった。

画像入力装置としてエプソン社のGT-3000というイメージスキャナーを使用した。これもまた、最近では各社より精度の高いものが市販されているようだ。

しづれにせよ、イメージスキャナ(画像をコンピューターにデータとして取り込む装置)は白黒よりもカラーで取り込めるものを使用した。

イメージスキャナーは、その画像を取り込む方法として、赤、青、緑と3色のフィルターを透過させて3回に分けて読み取る「画順次方式」と1ラインごとに色分解を行なって読み取る「線順次方式」がある。

処理速度からみると、画順次方式の方がはるかに早い。しかしながら、精度の面では線順次方式に比べて劣る事。それと、今回の実験では電話回線を使って送信するわけではないので、スキャンに用いる時間は充分にある事から、線順次方式を採用した。

両者ともイメージスキャナーの走査方式は違っても、原理的には同様で、一つの対象物(ここでは

■14コマ目の写真を見ると、電線①は画面右端の電柱①のものではなく、もう一列むこうの電柱に接続された物で、物体はその電柱①②より遠い事がわかる。

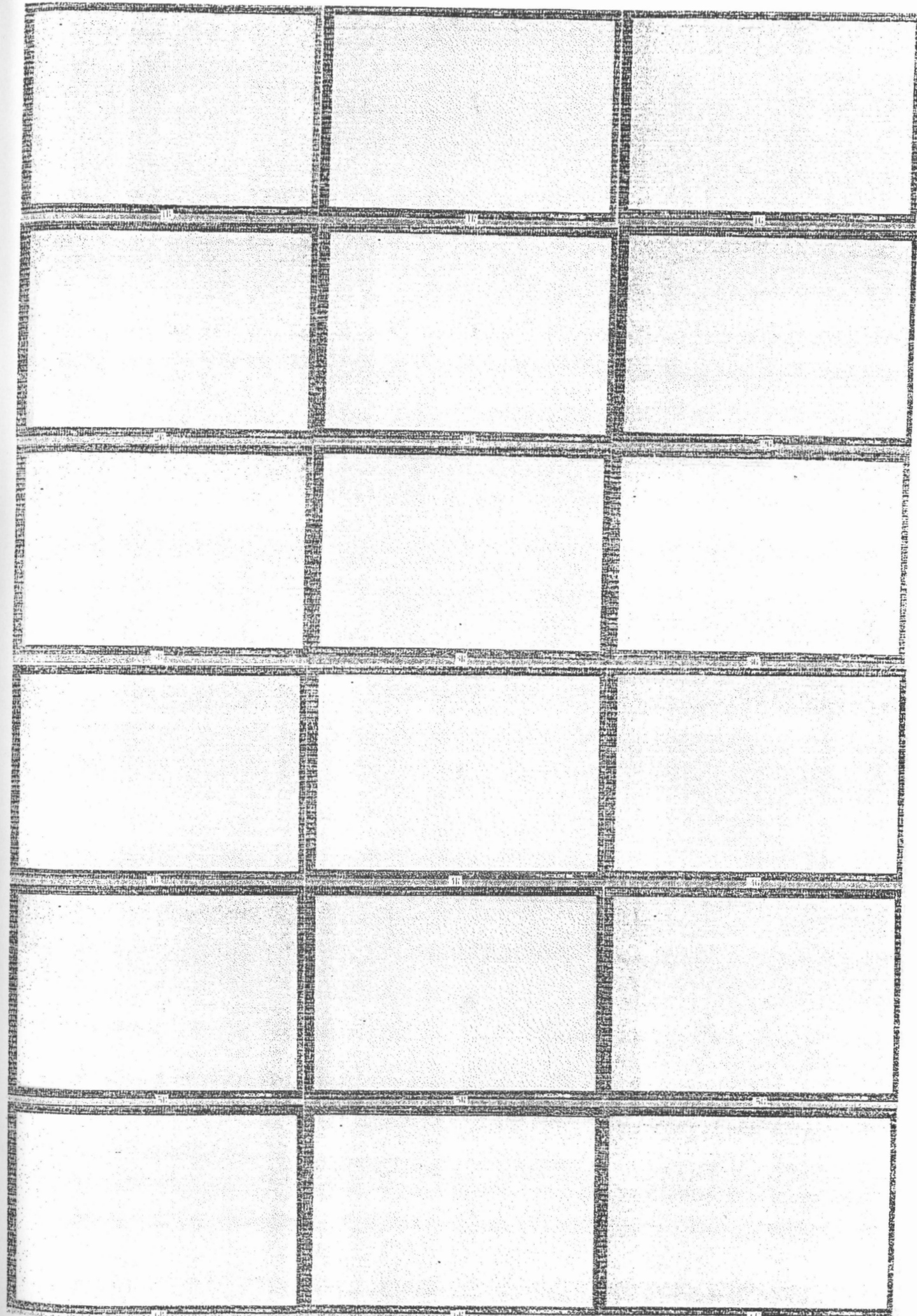
次に12コマ目の写真から物体までの距離、及び大きさを推定してみると――

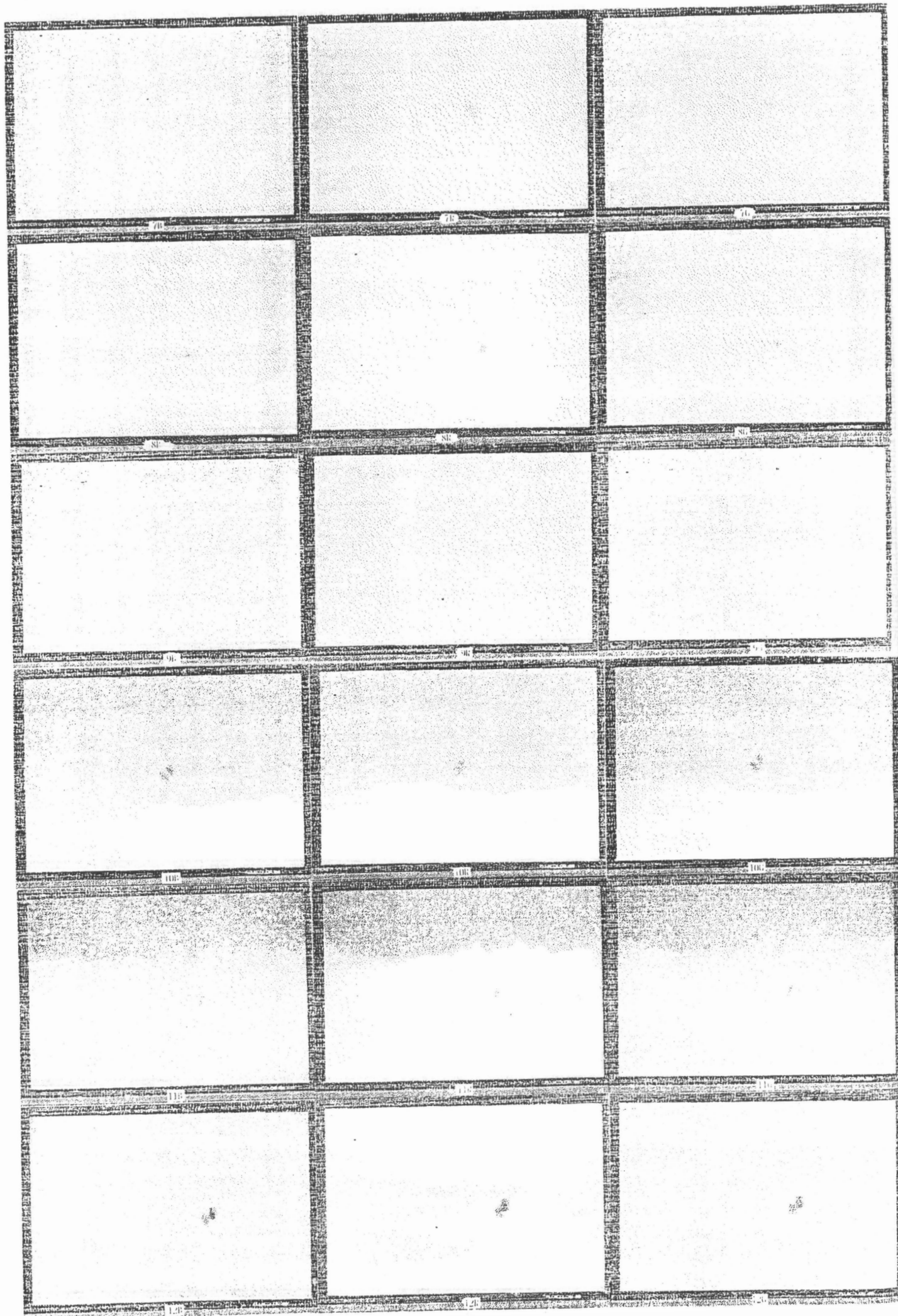
写真)を赤、青、緑のフィルターにかけてデータとするもので、一画面をいっぺんに処理するか、ある決められた間隔を一行として順次スキャンしていくかの違いである。また、今回使用したイメージ・スキャナーGT-3000は200ラインと400ラインの選定が可能である。画像解析を行なう上で、処理速度よりも鮮明な画像を得る方が重要であるから今回は400ラインのみで行なった。

一枚の写真データ(ここではキャビネサイズ)をコンピューターに取り込むのに要する時間は約1分弱…これを青フィルター、赤フィルター、緑フィルターと3度行なって合成する訳であるから、一枚当たり4～5分の時間を要する。もっとも、最近のパソコンはCPUのクロック周波数が早くなっているの、それを使用すればもう少し処理速度は早くなる筈である。

また今回は、フロッピーディスクが2DDタイプであるため、1枚のディスクに5枚分のデータしかファイルできなかった。従って今回、計15枚の写真データを取るためにデータだけでフロッピーを3枚も使用した。今後は2DDタイプのフロッピーやハードディスクを使う事で、この点は改善できる。

さて、この取り込んだデータをズーム等の処理をさせるためには、日本マイコン販売㈱のアニメーションツール「GRAPHIC」を使用した。もともとこのプログラムは、アニメーション作成のプログラムで本来ならば画像処理とは無関係なのであるが、データのフォーマットさえ合わせて行なえばGRAPHICを使って無理矢理にでもデータを引き出すことができる。今回は、このGRAPHICの中のZOOMコマンドのみを使用し、写真のコントラスト等にマニュアルで手を加えるようにした。今後は、ここも自動処理すべき部分で





ある。

■結果■

実験結果はVTRに記録した。その理由は、直接パソコンとVTRを接続すると、映像信号の違いによって(RGBに分けられた信号を家庭用TVのためのコンポジット信号に変換するために)鮮明度が失われてしまう事、この点ではカラーより白黒の方が良いが、カラー写真が白黒になっては意味がないので、コンピューターの画面をVTRカメラで撮影するという方法をとることにした。(画面写真参照)

■新たな不思議■

これは実験を行なっていて気づいたもので、写真だけでは気がつかなかった事で、VTRを見て頂けば、なるほどとうなずけるシーンが出てくる筈である。1枚の写真は、RGB(それぞれ赤、青、緑)によって構成されるが、単色

■右はTVモニターから接写した画像処理例。通常、コンピュータにより行なわれる写真分析は、「輪郭線の強調」「色による密度分布」「密度断面図」「映像の強調」などがある。

ここでは、カラー映像を構成する色素を分解することで、形状、色彩についての特徴をつかもうとする試みで、報告で述べられているように、8コマ目の物体周囲の赤色素空白は興味深い。

で画面を取り出した場合、奇妙な現象が起きる。

赤フィルターを使ってデータを取った場合、画面の中の赤が強調される。(編者注：カラー印刷でも、青空の中には赤版による赤点が一様に印刷されているのが普通である。)ところが、背景の空の一部に中空の部分がかびあがるのである。これは特に8コマ目の写真を取り込んでいた際、特に赤フィルターをかけた時にはっきりと見られた。物体の周囲にダグマ状とも見えるドットのない部分が見つけられる。

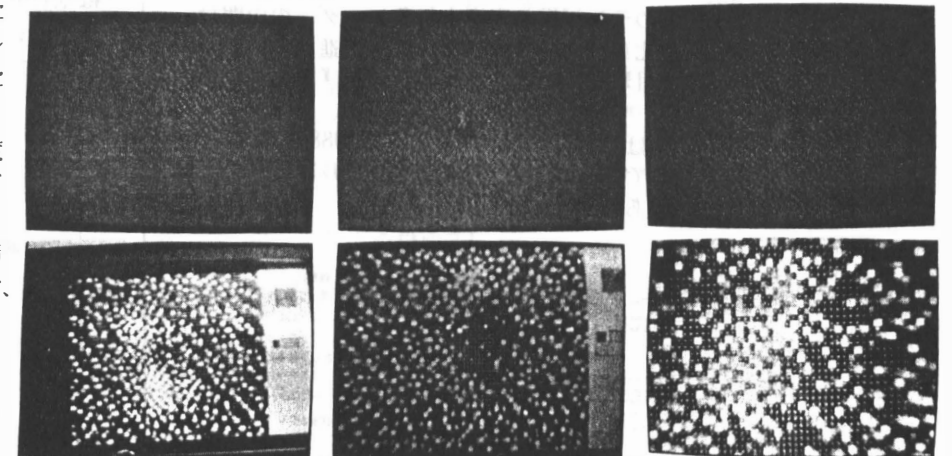
解析した写真は、オリジナルとは別に拡大複写したものであるが、複写した際の照明やその位置関係とは無関係に思える。

むしろ、目に見えず、フィルムのみ感光する波長をもった何らかのゾーンがあったように思われてならない。

■最後に■

今回の試験的プログラムは、当初から写真解析を行なおうとして作成したものではなく、たまたま別の目的でシステムを運用していた時に、思い付きで行なってみたものである。従って、実用化するためには、まだ多くの改善部分もある。この方法で未確認物体の形状が判明するか…といった当初の目標には到達できなかったが、今回の実験で、天宮氏の目撃レポートに記されていて、写真からは確認できなかった点、つまり、「物体は赤と青」という色彩が写真上では認められなかったが、コンピューターのデータでは、明らかに物体は青色のデータも持っていた。そして、8コマ目に認められる中空部分もコンピューターのデータから明らかとなった。今後はこの点の解明も必要かと考える。

1989.3.14

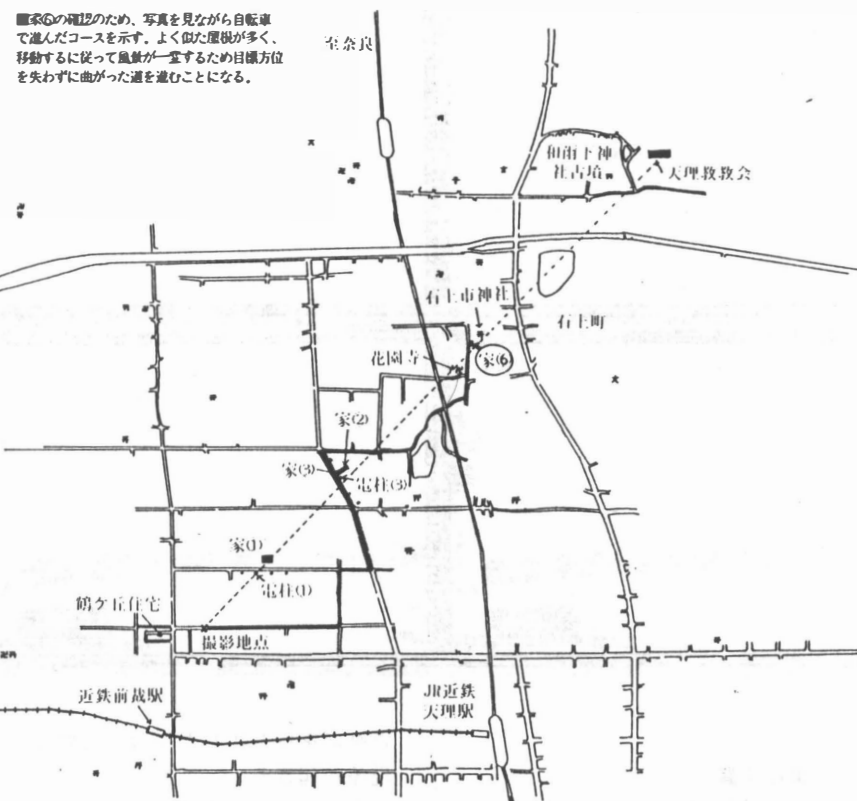


■家⑥の確認■

1989.4.2, AM11:00頃、筆者はS氏のレポートを自転車のカゴに入れ、双眼鏡、カメラを携帯して撮影現場に立ち、降下物体とはほぼ同じ距離にあると算定された家⑥を双眼鏡で観察。同時に電線の位置を図面と照合。誤りのないことを確認した。次に、家⑥の姿を頭に入れて、その方向へ自転車を進めた。目標に向かって空中を飛行できれば簡単であるが、地上の道は目標まで真っ直ぐではない。幾重にも重なる建物の間を右に左に走って行くと、南北に走る県道沿いに家②、家③が並んで建っているのを確認。合わせて電柱②、電柱③が県道に沿って立つのも確認した。この地点で家⑥を捜したが建物の陰になって見えない位置になっていた。

家⑥と思える形の家並みに到達したのはJR奈良線まで来た時であった。

家並みを撮影して帰宅。フィルムを写真店に出した。写真が出来上がり、4月6日昼、写真の建物が家⑥であるかの確認のため、撮影地点から双眼鏡で写真と照合したところ、似てはいるが別の建物であったことが判明。



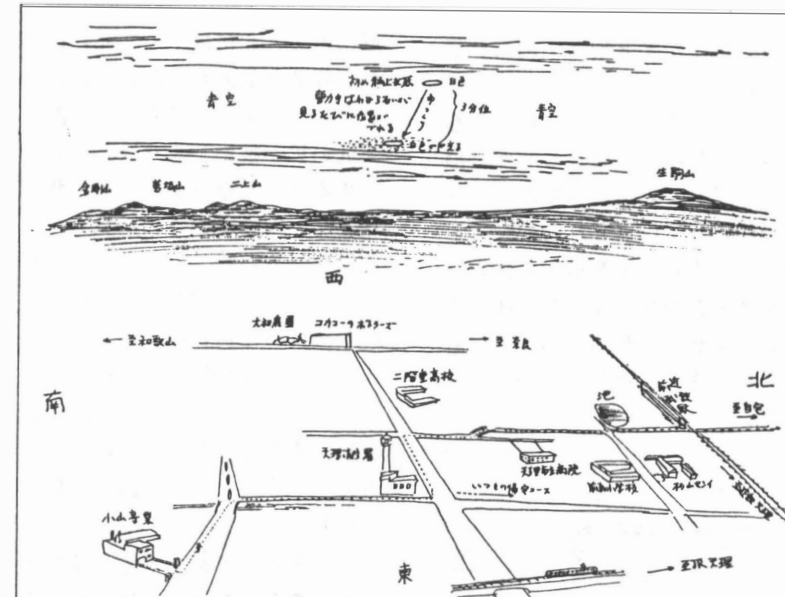
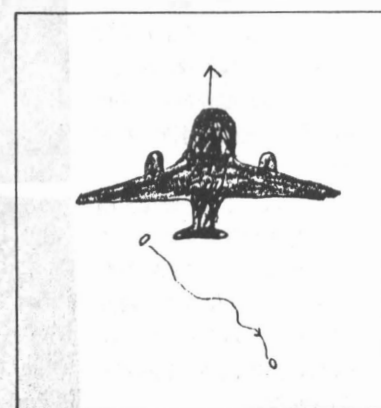
今度の目撃にやり直すことにした。4月9日昼、再度家⑥確認のため、撮影地点から石上町に向かう。途中絶えず双眼鏡で位置を確認し見失わないよう呼道をする。

JR踏切りで最後の確認をしたときは最初の踏切りより、一本奈良

寄りであった。そして、石上町277の地点で家⑥を確認。この付近が物体の降下地点であると仮定して付近を回ったところ、石上神社の茂みがあり、境内に直径50cm程度の丸石が2つ置かれているのを見つけた。

■1989年の目撃■

時は前後するが、1989年1月5日、午後4時17分頃、自宅付近にて、ひさしぶりにおだやかな晴れた空を観測。飛行機 (DC-10) が高度を下げつつ私の頭上に迫ってきたので、20倍双眼鏡で機体をとらえてみた。高度は500m以下であろう。飛行機が頭上を過ぎる手前で、機体のそばに銀色の光る小判形の物体が現れて、飛行機と離れていくのを発見した。飛行機と比べかなり小さいので、見かけは飛行機のそばでもずっと高空かも知れない。動きは飛行機の通過に従



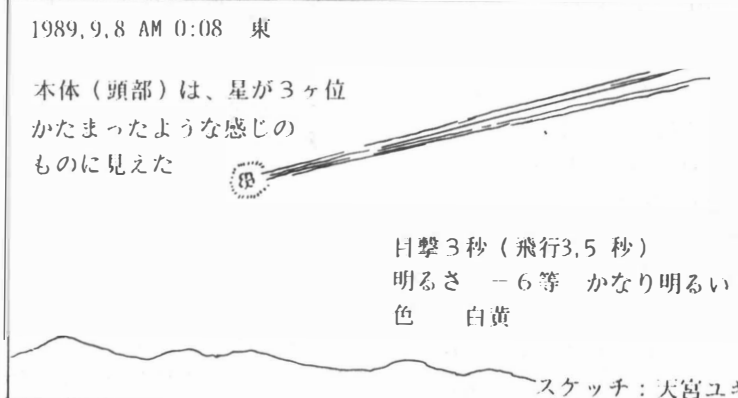
1988年8月29日午後5時45分、会社からの帰途、バイクで西に向かうと、最近には珍しく水平にたなびく雲の間に奇麗な卵形をした雲の切れ端のようなものが見えた。長さ30分〜1度位。道路を右に折れ、それを左手に見ながら観察。なかなか形が崩れない。1〜2分後、それが極めてゆっくりと下に移動しているのを確認。見る度に位置が違うのである。もつとよく見るため、大塚消防署交差点から道路を西にとり25号線に入った。指円形をした雲の切れ端があるいは飛行機雲かも知れないと思っ、目を凝らして見たが機影は見えず、それ以上は双眼鏡でないと無理な距離であった。しかし、飛行機雲は其径の延長に移動するし、少しは長くなったり、軌跡が残ったりする。長さも形もそのまま垂直に近い降下状態は、日常見馴れている飛行機雲とは違う。頭の中では「カメラがあれば良い写真が撮れたのに」「なぜ携帯するようにならなかったのか?」「あれはUFOではないのか?」等といった思いが錯綜した。観察しつつ「自宅に行くまで消えなければ写真に撮れるかもしれない」と僅かに期待したが25号線から前線へ向かう交差点の手前で見失った。その頃は下部の雲の中に入りかけ、モヤを通して光る蛍光燈のような状態で見られた。

って機体から離れていくように見えるが、それは見かけ上で、物体自体は静止状態に近いのかも知れない。それは20倍の視野の中でも小判型の面積が何とか認められる程小さかった。時間にして2〜3秒の観察中、双眼鏡を動かす必要がなかった。これならば撮影できると判断してなるべく姿勢をくずさないよう注意して双眼鏡を手離してカメラに持ちかえ、物体

を捜した。だが20倍と200mm(4倍)という倍率の差は物体の再発見を不可能にした。位置は東仰角80度付近であった。

実はこの年からビデオカメラで新年を迎えるつもりであった。しかし、様々な事情で準備が間に合わなかった。ソニーの8mmCCD-V88を購入したのは3月になってからであった。

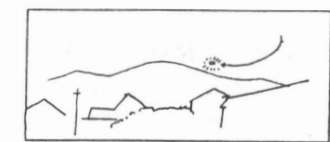
テレビ「11PM」に「MJ12」なる



目撃3秒(飛行3.5秒)
明るさ - 6等 かなり明るい
色 白黄

スケッチ: 大宮ユキ

1989.9.7, AM 0:08、東の空を南から北へ、経路35度を3.5秒で飛行した発光体のコース。この写真は目撃位置から広角35mmで撮影。この画面の対角線が62度あるので、現場スケッチと合わせて線を引いたもの。目撃の間「アッ!」あれは何だ!」「アッ」と言葉を発したのを基に、ストップウォッチで何度が状況を再現し、発見から消失までの時間を計った。「消失」は、山の上に漆う霧の向うに遠ざかった様でもあり、空中の物かげに隠れたようでもあった。流星の巨大な火球を何度も観測している筆者としては、目で追える速度でありながら急速で、至近距離に感じられ、星も見えにくい霧の多い低い空を金星以上の明るさで、しかも、形状が幾つかの光源の集団であり、UFO以外には考えられない。



1989.9.11 PM 10:15、大阪の根岸氏より「午後10時30分前後、晴れていたら観測している」との連絡で、我々も時刻を合わせて観測。話をしながら、7日に見た東の山の方を見た瞬間、オレンジ色の光がカーブを描くのを二人同時に確認した。

ものの話題が年頭を騒がせ、6月には新婚旅行で豪州へ行った邦人撮影のUFOビデオが紹介された。

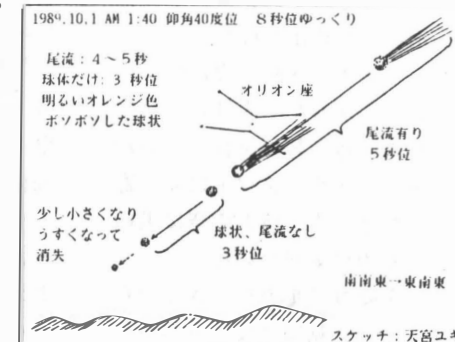
7月の参院選挙にはUFO党が出馬。同党の公告に、私も新聞の縮刷で見つけた米ソの協定が使用されていたので同党のUFO問題に対する認識が通常の好奇心ではないことを知り、賛辞を送る気持ちになり成人以来2回目の投票に夫婦で行った。

1989年8月22日、大阪の根岸氏より「UFOを見た」という電話があったからしばらく、晴れた夜は空の観測に力をいれていた。

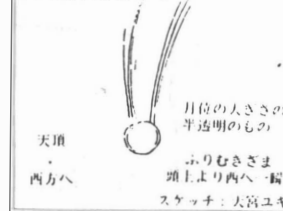
そんな日の9月7日深夜、妻と外に出てしばらく観測の後、道を戻り



UFO定点観測地点に立つ。周囲は田畑に囲まれ、南東に龍王、三輪、西方には金剛、葛城、二上、生駒の山々が一望できる。



1989.9.30日夜、大阪UFO目撃の取材を済ませ、帰宅したのは翌10月1日午前0:30頃になった。1時すぎに妻が「外は満天の星だから見に行こう」と誘ってくれたが、疲れもあって先に床に倒れた。しばらくして、「抑々」と飛行するものを見た。あれだったらビデオに充分撮れたのに...と妻が報告に来た。それが、これである。下図も同じ頃に目撃したもの。



スケッチ: 大宮ユキ

かけて東の山に視線が向いた瞬間、青白い金星より明るい光体が目で追える速度で北に向かい、隠れるように消えたのを目撃した。

この時「アーッ」「あれは何だ!!」「アーッ」と、言葉を出したので、この状況を再現して発見から消失までの時間を計測し、山と経路をスケッチした。光物は飛行機のライトのようにほとんど同じ明るさを維持して、形は人工的な複雑な感じを受けたが細部は不明である。妻は複数のライトが集合しているように見えた、と述べておりスケッチに表現されている。

見かけの速度は極めて速く、通常この方向に見る航空機のライトはこちらに近付くまでゆっくりと静止しているように見えるほど遅い。流星にしては速度が遅過ぎ、経路も長く明度の変化がないのはおかしい。

とにかく、UFOとして記録し、このデータをもとに図のような簡単な計算をおこなってみた。

このあと、9月11日、10月1日とUFOらしき現象を記録したので図と説明文で掲げる。

大阪のUFO目撃や、こうした身辺の目撃が、『UFO RESEARCHER』という刊行物の制作に走らせた。

■研究誌発刊時の目撃■

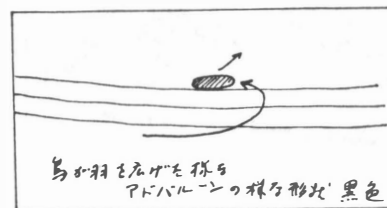
10月22日、この日曜日は第1号の『UFO RESEARCHER』の版下が完成したので、午後2時半過ぎ、バイクでコピー増刷のため出かけた。

コピーを終えて帰路、妻に頼まれていた買物をするため天理市役所の交叉点から国道25号線を真西に向かい、スーパー「オークワ」に立ち寄りとうとしたところ、前方の空に黒いものがあるのに気がついた。

バイクを降りて歩道を歩きながら観察すると、一見偏平なアドバルーン

か翼を広げたまま旋回中の鳥を思わせた。

一瞬「これならビデオに撮れるな」と思った。日頃UFOをビデオに撮りたいと思っていたからである。次に「風船にしては流されないな」と思いつつ、歩道の上を横切る低い電線と物体を合わせて見ると、ゆっくり手前に向かって動いているのが確認できた。次に「風船だろうか?」と思った。



そして、「あの程度の動きなら、素早く買物を済ませてゆっくり観察すればいい」と思うのと、「家に電話して双眼鏡を確認してもらおうか。家の方向だし…」と思いつつ店に入った。その瞬間、もはや電話のことを忘れて素早く買物を済ませる方に神経が集中してしまった。店内をかきわけて素早く品物をカゴに入れてレジに向かった。しかし、レジにはそれぞれ2人ほどの列ができていた。日曜なので皆カゴ一杯である。ようやくレジを済ませ、急いで外に出た。物体の見えた方を見ると、案の定とすべきか、やはり物体はなかった。「通過して東に向かったのか?」と東の空を見たが何もなかった。

バイクに乗り、周囲の空を見渡ししながら自宅まで走った。しかし、何も見えなかった。ところが、自宅に到着する直前、向かいの家並の屋根の上空に、ゆっくりとこちらに向かう黒い物体を認めた。

立ち止まって観察すべきであったが、私は玄関のガラス戸をあけると、家の者には何も言わず、いつも玄関に置いてある2台の双眼鏡のうちの一つをつかむとバイクのカゴに入れ、

道に出ると北に向かって50mほど走り、周囲が見渡せるわき道にバイクを置いて、上空を探索した。空は全天低い雲が被い、青空はわずか。

すると、かなり高空にあの物体が見えた。肉眼でどうにか見える大きさになっていた。しかも、次第に上昇しているようであった。私はすぐ双眼鏡を物体に合わせようとした。「どこだ、今のはどこへ行った」と、ここにきてようやく必死の思いで双眼鏡探索を続けたが、ついに物体を再発見することなく、諦めて自宅へ戻った。

妻に事の次第を話すと、私の重なる不手際をさんざん指摘され、「また現れるかも知れない」と二人で外に出て20分ほど観測したが現れなかった。鳥の飛行を見ながら、件の物体の記憶と対比してみたりしたが、やはり鳥とは異なるものであった。

■8ミリビデオに撮影の白球■

11月5日、われわれ家族3人は、かねて予定していた「大アンデス展」を見学するため万博公園跡地に建設された国立民族学博物館に向かった。近鉄難波から地下鉄で千里中央下車、そこからバスで終点まで。いろいろ道を迷ってエキスポランド入口から中国縦貫自動車道をまたぐ中央橋へと向かった。

橋のたもと自動販売機でウーロン茶を一缶買い、その様子をビデオに収めて橋を渡り始めた直後、妻が「あれ!」と言って空を指差した。見ると風船のような白い球が一個、その後方からもう一個、こちらに向かってくるのが見えた。

「風船を参考のために撮影しよう」と言いながら、私はビデオカメラを向けた。しかし、6倍ズームでも視野に固定するのが難しい。2つがモノレールの高架の向うに去ったので、それ以上は追跡する気もなく、我々は高架をくぐって橋を更に進んだ。

「また来た!」と妻の声で上空を見ると、さっき見たのとまったく同じ、純白の球体が2つ空を進んでいるのが見えた。私はふたたびカメラを向けた。2つの白球は太陽の塔に向かって進み、そこで一つはまっすぐに、もう一つは右手に折れた。「風船が方向を変えるか?」などと思いつつ…しばらく

くしてファインダー(モニターテレビ画面)が切れて真っ暗になった。私は「バッテリーが切れた」と思い込み、あわててバッテリーの交換をしたが、白球を一通り撮影した後だったので安心してた。

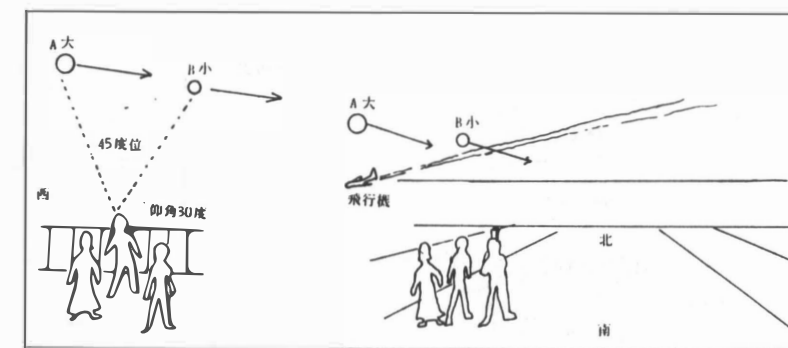
ところが、このとき実際にはスタンバイのまま録画と思い込んで白球を追っていたのであった。この事実は帰宅後、録画を再生して判ったことである。

橋の上で空を凝視しビデオカメラを持って騒ぐわれわれ3人に、「何か見えるのですか?」と問う人はいなかった。立ち止まってわれわれをいちべつし、それどころではない、といった感じで立ち去る人はいた、との妻の話である。

この後、われわれは「アンデス文明展」を見たあと青空市場の出口で、また、帰り路を迷って美術館の裏に回った時、そして美術館の前で、同じ白球をそれぞれ一個づつ目撃し撮影した。明るい空に陰影のまったくない白い物体をファインダーにとらえる困難さにより、ブレの多い画面となってしまったが、一番最後のシーンは余裕をもって撮影できた。ところが、物体が静止状態で変化がないため、どうゆう訳か私は録画のスイッチを切ってしまった。その直後「あつ遠くかかっていく!」という声で、あわてて録画スイッチを入れたが、すでに白球はファインダーの中で空と識別できない大きさに変化していた。

結局、12時10分の最初の目撃から最後の3時28までの、約3時間半の間、合計5回にわたり空を進む白い球体を目撃し、その数の合計は7個ということになる。

私は撮影したビデオをダビングしてUFO研究者12名に送ってみた。特に意見を依頼した訳ではなかったが、「UFOだと思う」との意見を4名より頂いた。その理由として「飛行機とは形状が異なる」「白雲を背景にして光っているので風船では有りえない」「空飛ぶ円盤のイメージから外れるがUFOとしか言いようがない」という内容であった。また「風船ではないか」と指摘された理由としては「自らの推力によって動いているより、風に流されている感じする。風が止まった時に静止状態となり、風が吹くときに動き出す



のではない。これだけ長く見られたのに変化がないのはおかしい」という意見であった。

以下、目撃状況を天宮ユキの観察記録から紹介する。

目撃したもの状況

天宮ユキ 1989.11.7 記

①番目: 1989.11月5日 午後12:10~11分

エキスポランド中央口より橋を渡り始めてすぐ左手を見ると、西仰角30度位に真白の球状の物体が浮かんでいた。とっさにUFOの可能性があると思い、清さんにビデオ撮影を頼んだ。以前、正月に現れた物体を双眼鏡で見た際、フチ取りが黒く中が青く輝いていたUFOを、多色発光のUFOを見馴れてない為、色が濃いのでタコだと決めてかかり、よく観察しなかったが、14枚連続写真を検討した結果、色と形を変え回転しながら飛行したUFOだったという(後から考えて、しまった、UFOだったのなら、もっとよく観察すべきだった)失敗もあったので、見つけた直後、すぐ清さんに撮影を頼んだ。

それは少し離れて2個あり、多少、大きさにも差があって、高度も違っていたが、同じような速度でゆっくりと北の方へ動いていた。2つ目を見たとき、急に「あれっ、風船だろうか」と心配になり、ぐるりと空を見回すと、他には何も飛んでおらず、その2個だけであった。その時、東から西へ飛行機が飛行機雲を引きながら近付いてきたので、「飛行機と一緒に写らないかしら」と頼んだ。先方が飛行機と写っており、後方は飛行機雲を横切って通過している(見掛け上)

この後の様子がビデオにずっと写っている(と信じていたため頼りすぎて)よく覚えていない。

ビデオ操作ミスのため、この直後から、橋の上での2回目の出現から消失までの様子が全く写っていないことが後で判明した。やはり、肉眼観察の記録メモはとっておくべきだった。

②番目: 12:15分頃か?

橋の途中でフッと左手上空(西仰角30度位)を見ると、①番目に目撃したのと同じ様な物体が浮かんでいた。すぐ、清さんへビデオ撮影を依頼した(結果として撮影されず)

最初1個だと思ったのが、よく見ると、少し離れた所にもう1個有り、やはり多少大きさが異なって見えた。

それは橋と平行に北へ移動していく様に見える、太陽の塔の方へ動いていった。2つのうち、1つは太陽の塔上空を90度ターンして東へ向かい、もう1つは、太陽の塔の左側上空をそのまま北に進み、次第に小さく遠くなっていった。

この時、清さんが「2つのうちどちらを写そうか」と言ったので、「太陽の塔から右に曲がった大きい方を写して」と頼んだ。

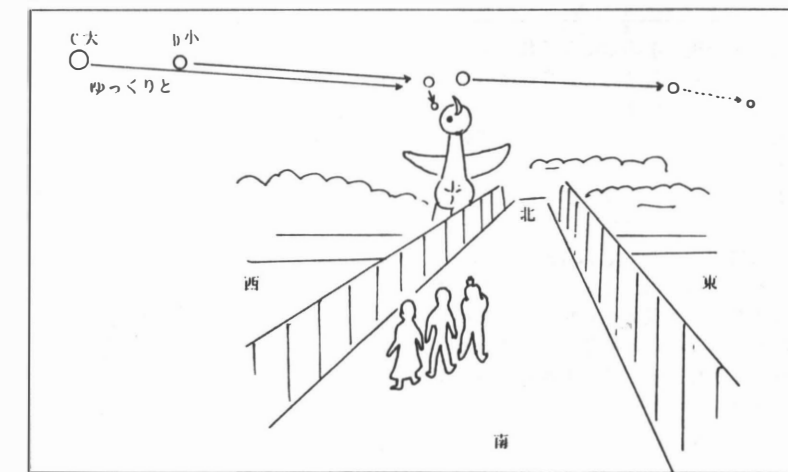
東へ向かった物体は、しばらく同じ大きさに見えていたが、やがて次第に小さくなって雲の向うへ遠くへ行った。この物体が太陽の塔と一緒に写っているのを望みしていたが、結果として撮影は失敗した。

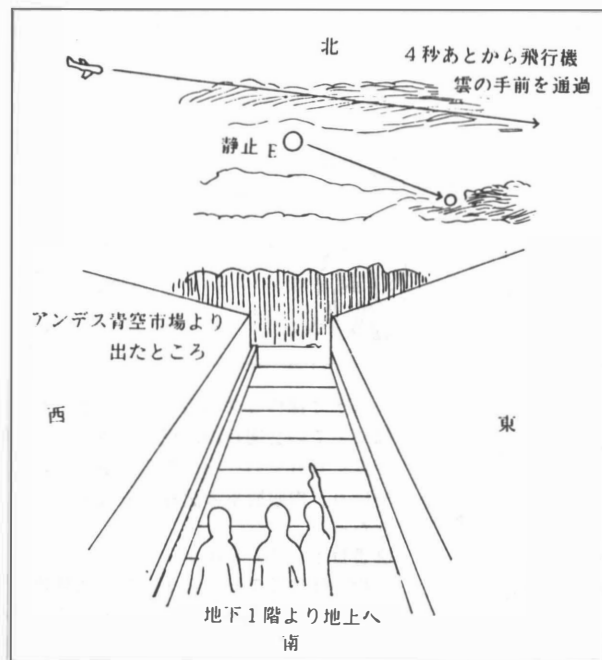
この時点で、一諸の方へ移動していた2つのものが90度別方向へ分かれた為、「風船にしてはおかしい。やはりUFOでは…」と話し合う。

今から思うと、発見時には滞空か微速度だったのが速度を増した感がある。

③番目 PM 3:00~

大アンデス文明展を見、常設展示会場を駆け足し、更に地下1階の青空市場をのぞいて、ピラコチャ神の柄のペーパーナイフを求めて、



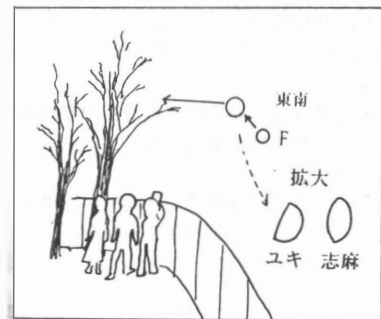


時計を見ると、3:00時2分前だった。思わず「3時2分前だから、UFOが出るかも知れないから、空に気をつけてね」と言いながら、急いで階段を登りながら空を見ると、すでに白色の球状物体が正面上空仰角30度位北に滞空していた。静止状態。数1個。ビデオ撮影。それはゆっくりと北東の方へ移動、雲の向こう側へ遠く小さくなっていった。

4秒あとから飛行機がもう一つ高い雲の手前を通過。見掛けは飛行機の1/3 ~ 1/4 の大きさか！

①番目 PM 3:16 ~ 22分

美術館の裏の欄の所で、ふと東南を見ると、仰角45度の所に①~③番と同じ様な真白い球状の物体が1個有り、真っ直ぐこちらに向かって来るように見えた。よく見ると、それは完全な円ではなく、満月が少し欠けた様な楕円形に見えた。(志麻も縦長に見えたと証言)

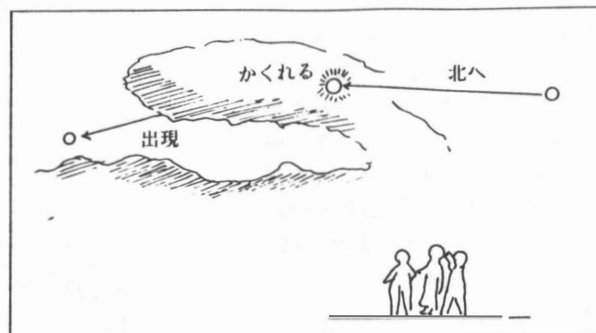


それは、その後左手の木にかくれたので、急いで左手へまわり見晴らしの良い所へ出ると、物体は同高度、同速度を保つようにして我々の右方より左方へ(南から北へ)移動していった。

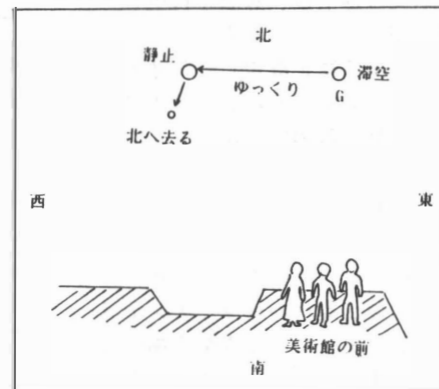
その間よく見ると、先程いびつに見えていたものが、真円のようにになっており、ゆっくりと左手の雲の中へ入っていった。雲の中でも一瞬真白く輝くのが見えたが、やがて雲の中へ入り、全く見えなくなり、少し後に出てきたときは、だいぶ小さくなっていった。

雲から出てきたあと、遠く小さくなって見えなくなった。

⑤番目 PM 3:26 ~ 28分



白球目撃図。
白球は見た時
の大きさを誇張
して、大きく
描いている。



美術館の裏での目撃について“今のは最初縦長に見えた”(志麻)とか“始めは月の欠けたのに見えた”(ユキ)とか“確かにこちらに向かってきたな”(清)とか話ながら美術館の前に出た。

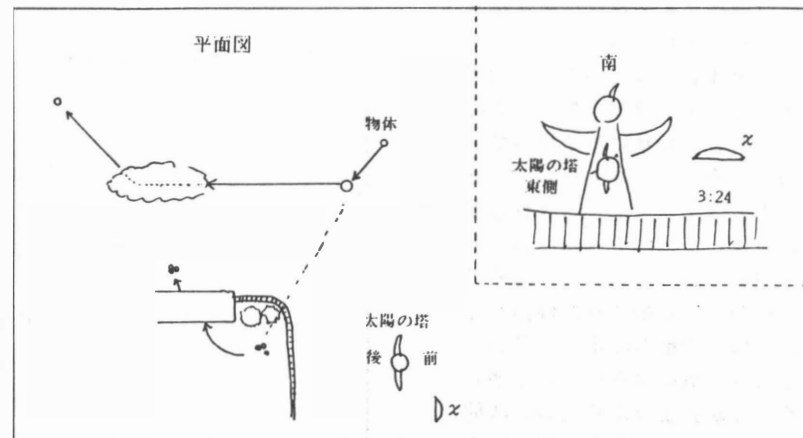
帰り路の方へ清さんと志麻が歩いてゆき、最後に私が続いて行こうとして、ふと右側(北)仰角40度位を見ると③番目と同じように真正面に、真白い物体(①~④と同じ様なもの)が滞空していたので清さんと志麻を呼んだ。ビデオ撮影。それは、ゆっくりと微速度で西へ平行に移動。少したつと静止した様に見え、その後急速に北の方へ遠ざかり小さくなって見えなくなった。発見時は、今までの中で一番大きく見えた。

目撃感想 天宮志麻 高校2年

1度目の出現の時は、風船のような光沢を放っていたので、すっかり風船だと思い込んでいた。

3番目の時は、階段の上で、まちかまえるようにして浮いていたので、変に思っ、もしかしたらUFOの可能性もあるかなと思った。

4番目の時は、動きが、きっちりしていて、定速度で動いていたので、UFOだと確信した。



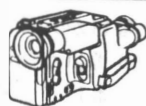
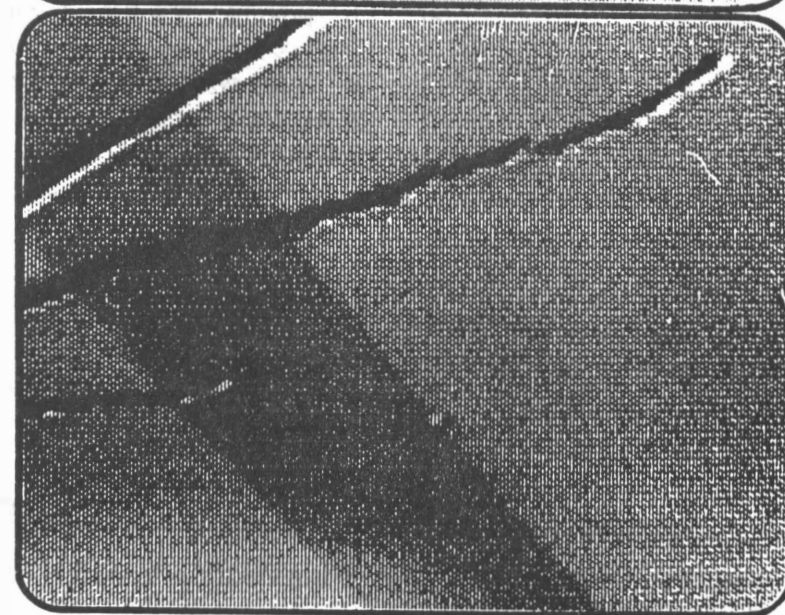
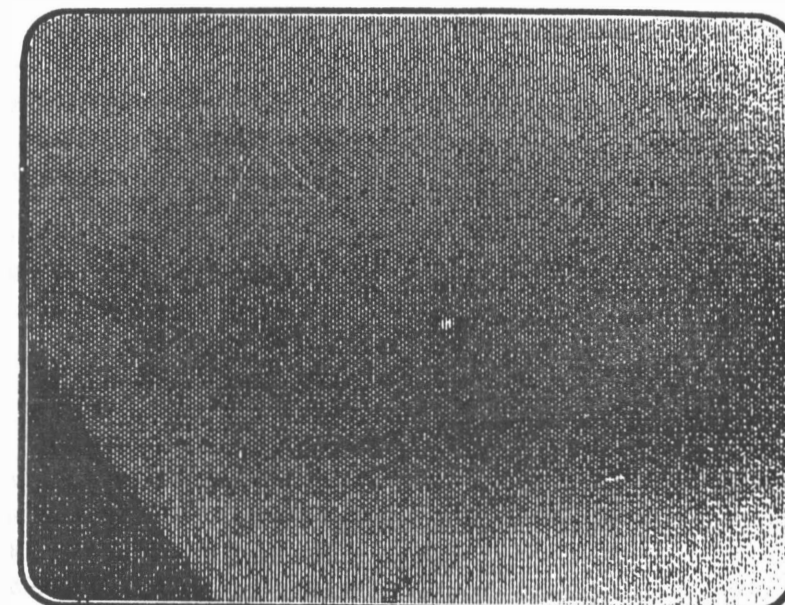
■11月12日 現場検証■

目撃撮影から1週間後の日曜日、天宮清・ユキの2名はふたたび万博公園を訪れて白球の目撃現場で状況を再現し、仰角、方位、などの確認作業を行なった。

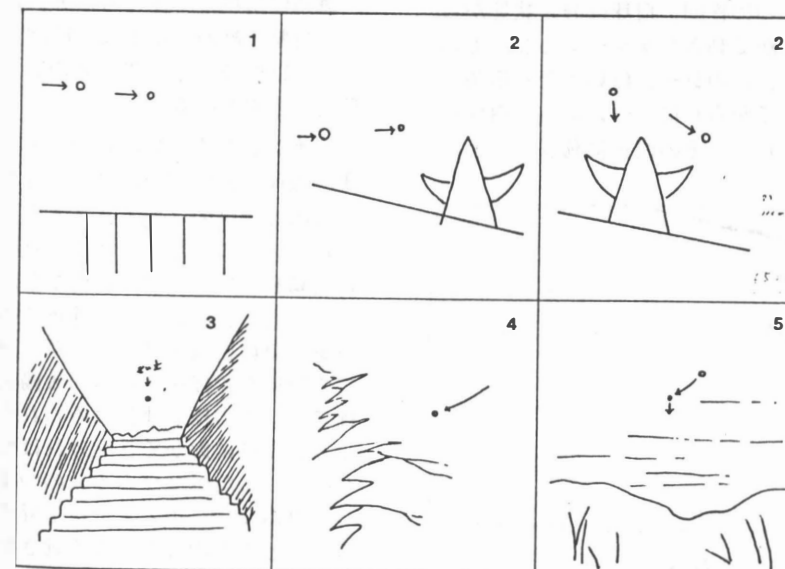
撮影したビデオの画面を白黒に焼いたプリントと風景を重ねるなどして、得た物体の見かけ上の方向と仰角は図に示す通りである。

この作業で、最初の●の地点が橋を渡りはじめて10mの位置。②はそこから16m歩いた位置であることが確認され、また仰角はかなり違って、前述の説明文にある「仰角30度」は仰角55~60度に訂正しなければならなかった。この値は①と②とも同じであった。

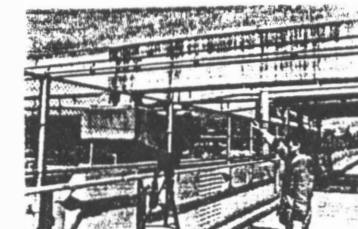
白球の見かけの大きさは少なくとも金星よりは大きかった。6倍ズームは300mm相当だが、その画面における大きさは、同じ倍率の満月の4分の1前後である。



■写真はブラウン管の映像を白黒撮影し、それをプリントしたものをコピー。画面は拡大してあるので、球体の両面に占める大きさは、次ページの図を御覧下さい。物体は柱間の金星に似た純白で、大きさも金星の2~4倍程度。青空を背景にしている時はファインダーで識別できるが、白雲を背景にすると雲より白く輝くが、遠ざかにつれ識別が困難になった。高度は1000メートル前後。飛行機雲をひくジェット機程度であることが、画面より推定される。



白球目撃2日後、印象に残っている場面を思い出して描いた天宮志麻の目撃図。



①番目の目撃地点に立ち、白球が見られた方向を指し示す。ビデオの最初の57秒間が背後の高架に隠れて終わっている。



②番目の目撃地点から白球の見掛け上の飛行経路を地図に記入する。この目撃では物体が遠ざかるまでを観察したので、パノラマ写真に経路を記入することにした。



アンデス青空市場からの出口階段途中に立ち、白球発見方向を見る。



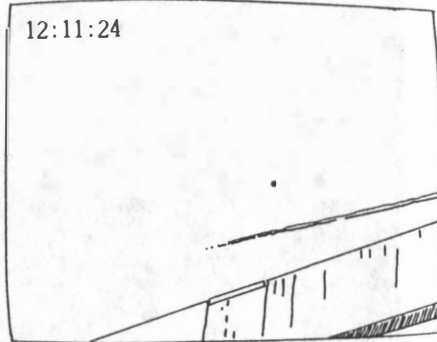
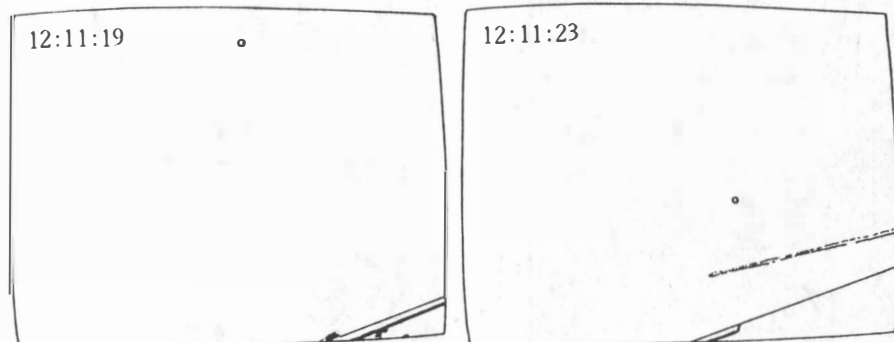
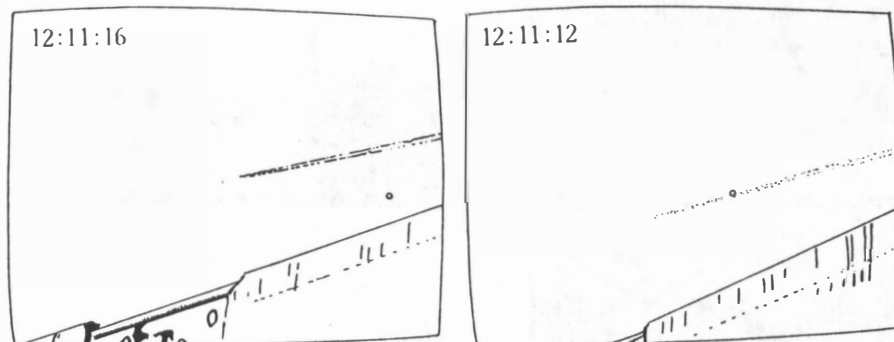
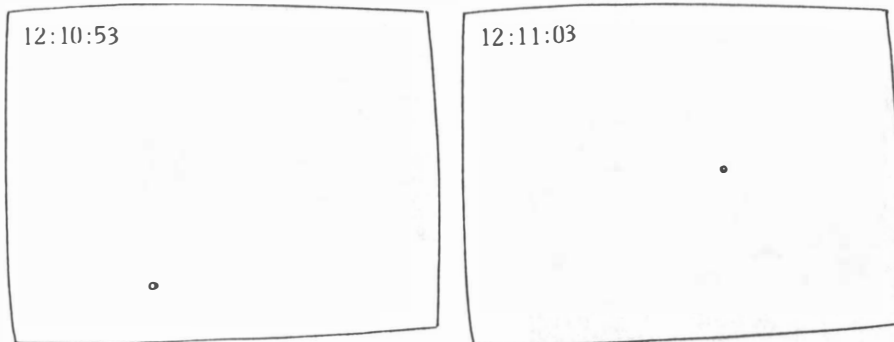
③番目の目撃撮影位置の決定には、ビデオからのプリントを見ながら、白球が向かった左手の木の枝の特定とその見掛けの向きを一致させて行なった。



天宮ユキが最初に白球を発見した位置に立つ。それは最初、我々に向かって接近するように見えた。



位置を変えて観察した現場から、経路を検討。6倍ズームのビデオ画面には中央左の街灯が写っていないが、仰角測定の日案になった。

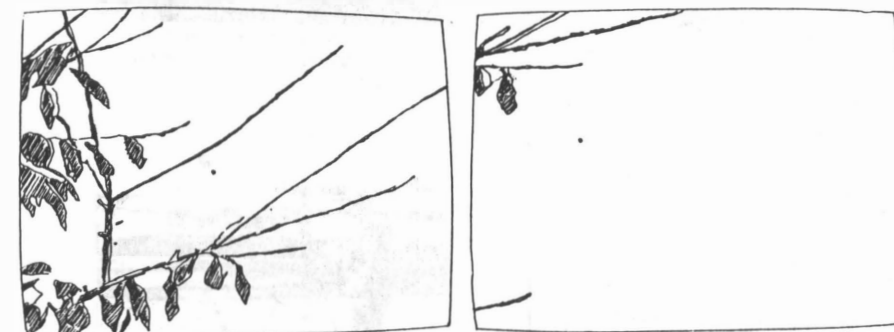


筆者はこのビデオを大阪のUF
●研究家2人に見てもらったが、
一人は「特徴がなく風船ではない
か」という意見。もう一人からは
「UFOと思う。雲の中で光って
いる。風船はたちまち小さくなる
が、そうした現象ではない。雲の
ように見えるものも母船ではない
か」という意見を頂いた。

また、3時28分に白球がかすれ
て透明に近くなり、再び元に戻る
というシーンがみられるが、これ

は無意識に広角の操作をしたため
映像が不鮮明になった事が考えら
れるが、筆者が12時11分の出現の
際に意識的に広角操作をした時の
白球は、小さくなるだけでかすれ
たりはしなかった。

また、3時26分18秒から28秒ま
での10秒間、白球は静止状態から
やがて動きだすシーンとなっている。
このシーンはいったん広角に
してから6倍ズームにして白球を
とらえ、その直後に動きだすとい



■午後3時16分撮影の映像。時刻表示を入れなかったもので示されてない。白球が
ジワジワと立ち木に隠れるように迫ってきたので、筆者は位置を変えて撮影した。

■最初の撮影、57秒の映像
初めそれを見て、風船と思った
ため、ビデオカメラの扱いが粗雑
で見にくい画面となっている。

白球の高度、大きさとも計りか
ねるが、移動経路は直線に近く、
殊に高架の向うへと去っていく状
態は、催し物の際に放たれる風船
の動きを何度も見て比較したが、
風に流される風船より、空中を自
ら移動する状態に見える。

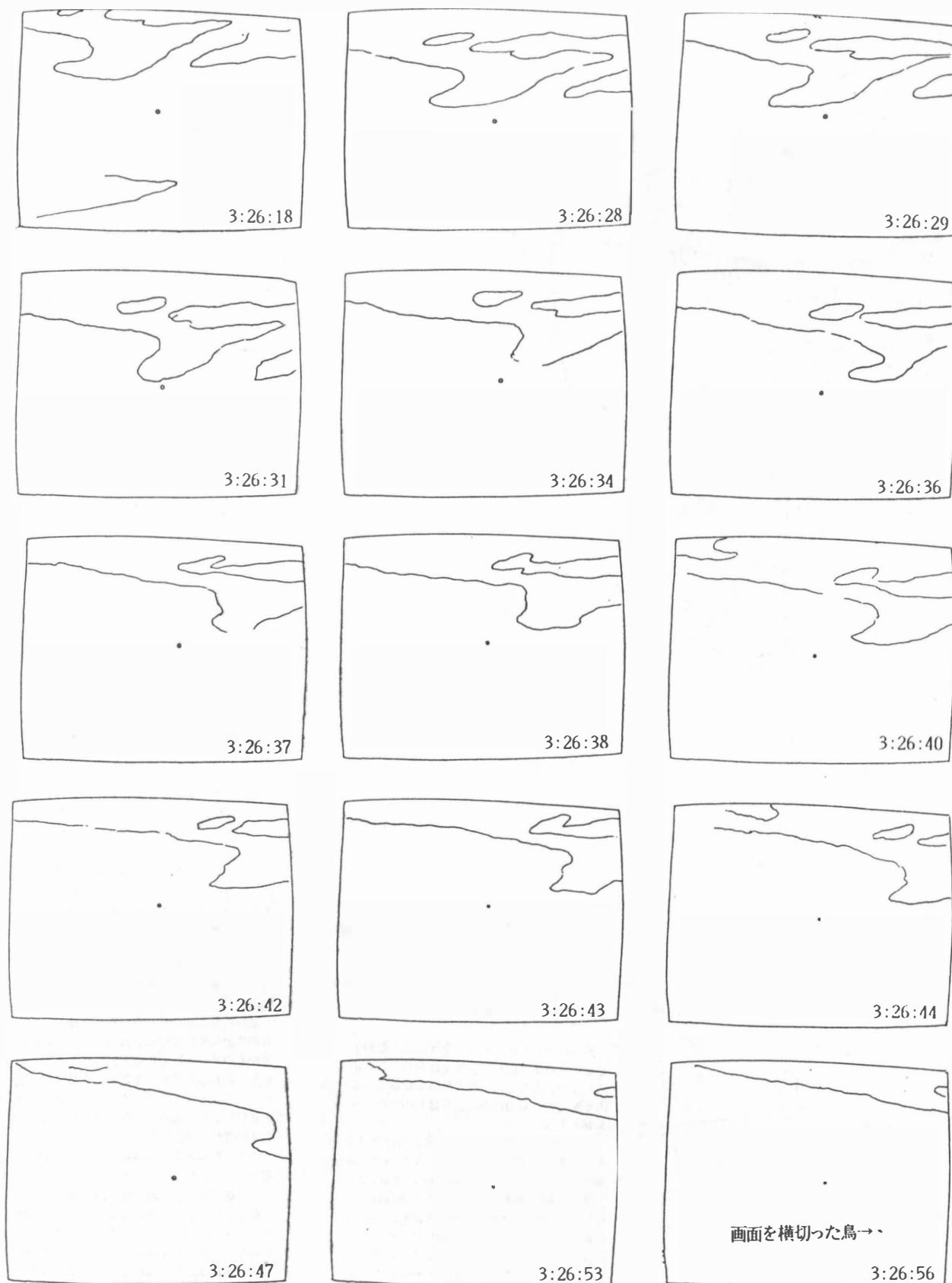
また筆者は、風力4~5（乾し
てある洗濯物がはためく）の日、
銀色のUFO風船を飛ばしてその
動きを観察し、ビデオに収めてみ
たが、形が球体でないため絶えず
ゆらめきながら上昇しつつ遠ざか
り、仰角10度で雲を背景にして黒
っぽいシルエットになった。この
点、午後3時26分の白球が白雲を
背景にしてさらに白く見られてい
る状態と対比的である。

う状態を示しており、印象的であ
る。

映像の時間は、1番目が57秒。
2番目は撮影失敗。3番目が58秒。
4番目が4分03秒。5番目が2分
15秒で合計493秒、8分21秒であ
る。

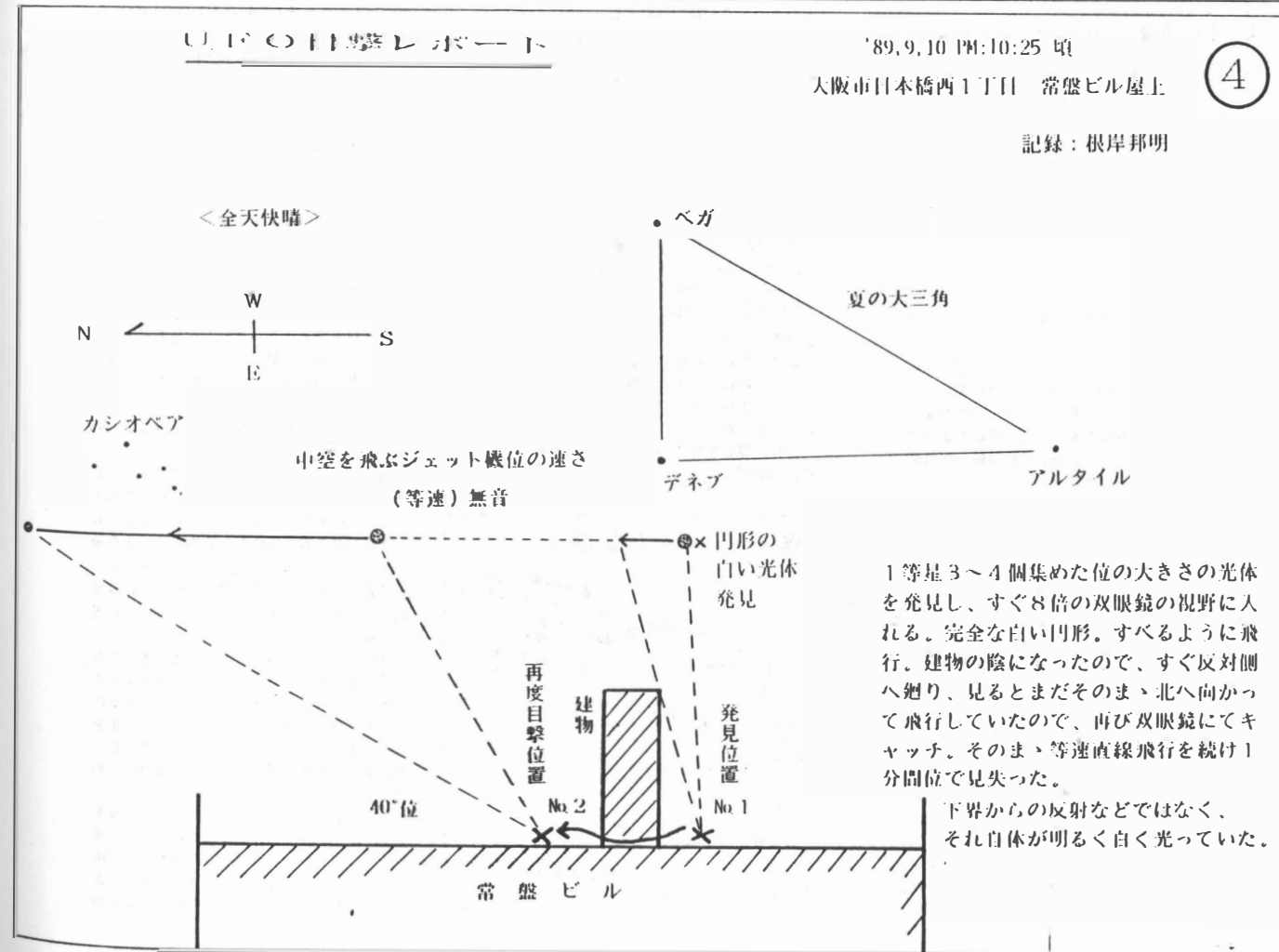
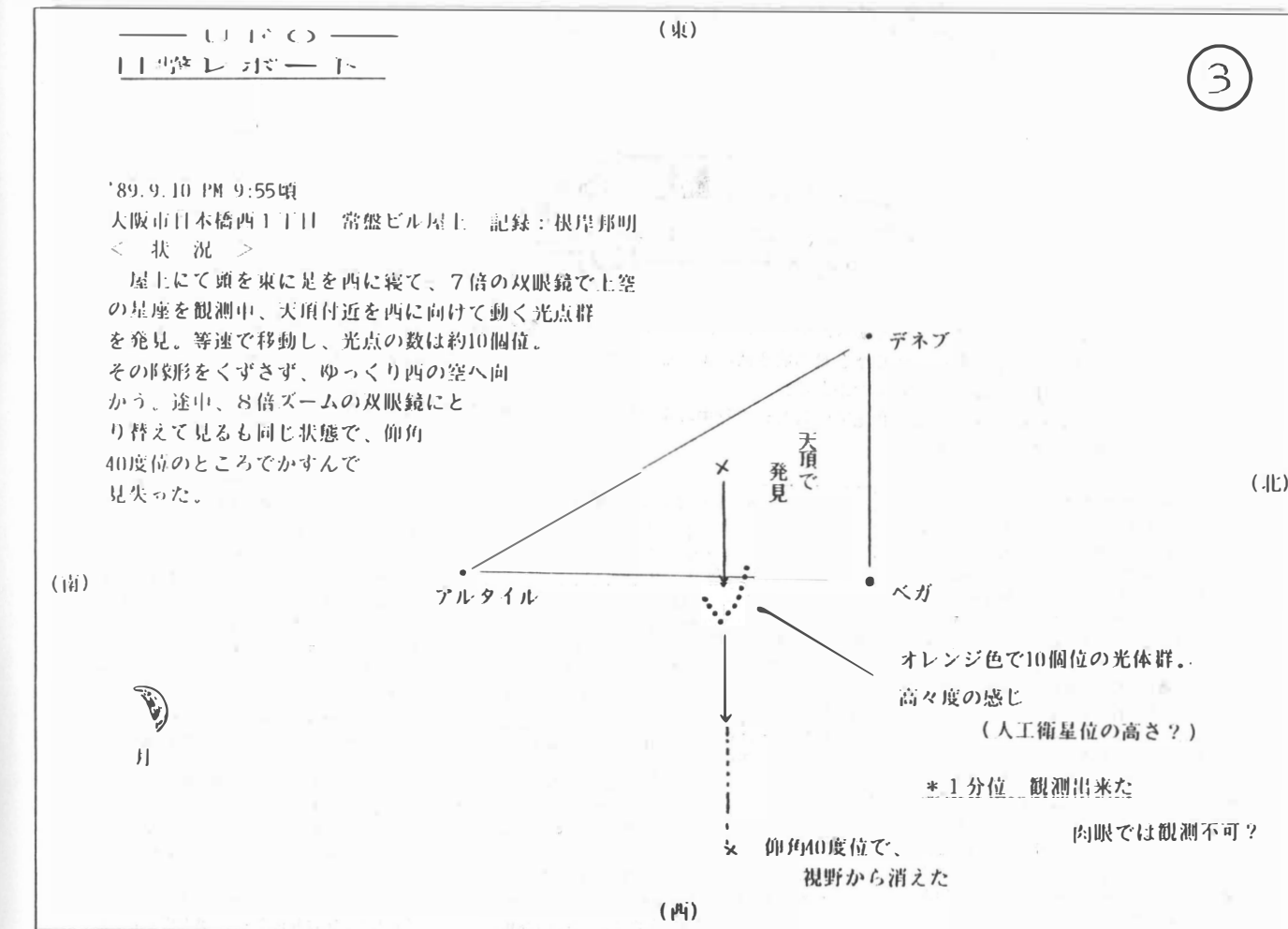
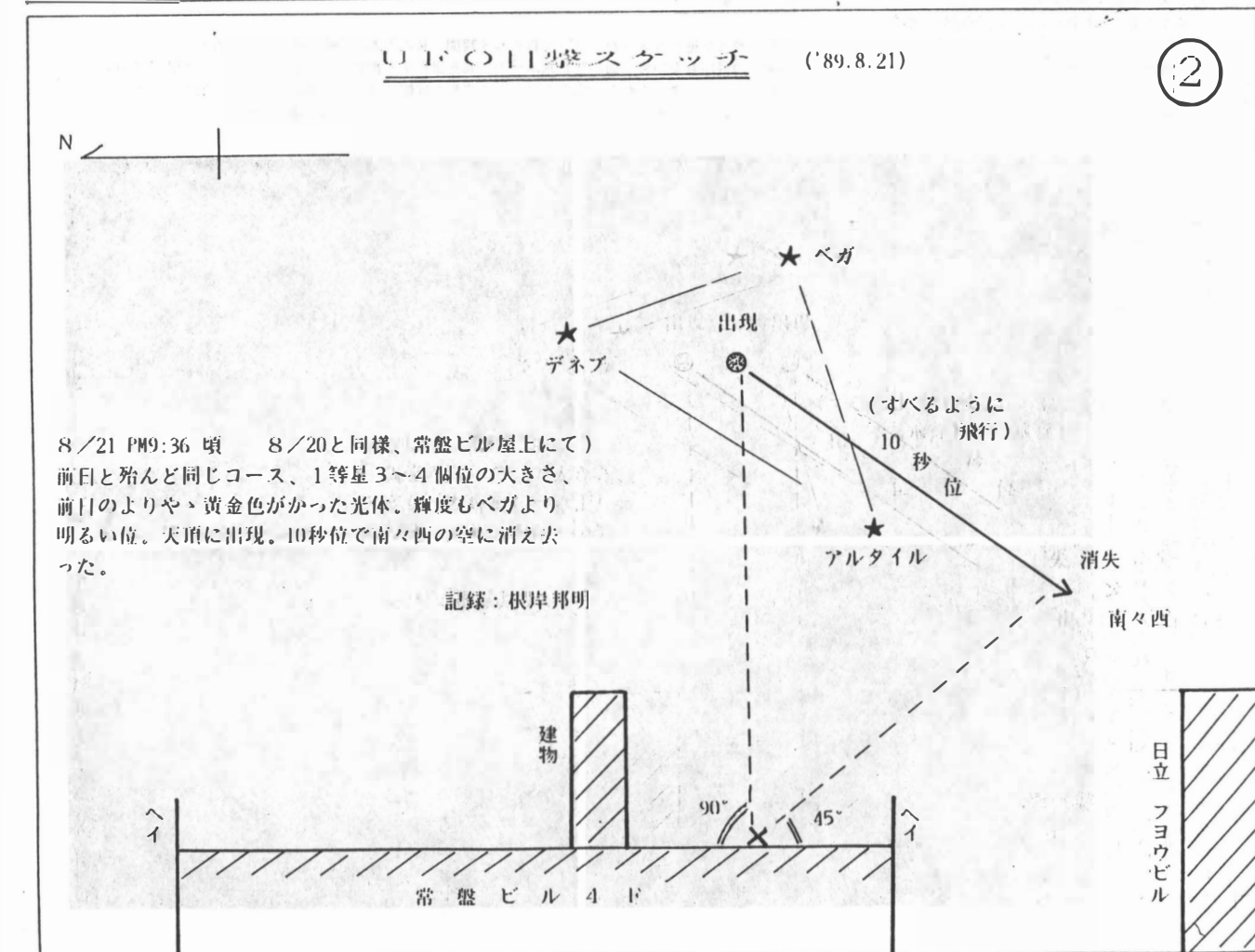
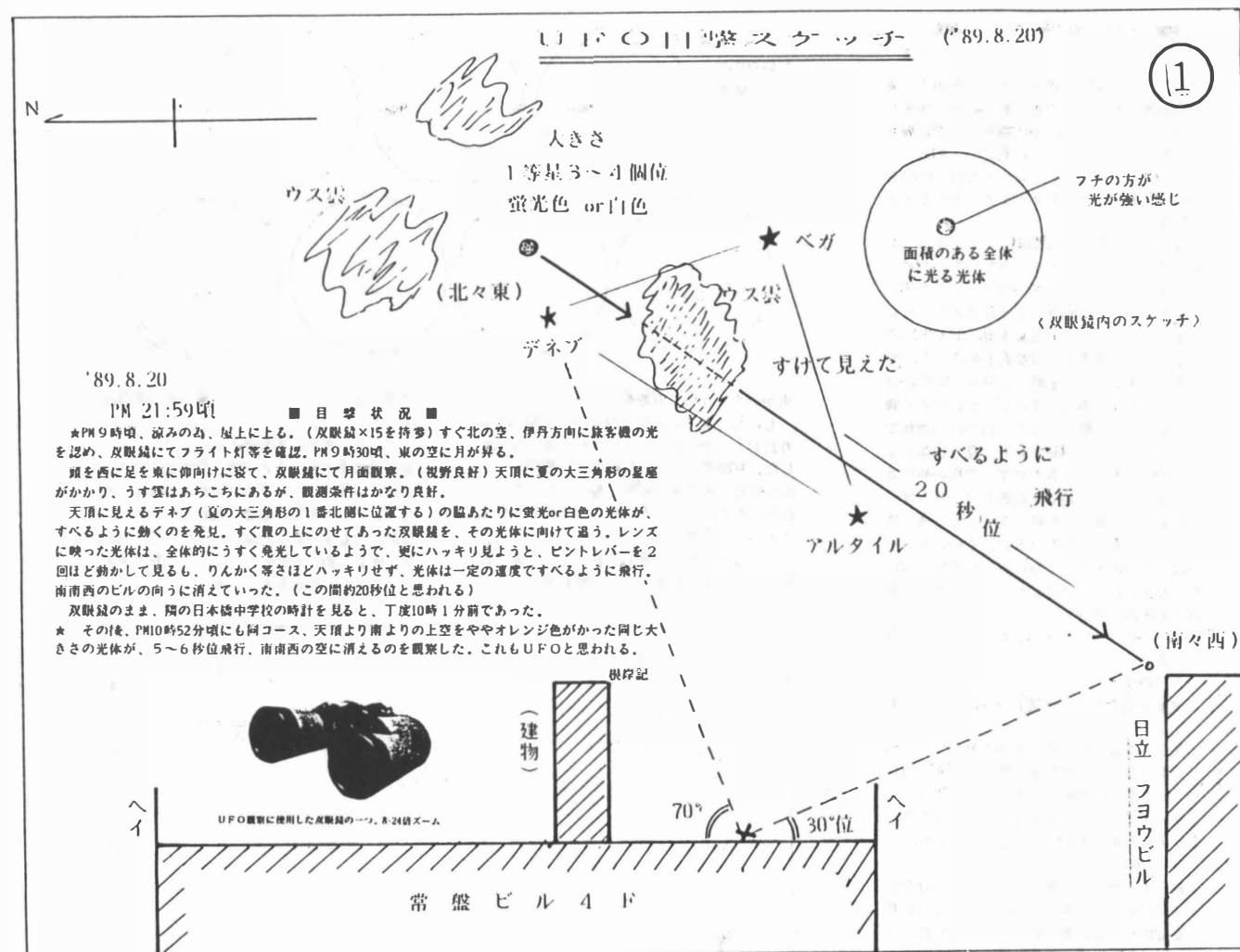
最初の出現が午後12時10分。最
後の目撃の終わりが午後3時28分。
つまり138分、2時間18分の間、
5度の出現となる。

5度にわたる目撃にもかかわらず、
球体に影の部分が見られなかつた
のも特徴の一つと言えるかもしれ
ない。つまり、5回とも我々が太
陽を背にして白球を目撃したの
ではなく、例えば④の地点での
目撃は東に白球を見ているが、通
常の物体ならば南西からの太陽光
線では、下の球形建物にみられる
ように左側に影ができなければならない。
またヘリウムガスのつまった
風船なら、絶えず上に上昇する
浮力と風力の合力による動きとな
り、空中静止や微動は考えにく

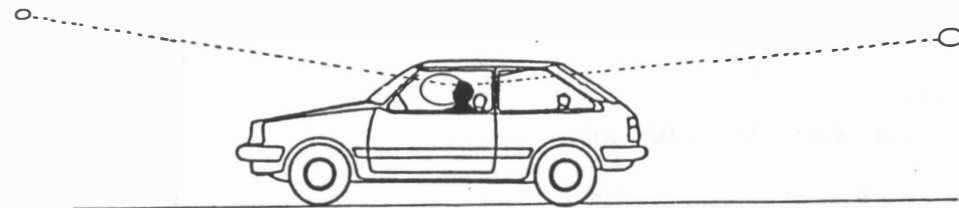


■ここに紹介の24コマの図は、ビデオの映
像を35mmカメラで撮影し、そのプリントを
トレースしたもの。数字は時刻を示し3:26:47
は3時26分47秒である。左端は3時26分18
秒から3時26分56秒までの38秒間の白球の動きをま
とめたもの。背景の雲の形を合わせて描い
たが、雲の影は明瞭ではなく変化するので
正確とは言えない。

い。
筆者にはビデオ映像の解析装置
も技術もないが、この映像のコピ
ーを分析して下さる方があれば
喜んで提供したいと考えている。
「こういう火の玉もある」とい
う所見ではなく、この映像をどう
処理したら、どうなったとか具体
的な作業を期待したい。 ■



走行中の車に接近したUFO



現代UFO事件の冒頭を飾ったアーノルドの「空飛ぶ円盤」目撃を始めて、劇的なUFOとの遭遇事件はUFOと同じ空を飛ぶ航空機によるものが殆どだが、地上を走る列車や車に接近するUFO事例も海外ではいくつかある。

ここに紹介するのは、我国では珍しい走行中の車に接近した、既知の現象では説明できない飛行物体の遭遇体験である。

遭遇体験手記 1

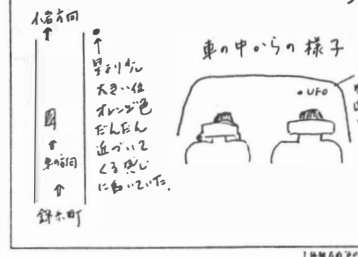
1987年4月半ばの土曜日のこと。夜9:00頃、首都高速小松川線を運転していた時だった。隣席には私の後輩が座っていた。

突然、「あれ何だろう？」と後輩が言い、車の進行方向を指した。私が見ると、オレンジ色の星よりも少し大きい位のものがあつた。少し動いているように見えるので、私はつまり飛行機かと思い「飛行機だよ！」と言って、また運転を続けていた。

すると、後輩はその物体を見ていたらしく、「でも変だな、何か違うみたい」とか一人でぶつぶつ言っているの、私もその物体をまた見た。すると、さっきより少し大きくなっている感じで、確かに動いていた。

私も少し変だな、思ったが、その時はまさかUFOだとは思わなかった。「やっぱり飛行機だよ」と言って、私はまた、その物体から目を離して運転を続けた。

(首都高速小松川線での目撃図)



そして、一之江の出口をおりて信号で止まった時、後輩が「あれ!」とかだつたと思うが、とにかく大きな声を出したので、私もびっくりして左の窓ガラス(注1)を見ると、ものすごく大きいUFOだかなんかわからないが、物体が浮かんでいた。形はあまりはつきりおぼえていないが、それは確か何色かの光を放っていたと思う。

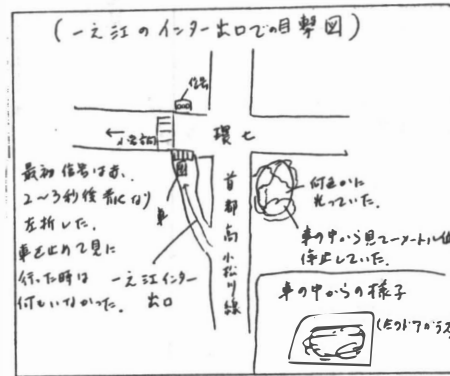
肉眼で1メートル位はあつたと思う。とにかく大きかった。2〜3秒見ていたと思う。絶対に飛行機ではないと、この時確信した。

本当に光を放って空に浮いているという感じの、例えばスビルバグの映画にあるような風景だつたと思う。

前の信号が青になってしまつて左折しなければならなかつたので、私たちはとりあえず左へ曲がり、すぐに車を止めてその場所へ行った。しかし、もう影も形もなかつた。興奮しながら車に戻り、とり合えず環七を小松川方向へ走り出した。

しばらくすると、また左側(注2)に最初に見たオレンジ色の光が見えて、私たちは走る同じ方向を飛んで来た。

すぐに車を止めて降り、今度はそのオレンジ色の光の行方を追った。その光は、エンジン音とかそのような感じの音は全くなかつた。光は弧を描くようにして反対側の住宅街に



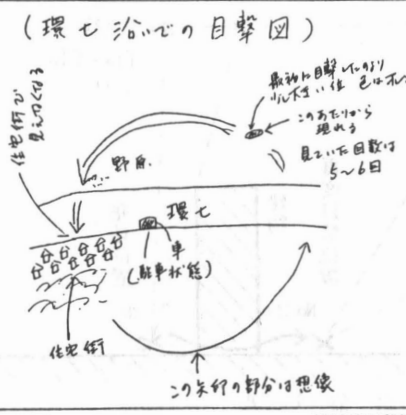
消えて行った。大きさは止まっている時に見たよりも小さく、距離もずいぶんあつたと思う。多分、首都高速で見たオレンジ色(物体)より少し大きい位だつたと思う。見えなくなつてから、しばらくその場に立ちつくしていた。

その後、1分か2分か、よくおぼえていないが、消えた反対側の方から、またオレンジ色の光が飛んで来て、また弧を描いて住宅街に消えて行った。

すると、また1〜2分後、同じ所から現れて、また消えた。それを何回も繰り返した。私たちは、その光は1機ではなく、何機も何機も飛んできては消え、消えては飛んで来るように思えたので、最後には、あんなにたくさんのUFOが飛んで来るはずがない、きっと成田から飛行機が飛んできていたのだと思つてしまつた。

止まっている時に見た、大きい物体のことも、その時はたぶん飛行機だつたのだらうと思つてしまひ、見るのを中断して帰途へと急いでしまつた。

多分、環七で見ていた時間は9:15〜9:30まで位の間だつたと思う。



私たちの結論は、その時間帯、飛行機の離陸ラッシュで1〜2分おきに成田から飛んで来ているものだった。

そして、そのことはしばらく忘れてしまつていたが、1ヶ月後位たつて、後輩から、あれは本当にUFOだつたかもしれないということをおかれ、よく考えてみると、自分でも飛行機にしてはちょっとおかしいと思い、成田の管制塔に電話をして、小松川上空で9:00〜9:30位の間に飛んでいる物があるか聞いてみた。(その時は日時をしっかりと覚えていたので、日時とあわせて一部始終を説明した。)返つて来た答えは、夜9:00〜9:30という時間に小松川上空を飛んでいる飛行機はないはずだ、という事だつた。

すると、あれは一体何だつたのだらう?やはり、UFOだつたのではないだらうか?

あの時、何機も何機も飛んできていたと思つていたが、実は最初に見た1機が円を描くようにして上空を飛んでいたのではないだらうか?

今でも信じられないような事だが、この話は真実である。 今野美幸

遭遇体験手記 II

1987年の月と日にちは忘れてしまひましたが、夜、9:00〜9:30の間のことです。

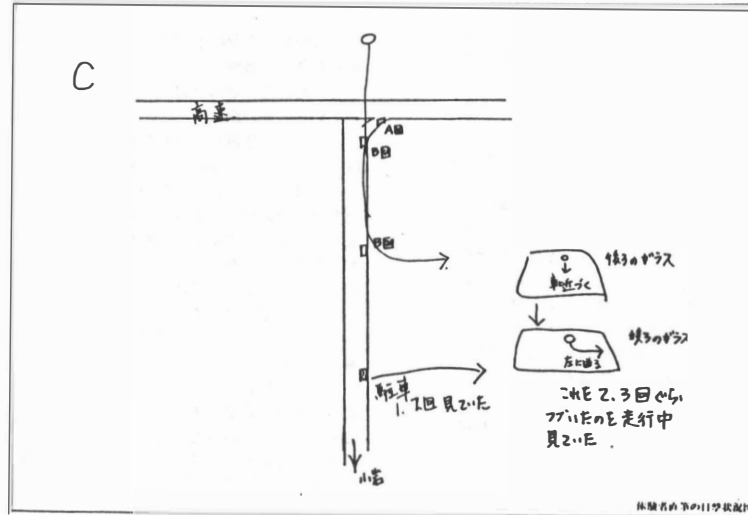
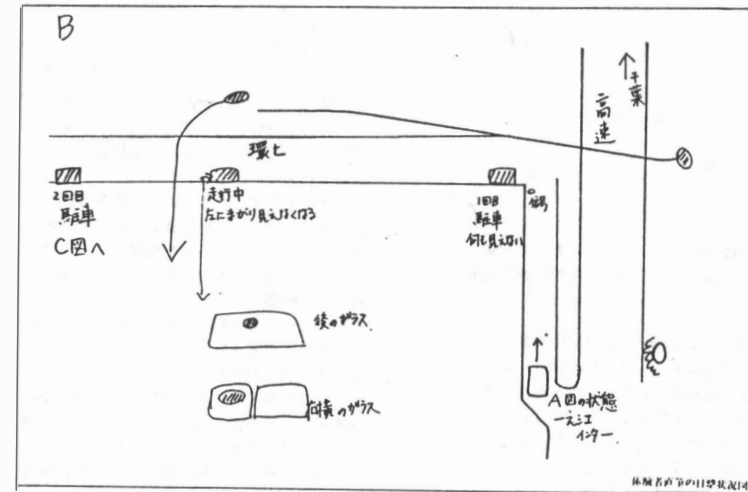
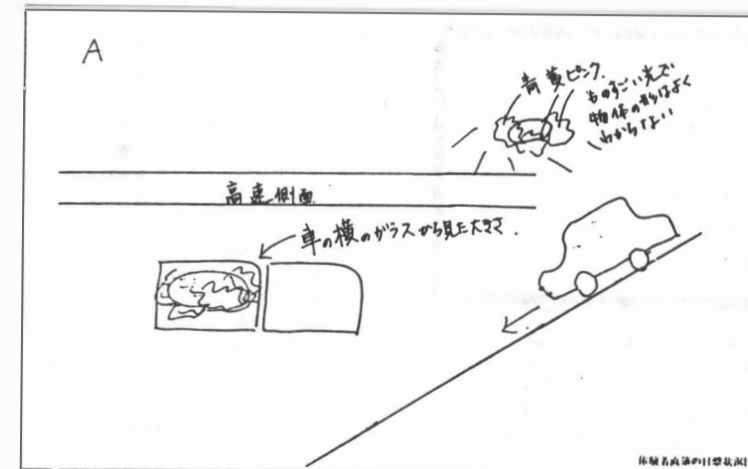
私はKさんの運転する車に乗り、首都高速を渋谷の方から千葉の方へ向いて走っていました。

錦糸町を過ぎ、周りにビルなどがあまり見あたらなくなつたところ、星が出る位置に、星にしてはとて大きいオレンジ色の光をフロントガラス越しに見つけました。その光は、車がそれに近づくにつれ、大きくなるような感じがしましたが、星だということにしてしまひ、それからあまり気にしなくなつてしまひました。

高速を一之江というところで降りようとした時、右ナメ上ぐらい、高速道路よりむしろ上し、というような感じぐらいの所に、ものすごい光を放つ物体が、その場所に止り飛んでいました。横から見て、前、真中、後、とそれぞれ黄、青、ピンクというように違う色に光っていて、まぶしくなるくらい強い光でした。

私たちは高速を降りる流れのまま坂を下り、高速を降りたので、少しの間その物体を見ることができなくなりましたが、坂を下りその道を左に曲り、環七に出たところで車を止め空を見ましたが、光は見えず、私たちはまた車にのり環七をまっすぐ走りはじめました。

そして、ほんの少し走りだしたところ、後をふりかえり、後のガラスを見ると、先ほど光っていた青、ピンク、黄などの色をした物体が、私たちの車を追いかけけるように飛んできて、私たちの右上空を飛び前方を通過して左の



方へさえていきました。私たちはそこで少し見ていましたが、その後はすぐ現れなかつたので、とても怖くなり、また車にのり走り始めました。

するとまた、後のガラスに光の物体が現れ、私たちが進むのと同じ方向へ飛んできて、また近づくのかと思うと、とつぜん左の方へまがって見えなくなりました。(見えなくなつたのはビルなどにかくれて)

その時の大きさは、手をのびて人差し指と親指で輪をつくり車の後方のガラスに向い上の方へすこし上げたぐらいの大きさでした。

このように現れて、すこし真すぐ進み、また左に曲るという状況を2、3回繰り返していったように記憶していますが、私たちは走りつづけていたので、その光の物体はだんだん小さくなっていったので、ある一定の上空を何回もぐるぐるまわっていたような感じで、左に曲るとすぐまたもとの位置に現れ、また

消えていくという感じでした。

あまり何回もそういう状態をくりかえし、また同じ上空のような気がしたので、また私たちが飛行機か何かの通るコースになっているのだと判断し、そのまま環七を小松川の方へ進むとその物体も見えなくなつたので、帰路につきました。

島本範子

■追加資料: 島田氏を通じて運搬の今野さんに質問し、文書にて回答を頂いたもの。

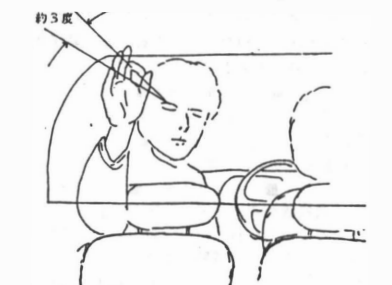
1) 車種: 四ドアセダンのコナダ多分、'85か'86です。ドアガラスの大きさは普通の乗用車と同じ位です。すぐにはわかんないと思います。(今その車がありませんので確認することができませんでした。)

2) 天候: 多分、晴れていたと思います。空っぽではなかった。星はあつたかおぼえていません。

3) 交通量は少なかつたと思います。小松川線を降りた時は、私の車が先頭で後ろに2〜3台はいたと思います。環七で止まって見ていた時は止まっている車は私の車位で、あとは普通に走っていました。

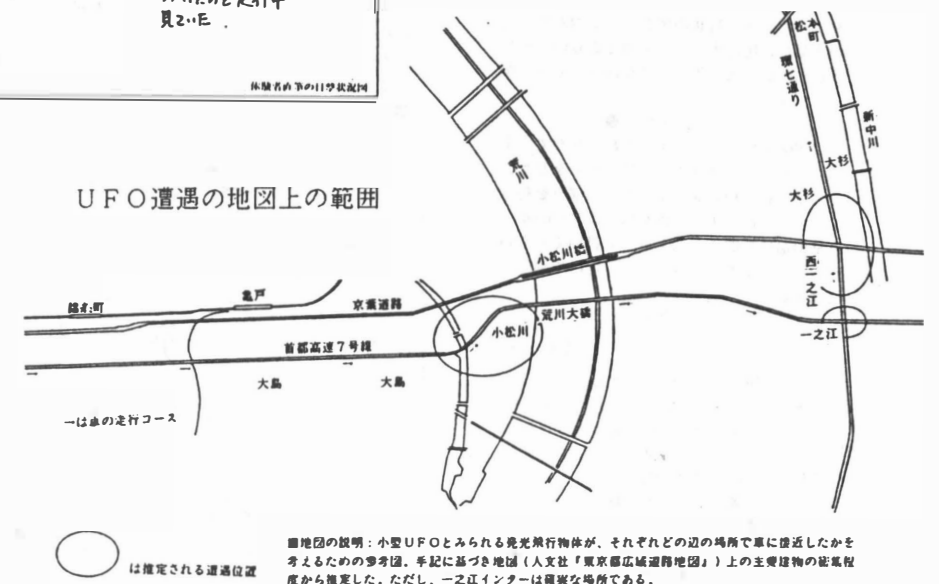
■取材者メモ: 1) 今野さんの文章中、左の窓ガラスあるいは左側とは、車を正面から見ると左側と表現しています。車内からは進行方向右側です。(注1、2)

2) 目撃時間は合計で30分弱となる。しかし、文中にある如く環七で目撃を中断しているの、こちらから意志を持って望んでいたならば、より長時間に及んでいたであろう。とにかく、UFOは旋回を止めて消える(飛び去る)気配はまったくなかつたと云う。(島田)



■取材: 島田隆雄氏

UFO遭遇の地図上の範囲



UFO現代史発掘

UFO目撃資料は、目撃者本人の記述や証言をそのまま活字にするのが望ましい。しかし、筆者の場合、自己の体験以外の目撃資料を意識して収集することなく長年暮らし、気づいたら多くの人から様々なUFO目撃談を聞いていた。これを何とか活字に残したいと思うようになったのはここ1年程前からである。それまで聞き流していた周囲の人の目撃談を再録したり、記憶を整理したり手紙やメモを捜して、とりあえず第一段階としての活字化にこぎつけた。中には筆者の提案に対して御寄せ頂いた資料も含まれているが、殆どは職場などの場で話を聞いて近くの紙切れにスケッチを描いてもらったものや、知人などから何らか目撃談を聞くうちに記憶したもの、道端調査中に会った人から聞いたものまでも含まれる。尚、資料の配列に基準はない。

■接近音と発光現象■

「神戸の病院に入院していた1970年前後のある夜、病室にいと耳に「キーン」という金属音のようなものが聞こえた。外から聞こえるのではなく、内耳に直接キャッチされているようだった。それが次第に接近してくるようになった。病室の窓から外を見ると、屋上の真上に何か巨大な発光体があるらしく、光が放たれていた。しかし、窓からはその光を出している本体は見えなかった。これが栄ちゃん（正木栄一氏）の言う円盤かと思った。」
関西電気保安協会 宮原喜四郎氏より、1985年芦屋市ステラ21にて聞く。

■電線にかかる「太陽」■

「自宅（兵庫県）の窓から外を見ると、電線に太陽のような光ったものがひっかかっていた。息子の栄ちゃん（正木栄一氏）を呼んだ。実家（宮原みづゑ氏より、1985年芦屋市ステラ21にて聞く。

■回転する火の玉■

「夜、空に赤い火の玉が浮かび、それがグルグルと回っていた。」社員 榎本時子氏より、1984年大阪市マサキにて聞く。

■間近の飛行物体■

「目の前を白い光物がサッと一瞬横切った。錯覚ではない。」社員 伊藤光枝氏より1985年大阪市マサキにて聞く。

■フーファイター■

「飛行機を飛ばした光った物が、あっちへ行ったりこっちへ行ったり、近づいたり離れたりのを見た」戦時中零戦に乗っていた50代の男性より1965年頃、東京羽根木にて聞く。（この頃、東京大空襲時に不思議な飛行物体を見たという東京都民からの手紙が筆者に寄せられていたが、現在手元にないので紹介できないのが残念である。）

■電柱に降下した円盤■

「電信柱の上に、空から円盤が下りてきた」小学4年生山下俊一氏より、1955年東京田端にて聞く。

■円盤の5機編隊■

「七夕の竹を切りに田端の山手線トンネルの上のハゲ山で、5つの蛍光色の円盤が編隊を組んで、薄い霧状の尾を引いて飛んでいたのを見た。尾は出るとすぐ消えるものだった」天宮弘彦氏、天宮吉氏より1960年東京田端にて聞く。

■翼のある円筒■

「1960年頃、田端の東北本線踏切りで、上空に細長い円筒が横になっているのを見た。それは左右に細い翼のようなでっぱりを持っていた」高校1年 佐藤哲信氏より1960年、東京田端にて聞く。スケッチも書いてもらい、その写しが筆者のノートにあったので別図で紹介する。

再現目撃図

■運転中に見たもの■

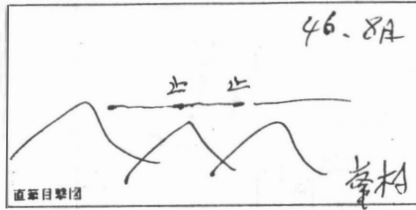
「国道24号線を京都方面に向かって走行中、オレンジ色で楕円形のものが前方の空に静止しているのを見た」運送業 三木康弘氏より1980年4月26日天理市で聞く。

■回転する円盤■

「1978年夏、天理教本部近くで、空に円盤状のものがグルグルと回転しているように見えた」社員 尾崎孝子氏より1978年夏、天理市にて聞く。

■停止前進を繰り返す光■

「昭和46年8月、兄と共に奈良県で、夜、山の上を光が進んだり止まったりを繰り返して移動するのを見た。おかしな光だと思った」社員 峯村義正氏より、1982年天理市にて聞く。直筆図を掲載。



※以下は1990.3月、妻に覚えとして記述してももらった昭和初期、彼女の母が目撃したものである。

■私の母親のUFO目撃体験■

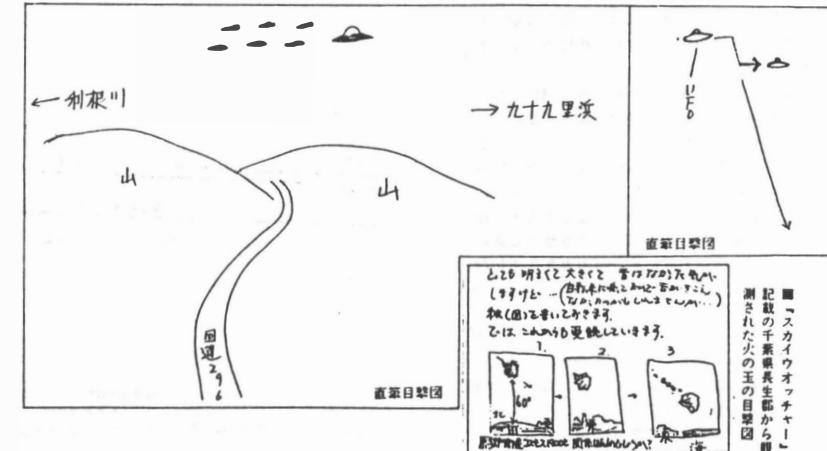
■幼い頃母親を亡くした私の母は、いつも夕方になると玄關の前で、父親と兄達が農作業からもどるのを待っていたという。

ある夕方、彼らの帰りを待ちなが星をながめていると、止まっていた星が一つ、急に動き出し水平にしばらく移動してから、また止まったという。

当時小学校1年だった母は、この事をとて不思議に思ったりしく、翌日学校にゆくと先生に「止まっていた星が水平に動き、また止まったのですが、このような星があるのでしょうか？」とたずねた。すると先生は「そのような星もあるんですよ」と答えたという。昭和3年頃の事である。

■母の何人かいる兄の一人は、若い頃、青年団の集りの帰り、親戚の畑の当りに空から「たらいほどの大きさ」の真っ赤な光り物が落下するのを見たという。何人か一緒にその辺に行ってみると何も発見できず、帰ってから家の者に話すと信用してもらえなかったが、あまりの熱心さに、夜が明けてから、親戚の畑に皆で行って見たところ「あれほどの物が落ちたら、大きな穴でもあいているのではないか」と思われたにもかかわらず、何の痕跡も見つからなかったという。この母の兄は、その後、畑仕事の最中に機械の事故で亡くなっている。

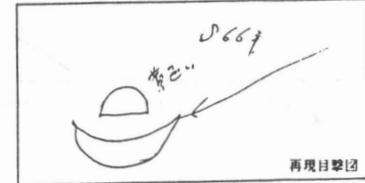
■私の父と母は函館の近くの「森」という



所で育った。私の小さい頃、夜中にふと目をさますと、父母が火のそばで昔話をしている、火の玉の話とかきつねにばかされた人の話とかを聞いた。実際、父母が体験した「火の玉」の話は何度も夜間いたものである。天宮ユキ

■0.5秒間の出来事■

1966年3月位のある日、犬を連れて散歩中、図のような黄色い物体が空を横切るのを見た。時間は1秒以下で0.5秒と短かったが、その形はハッキリと確認できた。
森永製菓札幌工場 総務部長山田氏より1966年頃、社内でUFO資料を展示したり資料を配付していた現在の筆者の妻が、当時聞いたもので、氏はカメラのシャッターによる1秒を何度も繰返して目撃時間を計ったとの事。



■UFOか、人工天体の再突入か？■

「1989年日時〇〇（空欄）場所 千葉県香取郡多古町と山武郡芝山町の境付近から多古町に少し入ったところ。

スケッチで書いたように、一番最初にアダムスキー形によく似た大きい機、その後には卵をぶつたような小さな機が5、6機、利根川の方から九十九里溪の方へ飛んで行った。時間にして1、2分見ていたような気がするが、はっきりした時間は覚えてない。時刻は、夕方4時過ぎくらいだったので、まだ空は明るかった。

天気も快晴だったので空は青く、青い空の中を蛍光塗料のように青白くパーと光った物体がかなりのスピードで飛行していた。30秒ほど見ていた時、雲一つない空に後方から順番に、一つ、二つ、三つと消えていった。

それから、1分ほどで何もなかったように残った3、4機が、いっぺんにスーと消えてしまった。自分は飛行機ではないと絶対思っている。その誤は

一つ、成田空港が目撃した場所より10キロほどしか離れていないのに、飛行機の翼らしきものは一つもついていなかった。（この辺は空港に近いせいもあり、世界のいろいろな飛行機が低空で飛んでいる所だけに、飛行機だったら、かなり離れていても、デザイン、形がけこうわかる場所だから。

二つ、目撃しはじめてすぐ、車を止め、マドを開けて見たのだが、音は一つもせず、飛んでいたこと。

三つ、一度止まったかのように見え、約90度近い角度で高度を少し下げ、ものすごいスピードで去っていったこと。」

千葉在住の匿名男性より大阪の根岸氏を通じて筆者に届いた報告。

この目撃の頃（1989.9.9）午後6時20分頃、日本列島を横断する経路で福島上空を太平

洋にめけた火球群が東北・関東地域で目撃され、この多古町における「UFO目撃」も、この人工天体の誤認の可能性あり、との注釈付きで届いた。参考までに、「スカイウォッチャー」に掲載された千葉県長生郡から目撃された火球群のスケッチを転載してみたので比較された。

■日和玉の目撃■

「この辺では日和が続くと火の玉が空を飛ぶ」「ある夏の日の夕方、丸いオレンジ色の球体が、三角形の尾をひいて低い空を飛ぶのを見た」伊勢の老婦人より1969年6月、青峯山中腹にて聞く。

■樹の上に出現し続けた丸い光■

「昭和の初期、近くの大きな樹の上に連夜、まるい光る物が現れて騒ぎになった。その頃近所の女の子が死んだのでそのせいと思われていた。」伊勢の住人より1969年6月の矢野付近にて聞く

■出漁を決める空の印■

「昔は漁に出るとき、“チンタ”といって虹の切れ端のように空に現れる印を見て天候を判断していた」伊勢の元漁師より1969年6月に聞く。

■空中で曲がる日和玉■

「私の見た日和玉は、飛行中に曲がった」新宮市付近の自転車店主より1970年7月に聞く。

■地上を照らす発光体■

「40年程、自宅付近である日の夜、円い巨大な発光体、あたり一面を照らしながら、ゆっくりと頭上を通過して移動し、消失した。大きさはタイヤ位で、尾はひいておらず、白く輝いていた」熊野文化財専門委員 山本梅三郎氏より、1970年7月有田にて聞く

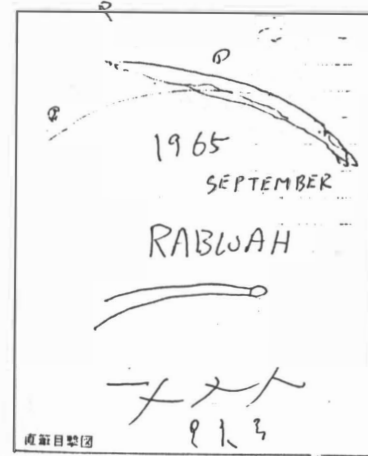
■円い光が移動■

「昔、夜空をゆっくりと大きな円い光物が移動したのを見た」熊本県農家の主人より1970年9月、千栗蔵々島にて聞く

■パキスタン上空の“神のサイン”■

「私が15才だった1965年の9月、母国パキスタンの HARBAL いう所で生活していた時、毎日朝5時頃になると、白い弓のような形の物が空に30分ほど現れて消え、それは同じ時刻で3日から5日間続いた。町は大騒ぎとなった。この現象は“神様のサイン”だ、世界でこれから何かとてつもないことが起こる印だ、と信じられた」

在日南社員 パキスタン Munir Ahmad Malik 氏より、1985年4月5日パキスタン航空機内にて聞く。



■回転し光を放つ球体■

「（南館市）中学1、2年（1979-80）のころ、教会の前で、弟と2人で遊んでいたとき、どうしてかは忘れたけど、空を見ました。そしたら、何か丸っぽいものが、飛んでました。弟と2人で「あれなんだろうね もしかしらUFOかな」と話をしててジッと空を見てました。そしたら その丸いものが、こんな感じで窓のようなものがついていて、そこがクルクルまわっていました。弟は、こ

の丸いものから光のスジのようなものが飛んだそーです。2人で そのことを話して そのあと何だかこわくなったので家に帰りました。…おわり…」

高校生 高田陽子氏1983年5月、天理での手記より。



直筆目撃図

■山に隠れた赤い物■

「私が（岡山県）小1、2年の時（1973-74）だったと思う。夕方ごろ皆で遊んでいた、空に真っ赤なものが飛んでいた。ずっとどこにいくのかと思ひ、見ていたが、山の方へいき、かくれてしまった。よく覚えてないが、すごく夕日がきれいだったと思う」

高校生 徳山由美氏1983年5月、天理での手記より。



直筆目撃図

■2連結の光体が空中で消える■

「この間、UFOみたいなのを見たんですよ。8月7日、神戸のポートピアランドで所があるでしょう。そこで見たのです。時間は9時半すぎくらいかな。今は覚えてないけど時計の坂本さんと一緒にいて、最初坂本くんだけが、空のまん中で光ってパッと消えたそうでした。それから数分後、こんどは私だけが空を見た瞬間、一番星ぐらいの大きさで、それが2つくっついてるみたいで感じて、ゆっくり下にさがっていったかなーと思うと、パッ、空のまん中で消えたのです。それで、あれがUFOかなーと2人で話していました。私は流れ星なら見たことがあるけれど、流れ星はもっと早く、あっという間だけど、あれはほんとにゆっくりでした。飛行機も飛んでいけど、飛行機とはぜんぜん違った光だったし、あれはいったいなんだったのでしょうか。もし、UFOなら感激です。」

マサキ店員 谷口智美氏より1986.8.11 付書簡より原文のまま転載

■月大の3つの光■

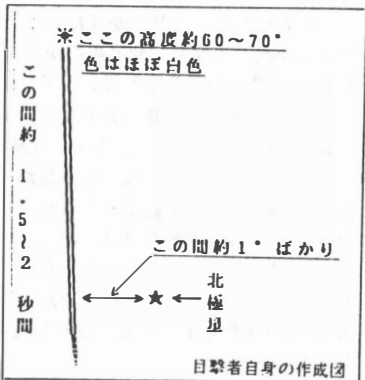
「1970-71年頃、中学3年だった。和歌山県海南市日方にて、ボーリングを終えて、ボーリング場のラメン階段を上って空を見たとき、真上に3つのオレンジ色の光が見えた。それが、石油会社の塔に設置された3つのライトに似ていたので、海岸に見える石油塔のライトを確認して比較し、全然別のものであることが判った。“これは何だ？”と思ひ、友達に見てもらおうと呼びに行き、再び戻ると、すでに消えていた。友達に自分の見たものを話すと、石油塔のライトの見間違ひだろうと言って信用してもらえなかった。しかし、飛行機のライトとも違い、暗れていたのに、雲に見え隠れしているようにボンヤリしては、動かないので、それ以来、『あれが空飛ぶ円盤ではなかったのだろうか？』と目に焼き付いており、UFOのテレビ番組がある

と、関心をもって見るようになった。しかし、家内に言っても信用してもらえなかった。UFOが存在するのは体験からも分かるが、その動力は何だろう。また飛来目的は？さらに特定の星から来るのか、色々な星から来るのか？、UFOが地球を侵略するために来るとしたら、既に占領されているだろうし、私としては友好的な目的だと思っている」
銀行員 小池 勝氏より1988.10.9 芦屋ステラ21にて聞く

■謎の光体■

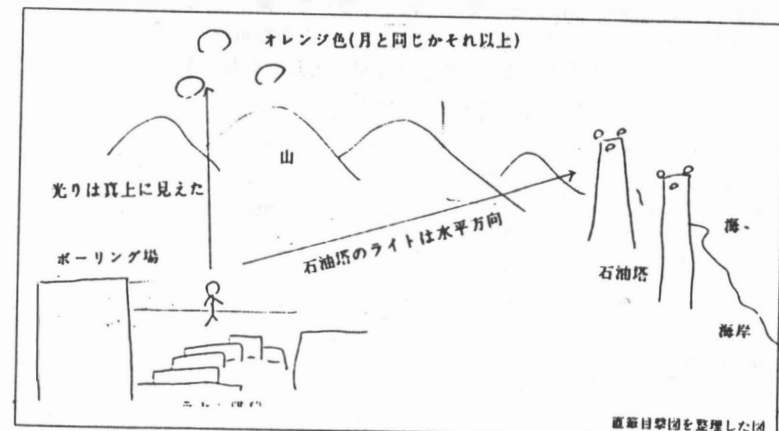
※以下は天体観測専門誌読者欄に「私は見た！」と題して投稿された目撃で、筆者が長野で目撃撮影した同じ日（1987.11.22）なので問合せたもの。ただし、読者欄に掲載された文章では「何気なく星を眺めているときである。天頂付近にやたらと明るいものを見つけた。それはシリウスよりも青い輝きであった。その輝きは移動をはじめた。北極星に向かってかなりの高速で、余りに高速すぎて北極星をよけきれず衝突してしまった。その輝きは2つに割れて消えていった。一瞬の出来事だったが、私にとって最も忘れ難いことになるであろう。誰か同じの見た人はいませんか。」となっていたのが、送られてきたデータは違っていた。それは以下の通りである。

「…私の見たものについてですが、あれは事実です。しかしながら、少しばかり飾り付けが施されております。時刻はだいたいあのとおり（23時25分）で、輝き始めた場所、通過地点、色などに、修飾が施されている。」送られてきた図を、そのまま次に掲げる。

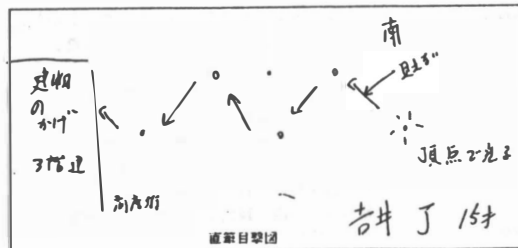


■明滅ジグザグの光体■

1984年1月16日、午後6時から6時30分の間、大阪市東成区の自宅付近で、金星くらいか、少し大きめの、鮮烈な赤色をした光体を見た。それは、すぐに消えたかと思うと、少し離れた上方に出現して光り、また消えて、今度は斜め下方に光って現れた。こうして南から東へと同じ現象のまま移動し、3階建てのビルの影に入っって見えなくなった。まったくの無音で、ちょうど居合わせた小母さんもこれを目撃して『変な動きの飛行機やねー』と言っていた。
高校1年生 吉井 了氏より、1987.12.27大阪にて聞く。



直筆目撃図を整理した図



エンゼルヘアーの目撃について

昭和59(1984)年9月30日午前11時00分、長野県軽井沢町追分字夕日当りの田園にて
 福対体中目撃。
 ふと空を見上げたとき発見したもので、頭上やや東寄り、高さ10m位の位置に長さ
 3m位の2〜3本の純白鮮明の糸状(細い)のものが、極く弱い西風にゆらゆら流さ
 れているのを目撃。注視しているうち3秒位でとけこむように消失した。
 天候快晴で一片の雲もなし。消滅数秒後、東より爆音がして、ヘリ1機飛来したが
 これは無関係。周囲は広々とした田園地帯。南方と東方100m位離れた場所は雑木林、
 北方と西方は田園が広がっている。 以上 目撃者 原田忠衛

バックした光

昭和27(1952)年のある夜、大阪市東成区の
 自宅へ帰る途中、小学校の上の方、仰角50度
 付近に小さい赤味をおびた白色の濃い光が、
 じわーっと動いているを見た。「ヘリコプ
 ターかな?」と思ったが、ヘリコプターがひ
 んばんに飛ぶ時代ではない。すると、それは、
 そのままのスローの速度でバックしはじめた。
 音はしない。最後まで見ないで途中で家に帰
 った。UFOと断定はできない。
 吉井祐二氏より、1987.12.27大阪にて聞く。

1980年頃、大阪市東住
 吉区長居公園横の道路で、信号待ち
 で停車中、フロントガラス越しに、
 角45-50度付近の高度数10mに土星
 の形をした銀色の物体が静止してい
 るのを見た。信号が赤から青に変わ
 る約20秒間程だった。
 物体のそばに剛がいくつかあった。
 剛と物体の高度は同じ位だった。
 大阪松原市 山野 達



鳥と私の見た物体の違い

鳥の場合

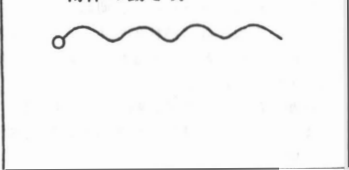
つばめ



- 飛び方が不規則である。
- 羽の動いているのが分かる。
- どこに飛んで行ったか分かる。

ある物体の場合

物体の動き方



- 飛び方が規則正しい波状である。
- 形が丸く見えた。羽のような物が
見えなかった。
- どこに飛んで行ったのか分から
なかった。

1983年6月4日 土曜日

時間 AM 11:00~11:03

場所 寮の窓から(215号)山を見る

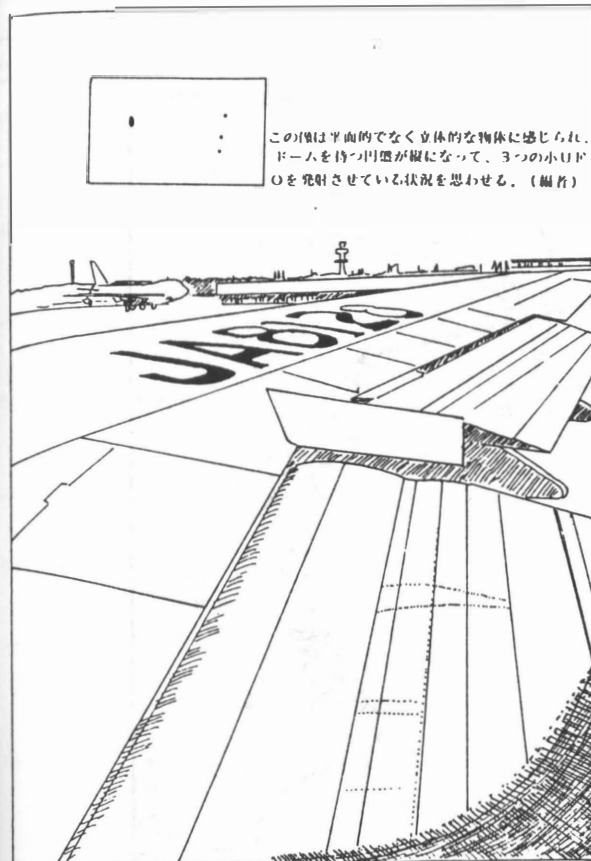
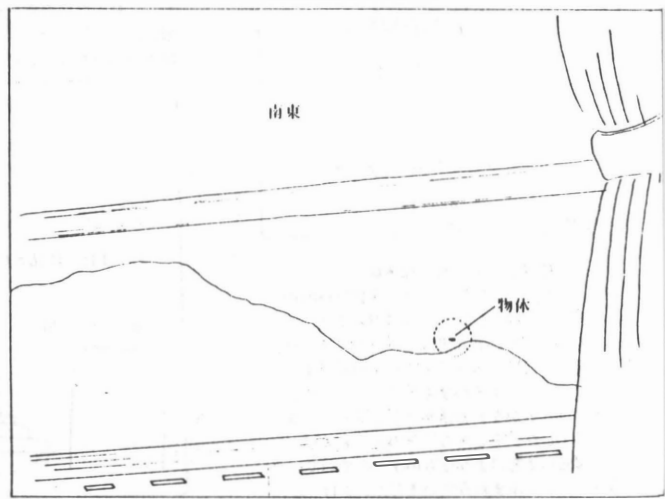
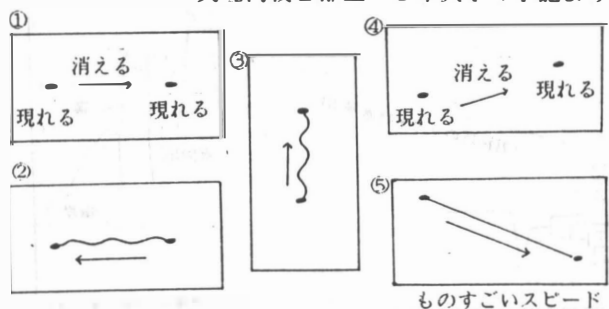
方角 南東の空

出来事... (前略) UFOの資料を読もうと思い、AM8:00くらいから、ずーと読んで
 いた。

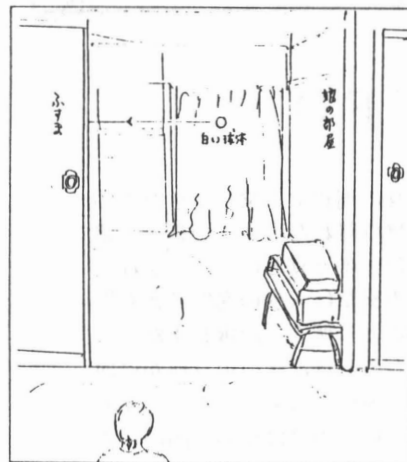
なんとなく、空がみたくなくて、メガネをかけて、空に目をやった。

すると、山の上を急に ● いった形をしたものが現れ、鳥とは異なった飛び方をす
 るので おかしいな、と思い見ていたら、消えたかと思うと
 現れたり、波状に上昇したり、波状に 飛行したり、実にさ
 まざまである。鳥にはみられない動き方である。もちろん
 飛行機ではない。私は、とつともうれしくなって、涙が出
 てきた。形は小さくとも、色は黒っぽくとも、あんな飛行
 をするのはUFOしかないと思った。(中略) 天候 くもり

天理高校2部生 1年女子の手記より



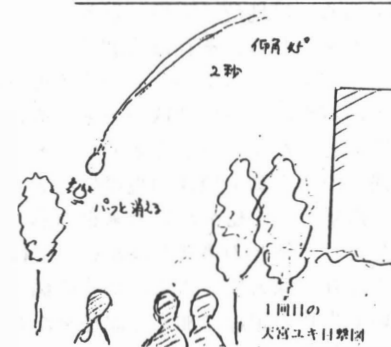
※フリップによる映像までの距離感は、ジャンボ機の位置関係に感じられる。(編者)



深夜の室内を飛ぶ白球

1990.8.22 AM 1:25 (天理市杉本町鶴
 ケ丘住宅の自宅)で就寝中、夜中に何故
 か目がパッチリとあいたので、布団から
 上半身を起こして娘の部屋を見ると、た
 たみから1.5m位の高さに浮いていたよう
 な真白い球状の物体が、目にもとまらぬ
 速さで左へ水平に動き、ふすまに隠れて
 見えなくなった。一瞬の事で“本当だろ
 うか”と考えた。娘の部屋の明かりは螢
 光燈の豆ランプであるが、当方の部屋は
 真っ暗なので、娘の部屋の様子は良く見
 える。

私の部屋のビデオデッキの時計は1時
 25分であった。それから念のため、娘の
 部屋に行き、白いチョウとかガとか何か
 大きな虫でも入っていないか、又異常が
 ないか、ぐるりとゆっくり見回したが、
 虫もおらず白い球状のものも見つからな
 かった。大きなピンポン玉位に感じた。
 目撃: 報告者 天宮ユキ

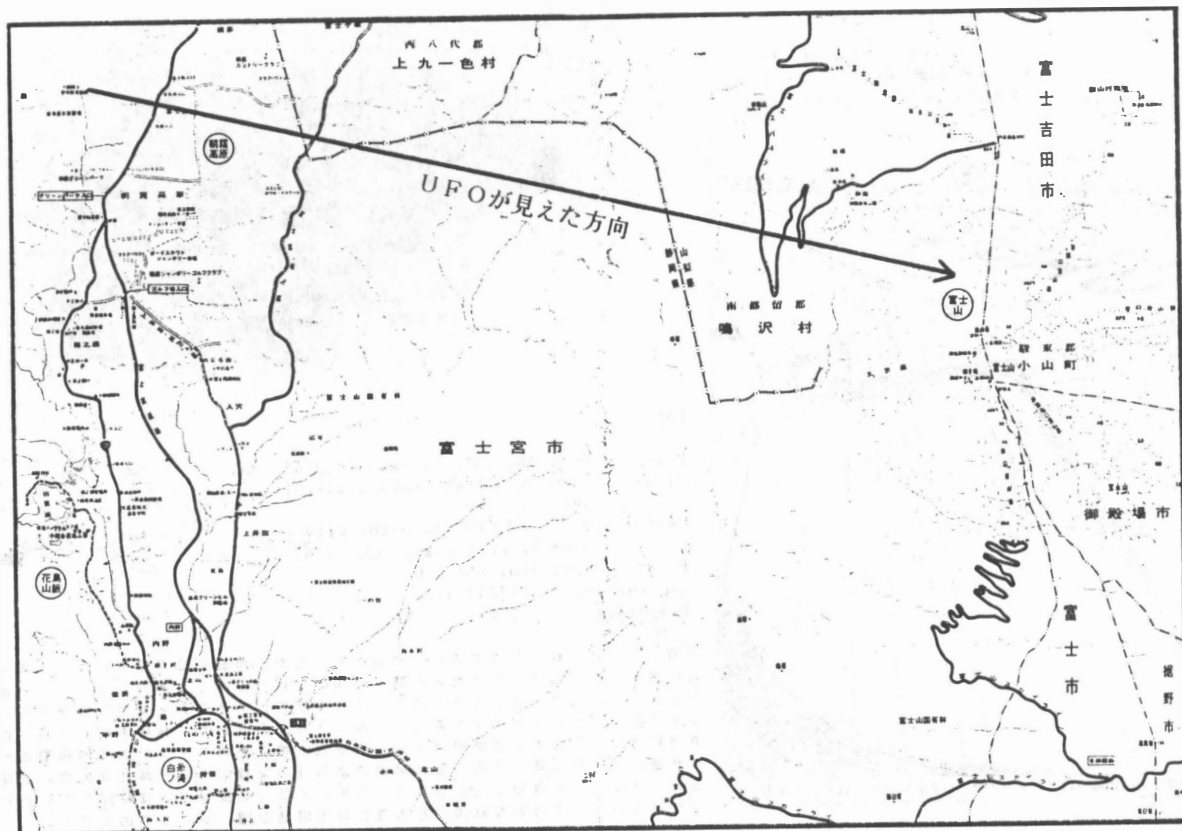


2度続けて降下したグリーン光体

1990.8.25 PM 7:45 分。(天理市北大路
 指柳交叉点から)西へ向かって歩いてい
 る時。地震とUFOの資料(天宮作成)
 を母(天宮あい子)へ送る事になり、私
 がどのような内容のものを説明している
 時、志麻(娘)が発見。東仰角45度から
 黄色で先端が丸い光体が2秒ほど西へ向
 かい、パッと消えた。娘と私はグリーン
 に見えたと言った。私は濃い黄色に見え
 た。同時目撃: 報告者 天宮ユキ

1990.8.25 PM 7:50。最初の目撃の後、
 私が“地震とUFO”からさらに“津

浪とUFO”の話もしていると、又、母
 が「アッ」と声を出した。私も同時に前
 方を見ていたが、仰角30度位(西)より
 東方向へグリーン丸い光体が、光跡を
 ひきながら飛行。1〜1.5秒、落ちるよ
 うな感じで何かの影にかくれて見えな
 くなった。母は「こんな丸い形をしていた」
 と指で輪をつくらせてみせた。母は「今日
 は2度もグリーンきれいなものを見た。
 こんな事は初めてだから日付を書いてお
 かなければ」と喜んでいて。グリーン色
 を2度(母の場合)というので、私は
 “グリーン・ファイアーボール”の話を
 した。2度目の光体は目撃者、母と私の
 み。娘は横を向いていて見逃したと、し
 きりに残念がっていた。
 同時目撃: 報告者 天宮 ユキ



懐中電燈の合図に反応したUFO

★★個人がUFOと出会う意味は大きい。まず言えることは、今まで身の周辺で体験してきた人間関係、自然界の事象とのかかわり、様々な知識という日常の概念と、懸け離れた実体いきなり遭遇することで、心の内面に与える衝撃の大きさである。夢やロマン、創作の感覚とはおよそ無縁の現実に密着した生活態度が強固である程、それは大きいと言える。その衝撃は人生の進路さえも影響を受ける。しかし、この場合「進路」とは一体何か…？と突き詰めると、個人が選択した求める職業や家庭、子孫の安定や繁栄あるいは地位、名声、財産といったものとは次元の違う何かに向かうという意味でとらえていく必要を感じる。それは大袈裟に言えば「地球の将来」という進路である。個人は国家の一員であるが、国を名乗る集団に支配や管理されているのではない。国の選択は同時に個人の選択であり、個人の将来は同時に地球の未来に直結している。こうした視点で、UFO、つまりは地球以外の知的実体とのかかわりを考えていくと、UFO目撃とその情報の増加はその延長上に、個人のUFO遭遇の内面変動を地球的規模に拡大するような変動との出会いが暗示されている。すべての人が、何の衝撃もなく穏やかに未来を通過することは有りえない。

こうした意味で、個人の体験したUFOとの遭遇を疎かにしてはならない。以下は埼玉で試作モデル・モックアップ製作に従事する井上保人氏（39才）がその個人目撃史の中から、24年前の1965年3月31日に目撃したものについて当時の記録に加えて記憶をたどり、語ってもらったものである。その他の目撃は別表にまとめ、これも当時の記録にできるだけ記憶を重ねて頂いた。

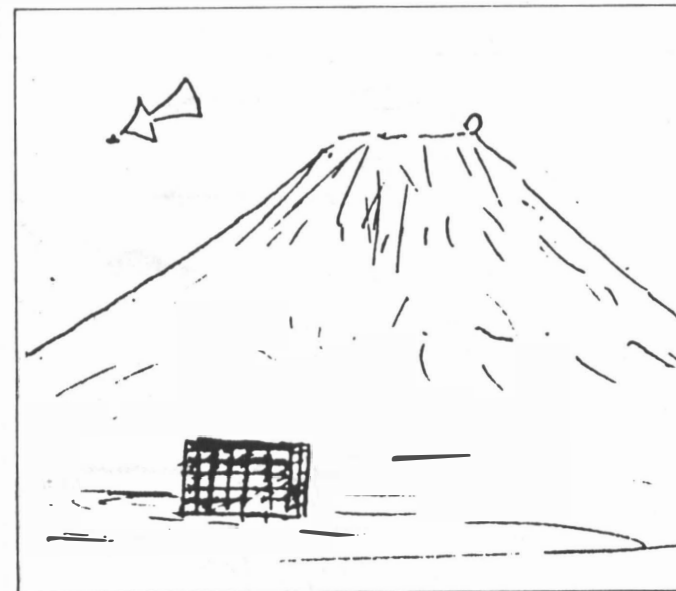
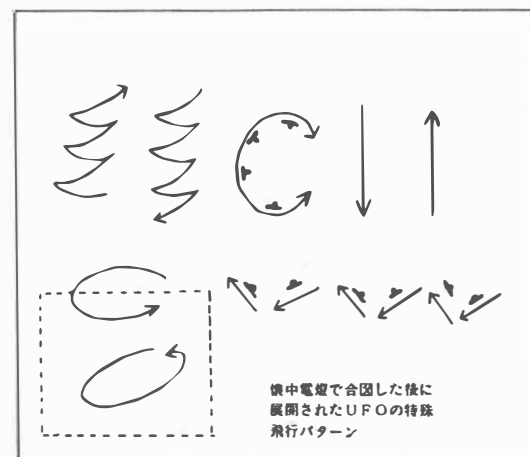
★★以下は1965年3月31日に目撃した体験を24年後に語ってもらったものである★★

「寒い3月でした。我々（ボーイスカウトの）6名は夜行で東京を出発、富士吉田に到着すると、駅で一泊というか夜の明けのを待ちまして、それから目的地の富士農場の方へ出発しました。3月の富士山の周辺はすごく寒いのです。例えば、朝になると水筒の水が凍っていました。現地まで徒歩で行く計画でしたが、

皆かなり重い荷物を背負ってまして、一人でリュックを背負って起きられない、という状態が皆同じでした。地図を見ながら「あっちだ」「こっちだ」と言いながら、途中「近道をしよう」ということでアマモリ山という山でしたか、そこを登ったほうが早いということで全員登山開始なのですが、途中から道がなくなりました。山には雪がかなり残っていました。「現地にはマキがない」とのこと、皆マキを拾いながらリュック

クの上に積み込んで雪山を登り、道がなくなると、仕方なくまた戻ってきたという記憶があります。

現地に着くまでに日が暮れてしまい、皆口々に「今日中に着かないんじゃないか？」と言いながら歩いていた時ですね。時刻は夕刻の7時を回ってました。位置は東京の反対側、富士山の西側で、測候所が山頂右端に見えました。地図で位置は確認できると思いますが、辺りは町の明かりもなく真っ暗でした。「今日中には



だったら今日中には着かないぞ」「荷物だけでも積んだら送ってやるぞ」と言ってくれたので、我々はトラックに荷物の運搬を頼みました。そして、（UFOの出現は）そのトラックが戻ってくるまでの間に起こった出来事だったのです。

気がいたのが7時15、6分でしたか、辺りは真っ暗でしたから星がよく見えました。ところが何か異常に明るいものがあったんですね。かなり明るく感じました。周りに何もな

いまいになっているのだと思います。

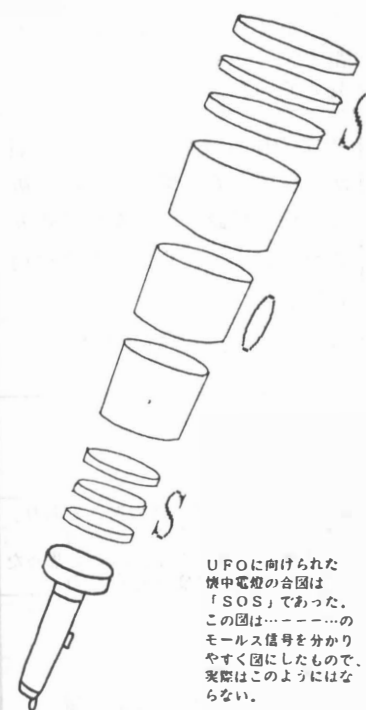
色はオレンジですが、赤味があったような感じのオレンジ色だったと記憶しています。特に記憶に残っている動き方、飛び方として、ジグザグに上ったり下ったりと、それに反転ですね、宙返りです。それがありません。それから、上に直線的に上昇したり下降したり…。記憶にあるのは、やや平面的にグルグルと回転している状態、かなり速い速度で回転している。丁度、火のついたロープを振り回すような感じです。非常に速くグルグルと回っていた記憶があります。とにかく、この時はびっくりしました。

そして、それがかなり長い時間、要するにトラックが迎えに戻ってくるまでの時間見えていました。さらに記録では19分間と書いてありますが、トラックが迎えに来て、それに乗って、目的地へ着くまで、ずっと見えていたんですね。

目的地に着くまでの間、途中で一回消えました。で、また出現して、目的地に到着する少し前にバッと消滅といいますか消えてしまったという訳です。

現地に着いてから、忘れない内にメモをとっておきまして、そのメモをもとに記録は書いてありますんで、かなり新鮮なうちに書いた記録なんです。そういう意味では、記憶よりも当時書いた記録の方が正確です。

到着した場所で、我々はキャンプした訳ですが、大変寒く、炊事の支度で米をといでいますと、といでる水が凍ってくるとか、雨よけのためテントの周囲に掘ったミゾが15cm位の霜柱で埋まっていたとか、そんな様な寒い中でのキャンプでした。■



懐中電燈の合図に反応したUFO
■1959年10月24日事件の模様■

1959年6月26日、ニューギニア島ババア地区で発生した近距離からのUFO目撃事件で、原住民と共に目撃した英国国教会のウィリアム・メルキョー・ジル神父は、接近する円盤状物体の上部に現れた人影に手を振り、人影もこれに対して手を振って応えたという確かな体験の後、夜間になって懐中電燈を使っている。以下オーストラリア駐在大使館付空軍武官が公式に報告し、米空軍UFO調査機関ブルーブックのファイルにも収められている証言から引用する。

「円盤の搭乗者が手を振ったことに対し」私たちの行為に対する反応であることは、間違いありません。伝道員の少年たちは皆驚きの声をあげました。だいたい暗くなってきたので、エリックに懐中電燈を取ってこさせると、UFOのめがけて光を投げかけました。1、2分経っていると、UFOは光が当たると、何回か左右に揺れました。私たちも、手をふりつづけ、懐中電燈を照らし続けました。すると、UFOは少しずつ大きくなって、明らかにこちらへ進んでくるようでした。30秒ほどで止り、それ以上は近づきませんでした。2、3分するとUFOの人影は完全に消えなくなりました。甲板の下へ消えたのです。」

たぶん着けないんじゃないか」と言いながら、6人で真っ暗な道をとぼとぼ歩いていた時ですね。ちょうどこの時、車が近付いてきて我々とすれ違う際に「どこまで行くんだ？」と聞いてきたんです。車は農場からミルクを運搬するトラックだったのです。目的地を話すと「農大の農場

〔拡大図〕



いせいもあって…その時「オヤッ」と思ったんですけど、何やら動きがあったんです。「おかしいなー」と思って、その時、前に資料で読んだ外国の話で、信号を送ったら反応があったというのを、ふと思い出して、それで懐中電燈で、あれは確かSOSの信号でした。それを送ったのです。

それと同時に、光体の動きに急激な変化が起こったのです。これにはビックリしました。これは6人全員が見ています。

まわりが真っ暗なので、その動きはハッキリとわかりました。スケッチの拡大図で（光の形）は帽子型に描いていますが、今は一寸と記憶がありません。しかし、記録の方が正確だと思います。記憶の方が少しあ

No	年	月	日	AM/PM	時間	観測方法	方向	説明図	色	速度	場所	備考
1	64	5	2	PM	7:05	偶然	北→北東		水色がかった白	飛行機	自宅付近	
4	64	6	24	PM	6:38	観測会	北→北東		薄黒→灰	ゆっくり	港・芝古川橋	
5	64	6	24	PM	6:40	観測会	北→北西		黒	1度を1秒で	港・芝古川橋	
7	64	7	2	PM	1:00	偶然	西		白	静止	東京プリンスホテル前	雲の様でかなり巨大だが、短時間の間に、両端から中央に向かってズバーッと消えてしまった。
9	64	7	22	昼頃		偶然	北→南		ステンレスの様	速い	自宅家族一同	保人を除く井上家全員が目撃。真昼、雲のない空に、飛行機の翼をとった胴体だけの物体が、雲に入るような感じで見えなくなった。
10	64	8	7	PM	8:00~9:00の間	偶然	西		オレンジ青緑	ただ、よう様	ハヶ岳牧場付近	ボーイスカウトのハヶ岳キャンプファイヤーの最中、木と木の間にチヨロチヨロと長い間見えていた。
13	64	10	15	AM	11:15	観測会	北東→南西		白銀	速い飛行機位	正則高校屋上	中学の体育授業中、クラス全員が学校屋上で目撃。井上は最初と最後を確認。他り変化は級友の目撃による。真っ青な空に白い物体。はっきりと形を確認した。
14	64	10	30	PM	6:57	観測	東		ケイ光色	飛行機より速い	自宅物干し	
20	65	2		PM	8:13~16	偶然	南→北		星色	飛行機より速い	自宅庭	観察していて、飛行機の速さであり、UFOかどうかの区別がつかず、「ジグザグに飛んでほしい」と思った瞬間、ジグザグに変化したもの
22	65	3	31	PM	7:16~35	偶然	北東		オレンジ		富山麓ボーイスカウトキャンプ途中	6名目撃 ■この目撃については本文に記載■
27	65	8	7	PM	8:57	観測会	西→東		オレンジ	人工衛星より速い	港有栖川公園	
30	65	8	8	AM	0:35	観測会	西→東		青白	流星位	港有栖川公園	
36	65	11	6	PM	7:40	偶然	東→西		白	流星位	京浜急行大森海岸付近	形がはっきりしていた。丁度、前方後円墳の様な形の物体が天頂から降下、建物の陰に隠れた。
40	65	12	31	PM	8:00	観測	南		水銀灯色	流星より速い	自宅物干し	流れるように飛行。ポッと分かれて消えた。
41	66	1	1	AM	6:25~45	観測会	北		暗い灰色	滞空	向ヶ丘マスカット山	肉眼では白い雲を背景に黒いスジ状に見えたが、双眼鏡で観察すると、形がはっきり見えた。
42	66	6	19			偶然					目商ホール	舞台のカーテンの陰で上下するピンポン玉位の54と同じヒラヒラした感じで半透明の物体。
43	66	11	23	PM	1:59~2:10	観測会	北→北東		白	非常にゆっくり	二子玉川読売飛行場	

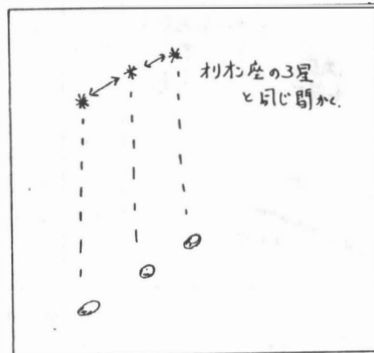
No	年	月	日	AM/PM	時間	観測方法	方向	説明図	色	速度	場所	備考
45	67	10	28	PM	6:10	偶然	南東		ソフトな白	飛行機より速い	自宅庭	
47	67	12	22	PM	4:25~30	観測会	南西→北北西		白	飛行機位	明治学院大学屋上	
50	68	8	18	PM	2:10~2:57	偶然	南西→南南		乳白色	滞空と移動	渋谷区児童館	
52	69	8	12	AM	0:07	偶然	西→天頂→東		グリーン	流星より速い	自宅物干し	色がすごく綺麗な緑色。しずくの形が滑るような感じ。
53	70	5	27	AM	9:05~08	偶然	前方1時の方向		乳白色	滞空	千歳行の機上	
54	71	5	12	PM	3:30頃	偶然	目の前を左から右へ		透過する様な薄茶色		アルバイト中	旋盤で作業中、左手視界に入る。「虫か?」と思ったが、形がはっきりしない。脇の下をくぐり抜けて右後方へ。「アレッ」と思って振り返ると左後方にいて、左から右に動いた後は何もなかった。
60	73	6	24	AM	3:22	偶然	西方→南方		白色	速い人工衛星の2.3倍	筑波山下山途中	
61	73	6	24	PM	7:50	観測会	西→北方		白色	速い人工衛星の2.3倍	世田谷烏山	
63	74	1	18	PM	8:40	偶然	南南西→南西		オレンジ又は金色	飛行機位変速	文京公会堂横	
64	74	2	26	AM	10:55~11:00	偶然			茶色→黒	滞空→ゆっくり移動→サーッと	築地中央市場	はっきりした物体で、金属的に見られた。市場で大騒ぎとなり、新聞でも報道された。
65	76	9	10	AM	2:30	偶然	東		白タマゴ形で真白	速い10度を1秒位	玉川学園近く	
66	78	1	25	PM	6:12	偶然	天頂→西北西仰角30度位で消える		白・緑オレンジの羽を思わせる1/3尾流	天頂→消えるまで3秒位満月大	玉川学園近く	満月位の大きな物体。形と色がクジャクに似る。通行人も同時に目撃した。

UFO 観察 1983 ~ 1988 年

★★ここに紹介する6件の目撃は、天体や航空機に詳しい匿名の研究者からのレポートである。同氏は小学3年の頃、郷里の歌志内で長く炎の尾を引く物体が山に降下するのを友人多数と共に目撃。更に一年後、近くの神威岳上空に木星ほどの明るい非常にゆっくり動く星のような光体を目撃している。いずれもUFOとは断定できないが、東京池袋の中学1年時代になって、確実なUFOを目撃した。彼はこう記している。「…土曜の午後、台風の過ぎ去った後、窓からたまたま外を見ていて、頭上に圧迫感があるように見上げると、十円玉のような物体が飛んでいた。ショックのあまり声も出ず、その動きを口をあけて追い続けた…」この物体は小さな点になって遠去かり、見たものについて考えていると、さらに3時30分頃、4つの黒い点が平行四辺形の隊形で飛行するのを目撃した。そのうちの1つが、別の1つの周囲を円運動しながら飛行するのを見て「何だこれは…」と悩み、その夜、当時毎週通っていた大学教授による天文教室に行き、教授に目撃体験を話すと、笑って「空飛ぶ円盤なんて存在するわけがありません…。夢でも見ていたのでしょうか」と言われて猛反発。翌日から天文台、気象台などに電話して気球打上げなど情報収集を行ない、結論として見たのは気球とか既知の物体ではなく、UFOは本当に実在すると考えて各種文献を読みあさったとのことである。同氏の母も昭和12~3の頃、夜の風呂帰りに球体がゆっくりと空に昇っていくのを見たり、また別の日にはソフトボールとピンポン玉のような物が糸のようなもので繋がったようにして、ゆっくりと山の奥へ飛んでいくのを多くの人と見たとのことである。この様に、UFO目撃体験者の周囲には様々な関連事件が附随し、その多くが本人のUFO志向に何らかの影響を与えている。

■3個の白色楕円■

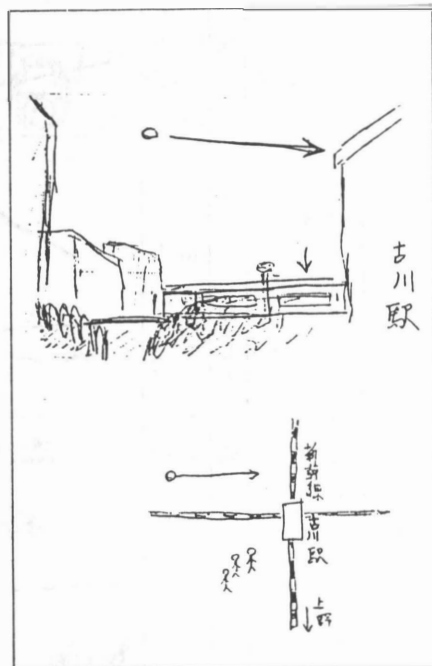
1983年1月14日(金)午後8時40分頃、JR赤羽線板橋駅付近において、会社の同僚T氏宅へ向かう途中、SSE 仰角50度からNNEへ、白い楕円形の物体が3個縦列で飛行。最初トリと思ったが、形状及び隊形の無変化よりUFOと判断。×印の地点で、スーッと闇にとけこむように消失した。空は快晴で無風。推定高度は通常の航空機と同じと思われ、それから仮定すると、その大きさは乗用車程度と思われる。もし、カメラを所持していたら撮影できる程の飛行時間で、10秒~20秒の間。但しその輝度が果たして撮影可能の値であったかどうかはわからない。それ自体は発光しておらず、暗闇で見ると同じで地上の光を反射していると思われる影のような部分が見られた。物体の各々の間隔はオリオン座3つ



星と同じであった。

■三角形の白色体■

1986年8月8日(金)午後4時30分頃、仕事の出張先である宮城県古川市、JR古川駅近くの客先からの帰り、駅前で発見。空は快晴無風。15~6階建ビルの高さに白色の三角形物体の移動を目撃した。発見時は「ヘリコプター」と考えたが、音が聞こえず、スピードが通常のヘリコ

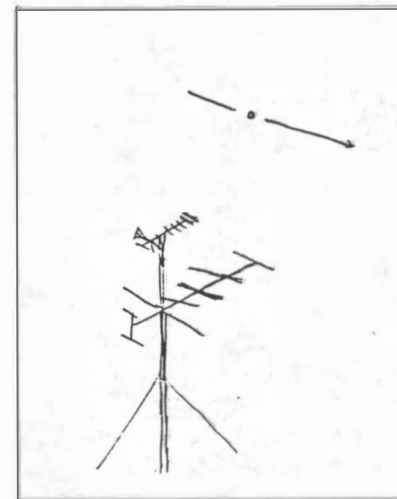
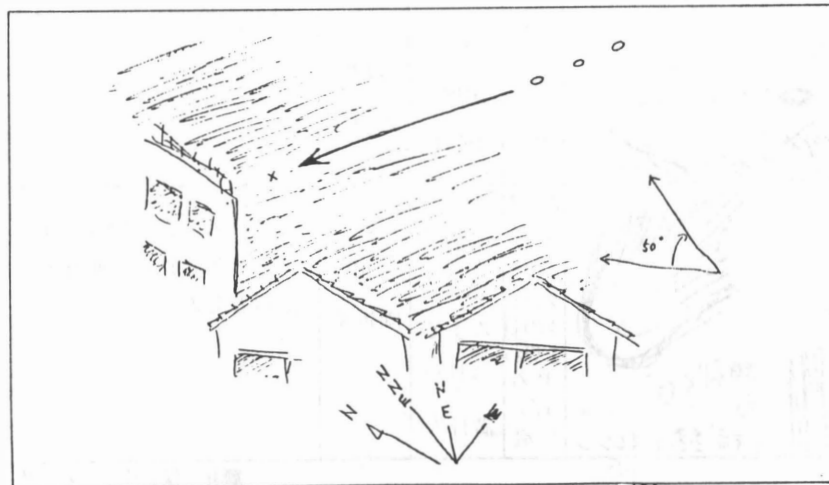


プターよりも速い事から疑問を抱き、駅の反対側の出口まで追ったが、消えて見えなくなった。時間にして2秒程度。物体には底辺と平行に灰色の線が見えた。

■高空を移動する白色球■

1987年2月1日午後、東京北区滝野川の友人宅で、TVアンテナの設置工事のため、1時半頃から屋根に上がって作業にかかった。

池袋のサンシャイン60近くをコダック社の飛行船が飛行するのを見て、ふと別方向(おそらく北東、仰角50~60度位)の所に、かなりの高空



にガラスを2羽、羽を動かしているのを確認。さらにずっと高空をピンポン玉のような白い物体が東方へ移動しているのを発見した。

飛行機のように長さをもったものではなく、球形に見えた。かなりゆっくりとしたスピードで、この辺りで通常見る飛行機よりもずっと高い位置に見える。およそ2~3分見ていたが、やがて小さくなり見失う。

この目撃の最中、誰一人時計を持っていなかったため正確な時間はわからないが、作業を開始したのが1時半、途中で調整のため屋根からおりて部屋にある柱時計を見た時には3時40分頃であった。従って目撃は2時~3時の間と考えられる。

【追記】飛行方向には羽田があるが、高度から着陸の段階にある航空機とは思えない。また、この時、アンテナ調整用に電界強度計を使っていたがUHF帯の音声、映像周波にEM1は認められなかった。(もっとも、VHFにおいてはレンジ切換えを行なわなかったため、確認していないが、かなりの高空であったためかEM1は確認できなかったものと思われる。但し、UHFのアンテナはUFOと別方向であった)

■緑の火球■

1988年8月6日(土)午後11時58分頃、会社の同僚と荒川の花火大会を見て、友人宅へ寄った帰りに板橋の自宅前で目撃。

帰宅時間が深夜のため、自宅のドアはカギがかかっており、インターフォンを押し、家の者に開けてもらおう際、ふと左後方の空を見ると、突如飛行していた。空はところどころに雲がある程度の晴天。

それは尾流をもつ火球状で、頭部が青白くボーッとしたガス状の円光で、中心に緑色の丸い本体があり、

白いガス状の尾をひいていた。

光体に背をむけていた友人は、残念ながら見る事ができなかったが、物体の光で僕の顔が光ったのを見た、と言っていた。

ほんの1~2秒間の出来事で、一瞬、先程まで見ていた花火を連想した。(全く同じミドリ色)ロケット花火のような感じであったが、そばの雲に光を与えていた事(雲のはるか上空を飛行)そのはるか下方で目撃した僕の顔や、自宅の壁に光を反射させた事から、かなり強い光度をもっていたと考える。(満月ほどの明るさであったような印象を受けた。ちなみに月は、友人を送った帰り路に0時30分頃、三日月で東の低い位置にあった)

火球であったなら、その光の色から銅の成分を持っていると思われるが、消え方がパッと瞬間的に消えた事などから、人工衛星の大気圏突入や流星とは異なる印象を受けた。

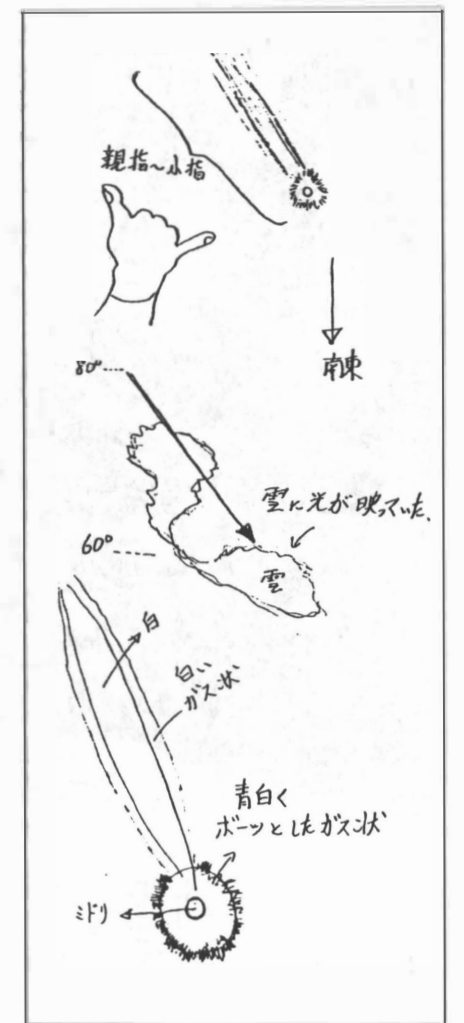
■地上付近から上空に去った白点■

1988年10月20日(木)朝、長野へ出張で出かけるべく、代理店の営業マンと会社の営業マンとで新宿より車で出発。府中競馬場を過ぎ、はるか前方にサントリーの府中工場、そして右手にNEC府中工場が見えるあたりで、はるか前方の鉄塔の両側の空間に白い点を確認。はじめは鉄塔に取り付けられた碍子と考えていたが、左側の白点が動いていることに気がついた。乗っていた車の動きとは合わないで、物体が飛んでいる事が分かったが、それでもサギか何かの鳥と考えていたので、同乗の二人には知らせなかった。

時刻は午前10時20分~40分頃。距離にして2kmほど前方だと思う。その距離から考えると、物体は鳥にしては大きすぎた。また、はばたいていないようにも見えない。しばらく注視していると、背景の色にとけこんで見えなくなった。(鉄塔右側の白点は、始めから注意して見ていなかったのだから分らない…)

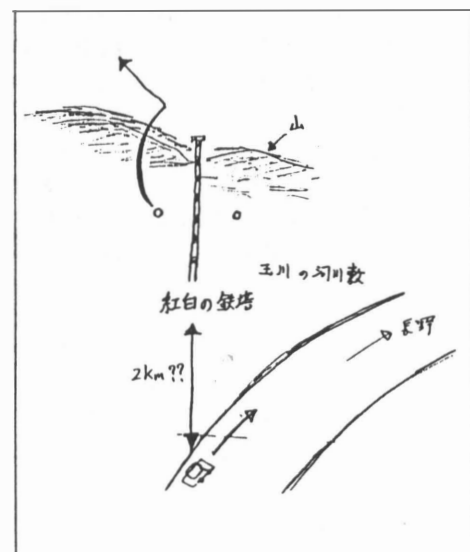
10~20秒後、60度程の仰角で左斜め上空のはるか高い位置をジェット機のような物が飛んでいた。しかし、車が高速で走行していたので同じ物体かどうかは確認できなかった。

(調布飛行場は府中競馬場のはるか右後方に位置しているので、軽飛行機の発着とは思えない。物体の見えた位置は、どちらかというと玉川



の河川敷に位置している。)

【追記】後日、物体の大きさを推定する目的で、通信用のレドーム(降雨、降雪対策としてカバーをしたパラボラ)の鉄塔を別の場所と比較してみたが、2km程離れて見た感じが物体の大きさと同じ様で、それから考えると、物体は直径3~4mくらいのものであると思われる。





Refugees packing the square in front of Ueno Station

第3章 UFO探求

↑1923年関東大震災で上野駅前に集まった人々

地震・津浪発生にUFOはどう活動したか

■UFOのタイプは様々あるが、その実体の大きさで分類すると、大きく分けて3種類が認められる。まず、我々の航空機がそれ以上の実体で、その多くは通常“葉巻型”と呼ばれている。民間機との遭遇が多く、長さは数100m以上である。つぎに通常“円盤”と呼ばれるタイプで、数mから数10mの大きさが多い。そして最後に小さな球体が認められており、第2次大戦後期に多数目撃された。1m以下の物体が多く、昼間はボール状、夜間は火の玉状に見られる。“円盤”タイプから発射される現象が目撃されているところから、我々地球の科学で言えばラジオゾンデや人工衛星のような役割をもっているものと推定される。この小さな飛行物体は屋根の上に静止してから空に飛び去るとか、家の天井に貼りついてから窓から飛び去る、あるいは人の間を縫って飛行、屋内や航空機内に侵入する事例などが報告されており、自由に人界深く潜り込んで情報収集を行なう能力をもつものと推定される。これら3種のUFOは、いずれも翼による揚力や、ジェットなどによる推進力を必要とせず空中を自在に飛行出来、その飛行原理、エネルギー源は不明である。夜間のUFOは発光している事が殆どだが、地球の航空機のように発光器による発光ではなく、通常その発光は実体全体から発している。このエネルギー源は想像を絶する大きさで、ある事例について研究した報告によれば、1機のUFOでアメリカ全土の電力に相当するといった話もあるほどである。

地球式の機械は、その作動に必要なエネルギーを自ら搭載するか、動力ケーブルで供給しなければならない。従って、1機のUFOで地上が真昼のように照射されたという事実を考える場合、こうした我々の持つ機械とかエネルギーについての“常識”を適用させることは困難である。

さて、UFOの記録は今世紀だけに限らない。我国でも、無数の古文書をひもとけば、随所に未知の飛行物体の出現目撃が記されているのである。さらに、昔の人々はそれらを見て「UFO」とは言わなかった。「空飛ぶ円盤」も「宇宙船」という概念や言葉もなかったのである。

ここに取り上げる事例は、以上に述べたUFOの概念に照らし合わせ、宇宙からのUFOをもってしなければ説明できない明治以前の局地的事件であるが、当時の人々によって「神火」と呼ばれた謎の実体が、陸に押し寄せる津浪に介入し、物理的なパワーを発揮して被害を緩和、人々の信仰の起原ともなったもので、UFOの性質、飛来目的を考察する上で見逃せない貴重な要素を含んでいる。地震火山列島日本が古来深くUFOとかかわってきた中に、このような地球物理的な日本の特性を無視することはできないだろう。

記

鹿島神社所蔵

宝永地震津浪記

宝永五威子年六月吉日

奉納御宝前

宝永四年十月四日 午の下刻はかりに大ないして山もくづれ地もさけ 家いなんともたふるか人みな肝をけしあわてさわきける かゝる折口俄に大なる浪よせ来りて 山間村の家い共ことごとく見るがうちにながれ失せけり老若男女此ありさまを見て あなおそろし海つらより高浪こそ来たれ

逃よ 遁よと声々におめきさけびて手にとるものをだにとりあへず 山岡にはしりのぼりければ 我もまた人にをくれじと財宝なんどもを打捨 井野山といふ所に分けのぼり苦ふきの庵して苔の延に草の枕三夜四夜ばかりのおきふしは いとあさましかりけり しかはあれど川よりこなたへは浪も来らず 家いもあやまたす をだやかなりしこそ有かたうおほえ侍りけれ

彼山にありつる程に或人のかたりしは 是より遥に海つらを見侍りしに 鹿島の沖より彼山を五つ六つ重ねあけたらむほどの浪立来たる中に白く円にして妙なる光ありけるものの見江ければ あやしく目もはなたず と見から見しはしがほど見けるに其浪沖にして大と小と二つにわれ 大なるは東のかたへ行 小ききは此浦へよせ来る 彼円に光りしもの大なる浪のうちに打かこみてつれゆきしが芳養の沖わたりとおぼしき所より其浪をはなれ 鹿島の御山へ飛降りてかくれぬ こはふしぎなりけり かゝりしこともありける事にやと いとこまやかに語り侍りし 是則鹿島の御神体いささかうたかふところなかるべし さてこそ一邑のみにして この里には浪も来たらざりけれ誠にたしけなしといふもあろかなりける

柳鹿島の御神体と申奉るは武 槌の尊にてわたらせ給ふ 昔日葦原の中つ国をたいらけ 邪なる神をしづめ給ふとかや常陸の国より三笠山にうつりおはします 春日四所の中には第一の御殿是なり

又御本地を尋めれば各別体おはしますといへども中にも地蔵薩垂と けぎやうしたまひてすべて慈悲万行大菩薩と仰奉る 或は又三千大世界のあるし輪蓋大龍王の変化とかや利生無尽の方便れいけんあらたにめでたくましますこと 誰の人かこれを信じ奉らさんや かゝるふしきをまのまへに拝み奉ること浦松の千代をかけて尚此里のさかゆくすえ頼もしくこそ覚江侍りけれ 重賢

沖つ波くだけて帰る嬉しさは鹿島の神の
恵みとそしる 沙門寂照

■地震に伴う光物はUFOか■

UFOが大地震発生の前後に出現し、何らかの目的をもった飛行を展開する事例は『日本地震資料』その他の古文書に見ることが出来る。その多くは“光物”の外観を呈し、今日のUFOのイメージよりは、自然現象の範ちゅうに舐触している感があり、特別な意図で人為的な要素を抽出しない限り、異常流星・雷光の類で片付けられてしまう傾向にある。しかし、例えば飛来した“光物”が空中で一旦停止してから飛び去った場合（事例は後述）その光物はいかなる自然現象でも説明不能である。従って、こうした現象は、唯一の類似性をもつUFOとの対比によってのみ解明が可能であり、江戸時代の発光現象を電線のスパークで説明することに似た愚は許されない。

ここに一つの事実がある。正確には事実を伝える記録であるが、所は紀伊南部、時は宝永4年と嘉永7（安政1）年の2回、同様の現象が記録され文書が地元神社に奉納されて記念式典を生み、今日に到っている。

紀伊南部鹿島神社由緒略記によると、毎年5月3日に行なわれる明神祭は次の由来と記されている。「宝永四年十月四日(1710)年、嘉永七年六月(1859)年の両度の大地震大津浪の折、島中神社に祀る鹿島神が火の玉となって大津浪を他所に誘導し去り、南部郷の被害を僅少にとどめ民家を救って頂いた事から感謝の祭礼をつづけ、霊験あらたかな神と敬い、附近村より武運長久、厄除開運、安産の他特に漁事に従う人々の信仰厚く、多数の渡島参拝がある。」

（注：嘉永7＝安政元年は、俗に地震歳と云われ、正月7日飛騨地方に地震があって以来、暮の11月4日まで殆ど毎日のように地震があったという。6月14～15日と11月4～5日はいずれも紀伊を襲っており、南部鹿島神社奉納文書も嘉永7年地震は6月の地震をまず記し、次に11月の地震津浪を記して神火出現を述べている。従って祭り行事由来を説くこの説明も、正しくは6月を11月とすべきである。）

そして、毎年八月一日の花火祭り由緒として……

「明神祭と同じく、津浪から救って

頂いた霊験あらたかな鹿島明神の大神に報恩感謝の祭りとしてはじめられたもので、火の玉の出来事から松明を夏の夜に燃えて神に供えていたが、明治始めよりは煙火奉納に変わり、今なお煙火をたいて祭祀をしている」

武者金吉著『日本地震資料』によると、安政元年11月4日(1854年12月23日)午前9時関東から近畿に及んだ震源地遠州灘M=8.4による津浪発生は沼津から天龍川河口までの海岸に最大の被害をもたらした（安政東海地震津浪）が、その32時間後の安政元年（嘉永7年）11月5日（1854年12月24日）午後4時紀伊半島沖を震源とするM=8.4は、静岡から九州までの海岸線に津浪（安政南海地震津浪）被害をもたらした。地震学者大森房吉教授の算出によると全半潰4万、焼失6千、流失1万5千、死者3千となった。この地震により、湯の峯、道後、白浜の温泉がとまり、紀伊、四国各地に1m前後の沈下と隆起がみられた。災害や津浪の様子は多数の古文書に記され、特に津浪の惨状は克明である。

この地震津浪が紀伊南部湾を襲った際、近くの人に連れていた人々は

1 和歌山県南部
鹿島神社所蔵
『鹿島の神威
武 槌神・霊験
一宝永・嘉永大
地震津浪の古記』
写本鹿島神社宮司
野田知一氏提供

嘉永七年申寅大地震津浪之記

六月十五日閉晴天曉丑上刻大地震ユル人々起キ出テ家ヲ出テ大ニ騒グ サレド無事ナリ後チ五七日ノ間三四度ヅ、日々ユル此時諸国同、ユリテ伊勢国四日市大和、国奈良伊賀、国上野等殊ニ甚シク火災起リ地裂ケテ死人□シカリシヨシ画図人語等ニテ見聞セリ

十一月四日執 曇天辰、下刻大地震ユル事須□人々家ヲ出テ道路ニ立ツ漸々ニシテ止ム 其後昼夜ヲカケテ四五度ユル 今日朝ヨリ□ノ汐水行、事イト早く浦□ノ磯須曳ノ間ニ見エ隠レシテ汐満干スル事タ方マデ七八度也

此日勝専寺ノ役僧浦ニ出テ汐ヲネブリ見シニ吞メバ吞ム、ベクオボエテ井、水ニ大ク異ナラズ□カ□キノミナリシヨシ語レリ此汐ノ動揺ニテ津浪寄リ来シモ計リ難シトテ夙浦ノ男女衣食調度ヲ携ヘ悉ク猪野山〔芝村ノ東ニ在テトリワキチカシ〕ヘト逃ゲ登ル夜ニ入王子宮〔北道村ニ在リ〕稲荷宮〔南道村ニ在リ〕秋葉宮〔氣里村ニ在リ〕鹿島宮〔海中ニ在リ〕等ヘ神燈ヲ上ゲ人々参詣ス若シ夜中津浪寄リ来シハ近辺ノ岡山ヘ遁ニ為トテ人皆身装ヒ為テ家々ニ飯ヲ炊キ弁当ノ用意ヲ為

十一月五日庚午破ツチ。入ル晴天申時大地震ユル事甚ク家ヲ出テ道路ニ立ツニ立チ兼テマロブ計ナリ須曳シテ海底鳴動シテ津浪寄セキタリ

白浪大川ヲ斥ル事雪ノ如シサテ引タル時ハ平常ノ波打際ヨリ奥ヘ去ル□□壺町バカリ又寄セ来リ如此スル□三度ナリ猪野山 上城 高見、岡 法華寺、岡 ヘ郷中ノ人逃上ル己レハ法華寺ノ岡ニ居明、今宵ハ仮庵ダニ為ネバ霜太ク深、シテ衣ヲ□シテ堪ヘ難シ亥下刻又大地震ユル□甚シ終夜小キハ数ヘモ知ラズユル此日地震ニテ倒レシ家五軒 津浪ニテ流レシ家八軒ナリ又□落チ或ハ傾キタル家又ハ納屋蔵等倒レ或ハ流失セシ十餘軒モ有ルベシ田畑ノ荒ハ山内村ニテ床土流失作土流失洲入等合テ四町余麦作損亡廿町余東岩代村ニテ作土流失五反五畝余麦作損亡二町四反五畝余西岩代村ニテ作土流失五反五畝余麦作損亡二町四反五畝余西岩代村ニテ作土流失一反三畝麦作損亡五町七畝余横田村ニテ損亡三町余氣里村茶屋橋ノ辺ニテ作土流失一反等ナリ又夙浦ニテ漁船漁網等ノ流失アリ又後日ニ横田村ナル枇杷山ノ枇杷ノ樹残ラズ枯レタリ津浪ニ漬リシユエナルベシ然レド他所ニ競ブレバ甚穩ナリ

此地〔三名部〕如斯平穩ナルユエヨシハ宝永四年〔当嘉永七年ヨリ百四十八年以前ナリ〕十月四日津浪ノ時猪野山ヨリ見シニ鹿島ノ山ヲ五ツ六ツ重ネ上ゲタルバカリノ大浪大洋ヨリ寄リ来ルニ其浪の中ニ白ク円ニシテ妙ナル光。アル物有リケルヲ奇シトマモリ見ケルニ彼、大浪ニツニワレ小サキ方ハ此浦ヘ寄セ大ナルハ東ノ方ヘユクニカノ光リ物其浪ノ中ニウチカコミテツレユキシガ芳養沖ト思フアタリヨリ浪ヲ離レテ鹿島ノ御山ニ飛降り又是此ノ神ノ御霊ナルコト疑フ処ナク此ノ守護ニヨリテ此地ハ穩カナリシヨシ当時山内重賢ガ記セル書翌ル宝永五年六月十六日御礼トシテ祭式ヲツカヘマツルヲ見テヨメル歌モカキノコセタリ於今年々花火ヲ献リ祭礼ヲツカエマツル事其例ナリ鹿島宮神社ニ納メ有リ

其先□ニヨリテ此地モ同ジ神ノ守護ニヨレルナリ其証徴ハ申刻〔津浪ヨセ来ントスル時〕バカリ未申ノ方ノ海上ニ火柱タツト見シニ忽津浪寄セクルヲ猪野山〔前の四日ニ逃ゲ登リシママ今日マデ居ル人ノ〕ニテ見シニカノ大浪沖ヨリ寄せ来リ鹿島ノ御山ニアタレルガ大砲ノ音シテニツニワレ彼

ノ宝永ノ時ノ如ク大小ニ分レ大ナルハ田辺沖ヘトユキ小キハ此浦ニ寄セツト語レリ夜ニ入り右ノ御山ヨリ神火〔大サ遠見鞠ノ如シ〕出テ海上ニウカビ守護シ玉フ事終夜ナリ

芝秀恭〔本時ノ公文所通称健蔵ト云〕言フ明日官ノ免定ヲタバラシタメ今日出町ストテ堀村マデ〔同伴ノ村長熊瀬川村惣兵エ高野村仲蔵平野村忠右エ門島ノ瀬村清右エ門等ナリ〕行テ清吉ト云フ者ノ家ニ休息居シニ申時バカリ大地震ユリイダシ大地モ裂ル計リナレバ大ニ驚キ家居ノ安否ヲ思ヒ煩ラヒ引返サントセシガ官ノ公用然テオクベキニ有ラネバイカガセント進退セマリ途方ニ暮レシガ希代ノ珍事ナレバ猶予スベキニ有ラズ此大變ニテハ官庁ニモ公用トリアヘ給フベキ際ニハアラジト決心シテ引返シニニ村長ノ中二人ハ此由ユトワランタメ田辺ヘト行キ残レル人々周章フタメキナガラ己レヲ輔佐テ帰リシニ堀村ノ小川ノ橋ノ辺ニテ大砲二三発セシガ如キ音響クヤイナヤ彼ノ小川ニ津浪□流リキテ向股ヲ漬スバカリナレバ往来ノ道ハ行ガタク猿神ノ社ノ片方ノ山方ヲツタヒ平見〔植田村ノ丘山〕ヲ越エ墓所ノ側ヘ出シニ椿坂□ハ潮水溢レテ海ノ如ク逃散ノ人ノ叫喚□シク如此テハ己ガ家モ既ク流レ失セツラント甚ク長息ツツ足ヲ空ニテ帰リシニ家居ハ此所彼地地震ニテユリ損メタレドサセル事ナク家人ハ既ク猪野山ニ逃登リテ平穩ナリシハイトウレシカリキ自、ハ官ノ旧記書記ヲ始メ家居重器等ヲ守ランタメ本宅ノ北向ニ小屋ヲツクリテ居タリシハ古来未曾有ノ事ナリキトカタリキ

十一月六日□未危晴天曉霜深キ事雪ノ如シ猪野山上城高見ノ岡法華寺ノ岡等所々小屋ツクリ為今日モ小地震數十度ユル今宵モ彼ノ神火現レ給フ 今日聞シニ芝村ノ地士鈴木村次芳養浦口前所ニ出沒シテ在リシニ津浪ニ溺レ死スト後十餘日ヲ経テ屍海渚ニ寄レリトゾ

十一月七日壬申成曇天今朝間クニ五日ノ夜千里ノ浜ノ王子宮堅クサシタル錠自然ニ開キテ此所ヨリモ神火現レ此火川口ハ王子宮ノ半服ニ懸リテ守護アリシト人々ニ聞ケリ今日モ小キ地震數十度ユル

十一月九日十日迄仮居シテ十一日ノ午時ヨリ予ハ家ニ帰り又然レド猪野宿セル人々悉ク引ハラヒシハ晦日ガタナリ八日ヨリ後八日二十度七八度五六度ト次第ニ減ジテ十二月末ニハ日ニ二二度ユリ安政〔嘉永七年十二月安政元年ト改元ス〕二年正月モ時々ユリ四月ニ至リテモ猶小地震ヲリヨリユル右鹿島宮ノ御守護灼然タル事ハ上ニ云ヘル如クナルヲ猶又五日ノ日芳養浦ノ漁夫己ガ業セントテ此島ノ辺ニ在リシニ彼ノ大浪ニ驚キ島ノ浜ニ上リ御山ニ逃登リシニ彼ノ高浪此小浜ヲダニコサズ船モ平穩ナリシトゾ〔中略〕

十一月廿五日庚寅除曇天ノチ雨降ル海底鳴動シテツヅカゼ屋根ヲ吹トバシ雷鳴ル

十二月六日郷中御霊宮鹿島宮ヘ御礼ノ万度参リス〔中略〕

右子ガ見シト人ノ語レルトノカギリヲ記シヌ又猶脱漏モ有リヌベシ且前篠芝秀恭ヲハジメ人々トハカリテ記シオクユエハ後人ノ見る見テ當時ノ事実ヲ知り神ノ霊ノ恩頼ヲ尊□アフギ悟ルベキ為ナレバ童兒マデモ読見テ明亮ヤスカルベク□詞理言ノ俚ニ書キツ他国他郷ノ事共モ見聞セルママ同ク記セシヲ其ハ伝聞ノ謬謬モ有ルベクハタ此所ニハ用ナクシテコト長クハヅラハシケレバ私記ニ載セテハブキツ

安政二年□卯四月書記之

熊代源蔵繁里 花押

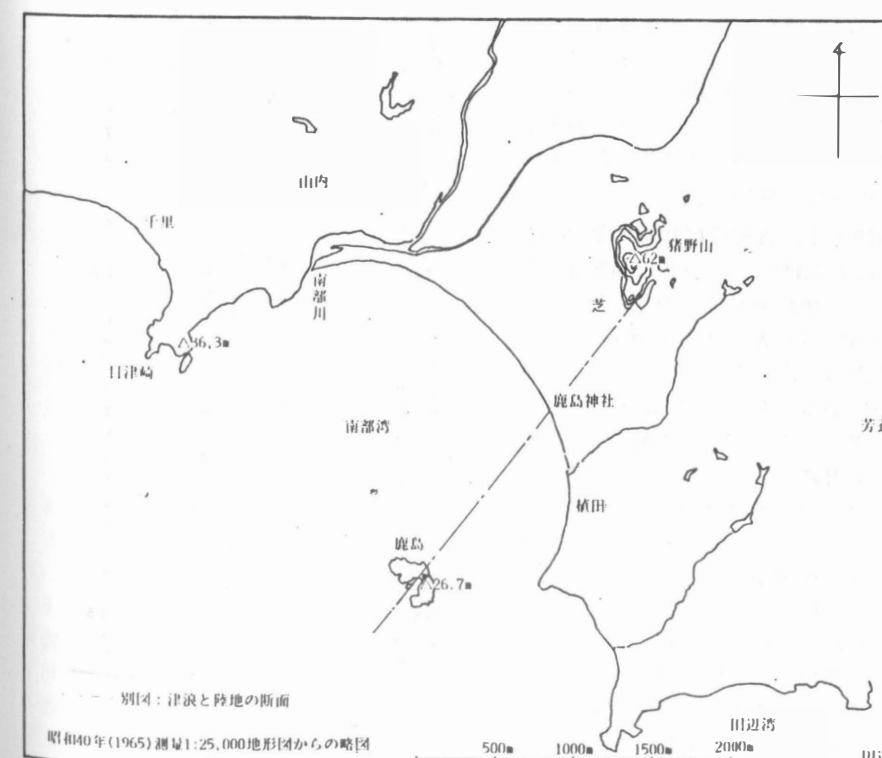
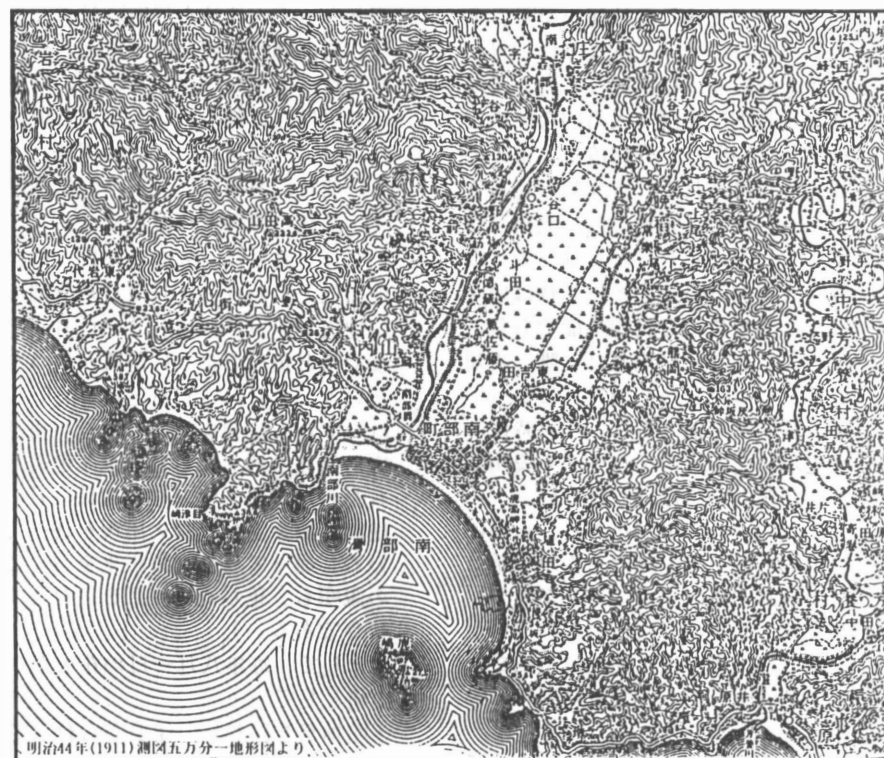
不思議な光景を目撃した。時間を追って、その状況を整理してみよう。

11月4日午前9時発生の地震により、静岡、愛知、三重、和歌山、徳島などに津浪が押し寄せ、勝浦、浦神で6mの検潮記録がみられているが、南部の近く印南では2.4mであった。

『嘉永七年甲寅地震海翻之記』によると、4日の地震によると思われる満干差の異常に、津浪襲来を予期した人々は衣食調度を携え、猪野山(62m)に逃れていた。

夜に入り、人々は王子宮、鹿島宮などに神燈を上げて参詣。

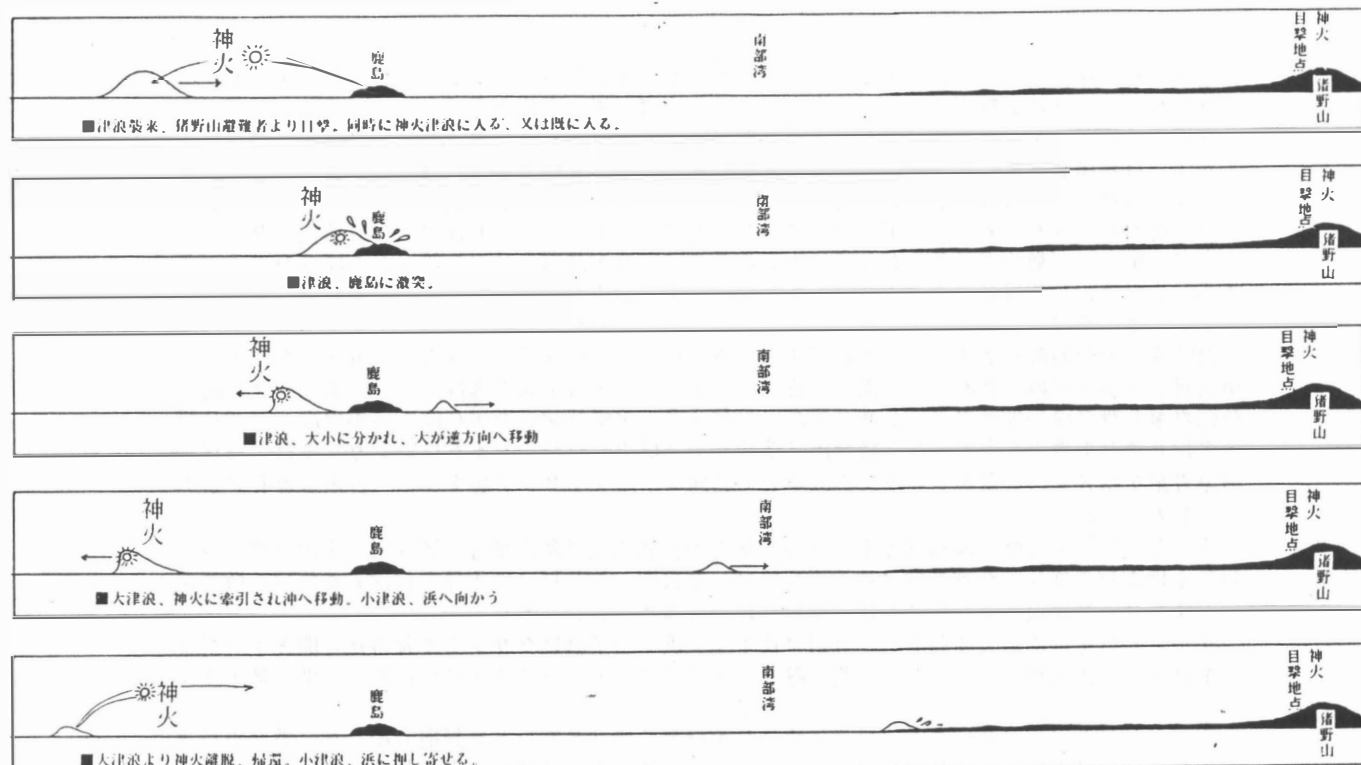
11月5日晴天。申刻(午後4時)大地震が発生、外に出ても立っていない程で、海底鳴動して津浪が押し寄せた。このとき、前日より猪野山に逃れていた人々は、大津浪が南部湾の無人島であり鹿島神社が祀られる鹿島の山(26.7m)に大音響と共に



に激突、津浪は二つに割れ、大きな波は田辺の方へ行き、小さい波のみが南部の海岸に打ち寄せたので、被害は少なかった。そして、夜に入り、鹿島から鞠の如き神火が出現、終夜海上に浮かび「守護」したという。

「守護」とはどのような状況か？これを目撃した当時の鹿島社神官堅田種知は安政二年に記した文書の中でこう述べている。

「…人皆の嘉び永き七年の申寅でふ霜月の四日の巳の時下る頃最も大ひに地震りぬ明れば五日の申の時亦も大比に震るまゝに親を負ひつ妻子供を抱きたづさへ野辺に出で休らふほどに海底の破るはかりに鳴り響き津浪寄せ来ぬ□り出の近き山へと逃げ寄り拝かみみれば其夜半に此御山より奇しくも光れる玉の二つ三つ顕れ出て白浪の中に入りしは是そこの神の加む射で其昔し室ら永しと云ふ年の冬の津浪にも荒らひ寄せくる其



鹿島神社所蔵の古文書を基に、津浪襲来と神火の関係を図解したもの 津浪襲来、猪野山避難者より目撃。同時に神火津浪に入る。又は既に入る。

中へ鹿島山より飛び立ちし鷺かあらぬか志良幣の入るよと見しに寄浪は彼方此方へ別れ行き南部の里は安かりし験しは今に年毎の水無月中の五日の夜花火祭りし賑ひぬ夫れは昔の物語其口其所に猪の山の本陰に寄理て夜を明かし夜を重ねても猶震りの志はし止まず…」

神火はまた、千里王子宮からも現れ、川口附近に滞空するのが人々に目撃され、翌6日の夜も神火が出現した。

この嘉永の記録は同時に、宝永4年にも同様の出来事のあったことに言及しており、嘉永では単に“津浪が島に当たって二つに割れた”としている現象が、宝永では“神火”によって分けられたというのである。

神火、津浪を牽引

宝永四年十月四日(1707 年10月28日)正午、紀伊半島沖を震源とするM=8.4、駿河湾中央部・甲斐西部・信濃・東海道・美濃・紀伊・近江・畿内・播磨・大聖寺・富山・出雲・三原・筑後の各地に家屋倒壊をもたらした、わが国最大級地震によって生じた宝永地震津浪は、伊豆半島から九州までの太平洋沿岸および大阪湾・播磨・伊予・防長を襲い、さらに南の八丈島も襲った。

各地の津浪の程度は別表の通りで、南部では6mとなっている。しかし鹿島神社宮に保管されている当時の

取材者山内重賢が記した文書『宝永地震津浪記』によると、猪野山から見た津浪は鹿島の山を五つ六つ重ねほどもあったという。鹿島の最高点は26.7mだが、この場合仮に20mとしても、その5倍ともなれば100mというとてもない大波になってしまう。このような高さの波が実際に襲ったならば、鹿島から1.6Km 離れているとはいえ標高わずか62m の猪野山が無事であるかどうか疑わしい。この件について、筆者は1989年5月3日に現地を訪れ、式典関係者の一人に尋ねたところ、「鹿島自体が南部湾の自然の防波堤になっており、津浪は島に当ることで緩衝される。浪の高さは昔の人の誇張ではないか」との意見を戴いた。

当地の津浪推定値は6m。鹿島の高さにも及ばない。筆者は猪野山に登って、鹿島を見てみた。60m の高さから1.6Km 先の高さ20数mを見る訳である。海岸から見たよりも水平線が広がる。ちょうど島の高さ位に水平線がくる。津浪襲来時の水平線は、古文書によく表現されるように“白い壁”のように変貌して迫って来た筈である。これを目撃して仰天した心理的作用が「山を五つ六つ重ねた波」という表現になったとしても責められるものではない。

問題はこのとき同時に目撃された「神火」である。「白く円くして妙なる光りある物」とは……

宝永地震(1707年10月28日)の津浪の高さの推定値			
地 名	津浪の高さ(m)	地 名	津浪の高さ(m)
静岡県		田 辺	3.5
下 田	5~6	南 部	6
津 波	5	伊 勢	5.8~6.3
八木沢	8~10?	柳 坊	3.5
内 浦	5.5~6	比 井	5
原・吉原	4	比 良	5~6
三 保	5	広 田	5~6
清水	4	湯 浅	4~5
相 良	6~8?	橋 原	3
新 居	3	海 南	4.5~5
白須賀	5	大阪府	
三重県		和 泉	2.5
四日市	2	摂 津	2.5
大 津	5	大 阪	2.5~3
国 府	7~8	兵庫県	
神津佐	4~5	明 石	1~1.5
五ヶ所浦	4~5	徳島県	
賢 浦	7~8	牟 岐	6
村 山	7~8	浅 川	6~7
神前浦	7	新 浦	3
古和浦	7	六 甲	5
錦	6	高知県	
長 島	5	甲 浦	5
引 本	4.5	佐喜浜	4~5
須賀利	4~5	室 戸	5.5
尾 鷲	8~10	安 芸	5
矢ノ浜	6~7	岸 本	5~6
九 木	5~6	浦 戸	5~6
賀 田	8~9	高 知	2
曾 根	4~5	宇 佐	8
新 鹿	8~10	須 崎	5~6
大 泊	5~6	久 礼	6
和歌山県		上ノ加江	5
勝 浦	6~7	佐 賀	6
古 座	5	下ノ加江	5
串 本	5~6	宿 毛	2
田 並	5	愛媛県	
和 深	5	吉 田	4
江 住	5	九 州	
岡 参見	5.5	臼 杵	3.5
富 田	4.5	土 々 呂	3
新 庄	6~7		

地震津浪は10月下旬の正午頃、各地を襲った。天候は不明。件の光物を目撃した「或人」がどこの誰かは不明だが、取材者山内重賢は猪野山でこれを聞いている。1.6Km 離れた鹿島の沖より迫る大津浪の中に、その光物はあったという。白昼肉眼での観察である。余程目立つ物体、あるいは輝く物体でなければ、騒然たる場にて見極めるのは難しい。具体的に推測する場合、高度1600mから2000m の上空に見掛け月大の物体(視直径30')があった場合の実直径を算出する式として――

$$\text{距離} = \frac{\text{実半径}}{\text{視半径のtan}}$$

の計算で約16mの物体ということになる。文書では大きさについての記述がないため、追求はできないが、少なくとも考え方として、「鞠の如し」だから“バレーボール位か?”といった感覚ではないであろう。この白く丸い輝く物体は人々に“神火”と呼ばれた。しかも、その名の通りと云うべきか、正に“神の力”を発動して巨大な水塊、おそらくは現代のタンカーで何10隻分もの容積の海水を島への激突と共に、大小二つにけ、小さな方をそのまま陸に向かうまま放置し、大きな方を沖合へと牽引し、芳養沖附近で波より離れたと、いうのである。

果たしてこの目撃談は、津浪を見て狼狽したことによる幻覚、あるいは作り話の類であろうか。

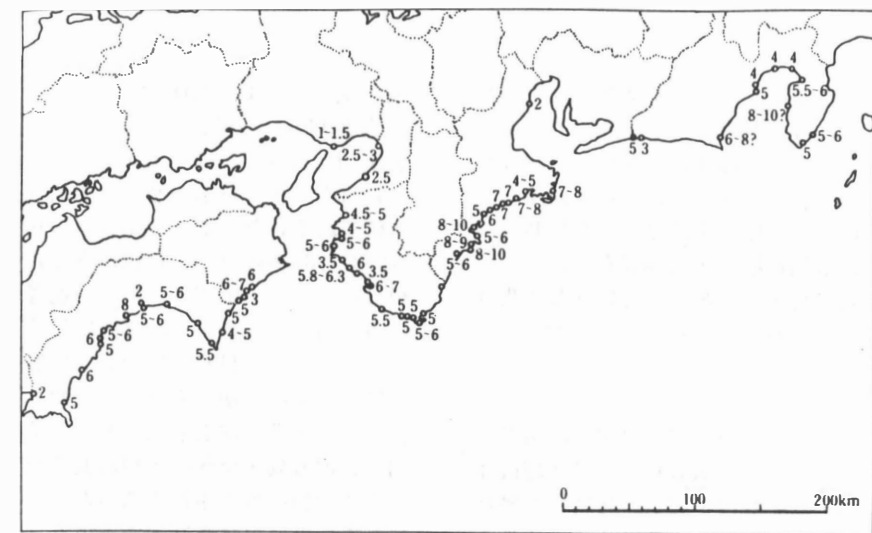
宝永津浪 熱田でも浪割る火の玉出現

“神火”が津浪を分けたという、信じがたい現象が、名古屋の記録にもあった。『紀伊半島地震津浪史料』は武者著『大日本地震史料』3巻、『日本地震史料』1巻に紹介されていないものを集めているが、宝永4年10月4日の熱田について記した『

篤中記』によると、○熱田海等、甚だ潮甚高く、進退不常。新屋川等迄潮来る。

○熱田社内無事也○但し佐久間大膳大夫所建の大石燈籠西へ倒る。寛文寅には倒れず

○地震の上に、熱田にて津浪来るとて、諸人大に驚騒ぐ。此時頭人の弥宜一人、神前に有しが、大麻を持行て、海辺へ出て観念し、大麻一をば手にあげて、一つは海へ放人たるに、蕩々たる高浪一の杭迄来りしが、忽二つ



験を基にした知恵が活かされていた。これは自然界に及ぼす人工的要素の多い現代では通用しないかも知れないが、自然界の機構を真正面から受けていた頃の生活は、いつ何時襲うかも知れない大変地災を前にして、目に見える空の兆し等に対して現代人と比べ格段に敏感であっただろうと推察される。

嘉永7年地震津浪を記した由良の古文書『竹内伝七覚書』には地震体験からの心得を記し、光物にも触れているので参考までに紹介してみよう。

心得之事

- 一、第一ばんに金銀肌につけ落さぬように用心有る可き事
- 一、大地震ゆり出しの節は田畠、又はたて物なき広地へいで、けがなき様に用心致す可き事。
- 一、大地震にて沖のあたり、光り物、又は大筒をうつような音、いたし候て、白波大浪打ち寄り来るに違ひなければ早々山へ逃げのび申す可き事。(以下略)

嘉永7年地震 勢州にも 海上のUFO

嘉永の時代、日本の歴史は黒船来訪に揺れていた。嘉永6年6月3日(1853.7.8)金曜日、江戸湾沿海に投錨した当日の夜半すぎ、ペリー艦隊の当直指令デューアーDuer大尉は注目すべき流星を目撃している。内容は別項に掲げるが、嘉永から安政へ移る世の大地震津浪襲来と共に、開国を告げる異国軍隊の出現は長く日本人の記憶に残る事件であった。

さて、更に記録を追ってみよう。――嘉永7=安政元年6月14日夜から15日にかけての地震は伊賀地方で数百人、四日市で百五十余人の死者を出した。この時、勢州の海上(伊勢湾)に黒色飛行物体複数と火の玉複数が目撃されている。

『松阪市史・史料編一』所収「随筆耳の垢」は、「勢州相可西村三郎右衛門ヨリ来状」を収録。安政元年6月14-15の伊賀・伊勢・大和大地震の際、伊勢湾に出た舟から目撃された光景を記している。

「六月十四日二海二出シ漁舟又ハ廻船ナト為シ二海上ヨリ七八尺斗ア

ル真黒成モノ三ツ飛来ル中ニ火焰モ有之何トモシレス舟人ハオソレテ舟底ニミレ候ニ四日市ノ浜ニアカリ一ツハ煙ノ散ル如ク薄クナリ二ツハソノママ北西ニ飛ユキシカソノ後地震アリ。六月十四日四日市ヨリ乗渡リ候舟人二十五日松阪へ参リ叱シ候ニハ十四日夜八ツ時差渡凡四五間トモ覺ヘ候ウス赤ナル火玉二ツ海中ヨリ光リ出其光一塊ト成リ消ルト思フ間ニ海里共ニ震動シ浪逆立既ニ危カリシヲ漸々岸ヘ船ヲヨセ命助カリシトナリ里ノ方ニハ数万人一同ニ声ヲ発シ其恐シキ事イフ斗ナシト語レリ。六月十四日北勢長島ヨリ松阪へ用向有之五人乗ニテ小舟オシ立来リシカ四日市其辺大變ノ節沖合ニ居合右光リモノミルヤ否浪逆立震動ノ音同時ニ舟覆リ荷物弁当共海中へ打込カラキ命ヲ助リヨウヨウ桑名ヘ帰り其夜ヲ明シ兼シトナリ。」

“七尺”は約2m。“黒色物体”となれば“発光現象”ではない。それが3機編隊で飛来、その黒色飛行物体の中に“火焰もあり”とは黒く見える機体に光る小型物体あるいは部分を伴っている訳で、地震に伴う

金曜日、すなわち、われわれが日本の沿海に投錨した当日の夜半すぎに、当直司令のデューアーDuer大尉はきわめて注目すべき流星を見て、つぎのように述べている。

真夜中から午前四時まで当直をしている間に、非常に注目すべき流星が見えた。それは南と西の方角に現われ、あたり一面を照した。旗艦及び僚艦すべての円材、帆、船体が、あたかも一時に各艦から青い火が出て燃えているかのようにはつきりとその閃光を反射した。南と西の方角で、水平線上一五度のところから流星は北東方へ長いコースを一直線に走り、そして海へ向かってだんだんと落ちて消えた。それは赤いくさび形の尾をもつ大きな青い球形をしていたが、その尾は灼熱した微粒子からできており、そして火花が爆発するとき起るような火花と似ていることが容易に観察できた。

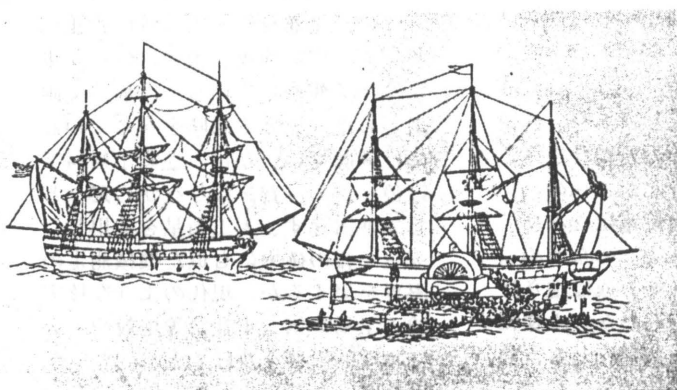
古代人ならば、天空に起ったこの注目すべき現象を、彼らが計画した事業によい結果を約束する前兆だと解釈しただろう。そして、われわれの場合は、特異で半ば野蛮な一国民を文明諸国民の家族の中に組み入れようというわれわれの当面の試みが、流血の惨事なしに成功できるようにと神に祈るものである。(以上三行、筆者ビノオは、誤ってデューアー大尉の報告文として段落を下げてあるので、訳者はこれを正した。)

紀州と食文化

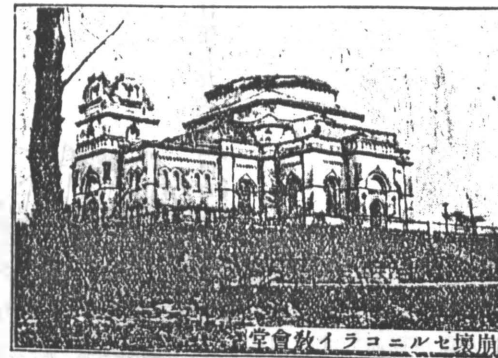
紀州漁法は戦国末期から近世初頭にかけて、諸国発展を誘因した。魚獲物の需要が急増した時期、諸国の漁民に先がけて、既に高度な各種の漁業技術をつかっていた紀州漁夫たちは、その方法秘法を自ら出向いて各地に伝えたという。太地鯨法の和田一族、鰯地引網漁法の西宮氏、手網鰯漁法の崎山氏などが知られる。史書にも「紀州の漁人來たりて業をなすもの陸續として絶えざる」とある。

我が国は古くから、多種類の水産物を消費してきており、世界でも特異な食習慣が行なわれてきた。数字をみても日本人一人当りの魚介類消費量は1975-77年の場合、アイルランドの125.0gの次で120.9gである。魚獲高は1938年、世界計21100千屯の中の3690千屯を占めていた。

日本人の食文化が漁業に負うこと大であり、食文化とは民族の生命維持に接続されるものであることを考えれば、紀州発祥の鰯節、鰯油、各種漁法といったものの価値は大きい。こうした背景の中で南部の事件をとらえてみるのも無意味ではないだろう。



ペリー日本遠征日記 原著の扉より



関東大震災に出現した光物

「上野公園に避難していた時、房州北条の方角(その付近にいた人々が北条方面だと云っていた)楕円形の光を認めた。細長い楕円形で、縦の方が長く、輪郭は鮮明でなく、焼けつつある松坂屋より大きく見えた。見ている中にその光は縦に伸び縮みして消えてしまった」地震学者武者金吉氏が早稲田中学1年生横前大陸氏より直接聴取した資料

「此時午前三時頃、駿河台ニコライ会堂の真上雲煙の間、一個の火球あり、欄として輝くこと落日の赤き程度にして周囲暗黒なるが為に燦然たり。他の火は水平に連りて落するも此の火球は更に動かず、目測するに火原よりの仰角十五度もあるべし。火球の下には更に雲煙り層ありて其下に火焰りたり。

千思万考するも其何たるかを知るに苦しむ。最初ニコライの塔上の窓硝子の火に耀くものならんかと考へしも夫にしては余りに高く如何に見積るもニコライの丘上に更に丘と塔とを置きたる程の高さなり。

つらつら考ふるに古来天災の際、神秘を説く必しも故なしとせず。もし僧侶又は教徒にして此火球を見しものあらずば、必ずや多くは天火東京を焼くと直感せしならむ。其間々たる、其真円形なる、其一個天に懸りて動かざる、誠に天火の観を備へたり。又惟ふに此火球のしかく著しきに関せず。他に見たると云うものあるを聞かざるも一奇なり。恐らくは逃避又は救護等に急にして見るも心に止まざりしものか」

「理学博士 藤原咲平氏 関東大震災調査報告(気象篇)」

※藤原博士：長野県生れ、中央气象台に入り、気象技監・中央気象台長、東大教授を兼任。(1884-1950)

発光物体出現の起因が“光のみではない物質”の飛行体、即ち現代のUFOによるものであるという根拠の一つを提出する記録である。また、14日夜の出来事は、地震発生直前の出現で、海中より2個の“火玉”が出現し、それが一つに合体。消えると共に、陸と海に地震が発生したというものである。まるで、自然界の中に地震のメカニズムに連動する自動化された火玉発射装置があるかの如くである。このような発光現象(発光物体)出現と地震発生とのタイミングの良さから、感覚的に地震に起因する未知の現象という受け取り方が定着する所以となっている。

しかしながら、事実の追求というものには厳密でなければならない。自然界に地震発生メカニズムに連動する未知の“光物発現・発射装置”があったとしたなら、雨上がりの虹、大気条件で出現する幻日・幻月、

太陽からの磁気エネルギーによるオーロラ、気圧による雲、セントエルモ火、雷雨に出現するという球雷といった自然現象にみられるような規則性など発生条件解明に手懸かりがあつて良さそうなものである。しかし、記録に見る地震前後に出現する発光飛行体は我々の科学が気象を観測するために上げるラジオゾンデやレーウィンに推進力と飛行コントロール機能を装備した未知の機械といった実体と表現した方が的確である。その出現空域や出現時にみられる地震発生との結び付きが、自動化された未知の発射装置に関係するか否かは別として、一部の発光現象はその出現に明らかな目的や意思といったものが認められるのだ。

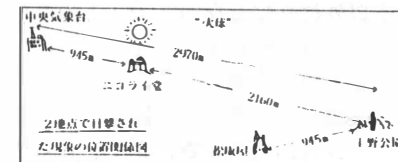
発光現象は意思の末端である。人が目標に向けて小石を投げても、見る人によっては犬が地面を蹴ったので小石が飛んできた、と受け



Upper: Devastation at Kanda; remains of Nikorai Cathedral at Surugadai in the background.



Huge crowds rushing towards Ueno Park, chased by onrushing flames.



とる場合もある。どちらが真実であるか、を見極めるには視野をもっと広げる必要があるだろう。

天遣論的文明観

過去、文明を襲った大災害は不思議な役割を示すときがあった。

大洪水、大地震、大噴火などは、しばしば慢り高ぶる人間を神が罰する手段として用いられた。

それらは、結果として見る時、そこに、“穏やかな文明の進歩”を急激なそれに変えようとする要素に対して“淘汰作用”を施したかのような“巨大な意思”を感じさせないではおられない。

関東大震災発生までの諸現象

●日本大学文理学部応用地学教室 力武常次教授の調査より

§1：太陽面に現れた異常

大正12年9月1日以前、1年以内から地震直前までに「異常に赤い太陽」「朝の赤い太陽」「熟した柿のようにどす黒い赤さで、中がどろどろしたような感じ」（地震発生数時間前東京台東区）「トマトの熟したような色に見え、歩いている人の顔が黄色く見えた」（新宿区牛込）「9月1日は朝から火の玉の様な太陽が真赤ですぐ目の前で今迄に見たことがない赤色で近くに見えた。呼吸が出来ない位、空気が暑かった」（横浜）等が見られた。空中における異変について報告した201件中、28件がこの現象を延べている。

§2：月面の異常

地震発生の一ヶ月前位から「月の光が気味の悪い程真赤」（横浜 地震発生1ヶ月前）「8月31日の月の色が真赤で血の様な色」（渋谷区）「月の色が赤黒く奇異の感じ」（墨田区）「月を仰いだ時、月が砕けて四方に飛散したやうに見えた」（地震学者武者金吉氏京都四條）などが見られた。件数は16件と太陽の異常より報告の占める割合は少ない。

§3：稲妻・雷

地震発生前は真夏の8月であり、雷雨発生は当然だが、「2～3週間前鮮やかな稲妻が何日も夜空に走った。音は聞こえなかったが写真にとれた」（品川区）「8月中に夕立でもないのに稲妻ばかりが走る日が多かったように思う」（港区）「8月31日夜り時頃からひっきりなしに、今迄に見たことのないような上下に走る稲光りが幾すじも光って、美しいのか恐ろしいのか私は見とれていた。幅は余り広くなく上下の凄いの」（横浜）というような、特異な稲妻が目撃されている。これが雷雲による稲妻か、稲妻に似た別の現象か、判定は難しい。

§ 日月の異変と災害の関連を記した文献例

■新訳聖書マタイ伝24章27節～29節

「ちょうど、いなずまが東から西にひらめき渡るように、人の子も現れるであろう。」

「しかし、その時に起る患難の後、たちまち日は暗くなり、月はその光を放つことをやめ、星は空から落ち、天体は揺り動かされるであろう。そのとき、人の子のしるしが天に現れるであろう」

■1917年5月13日～10月13日、ボルトガル・ファティマで目撃された太陽の異常
「5月13日…時は真昼、太陽は中天に輝いていた。とつぜん、強い稲妻が3人の目を射た。びっくりした子供たちは地平線に目をやった。一片の雲さえない澄み渡った青空以外になにもない。」（この直後、雲に乗る『貴婦人』が3人に現れる）

「7月13日正午、電光の閃きにつづいて、出現者、強い光の中に現れた」「太陽の光線がひどく衰え、気温が低下した」（このときの『貴婦人』との会見では、大火災の火焰につつまれる人間達の映像を見せられている）

「9月13日…まさに正午、きらきら輝いていた太陽はにわかに光を失い、あたりは一片に黄金色となった。」「純白の雲も消え去り、神秘的な綿雪も降り止み、輝く球は青空へと昇り、太陽は元どりの光輝と色彩を取り戻した」

今日普及している科学常識は、決してそういう“神話”の介入を許さないが。

だが、UFO研究者の多くは、UFO現象の不思議さを説明できない現代科学をそれほど絶対視してはいないのが普通である。

したがって、巨大な宇宙時間にとっての我々の2000年の短さを痛感しつつ、過去の神話的出来事が、いつ“復活”するかも知れないわずかな時間帯を通過中なのだ、という認識の中に生きている。

『時に世は神の前に乱れて、暴

虐が地に満ちた。神が地を見られると、それは乱れていた。すべての人が地の上でその道を乱したからである。そこで神はノアに言われた。「わたしは、すべての人を絶やそうと決心した。彼らは地を暴虐で満ちたから、わたしは彼らを地とともに滅ぼそう。…」」

この旧訳聖書『創世記』の一節は世界の誰でもが知っている“神による審判”を代表するもので、他の多くの民族の創世神話でも、これと似たテーマが溢れている。

また、天上の存在が、近々災厄

を下す印として空中に啓示する現象がある。これについては神話の時代より歴史時代に顕著である。

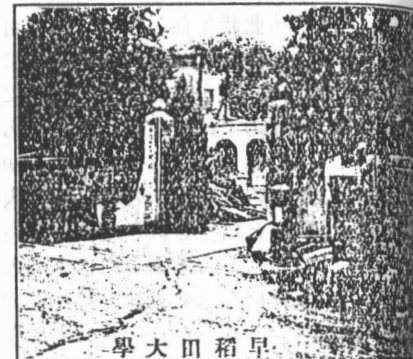
殊に古代中国文献『博物誌』や『太平御覧』などに“2つの太陽”を王朝の行く末をあらわす兆として地上の出来事と結び付けている。

日本でも「建仁2年(1202)春正月28日、兩日があらわれて地震が起こった」『鎌倉史』

「文永5年(1269)5月8日、京都と対馬で東西に二つの日輪が出たので、草木が枯れ、諸国に火災が起り社寺が焼け、世の中どうな



Manseibashi Station, and statue of L.-Col. Hirose



町田須區田神たれさ理整ゝや
View of Suda-cho, Kanda ward, Tokyo, fairly on the way to restoration.

関東大震災と日本人の心理

他国に比べ特異な心理をもつ日本人は、大正12年の巨大地震に対して独特の災害観をしめした。この災害観を何故、日本人が他国に比して異常な割合で持ち得たのか、また、今後の災害を考える上で、より規模の大きい大陸や大洋規模の変災発生を考える上で、回避できない問題になるであろうことを予測して、考察を試みた。

「天が人間を罰するために災害を起こす」という天遣論（てんけんろん）は儒教主義に基づく思想として奈良時代から存在したといわれ、原義は災害（地震）を「王道に背いた為政者に対する天の警告」であった。上天の意思に基づいて行なうべき王道すなわち公平無私、仁徳に満ちた政治がやぶられたとき、為政者は災厄をまねくことで無実の人民にえん罪をかぶせることになる。

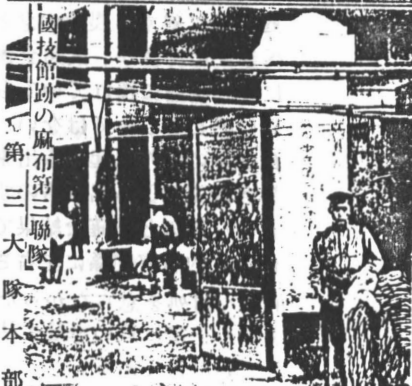
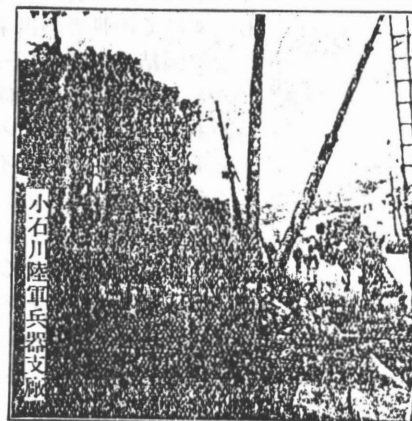
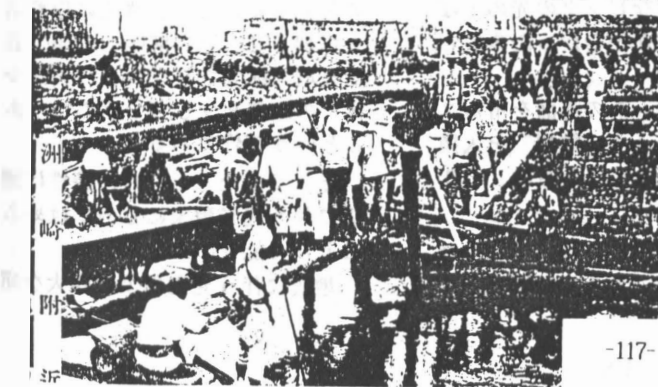
こうした思想が、関東大震災直後の日本で喧伝された。「関東大震災は腐敗墮落した社会への天罰」だという訳である。当時『英文大阪毎日新聞』の副主筆加藤直士の評論風エッセイ9月8日脱稿の中にもこう述べられている。

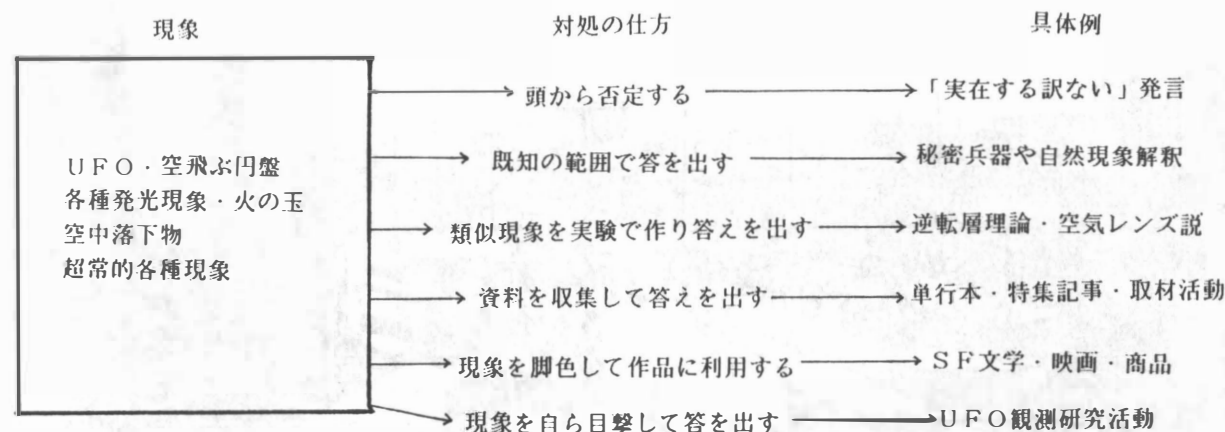
「略言すれば日本の国民生活は全然無省察な面して空虚なものになりつつあった。敢て宗教的に云ふのではないが、もし天に意ありとすれば今次の大天災は日本国民の惰眠を覚醒して自己に立還らしめる一大警告ではないと誰れが断定し得よう」

当時37才の北原白秋も『大震抄』に「天意下る」と題する7首を掲げている。

また、さらに「天が墮落した社会を改善するために災害を起こしてくれたのだ」という「天恵論」「天佑論」もみられる。災害によって邪悪を生みだす物質的要素が一掃され、新しい秩序が始まるということによるものと思われる。

参考：広井 脩著『災害と日本人』





るかおぼつかない』『日蓮上人御伝記』がみられる。

こうした国民的体質のせいか、1923(大正12年)9月1日の関東大震災においても別項に掲げたような“天が人間を罰するために災害を起こす”「天遣論」の思想が浮上した様である。

この人間心理は、数千年前のシェメールやノアの時代に共通している。われわれの日常心理を考えても、すべての世界の出来事を科学的な原因結果で割り切ってみても、ふと人智を越えた息吹を感じる時があるのではないだろうか。

チェルノブイリ禍、エイズ禍、そして脅かす様々なもの。

昔にさかのぼるほど、災害に意味をもたせる感覚の敏感な人々が多くなる。我々はこれらの知性に“迷信深い人々”のレッテルを貼りがたがる。

いずれにしても、人間の内面に超越者に対する畏敬の念ともいえるべき反応神経が、人類全体の本能に近い深層に流れていても特に奇異に感じることはない。われわれが身の回りに起こる出来事、世界各地で起こる出来事のすべてを、正確な原因と正確な結果で把握し、何ら人的利害関係に左右されない確かな対処を怠らなかつたら、今よりも正常に近い惑星生活が営まれていた筈である。

つい近年まで、我々はバラ色の未来を信じていた。科学の発達と教育の普及、情報化社会による密度の高い意思疎通などに、我々は輝かしく確実な“進歩”を見ていたつもりであった。

だが、それら進歩の産物が我々の生命体としての未来を次第に脅かし始めた。われわれが、以前か

ら“是”としてきたものが“非”であったのかも知れない、という良心的な不安感は現実にはわれわれの惑星を覆いつつある。

もし、我々の世界が、プラトンの伝えるアトランティスの如く、神罰により水没する可能性が一片でもあるのなら、過去において経験し、先人達が残した記録を基に、“人智を越えた現象”と地球災害の関係を探ってみるのも、有意義と思われる。

発光現象の特性

筆者はUFO研究者として、また30年間UFO現象を目撃し続けた者として提示したいのは、“様々に光る飛行物体や速く遅く動く整った形の雲”といった機械よりも一見自然の一部を感じさせる現象。それでいて、考えれば考えるほど知性的な現象であるUFOは、様々な「面」をもっているということである。

私は年に一度の八潮の八代湾に点燈する不知火を何度も見たが、その中でも、オレンジ色をした楕円形の光の塊が脈打ちながら分裂し、数個になって海上に一列に並び、やがて明滅や増減を始めるといふ驚くべきシーンを思い出した。に「あれは、確かにそのように計画された現象だった！」と思ひ知る。同年、熊本大学が「奇麗な不知火を見せる」といって海の上で作った巨大なピンクの光のそばには本物の火が出なかった事実も記憶に残る。

そして更に、あの海面を滑るスピードと、絶えず“隊列”を入換える動きの目まぐるしさは、“作業的”でもあった。

不知火を単に屈折現象という理論で閉じ込め、あるいは怪火とし

て文学の片隅に放置するのではなく、実際に自らの肉眼で観察し、一体何が八潮未明の海面で発生しているのかを確認する現場作業は重要な意味をもつ。つまり、現象を知識で処理するか、自らの体で対処するかという、すべての物事に共通の根本と正面から取り組むからである。

果たして、幾度も臨んだ不知火観測の実際は、先人の築いた理論や説とはかけ離れたものだった。

UFO現象も同様である。それが何であるかの諸説や、“乗員の死体”なるものの話題が作り出す“異質な生命体”による乗物仮説が先人の大勢だとすれば、筆者が過去30年間、UFOを自ら目撃しつつ到達した見解は、より“常識的”である。

つまり、総合的にみれば地球科学より進んだ知性が、地球の艦隊のごとく、訓練された要員と司令者、計画、各種装置、調査、輸送、通信、工作、観測、救出、実験、収集、などの機能をもつ各種タイプ、大型、中型、小型、超小型の飛行物体をもつ巨大組織であって、ほぼ完全に地球表面の状況や変化に対応する体制を維持しながら、一切の攻撃活動や強行接触を行わず、高度な知性を感じさせる飛行を何らかの基準によって選んだ個人や集団、都市や“状況”に、姿を見せることで、確実に理解者を増加させ、疑問解明への研究意欲を増大拡大させながら、人類全体との距離を少しずつ縮めつつあるという特性である。

そしてまた、これらの特性は地震に伴う発光現象にも当てはめることが可能なのである。

地震に伴う発光現象の膨大な研



1855年(安政2)江戸地震に新吉原日本堤にて観察せられたる発光現象

Luminous phenomena observed in the Edo (Tôkyô) Earthquake, 1855. The top of a pagoda (the left) was believed to have been bent by the light. It goes without saying, however, that the light had nothing to do with the deformed pagoda.

究で知られる武者金吉は、1932年に著わした『地震に伴う発光現象資料』の中で、発光現象を8種に分類している。以下にそれを示す。

①オーロラ状：恰も日の出および日没時の太陽光線の如く、下より上へサッと放射状に広がる漠然たる光。瞬間的な光と、長時間継続する光に分けられ、発光現象の中、全体の37%と最も多い。

②電光状：空の一部が瞬間的に光ったものだが、①との区別は難しい。全体の27%。

③線状および帯状：細かく分類すれば直線と曲線、縦、横、斜め等となる。しかし地形などの理由で、①の一部のみを観察して帯状と報告する場合もある。全体の19%。

④サーチライト状：垂直あるいは斜めにボーッとした光の帯を空中に放射するもので、瞬間的ではなく、持続性がある。この種の光は震央付近が多く、全体の9%。

⑤ラッパ状：サーチライト状の光が真上の雲を照射した場合。1%。

⑥火球状：火球が或る速度をもって移動するもので、震央から遠く離れた所では観察されない。全体の1%。

⑦雲状：多分、雲そのものが発光するのではなく、他の種類の光が雲に映ると考えられる。全体の2%。

⑧其他：7種のいずれにも属されぬものすべて。全体の4%。

以上の分類は、目撃報告者のそれぞれ限られた地理的条件、限られた視野での形状を表すもので、

仮に現象の“全体像”というものがあならば、8種のそれぞれが、全体像のどの部分を目撃したのかが突き止められる筈である。

また、地震という地殻の変動によって生み出される未知の現象ならば、それは自然現象であるから、決して“知的”な要素は皆無の筈である。

さて、武者氏の8種分類に似た分類方は海外でもみられ、日本と同じ地震国であるイタリアで『地震に際して観察せらるる発光現象の収集及び分類』と題して1910年の地震学報に掲載されたIgnazio Galliも発光現象を13種に分類。資料148例について、その出現時間が地震の前か、最中か、後かについても集計している。

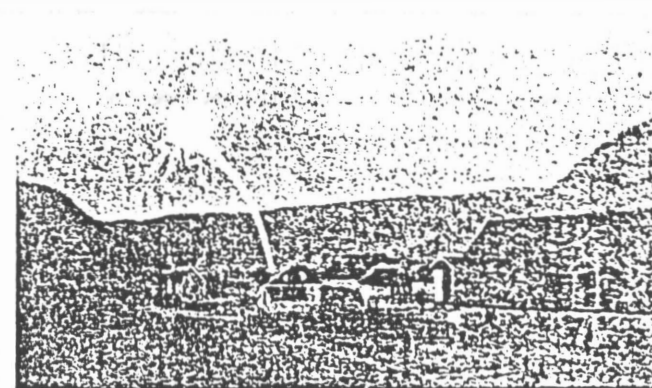
そこに見られる分類上の形状は武者氏の場合と驚く程の一致を見せ、この現象が地球規模のものであることを伺わせる。

地震と飛行物体

本書の立場は、すでに述べたように、南部における“神火事件”をUFO事件とする立場である。すなわち、“神の火”という表現で記された事実を、当時の地球外技術の接近としてとらえるという宇宙と地球の知的活動に境界を設けない立場である。

そして、UFO現象を自ら体験し続けた位置から未知の現象を考える、まったく新しい世界観でこれを書いている。

発光現象のすべてについて紹介する時間的余裕はないが、全体像



1911年11月16日獨逸エビンゲンに於てコンツェルマンの観察した発光現象(ジーベルグ地震学による)

Luminous phenomena observed at Ebingen by Konzelmann on Nov. 16, 1911. (Siberg)

■武者金吉著『地震に伴う発光現象資料』より日本とドイツの発光現象。両者とも地面からの出現である。地震とは関係がないが、ドイツでは狐火・怪火現象が1870年頃まで盛んであった。ドイツでは以後途絶えるが、これ以後の明治から大正にかけて日本の怪火が盛んになる。(角田義治氏による)

が解明されれば各種の形態の意味は次第に明らかとなるであろう。

地球の技術が製作した航空機は、近距離から見れば巨大な翼をもち爆音を発して飛行する機械として見られ、夜間遠方にあつては明滅する赤やオレンジの光点となり、超高空をにあっては本体は小さく見え白い飛行機雲だけが伸びていく。目撃者が飛行機を知らない環境に育ったなら、飛行機が目撃報告は「金属の鳥」「雷の鳥」「チカチカ光る赤い星」「棒のような雲」「柱のような雲」といったものになるだろう。

また、飛行機は目的によっては農薬、チャフ、各種電波、赤外線といった散布物や放射物を伴う場合がある。電波をもし見ることでできる生き物がいたなら、1機の飛行機で大量の電磁波が交換されている現象に驚くだろう。

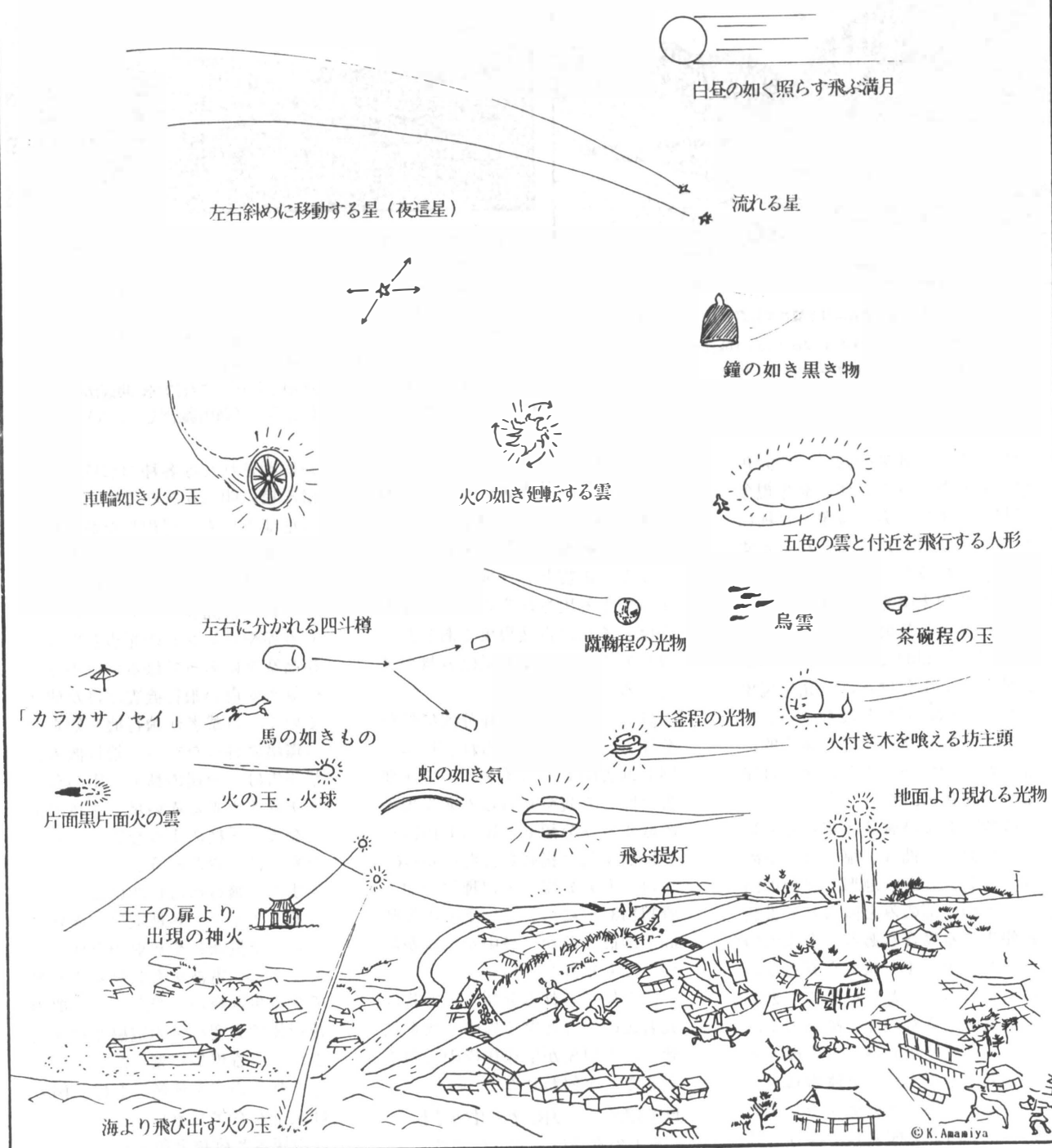
それらの“全体像”とは、例えば東京からアンカレッジへと351人の旅客と荷物を運ぶJALのマクダネルダグラスDC-10という事になる。

これがUFOとなるとケタ違いに複雑さを極める。

筆者の目撃記録にも、灰色の雲の中に青白く光る矩形の雲が移動するものとか、半透明の青い帯が夜空にススッと現れるとか、黒い棒のような雲が2本出現中、空が一瞬光るといったような、飛行物体としてのUFOとはやや違ったUFO現象がある。また例えば、漠然と雲の中が光っていて、それ

地震に伴う飛行物体表現例

★ ★ ★ 明治以前 ★ ★ ★



が瞬間的に消えても、UFOの本体を目撃した訳ではないので、記録しない場合もある。目撃体験をじかに聞いた範囲では、黒い円盤状の本体が、赤い飛行機雲のような長い尾をひいたまま空中に静止し、やがて先端の本体が消えて、赤い飛行機雲状のものがしばらく空に見えていた、という特異な例もある。

世界中のデータから抽出すれば、さらに多様なUFO現象がみられる筈である。

したがって、地震発光現象に酷似したUFO現象を列挙して関係を探るという方法がまずある。

しかし、発光現象がUFOでも説明できる、というだけでは意味が薄い。

それよりも、飛行物体としての地震発光現象を列举して、この独立した飛行物体が、自然現象なのかそれとも知的コントロールされたUFOなのかを探り、他の現象との関係をみながら、発光現象全体の意味を考える方が有益のよう

な気がする。

対地距離にみる

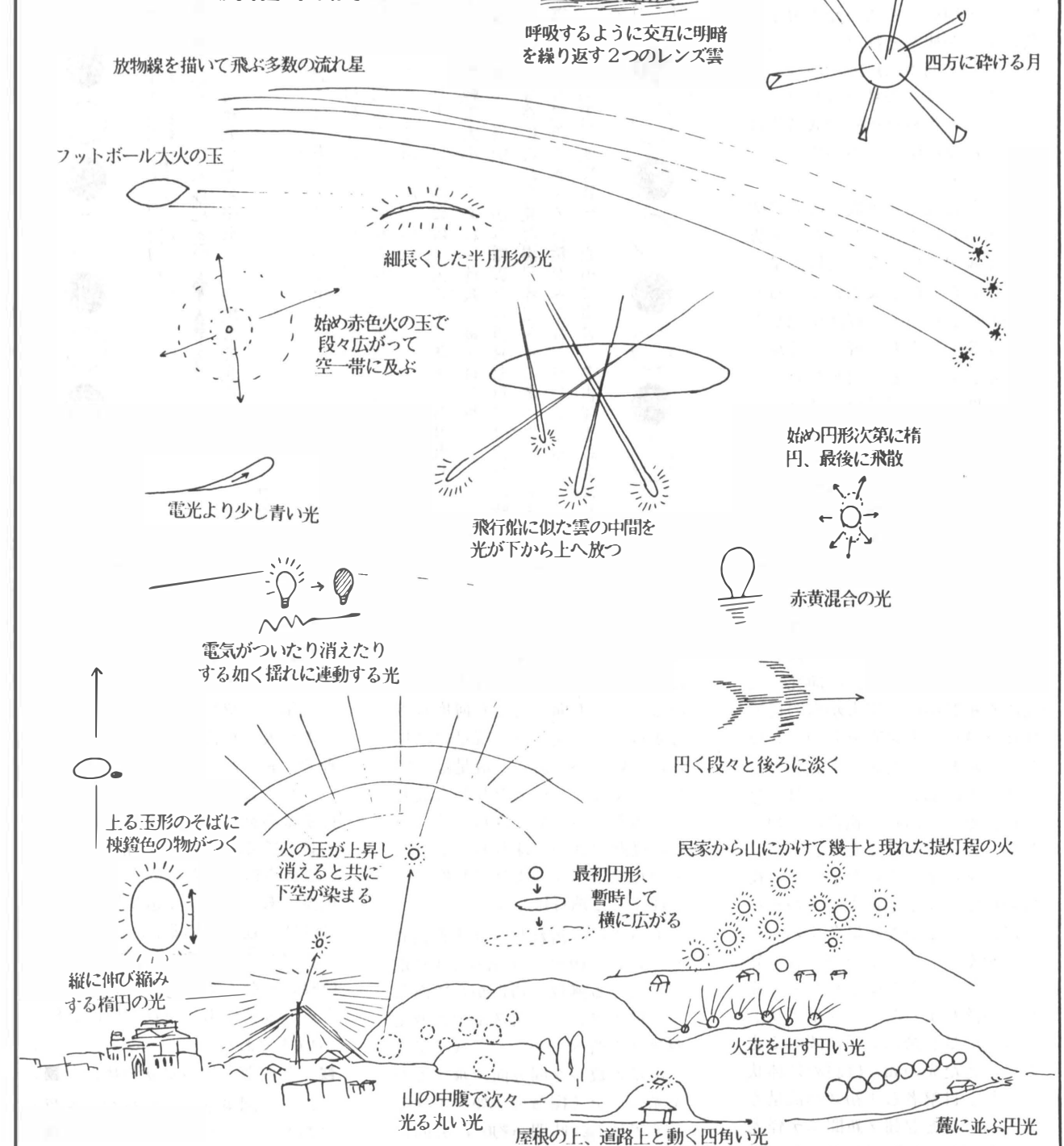
飛行体の考察

発光現象の目撃データを読むと、空における発光のなかで、特定の形を成した光物が、広い範囲の発光の原因として報告されている例が目立つ。

それらのボタンは、火球状のものあるいは円光が消滅、あるいは広がって消滅した後で、空が色に染まるとか、個体から発射された

地震に伴う飛行物体表現例

★★★明治以後★★★



サーチライト状の光によって空が
光るといったものである。

従つて、漠然とした光の原因かも知れない、独立して空を動き回る光り物を探れば、何か判るかも知れない。

そこで、図のように明治以前と以後に別け、代表的な飛行体あるいは独立した光物の表現をそのまま表してみた。

この表現を“対地距離”つまり
目撃報告から推定した現象の発生

空域を最も高空から地面までの序列を仮定して各々の内容を要約してみた。

■流れ星状■

流星というのは普通、散発的な現象である。目立って何度も何度も見られるのは、流星群の極大日以外には考えられない。

地震古記録に併記してみられる「しきりに星流れ」という表現が、たまたま地震発生と流星群極大日が重なったことによるのか、それとも星間物質を大量に引き寄せる

別の原因が地震発生と共に生じたのか、あるいは“流星”と見えたのは実は地震に伴う火球状飛行物体が超高空を何度も飛行したのを目撃したのか。

以上の3つの原因を念頭に置いて、古記録から近年までの記録をみてみよう。

「廿二日大地震以前より折々光
物白気夜半に相見へ申候所に、廿
二日の夜月の色かわり、光り物相
見へ、星流れ候事繁く」「十一月
廿一日、晴天、丑半刻（即ち地震

後)ヨリ星落飛デ曉ニ至ル」
(1703年・元禄16年関東地震)
1805年イタリアCampagnaおよび
Moliceの地震でも他の発光現象と
共に流星が観察された。

1889年(明治22)熊本地震では
地震の夜、多くの星が流れた。
これらの資料を集めた武者氏は、
地震と流星の関係について、こう
述べている。

「自分は流星と地震との間に
関係があるとは主張しないが、地震
の発光現象の中には、或は流星と
紛らはしきものも実際に存するか
も知れぬ。従って、脚注に記した
発光現象の如きも、軽々しく流星
と断定を下すことは出来ない。こ
の点に関しては尚ほ将来注意して
確かめたい」

武者氏存命中に、この問題が解
決したか否かについては不明だが、
武者氏がこの書を著わしてから15
年後、アーノルド事件に始まるU
FO事件が世界を覆い、グリーン
ファイアーボールに代表される流
星状UFOの存在も認められるよ
うになった。従って今日、武者氏
の果たせなかった地震附随発光現
象の真相究明に、宇宙からの目で
地球を見つめる視野をもつUFO
学の登場となった訳である。

武者氏の脚注は1931年11月2日
南日向地震における報告からの抜
粋で、以下の通りである。

「非常に星が飛んだ」「その夜
はわけて流星が他日より多かった
と思ふ」「星が非常に多くいくら
でも飛んだ」「流星が多く五つ見
た」「星がしきりに落ちた」「流
れ星が落ちました」「流星アリ」
「沢山の星が飛ぶ」「延岡町で北
方に見えた光の如きは斜めに棒状
をなし、目撃者も「初メハ流星カ
ト思ハレシモ翌朝ノ新聞ニテ怪光
ナリト知ル」と附記している」

筆者自身の目撃体験では、流星
群とはまったく関係のない、年に
一度の特定の夜、地平から地平へ
と天上を渡るがごとく、次々と光
物(UFO)が放物線を描いて飛行す
るのを2度(1965.6.24・25・1965
.12.31・1966.1.1)目撃したことが
ある。一見流れる星にも見えるが、
光度を変えずに長い経路を飛行す
るのと、目をこらして観察すると、
“星”と見えるのは、光が広がり
を持っていても暗いため、最も強
い部分が星の光のように淡く見え



「多聞院日記」は「当山より火多く出る」
内裏の御庭には数千の声して躍り騒ぐものがあつたので、朝見
ると異類の丸、四角などの足跡があり、院御所に首二百ばかりあ
つて数えていたうちに消えたといひ
天正十五年三月十三日の条には「天正十三年十一月廿九日より
昨日まで、浅深軽重大小こそあれ、地震、毎日毎夜也
去月は昼夜度々、当山より西へ幡雲立ち当月七日には四打の時
分に日輪五出た各造にこれを見た黒日赤日色々であつた」とある
ので、雲が出たり黒色や赤色の日輪がみられたりしている」
『天正地震誌』 飯田汲事著 名古屋出版会より

るのであって、あるものは何か形
が認められる(細長い形やクラゲ
のような形など)のである。ただ、
速度が早いので、なかなか形を確
認することが困難ではある。しか
し、同じ方向へ何度も何度も飛
行するという現象は、流星には見
られないものである。流星は、例
えばペルセウス座あたりから放射
状にあちこちと短くきらめく。中
には経路の長い火球もあるが、地
平から地平へ(つまり150度以上
の経路)と飛行はしない。

もう1件、流れ星状発光を紹介
しておく。1930年11月26日伊豆地
震における無数の報告からである。

「地震ソレト外出スルヤ天城山
西ヨリ北西へ 状ヲ呈シ
テ流星ガ数多ク同方向ニ飛ブガ如
キ光ニシテ(探海燈ノ如クイフモ
ノモアリ)、時間ハ約6.7分間位
ニシテ消エタリト…」

■動き回る星■

1889年熊本地震に流れ星の観測
があったことは先に紹介したが、
中に特殊な表現があるので別項目
としてみた。

「南方の恒星絶へず位置を変し
(俗に夜這星といふ)見々として
左右斜めに飛行するや数ふるに暇
あらず」(熊本明治震災日記)

この表現は星状のものが絶え間
なく様々な方向に飛行する様子を
表している。また、見える空域が
限定されているので、空のあちこ

奈良

黒赤の日輪五つ出る
◆◆◆天正大地震◆◆◆
「十一月十一日夜九ツ半(午前十一)の地震で光物飛んだ
大坂



ちを流星が飛ぶという状態とは異
なるものである。筆者の妻も、就
寝時横になって窓から見える限ら
れた狭い視野を、何度も何度も星
状のものが様々に飛行する現象を
1966年に目撃している。また、筆
者の知人のK氏は、やはり狭い視
野で、光体が左右絶えず交叉する、
つまり「X」の形を描くように飛
行するのを目撃した体験を1983年
に話してくれた。

これらは流星とは異なる人為的
現象であって、「夜這星」の表現
にほぼ一致している。

この程度でも目撃されれば即UFO
騒ぎとなるだろう。テレビ局に
よって金星や木星がUFOにされ
る時代である。

■“月四散”は流星状物体か?■

1923年関東地震の前夜か前々夜、
京都四条で「月が砕けて四方に飛
散したように見えたので、怒いて
顔を伏せた。暫くして見上げたら
何事もなかった。不思議がつて、
何事か起こるのではないかと云っ
ていたら、関東地震があった。」
と武者資料にある。(音楽家水口
幸麿氏談、寺田寅彦教授問書とし
て)目撃したのは料理屋の主人で、
時刻は夜半、河上の涼台で月を仰
いだときであったという。

武者氏は、この現象について、
太陽や月が何等かの原因により人
の眼に砕けるように見えるときに
実際にあるのではないかと、として

中国古記録から類似現象を紹介。
また、古記録にある「天界」「天
裂」という天空の瞬間発光の一部
は流星ではないか、と提起してい
る。

流星群が放射点を中心に見られ
るのは周知の事実だが、その一つ
一つは時間差があるのであって、
一度に放射する流星というものは
流星雨という特殊な出来事を除き、
まったく起り得ない現象であろう。
しかし、筆者は複数の星(5~6
個)が並んでサッと降下したのを
観測したことがある。(1961.8.15)
この場合は平行飛行するUFOで
ある。これがもし、一点を中心に
放射状にサッと流れたら、ちょう
ど花火が開く様子を瞬間的に見た
状態に酷似したものとなるだろう。
この放射の中心が月や太陽にあつ
たなら、背景の天体が「割れた」
と表現することも有りうる。武者
氏もこのことを指して「其の一部
は流星」記したのである。

殊に夜間、月を中心にバツと光
物が放射状に飛び出したなら、誰
でも“月が砕けた!”と表現する
のが自然である。

これをUFO学から言えば、地球
外起原の観測飛行物体が、月面
に地球観測基地を設置。自動化さ
れた緊急発進が、たまたま地球か
ら目撃されたと言えるかも知れな
い。そして、アポロ宇宙機ならば
4~5日を要する月・地球間を瞬
時に飛行して地球大気圏上層に到
達、目標地域上空を流星の如く飛
行して(星流れるの記述)更に目
標を絞り、地震発生によって放出
される将来予測の基礎資料などを
収集するために活動する事も考え
られる。とすれば、発光現象の各
種タイプもそれに関連づけて説明
できる筈である。

■鐘の如き真黒なるもの■

1885年(安政5)江戸地震には
変わった物体が飛行している。

「…天窓の上にて恐ろしき音し
ける故、何事やらんと仰ぎ見れば、
鐘の如き真黒なるもの東より西の
方へ飛行けるとか、弥助是を見る
より仰天して道を急ぎし折しも、
忽大地震発りけるが一歩も進むこ
と叶はず…」

この飛行物体はUFOの古典的
表現そのままである。同様な中空
を飛行する物体の表現を、以下に
挙げてみる。図と参照して頂き

たい。

■車輪の如き火の玉■

「大地震動して車輪の如くなる
火の玉飛違ふこと透間なし」
(1798・元禄11年土佐地震)

■大釜程の光物■

「大釜程の光物飛出申候」
(1847・弘化4年善光寺地震)

■黒い物・烏雲■

「亀井戸より深川へ荷物を積贈
りし船頭用向有て帰りに大橋辺へ
立寄り舟を出しける処、殊の外波
荒くなりける故不審に思ひける折
しも、根太板程の真黒なる物幾つ
となく空中を飛び廻りけるを見て
大いに恐れ、弥舟を早めて漕ける
処、両側の家居がたがたと音して
壊れけるが、其音大雷の落たる勢
ひなれば、初めて大地震なる事を
知りて、さては今の飛物も浪の荒
くなりたるも、全く地震のしらせ
に有りけると、初めて心付たりし
とぞ」(1855・安政2江戸地震
[時雨の袖])

「…巽の方より大風吹起るが如
き音聞えて、やがて兩岸の家震動
しける、此時同じ方より一団の大
きさ九尺余りと云烏雲虚空を渡り
しが、福山侯御下屋敷の表門に当
ると見えしが、そのうち其門倒れ
たり、其雲船頭の頭上を過り、駒
形より浅草のあたりと思しき方へ
飛去たりとぞ」(1855・安政2年
江戸地震[武江地動の記])

“烏雲”また同じ地震で楊柳島
の鰻かきが、天神橋の畔で目撃し
ている。

■廻転する火の雲■

「飯綱山の方に火の如き雲出候
間、不思議に存、見つめて居候処、
其雲くるくると廻り消るや否山鳴
致し、直に大地震なり」(1847・
弘化4年善光寺地震)

■五色雲+人形■

「俄に震動雷電して、何となく
気分悪くなりけるゆゑ、障子を明
て表を見るに、向の山に五色の雲
起り、人の形のやうなる物其辺を
飛行するやうに見えければ、大に
驚…」(1640年6月13日北海道駒
ヶ岳噴火)

この噴火では「紫の太陽」「紫
雲」も記録されている。

“人形”は五色の雲から出た小
型の飛行物体と考えられるが、地
球の宇宙飛行士のように船外活動
する搭乗者であったのかも知れな
い。

■鞠・坊主首・提灯■

“鞠”とは球体を表現する言葉
として最も適切である。われわれ
が“ボール状”“ピンポン玉のよ
うな”と表現するUFOの形状表
現と同じ感覚の眼で未知の飛行物
体を見ていたのであろう。

また、“坊主首”という変わった
表現は個性的な感じを受ける。し
かし、残酷な話でだが、現代のサ
ッカーのようなスポーツは、古代
では敵の首をボールにしたという
から、毛のない坊主頭を球体とみ
る感覚の残存なのかも知れない。

“提灯”チョウチンとは、今昔
を通じて、われわれの日常生活に
取入れられた神秘的火である。

特定の形を成して飛行、滞空す
る未知の光物、つまり漠然とした
火の塊とかでなく輪郭の明瞭な発
光体を表現するには適切である。
その形自体、現代の空飛ぶ円盤を
思わせる。

以下にそれらの実例をみてみよ
う。

「蹴鞠ほどの光り物」(1855・
安政2年江戸地震)

「友人山田文三郎は号を重山と
いふ。(中略)此日要用有て品川
宿に至り、夜に入て帰りける途中、
芝神明前を通り過る時、天窓(編
注:再三この言葉が使われるが、
屋内の出来事ではないので、屋根
を開けた窓ではなく、屋外におけ
る同一の場所、つまり現代という
“天頂”の意と思われる。古語辞
典に記載はない)の上よりグンと
引と云音響きける故、何心なくふ
りむき見れば張子の大天窓程の坊
主の首、火の付たるを喰へて、東
より西の方へ飛行しとぞ、体半身
顛はれて下の方は見えざるよし、
重山是を見て面色土の如くに成、
道を急ぎける折から例の大地動揺
しける故一歩も進むこと能はず、
二三度より倒されしが、漸にして
起上りたる故、両側の町残らず、
家根瓦を打落され、土蔵の壁をふ
るはれけるが、其音恰も大山の崩
る、が如しとの話也、此怪異は浅
草駒形辺の人々兩三人同刻に見た
りといふこと話す者あり」(1855
・安政2江戸地震[時雨の袖])

この目撃について武者氏は「坊
主の首が飛んだと云ふのは、火球
状の発光現象であろう」と記して
いる。

「提灯」の表現をみてみよう。
「寛文十二年九月廿六日此日西の刻より東をさして飛物あり、其形提灯のごとし、しかして地震二度」(1672・寛文12年江戸地震)〔巖有院殿御実記〕

「五月三日申の刻、西より東へ光物飛、其大成事挑燈之如し、落所不知、此外夜中光物は度々有之、諸人珍事と沙汰仕候」(1662,5,1・寛文2年6月16日畿内・東海東山地震翌々日)

■火の玉・光物■

地震発生時に限らず、古記録にみられる異常な飛行物の代表的表現である。従来の学説では流星の一種としての大火球や特殊流星と解釈して、それ以上の探求は成されなかった。その原因は資料を扱う研究者自身が、同一の現象を体験していないことが挙げられる。また、最近のようにプラズマ、ガス発光、地電流、空気レンズをもって様々な理論を想定する動きもみられるが、現象発生を扱う空間の範囲が、限られた谷間とか、沼の付近、あるいは墓場のそば、などではなく、まったく限定しない空間、例えば“海底も含めた地球の表面から月面までの空間”でそこにおける現象を扱うのがUFO学だと云えそうである。

大気の有無、温度差の有無、地電流の有無、生物の有無、ガスの有無、電線の有無、飛行機の有無、流星の有無、そういった特定の条件がなければ発生しない、現れないというのではなく、別の理由で現れる現象であり、つきつめれば地球技術外の人工物であると規定できるだろう。

“火の玉”の実例をみてみよう。

「又京の人の言を聞くに、大震の前夜には空一面に光り物ありて、地面よりも光り物出現し、大体昼の如なりしゆゑ人々いふかりて何なることやと云合ひしが果して翌日にかの大震なりしと」(1830・天保1年畿内地震)

「二日の夕海上へ漁獵に出たりしが、地震の前東北の方一時に明るくなり、各著たる衣服の染色模様鮮明に見え分る程也しが、やがて海底より鳴渡りて船底へ砂利を打当る様に聞えて恐ろしかりしが、又一団の火炎空中を鳴渡りしかば、弥恐ろしく成て、船を陸へ付しに、はや地震の後にて」(1855

・安政2年江戸地震)

「何やら火の玉の如きもの飛ぶを見ると云ふ」(1734・享保19年江戸地震)

「或は綿内村辺より川中島へ掛け、夜中大なる火の玉折々飛行致し候を、足輕丸山熊太郎、田村九十郎、たしかに見受け候よし」

(1847・弘化4年善光寺地震

〔信州丁未茶談〕)

「火玉南より北にとぶ」(1854

・安政1年11月5日南海道地震)

「二十六日ノ夜ハ五ツ時ヨリ四ツ時マデ、赤神山ニ於テ幾千万モ光物、万燈ノ如ク赤ク輝キケリ、見ル人何事ヤラント恐レ入テハ拝観ス」(1810・文化7年男鹿半島地震〔乾坤相克記〕

■虹・火雲など■

地震予知の民間学者椋平広吉氏の“椋平虹”は週刊誌などでも取り上げられて話題になったことがあった。地震学者力武教授は「学術的根拠なし」と否定しているが、鍵田元奈良市長の“地震雲”といい、空に現れる前兆現象に民間の関心が高まったという点は評価されてもよいのではないか、と思う。

地震発生メカニズムがプレート理論等である程度解明されてきたとはいえ、地震予知に結び付く確実な理論はない。逆に動植物の異常行動と地震発生との関係が見直され消防署員の観察対象になるなど、従来無視されがちな民間科学に光が当てられ始めた事は、我々の金科玉条とする理論体系にもまだ空白部分の多いことを教えてくれている。

確かに、天の橋立観測地でのみ椋平虹が観測され、その様子が広い範囲の地震が予知できるとは認め難い。また、細長い雲がたなびくのは筆者などよく見るが、そうした雲の一つを“地震雲”と特定するのも筆者には難しい。

だが、地震に伴う発光現象に“虹”“雲”の表現がみられる事から、それらを頭から無視することはできない。

“廻転雲”“烏雲”は既に紹介した。まず、虹の表現から……

「巳中刻頃、また巽にあたりて、虹の如くその長十丈ほどなるすぐの気たつ、山田某品川にてしたしく是を見る」(1855,10,2・安政2年江戸地震)〔時風録〕

「…二日夜、地震の時、牛込山

伏町の辺にて…南の方にて、しかも程近きあたりに、太さ俗にいふ中竹の位にて数丈の火気赤く見え鍋つるの如く曲りて折れたるを看たり…」1855(安政2)江戸地震〔武江地動の記〕

“鍋つる”形の赤気は虹の形に似ている。

次に“火雲”…これはいわゆる地震雲とは違い、全体あるいは一部、ないしは内部に発光するモノを抱えた雲であり、古くは天地激変最中の民族移動を記す旧訳聖書「出エジプト記」の最後にみられる“夜は雲の中に火があった”という表現。また、“ゴグ・マゴグ”(今日のソ連邦)の行く末を「警告」した「エゼキエル書」の冒頭に表現された“火を吹く雲”を思わせる現象である。

「甲州の絹商人何がしといへる人去十月二日中仙道熊谷宿を立て江戸へ入らんと道を急げるに……(中略)北東の方より南方にかけて、黒気の中に青光りあるもの烈風のごとくひびきわたり飛さるよと見るうちに忽動揺の音すさまじく恐怖して地上に倒さる。……此黒気は地震の前兆ならんかし、右と同容の空中を通りたるもの浅草にて見たる人有是同物かしらず」1855(安政2)江戸地震〔安政見聞誌〕

「同日七ツ半頃より出し、別而強く(中略)さて又沖島之近辺に当り、海上口真黒き雲と片面は火燃の燃る様に火と雲との気立上り、実に二タ目とは見られず、悪敷気色とも何とも可申様なく、早くも津浪に押つぶさるゝ事のみ恐れ」(1854,11,5・安政1年伊勢・九州東北部地震津浪。土佐阿波紀伊は特に地震津浪被害多大。これは土佐における記録。〔三災録〕

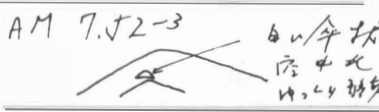
■茶碗・馬・傘・満月■

“空飛ぶ皿”や“空飛ぶ葉巻”がUFO表現の現代における代表だとすると“空飛ぶ茶碗”や“傘”前項の“釜”や“提灯”は、近世のUFO表現の代表と言えるのである。

傘の表現は仏像の傘蓋、ブッダ生誕伝説における“天の傘”など国境を越えたUFO表現と言える。

筆者も最近(1989,5,31,AM:7:52~53)出勤途中で、天理市東の山中腹よりやや上方を、純白の傘の形をした物体がゆっくりと平行に移

動しているのを見たことがある。図形的に言えば平べったい二等辺三角形である。



1989,5,31 手帳よりトレス

馬とか竜など動物が空を飛ぶという空想的とも受けとれる表現は世界的範囲で使用される“神々の飛行”を表現する道具である。

日本では津軽半島松前渡海の湊で、橘南溪が聞いた津浪の前兆談に、“神々は竜や象に乗って飛行した”という話がある。演歌にもある竜飛(タッピ)崎はこの故事のなごりだろうか。(閉み記事参照)

地震の記録にみられる異常な飛行物体を捜す作業は、同時に古典的UFOの記録を見出す作業となってくる。こうした作業は日本だけにしか通用しないのだろうか。それとも、世界の歴史における天変地異について調べれば、高い確率でUFOに類した現象と出会うのであろうか。これについては、他の稿で取り上げたい。

とにかく、記録を追ってみよう。まず“茶碗”の表現から…

「丸山辺の人なるが、屋根をめくられ雨戸を吹破られ、いかんとも詮方無ければ、濡そぼたれて座りゐたるに、南の方より大きさ茶碗程なる玉飛来り、北をさして行事三度、其の光り青く勢ひ又すさまじく何といふ事をしらず、夫より前に雷鳴たる時も彼電光頼りにほどぼしり出たれど、それとは大に異なり、下より上へ飛たりといふ、怪しむべし。」〔金屯道人安政風聞集〕

次に“馬”…

「或人云大ゆりのさいちゆう西北の空より馬のごときもの南の方へ飛行したりと、又或人は白気の南へあたりしともいふ、浅草寺の塔の九輪西のかたへいたく曲りたるを見れば実に地震のみの行為にはあらじ」1855(安政2)年江戸地震〔笠亭仙果なるの日並〕

次は“傘”…

「廿六日庚寅去夜晩鐘時分小地震、今日又午刻酉刻兩度小地震、昨日地震以後、雷鳴事非其義、鳴動時分光物飛云々、其長、カラカサノセイト云々、流星ヨ云々、同時天地震動、可恐々々、」1498

(明応7)年8月〔後法興院記〕最後に“満月”…

「一十月廿六日夜亥ノ刻過ぎ震動おびただしく、暫ク有て赤色之光り物現はれ、東ノ方より西をさして飛び、形は満月之如く白昼よりも明るく相成候二付、諸人何れも胆を潰し驚き見申候、追て承レハ諸国共同夜同様之由、誠に奇異事也き」1781(天明1)年〔天明記聞〕

お気付きのように、“樽”“馬”“茶碗”などの表現は、必ずしも物体の形状を指すとは限らない。

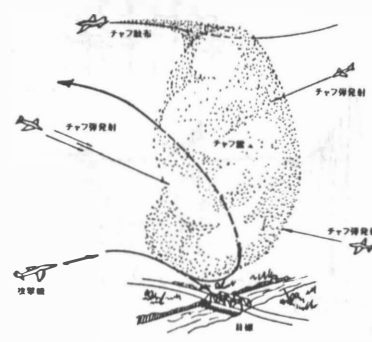
大きさを表現するのに用いた場合もあるからだ。従って、図に表したものは、目撃表現に用いられた器物の一覧である。

■火球が空を染めた現象の意味■
飛行物体としての発光現象は、まだ多数みられるが、それらは年表にまとめてみたので、他の事例についてはそちらを御覧頂くとし、次に進みたい。

地震に伴う発光現象の原因仮説としては1906年のチリ地震において「普通の電光」「人為的特殊発光」「火球、いん石」などが分類されている。

また1923年、イタリア地震学者A.Siebergは「…地震の時に発光現象の出現する事は確実である。この現象に関する古い文献によって、其れは確定していると云ってよい。ただ問題は、発光現象が地震の性質と関係があるかどうか、また、発光の出現が地震の瞬間であるかどうかである。…要するに発光現象は地震学上の“der dunkelsten Kapitel”(最も暗黒な章)だ」と述べている。

発光現象研究は古い時代ほど盛んである。というのも、顕著な発光は何故か古い時代に多く、日本でも昭和21年以後になると顕著な



立花正照著「図解電子航空戦」より

■チャップ散布の図■

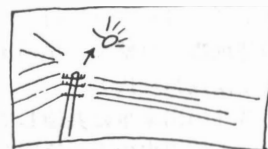
◎橘南溪の著「東遊記」に語られる津浪前兆としての飛物と塔頂乗者
「その頃風も静かに雨も□かりしが、唯何となく空の□色打くもりたるやうなりしに、夜々折々光り物して、東西に虎を飛行するものあり、斬々に其数、其四五日前に到れば、白昼にもいろいろの神々虎を飛行し給ふ、衣冠にて馬上に見ゆるものあり或は龍に乗り、雲に乗り、或は犀象のたぐひに打乗り、白き装束なるもあり、赤き青き色々の仕立にて、其姿も亦大なるもあり、小なるもあり、異相異形の仏神空中にみちみちて東西に飛行し給ふ。我々も皆外へ出て、毎日々々いと有難くおがみたり、不思議なることにて、まのあたり拝み奉ることよと四五日か程もいひくらすうちに、ある夕暮沖の方を見やりたるに、真白にして雪の山のごときもの遙に見ゆ、あれ見よ、又ふしぎなるもの、海中に出来たりといふうちに、だんだん近々寄り来りて、遠く見えし島山の上を打越して来るを見るに大浪の打来るなり。」

ものが少なくなる傾向にあるようだ。

発光が地震の規模に関係あるとしても、近年の地震が減少しつつあるという学説はない。むしろ逆に増加説が巷で目立つ昨今である。

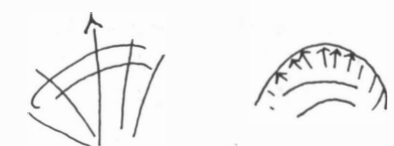
1965~1970年にかけて松代に発生した群発地震で観測された発光は数枚のカラー写真に撮影された。筆者も当時、写真を取り寄せて原因を考えてみた。木立をシルエットに山の上の空がピンク色に染まっていたのを記憶している。現在写真は手元がないが、色彩は1990年の今年、北海道で観測されたオーロラによく似ていた。思うに磁気的な発光である。

どうやら地震発生地域上空の大気の中に、地震に感応する未知の



火の玉が昇り爆発的に消えた後下の空が淡紅色になった
1931,6,17 多摩丘陵北西部地震

「円く段々と大きくなった」
1931,6,17 多摩丘陵北西部地震



図は武者著「地震に伴う発光現象資料」より
光が広がる様子を示した目撃図
1930,11,26 伊豆地震

■光の発生と広がり■

の動き方の記載が不明瞭ではあるが…」とした上で、海外における紫空、紫太陽と地震の関係、1940年駒ヶ岳噴火の紫雲を紹介している。

UFOとして見れば、ハマキ型あるいはレンズ型の発光UFOが移動し、再び元の位置付近に戻り、消失したというものである。ただし、紫という色彩はUFO現象でも極めて稀であるから、もし、紫のUFOや発光を目撃したならば、近く地震が発生するか否かを確かめる必要があるかも知れない。

武者金吉著『地震なまず』によると、1946年12月21日南海道地震における発光現象は、他の事項と共に中央気象台その他の気象官署及び水路部によって調査された。

この時の発光は火事を遠くから望むような光象も報告されたが、火の玉を見たという報告が甚だ多く、海上の発光は更に多かった。各報告をみてみよう。

●紀伊半島田辺湾の中央付近に、孤を描いて北から南へ飛ぶ光を見た人が相当に多い。(伊吹山測候所調査)

●和歌山県西牟婁郡和深村江田では、地震の直前に潮岬方向の海中から赤い火の玉が飛び出したのを見たものがあつた。(中央気象台、南海道大地震調査概報)

●紀伊沖でイカ漁をしていた漁夫の話によると、何か光ったものが天から降って来て、海中に没したと思うと、まもなく震動を感じた。(水路部、昭和21年南海道大地震報告)

●ある漁夫の話によると、紀州沖から火の玉が飛んで来て、尾鷲付近で一たん止まり、北方に飛び去った。(水路部、前掲)

報告はまだ続くが割愛して稿を進めたい。最後にみられる“一旦停止”は重要である。目撃者の位置が不明なので、空中で停止後、北へ去ったという表現に、やや方向を転じた感じもあるが不明である。とにかく、火の玉が空中で停止し、さらに飛行を続けるという状態は自然界にはなく、これはコントロールされた人工的飛行物体以外には起り得ないと考える。

■地割れ・海中から飛び出す■
“火の玉”という、外見が恰も自然界の造作を思わせる現象に、何者かによるコントロールの伴う

事実が、少しはお分り頂けたかと思う。

筆者の100件ほどのUFO目撃にしても“皿”や“円盤”ばかりではなく、頭上に迫っても輝く光の固まりにしか判別できない物体や、色彩の異常と急速な移動を除けば雲にしか思われないもの、ジグザグの光跡を示さなければプラズマの球としか感じられない物体、長い経路を除けば流れ星と識別しがたいもの、というように自然界の何かを思わせながら、突き詰めるとUFOとしか考えられないというものも少なくない。

従って、発光現象を考える場合、その外見だけで判断するのは禁物である。

地震発生時、地面から、あるいは生じた地割れの中から火の玉が飛び出したという目撃がみられる。これは一見、地震が火の玉を生み地割れから放出させたかのような印象を与える。稀に見られるという球形稲妻(球電)発生との関係も考慮すべきかも知れない。

しかし、筆者としてはUFOとの関連に執着したい。以下に挙げる2者の共通性である。

UFO目撃報告にみられる物質透過現象(建物や航空機を無視して突き抜けるUFO)と火の玉の地面出現、古くから艦船より目撃されてきた海面から出現するUFOと海中より飛び出す火の玉、この両者に同一の起原を求めるのは自然な成行きである。

「大震の前夜には空一面に光り物ありて、地面よりも光り物出現し、大体昼の如なりし…」(天保1年 畿内地震)

「…南海よりわたり二三丈斗の火の玉飛出て高知の空に落るを…」(1698, 10, 6)

「…かやうなる大地震の揺ときは陽気といふて地中より火玉の如きもの出る事あり更にこはき物になし…」(1847, 3, 24 善光寺地震) [河原綱徳 虫倉日記]

安政2(1855)年の発光体は絵にも描かれている。

(本書 ページ参照)

その新吉原日本堤にて観察された発光の記録…「志ん吉原日本堤震ひうごくこととりわけおびたゞ数、大地たちまちに裂破れ一だうの白気発す、その気なゝめに飛さり金龍山浅草寺の五重の塔なる九

輪を打まげ散じて八方へちる、その光眼を射てすさまじといふ」

[江戸大地震未代断の種]

「新吉原日本堤震ひ動くこと取分おびただ数、大地忽に裂破れ一道の白気発す、其気ななめに飛去金龍山浅草寺の五重の塔なる九輪を打曲げ散して八方へ飛散、其光り眼を射てすさまじかりしといひ伝ふ」[時雨の袖]

武者氏はこの記録について、こう注釈している。

「…若しこの記事が正確なものとすれば、自分の所謂サーチライト状の発光のやうに思はれる。五重の塔の九輪の曲ったのは、全く震動のためで、光のためではない。この時谷中天王寺の五重の塔は転落した。「なるの日並」によれば浅草寺の五重の塔の九輪は西へ曲ったと云ふ。日本堤から発した光で九輪が西に曲る筈がない。当時の民衆が科学的に無智であった証拠である。…」

しかし、失礼ながら無智であったのは武者氏の方であったかも知れない。この現象は2つの解釈を可能にしている。

まず、当時の人々が地震によって落下し、そのために曲がった九輪を、発光が曲げたと結び付けて語ったのか、落下して地面に激突してようやく曲がる頑丈な九輪が、事実転落前に地割れから発した光で西に曲がったのか、ということである。

もし、落下前に西に曲っていたのであれば、また、その原因が地割れより発した“白気”にあるのであれば、大変な事件である。

つまり、“気”という表現から我々は、ボーッとした光の筋を思い浮べる。しかし、実際は絵にも伺われるような長い尾を引く発光物体であったのかも知れない。それになるからである。

こういう記録がある…。

「天明六年(1786)三月初より相州小田原鳴動の響き有り、又六月廿八日京大坂共に満月出づ、七月初より夜陰になれば空中に鼓の声あり、十五日には江戸川々大出水也、此節大さき車輪の如き物、西北より東へ飛びゆき或は人の腕の形したる物にて、其先指の如く六本にわたる光り物飛行し、人家にゆき当たれば悉く破損し、是が為に

小日向斎藤帯刀殿長屋潰れたり…」

[天明紀聞]

にわかに信じがたいことだが、UFO的飛行物体が人家にぶつかり破損したというのである。したがって、地割れから出現した光物が、寺の九輪を曲げることがあったとしても、“曲がる筈がない”とは断定できないのである。

我々の技術水準で推し量ることは避けたいが、発射された機体のコントロールが不能になったため自爆装置が作動したとか、警告行為を含めるためにプログラムされた範囲で地上施設を損傷したとか、地球外技術にもあるのかも知れない。

いずれにしても、地面から光や物体が飛び出したのなら、それ以前の状態がどうだったか、という問題にも突き当たる。これは後述するとして、次に海中から飛び出す火の玉に酷似した、洋上のUFO記録をみてみよう。

これについては、英国のUFO研究家で考古学者でもあった故デズモンド・レスリーの著書に詳しい。

●1845, 6, 18 「3つの目くらむばかりに光った円盤が海面から上昇し、10分ほどヴィクトリア号の位置(北緯36度40分・東経13度14分)から1マイル半離れた上空を飛行していた。…」

●1887, 11, 12 「巨大な燐光をもった球状に近い円盤がケーブ・レース近くの海面から出現し、風上に向かって飛び、イギリス船シベリアン号の旁を通過して去った。5分間それを見る事が出来たが、船長は同じ場所で嘗て同様な事件に逢ったことがあると語った」

地割れという僅かなスキ間を縫って空中に到達する“飛行”は、岩などの突起、障害物に接触することなく上空に達するべくプログラムを与えた知性を無視できないし、海面下という空中と密度差の著しい場所からの出現は、自然界では海底火山爆発の噴出物以外は見られず、人工の世界では潜水艦からの水中発射ミサイルのみである。

ミサイルは敵国土に向けてプログラムされており、推力を維持して高空にまで到達する。

火の玉の目標はどこか?自然界に属するものなら、そんなものは

ない。

もし、これがUFOつまり地球外技術に所属するものならば、母機への回収があって然るべきであろう。

以下の事例は、この“母機への回収”が目撃されたものと思われる。

■飛行船雲へ向かう光■

以下は1930年11月26日伊豆地震の時、東京滝野川田端から伊豆を望んだ目撃者が、伊豆の上空に見た現象である。筆者も田端出身だが、田端の高台は本郷を見下ろすほど高いので、当時なら伊豆も見えたであろう。1944年に筆者の母親が田端駅の陸橋から筑波山を背景に空から降下したほうき星状UFOを目撃したが、筆者が物心ついた頃に筑波の方面を見ても山影はまったく見えなかった。

とにかく相当遠望のきく時代の出来事である。

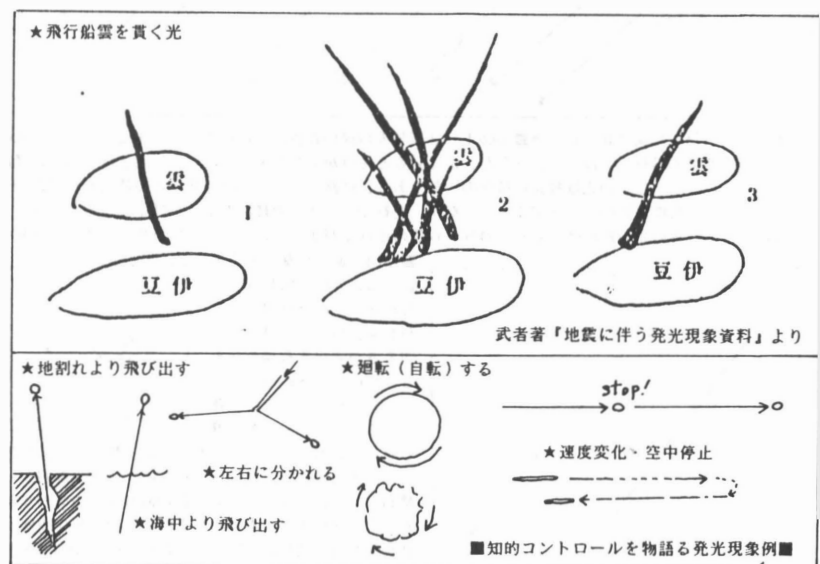
「(前略)さて而当地震を感じ、直ぐさま例の如く二階の戸を開き逃げ場所をつくりたり、若い者等と小生と四人なり、其時地震激しく真最中なり、拙者は先人より云い伝えあり、驚怖心甚しく逃支度早きために、何時も近隣の人々に笑はれるなり、震動中は暁静かなる中に四方にゴーゴー音がして居りました、空は青空に晴れ渡りて居りました、然るに図の如く伊豆半島の上空に飛行船形に雲が横はりて居りました。此外に雲なるものはなく、其の雲の中間を光が下より上へ図の如く放ちました、其の時私は若い者等に説明するに、彼の雲の下には必ず大火災がある証拠又光は船のサーチライトか電

線のスパークである、富士山の上にその様な笠雲が出た時には近き内に必ず雨となると話して床に寝込みたり、後に考へてみるに、火災の雲なれば震動前よりある理窟なし、夫れ前より横はり居たるものと見る外なく震動前よりその様な雲が横はりたる時は地震の前兆と予知して差支えなき様に思ふ、又さかんなる光は震動激しき中なり、光が棒状で左右に動かざる処を考へるとサーチライトではなく、又スパークなら広く明るくなる訳にてスパークにもあらず、とにかく図を御覧下され度候(東京市外滝ノ川町田端532 柴田清作氏の寺田教授に宛てたる通信)

問題の図をみると、氏が「下から上へ」と言う光が、飛行船の雲に集中していることが歴然としている。棒状の光だからスパークやサーチライトではない、と妥当な見解を示している。氏が今も存命中なら「それは流星が下から上に流れると仮定した現象に似ていませんか?」と質問したい。そして、飛行船型の雲については、「この雲状の物体と似ていませんか?」と言って、1957, 10, 16米国ホーロマン基地上空でエラ・フォーチュン嬢が撮影した葉巻型UFOの写真を提示してみたい。柴田氏はどう答えてくれたらうか…。

この現象をUFO現象とみれば、“震源地上空に滞空する調査船に向けて、次々とデータを持ち込む小型探査機の瞬間飛行”となる。あるいは“探査機の回収”であろうか。

葉巻型飛行物体に小型UFOが



発射される目撃は1954年フランスにおける集中出現を著したエメ・ミッシェルの著書に詳しい。筆者の知人でも葉巻型の雲状物体から次々と小型の物体が現れて一列に並んだ目撃や、小火球を発射するハマキ状UFOを目撃している者がいる。その逆である小型機の回収、収納が、地震発生時の上空で展開される出来事は今までのUFO活動の一環としての地震発光現象・発光物体・飛行物体の中に当然あって然るべきであり、やはりあった、という実感である。

空の現象が地上からの観察に適した条件で見られるのは確率の低い出来事である。UFO側が、UFOフラップのように意図的に人類に姿を見せるのではなく、地震時におけるものが人知れず展開する事を本位とするオペレーションであるとすれば、当然の事であるのかも知れない。

地面に潜る 超小型 UFO

1990, 7, 15、本稿を執筆しながら地震発生時に飛来のUFOについて、どうしても或る仮説を立てなければ説明のつかない現象について考えていた。

それは、上昇する火球や、地割れから飛び出す火球がUFOの一種だとするならば、その直前に地面に突入する目撃がないのなら、

地震発生のはるか以前から、特定の場所に“地球外装置”が設置されていなければならないのではないか？ という事である。

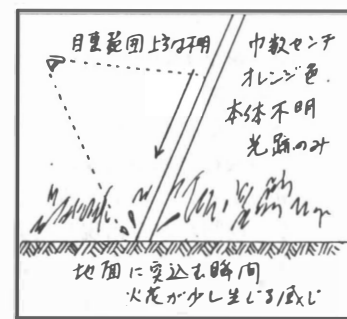
つまり、非活性状態で地下に設置され、スイッチONで始動し、セットされたプログラムが作動するような装置である。

それらはタイプによって、あるいは状況の“読み取り”によって、活動様式が別れ、地表付近でデータを採取し、役目を果たすと消滅するもの。空中に上昇して爆発しセンサー粒子を散布するもの。地表もしくは空中から“探照ビーム”を一定時間照射して消滅するもの。そのまま上昇して上空に待機する収納船に回収されるもの。という具合にあらかじめ計画された行動をとる、という仮説である。

その仮説に移行する資料調べをしていた時、脳裡に忘れかけていた過去の出来事が浮かんできた。そして、隣の妻に「地面に潜るUFOを見たことがあるか?」と聞いた。「いや、ないわ。地面の上をバウンドする球体なら目撃したことがあるけど…」と彼女は答えた。

そこで筆者は今まで誰にも話したことのなかった不思議な体験を簡単に話した。

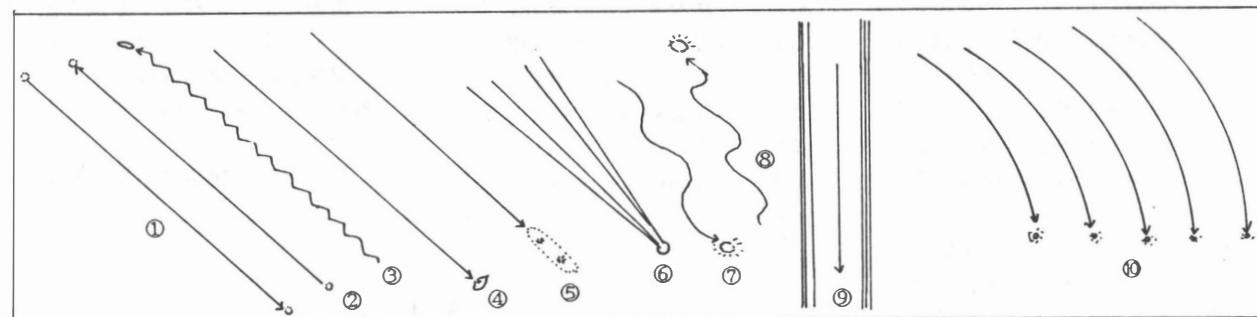
それは1964年の夏頃、筆者は当時、神奈川県保土ヶ谷のアパートに研究仲間と共に住み、近くにあ



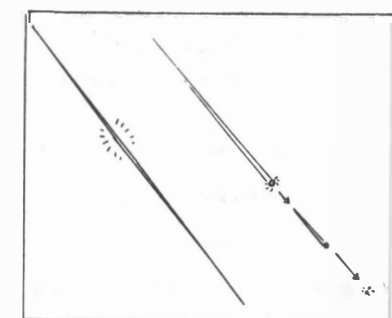
る横浜国大グラウンドの空き地に出
掛けてしばしばUFO観測を行な
っていた。

現場へ向かう際は平地から高台へ上がる道を行くのだが、草の中踏わけ道を上り切る直前、うつむき加減で歩く足元近くの地面へ、オレンジ色の細い光の筋が「プスッ」といった感じで突きささる、あるいは潜り込むのを見たのである。私は最初、何か眼の錯覚かと思っていた。もちろん、UFOと関係づけて考えたりもしなかった。

従って記録もない訳である。しかし、一度だけなら錯覚で片付けられる。それが「アッまたか…」というように、何回か(少なくとも2回)体験した。それ以後の26年間は全くその現象に出合っていない。光の幅はセンチ単位で5センチも太くはない。長さは視野一杯であるから、例えば、足元から50センチ離れた地面に斜め後方から突き刺さるとしたら90センチ程になる。その先が空まで伸びてい



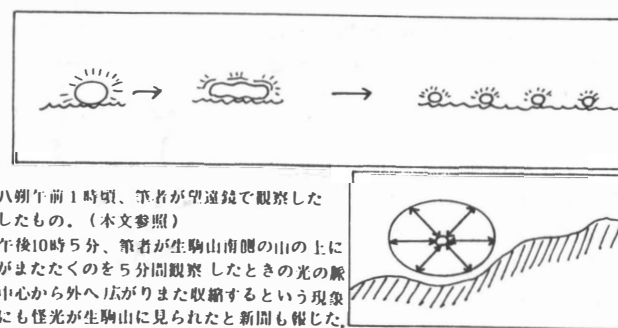
■筆者が目撃した流星状UFOの例■①Q1～2等星大の淡い青色の光が目で追える速度で飛行。②光の集束が細かいジグザグで飛行。③流星のようなが、よく見ると光点が広がりをもつ淡い光に囲まれている。経路が長い。④流星に似るが、星状の光は細長い輪郭の一部である。経路が長い。⑤火花状だが幾筋にも色彩が別れた広がる尾流を引き高度が低い。⑥アラズマ状だが、能行やジグザグの経路を示す。⑦本体は確認できないが、軌道前後または垂直の光点が降下する。⑧5～6個の光点が並んで降下する。(日誌は1960～1990年の期間)



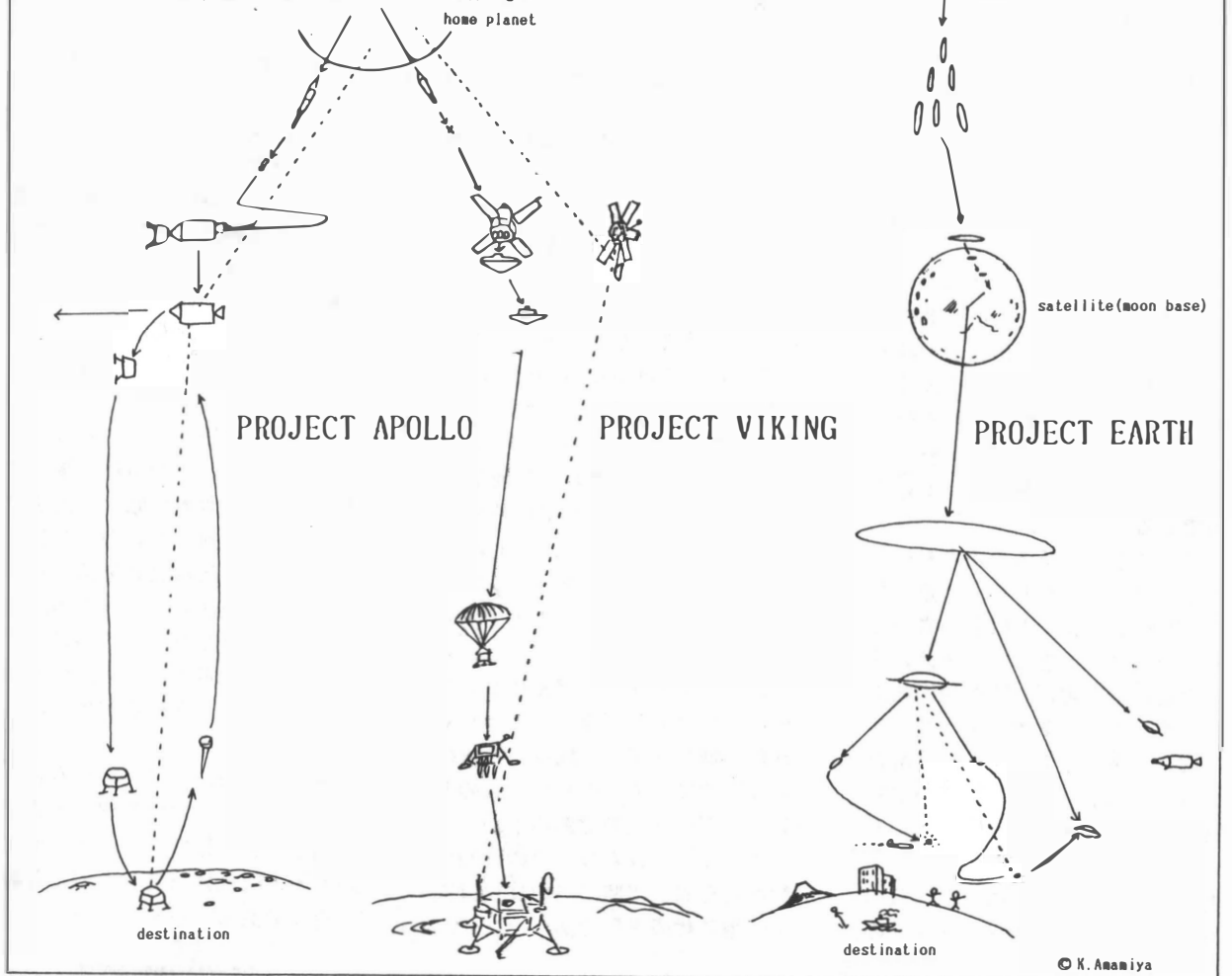
■左図：通常目撃する流星と火球。火球は痕を残すことが多い。経路は10度以下が普通。稀に途中爆発的に明るさが変化する場合がある。高度は100km~30kmの間に多く、いん石となって落下する時、低空では光を発

しない。■右上図：1963年八朔午前1時頃、筆者が望遠鏡で観察した不知火の発現シーンを図解したもの。（本文参照）

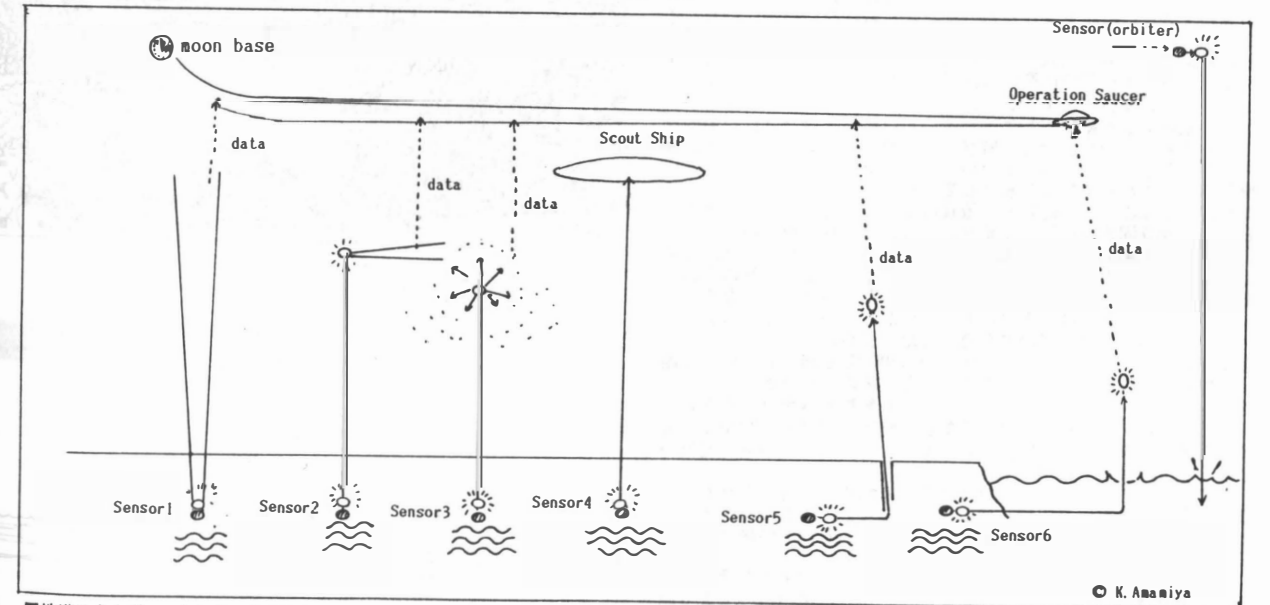
■右下図 1987年10月14日午後10時5分、筆者が生駒山南側の山の上に火事のような大きな赤い火がまたたくのを5分間観察したときの光の脈動状態と消失状態は、光の中心から外へ広がりをまた収縮するという現象であった。9月9日と14日にも怪光が生駒山に見られたと新聞も報じた。



The System of Outworld Reseach



■他天体到達システム比較。地球内技術は、多段ロケットに探査機を搭載して母星を出発、外宇宙での航行準備を経て慣性飛行し、目的天体上空で着陸準備、着陸面が切り離れて着陸。アポロでは搭乗員が船外に出て目的地にEASEP、地震計、太陽風測定航などを設置、着陸面で移動して目標を採取した。バンキングは内蔵機器にプログラムされた作業を地球からの遠隔指令で実行、成果を送信した。両者とも大量の写真資料を記録し、地球に持ち帰るが送信した。一方、地球外技術仮説としてUFOは、その大きさによって分類と目撃される各種機能から推定して、NASAのスターン5型を900基以上も収納できる容積をもつ葉型宇宙船を組んで太陽系内に接近。月面など近隣天体に基地を設置して、閉鎖タイプの機体部層を編成、地球上空に飛来して各種出現活動を展開。更に閉鎖から飛進される小型のデータ収集用とみられる飛行体を使用して、地球をまわって調査。その範囲は上空、人界、海中、地中にと及ぶことが目撃事実から考えられる。使用される自然活動、人間活動、意識活動に対応する各種センサーや、画像、音声、各種微弱エネルギーの記録装置などは、地球内技術レベルとは格段の差があると、推定される。殊に人の意識や視覚への瞬間対応は現地球科学では不可能である。



■地炭エネルギー・センサーを内包する地球外装置としての飛行体活動仮説：ロドンの地球飛来目的作業計画の一環として、地球上空の軌道上と地下に、不変性特徴の探査装置を配置、読み取り基準値の地炭エネルギーを感じ知した時点でスイッチONとなって、位置を変えず調査ビームを放射、詳しく調査ビームを放射、上昇して反応素を散布、震源付近から上昇して母機に回収、断層から上昇してデータを送信、海中を経由して上昇しデータを発信、軌道上から降下してデータ収集、と機能が別れ、それらが「地震に伴う発光現象」として地球の住民に目撃される。従って、設置されていない場所では、いかに大気層が起っても見られない。装置を使い切った場所でも補充されない限り、目撃されない。大気から放出されとみられる発光粒子の多くは、水平方向で地上に円形に仕切り、垂直方向でもドーム状を維持しながら消滅している。

るのか、上空にUFOが滞空しているのかは不明である。いつも地面に突入する瞬間の筋を見るので本体の形も不明。一応記憶を基に図にしてみた。

■地震発生前後出現の発光現象の事実から導き出される、地球外装置の考察■

地球は過去何億年の昔から多くの変動を繰り返してきた。地球という1個の天体が進化途上の場合として、神話世界の主張するように神々の管理する“庭”であるならば、管理者はチェック・ノートの空欄に向かって実務を続けている筈である。

くどくどしい筆者の論考も終わりに近付いた。かつて、ソ連の科学者M.M. アグレストは若い岩石であるテクタイトを100 万年前に地球を訪れた宇宙調査団が周回軌道に配置した探査機の大気圏突入後の成れの果てであるという見解を発表した。テクタイトの分布が独特だからである。筆者の手元にも1928年タイで発見されたテクタイトの一片がある。このガラス質の均一な黒色で無数のクレーターの

ある物体が、大昔の地球周囲に配置された観測器の溶解したものだとしたら、素晴らしいことである。

地震に伴う発光現象の顕著だった“空飛ぶ円盤開幕以前”（1946年以前）未使用の観測器が周回軌道上から、地中からいっせいに地球調査の総仕上げにとりかかったのが、これまで取り組んできた問題の真相であろうか。それらの機器により地球調査の結論が出たのだろうか。地震発生に伴う天からの火玉や地下や海中からの火玉は使い切ったために補給が必要なのか、もはやその必要はないのか…？

地球に向けて発進し、月面基地に駐在しつつ、地球上空に飛来する宇宙船団のメンバーは、地球の行く末に“宇宙の仲間”として何らかの責務を携えているのであろうか。

また、災害発生の緩衝作業の恩恵に浴す事で難を避けることができた地域と住民は、地球外技術の存在を今に伝えるべく、宇宙の要員から選ばれたのであろうか。

まさに、それらUFOの活動に触れた期間、当時の当該住民は実に“地球代表者”であった。

別枠に関連テーマを掲げるが、これらの仮説が間違っているか否かについては、宇宙からの来訪者自らが示してくれることを切に望むものである。

筆者は事実と事実をつなげて宇宙からの地球探査の一環としての、過去にあった地震に伴う発光現象の解明を試みた。そして、今まで述べた仮説は、自らのUFO目撃体験に裏付けされたものを含んでおり、“理窟と膏薬はどこにでも貼り着く”式の空理・空論では決していない。

自然災害に密着したUFOは、1947年のアーノルド事件以後、言葉を変えれば世界大戦後、次第に軍事的危機に対する作戦へと移っていく。これは核兵器をふりかざして世界を威圧したすべての国家、それらを支援したすべての集団、そして平和を追求し、人間の本当の姿とは何かを求めるすべての人々の問題である。

情報化社会がUFOを語る舌を持たなくとも、地球を取り巻く宇宙環境に変化はないだろう。変化があるとすれば、良くも悪くも我々自身である。

神話時代と近代の“火の柱”

時を超えた海水コントロール

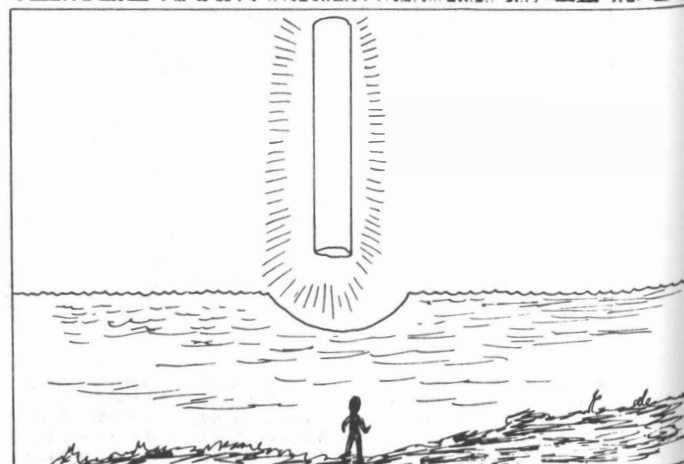
1957年制作の米映画、『十戒』を観た方なら、主人公モーゼ率いるイスラエルの集団が、紅海を渡りエジプトの軍勢に追いつめられ、せつなく苦役からの脱出を果たしたのも束の間、全軍皆殺しの危機が迫った時のシーンを覚えておられると思う。この時、モーゼは口々に詰め寄る同胞や、迫る軍勢を前に泰然として言い放つ「数々の奇蹟を見ながら、まだ信じられないのか、いまこそ神の救いを見よ」…すると、火の柱が両軍の間に立ち、天より黒雲がわき、それが海に突入したかと思えるや、海面がわき立ち、たちまちにして海がまっ二つに裂け、海底に道をつくったのであった…。

これは旧約聖書「出エジプト記」をセシル・B・デミル監督が、聖書の記述に忠実に制作しようと苦心した結果生みだされた劇的な場面である。しかし、デミル監督にも研究不足があった。「水は彼らの右と左にかきとった」という記述をデミル監督は、見えない壁にせき止められ逆巻く海水として描いたが、「出エジプト記」15章8節の歌はこう記している「流れは堤となつて立ち、大波は海のものに凝り固まった」…つまり、左右に分かれた海水の“垣”は、“海の中で凝結した”と表現しているのである。これを地球内技術で言う“瞬間冷凍”であろうか。もし、それをこの紅海の奇蹟にあてはめるとしたら、左右は氷の垣と化したということになる。

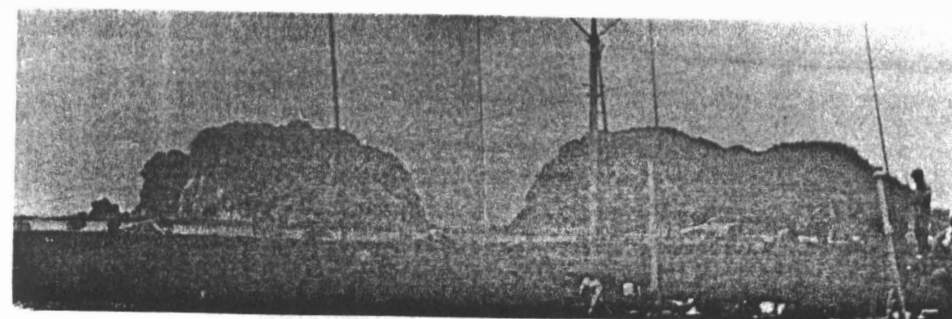
この古代の出来事は、実際にあったのかどうかの問題から意見が分かれるが、この奇蹟の力を発動したと語られる“火の柱”が、奇蹟があったとされるBC. 1200 年代から3000年を経過して尚、実際に目撃され、しかも、火柱が海上に立ち、その下の海面が「えぐれていた」となれば、出エジプトの火の柱を無視する事はできない。時は1946年（昭和21）12月21日午前4時20、瀬野沖合2.30哩の海底を震源とする南海道地震においてである。地震発生の夜、紀伊沖には火の玉の目撃が相次いでいる。

和歌山県格の老人は、午前3時過ぎに起床して海上を見ると、はじめ白浜沖、次いで周参見沖に火柱が立ち、その下の水がえぐれたように見えた。皿のように凹んでいたのである。その後地震が起きた。（水路部、昭和21年南海道地震報告）

また、神火出現の地、鹿島でもまたしても火玉の来訪を受けている。目撃者は皆瀬の前田常吉氏。「…」主常吉は植田橋の上より鹿島の沖合を眺めおりに地震から約半時間ばかり経過したとおぼしき頃鹿島西南の沖合の空真黒に曇り其中から白き大きな不思議の火の玉現れ、暫くすると沖合に物凄い大砲の様な地鳴りし、暫くし高き一丈余りの高浪が…」『植田史』の著者浜野大古氏もこれを目撃。「宝永、安政の鹿島の神霊と呼ばれたのは之であろうと云うのであろう。」と記している。



上は映画『十戒』の紅海分裂シーン。下は1946年紀伊沖での火柱と海面の異変を記述に倣って絵にしたもの。

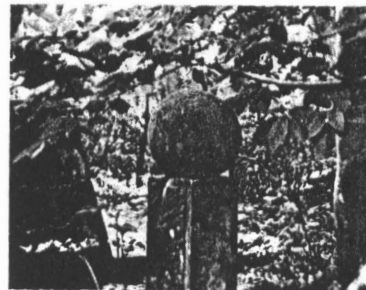


紀伊南部……神火に救われた町を歩く

“鞠の如き光物”は時を経て“赤い玉石”の伝説に変わった

1989年5月2日夜、35mmカメラ、8mmビデオカメラそれぞれ一式をショルバーバック一つにまとめ、筆者は妻ユキと南部へ向けて天理を出発した。“神火（白球）が津浪を分けた”という記録を25年程前に武者金吉著『地震に伴う発光現象資料』で見つけ、この記録について何人かのUFO研究仲間と意見を交換、作図やイラスト類も制作、現地へ訪れようと試みたが果たせず、後天理に移り住んでようやく機会が巡ってきた訳であった。

天王寺からの最終電車で3日午前1:28分、南部駅に着き、深夜の南部町を歩く。上空は曇り、1等星が2、3個天頂付近に輝く。南部湾を取り巻く堤防を見て、津浪を受ける町にきた実感を得る。暗い海上にうっすらと輪郭が浮かぶ鹿島をながめる。駅前に戻り、バス待合室のベンチで仮眠。かなり寒い。朝を迎えた我々は、まず猪野山に登ってみることにした。宝永、安政当時の人々が難を逃れる最中“神火”を目撃した場所である猪野山は、南部駅から見えた、小高い丘といった感じだ。清閑の行き届いたラセン状の舗装道を上ると、頂上の貯水タンクが見えた。このタンクの位置が猪野山山頂であることはUFO研究者M氏よりの資料で確認していた。鹿島はそれより一段下がった道の途中からよく見えた。その位置から南部湾は視野60度の範囲に展開する。鹿島両島の全巾



鹿島の玉石。南部伝説では、安政の大地震の時、大波の上に、一つの赤い玉石が浮かんで、其の玉石が鹿島の竜の口に入ったと伝えている。



海中から出現と刻まれている丸石



神火出現を記した碑

は9度。南に南部川、そして垂直に近く山がせり上がる。その付近が「川口八王子の半腹にかかりて守護」した神火滞空の位置だろうか。

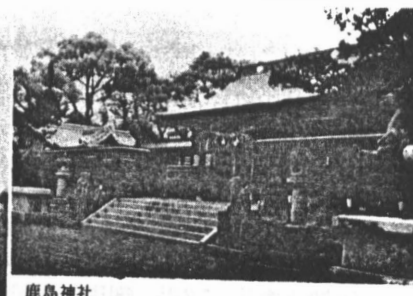
次に、我々は鹿島神社を訪れた。石鳥居をくぐると境内は広い。本殿手前に「花火祭の起源と沿革」と題して神火出現の出来事を記した掲示板があった。「…鹿島の御山から怪火が現れてさしも猛り狂うて押し寄せる高浪を西と東の二つに導いて南部の浦浪静かにやがて神火は御山掃り鎮まりました事は全く鹿島明神…」と神火を遣わした全国鹿島の祭神建御雷神の霊験を説いている。

毎年5月3日は鹿島神社の「明神祭」である。我々の現地訪問もそれに合わせた。この日は鹿島までの渡船が何度も復発する。初渡船時刻が9時となっていたので、我々は河口の山腹にかかって海上を守護したという神火が出現した史蹟八王子へと向かうことにした。地図上では往復7キロであったが、南部川まで歩いてドッと疲れを感じ靴底にも穴が空いたので、行くのを断念して船着き場へ戻った。9時過ぎ、鹿島の神職と共に漁船で鹿島へ渡る。島はほとんど平地がなく、船着き場からすぐ急な石段を登る。神火が入ったという「竜の口」近くで「大正十一年二月海中より出現」と刻まれた石碑の上に丸石が載っていた。丸石は、尾崎光之助著の伝説にある。「安政の大地震の時、南部の沖合に大津浪がおこった。その時山のような大波の上に一つの玉石が浮かんだ。玉石は波に乗ってくると、鹿島の沖合にある竜の口という大洞穴に入ったので大波は鹿島の所から二つにわかれ、一つは田辺の方にむかい、一つは南部川に近い山内や佐佐木の方へ寄せていった…」

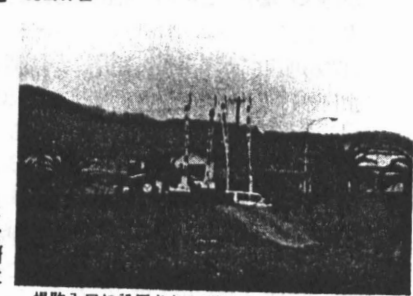


神火出現の出来事を記した掲示板
■右上：武者金吉編『日本地震史料』より南部の部分

※本稿に当たっては古文書写本を南部町鹿島神社宮司堅田知一郎氏より、貴重本武者金吉著『地震に伴う発光現象資料』『地震なまず』の複製をUFO研究者M氏より、それぞれ御提供頂きました。厚く御礼申し上げます。



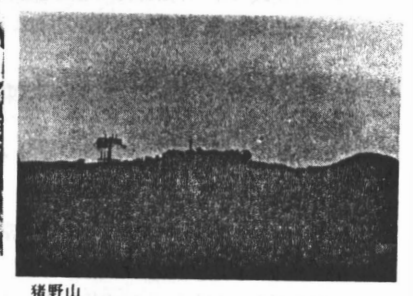
鹿島神社



堤防入口に設置された明神祭受付



猪野山から見た鹿島



猪野山



鹿島竜の口付近

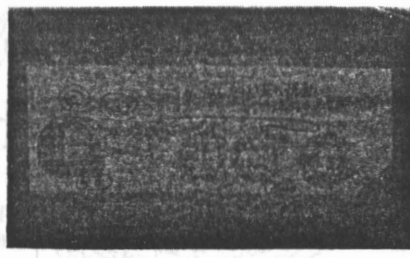
は消野あたりの上空で見え、45度の角度で地震のあった時、
(1~2)発生し、雲のため中断されていた。
目撃者：吉村氏



■1981年8月17日撮影カメラによる不知火の映像



■同じく、不知火と光のビームの映像



■火の中の高い煙の移動で、火の燃焼を示す映像のスケッチ

1982年9月17日（八朔）未明 不知海で撮影の光跡 1981, 8, 29 TV局撮影の不知火との比較

■1981年八朔のTV放映■

1981年9月21日夜、読売テレビ「11PM」は「現地取材特報謎の怪光“不知火”に挑戦!! ついに暗視カメラがとらえた怪現象」と題し、同年8月29日八朔に不知火海でVTR撮影に成功した模様を紹介した。

当日の現地は大雨で、現地の教育関係者は「最悪の条件であり、不知火の出現は望めない」と語っていた。何故ならば、現地学者の理論では、不知火とは日中照らされた干潟にできる“空気の断層”によって発生する光学現象であり、その条件が満たされなければ出ないし、また条件さえそろえば、何も八朔の日でなくとも出る、というものであったからである。

ところが、事実上“出ない筈”が見事に出現し、条件の良かった翌日は全く出現しなかった。

STV暗視カメラによって、キャッチされた映像は多くの視聴者の知るところとなったが、その分析については詳しい説明がないようである。

その不知火VTRによると、肉眼では単に明滅あるいは数の増減を繰り返す光点が、複数（通常2個）が同じ様な光跡で、上下左右にクネクネと細かい曲線を描く動きを見せるものであった。この映像が本当に不知火の活動をキャッチしたものであるとするならば、筆者がこの翌年の八朔に撮影した謎の光跡とよく似ているといえる。

放映された映像から録画したVTRをカメラで15秒露出して光跡にしてみると、両者の共通性がより明確になる。

能行する複数の光は、赤、オレンジの鮮やかな色彩を見せ、その動きは意思をもつ生き物のようでもある。テレビの司会者大橋巨泉

氏は「これは知らない人が見たら人魂かUFOですね」と今回の取材担当ディレクターの矢追純一氏に述べていた。

■1982年八朔に臨み、海上と上空に謎の光跡を撮影■

観測地点は不知火海を東に見る雄和島（千歳歳々島）の海岸で、海水浴場になっている。海を一望すると、大島と陸を結ぶ橋の灯が点々とつらなる。正面に三つ島、左手に大島を望む。観測陣は18名。

16日午後10時過ぎ雨がバラつき、カメラ機材の砲列を引上げてテントや車の中で休息。午後11時50分、雨がやんだのでカメラ類をセットし直す。

17日0時47分、左手海上に点滅する人工燈火が3つ出現。位置を変えず交互に点滅を繰り返す。観光客向けの人工不知火か？ 目的は不明だが、明らかに不知火出現時刻に合わせた作偽的なものである。本物の不知火を何回も観測した者として、この事態は異様に映った。

0時57分、再び雨が降り出す。しかし、不知火出現の時刻であり、傘をさして観測、撮影を開始した。対岸の燈火と海上に異常な程動き回る漁船あるいはモーターボートなどの光のため、確認が難しい。

1時13分雨が止む。1時57分、モーターボートかヘリコプターのような音が松合方向より聞こえてくる。2時00分、モーターボートが横切る。かなり速い。

2時35分、飛込み台右海上に数が増えたり減ったりする光を観測。

2時45分、観測陣から海上に向けて、何かの飛行、ないし落下を2名が目撃。虫か、虫があんなに大きいのか、といった会話がなされるが未確認。

3時00分、雨強くなり、退避行動する者あり。3時53分、上空を横切る光を1名が目撃するも他の目撃者なし。

3時55分、風強まる。

4時01分、記念撮影準備のため各自集合。この時、大島のリバーサル用カメラのみ整列した人物の上空を狙う角度でカメラを設置。開放を開始する。4時20分に記念撮影終了。開放したカメラのシャッターを閉じる。

4時24分、オレンジ色の明るい2つの光が移動。2つが重なると左右に別れたので全員注目。しかし、2名が双眼鏡で観察した結果「漁船の火らしい」と判断。

この日の観測では不知火と断定できる現象は確認できなかったが、撮影した写真の中に異常な光跡が写し込まれていた。

この光跡の原因となったのが何なのか、数年間様々な可能性を考えてきたが、その考察の推移を簡単に述べてみる。

■撮影時の状況

写真Aは1982.9.17AM.2:35~2:50頃、2名が海面に向かって落下する白っぽいもの（虫かどうかは不明）を目撃していた頃に当る。

写真Bは1982.9.17AM4:00~4:20までの記念撮影の間、空に向けてカメラをセットし開放した間に写ったもの。海面の無い唯一の一枚である。

■カメラブレの可能性について 固定した複数の光源、星や夜景を長時間露光中、カメラに触れたりして、光源から細い光跡が同じ軌跡を描いて写り込むことがある。

これらはカメラ側が動いて生じた映像なので、すべての動きが同一である。しかし、A Bのみにみられる複雑な光跡は、一見同一の軌跡を描く複数の光源に見えるが、

これをトレースして重ねてみると似ている部分とまったく異なる部分に別れ、似ている部分も同一の軌跡ではないことが判った。

A、Bはリバーサルフィルムにキャッチされたもので、Cはネガカラーである。

Cもやはり、極めてよく似た軌跡がズレた形で写っている。これら3枚に共通しているのは、光跡を生じさせている光源として、4つの独立した光体が認められることである。最初に家族でこのスライドをスクリーンに映して見た時、Bを見た娘が「数字が見える！」と叫んだ。確かに「500」と読める光跡がほぼ中央に並んでいる。

次に特徴的なのは色彩である。いずれも4つの光は赤一つ、黄色4つが目立つ。そして、その4つとはまったく別の動きをみせるグリーン光がある。

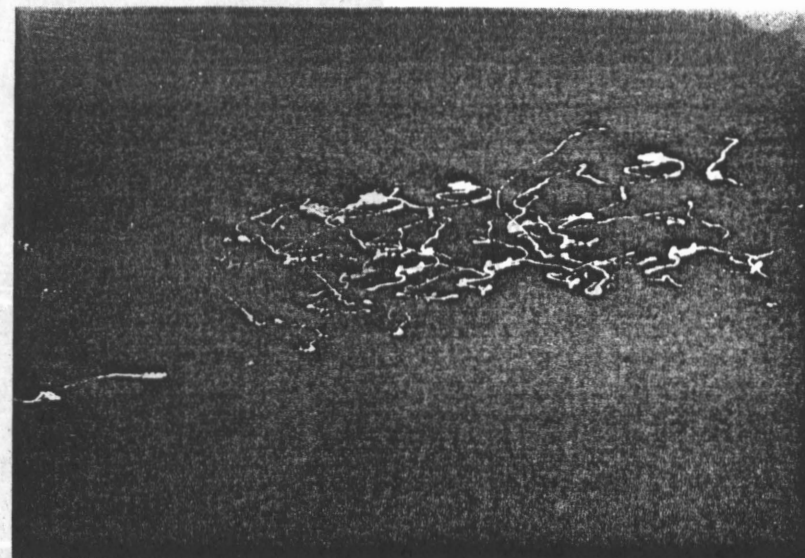
更に、それらの光跡には強弱があり、弱い光の部分は点の連結状態で構成されている。光跡は滑らかな曲線で描かれており、カメラに加わった自然的な力などによって発生したブレや、故障、現像上のトラブルといったものよりも、人為的な原因に近い印象を受ける。また、人の手で、カメラを動かしてこのような光跡を作ることとは不可能と言える程繊細な動きである。

これらのことから、複数の、特に4つの光体を「主体」とした光体が地上を離れ、空中、海面上の空間を似たような軌跡を描いて飛行し、それが肉眼に見えず、フィルム（リバーサルとネガ）に感光した、とはほぼ断定して良いのではないだろうか。

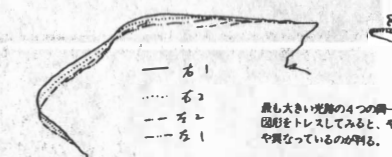
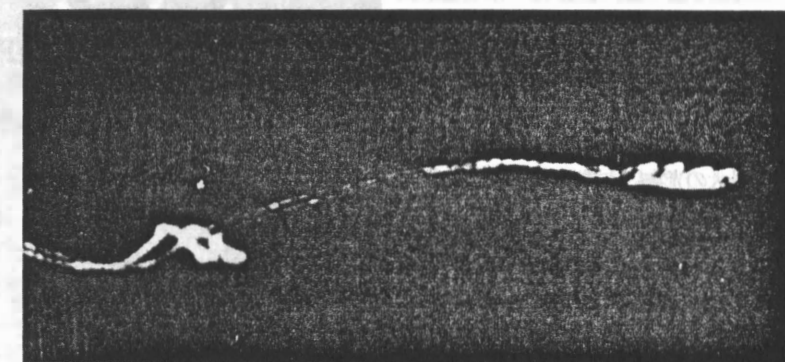
■筆者の不知火観測史■

筆者が初めてこの現象を観測したのは1962年の八朔である。当時高校生でUFO研究団体の観測隊員の一人として、天体望遠鏡、双眼鏡、カメラを用いて八代市高島より観測した。高島班は4名。縄

【写真B】



ASMK00リバーサルフィルム(利用アサヒペンタックスSP)にて、1982年9月17日午前4時00分~4時20分まで、記念撮影の人物群の上空仰角30度付近を狙って撮影。この時写っていた映像である。フィルムには露も写っているがブレてはいない。色彩はオレンジ、黄色、青白色、赤。下は左端の拡大で、光の強弱または点滅の状況がみられる。



で囲った3m四方の場所に、組立テーブル、望遠鏡、カメラを設置。地元の人々の言葉に耳を傾けながら、それが白熱電球の色彩で、単独の光源が海上に並ぶというイメージを得て、その出現を待った。午前1時すぎ、「あれがそうだ」と教えられて肉眼で観察。確かに電球を並べたような光が明滅した

り移動したり、スッと消えたり、あるいはたちまち数を増して並ぶのが確認された。望遠鏡を向けると、やや白味がかかった色彩で、相当遠方にあるように見え、面積をもった丸か、ダイヤモンドの粒のように見えた。驚いたのはスーッと消らかに動く有様である。船の燈火ではない。ある時はそのオレンジの光の上に、青白く雲の塊のようなものが見られた。私はそればかり観察していたが、時折、他の隊員から歓声が上がった。上空を流星のような光が飛行したのであった。



■光跡を形成する光源は左端に2個、全面に4個あり、計6個。複雑な動きはカメラを動かしたりしてできるものではない。

■1963年「親火」を見る

この年も観測地点は高島であった。隊員は4名。望遠鏡は光学器械メーカーの協賛により優秀なものが筆者に借与された。午前1時。私は海面に向けてセットした望遠鏡の視野に意識を集中していた。その時である。突然、視野にオレンジ色の光の閃きが入った。モヤを通して火を見ている感じで、大きくなったり小さくなったり「脈動」していた。すると、それが平らに横に広がりはじめたと思ったら、幾つかの光点となって一列に並んだのである。この時の状況は今でもハッキリと思い出せる。これが不知火の開始であったらしい。また、今でも強く目に焼きついている不知火の独特の動きは、波打つようにクネクネと左右に移動したことである。

■磁針の半回転を確認 1970年観測

この年は八代対岸の島、千束蔵々島であった。現地到着は豪雨の中で上陸。付近の民家で休息の後、高台へ登り陣を設営した。隊員は若い男性3人を含む5名。私は何かの用事で単身山を下ったが、真暗な道を急ぐ際、木立スレスレと思われる低空を紫色のボンヤリした発光体がカーブを描いて飛行するのに出合った。何か上空で作業するUFOの姿を垣間見た思いであった。

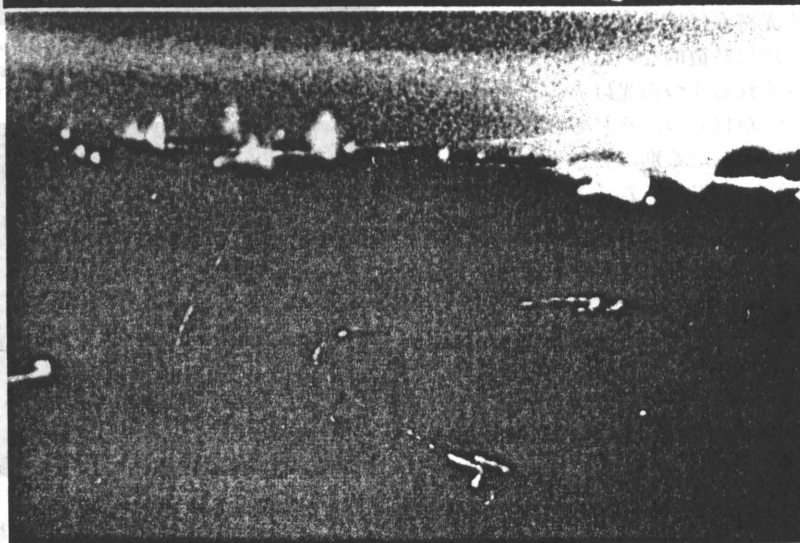
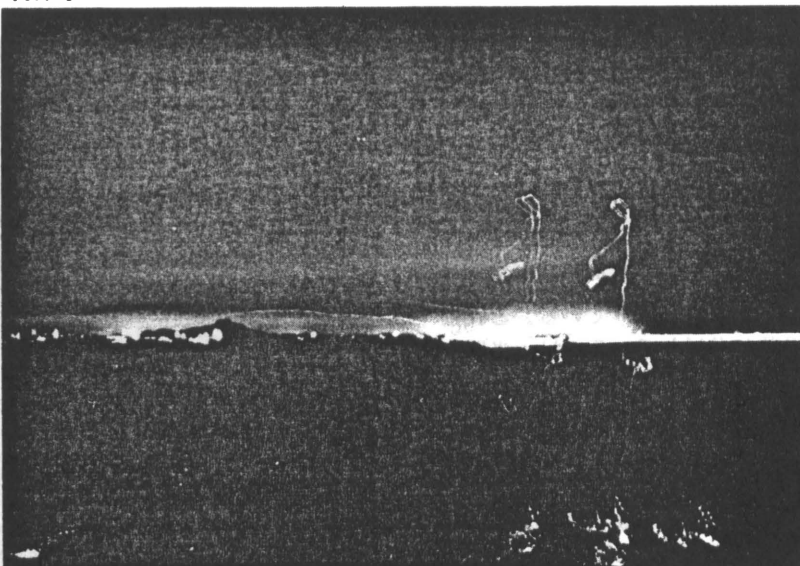
この夜は午前1時を過ぎても、それとハッキリ分かる光が現れず、未確認の明滅する光や上空で出没する満月大の光物に注意を奪われていた。そんな時である。露出した岩の上に置いてある方位磁石の針が不思議な動きを見せ始めていたのだ。それは、ガラスで密閉された径5センチ程の容器の中に、あたかも未知の「風」が吹き込むかのように、針がフワッフワッと左右に半回転しているのである。隊員たちはこの現象に歓声を上げた。

■上空を多彩なUFOが乱舞 1984年観測

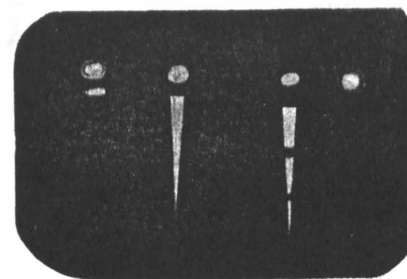
1982年については前述したが、この頃、筆者は天理に移り、この年の八朔は家族3人で千束蔵々島に渡って観測した。

近年、昔のように顕著な不知火が出現しなくなり、地元は貴重な観光の目玉が奪れていくことから人為的な仕掛けを海上に設置し、そのために真性不知火はますます遠い存在となった。不知火は燈火の屈折、という立場からすれば光源を様々工夫することで火が見られると考えての事である。

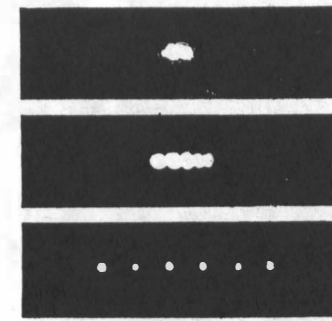
やはりこの年も、あの20年前のような光景は見られなかった。だが、暗れた夜空を彩る様々な光り物が我々の注意を引き付けた。不知火海の低空を、着陸体勢の飛行機の如くカーブを描く光体、すぐ近くをフワッフワッと波打って飛ぶ月程の火球、円盤から小UFOが発射される光景など、様々であった。



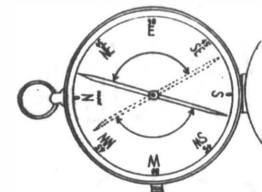
ASM400リバーサル使用。1982年八朔午前2時35分～2時50分頃の観測。カメラから至近距離と考えられるが肉眼では何の光景も確認できなかったのは写真Bと同様である。そして、左端の別行動白色が2個、右側のオレンジ色が4個の計6個の光源が動いている様である。



■1962年八朔。初めての不知火観測に参加した際、望遠鏡で観測した不知火の主なタイプを絵にしたもの。



■1963年八朔で、一つの脈動する光が分裂し、海上に並ぶ光景を望遠鏡により観測した。親火とみられる。



■1970年八朔における観測では、岩の上に置いたコンパスの針が、未知の風に吹かれるように右に左に暴れ動くのを確認した。

不知火海……

明滅、分裂、移動を繰り返す不知火（1962年観測）

1個の火が分裂して海上に並ぶ（1963年観測）

磁石の針が激しく動く（1970年観測）

至近距離で謎の光跡を撮影（1982年観測）

上空を多彩なUFOが乱舞（1984年観測）

……不知火海では確かに何かが起こっている！！

■不知火とUFO

およそ1800年の間、年に一度の八朔に出現する神秘の火は、実際に観測した者のみが語る資格を持つものと言える。筆者はそうした無数の証人の一人であり、UFO目撃証人を兼ねている。

20年以上、この現象を観察し撮影した者として、何ら偏見なく確認した事実をもとに意見を述べるとしたら、今言える

ことは次のような事柄である。

■地球環境の変化、気象条件に左右されず、決った日に出現するのは、知的存在により発現されるものである。

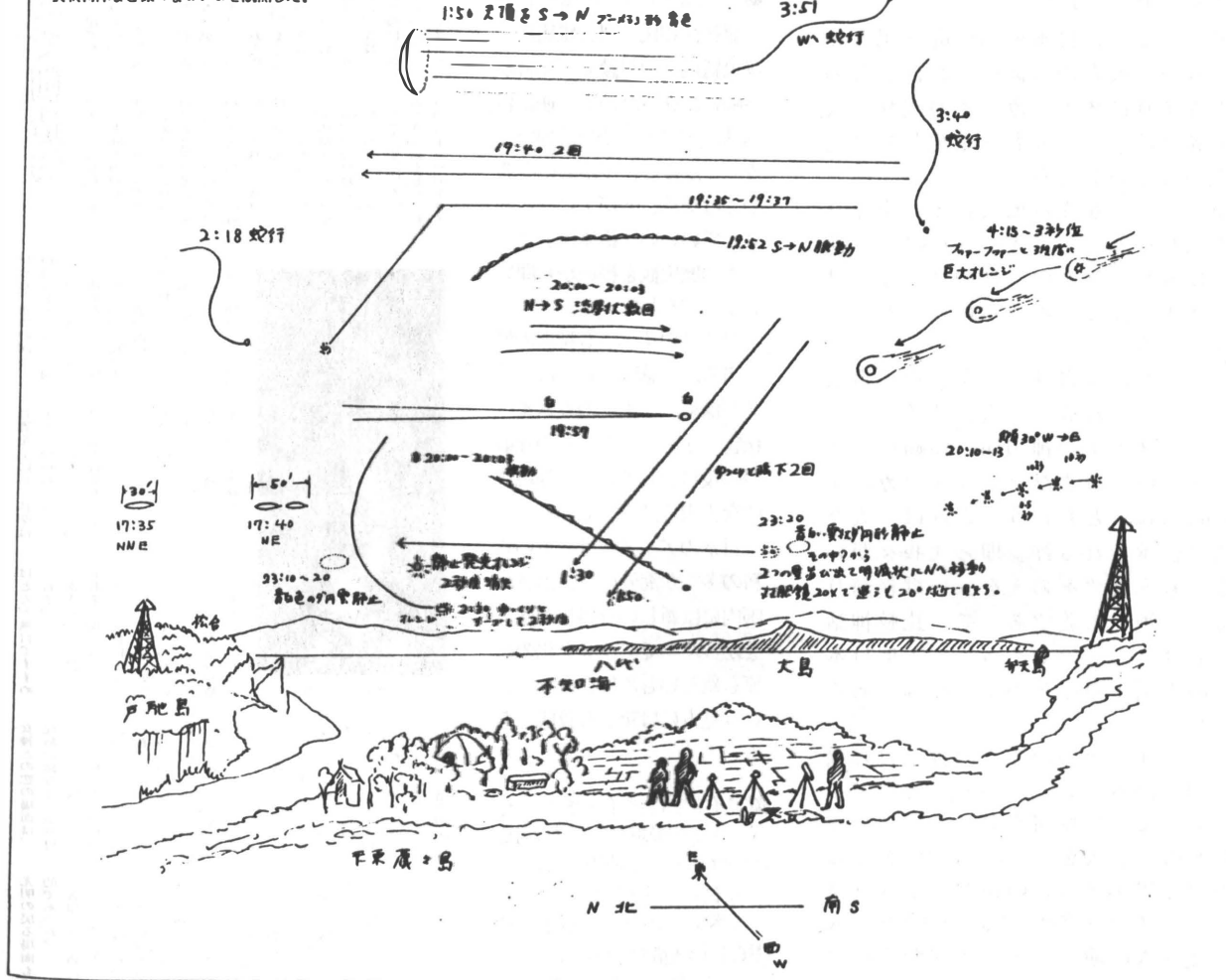
■その知性は1800年間、発現に必要な一貫した技術により、これを維持し行ってきた。そこには量的な差はあっても、年月経過に左右されない技術が存在する。

■その現象は、上空から飛来する未知の

飛行物体と密接な関係を持ち、連繫作業を思わせる両者の関係が認められる。

■UFO学から言えば、不知火とは地球外技術により、何かの理由で選んだ（あるいは約束した）特定地点で、「特定の月と太陽と地球の位置関係の時」に行なわれるものであり、その理由は地球側にある物理ないし生命（人間）という変動要素に関係があるとみられる。

■1984年八朔では、不知火海上空および、観測地千束蔵々島上空を光物や飛行物体、星を発射する雲状物体など様々なUFOを観測した。

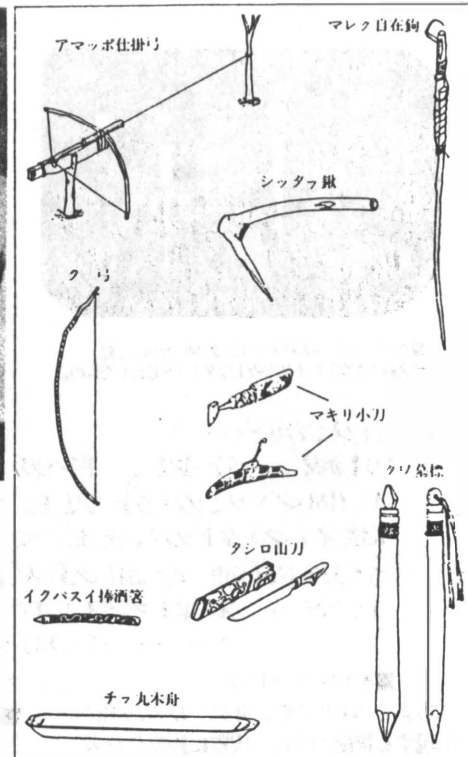


アイヌ文化神
オキクルミカムイ
から学ぶもの

また、オイナの中でこの神が自ら我
は人間であると言っていること、アイ
ヌと同じように厚司を着、小刀（マキ
リ）を帯び、犬を養って海や山を狩し
たので、アイヌはこの神を親しみ呼び
て「アイヌラックルAinu Rakkur = 人
間くさき人の義」即ち「神ながら我々
人間に近き人」とたたえている。



■アイヌとはアイヌ語で「人間・人」の意味で、それが民族の呼称として使用された。「アイヌ・ネノアン・アイヌ・エネア・メナー」とは「人間らしい人間になるんだよ」という子供への教育言葉だ。



傳統的で創造的

けられ、暗黒の国へ、白鳥姫をすくうべく向う。激しい戦いの後、白鳥姫を救い、天の国の神に心から捧げ捧すると、明黒の国に光りが満ち輝く。

つまり、前世神曲なのである。舞台は簡素なもので、音響を主とし、音楽はあまりのかわれない。

舞台の右手には、祭壇がもたらされ、そのまへで、エカシ古老と、フナ達、ユーカーを語る。

そして本来、神をたえ、神に捧げ、アイン舞踊を中核にすえ、

ほとんど舞踊ですめられる。

あきらかに日舞と思われ、振付けと、古式アイヌ舞踊とが一体となつて、美しい劇、世記が、演じられていて、

第一場での雷神と雷雲鳴ともにもあらわれない。

アイヌラックル

女神との戦の場面は、民族の誇りと振付けによつて成功していた。雷神がその衣をひるがへし、女神を強ひるむことによつて、結びつきを表現され、結は、あざやかであつた。

第三場、大鹿神の対決は、御造訪のまさにユカシ劇といふべく感動した。

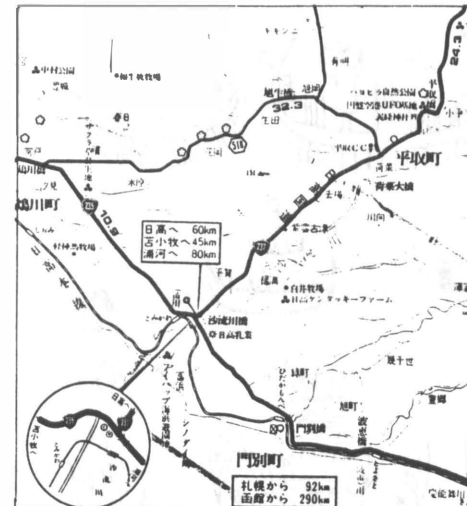
白鳥と黒鳥の物語りは、バレエ・白鳥の湖を連想させた。二人の女性の踊りからは、日舞や洋舞の影響が色濃く感じられた。

第六場、暗黒の國に光明の戻る場面も感動的であつた。

各場のはじめに、エカシとフナが、語らへユカラは、もちろんユカラは理解できない、しかし、その神をたたへる旋律は、体をこすするよきな響きをもつてゐた。

エカシが伝えるユカサを、舞踏によるみせた。今回の上演も、伝統を尊重しつつも、芸術の新しい文化芸術の折し、創造があられたと思ふ。

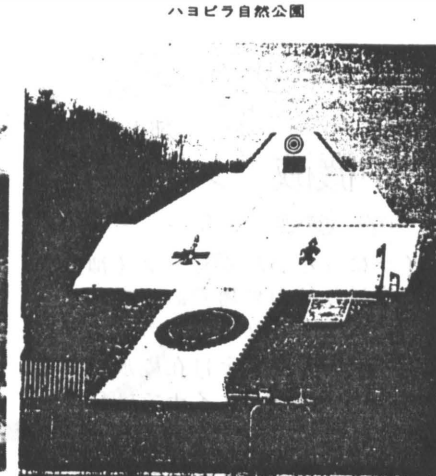
(土芳 鉄)



オイナにうたわれるアイヌ文化のより根源はカントモシリ（神の国）である。即ち、オキクルミは或る時、水源の神の山に登り、夜、天空から降下するシンタ（神駕）を目撃。シンタは空中に静止し、そこから美しい女神が現れる。オキクルミは女神を追って神の国へ向かう。神の国で翁神に婚姻の条件として男女の制作物を一日で制作する試練を与えられオキクルミと女神は見事それをやり遂げ、それらの制作物臼、杵、箕、機織などを携えて人間世へ戻り、それらの制作物をアイヌに残らず伝えたというのである。



■左上は1988年9月昭文社発行『グランプリ北海道道路地図』より「ハヨピラ自然公園」「門盤空港UFO基地」と記載されているハヨピラの位置。

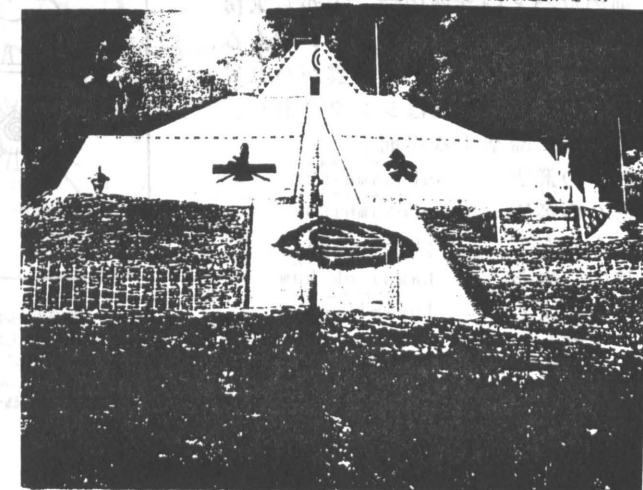


オキクルミの像　ハヨピラ自然公園内

オキクルミはアイヌ神話では、国造りの神が人間界をつくった時、いろいろな試験をうけて人間界に下がり、アイヌに神の種を伝え、神を敬うこと、毒矢の術などを教へ、また魔神を退治し、飢饉をすくったりした、アイヌの始祖となっている。このオキクルミの補佐役がサマイクルであるが、このオキクルミ伝説が義経伝説と結びついた例が多く、義経公伝にあるクリの木などは、その一例であると思われる。アイヌ伝説と義経伝説の結合は、江戸時代になって、和人とアイヌの接触過程で成立したものと思われる。



■上は熊祭りの風景。熊の魂を天の国に送るという意味がある。



アイヌの聖地。日高の平取町、沙流川の橋のなもとに突き出た岬がある。こ
こはハコヒラと呼ばれ、文化神オキクルミが天からこの地へ下って居城を構
えたという伝説があり、それを記念して写真のような近代적建造物が建った。

Ancient flying machine - "SHINTA" 空中機械「シンタ」

オйнаにうたわれるシンタ（神駕）とは文字通り神の乗物であって、全世界神話伝承に語られる同様のテーマの特性に漏れず、空中を自在に飛ぶ能力を備え、星の世界（オйнаでは星居と語られる）までも訪ずれることができ雷音を発する驚異の乗物であり、この件に於ける神話学上の解釈は例えば次のような具合である。

「また白鳥伝説、羽衣伝説だのの色彩を帯びた一部の説話もあります。神の天上界より下界する時、常にカニシンタという一種の空中乗物によって上下し得るもので、いわば今日の飛行機そういったもので、自由に飛行し得るものと伝えて居ります。」（アイヌの伝説について—アイヌ研究家、元帯広市日進小学校校長、1963年没。吉田敏著札幌中央放送局編「アイヌの伝説について」117～157頁の中から）

「アイヌ聖典」からシンタの部分を用いてみよう。

神の王の	カニイカラ	シンタ
神駕の	カニイカラ	シンタ
神駕の	カニイカラ	シンタ
雲の	カニイカラ	シンタ
小人	カニイカラ	シンタ
坐し、	カニイカラ	シンタ
(略)		
汝の味方	カニイカラ	シンタ
に天降る	カニイカラ	シンタ
べき	カニイカラ	シンタ
天津禽	カニイカラ	シンタ
天津鳥(なる)	カニイカラ	シンタ
至上の神、	カニイカラ	シンタ
天降りして	カニイカラ	シンタ
汝の	カニイカラ	シンタ
たたかひ(に)	カニイカラ	シンタ
加勢を興ふべし	カニイカラ	シンタ

これは、オキクルミが魔神に捕われている姫を救出に出撃し、姫を助けて魔神の群勢と闘う最中に、天から来援のシンタが降下してくるシーンである。

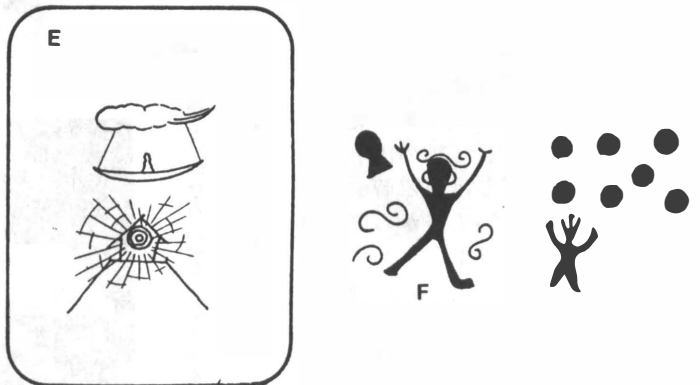
次は、ある日のこと神の雲がハヨピラの館に接近、それはシンタであり、館の上空に滞空する場面。

数多の叢雲	オホカムイクル
数々の叢雲	オホカムイクル
むら立ちて	オホカムイクル
神の	オホカムイクル
来る	オホカムイクル
音	オホカムイクル
鳴りとよむ	オホカムイクル

(略)	
来り来りて	アキ アキ
我を育つる	アキ アキ
山城の	アキ アキ
真上に	アキ アキ
神駕を	アキ アキ
停めて	アキ アキ



■上図1～4: エジプトの太陽船 5: 鳥居神社の鳥居 6: ニュージーランドの岩絵より 7: ボナベ島の岩絵にみられる翼状の船 8: コロンビア、サンタ・マルタ出土の神像 9: ニュージーランドの神像の一つ。これらは通常の船とは異なり、神の乗物としての船などである。古代の世界で、人が乗る物とは動物であり、船であり、船である。そのような日常品を用いて、特別な乗物を表現しようとした場合、我々ならどうするだろうか？



E: ハヨピラに接近するシンタの想像図。シンタとは、翼、舟、鳥といった言葉を用いて表現しようとした乗物で、天から降下し、天へと去るものであった。F: 群馬県八幡原古墳出土の野間文鏡の部分スケッチ。手を上げた先に不明の形がみられる。G: 山鹿市のチブサン古墳壁画部分スケッチ。7つの門に向かい、両手を上げて歓迎の意を示す冠をかぶる人物を表現している。空から丸い船が降下し、それを迎えた王とすれば、この場所はハヨピラと同じ意味をもつことになる。

そして、オキクルミが重き神のシンタに乗り込むシーンが歌われる。
山城の 上にありたる chashi tapkata
神 駕の kamuikar shinta
その中 upsororke
われ みづから入る aoshiraye
オキクルミがシンタに乗り込むと、中には霞に包まれた神がいた。その神はまだ見知らぬ神だが時のケムシリ山の神らしい。彼らは出発（離陸）する。
一つらに
金の 神駕
に相乗じて
われらがゆく音
鳴りとよみ
(略)
光 風の 如く peken rera ne
海づらかけて atuisokurka
われ翻りゆく amaunoyere
数々の波紋の如く Tupeshikshikne

以上の引用をみただけでも、このシンタなる神の乗物が、よくいわれる太陽の人格化に伴う太陽の運行を船に例えたというような解釈が成り立たない程リアルに空中飛行が語られていることが分かる。それは人が乗れるスペースをもち、轟音を発し、遠目には雲と見紛うも、近接すれば物体であり、金属の外装をもつものである。更に、その空中飛行はその乗物の持つ能力が始動する過程を経て発現する。

われ出で行く	アオシライエ
金の 神駕	カニイカラ
在りける が	オカヒケ
神駕の 内へ	シンタウツロ
われ飛び乗り	アキ アキ
神駕 柄を	アキ アキ
われつかむ	アキ アキ
それより	アキ アキ
太き 手綱の末は	アキ アキ
轟々と鳴りわたり	アキ アキ

オキクルミが館から外に出ると、金属製のシンタが置かれている場所があり、シンタに乗り込んで、「シンタツカ」を掴む。するとその構造の一部がエンジンの始動のような感じになる。

ざっと、このようなイメージが浮かんでくる。しかもこの飛行機械は長い滑走路を必要としないし、回転翼の描写もみられない。ただしその外観が円に近いものであることを伺わせるのが repeshikshikne 「数多の波紋の如く」の一節である。pe 「水」 shik (目) から模様に見られる線に囲まれた円形や矩形を shik (目) といい、水面に生じる紋の形容に用いたと解釈されており、シンタの飛行する様が円もしくは

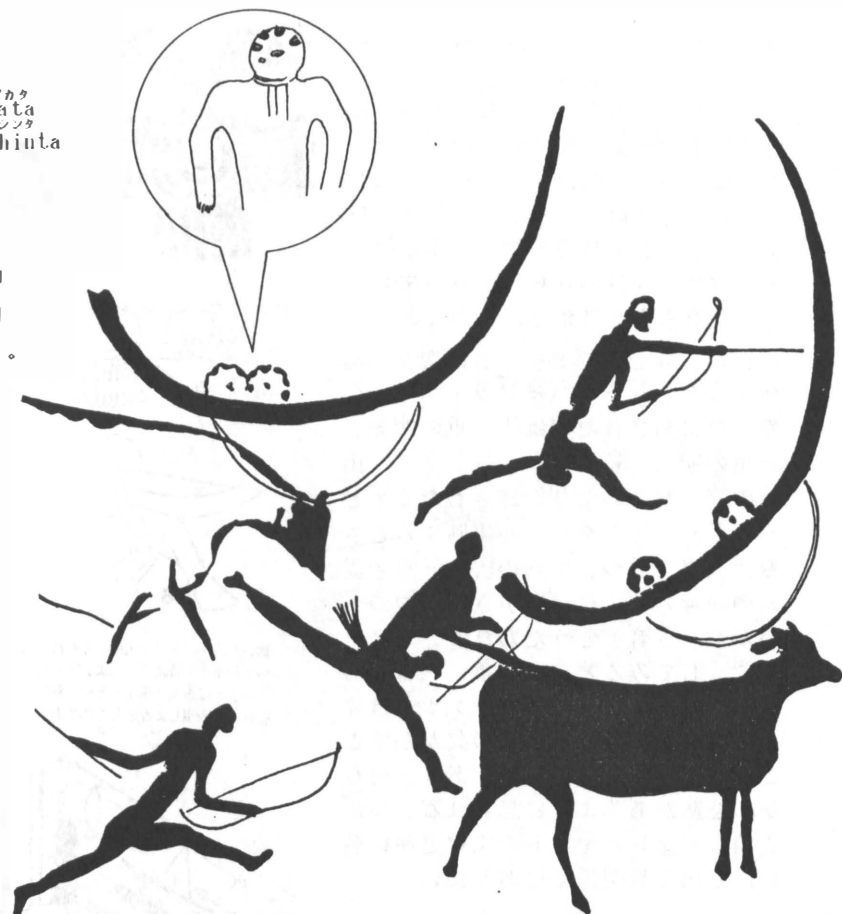
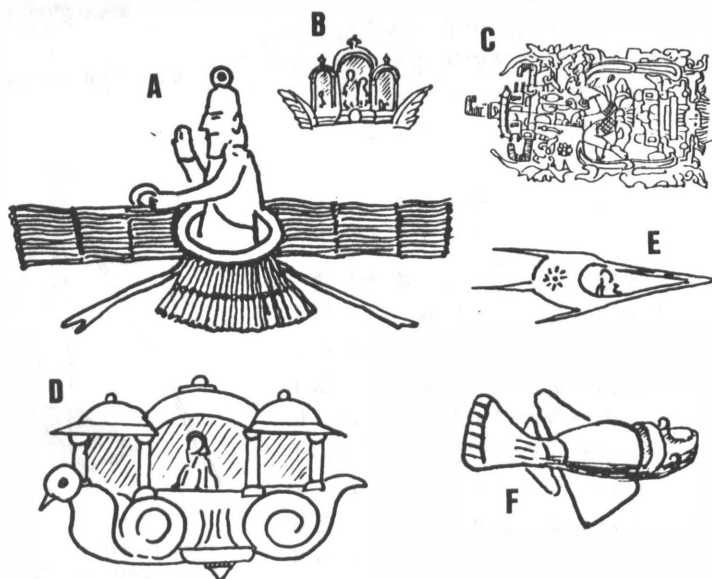


図: 高見聖志郎監修「世界の文様—原始美術」より

■上図: サハラ砂漠の無人地帯タッシリの岩壁画の一つで、約5000年前のメソリシック時代の作とされる。ジャバレン地帯にある。牛の角の上に角と同じ形で、巨大な「角」が描かれ、その上に「門」が置かれている。この「門」は、発見者アンリ・ロートによって「火星の神」と名づけられた巨大な人間の頭部であることは間違いない。ということは、角の形は、門頭人「火星の神」の乗物であることを、この画は示している。オキクルミがシンタに乗ったように、この「角」は空を飛んだのであろうか？



下図: A: 古代ペルシャの天宮神アフラマツダ像。ケルマンシャー平原ビジャ山に建つダリウス大王の彫刻に神像の形を写した。右手をあげ左手でリングを握っている。この姿はオキクルミがシンタ柄をつかむイメージと重なり、飛行機体のコントロールを表現したものと考えられる。B: 古代インド叙事詩ラーマヤナに語られる空中機械ビマナ。人が乗りこまれる空艇である。その飛行マニュアルには、動力の仕組みにまで及んでいる。C: マヤ古典期レンゲ十字の神像石棺上蓋の浮彫。天に向かい垂直上昇する死者を表現したものか、機械を操作する人物に見える。火でよぶられた彫刻する姿との説もあるが、尖端のケツアル鳥と十字は天空の神ケツアルコアトルの象徴である。D: 南インドのジャイナ教寺院内に置かれた空中乗物。現地に筆者撮影。これは何がモデルだろうか？ E: ユーゴスラビア、ディナリヤ修道院フレスコ画にみられるキリスト上の二つの飛行機体の一つ。現代のマーキュリー宇宙カプセルに似た形状は何かヒントを得たものであろうか？ F: 南米コロンビアのボコタ山国立自然史博物館所蔵の黄金細工の「フット」に似た飛行機体を思わせるもの。

同心円の如きものだったのかも知れないという想像を触発させる。

神の乗物が轟音を発するというのは旧約聖書にも記されているが、チャシ（山城）の真上に静止するという描写からも海外の研究者が引合いに出すロケットエンジン装備の飛行物体とは考えられず、今日のUFOに近いマシンであったろうと推察されるのである。

また、同心円のモチーフは聖典の随所にうたわれる。ハヨビラ・チャシの館の軒に刻まれた印は「二重の明光、三重の明光、差し延（は）えて、山城の際、照りわたり、輝きわたる」とうたわれ、オキクルミが出陣するときも「我出で立つ、二重の雲、三重の雲、おのが身のうえに、棚引きよせつつ、わが激しき音」とうたわれる。

こうしてみると、「二重、三重」のモチーフ、即ち同心円のシンボルはオキクルミ伝承を語る上での欠かすことのできない聖なる形容であり、何らかの意味があるように思われる。装飾古墳などプレ・ヤマトの文化遺産に多い同心円も無関係ではあるまい。

一方、シンタとは神の乗る“空のゆりかご”の意であり、それは船をも意味する。知里真志保氏は、北海道先史学十二講（北方書院）の中で、シンタと称するこの揺り籠は、アイヌの観念においては舟であったことを指摘している。アイヌ生活の中で、木で造ったソリのような物を紐で天井から釣り下げ、それに赤児を寝かせて揺り動かすが、それを揺らしながら次のように歌う。

「ねんねの御舟が降りたぞ
ホーチア ホーチア」

飛行機械として具体的な機能が語られ“現実的”なシンタに対して、日本神話における神々の乗物「天の磐船」はその輪郭が定かでない。アイヌ伝承というものが沙流アイヌのように、伝承する家系が決められ厳格な規律の下に代々伝授され、口外も禁止されていたから亜流支流の混乱を生じることなく、また、文字にして右から左に写す過程で余分なものを入れたりする通常起こる危険から遠ざけられていたから、必然的に内容は大体において殆ど変化することなく、何百年あるいは千年以上も持ちこたえたと思われる。文字で引き継がれるものは、歴史の勝者が自分たちに都合の良いように書き換えてしまう可能性が濃厚である。

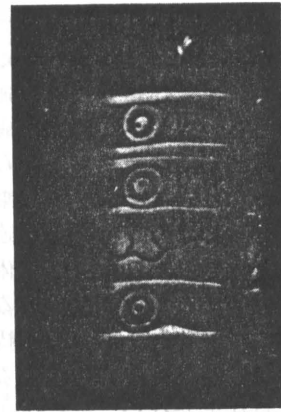
中東の場合のように強固な宗教集団に守られて何千年もバビルスや洋皮紙



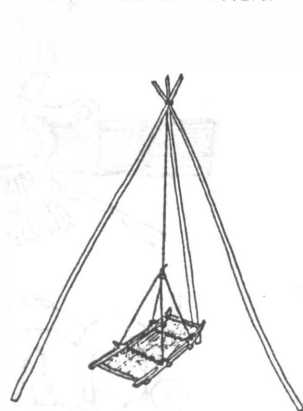
■1-3 ミインデアン美術にみられる鳥と円の組合せ。4:ペルシャの有翼太陽円盤像。5:有翼球の一つ、シツチン著より。6:エジプト美術の有翼人。7 宗教美術「天使」
「翼」とは古来「飛ぶ」という意味をもつ。それを太陽的図形や人間と結合させて、人は何か特別な存在を表現しようとしたのである。



■アイヌの祭壇に飾られる同心円。



■アイヌ民具に刻まれた同心円。



「空中に下げられている」生活道具のシンタは、同じく「人を乗せて」「空中にある」オキクルミの乗物を表現し後世に伝えるためには適切な引用であったと言えるだろう。



■福岡県豊前市古墳壁画。太陽の印と舟のモチーフはオイナのテーマと重なる。



■福岡県清戸古墳壁画。朱の渦巻きを背にした人物も、太陽の輝きを放つカムイの姿を思わせる



■福岡県五郎山古墳壁画から太陽と人物の対峙を取り出した図。

の文字が伝わっていくのは、民族や環境の違いがあるのかも知れない。文字で後世に遺すよう指示したのも、伝承で後世に伝えるよう指示したのも、かの神々だからである。従って現代の我々は遠い過去の真実に迫ることができるのだ。

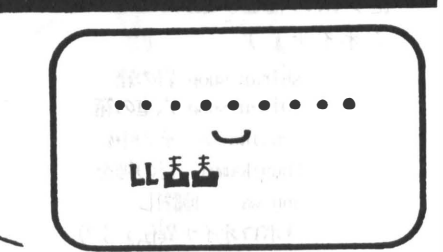
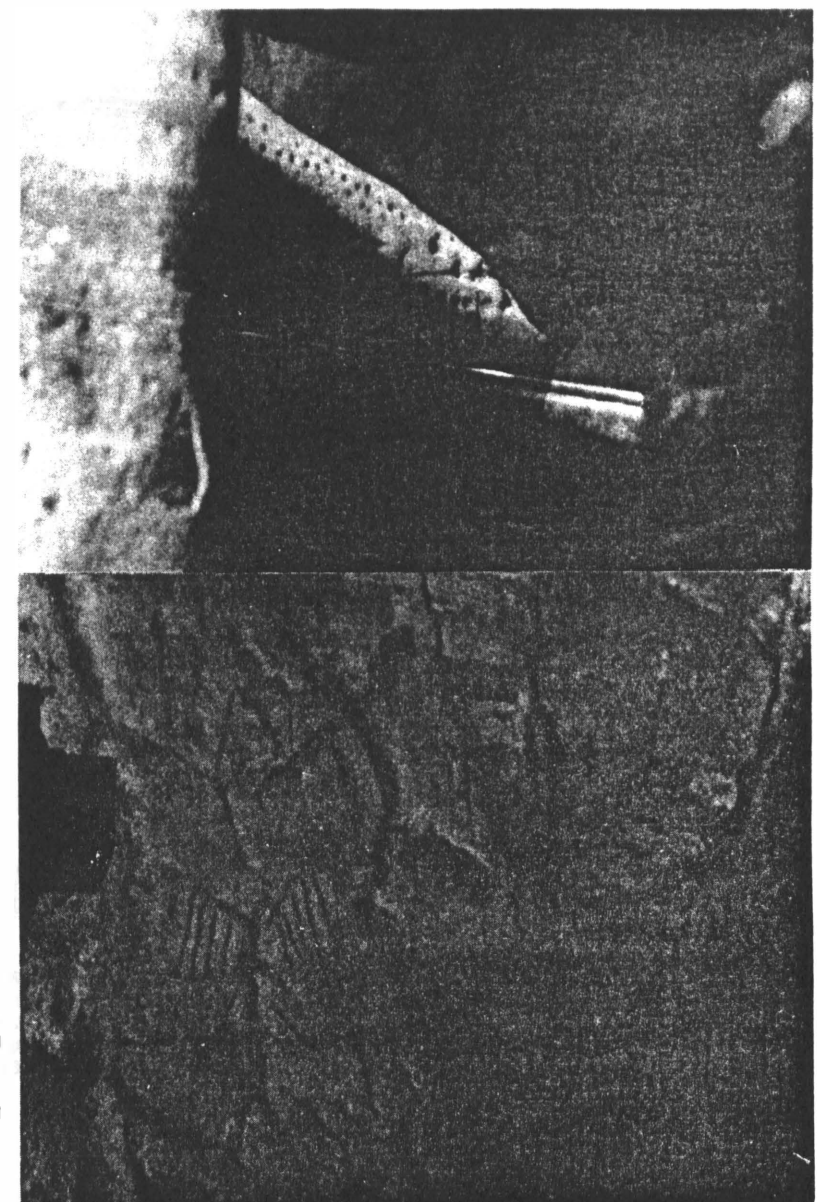
伝承とは言わば民族の血液である。オーストラリアのアボリジンにしろ、北米インディアンにしろ我が国のアイヌにしろ、我々現代人が彼らの伝承を読むことができるのは、彼らが絶滅することなく今日まで血脈をつないできた賜物である。その意味で彼らには未来を生きる根拠が明確だ。より論点を明確にすると逆の立場が地球の危機を生んでいるのである。

シンタの検討に戻ろう。オキクルミはシンタに乗った少女を追って天上の世界へと行く。このシーンでは何故かシンタの姿が省略されて、オキクルミがスーパーマンのようにそのまま天に向かって飛行していくように描かれている。同じオイナでもシンタが詳細に語られる分とそうでない分があるのは内容の欠落かも知れない。インディアンなど海外の場合も同様で、地上の世界にない飛行物体を伝える事の困難さにもよるのだろう。科学万能の20世紀の今日でさえ「空飛ぶ円盤」「UFO」など呼称を変えている。古代人が「揺り籠のようなもの」「舟に似たものだ」「蛇のようにくねりながら…」「飛ぶ馬のようだ」と子孫に語ったものが、次第に個性を持つ「作品」に仕上がっていくのは止むを得ない。

下の天(を) ranke kanto
わがつらぬき te aoposo wa
わが行き 行けば payean aine
上の天 rikun kanto
へ我打ち出でぬ akoesoyoshma
神の国 kamui moshiri
国のおもて moshiri kurukashi
たひらかなり teshnatara

「下の天」とはアイヌモシリ人間界に属する空、現代風に言えば地球の大気圏に相当する。では、「上の天」カントモシリ神の国の空とは、一体どの場所を指すのだろうか？ オイナによれば、カントモシリは広々とした国土で、黄金の宮が建っているとうたわれる。

この描写と対応する現実、アイヌモシリから38万キロ離れた月の世界である。『そのが身はこの国の人にもあらず。月の都の人なり。』とは「竹取物語」の有名なせりふだが、望遠鏡が月を観測し始めて以来続いている月面上の人工的建造物の発見こそ、古代人のいう「天の国」なのかも知れない。



■北海道余市町フゴッペ洞窟南壁右に刻まれた典型的な翼人と、その上に刻まれた点々と4本の筋を引く舟形。(1982年筆者撮影) 上図は茨城県虎塚古墳西壁壁画。9つの小丸と舟の組合せがフゴッペと似ている。天り国々へ昇ろうとする舟のテーマのようだ。下のアニメは日本昔話に多い天女



の国を訪れる若者のテーマ。一説にはオイナがその源流であるという。

沙流アイヌが今に伝える天上の世界と神の乗物の描写は今日、神と表現された地球外技術者の操縦する航空物体として理解されつつある。

■日高沙流郡平取町荷負に伝承された「雷音申の牛勿言吾」(日本伝説大系第一巻より)

リクンカント 天の国
ノチューカラ カムイ 星づくりの神
その神のそばに
住んでいる神 竜の神
カンナカムイのその息子
それが私でありました

天の神 尊い神の息子でも
アイヌモシリ アイヌの国を
私はいまだ見たことがない
行って見たくてたまらない

ある日のことでありました
父神や母神に
アイヌの村 アイヌの里へ
行ってみたいと さりげなく
聞いてみたれば
父神や母神の
顔色変えていうことは
行ってはいけぬ
行っては駄目
「なぜ？」と問えば
アイヌモシリ アイヌの国は
美しい国 のどかな国
そのような国ではあるけれど
住んでいる人アイヌたち
心優しくあるけれど
いたづら好きだということでは
はじめて行く神たちは
それを知らない
それ故に
何が起るかわからない

お前のような短腹者
何をしてくすかわからない
絶対行ってはいけません

美しい国 のどかな国
ただその言葉を聞いただけ
もうがまんできなくなりました

ある美しい秋日和
そっとわが家を抜け出して
神の乗物シンタに乗って
下界を目指して降りました

わが乗物の音おさえ
綱を引く手も
静かにゆるく
低い音でゆっくりと

ノチューカラ カムイ 星づくりの神
神の住居のすぐわきを
音をしづめてそっと抜け
トカブチュカムイ 太陽神
そのかたわらをそっと飛び
シニシカラ カムイ 雲づくりの神

その家近くを通り越し
ランケカント 雲の下
ようやくそこまで来たときに
広い海が見えてきた
神の乗物シンタの綱を
平らに引いて
坐りなおして しばらく行けば
話に聞いた
アイヌの村 アイヌの里
シシリムカ沙流川の
川尻が目に入る

上空から見る沙流川は
川底の
石をば数えられるほど
石の色は七色で
ゆるいうねりの広い虹
長い虹が横たわる

それとまったく同じように
ゆるい流れのシシリムカ
川尻のほうが高く見え
源のほうが低く見え
川のふちには
ススニタイ 柳の木原が手をつなぎ
肩を並べて生えている

川の中では 川水が
盛り上がるほどの蛙の群
水面の蛙のいうならば
天日で背が焦げるほど
川底の蛙のいうならば
石で腹がすりむける

若者たちは争って
われこそ先にと水辺に走り
柄の短い釣針は投げ捨てて
柄の長い釣針を奪い合い
捕らえた魚を
川辺にまかす(こぼす)

まかした蛙を背負う人
小さい袋を投げとばし
大きい袋を奪い合い
川から村へと 人の列
すき間もなしに続いている

山すそへと目をやれば
ケネニタイ ハンの木原が
広々と
雄鹿子鹿が群れ走り
雄鹿の一群あとを追
野茅の原が 山すそへ
鬼茅の原 果てしなく

鹿追う若者 重なり走り
小さい弓を投げ捨てて
強い弓をば奪い合い
皮はぐ者は皮をはぎ
肉運ぶ人 村里へ
葉と葉が重なるウバユリが
足踏む場所もないほどに
たのしい唄を唄いつつ
ウバユリを掘る

メノコ(女)たち
小さい袋を投げとばし
大きい袋を奪い合い
短いタラ(背負い縄)をあちらにやって
長いタラを引っ張り合って

村人たちの働く姿
のどかというか
美しい

それを静かに見降ろして
神の乗物シンタに坐して
右手の綱と左手の
綱を静かに引きながら
上流目指して行くうちに
音に聞いたアイヌの勇者
オキクルミ人の村里へ
わが来る音を聞いたのか
オキクルミ人立ち上がり
窓から半身乗り出して
村人どもよく聞けと
位の高い神
尊い神が
村を見たさにおいてだぞ
貧乏者は姿を出して
イコロビリカ よい宝物
ヌサ(祭壇)の前に並べやれ

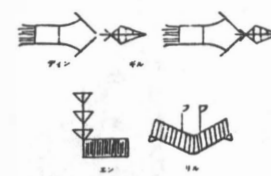
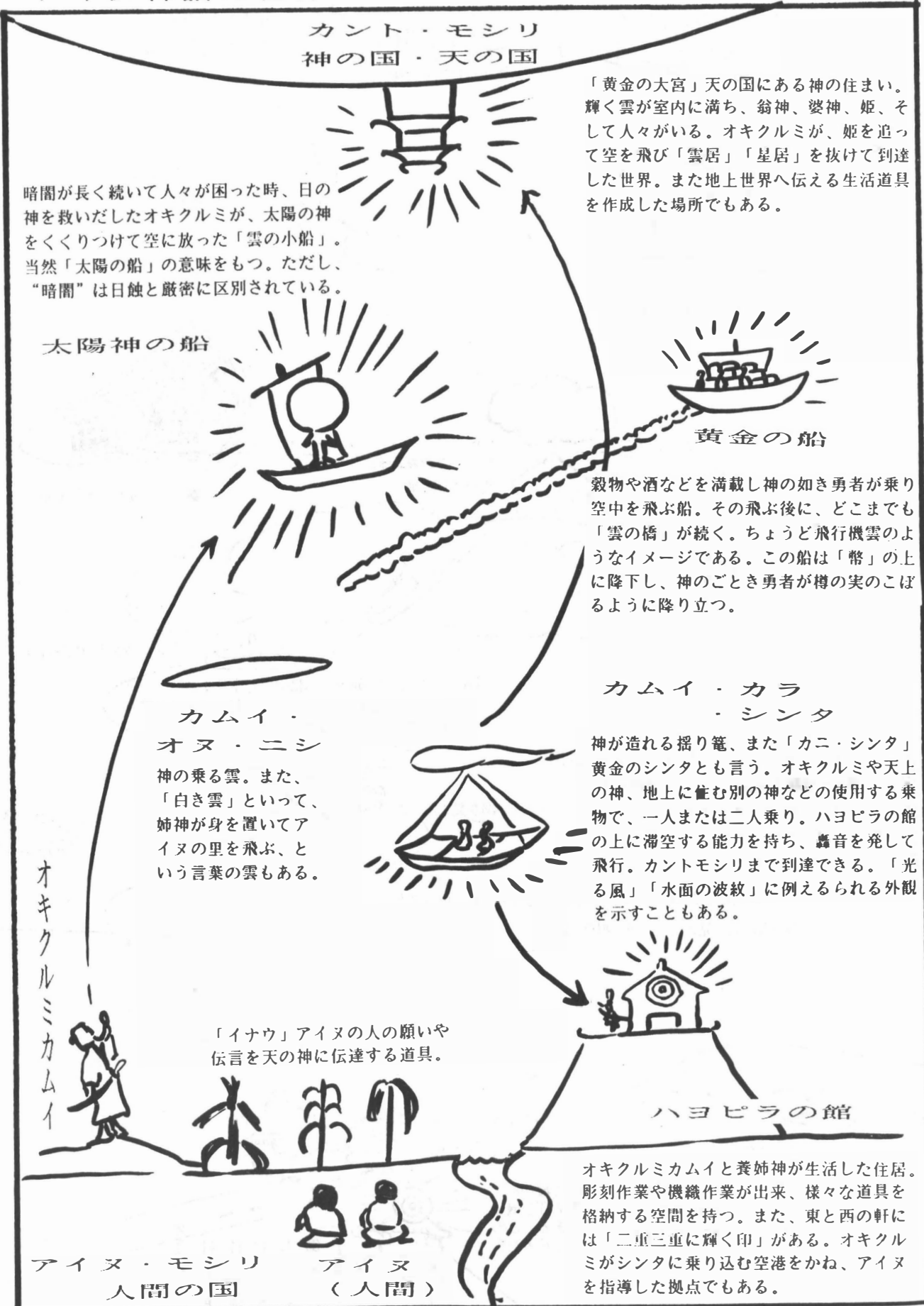
働いている者は手を休め
研ぎ物などは絶対だめだ
女は針の手を止めて
髪をほどいて遠慮せよ
編み物織り物すべてだめ
編みおいていた
オキタルンバ(模様付ござ)敷き抜け
カンナカムイ 雷神が
通り過ぎるその時まで
物音ひとつ立ててはならん

アラケカムイ 半神人の
オキクルミ
からだをよじって呼ばわれれば
なんとまあ 感心なこと
おどろくこと
村人たちは いわれたとおりそのとおり
ひとつの村 そのまが
深い深い沼底へ
すうっともぐったかのような

それを見聞きし
われ思う
なんとまあ感心な
村人たちよ 里人よ
そう思いつつ私は
音を静めて通り行く
シンタの綱静かに引いて
ゆるく引きつつ 通り行く
オキクルミの村の上

やがて行くと その下に
サマイユンクルの 広い村
大きな村が見えてきた
その上空へさしかかる
(以下略)





ゼカリヤ・シッチン



邦題『謎の12番惑星』『第10番惑星に宇宙人がいた』の著者で米国在住のジャーナリスト、ゼカリヤ・シッチンは、旧約聖書やメソポタミアにおける古代宇宙人來訪を裏付ける粘土版文の解明など独自の研究成果を発表している。

シッチンはシュメールの神、「ディンギール」を表すクサビ形文字がロケットのような飛ぶ物を形どった絵文字であるという指摘や、マリ出土の女神像(写真は筆者所有の縮小レプリカ)の宇宙服解釈など新しい視点で、神話や考古学資料を見つめている。

彼はさらに、「古代オリエントの神々は窮極的に古代シュメールの12の神々に源を発し、この神々が世界各地でそれぞれ土地特有の神に転じていった」と指摘、その例を紹介しているという。(リチャード・C・ホークランド著邦題『火星人面像の謎』p.250)

アーリヤ人の神「ミトラ」がインドのヴェーダとペルシャに広がる神格であることは知られている。また、ペルシャ帝国の父キュロス大王によるバビロン捕囚のユダヤ人解放時、ユダヤでは「ヤーウェ」、キュロス側では「マルドゥーク」として天上の存在が認識されていたことも知られている。

このような特定の神格の国境を越えた広がりを、現実的な実在者が、各民族を訪れたとするのがシッチンの仮説である。

我々地球人の海を越えた活動ぶりからも、それは有りうることである。また、人間一人の多面性が交流相手にさまざまな面をみせるのは普通の現象で、オキクルミカムイがアイヌに生活道具や歌を教え、亀ヶ岡で高度な技術と力学を教え、さらに海の向うのアラスカで、飢餓にひんした原住民にシンタで鯨を輸送するという活躍も当然起こりうる。

一人の宇宙メンバーが、地上のどの位の範囲をその視野に収めることができるのか?という問いは、そのまま現代にも当てはまる。多数のUFO事件から「宇宙人の円盤がこんなに現れるなんてオカシイ」という意見があるが、これに答えるものだ。つまり、無人で「自動対処プログラム内蔵」の遠隔コントロール飛行物体を、一人で何機管理できるか、という問題は、学校の教室で一人の教師が何人の児童をめんどうみれるか、という問題と同じである。児童それぞれの個性に応じ才能の伸ばそうと努めるのが教師の義務だ。また、それぞれの理解の速度などにより個々の成長は異なるのが普通である。教室を地球に、児童を民族に置き換えて考えてみれば分かりやすい。



■シッチンが著書冒頭に取り上げたマリ出土の女神像。これは筆者所有の縮小レプリカ。ヘルメット状の帽子、両耳にかぶさるイヤホンに似た形、頭部後ろの機械的な箱、など飛行士の服装を思わせる特長が指摘されている。



従って、オキクルミカムイに限らず、宇宙起原の航空体の乗組員が、地球上の拠点から出発して各国を訪れ、レーダーやセンサーのような調査機器によって地上の状態を知り、放置すれば絶滅するかもしれない民族をピックアップして、必要措置を検討。措置着手から成就に至る計画を立案し、接近プログラムと教示日程、歴訪コースを決め、いくつかの民族と接触したとなれば、それらの国々で同一の来訪者が国によって異なる呼称で存在していく過程が理解できる。

■オキクルミカムイの人間像

さて、オキクルミカムイとはいかなる人物であったのだろうか?

オイナは一人称で語られる物語。つまり、アイヌが見たり経験したりした事柄を語るのではなく、神自らがアイヌに向かって語る自叙伝である。例えば旧約聖書の天地創造は、人類側の目撃者が存在しない時代を語ったものだが、神自身がノアやアブラハムあるいはモーゼに語って聞かせた事実がなければ生じない部分である。

オキクルミはアイヌに歌を教えたという。つまり先祖の物語を歌のように伝える方法であろうかと思われる。筆者も沙流アイヌの歌うテープを聞いたことがあるが、繰返し同じような旋律で延々と続くものであった。我々が昔の流行歌を苦もなく1番から3番まで口ずさめるのは、メロディーと歌詞が一緒に記憶されているからで、絶えず口ずさむことで、記憶を更新させ、ほとんど一生忘れないものである。口承の技術とは、かなり高度な教育技術に属するのではないだろうか。

さて、オキクルミの外観、姿については、『アイヌの神典』から引用しよう。

これは、年若い女神が「兄神」としてのオキクルミを見た描写である。

「…おずおずと髪の間からそっと眼を向けて見てみるに、たちこめているモヤをかき分けて、二度・三度は人間の姿を見ることができなかったが、久しくそうしている内に、驚いた—その言葉に、その笑声に、またその歌声に、大人の人かと思えばそうは無くして、まだうら若い少人、錦らんの小袖を無双に重ね、錦らんの胸の上と裾の上には、ぐるっと黄金の平金をまとい、平金の上、金糸の唐草長くうねり短くうねり、その面を黄金の光さんらんとして、美丈の黄金の帯を腰に巻き、神剣を鞘長にぐっと反らして帯に差したその手元腰元のいかめしさ。黄金の蓋(かさ)を、紐の緒強く頸に詰め、蓋の縁かけて差し覗く神々しい顔ばせは、今しも差し出づる日輪のかがやか

さ。但し、悲しい色をありあり面てに浮べて、何時迄も何時迄も一つ処に目を据えている。兄神の美しさを今迄どこ探しても無いものにきめていたことであつたのに、此はまた天上の神の一夜に地上へ降ったよう、さらさら、神の家来では無さそう。…」

オキクルミは出陣を前にした武将の如く少女に語る。生きて帰れるかどうか分からない。しかし、彼はこう言う「…我も男子の端くれである。喚ばれて、神の国であろうと、魔の国であろうと、たじろいでは生きている間の恥辱である。だから承知をした。」

以上は旧かな使いを改めた昭和17年刊金田一京助著『アイヌの神典—アイヌラックルの伝説』からの引用であるが、金田一博士が宮坂光次氏、久保寺逸彦氏と沙流の川筋を遡って収集した貴重な資料であつて、旧約聖書、新約聖書、世界の神話伝説、1917年ポルトガルで起こった輝く車に乗った聖母と太陽の円盤出現、そして現代の空飛ぶ円盤事件を一本の線で結ぶ上で、欠くことのできない要素を含むものである。

まず、神典より抜粋した部分におけるオキクルミの描写であるが、常人と異なり、顔から光が差し、“日輪のかげやかしさ”と表現されている。これと同様の描写を新約聖書マタイ伝からみてみよう。イエスが弟子3人を伴い、ヘルモン山に登った際に起こった出来事である。

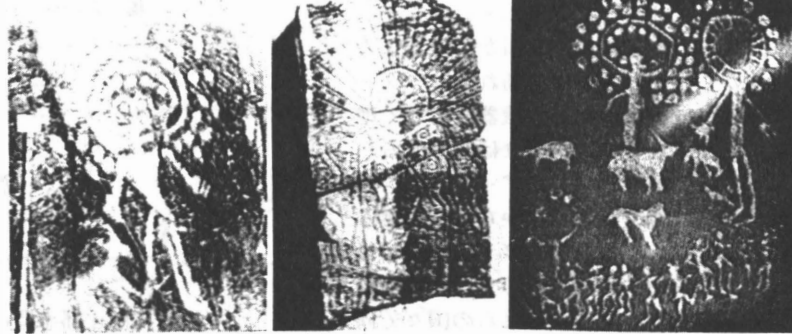
「…彼らの目の前でイエスの姿が変わり、その顔は日のように輝き、その衣は光のように白くなった。」

また、1917年ポルトガルのファティマで、3人の牧童が目撃した空からの美しい“聖母”は、会見者の一人で唯一存命のルチャにより、1937年レイリア司教への書簡で、こう説明されている。

「…ですから、私がもし画家でしたら、できるだけ簡単にしてなるべく純白な衣服と頭から裾までたれる『マント』を着せするだけにいたしましょう。また聖母を一層美しくした光も装いも描き出すことはできませんから、『マント』の縁を飾っている金色の細紐を除いては、他の飾りはいっさい省きましょう。その縁飾りは光を下地としてその上に太陽の光線がひときわ強く浮き出るように輝いていました」(セ・バルタス著『ファティマの牧童』より)

我々地球人類にとって、“肌身から光が差す”“顔が太陽のように輝く”という現象は未経験である。

しかし、原始美術に多い“太陽神”がしばしば顔に光線のような、あるいは光輪のような表現とともに描かれている事



■北中央アジアの岩絵にみられる太陽神の像。躍動する群像の中で巨人として描かれているのは注目される。



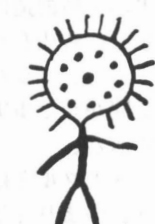
ウズベク共和国



北米インディアン



セイロン
ヴェッタ族



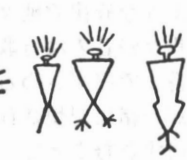
北中央アジア



オーストラリア



ペルー



北米ホビ族



北中央アジア



シュメール
天体に囲まれた神



カナン
ヘブライの神



ペルシャ
ミトラ神



シュメール
シャマシュ神

「岸壁画を描く動機や精神が同じであれば、時間や空間の隔たりとか民族の違いを超え、そこにあらわされた作品に類似性のあることは当然であろう。……世界各地の古代の岸壁画や未開社会の習俗を追い求め、その源流とあてることがある。」

（『フゴッペ洞窟』）



フゴッペ“有翼人”の刻画



室蘭出土の土偶

は、オキクルミやイエス、聖母の表現と無関係ではあるまい。

次にオキクルミの装束であるが、胸と裾に“平金”をぐるりとまとい、その平金には金糸で唐草紋が長く短く刺繍されていたようである。この特徴は、アイヌ文化を象徴する独特のアイヌ紋の原点を思わせる。オキクルミは姉と共に砂の上に指で模様の弧線を描いて遊んだとも伝えられているから、オキクルミと模様の結び付きを物語っている。

更に、驚くべき事実がある。北海道の遮光器土偶として注目されてきた室蘭市本輪西町貝塚出土の土偶（高さ19cm）だが、胸と裾に唐草紋の一種とみられる陰刻が施されているのだ。腹の部分にはVと丸で胸の平金を支えているようでもある力学的浮彫がある。あるいは降下する円を形どり、“前円後方”の起原を思わせる図形となっている。

この土偶が伝説上のオキクルミカムイの姿に酷似しているのは何故か。この土偶を亀ヶ岡起原の遮光器とするには、顔の部分が“素顔”のまま、独特のメガネの顔ではない。

しかし元来、メガネスタイルは、素顔にかぶせる仮面が基礎となつて、何らかの目的に向かって発展してきたものであるから、“被り物”を付けない素顔に、平金の装束を身に付けた姿とも解釈できる。

年代的には縄文晩期前半とされているから、亀ヶ岡との接点も明白である。

もし、オキクルミ伝承が、この土偶をモデルに発展したものでなく、アイヌ一般における文化神意識が広範囲に及ぶものであり、その偶像化がこの土偶であるならば、オキクルミ神話は少なくとも縄文晩期に遡ることになる。

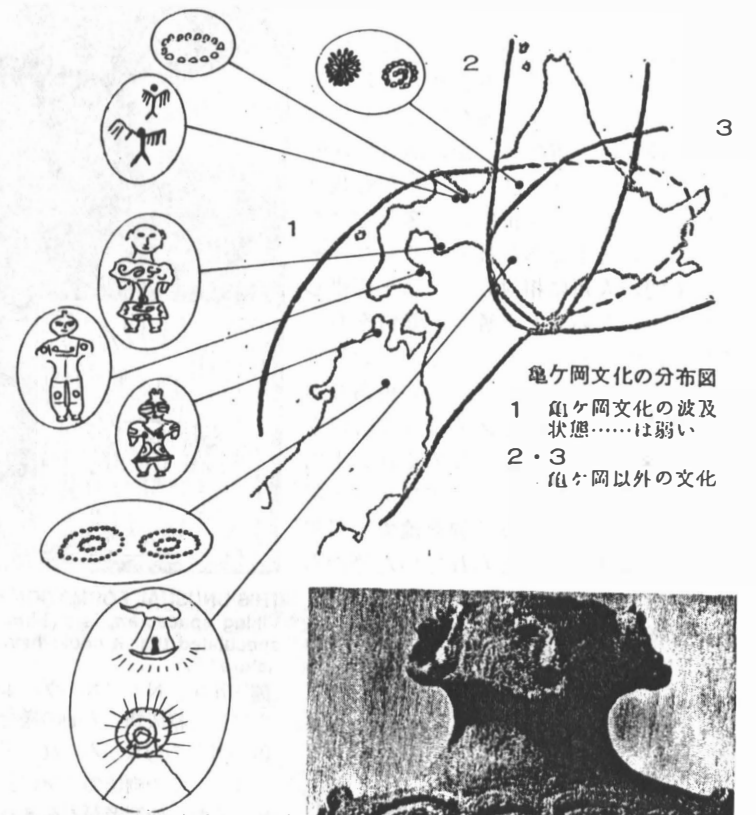
ここで、オキクルミ神話にかかわる考古学が浮上した。すなわち伝承と遺物の合流である。

オキクルミ神話→オキクルミ描写→室蘭出土遮光器系統土偶→亀ヶ岡文化となってきた。これを進めよう。

この事実、すでに考古学上で指摘されており、北海道南部は亀ヶ岡文化域に含まれているのである。

オキクルミ神話主体で見れば、文化神オキクルミの活動範囲として亀ヶ岡文化圏が浮上してきた。このことは空中飛行で各地を巡る文化神の特性に合致し、当然のことながら、先に述べた様な海外でのオキクルミ活動の可能性を喚起する。

南米ペルーの兄妹雷神伝説やオーストラリアの文化英雄、北米のサイダーバード伝説などに、オキクルミ類似伝承を見出すことができる。



亀ヶ岡文化の分布図
1 亀ヶ岡文化の波及状態……は弱い
2・3 亀ヶ岡以外の文化

■上地図はBC. 800-200とされる縄文晩期における亀ヶ岡文化範囲。東北・北海道には無数の組石遺跡がみられるが、この図では音江（深川市）忍路（小樽市）、大湯（秋田）のみを示した。土偶も主なものに限った。室蘭、茅部、亀ヶ岡の各土偶に共通するのは洗練された形態である。

アイヌ聖地ハヨピラは、位置的にこれらの中心部にある。

フゴッペ洞窟のアイヌ世界観反映解釈をみてみよう。

「洞窟人が仮装人偶を描いたのは、仮装した人間そのものの靈魂を封じ込めるためではない。宇宙の上・下領域を自由に飛行し、精霊と融和し、共同体に幸福と安全をもたらす能力をシャーマンに与えている靈力を、岸壁に止どめるためである。フゴッペ洞窟の仮装人偶は、すでに超人的な靈力を身に付けることのできる真正シャーマンであったから、洞窟人が情熱をかためて、多くの仮装人偶を岸壁に描いたのであろう。また仮装人偶の中には祭具や楽器を持つものもある。このことから、シャーマンは一定の服飾を身に付けて歌舞をともった芸術的な演出を行っていたと想像することもできる。

この様にみえてくると、フゴッペの洞窟人のシャーマニズムは、呪術宗教的な社会制度として 確立した、まさしく「オйна」の世界であった。（『フゴッペ洞窟』より）

■写真上は遮光器土偶の系統を引く中空土偶。北海道室蘭市本輪西町貝塚出土高さ19cm。下は木造町亀ヶ岡出土の遮光器形土偶。高さ35.5cm
*地図は『北海道の先史文化』北海道歴史教育研究会刊より



(背面)

(正面)

本論で述べる文化神、文化英雄とは、
 たんに仕掛け弓の造り方を教え、栽培植
 物を伝えたという文化面だけにとどまら
 ない。彼らは宇宙のどこかにある地球外
 惑星からこの地球を訪れた。しかも我々
 の世界で言えば“宇宙船の乗客”ではな
 く、自ら飛行士であり技術者であり、そ
 して未開の人類に相対し、言語を修得し
 てレベルの低い人々を導き、愛情をもっ
 て接したのである。もちろん厳しい態度
 もあったであろうし、「悲しい色ありあ
 りと面に浮かべ…」とあるような悲惨な
 現実に対する慈しみは人類のそれを上回
 る深さと推定される。ティアワナコ太陽
 の門にみられるような“涙を流す太陽神”
 の如く地球人に受けとられていた側面も
 見逃せない。

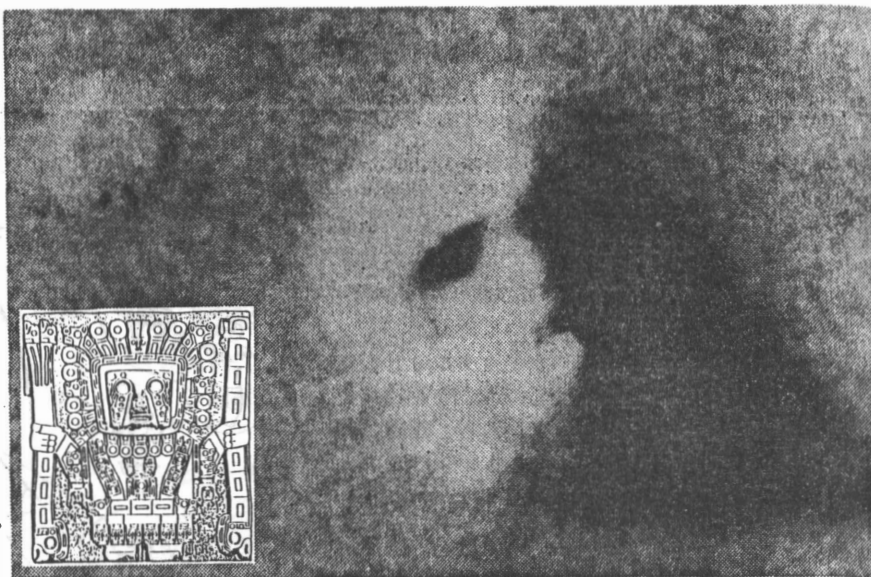
そして、何よりも我々にとって驚異な
 のは、宇宙航行という技術である。我々
 の科学が進んだとはいえ、宇宙船一隻を
 空間に旅立たせるために、どれほどの人
 力と設備、年月がかかるか。途方もない
 金額と人材機構を注ぎ込み、守備よく打
 上げの日を迎えても、悪天候で延期、と
 いう事態はいつもある。それはロケット
 という原理が微妙なバランスをとりなが
 ら地表を離れるからであり、大気圏外に
 出れば出たで、気密の維持、生命維持装
 置の維持、燃料、電気系統と、いつ何が
 起こるか知れない命がけの宇宙航行を果
 たさなければならない。

こうした未熟な段階を、数千年前に解
 決したのか、数万年前に解決したのかは
 不明だが、我々の目撃する空飛ぶ円盤や
 美しい葉巻形母船の航行をみると、完成
 された飛行・航行を感じる。

古代アイヌを訪れた「シンタ」とはど
 のような飛行物体であったのだろうか？

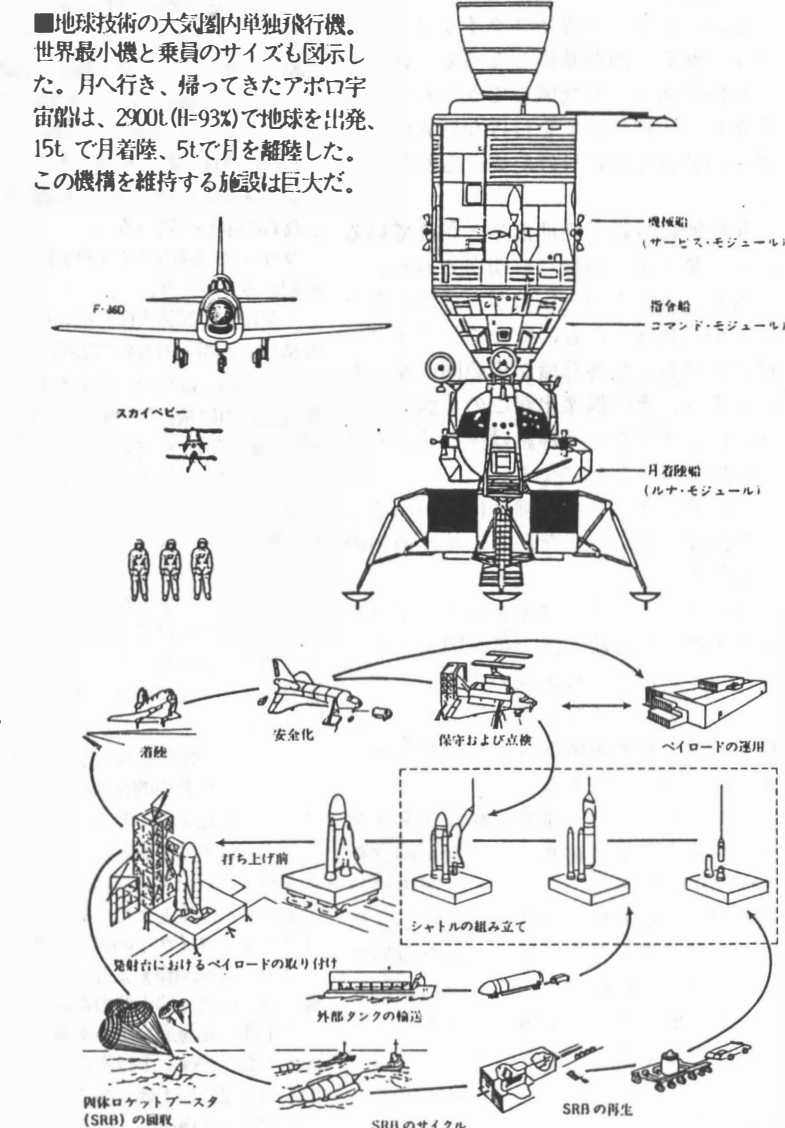
オйна・神典を基礎として、その実像
 に迫ると、いくつか不可解な点にぶつか
 る。それは、人を乗せて空中飛行するほ
 どの乗物が、現代の航空機ほどの存在感
 でアイヌ社会に位置づけられていた痕跡
 がないことで、オйнаにはシンタの飛ぶ
 状態がかなり具体的に語られながら、そ
 れに附随して巨大な格納庫や燃料施設、
 修理基地といった我々の感覚における航
 空物体の維持に必要な要素は一切登場し
 ないのである。

どうやら、オキクルミの地上での鬼と
 の闘いで、天上からシンタが声援を送り
 に飛来する場面を見ると、あくまでシン
 タの発進点が“天上”であって、地上へ
 派遣される飛行物体であったから、ある
 いはオキクルミの搭乗機も“上空待機”
 の状態であったのかも知れない。そうな
 れば現代で言えば遠隔操縦パネルに相当
 する道具があればよく、キーをたたか



THIS UNUSUAL FORMATION on the surface of Mars, shown in a 1976 photo taken by NASA's Viking spacecraft, is a 2-km-long rock that is shaped like a human face. Scientists have speculated that it could have been carved by a lost civilization or may be just "a trick of nature." AP PHOTO

■1976年、NASAのヴァイキング探査船により、火星のサイドニア地区で撮影され
 た特異な構成物。人面の様な長さ2kmの岩である。この“顔”と付近の地形には“知
 的設計”の形状がみられ、“自然のいたずら”であるか否かの論議が続いている。
 また、この画像のコンピュータ処理により、目の中の眸、目の下の涙が現れたとも
 伝えられ、研究者が本を著わしている。地球の遺跡にも「涙を流す太陽神ピラコチャ
 像」がティアワナコの太陽の門に刻まれている。参考までに火星の顔と並べてみた。



ボタンを押すだけで、瞬時にシンタが地
 上に移動しスタンバイすることになる。

シンタは“雲居”をつきぬけ“星居”
 をつぎぬけて“天の国”に到達した。

“天”とは、一体どこを指すのであろ
 うか。可能性の一つに、地球上の他の地
 点までの飛行を、そう表現したとする解
 釈も成立つが、本論ではあくまで地球外
 に到達地を求めていくことにする。

地球の衛星月までは38万キロである。
 “天の国”を月世界に置き換える解釈は
 これまでも多くの研究者が取り組んでき
 た。また、“6つの星居”を文字通り外
 惑星に当てはめると、月を惑星と数えた
 場合でも“天の国”は冥王星となってい
 まうので、現実的とは言えない。

最も現実的な“天”の解釈は、地球上
 空の静止軌道に配置された巨大宇宙船で
 ある。

いずれにしても問題を提起するだけで
 解明には到れない。筆者はオキクルミが
 宇宙からの訪問者で、空中機械シンタが
 宇宙機械でもあったなら、当然考慮しな
 ければならない現実問題を論じている。
 これを論じるに当たっては、現地球文明
 における最先端のテクノロジーが“導き
 の手”である。“飛行”を“仙人の能力”
 で納得するような時代ではない。

■オйнаの「天国」と未確認衛星■

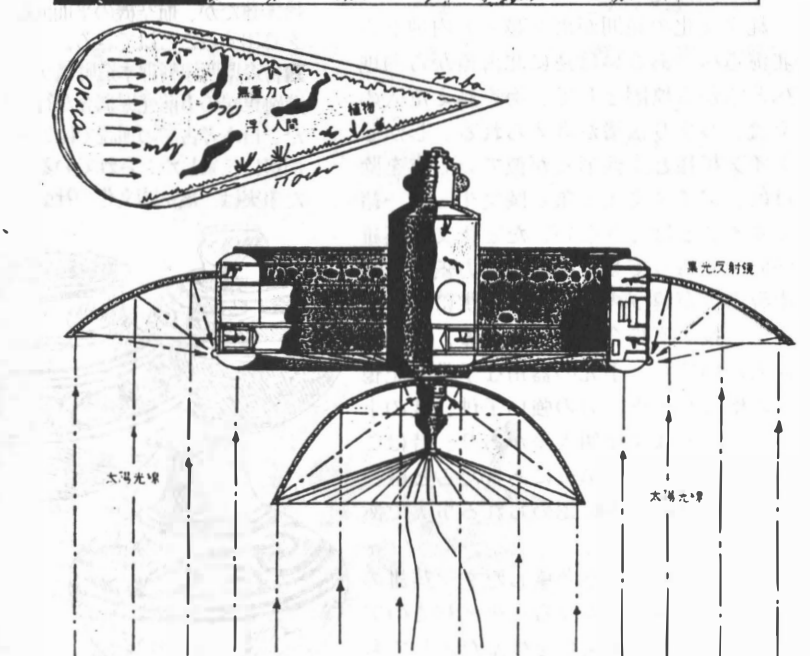
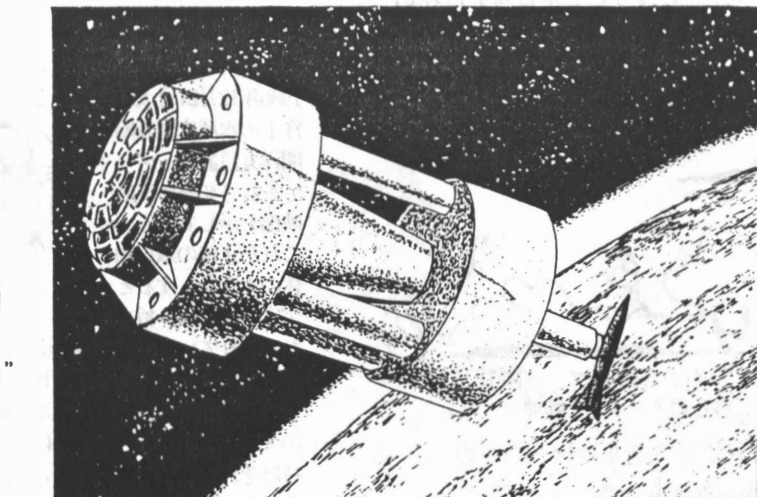
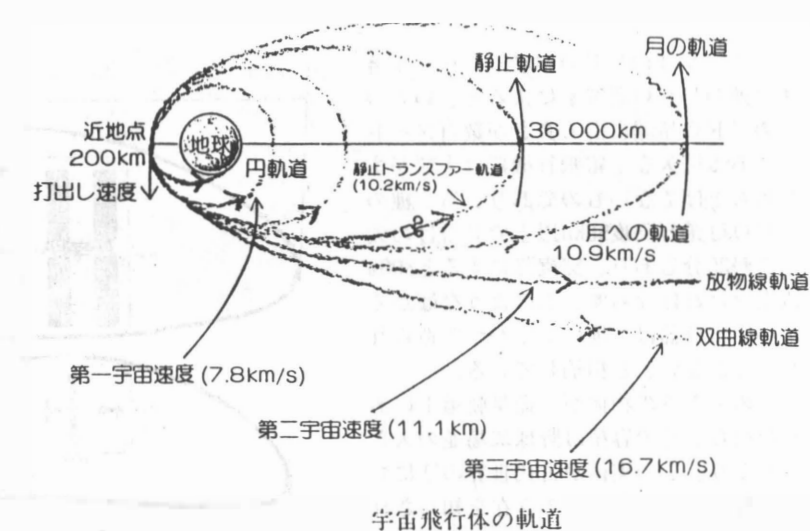
宇宙時代の我々は、信仰世界における
 の“天のかたの国土”を“他の天体”
 ではないかと想像したり、さらに「フ
 リーダム」や「スペース・コロニー」構
 想と比較し、これらが完成されれば最も
 近い「天空の住まい」となることを理解
 できるようになってきた。

従って、もし地球技術を上回る技術が、
 古代地球に存在し、何らかの地球単位の
 作業を行っていたとしたならば、物資
 の保管や要員の待機休息、また各種実験
 や会議場などを兼ねた衛星軌道のステー
 ションを配置していたであろうことは充
 分に有りうることである。

20世紀に入って、実際に謎の人工天体
 が観測されている事実は、未確認の来訪
 者が古代から訪れていたなら、これこそ
 がかつての「天の国」の実在性を裏付け
 るものとなろう。

1960年2月10日国防省発表で話題とな
 った極軌道に近い軌道を回る黒色物体、
 “15トンの黒騎士”などはその一例で
 ある。

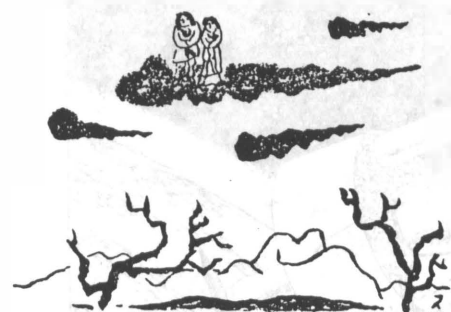
当時、衛星の重量はみな軽かった。19
 65年の2人乗り人間衛星ジェミニで2.1
 トン、ソ連のソユーズでも6.7トンであ
 る。1970年台の3人乗りサリュートにな
 って初めて18.4トンと、黒騎士とほぼ同
 じ重量となる。



■神話世界の天と地を、現代に当てはめたら、「天の国」とは、構築計画が進められて
 いる宇宙ステーションであり、天と地を往復する「神の乗物」とはスペースシャトルと
 なる。地球人類は、自ら翼で空を飛び、ロケットで宇宙へ飛び出したことにより、古代
 の物語に接近することができた。図は最も古典的な“天の国”。上は19世紀のツオルコ
 フスキーが考えた宇宙温室構想で、スペースコロニーの元祖。下のコーン状ルーム内部
 に無重力で浮く人間と、周囲の壁に太陽光線で植物の育つ状態を描いている。その下図
 は、今世紀はじめのヨーロッパで、ノールドラックというペンネームで発表された“天
 界の人工島”。太陽光線を取り入れる工夫がなされている。
 (図はいずれも出所不明『宇宙機メカニズム図鑑』より)

また、ソ連のUFO学者F. ジーゲル著『ソ連のUFO研究』によると、いくつかのUFO情報にある長さが数百メートルもある巨大な宇宙飛行機器は人類がまだ打ち上げていないものであり、ある種のUFOは飛行高度50Km以上で見掛けの大きさが20分もあり、実直径にすると300m以上なければならない、このようなばかりい宇宙機器は、地球上でかつて造られたことがない、と指摘している。

この大きさの物体が、衛星軌道上にあったなら、その容積は野球球場並の大きさとなり、この実体が古代世界の空にも存在していたなら、その存在を知らされるか訪れた古代人により、「天の国」と表現されてもけつて不自然ではない。

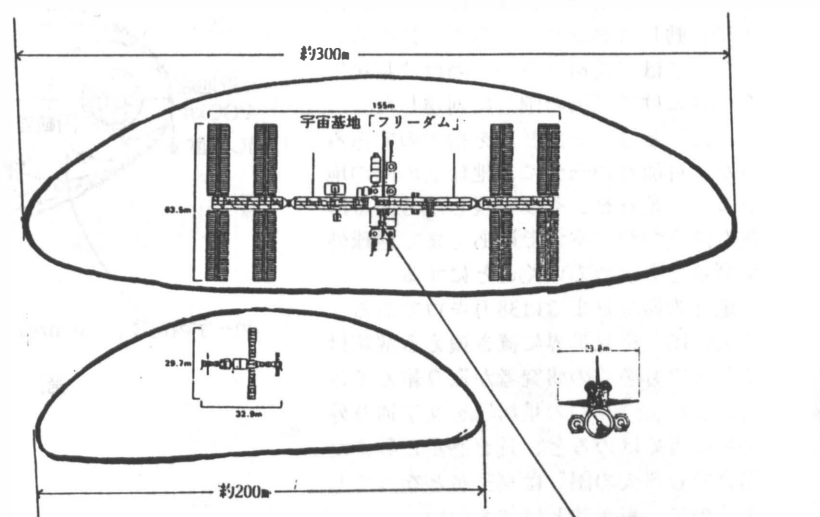


↑アイヌの国を出て、「隣国」へ移るオキクルミと姉神

■オキクルミ教化地区としての 亀ヶ岡文化

縄文文化の範囲が海を越えて内地から北海道へ、あるいは逆に北海道から内地へと広がる原因として、海を越えた人の交流、つまり伝播が考えられる。しかし、アイヌ模様と土偶形式が似ている点を除けば、アイヌ文化と亀ヶ岡文化とを一緒にすることはできない。たとえ文化英雄が同一であっても、環境や能力差により指導内容が違うのは我々が子供に何かの技を伝授する場合と同様である。子供が何人かいても、手先の器用な子供、記憶力の優れた子供、力の強い子供、歌の上手下手など様々な個人差があり、昔はこうした差が、民族単位にあったことは様々な文化遺産の中に認められる事実である。

従って、民族差を考慮した文化英雄の活動が、必然的に異なる文化としてのアイヌ文化と亀ヶ岡文化を生んだとしても不自然ではない。あたかも、民族差を主張するように、両者の特徴は対象的である。オйна、カムイユーカラ、ユーカラ各種と無数の伝承や歌を産しながら、伝統的民具でさえ古いものは海外に持ち去られてなく、文化自体の年齢さえも若すぎて見られるという誤解を生んだアイヌ文化に対して、亀ヶ岡文化は「世界的にみても、技術的に現代でも真似がでな



■ジーゲル教授の述

べる巨大UFOは、1986年12月21日太平洋上の水産庁調査船開洋丸設置レーダーでも長さ402mの反射映像を示している。これが正味の飛行物体の大きさだとすると、宇宙空間では、将来計画されている全長155m幅63.5mのフリーダムをすっぽり包み込む容積の実体となる。また、1973年6月30日アフリカ、チャド上空、17000mで日蝕観測のコンコルド機上から撮影された発光物体は200mの大きさだと推定され、これは宇宙ステーションミールの約6倍。容積はそれ以上である。これら巨大UFOの居住空間を推定することは困難だが、航空機の平面面積に対する座席空間の割合から座席数を算出することはできる。

■青森県西津軽郡木造町亀ヶ岡出土の土器と土偶。1973年、バイパス工事で遺跡東端の事前発掘調査が行われた際、直径4ミリのガラス玉が発見された。日本考古学の通説では、ガラス玉は弥生時代に初めて北九州またはその周辺に伝来したとされている。それが本州北端の縄文晩期遺跡から発見された事実は、亀ヶ岡文化の社会を考える上で重要な資料とされている。



1896年に佐藤伝蔵氏が発掘した土器の一部
(『東京人類学会雑誌』第124号より)

1886年に発掘された高さ33.5センチの土偶
(佐藤公知編『亀ヶ岡文化』青森県文芸協会刊より)

い程、高度な技術の所産である”考古学的遺物を多数産出し、これまた珍重さから海外へ多数流出している。

筆者の知人の関係で、亀ヶ岡出土の遮光器土偶の復元を行なった焼き物の専門家は、焼き上がるまでの温度管理に大変な苦勞をしたと述懐しておられる。その苦心の作品の一つが筆者の手元にあるが、独特の黒光りの再現と忠実な形態の復元は、巷で高額販売されているセラミック製のものとは雲泥の差を感じる。亀ヶ岡の地で育ち、地元の土を条件を知った者でなければ不可能な作業なのであろう。復原作者は、何度も何度も割れてしまう失敗を繰り返したそうである。温度の管理は高度な技術に属するものである。また一方、亀ヶ岡文化の内容を伝える神話伝承は存在しない。まるで、亀ヶ岡文化人は地上から消滅したかのよう...

■遮光器土偶制作の目的は何か？

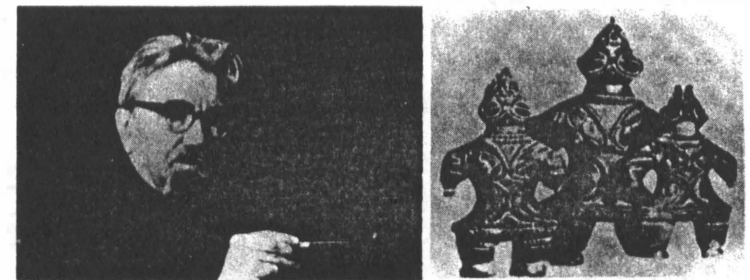
いわゆる“宇宙考古学”という便利な道具で、これをNASAの宇宙服に似ているから宇宙服だ、という理論は極力避けたい。

現代のUFO、宇宙からの飛来は、明確な目的をもって行なわれているのであって、古代人が未開だからという理由だけで、技術援助に飛来したのではないのと同様、地球人の自律性や自発的意思を無視した接触図式は、いかにも地球的発想である。

例えば現代UFOの地球接近の動機が“作業の一環”であることを自ら示しているUFO事件として、1959年のバプア島事件が挙げられる。英国人牧師とバプア原住民が見守る中、輝く円盤から乗組員が姿を現わしたが、彼らは最初、甲板で何かの作業をしており、その作業の中人々に注意を向け、人々の手を振る合図に応答したのであった。つまり、結果としてバプアの人々にキリスト教宣教師の説く“パラダイス”が現実存在する確信を与えることになったこの事件は、UFOがバプア人を目指して地球に接近したのではなく、作業の中でバプアを訪れた事を教えているのである。

従って、宇宙人の介入によって人類の進化が加速されたとか、飛来目的が地球人類の進化の操作にあるかの如き先入観は余分な雑念、SF的要素であろう。我々は小説の材料を求めているのではないのだ。

我々が土や木で何かの形を作る場合、それを作る制作者の職種や立場により目的は様々である。ある人は建築物や自動車のデザイン開発上の作業として正確な縮小模型を作るし、ある人は子供が遊ぶ玩具として、またある人は部屋を飾るイ



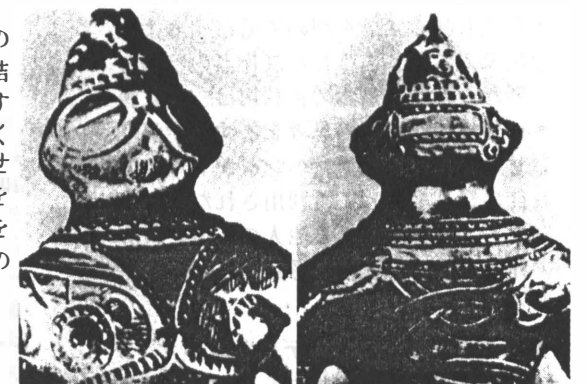
A. kazantzev

■A・カザンツェフ他著による邦題『宇宙人と古代人の謎』の中で、カザンツェフは、“宇宙人の残した形見”と題し、フェリックス助教授の言葉として日本の土偶に触れている。

「日本の私の友人で、私にいくつか土偶を贈ってくれた松村さんは、服がふくれ上がついていると言っています。石器時代の日本人たちは、確かに圧搾空気のことを知っていたのではないのでしょうか(写真右上)。この土偶をごらん下さい。呼吸用のフィルターとマスクがはっきり見えるでしょう。前の中央アジアの絵と違って、とてもリアルに描かれています。

今度はヘルメットをはずした土偶の写真をみてください。はずしたフィルターのところには口があり、眼鏡のところに異様な目があるでしょう。つぎに土偶をひっくりかえして後を見てみましょう。のぞき窓がありますね。

石器時代の人たちが、密閉したヘルメットの構造だけではなく、結合機構の細部まで写すことができたとは驚くべきことではありませんか」「衣服の模様をみてください。星雲を示す螺旋線は星の世界のエスペラントですよ」



■イギリス人牧師、ノーマン・クラットウェル神父著邦題『バプア島の円盤騒動』によると、バプア地区におけるUFO出現は1953年より始まっている。同島における目撃者は、英国からバプア原住民への宣教活動に訪れた牧師で、原住民の子供達は人工衛星の知識もあり、それとの比較で異常なUFOの飛行が記録された。そして、1959年6月26日午後6時すぎ、ボイアナイに劇的な瞬間が訪れた。いままで不思議な動きをする“怪光”だったものが、ハッキリと円盤状の姿を降下させ、その乗員までもが甲板に姿を見せたのだ。目撃者ジル神父は分刻みでこの出来事を記録。人々も署名入りスケッチを記録した。翌日には再び円盤が降下、ジル神父が円盤の人影に向かって手を振ると、彼らも手を振ってこれに応えたのであった。

ンテリアの道具として作る。

古代においても同様である。土偶はすべて女性を形どった呪物であるというような、正確さを欠く意見は学術論議から遠い体質の所産であり、原始社会に対する蔑視を感じさせる。

土偶各説の学史を紹介し「土偶を一つの意味だけでとらえようとする事自体に誤りがあったように思われる」(野口義麿)という見解が正確な事実である。

また逆に言えば、「意匠発生」における形状の洗練さを原点に求めることが正しいとすれば、精巧きわまりない亀ヶ岡式遮光器土偶こそ、当初の制作動機に従って生みだされたものであり、他の地の類似土偶は、後世の人的交流による模倣(流行)や信仰道具への転用であった可能性がある。これは例えば、世界に分布し大小の差はあるも、地上に石でサークルを形成するストーンサークルに、後世の人が訳も知らず骨を埋めて墓にするような現象である。こうした制作者の目的から外れた遺蹟や遺物の再利用は、更に後世に登場した我々の思考をますます混乱させる。英国のストーンヘンジがドルイド教徒の祭り場として再利用されたり、エジプトファラオによる他人の石像に自分の頭像を載せるという愚行なども同様である。

■遮光器土偶実用品モデル考■

従来の考古学的見地から見た「呪術的作品」としての土偶制作理由を離れて、これを或る目的で制作された特殊な形の道具を表したものと仮定して考察してみたい。

祭りの仮装道具も、宗教的神話が基礎となって発達したものであるから、やはり「呪術的」表現の道具とみなし、実用品とは考えない。

亀ヶ岡遺跡からは、遮光器スタイルとの関連を思わせる仮面を付けた人物の土偶が発掘されている。一つは亀ヶ岡泥炭層遺跡、一つは床舞である。人物の頭部はマゲを結った写実的な表現で、耳には耳穴も見える。毛を表現した何本かの線はまばらだが的確な表現だ。この仮面は実用仮面とみられており(江坂輝弥氏)縄文晩期の作だが、年代的には遮光器より前に置かれている。これを、遮光器実用仮面の初期段階と解釈できないことはない。

遮光器の大きな目が人間の目と異なるのは、顔全体が目と言えるほど大きいことである。このことはこれを実用品と見た場合、顔を動かすことなく、視野を広く保つ必要の手段と受けとれる。

また、目の真ん中に横筋があって、閉じた状態、もしくは開閉自在を表現した



■現代の船外宇宙服についての知識

- まず、その機能は次の7つである。
- ①真空の状態から人体を隔離し、必要なガス環境を与える。
 - ②人間が必要とする酸素を常時補給し、排出される二酸化炭素を除去する。
 - ③人体から放出される熱や水蒸気を除去し、快適な作業ができるよう温・湿度制御機能をもたねばならない。
 - ④直射日光による熱や、宇宙塵を遮断する。
 - ⑤作業が容易にできるよう可性を有していること。
 - ⑥長時間の船外活動に耐えられるよう排泄処理や飲料水供給が可能であること。
 - ⑦効率的船外活動を行えるようにするため、宇宙船内などとの通信が可能である必要がある。
- 以上の機能要求に基づく船外宇宙服の構造(次ページ)を見てみよう。
- ①は圧力服の下に着る液体冷却服で、服内の冷却水パイプを通し体温を一定に保つ。②は「サービスおよび冷却用アンビリカル」とよばれ、電力・通信線および酸素・水などの給排を行うための多目的コネクターである。③は船外活動用の「電気ハーネス」とよばれ、体温・心拍などの計測データや音声信号を可搬型生命維持装置に送るコネクター。④は「表示および制御モジュール」とよばれ、手動で服内の温度や音声音量を調節するためのもの。⑤は船外活動用バイザー」とよばれ、ヘルメットに直射日光の当るのを防ぐためのもの。⑥はヘルメットそのもの。⑦は「腕アセンブリー」とよばれ、腕と肩を構成するベアリング可動型の腕部。⑧は手袋で手首・指が自由に動かせる。⑨は「下部トルソー」とよばれ、圧力服のスポンの部分。⑩は「ハード上部トルソー」とよばれ、ヘルメット、腕アセンブリー、下部トルソーおよび可搬型生命維持装置が取り付けられる。⑪ 生命維持装置 ⑫ 緊急用酸素。⑬ 望遠鏡出し用 ⑭ 二酸化炭素・有害微量ガス除去用 ⑮ バッテリー ⑯ 「エアロックアダプター」 ⑰ マイク・ヘッドホン ⑱ 飲料水用バッグ ⑲ 排泄バッグ



■極北地方住民の現用遮光器の各種『東洋学雑誌』第150号(明治23)記載

■青森県亀ヶ岡泥炭層遺跡出土の女性裸像。高さ19.5cm 縄文晩期 足にパンツをはいているのに注意。

状態は、エスキモーの雪メガネ、つまり強い反射光線から目を守るための「遮光器」によく似ている。遮光器は強い光を遮る目的だが、土偶メガネ横の突起を機能的にみると、通常光線の下では「メガネ横のツマミ」で開き具合を調節することも有りうる。

その突起は、現代の蝶ネジに似ている。この土偶がメソポタミアやアフリカの神像の目と似ている、という見方もあるが、筆者にはそうは見えない。

現代世界でこの形に似た実用品を搜してみよう。まず雪メガネ。本州北端であるから降雪対策は重要であろう。しかし、前述の仮面にみられる頭部とは異なり、人間の姿を極端に誇張した地母神表現のようなものでないとすると、この姿は頭全体を包む「何か」を表したものである。

つぎに毒ガスマスクである。最近の中東危機にイラクの毒ガス兵器に対処べくガスマスクが近隣諸国の必需品となった。大きなメガネと呼吸フィルター装置がすべてである。人体に有害な気体の成分を遮断する目的で使用されるものである。毒ガスは自然災害でも発生する。火山噴火によるガス発生である。近年でも噴火口麓の村が全滅した事例がある。だが、遮光器土偶の口はあっさりとした構造のものと、まるでガスマスクのようなボツボツと穴のあいたフィルターを思わせる謎の構造を持つものとに分かれる。亀ヶ岡出土の大型遮光器土偶は、ボツボツ口でない方である。

次に潜水メガネがあげられる。これは水中という異質な環境で活動するために目を保護し視野を広げるメガネと、水深や目的によっては体全体を水圧から保護するために造られている。遮光器土偶をそのまま実用品のモデルとした場合、この潜水服が形態的にもっとも近いように思われる。

次に宇宙服だが、現代の宇宙飛行士が船外活動を行なう場合、透明ヘルメットの上に機外バイザーをかぶる。これは紫外線よけマスクで、外から素顔が見えないほどのサングラスの被いである。

真空の空間における飛行士同士の会話は、ヘッドフォンとマイクロフォンを通して行なわれるが、この装置は宇宙飛行士が頭にかぶる帽子(コミュニケーション・キャリアー)に付いており、通信アンテナがバイザーに設置されている。

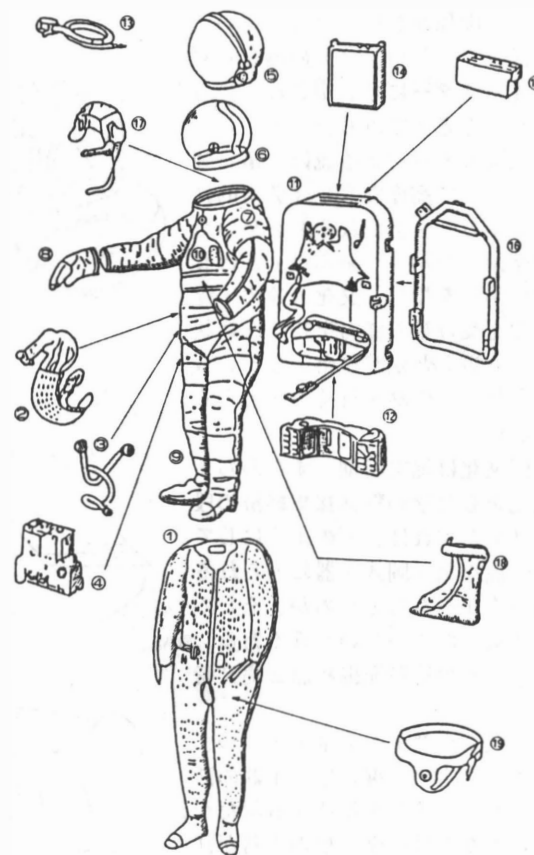
さて、このように現代世界の遮光器土偶類似形態の道具から、それらが古代に存在していたなら、どんな使われ方をしたか、考えてみたい。

雪メガネは本州北端の地にあつては降雪の必需品かも知れないが、過去現在に



■1990、9、イラクのガス兵器使用に備えたガスマスク

●水中通話機 Underwater Communication Device



■船外宇宙服を構成する各部分。前ページに説明あり。単に空間移動のみに使用されるとしたら、省略される箇所もあるだろう。

おいて、日本列島の降雪程度では不必要だったらしく、現実生活に遮光器メガネが一度も制作使用されなかった事実から、この可能性は排除すべきかと思う。

次に毒ガスマスクだが、古代の火山噴火や何かの災害による有害物質から身を守る事情が発生したとして、制作理由が生じる。われわれの時代でも、火口近くの村が火山噴火性のガスで多くの死者を出した出来事があった。しかし、有毒ガス対策は頭部の保護だけで充分である。同じ素材で体全体を覆うような姿にはならない。

つぎに、潜水具はどうだろうか。この場合、古代の狩猟・漁猟生活者が潜水道具を用いて深海に潜る理由があったかどうか問題となる。

あるいは、深海を調べる理由はどうだろうか…。あるいは生活基盤が水没し水の底になったという理由も考えられる。

しかし、大洪水などの難を避ける手段とは、別に水中生活をしなくてもできるのである。

だが、世界の神話には、カナダのハイダ・インディアンのように、洪水が地球を覆った時代に雷の神によって、“鉄の頭の蛙”に変えられた人類について語ったもの（ジェイムス・チャチワードによる）もあり、関係がないとは言えない。

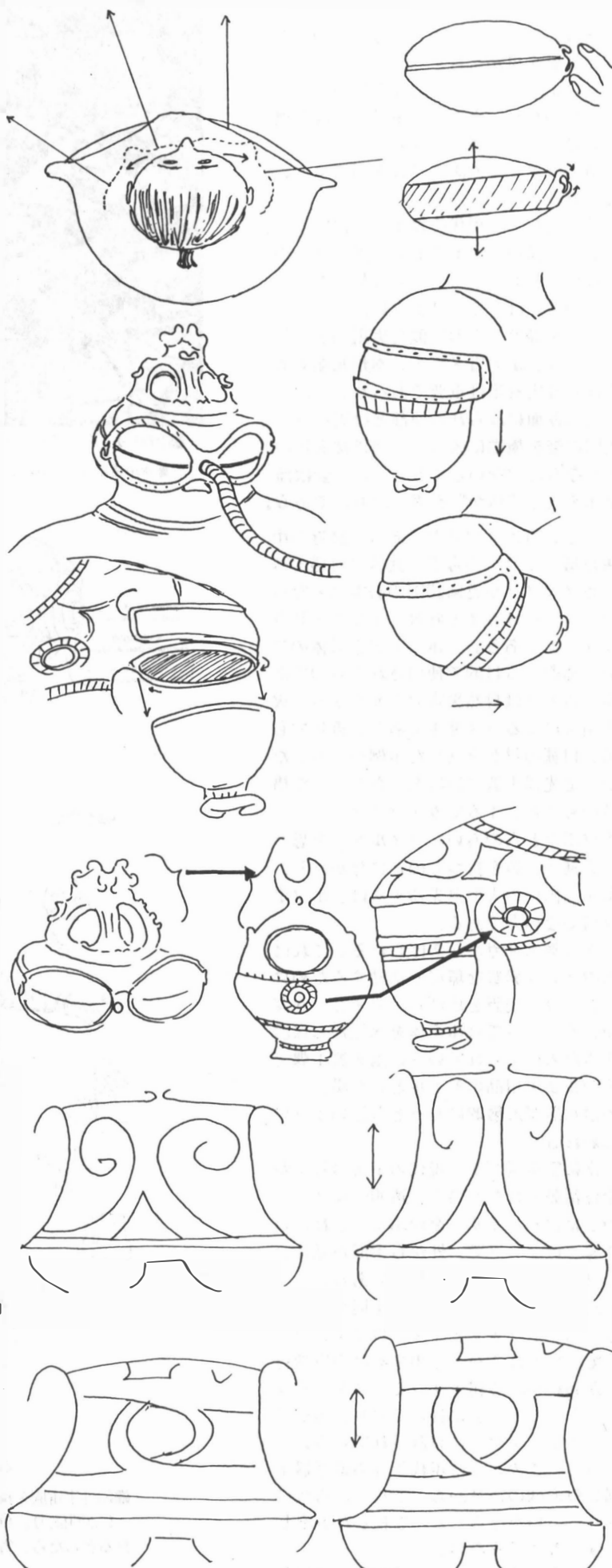
最後に最近、UFOファンのみならず東北の観光ポスターにも利用されている“宇宙服説”を考えてみる。

この奇想天外とも言える説は、亀ヶ岡縄文人が際立って高度な文化（芸術的に完成されているとも言われる）を築いた謎や、なぜ滅んだか（「滅んだ」とは普通、文化の消滅を指し、文化人達の子孫がその文化を受け継ぐ能力を持たない状態のまま“衰退”とか“墮落”していったと解釈される）の謎を解くカギとなるかも知れない。

「亀ヶ岡文化は縄文晩期、すなわちまだ農耕文化をもたない狩猟採集経済の段階にある社会とすれば、どのようにしてあの精ち華麗な亀ヶ岡式土器にみられるような高い文化をもちえたのか、そしてそれはなぜ滅んだのかという謎である。」（森浩一『日本の遺跡発掘物語2 縄文時代』）

さらに「完全土器」の大量出土。つまり、通常考古学上の発掘とは、土器の断片が発掘されて、それを復原する訳だが、亀ヶ岡泥炭層からは完全な形の土器が江戸時代から現代まで1万個に達するという説もある程の異常な遺跡なのである。

したがって、1959年調査報告書『亀ヶ岡遺跡—青森県亀ヶ岡湿地遺跡の研究』で、清水潤三氏はこの異常な保存状態を



■土偶を実用品として機能を推定したもの。開閉眼鏡、着脱部分、ダイヤル・冠図形の解釈、力学模様の解釈など。大変精密な造りである事に驚く。

当時の宗教的行事に関係ありとし、「祭りに用いられた土器が一所に埋められ、あるいは水中に投げられ、そのまま神に奉獻されたのではなかろうか…」との見方があるわけである。

この現象を宗教めきで合理的に考えると、こういうことが言える。

彼ら亀ヶ岡人が自分達の文化を未来に伝えるべく、土製品や土偶を安全な水の中に封じ込め、今でいうタイムカプセルを自然の中に形成した…。

土器大量投棄跡は、宗教的な動機よりも、彼らの文化が現代でも復元の難しい特殊な中空硬焼き土器製法に代表されるような「技術的」な動機によるものとしたほうが素直である。

そして、本人達はなぜか消滅したのだ。あるいは、居住地を放棄して“集団失踪”（退去、避難、移動）した、という言い方もできる。

亀ヶ岡式土器を分類し体系化した山内清男氏は、関東から西で発見される亀ヶ岡式土器は東北から運ばれたか、亀ヶ岡の模倣したものとし、各地の同様土器も縄文晩期とした。

つまり、亀ヶ岡の“形”が広がったのである。亀ヶ岡式に追随する理由が“形”だけだったのか、亀ヶ岡文化人の“移動の特殊性”にあったのか、知る由もない。

■仮面と遮光器の制作背景

亀ヶ岡泥炭層出土の仮面をつけたリアルな人頭をみると、チョンマゲを結った人物が顔面を覆う仮面をつけている。この仮面が実用的な目的で造られた道具なのか、信仰的な目的で造られた道具なのかで、道は大きく分かれる。これを前にして現代の我々がすべきことは、当時の亀ヶ岡の人々がどのような生活を営み、どのような人生観、死生観をもっていたかを探ることであろう。

亀ヶ岡式土器の洗練された感覚は、黒焼き注口土器に見られる。亀ヶ岡式土器を残した人々の住居跡は他の地域に比べて少ない。亀ヶ岡文化期の遺跡数に比して住居跡の発見が少ない理由として、たまたま発掘場所が住居跡と離れていたとされている。岩木山麓の大森勝山遺跡では13×13mという協同体の生活ないし作業場跡が発見されており、その周囲に住居跡はなくストーンサークルが併置されていた。これは海外の例では、“神の山”シナイ山の麓に、宿営したイスラエルの集団が、神との契約の印として12個の石を並べた出来事を思わせる。岩木山も“神の山”とされているからである。

次に、亀ヶ岡人の埋葬方法だが、地表を楕円形（小判形）・隅丸長方形に堀り窪め、遺体を安置した後に埋め戻した土



■仮面をつけた土偶。（正面と側面）上は亀ヶ岡泥炭層遺跡出土。高さ3.5cm 晩期。下は青森県床舞出土。高さ6.5cm 晩期。下左は岩手県時前町の土製仮面。高さ10.3cm。下右は亀ヶ岡泥炭層遺跡。高さ11.5cm。いずれも晩期。生活の中に仮面使用の原因が発生したのは確か。宗教行為以外の実用目的を考え、遮光器発生との関連を探ることは決して不自然ではない。災害襲来など人間環境の変化や、写真左上のような耐圧服が、古代UFOへの同乗理由と共に発生したのかも知れない。



図：出射史明著『宇宙機メカニズム図鑑』より

こう墓が一般的で、同じものは北海道札幌遺跡でも発見されている。

亀ヶ岡における環状列石は、先に述べたように青森県の最高峰岩木山東北麓で発見されたもので、77の石組が広く環状に設置されたものであるが、全体のプランは世界共通とも言える楕円の形状をなしており、長径49m、短径39mを有する。

組石は小さく環状に配石されたもの、石が重なり合っているものなど6種に分類され、実測図によると大湯ストーンサークルのように、かつては二重の環状配石であったと考えられている。

また、ストーンサークル自体に墓はないが、外部周辺に存在するようであるとの報告（ニュー・サイエンス社『亀ヶ岡式遺跡』）からすると、ストーンサークル建造目的と、当時から後の死生観に関係があるのかも知れない。

北海道忍路のストーンサークルは、東北のストーンサークル文化（わが国では、一応縄文中期に出現し、後期に入って爆発的な広がりを見せるが、晩期になると急激に下火現象を起こすという変遷がみられるとされる）と同一の価値観による目的があったとするならば、建造目的に示唆を与える何物かが存在してよさそうである。

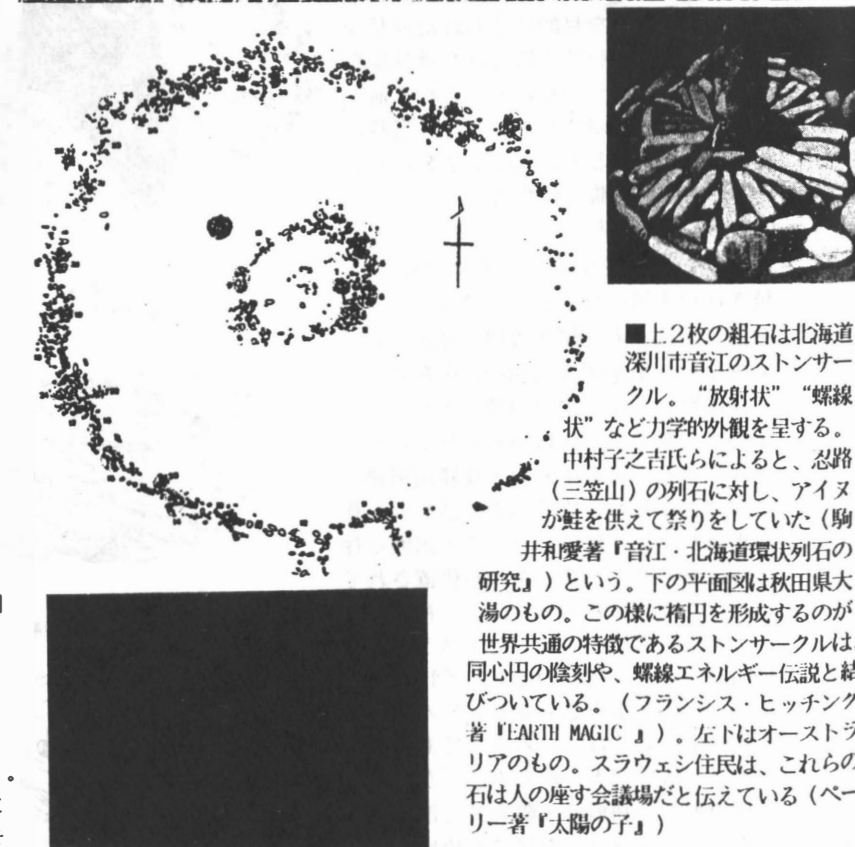
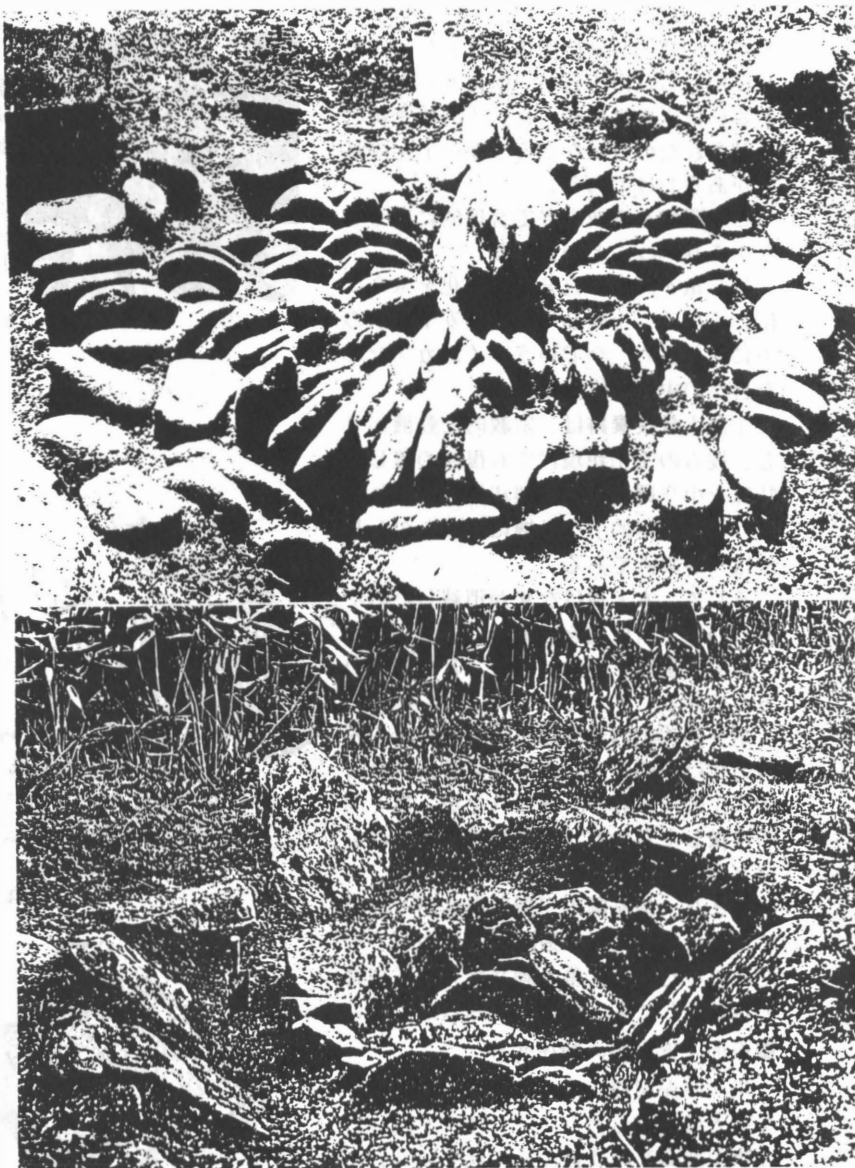
墓が周辺にみられる、というのを示唆の一つとして見ると、死後の世界がサークルへの接近で位置づけられるのか、彼らの神々への世界に上昇する基地がストーンサークルであったのか、いずれにせよ人生の最終目標が託された可能性も考慮すべきである。

また、忍路の場合、その近くに有翼人像を無数に刻んだフゴッペ洞窟遺跡があり、それらの群像が上へ上へと上昇する姿勢で描かれているところから、アイヌの神話世界の反映であろうとする説、シャーマニズムの世界を描いたとする説などがあり、筆者としては、やはりオキクルミカムイの文化圏内遺跡として、オイナの世界が表現されていると考えたい。そして、空への上昇、つまりアイヌの神の国“カント・モシリ”への新たな人生の出発を願う悲願が感じられる。

■“神の山”、“昇天思想”

ストーン・サークル、遮光器土偶、そして「文化神オキクルミカムイ」空中乗物（シンタ）伝承を結ぶもの■岩木山のサークル建造目的に示唆を与えるもの…これが謎の遮光器土偶だとしたら、どのような可能性の世界が広がるであろうか……。

まず、先に紹介した仮面の問題である。ある時期、亀ヶ岡の人々は仮面の制作に着手した。それは彼らの生活状態から考



■上2枚の組石は北海道深川市音江のストーンサークル。“放射状”“螺旋状”など力学的外観を呈する。中村子之吉氏によると、忍路（三笠山）の列石に対し、アイヌが鮭を供えて祭りをしていた（駒井和愛著『音江・北海道環状列石の研究』）という。下の平面図は秋田県大湯のもの。この様に楕円を形成するのが世界共通の特徴であるストーンサークルは、同心円の陰刻や、螺旋エネルギー伝説と結びついている。（フランシス・ヒッチング著『EARTH MAGIC』）。左下はオーストラリアのもの。スラウェシ住民は、これらの石は人の座す会議場だと伝えている（ペリー著『太陽の子』）

えて、現実的な問題との対処の結果であり、従って実用的な道具であった。

例えば火山噴火による降灰から五官機能を守るためとか、肌を直撃する有害光線や大気汚染等があげられる。

仮面はやがて、状況の進展に伴って頭全体を覆うマスクになり、さらに体全体をスッポリ覆う服に発展する。

顔の目に相当する部分は、強い光線あるいは紫外線などから目を守るために開閉式となり、口の呼吸具を含め、およそ素顔とは違った造作となった。

もし、これが宇宙考古学の指摘するような気密服であり、民族の存亡にかかわる天災の襲来に対して、人々の努力が開発せんとした防具のモデルであったなら、どうだろうか。

亀ヶ岡の人々の、世界に秀でた能力と文化は謎の消滅をとげた。

遺物の出土状態から、亀ヶ岡の消滅を地震津浪を原因とする説（佐藤伝蔵）、「地殻下降運動により水面下に没し泥炭植物の為に被覆せらるる」という地盤沈下説（岩井兼輝）がある。

文化を伝える遺物は、不思議にも大量の完成土器が出土するという稀な状態で、しかも、それらが“使用済み”もしくは“廃棄”を物語る謎の行為によって集中的に発見されている。それは、あたかも遠方へと旅立つ者が、世界に誇る技術の痕跡を永く保存する意思の結果であるようだ。

本来の制作理由を離れた地点で、外部の人間がこれを模倣制作しても、同じ品質の製品とはならなかったろう。魅力あふれる形態はブームとなって全国に広がったに違いない。同時に「これこそ、天へ去った神々の似姿である」という噂も流布されたであろう。だが、かんじんの原作者達はどこへ行ったのか。その子孫は…？

亀ヶ岡の消滅は縄文の終わりを告げた。それは、あの絢爛たる装飾古墳文化や石人石馬文化が、筑紫の君、磐井の退去と同時に日本から姿を消し去った事実とよく似ている。

すなわち、その必要がなくなったようにストーンサークルが姿を消した。後に移住した人々によって、遮光器土偶が彼らの神として祭られたとしても、直接の関係はないだろう。

天災の襲来に際して、文化英雄の中には、米インディアンの場合のように、洪水の直前、人々に避難方法を教え、矢を射て綱とし、それをよじ登って雲の中（おそらく宇宙船）に避難させた事もあり、“空中避難”という対処の仕方を示している。

■古代レーニア山から空へ逃れた人々の伝説■

空飛ぶ円盤史開幕の舞台となった米国ワシントン州レイニア山のインディアン名は「タコマ」である。このタコマの山を舞台にした伝説に、“大洪水時に空へ避難した人々”の物語がみられる。

「昔々、天上界の神チヒー・サハレが人々に対して腹を立て、洪水を起こして世界中の人間を溺らせてしまおう、と考えた。しかし一人のメディシンマンに「いまからすぐタコマ山に登って、山の頂上にかかっている雲の腹に弓の矢を射込むがよい、そして、大水が出たら、矢の鎖を伝って天上界に逃げるがよい」と教えた。メディシンマンは、すぐに弓矢を携えてタコマの山頂に登り、雲目掛けて矢を射ると、矢は雲の腹にしかと突き刺さり、次の矢を放つと、それは最初の矢の後に突きささった。こうして順々に矢を放つと、雲の腹から長い矢の鎖が出来上がった。メディシンマンは山を下り、家族と動物を呼び集めてタコマの山に登ると大雨が降り出し、大地の上が水面となって山の頂上に迫ってきた。メディシンマンは「さあ、みんなこの矢の鎖を伝わって天上界に登るんだぞ」と言い、家族の者を登らせ、自分は最後から登った。こうして洪水が襲い、やがて大水が引いて乾いた大地があらわれると、彼らは矢の鎖を伝って地上に降りてきた」

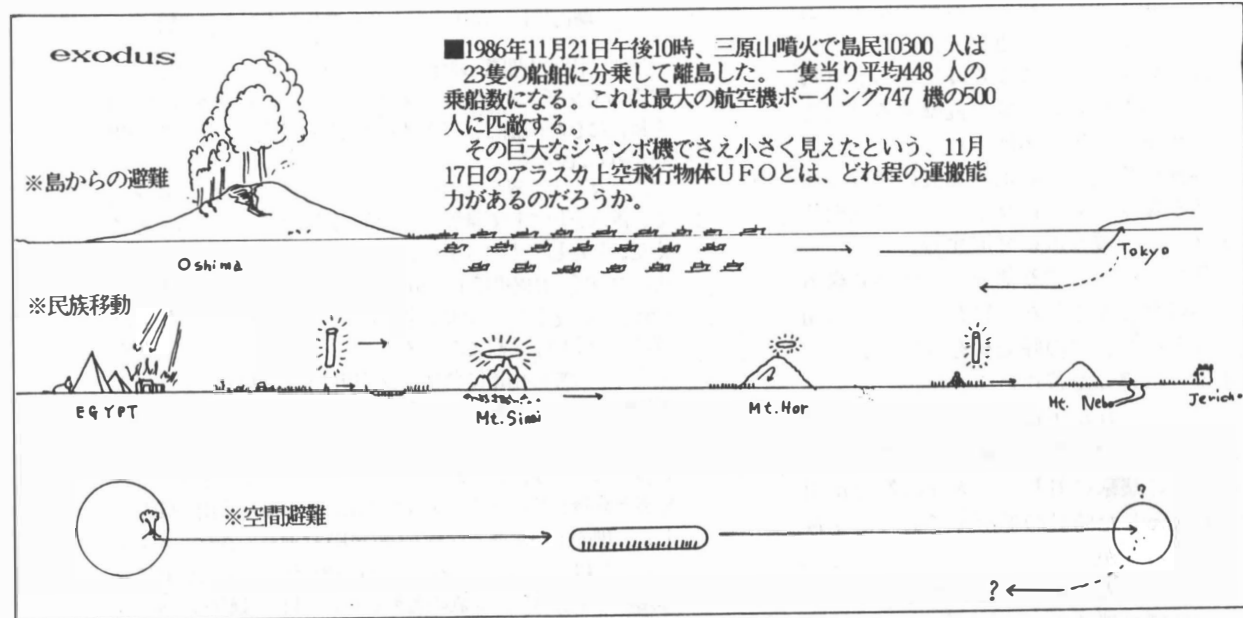
この伝説はけっして架空の物語とは言えない。洪水や大異変に際して、一家族や家畜が神に選ばれ船、箱、カヌー、高い山などで逃れるというテーマは、世界中の神話伝説にみられるものであり、そこには何か歴史的イベントがあったようである。そして、上記のタコマ伝説を現実として捉えようと、雲とは雲のような外観の巨大宇宙船であり、それは当時の世界で「天上界」であり、矢を打ち込むと、未知の引力で船体に固定し、次からの矢も同様に宇宙船からのコントロールを受けて力学的に一体となって鎖となり、人は各々の矢の接続部に足をかけて上へと昇ることができる。問題は、金属でもないおそらくは木と石の矢じりでできた物体を、どうやってくっつけ、人の体重を支える程強靱なものにできるか、という点にある。もし、我々の科学が、異質な物体同士を仮接着する技術を可能にしたなら、この物語の現実味は宇宙技術を持ち出さなくとも一層高まることになる。

われわれにとっての課題は、「こうすれば、こうなる」と高い知性より教えられたとしても、それをそのまま、素直に実行できるか、ということになろう。雲から山の頂上まで仮に300フィートあったとしよう。1フィートの矢を射たしたら300本の矢を使用しなければならないのだ。

ヘブライ神話のノアが、洪水襲来を神から予告され製作したという箱船を考えてみよう。その大きさは、長さ300キュビト、幅50キュビト、高さ30キュビトであったという。キュビトはヒジから中指の先までの長さなのである。筆者の1キュビトは41センチになる。これを基準にすると、箱船は300×0.41m=123m、50×0.41=20.5m、30×0.41=12.3mとなる。この大きさは、紀元前1500年のエジプト商船の長さ27.4mと比べると、個人や家族で製作する限界をはるかに越えていると言わざを得ない。小さな船で洪水を乗り切ることは、不可能であり、このサイズが必要だという力学を、たとえ学んだとしても、いくら神からの助言とはいえ、独力でこのような巨大船を建造することは現代人にはとても無理だ。しかし、それを実行する力量が、洪水後の地球再建には必要だとする知性によって、ノアは地球のかん難を乗り切る適任者として選ばれた。その強靱な精神と体が、後世「聖書」という稀な書物を世に出す基盤となったのである。

タコマの天への昇降口には「邪悪な者」も集まって登り始めた伝説は言う。彼らは綱を切られて落下した。本州北端の亀ヶ岡が離陸場だとしたら、それを知った別勢力の集合場（恐山・遺跡の霊的解釈集刊他）になったかも知れない。

■神話引用は、『世界神話伝説体系9北アメリカの神話伝説』名著普及会刊によった。



現代でも、火山噴火による危険から島民を守るため、自衛隊の艦船が本州への輸送を行なったし、有事発生などの情勢激変と共に、寄留国から本国へと空中輸送される人々もいる。

同様にして、亀ヶ岡でも、何らかの自然災害の接近に際し、向学心に燃えた人々に感じた文化神オキクルミカムイが、彼らを他の天体へと避難誘導するために空中機械シタ船団への同乗を許し、汚染大気と真空の空間を通過する間の保護服として、機密性の高い、ふくらませた衣服の開発を促し、ついに人々は故郷の地、故郷の星を離脱して、オキクルミカムイほか文化神が、“天の国”に用意した地球人居住区へと集団移動させた可能性は十分にある。

彼らの向かったカント・モシリが、いずこの天体であったのかを知るヒントはない。だが、彼らがいつか、故郷地球の将来を心配し、あるいは望郷の念にかられ、年月を経て地球帰還を申し出た時、その姿を我々の前に現わしてくれるだろう。あるいは、すでに彼らは帰還したのか…。

■民族大移動とUFOの役割■

旧約「出エジプト」はエジプトに寄留したイスラエルが不当な奴隷扱いに苦しむ時代、解放者モーゼが帝国からの脱出を決行する物語である。この計画を立て、解放者に計画の内容を話し、解放者を絶えず励まし、背後から援助しつつ計画を成功に導いたのが「神」という未知の存在であった。

シェキナ(神のみ座)とも云われたその栄光の座に立つのは人間の姿であった。“火の柱”に立つ人はゴセンの地を照らしオンの子目指して進み、太陽の市にさしかかると腰の剣を引き抜いたように見えたと記す文書もある。

米国の牧師で神学者・物理学者でもあるバリー・H・ダウニング博士は、解放者モーゼとイスラエル一行を導いた「火の柱」「雲の柱」についてこう述べている。

『「火の柱、雲の柱」という言葉は、ヘブライ語原典では「アムード」と「マゼバー」の二通りが使用されている。前者は「円筒柱」、後者は“(平べったい)枕”の意とされる。興味深いのは、現代で目撃されるUFOの形態も、ほぼこの二種類の形に対応していることだ。「円筒柱」はふつうハマキ型と呼ばれる巨大な物体で、母船の可能性もある。「枕」はその形状からいって、円盤を連想させなくもない。いずれにせよ、日中はよく雲状物に包まれて目撃されるし、夜間は強烈に光輝くのが特徴で、この点も照応する』(アーウィン・ギンズバーク博士著邦題『謎の創世記』より)



居住地としての火星

神話伝説にみられる天女や神の子の地上寄留テーマの特徴は、飛行服を奪った男の妻から民族の祖に至る役割の親密さである。そこには「異種」といった現代の感覚でとらえる「宇宙人」の姿はない。この特徴はヘブル人伝説ソドム・ゴモラ壊滅を通知に来た2人の「御使い」を迎えたロトの場合にもみられる。これらの物語りの「逆」が、人類による「天」もしくは別世界への寄留というテーマであり、それらを現実的なこととして我々の心を捉えるのが月や火星の存在である。

中でも火星は、現代宇宙開発にとって月に次ぐ目標となっており、地球周回軌道上での長期滞在が火星旅行を目的とした実験であることは誰の目にも明らかである。

惑星が生命を支えるには大気、水、温度が適当、という条件を満たさねばならない。火星は大気もあり水もある。温度は地球上にある種の生命にとっては辛うじて生存可能な範囲とされている。火星の3分の1を占める「暗い領域」と呼ばれる謎の地帯が、有機物（藻類から植物性まで）によるものか、火山、風による非有機物なのかについて確認されている。極端に二酸化炭素の水だけではなく水も含む可能性は維持されている。ヘラス盆地西から発する急激に広がる雲、水の流れた痕跡を示す河底。火星は現代宇宙技術でも人類の常留地となることができるだろう。米ソは火星を目指している。火星が地球文明の前進基地になるのか、地球からの避難民と火星先住との対面場所になるのか。その前に地球の現実がある。

寄留惑星で学習し、自ら開発した宇宙船に乗って、彼らがすでに地球帰還を決行していたかも知れないことを示す事件がある。

1908年をはさんで、大接近の火星表面に謎の図形が観測されたが、不思議にもその図形が観測された1907年と1909年の間に当たる1908年に事件は起こった。

その年の6月30日朝、インド洋上空で大気圏に突入した未知の飛行物体が、UFOのように消えることなく軌道を示したまま、中部シベリアへ向かい、ケシュマ上空で東へ進路をとり、プレオブラツェンカ上空、3000m で今度は西へと方向転換し、ツングースタイガ上空で爆発したのだ。

この爆発の規模、飛行経路にみられる不可解、付近樹木の異常、爆発後の発光現象などにより、それがいん石などの天体だったのか、UFOのような人工物体だったのかについてソ連国内外で論争を呼び、今に至も継続している事は多くの人に知られている。その火付け役アレクサンドル・カザンツェフ、故フェリックス・ジーゲル教授による「ツングース宇宙船爆発説」の登場は、米国の空飛ぶ円盤開幕と重なった。

ジーゲル教授の名付けた「ツングース UFO」についての「古代亀ヶ岡人地球帰還説」は筆者の説ではなく、かつて多数の同僚に混じってUFO学習を経験した中で学んだものである。

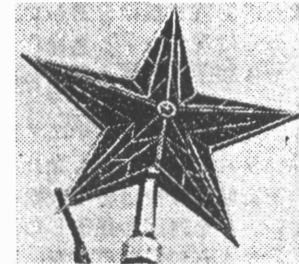
その同僚の一人、佐々木啓悟氏は著書『宇宙考古学入門』大陸書房1978年刊の中でツングース物体最後の方向転換の延長に日本の亀ヶ岡や大湯があることを指摘してこう述べている。

「4000年前に大災害のため、大湯人は自作の宇宙船で大湯ベースを飛び立ち宇宙へ旅だった。その宇宙船のエンジンが核エンジンであったかについては異論があるであろうが、とにかく地球の年経過で4000年後、宇宙の旅を終えて帰って見ると、地球がすっかり変化してしまっているためか、カザンツェフ等のいうようにエンジントラブルのためか、彼らは地球上に不時着せざるを得なくなった。」

確かにそれは、惑星離脱と宇宙航行だけで飛来し、異世界着地力学の未解決のまま地球に到達した不完全な宇宙船だったのかも知れない。



図：佐伯恒夫著『火星とその観測』より



■ツングース爆発地点周辺樹木の異変■

1969年、G・P・ブレカノフとコスチェロフの率いる植物調査隊がツングース地点を訪れて、爆発後発芽した樹齢40～50年のカラマツやカンバを調べ、普通なら高さ7、8メートルなのに17～22メートルにまで伸びていたのを発見した。正常な木なら2,300年を経て達する高さである。また、1908年以前の木の年輪が厚さ0.4～2ミリなのにたいして、それ以降の年輪は幅5～10ミリもあることが判明した。このような異常成長は、放射能にさらされた植物にみられる現象である。



■石の配置と模様を遺した人々
彼らは現代科学と無縁だったか…■

液体酸素、液体水素、石油、それにコンピュータによるプログラムと制御。これが現代宇宙開発のすべてだと言ったらNASAから叱られるかも知れないが、人類の宇宙航行技術はまだ入口にも到達していない。月を何回も往復したではないか、と言う人もいるだろうが、花火の先端につけたカプセルに虫を入れて往復させたのと大差ないことはNASAも分かっているだろう。人類が宇宙で生活を続けたり、他の世界を訪れて生活し、母星へ帰還するためには、重要な何かが決定的にヌケているのだ。それは時空との実際上のかかわり方だ。

翻って古代の技術を見てみよう。我々が納得するようなものがどれほど見られるだろうか。大和朝廷やローマ時代の事ではない。石器時代という人類最長の時代のことである。古代人は何ゆえ石を丸く大地に配置したのか。石の模様は何のためか、木で円を形成した目的は？巨大なストーンヘンジは何のため？…これらの不可解に対して、説などという他人事のような言葉は無用である。知っているなら、実際にそれを使うことが出来る筈だからだ。

我々が飛行機やロケットの原理や理論でUFOを説明できないのと同様、太古の人類とは精神構造も人体の中味も異なるのに彼らのやったことを説明できる訳がないのだ。問題は説明できないものはすべて呪術に関係したものだだろうと解決した気持ちに浸る状態である。

伝承によると我々の理解の及ばない様々な古代の作品や図面は、太陽の力を捉えるものであったり、地下の螺旋エネルギーを引き出すものであったり、天体の位置との関係で壮大な行事が実験か力学の発生か何かをやるものであったり、神の声を聞く道具であったりする。フランシス・ヒッチングはその著書『謎の巨石文明』の中でこう述べている。

「巨石時代人は、地球と天体が互いにその力を及ぼし合うような様式で結びつけられていることを認識していたように思える。いいかえれば、彼らの天文学に関する興味は、占星術のはるか上を行くものであった。太陽、月、星、惑星の配置が、どれだけ巨石時代人の生活に影響を及ぼしたのであろうか？そして彼らが発見した螺旋状の力と、どのように関係していたのであろうか？」

石による力の発生は主に空中浮揚、重力の打破である。病氣治療力などは副産物に思える。現代でも中央インド、プーナ近くのシバプール村では、神聖な石の周りで11人が quama ali dervish と言いながら手をつないで踊った後、指先で石に触れるだけで石は肩の高さまで上がるという。（『謎の巨石文明』より）

現代科学とは石を支えなしに浮かせるのは巨大科学だけだという信仰である。

■石器時代とは？■

「ピラミッドのように、永遠に存続することを可能にさせる幾何学的知識と、工学的技術を用いて設計されていることがすべてである。」『謎の巨石文明』p.43
「最もよく使用されているのは、各辺が3・4・5の直角三角形(9+16=25)である。しかし、巨石時代人は5・12・13の直角三角形、8・15・17の直角三角形、12・35・37の直角三角形も知っていた。（同書p.165）」

■1945年から1961年まで
オックスフォード大学工

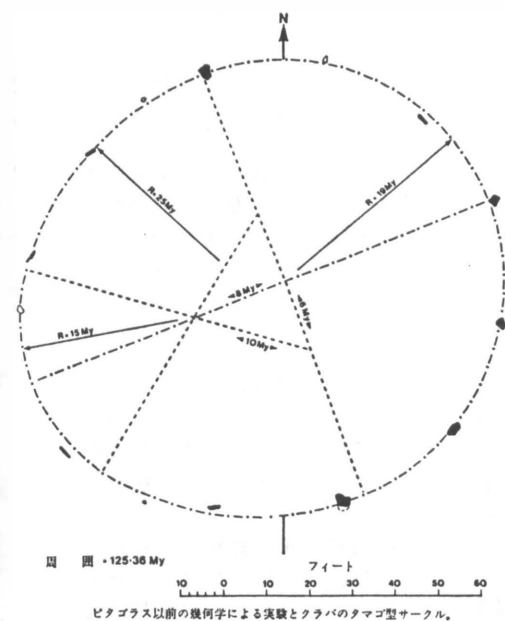


図44 イングランド、ウィルトシャー州のウッドヘンジの背後には幾何学がある

「私は工学者である。これらの人々もそうであったと確信している—そして、そのことを誇りに思っている。」（同書p.184）

はっきり言えるのは、UFOにしろストーンサークルにせよ、これらに近付くには「自分は賢い」という思い込みを捨て去ることだ。そして事実を「そのまま」受け取る勇気だ。

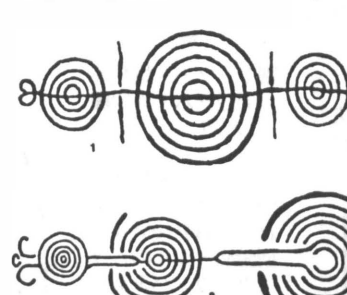
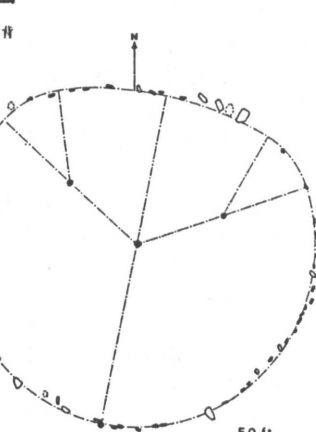


図43 紀元前1000年頃の石列、イングランド、コーンウォール州のストーンヘンジ

学部名誉教授の職にあったアレクサンダー・トム博士は、英国と仏国にある600以上の巨石調査に半生を捧げ、新しい考えを受入れない考古学会に、古代人は強靱な筋肉ばかりでなく、知性も有していたことを実感させた。博士は巨石時代人の偉業を調べる研究に長年月を費やしたが、推論することを断固拒否した。もしトム博士が巨石時代人の動機について推論的なことを口に出すとすれば、おそらくこうだろう、とヒッチングは『謎の巨石文明』に書いている。



■アイルランドの巨石墓にみられる渦巻き模様

我々の感覚で、「形」とは姿の醜美に対する感情や心理エネルギーの発生以外には考えにくい。古代は違っていた。「距離ははるか隔たっているが、先史時代の人類は、ほとんど同一の行動様式をもっていただろうに思える。」（『謎の巨石文明』）

1901年発行のArchaeological Journal 所収の、巨石に描かれた記号。
1. チュリングワールキニア、オーストラリア原住民、ワラニンギラ族によって巨石に描かれた一群の螺旋状の記号。
2. スコットランド、コブに描かれたカッパリング記号。

『汝これ持て勝て』と天の印を旗に勝利した「図形の力学」や、ラッパと声だけで城壁を崩した常識外れの力学は、地面に石で円を築き、また石に渦や同心円を刻む行為の謎に似た、我々の知覚外エネルギーの存在を暗示させる。

将来の地球文明が、これまでの科学技術の延長で宇宙進出を果していくか、それともそれらの地盤を根底から揺るがす地球規模の変動によって、亀ヶ岡、あるいは他の民族と同様の「神話的立場」に置かれるのか。その日、磁気・地殻変動に伴う核施設や核ミサイル誤作動危機の中で、我々は、放射能汚染防止や宇宙拡散防止に直面するのだろうか…。

そしてかつて、地球を離れた人々がそうであったかも知れない「地球再建」の大問題に取組み、真に宇宙社会の一員となろうとする時、文化神オキクルミカムイの優れた能力と人格が、宇宙新時代を生き抜く手本として、学ぶべき課題となるかも知れない。

否！「明日では遅すぎる！」今、我々が実践すべき手本は、オイナの中に示されているのではないのか？

本論は、UFO学が単に現象の解明や資料の啓蒙ではなく、宇宙で恒久平和を築いていく「意志」に対する触発にこそ意義あるものという価値観に基づくものである。

以下、アイヌ叙事詩が今に伝える、古代宇宙飛行士オキクルミカムイの人間像に迫り、明日への糧としよう。

■飛行士或は航空技師として…

オイナに繰返し語られる「シンタ」は、オキクルミを乗せて空中を飛んだ。操縦者はオキクルミ自身であり、また製作者でもあったようだ。

神典によるとカムイは、葡萄蔓で神駕を造り、それに乗って天上の国を指して馳せのぼったという。

また、ケムシリ山の神と共に黄金の神駕で、日の神の救出に向かう時の描写は、2機のシンタで向かうようにも歌われる。「或時は比翼の禽の空たかくもつれるやうに、相共に打ち連れて…」

また、シンタの飛行はすさまじい。「その音は天地を振動して村も島根も壊れてしまひさうだった。黄金の神駕の細い綱はびうびうとうなりを發し、太い綱は轟々と轟き渡り、それにつれて激しい神鳴を起して駈けた。」

従来の神学的解釈からすれば雷鳴現象を基礎とした空想ということになるが、カムイは「霞の小船（Penzai= 弁財船の意）をも製作している。

「…船の中央には雲の小帆を取付け、帆の中央に日の神をくくりつけ…」とうたわれる。

先にも述べたが、カムイは館から外に出てシンタに飛び乗り、「シンタヅカ」という部分を掴む。すると綱の末端が轟々と始動するのであった。これは我々が家から出てバイクにまたがり、エンジンをスタートさせて出発する仕様に極めて

■“彼方の世界”へ出発して3週間暮らし
故郷へ帰ったら300年経過していた伝説■

“ウラシマ効果”とは丹後風土記「浦の嶋子」が五色の亀から出た女に天上仙に赴き、そこで3年暮らし故郷へ戻ると300年経過していたという話が、現代の宇宙旅行理論における相対時差の問題を語っていることから、こうした現象を指す用語である。このテーマは聖書にもみられる。

また、その描写において浦の嶋子とは趣を異にするアイルランド神話伝説からみてみよう。

主人公の名はアイシン。イーリンのフィーアナの戦士でフインの息子である。ある日、フインとアイシンは白馬に乗り星の模様のマントを着た美しい乙女に出会う。彼女は「私は遠い遠い所から来た」と言い、アイシンに「私の父の国へ行ってくれますか」と聞く。アイシンは承諾。「不死不老であり苦しみも病気もなく豊かな果実、蜜と花咲く若さの国」と乙女が歌う未知の国へ、アイシンと乙女ニアムは白馬に乗って出発する。その速度は太陽が雲間から地に射しこむ光よりも早く、アイシンはアイルランドの風景が視界から消えるのを見た。乗っている馬の下が陸なのか海なのか一切わからない、光と霧の中を進み、様々な不思議な光景が展開し、数々の冒険を経験した後「若さの国」に到達する。彼はその国で3週間暮らししたが、飽きて故郷帰還を申し出た。再び白馬に乗ったアイシンに、ニアムは「故郷へ帰っても決してこの馬から下りてはならない」という注意を与える。つまり自分の足で大地を踏んではならない、というのだ。もし、これを破ると、永遠に「若さの国」への道は閉ざされてしまうのであった。アイシンは、この不思議な注意を与えられて故郷に向けて出発した。再び黄金の霧の海を渡り、アイルランドに到着した。だが、彼を待ち受けていたのは懐かしい風景や人々ではなかった。父の名を呼びつつ彼は馬を走らせたが、かつての人々はおらず、背の低い弱々しい人々だけだった。アイシンはその弱々しい小さな人々が、石を動かそう必死になっている現場にさしかかる。彼はこの憐れな人々に力を貸そうと馬の背から地面に下り、大きな石を持ち上げて転がした。人々は驚きと賞讃の叫びを上げた。だが、恐ろしい事が起こった。アイシンが馬の背から下りて、自分の足で大地を踏み、大きな石を持ち上げた時、突然に白馬の腹帯が凄じい勢いで裂け、アイシンを地面に叩きつけたのであった。そしてその瞬間、雪のような白馬は忽然と消え、地面から立ち上がったのは若い騎士ではなく老衰きった、よばよばの老人であった。美しい着衣もボロ切れとなった。人々は老人となったアイシンと話すうち、彼が300年前に行方不明になった有名な騎士であることを知ったのである。

これらの話をみると、地球の人間が別の世界へ行き、再び帰ってくると、地球時間の100倍から300倍という考えられないほどの“時間差”が発生するという共通性が認められる。もし、亀ヶ岡の人々が、オキクルミの宇宙船型に同乗して別な世界（地球外天体）へ避難したとすると、縄文晩期をBC・3000年とした場合、ウラシマ効果中の40年間は4000年になり、別世界で40年研究開発を続けて空間移動カプセルを開発建造し、地球へ向かったとしても、地球到着は紀元後1000年となる。さらに別世界滞在を49年とすると紀元1908年頃の地球帰還となる。帰還者たちは、地球周回軌道（ツングースUFOはヨーロッパでも目撃されたという）上からの故郷を望遠観察し、あまりに変貌してしまった世界を知って、もはや自分達の活躍する余地はなく、人知れず暮らそうと無人地帯の多いシベリアをその着陸地点に選んだのであろうか？

しかし、彼らは消滅した。“宇宙と地球の接触”という後世に残る最大課題を投じて…。

よく似ている。シンタの構造については言葉に残っていないが、「太い綱・細い綱」の描写が唯一、その乗物のイメージとして取り合えず民具のシンタを雲に釣り下げたイメージの根拠となっている訳である。

■武人として…

オキクルミは神の役目が悪漢退治にあるかのように、様々な魔物を駆除している。カムイの武器は神剣であり、「金輪」といって刃のついた円盤である。この円盤は魔女との一騎打ちで互いに投げ合っている。イメージとしてはブーメランの一種のように思える。

武人オキクルミの装束は「裾が燃える赤織りの厚司、黄金の厚司を打ちかけて着成し、それに差した宝刀に、脇の下が映えて勇壮に…」「神賜の刀を帯の下に差し、黄金の冠を頭にいただき…」などと描写される。オキクルミの姿は、赤い着衣を神聖なものとし、信仰の起原なのだろうか。また黄金の冠とは？

武将オキクルミの作戦をみてみよう。オキクルミは人間の里を飢饉にしようと里に向かう悪神に「入って酒でも飲んでから人間の郷を壊したらよかろう」とさそう。しかし、「酒は善神の飲物だ」と尚も行こうとする悪神に、妹神が天のウズメの如く前をはだけると東の空がぱつと明るくなり、西の空が暗くなった。それを見て悪神は考えていたことを忘れ、館に入ってオキクルミと対座して酒を飲んだ。オキクルミは毒酒をすすめて自分も飲んだが、オキクルミの方は毒が霞となって口から出た。悪神は毒が回ってのた打ち回った。そこを、悪神の差していた大きな太刀を引っこ抜いて滅多ぎりに殺してしまった。

■狩人、祭司として…

神典によるとアイヌは夏の間は魚肉を、冬の間は鹿の肉を主食物としていたのも、もし魚族がちっとも川に登ってこなかったり、鹿が乏しいか獲れなければその年は飢饉となる。

成年大層な飢饉があつて村々の人たちが皆死のうとした。アイヌラックルは自分の蓄えを施して辛うじて助けていたが、それも次第につきた時、アイヌラックルは最後に残った少しの稗で酒を造り漁獵の神に祈禱をした。天の神々はこれを受けて酒宴をもち、その席で魚の神、鹿神に地上の願いを伝えと鹿の神は「人間どもが賜を段々粗末にするようになり、空剥ぎにした鹿をふざけて二つ抱かせて棄てたりするので、鹿どもの霊が弊も持たずにうめきながら私の許へ来た。私はそれで立腹している…」と言う。これを女神のとりなしで、再び下界に鹿や魚が



■バビロニア神話によると、「嵐の戦車」に乗り頭上に松明を輝かすマルドゥークは悪龍ティアマトに一騎打ちを挑み、部下の悪神もろとも半獄に打込んだという。



■用途不明の巴形銅器。弥生後期の作。盾やユキに護符として装着。



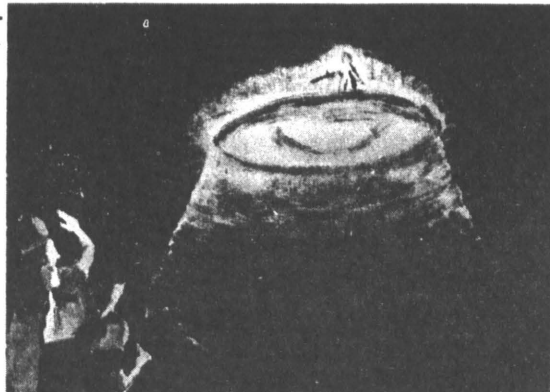
■ダリウス大王の印章にみられるライオンを倒す王を見守るアフラマツダ神。

左端の文字には「我はダリウスなり」と刻まれている。ダリウス1世は、アフラマツダの意志により人民統治の権限を授けられたとベヒストン碑文に刻んでいる。王と神との直接接触の証、有翼太陽円盤の印は、古代オリエントの諸王にとって正統な王のみが所有する印であったが、アッシリア等好戦帝国もこれを模倣した。また神との接触はモーゼにみられる如く、山の上で行なわれることから、古くはアッカドのナラム・シン戦勝碑のように、山の頂上に輝く複数の太陽シンボルをもって神の自現を表現した。しかし、正義を国の中に輝かせるのが正統な神の僕としての王の役目であったから、たとえ外見を装っても木はその実により知ることができるとある。ウル・ナンムの碑にみられるように、王とは神から土地測量の道具を与えられ、農具を背負う牧者であり、人民が脅威する怪獣に対し、単身立ち向かう勇氣をもつ存在であった。この様な責任の在り方を示したのが宇宙来訪者であった。



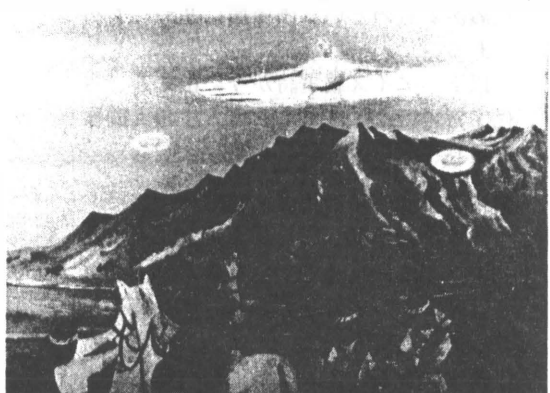
■輝く人物が、太陽の擬人化の産物という見方は、太陽神から何故、立法、法典、戒律などがもたらされたのかの間に答えていない。

アフラマツダは「速き馬に駕する日輪」に搭乗。審判者であり智慧主であった。ここペルーにおける輝く異人は、地上絵にみられる。神話によると、ペルーの雷神は、人間の形をして頭覆で自分の顔を隠し、いつもそばに水瓶を抱えた一人の妹を連れてくるといふ。インカのマンコ・クカパックは、太陽と月の子であり、妹であり妻であるママ・オウロと共に天界からチチカカ湖の近くに降って来て、人類にさまざまなためになる技を教えたという。



■神の御座シェキナに乗ったヤーウェあるいはエホバと後世に呼ぶようになった存在は、ヘブライ人の聖書に今も生きている。「神」は、筒状で樹叢は雲の柱に見え、夜間に火の柱となって発光する空中物体の中にあつた。

その、火の柱は原文で2通りあり、円筒状と枕状のものであつたらしい。現代で言えば「葉巻型母船」と「円盤」となるだろうか。確かに、山の上で70人の長老と会食した神は、「彼らがイスラエルの神を見ると、その足の下にはサファイアの敷石のごときものがあり、澄み渡るおおぞらのようであつた」(出エジプト24-10)と記されているところから、着陸用小型物体の使用が伺われる。



王と神との直接接触の証、有翼太陽円盤の印は、古代オリエントの諸王にとって正統な王のみが所有する印であったが、アッシリア等好戦帝国もこれを模倣した。また神との接触はモーゼにみられる如く、山の上で行なわれることから、古くはアッカドのナラム・シン戦勝碑のように、山の頂上に輝く複数の太陽シンボルをもって神の自現を表現した。しかし、正義を国の中に輝かせるのが正統な神の僕としての王の役目であったから、たとえ外見を装っても木はその実により知ることができるとある。ウル・ナンムの碑にみられるように、王とは神から土地測量の道具を与えられ、農具を背負う牧者であり、人民が脅威する怪獣に対し、単身立ち向かう勇氣をもつ存在であった。この様な責任の在り方を示したのが宇宙来訪者であった。



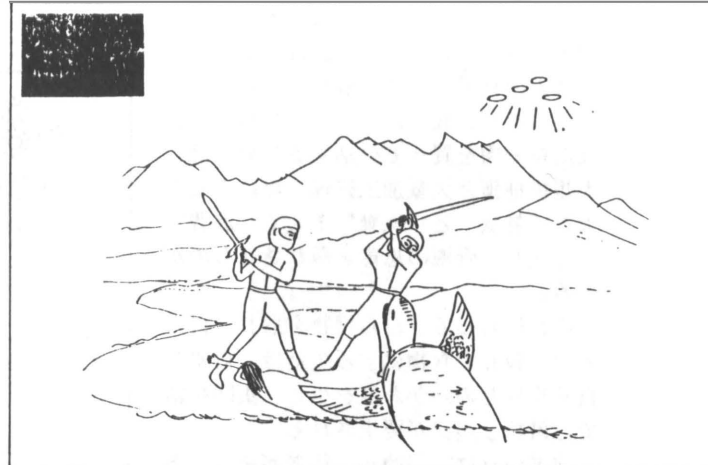
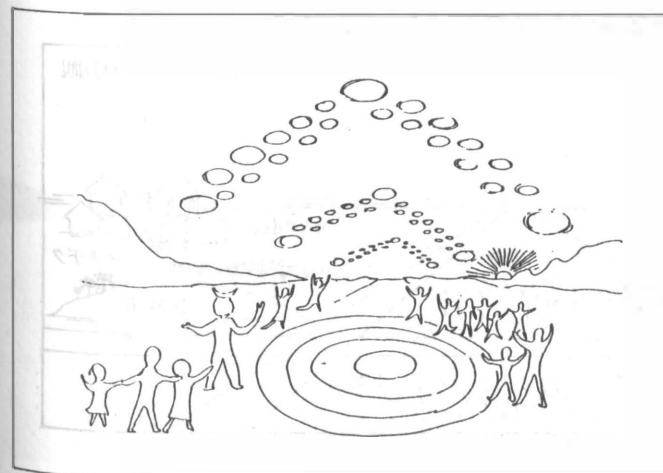
■オーストラリア、タスマニア島に伝わる伝説によると、「二人の異邦人が人々に火を投じ、亀に似た怪獣に襲われた二人の女性を助けて蘇生させた後、4つの星となって宇宙へ去った」という。

知識や技術を原住民に教えて、空に去った謎の異人伝説はまだある。万物の父マーツムレまたはニリンデレは、人々に儀式祭典、狩猟器具を教えて宇宙(ウイレワレ)へ去ったという。この伝説を伝えるナリニエリ族は、狩で得たワラビーを火中に投じ、その周囲を歌い踊り、定められた合図で狩猟道具を空(天)にかかげる儀式を現代も行なっているが、これもニリンデレ又はマーツムレによって定められたものである。



過去の人々が遺した神話と美術は宇宙来訪を語るか？

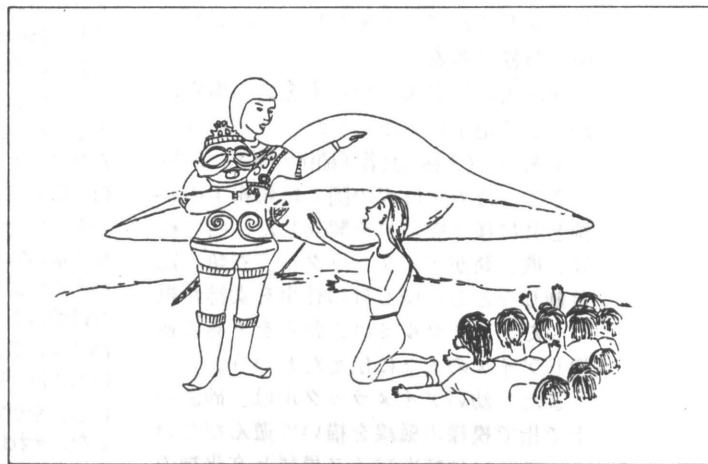
■北米インディアン伝説にも、空からの英雄が多い。道具や文字の発明、正邪識別知識の教授、食物の種、薬の伝授などは、雲に乗る男や、翼の生えた電光を発する船の乗員によるものだといふ。サンダーバードは飢饉に瀕した人々の前に、鯨を運んだ。災害により星に避難する話や、災害の後世界再建に着手する話。また、「神の仮面」をかぶり、それをぬいで人間の顔を見せ「私はお前と同じ人間だ」と語ったサンダーバードの伝説がハイダ族にみられる。カナダインディアンの鳥頭が開いて人間の顔を見せる仮面や、鳥頭の帽子などに、そうした過去の物語の痕跡をみる。



東岸部族のダラムリン神の印は「回転する菱形」で、神とその形は同一視されている。

ウィンバイオ族に法則を教えたヌレルリは、天に昇って星座となり、ブーメラン造りのジャーニーは、自ら飛ばしたブーメランの中に入って彼方に去ったという。

ブーメランはオーストラリアの原住民が使う狩猟道具の一つだが、ヒッタイト王建造のヤズル・カヤ神殿岩室壁に刻まれた「神々の進軍」レリーフに、神々がブーメランをふりかざして勇ましく進軍する図がみられるのは、ブーメランという道具が地球上の広い範囲に分布していることを教えている。



■北米考古学における岩絵の円や同心円、それらと鳥文の混合図形は、従来、雲、雨、かん天、雷電を象徴するものと解釈されてきた。だが、複数の円や同心円、光線付太陽図形で表現された「何か」を主題とした岩絵は、周囲の状況を素朴ながら写実的に描いていることから考えて、単なる象徴というより、具体的な物体を描いたものではないか、と推定される。左の線画は、こうした岩絵の一つ(コロンビア河支流サモンリバー沿岸)である。絵の一つを基に、現代風に再現したもの。

戻ってきたという。この話は、単にアニミズムの世界として理解したつもりになりがちだが、我々がスーパーでバックされた魚や肉を買って生活する世界には、大規模捕獲と大量加工処理工場による膨大な“無駄”と“廃棄”そして“浪費”が存在し、資源の恩恵を薄れさせものがある。

これに対して、自ら獲物を取り、自らの手で殺して食物にする生活は、自ずと自然世界とのかかわりを生じ、集団生活では厳格な規律が要求される。

前者が真に人間のか、後者がそうであるか、未来永劫を生活の時間と考えるならば答えは明白であろう。

アイヌラックルは、俗に「熊祭り」などと誤解されているイオマンテ（iomante それを行かせる）という自然の恩恵に報いる行事を通して、人間の食物となる動物とのかかわり方を指導したと考えられるのである。

■発明家、芸術家として…

世界中の文化神に共通するのが、狩猟道具の発明、農耕技術の指導、生活軌範の設定、というように人々の生活に不可欠な技術や道具の開発に貢献した業績である。

オキクルミカムイは、天の国から下界へ降りる際、稗の種を足の傷口に隠してアイヌに伝えたという。これと同じ伝承がインドネシア、中央セレベスのトバダ Tobada 族にある。

「一人の男が天上から米を足の傷口にかくして地上にもたらした…」というものである。（大林太良著『稲作の神話』より）

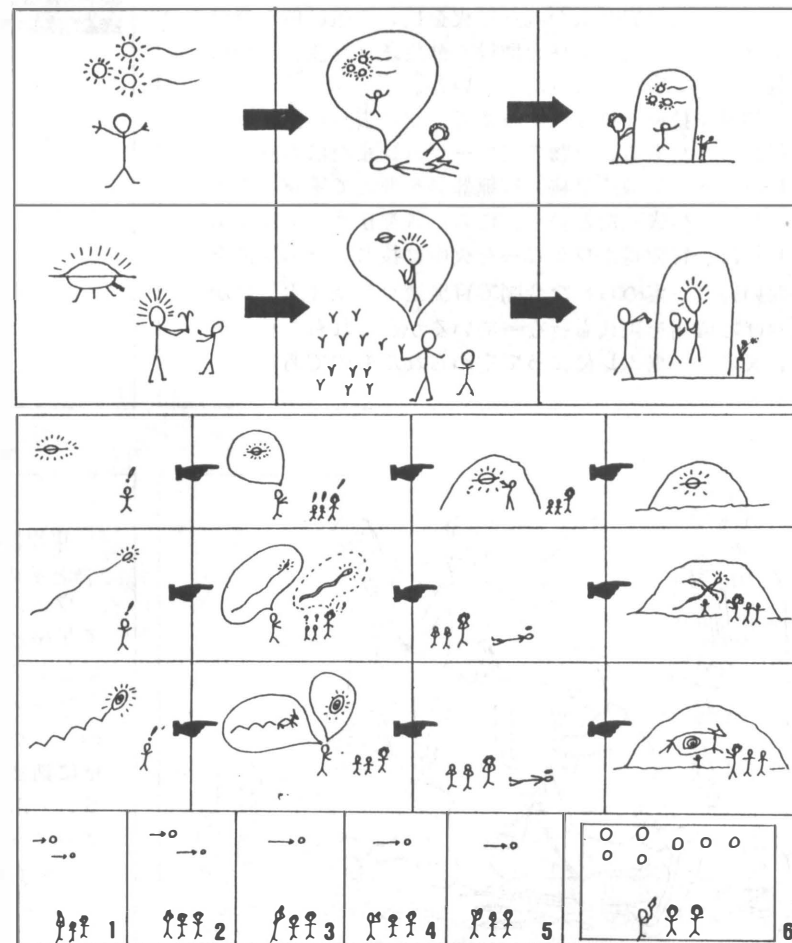
さて、カムイは天の国で結婚相手の女神と共に様々な道具を製作した。臼、杵、箕、機、鞘がアイヌラックル、衣類、冠、首飾りなどあらゆる針の仕事が女神が担当した。オキクルミはこれらを下界に運搬しアイヌの人々に伝えたという。

また、幼いアイヌラックルは、砂浜の上で指で模様の弧線を描いて遊んだという。これは独特なアイヌ模様と文化神の関係を物語る部分だ。

オキクルミの毎日の日課は、刀の鞘の彫刻であった。悪に決然と立ち向かう豪快さと、静かで安定した精神と独創性を必要とする木彫芸術家としてのオキクルミは、幅広い人間性を物語る。

前にも述べたが、オキクルミの装束に唐草紋がみられること、姉神の正装着衣に「日輪」の形が縫い込まれていること、館の軒に同心円が描かれていることなどは、アイヌ文化を代表する美術とオキクルミカムイの関係を物語る。そして、謎の装飾古墳模様にもみられる同心円のモチーフや、赤色を聖なる色彩とする思想、

■空中物体との出会いから、作品が生れるまで■



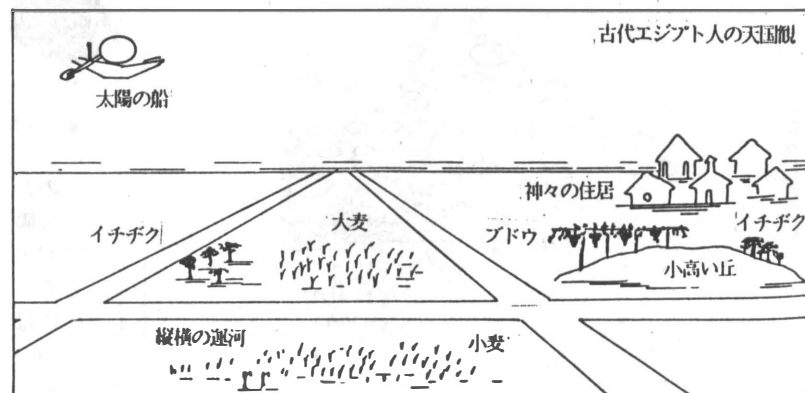
（上から）◎ある日、一家の主人が3つの光り物を目撃する。それは強い印象を与えた。彼は死ぬ真際、妻に体験を話し、自分の墓に刻んで欲しいと頼む。かくして彼の墓石には、生前彼が体験した最も重大かつ神秘的な図形が刻まれた。◎自然の作物に食を頼っていた男は、ある日、輝く乗物でやってきた輝く人物から「これを植えてごらん」と苗をもらった。それはやがて彼と仲間の重要な主食となった。彼は息子に「これは輝く神から賜った」と話す。彼の死後、成長した息子によって輝く神から栽培植物の苗を受けとる父親の姿の碑が造られ、これは一族の宝となった。

◎ある日、男は不思議な乗物を目撃して、この事を家族に話す。そして自ら岩に絵を描いてみせた。（直接体験絵画の発生）

◎ある日、男は蛇行しつつ空へ去る光物を目撃。この体験を家族に話した。「それは蛇のよう曲がって飛んだ」。彼の死後、家族は彼の墓に彼から聞いた話を絵画に描いて記念とした。（間接体験絵画の発生）

◎ある日、男は鹿のように飛び跳ねて進む太陽に似たものを見た。その話を家族にし、やがて彼は死ぬ。家族は主人の体験を聞いて理解した範囲で、それを表現した。それは鹿の身体に太陽の形を描き込んだものとなった。

◎筆者は1989年11月5日、初め2個、次も2個、その次に1個、更に1個、最後にもう1個と、5回にわたり7個の白球を家族と共に目撃。これを撮影した。この体験を一枚の簡単な図にすると右端のようなものになる。



また、船を神の乗物とする信仰から紙製の幣に至るまで、日本全土に広がったアレ・アイヌとも言うべき文化の源流に、アイヌラックルの存在が位置づけられる日もそう遠くはないだろう。

■長として教師として…

我々がアイヌラックル、オキクルミカムイの伝承から学ぶべき事柄はまだまだある。地球全体にとっての最大課題は、彼ら宇宙来訪者を人類の教師として迎えるか否かにあると言えるだろう。

過去現在を通じての“地球接近宇宙文明”の評価……これは、オキクルミカムイの立場が、かつて「人間の長（おさ）として地上に住んだ」という点に関係がある。

古代ペルシャの天空神アフラマツダは、ダリウスを王に任命する神勅を発した存在として位置づけられているが、アイヌに臨んだ天空神は、次の言葉を或る期間実践したのだ。

「アイヌラックルは

汝にて

人間の国土は

汝のみ

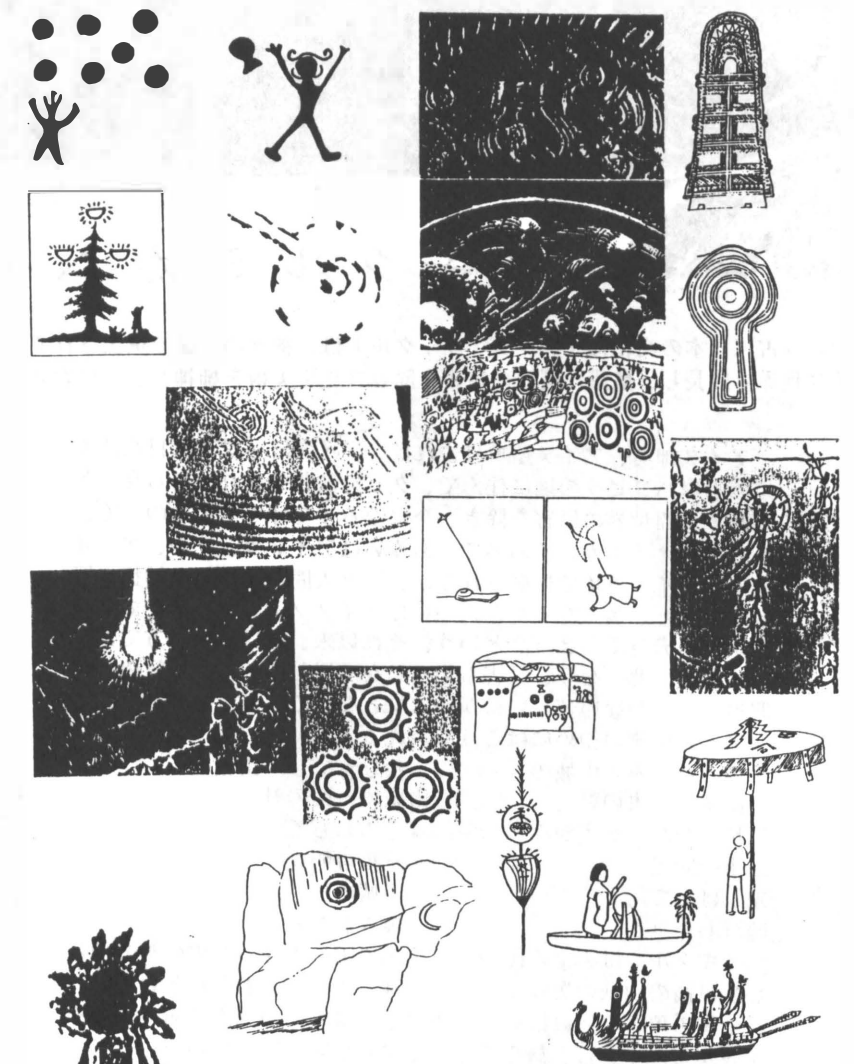
知り治むべきものなり」

（アイヌ聖典より）

大気圏内を飛行する地球外宇宙機としてのUFOは、高度な飛行技術を我々に示している。その宇宙機を操縦する知性が、同時に倫理道徳においても地球のそれを遥かに越えんとすれば、まさに古代神話に登場した神々の再臨であり、われわれはUFO目撃を通して“天の雲に乗ったイエス”を、“火の柱に座したエホバ”を、“シンタに乗ったオキクルミカムイ”を見上げていることになるのである。しかしながら、世間を騒がす“UFO情報”は、本編の行き着いた答えと逆行する要素が支配的な情報として流布されている。まるでイメージ戦争の如くである。だが、今や誰が言ったから、とかどこに書いてあるから、ではない。私とあなたが何を見たのか？が問題なのだ。

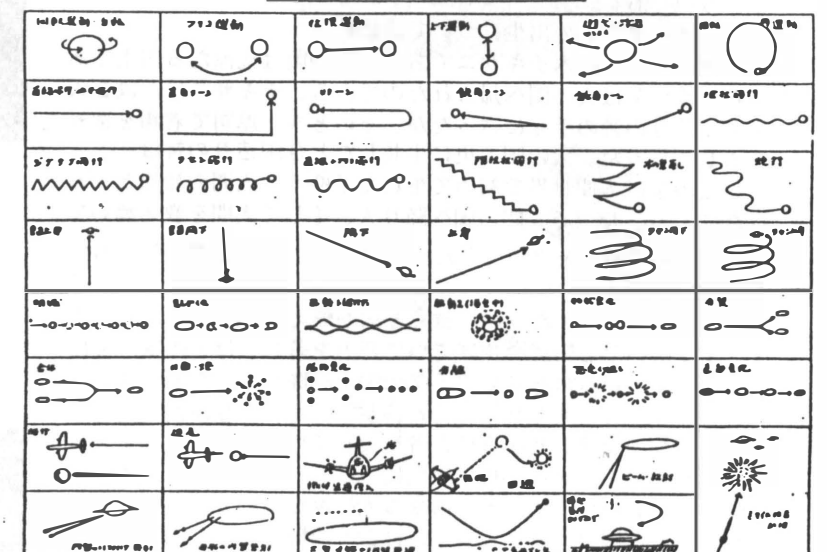
自分の目と身体で、今こそ地球を取り巻く宇宙空間の姿を見極めなければならない時代だと言えるだろう。最後にアグレストの基本的な考え方を復習して結びとする。「他の惑星人がかつて地球を訪問し、地球人と出会ったならば、このような大事件は伝説や神話に必ず反映されている筈である。当時、地球に住んでいた人間にとって、これらの宇宙人は超自然力をもった神のような存在に見えたにちがいない。これらの不思議な生物は恐らく再び“天”に戻っていったであろう。そして神話の中で“天”が特別な意味を与えられたにちがいない。」1959年 ■

古代日本美術の中のUFO図形



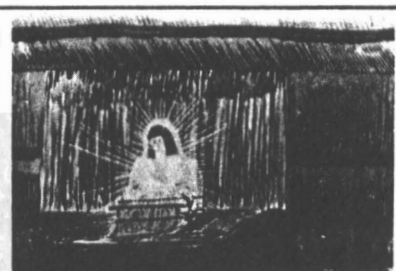
■左図は11世紀の壁掛けで1066年のハレー彗星を描いたものを縦にしたもの。何故か日本の古代における“形”にはこれに似たものが多い。銅鐸や古墳平面図、装飾古墳にそのモチーフがみられる。古代世界は、たくさんの太陽と色とりどりの円、同心円に満ちている。下図は現代のUFO図より。古代は現代を写す鏡なのかも知れない。

UFOの運動・飛行・物理パターン例

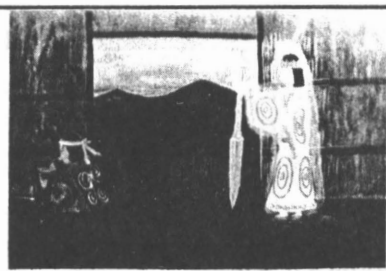




二重三重の光を放つハヨヒラ



光に包まれ織る女神



日輪の印を縫い出した衣を着て
オキクルミ出生の秘密を語る女神



オキクルミは火の樹オキサニから人に昇った

オキクルミカムイ物語

◎◎◎古代日本の文化神（アイヌ・ラックル）は、神々の会議で選出されて来訪、アイヌ世界で成長し、飢餓、襲魔の災害を除き文化や美術を姉神とともに教えた◎◎◎

アイヌ神典、アイヌ聖典によれば、アイヌラックルは日高沙流川の沿岸ハヨピラの地に住んで、久しく教化を垂れ、自ら身を苦しめて人間世界の災害を除き、今に至るまでオキクルミの名で、あるいはオйнаカムイの名で、あるいはアイヌラックル、アエオйнаカムイの尊称で崇敬されたが、段々人間が墮落して神徳を冒涇することが多くなったためついにアイヌノ国土を見捨てて隣境の国土へ去ってしまったという。それ以来、世は下る一方で人々はますます悪くなり、災害も果てしなく増してきて、今日のこの取返しのつかない苦しいにがい末世となってしまったという。

アイヌ聖典の初めにはこう歌われる。
「神のたくみの山城の 我を育てし 山城の
山城の 東の軒 山城の 西の軒
日輪のかたちをえがき そのおもて
二重の明光 三重の明光
差しはえて 山城の際
照りわたり 輝きわたる

オキクルミは天上の国からアイヌの国へ天降った火の神の子として日高の山城の奥深く一人の女神によって養われたという。山城の頂きの館には東にも西にも日輪の形が刻んであって、その表から差し光は、赫やくとして迎りに照り渡っていた。

育ての女神も膚身から光が差して美しく光輝いていた。そして毎日刺繍を事として、脳目もふらず一所に目を注いでいた。オキクルミが生長したある日、女神は日輪の形を縫い出した神の小袖を取り出して着るに、その表燦然と輝く。また冠を頭に戴き、婦人の刀を懐にいだき、柄短かの矛をオキクルミの前に立てて言うには

「まことの首長に古き代の物語をするには装束せずしては語れないものである。」

と、オキクルミの出生について話始めた。
「汝の母は火の木チキサニであり、その頃は荒涼たる国土であった。汝の父は天の国へ帰られたのである。チキサニは、汝を天上の国造りの神の手元に送ったが、そのとき、厚司で着物を造って着せてやった。天の国で更に生長したとき国造りの神は—

「この子は人間世界で初めて生れた子ゆえ、人間の始祖となるべきである。行つて人間の国へ降り人、そして人間を教え導いて、人間の郷で首長となっておれ」と言って、下界に遣わしたのである。

母チキサニの与えた剣は、抜くと火が燃える剣であるため、オキクルミはいつも鞘尻の焦げた刀を差し、厚司の裾が火について焦げているのを着てアイヌの国土へ降り立ったという。

あるとき、若いオキクルミに女神が言った。「私が汝を養育しながら、汝の配偶者となるべき者を捜し求めたところ、アイヌモシリ（北海道）の東の果て、忍別の郷に魔女にとらわれている浪速川の姫がいる。これを救い出すことの出来る人は汝をおいて他にはないのである。この闘いは斬り合い、裂け合う決闘となろう。相手の魔女はいくら斬ってもくっついて元通りになる体である。汝は6回まで斬られても助かるが、それ以上はだめな身であるから、用心



火が燃える神剣
を持つオキクルミ



魔女に捕われた姫



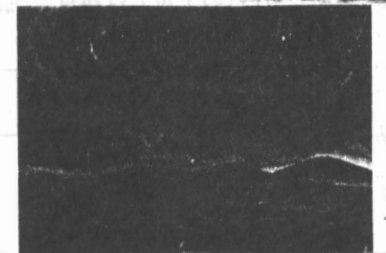
雷鳴を返し、二重三重の雲を伴い
姫の救出に向かうオキクルミ



姫を闇の中より救出



オキクルミに迫る魔神の部下達



闘いの最中、上空
よりシンタが出現



シンタの声援を受けて、敵を斬るオキクルミ



大蛇の魔女が現れる



魔女と一騎討ちのオキクルミ。武器は回転刀。



しなければならぬ。闘いが激しくなるようなら、汝の父が天からシンタを遣わして声援を与えるだろう。また、天上から神鳥が降り、汝に加勢するであろう。

オキクルミは裾の焦げた厚司、鞘尻の焦げた太刀、縁の焦げている兜で身をかため「昇天の神」の如く神々しい姿となり、外に出ると二重の雲三重の雲をたなびかせつつ、山や海を轟かす神鳴を発しながら魔女のいる忍別に向かった。

オキクルミは直ぐチワツ姫を囲いの中から救い出したが、魔女の郷から数知れぬ程の大勢の手下が襲いかかってきた。

この時、天空に轟きが起り、黄金の神鳥が天降ってきた。中には雲の子童が乗り、そこから声援の歌声が聞こえてきたので、アキクルミはこれに力を得て大いに奮戦し、手下を踏みしじると、魔女は大いに怒って人間世界の国土を片端から踏みしじらした。

「いざ、首領同士の斬り合いをしよう」魔女はオキクルミに挑んできた。オキクルミは魔女を斬り裂くこと六回に及んだが、斬るあとからその身がくっつくのであった。魔女もオキクルミを斬ること六回に及んだが、刀の過ぎる後からすぐ元に戻った。

遂にオキクルミは魔女の片脚をつかみ、もう片脚を強く踏み真ん中から真二つに引き裂いて、片方を山に投げ捨てて言うには、「山の精よ、女を汝に与えるから決して手離すでない」と。これで、魔女はもはや再び生き返ることはなかった。

天から降ってオキクルミに加勢した黄金のシンタは天空に引き去っていき、「シンタの中で歌った歌を広めよ。汝を人間の長にしておく故、今後何かの時には援助するだろう。」という言葉のこして、はるか天空の方へ見えなくなって行った。

若いオキクルミは山城の中で、毎日彫刻を事として余念なく暮らしていた。

とある、遙か遠い国の島の上にむかがっていた雲が、山城を指してやってきた。

雲はやがて山城をすっかり包み込んだ。山城の真上にシンタを降ろし雲の中から一人の神が現れて、金の響きのような美しい言葉が響いた。

「アイヌラックルよ、オйнаカムイよ、私の妹が大きな鬼に奪われてしまった。今は牢屋の中に入れられてもう死ぬばかりになっている。さあ、共に出掛けよう。」

オキクルミが身をかためて山城の上に降り立っているシンタの中に入ると、シンタの中にはモヤにつつまれた重たい神がいた。モヤを払ってやると見ると、はじめて人の姿をした神が見えた。これが噂のケムシリの神だとわかった。

シンタは二人を乗せて飛び上がった。その音は天地を揺るがせシンタの細い綱は、びゅうびゅううなりを發し、太い綱は轟々と轟き渡った。海上を光る風のように波紋を描いて飛び、どここの島とも知れぬ下界を見下ろしながら鬼の住む山に到着

オキクルミは大鬼の住家を見つけると討ち入って姫を救いだし刀を抜いて鬼どもを斬り散らし、その家を地獄の底へと落としてしまった。

さて、青年オキクルミはある日、奥地へ出かけ、川をさかのぼって遠い水源の地に着くと、神の山が天に向かってそびえ立っているのを見た。山を登っていくと、山上の園へ出た。

日が暮れると、園には天上の神や地上に住む神が集まって舞い踊りはじめた。オキクルミは身を忍ばせて夜明けまでこの様子を見ていた。



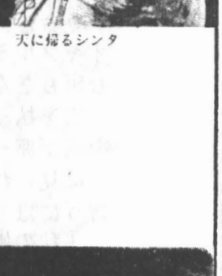
魔女を二つに裂くオキクルミ



天に帰るシンタ



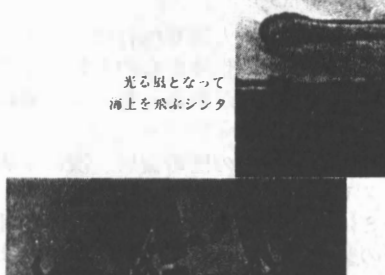
彫刻をするオキクルミ



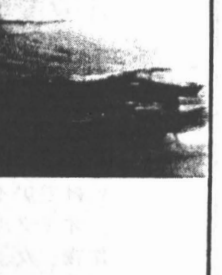
シンタに人々と年配の神がいた。
そこで姫の救出を依頼される



共にシンタに搭乗
し救出に向かう



光る風となって
海上を飛ぶシンタ



大鬼の城で鬼退治のオキクルミ

鬼との一騎討ちに勝ったオキクルミは、
大鬼を地獄の底へ投げ落とす

その時、どこからともなく美しい音色が空の下に響いてくるので、怪しんで見ると、美しい少女が黄金のシタに乗って降りてきた。少女は遊び場の真上にシタを停めてじっと神々の踊りを見守っている。その美しい容貌にオキクルミは、妻を持つならこういう女神をと考えた。神々が帰ってしまうと、この少女も天空へと去ってしまった。

オキクルミは山城へ帰ると、神の山で見たシタの少女が忘れられず、物も食べずふさいでいた。姉の女神は心を痛め色々ご馳走をつくってオキクルミに勧めた。

とある日、オキクルミは急にもう一度、山上の園へ出掛けてみた。

やがて、空から美しい音と共にシタが降りてきて、この前に見た少女ではないが女神が乗っており、どこからか現れた地上の女神と話を始めた。話は天上の国で神の一人娘が病気になるということであった。

オキクルミは、これを聞いて天上の世界を目指し空に上った。

六重の雲居の空を突き抜け

六重の星居の空を突き抜け

天の国の六重の雲居を抜けて天の国に到達した。そこは天上の神の国土が打ち開けていて、国土のおもてが滑らかに延びている。神々の里なるその広大な国土の上をオキクルミは天翔けていく。

見ると大きな里があり、その中央に黄金の大宮が建っていた。オキクルミは静かに大宮の中に入った。中は光の雲が一杯で、炬も床もさんらんと輝き、物がよく見えない。

雲を払ってオキクルミがよく見ると、炉端の正面に二人の立派な人が座っていた。翁神と婆神であった。二人ともかがやくばかりに見られた。翁神が入ってきたオキクルミを見て、声を荒げて言うには—

「私の娘が病に伏しているが、お前を見て分かった。娘は恋わずらいであったのだ。しかし、汝等は私の試みをやり通せなかったら相添わすことはならない。ユカラクル六人にユカラを演じさせ、それを見て少しでも笑ったら添わすことはできない。」

と言って、それらの人々を招き入れて演じさせたところ、女神が少し笑った。そこで翁神は「女の方が笑ったから、今一つ試みを課してやる。オキクルミは男子の製作物、臼、杵の類から箕、箒、機などあらゆる男子の製作物を一日で作り上げるのだ。女の方は、女子の製作物、衣類や冠、首飾りや、あらゆる針の仕事を一切一日の中に作り上げるのだ。それが出来たら、お前達を夫婦にしてやろう。お前はアイヌラックルで人間の国土には居なくてはならない人である。人間を治め人間のタネを継がせるために降されたお前である。だから今は、これらの物を一日で作り終えたら、それを持って人間界へ降りて、人間達に、男はこう々々、女はこう々々と教えて来るのだ。それが済んだら天の国へ帰ってきて一緒になって良い。」

アイヌラックル・オキクルミカミイは云われた通り製作物を一日で作りあげ、女神も着物や衾飾りを一日で作り上げた。翁神は言った。

「さあ、それを持って人間界へ行け、行きて男子には汝の作ったものを、女子には娘の作ったものを教えてこい。お前達の聞いた歌も伝えてこい。それが終わったら天上界に戻って娘と一緒にいるがよい。」

オキクルミは再び、天の国の雲居、次に星居、人間界の雲居をぬけてアイヌモシリに帰ってきた。

オキクルミは我家へ帰ると、村人達をみな呼び寄せ、男子の製作物、女子の製作物を残らず伝えて聖典や歌までも語り聞かせ、どういう時はどうこうせよと、教え導いた。

"Learn not the way of the nations,
not be dismayed at the signs of the
heavens
because the nations are dismayed at
them," (JEREMIAH 10)



神の山の麓にきたオキクルミ



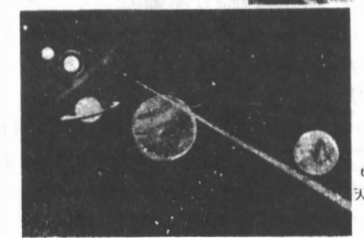
神の山を登るオキクルミ



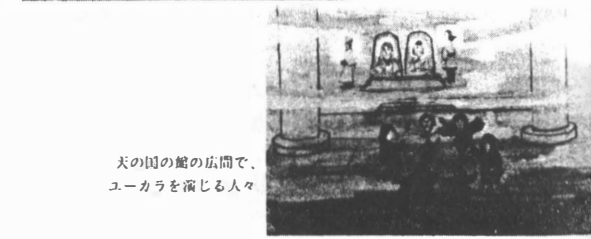
山上の園にシタが降下する



シタから現れた少女と、
地上の女神の会話を聞く
オキクルミ



もつ星の住まいを抜けて
天の国に到達せんとするシタ



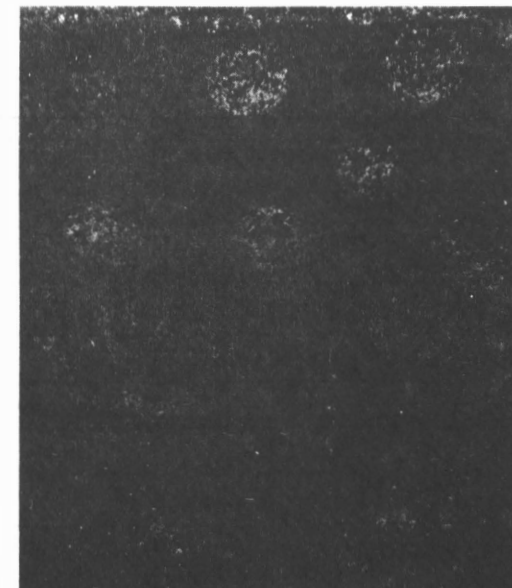
天の国の館の広間で、
ユカラを演じる人々



天の国への飛行を終えて
アイヌモシリに帰還したシタ



アイヌに、天の国で制作した道具の使い方を教えるオキクルミカミイと女神



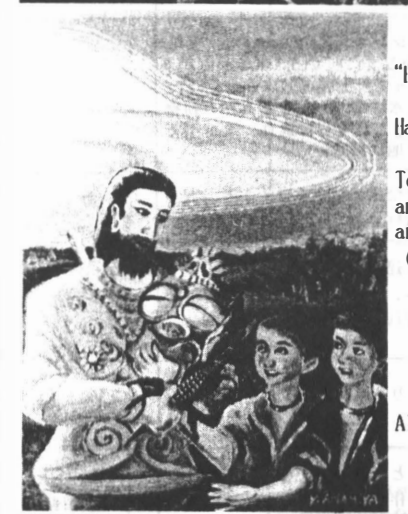
Japan



North America

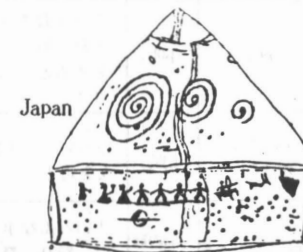


Egypt

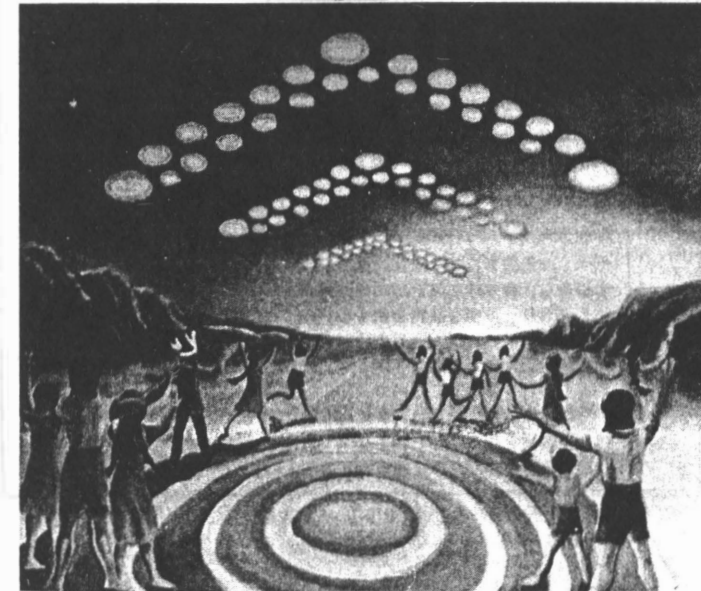


"Hear this, you aget men,
give ear, all inhabitants of the land!
Has such a thing happened in your days,
or in the days of your fathers?
Tell your children of it,
and let your children tell their children,
and their children another generation."
(JOEL)

Alaska



Japan



North America

Australia



Japan

古代UFO記録再現画

■世界の文化英雄一覧表■

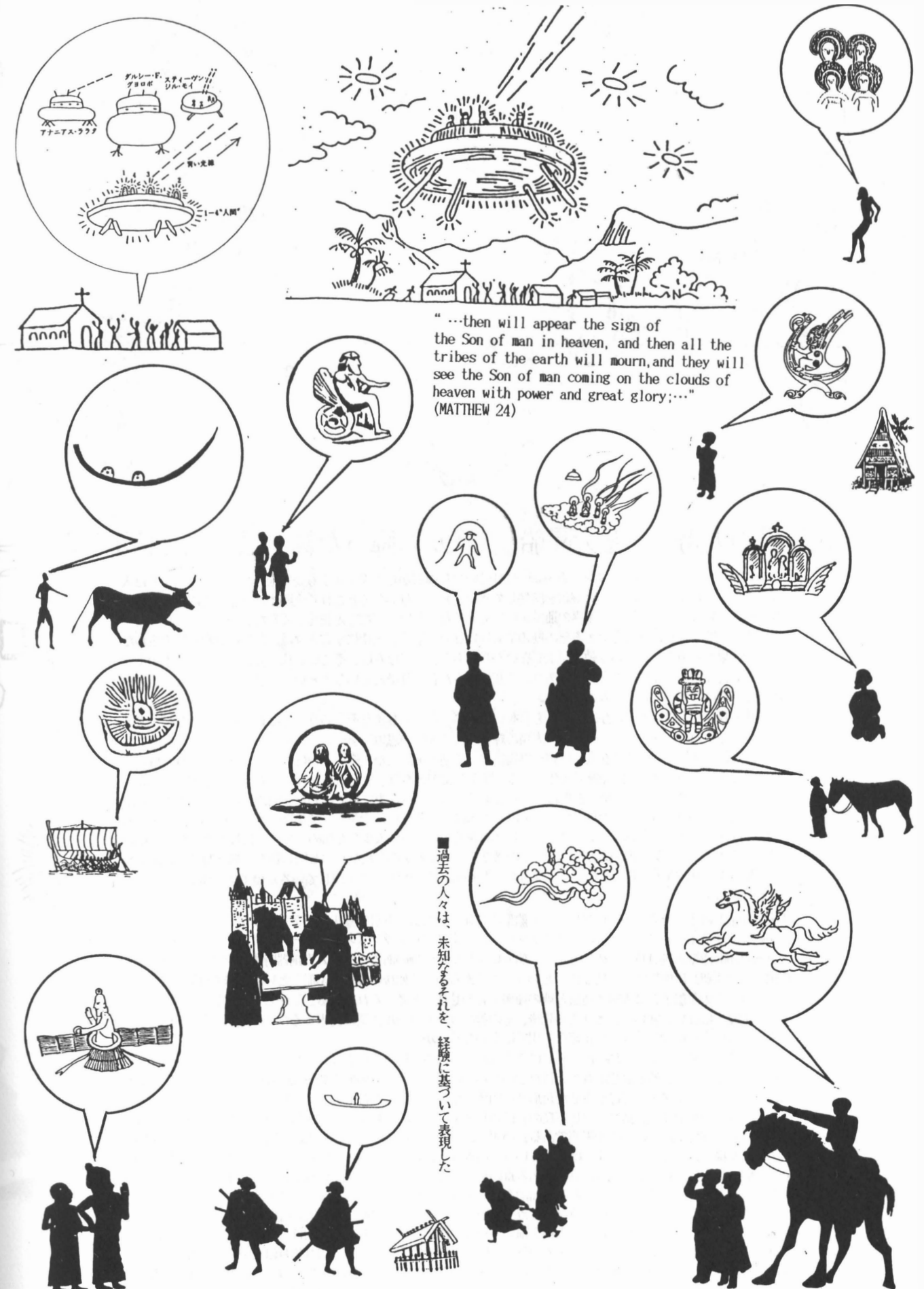
民族名	文化英雄(神)名	昔 巻	出現方法	姿	事 組	消災方法
中 国	「有巢氏」 「天下の王」	人民少く鳥獸多数 人民はそれらに勝てず	不明		樹上に木を組んで巢を作り猛獣の襲撃を避ける策を たてた。	不明
中 国	燧 人氏、 天下の王	人民は草木の災、 海産物を生食し、 病気が絶えなかった。	不明		木をきりでこする発火法を教え、生食を熟食にかえた。 また金銅器の製法を発明。	不明
中 国	フクギ氏 ¹	不明	不明		牧畜を教えた。結紮の法を定めた。	不明
中 国	シンノウ氏	不明	不明		農業や医薬の法を教えた。市を設けて商業を始めた。	不明
中 国	黃 帝				嚮を造る。	龍に乗って昇天
北米 インディアン	男	かんばつによる人々 の悪行が横行して いた	雲に乗って 西方より来る	男性	人々の悪行に対する罰として、大洪水を起こす。 生き残った人々を高い山に連れて行き水が引くと 人々を山から降ろす。	
北米 インディアン	宵の明星	家族が置き去りにし た孤児に起こったこと	黒雲を作なう 星として降下	りりしい 若者	孤児の協力で怪物を殺した若者は孤児を 天へ連れて行く。	昇天して 星になる。
北米 インディアン	太陽	9人の兄を殺された 末子に起こった事	空中に声、そ して男が突然 現われる。	見知ら ぬ男	末子が人食を刺すのを援助し、9人の兄弟を復活させる。	かき消すように 見えなくなる。
北米 インディアン Ojibway族	人間の友達 Mondamin ¹	人々の生活を見、野生 植物や漁だけでは心 配と考え、断食中のヒ アワサに起こった事	突然現わ れる。	金髪で肩 と背の衣を 着た男	生命の主Manitoの遣いとして、ヒアワサと格闘し息 絶える。そして指示通りに男を土に埋めると、そこ からトウモロコシが生え、人々の主食となる。	死体となり土に 埋められる。
北米 インディアン Ojibway族 ¹	Hiawatha ¹	沢山の巨人や魔法使 いが絶えず人々を悩 ましていた。特にHeg issogwonは悪気を送 り出して人々の間に 病気をはやらせていた。	天上界の母を もつ勇者と月 の娘の子との 間に生まれた 天孫		武装して自動の丸木舟に乗り込み、メギソグオンの宮 殿に討入る。まず無数の毒蛇を射殺し、メギソグオン と1対1の決闘となり見事討ち果たす。	自動の丸木舟に乗 り、湖の上を入口 に向かって飛ぶよう に滑り去る。
北米 インディアン	ナヒー・サハレ	ナヒー・サハレは人 々に対して服を立て た。			洪水の前、一人のメディシマンに「タコマの山(現在の レイニア山)の山頂にかかる岩に向かって矢を射、洪水 になったら、矢の痕を伝って天上界へ逃げるがよい」と 教える。やがて大雨が洪水となり、善良な人々と動物 は教えられた方法を実行して天上界に逃れ、水が引く と再び矢の痕を伝って大地に戻る。	
北米 イロクォイ族	3人の雷人 頭はIlilun	怪物が現われていた。 突然現われる			苦者と協力して、巨大な豪猪と地虫を退治する。雲 の翼を使用して空を飛行。	
北 米 イロクォイ族	西風の神	巨人たちが人間を殺そ うとしていた	不明	不明	人々を殺そうとする巨人達の企てを人々に話し、巨 人族と戦うことを勧める。人々と巨人達が戦いはじ めると、西風の神が現れて巨人を湾に落とすし溺れ さす。	
北米北部 インディアン	Chinigichinich	人々を苦しめたが、 食物を持っていなかった	幻のように 現れる	幻術	いろいろな生物を殖やす力を人々に授け、土から男 女を造る。	
	Oniamol ¹	世界を床として造った ノクマ神が土をこねて 倒った男女の子孫が、 ある英傑により、土の代 りの食物を得ていた頃。	踊りながら大 勢の人に近づく	赤の冠 羽の衣を 着る人物	「いろんな事を教えようと、星の国から来た」とい い、踊り、祭り、祭場の作り方を教え「天に昇って 人間のすることを見守っている。もし、いいつけや 教えを守らなかったら…」と刑罰の話をして去る。	姿を消す
インカ アイマラ、 クイチュア他	Viracocha	天地開けびやくの頃	チチカカ湖より 大地に現れる	羽衣をた びわたした 白い人間 また、背 が高く、 白い衣服 をまとう	自分の姿に似せて人間を造り、人間が生きていく上 に必要な様々な技を教え、CUZCOに住むことを言っ て、チチカカ湖に去る。	水を分けてチ チカカ湖に沈む
インカ	Manco Capac と妹であり 妻である Mama Uullo	天地開けびやくの頃	チチカカ湖の 近くに大岩か ら降る		・その1：人間をこねた土偶に生命を吹き込んで人間 を創造し、歌うべき歌、地に播くべき食物の種子を 与え、祭り、神聖な品物を教える。 その2：太陽の神が人間界の戦いを見、子である兄 妹夫婦の二人に「人間界へ降って、いろんな技を教 えよ」という命を下したので、二人は人間界に降っ てクスコに住み、マンコ・クカバックは勇達に地を 耕して穀物を作ることを教え、ママ・ウロは女の 人達に糸を紡いだり機を織ることを教えた。	

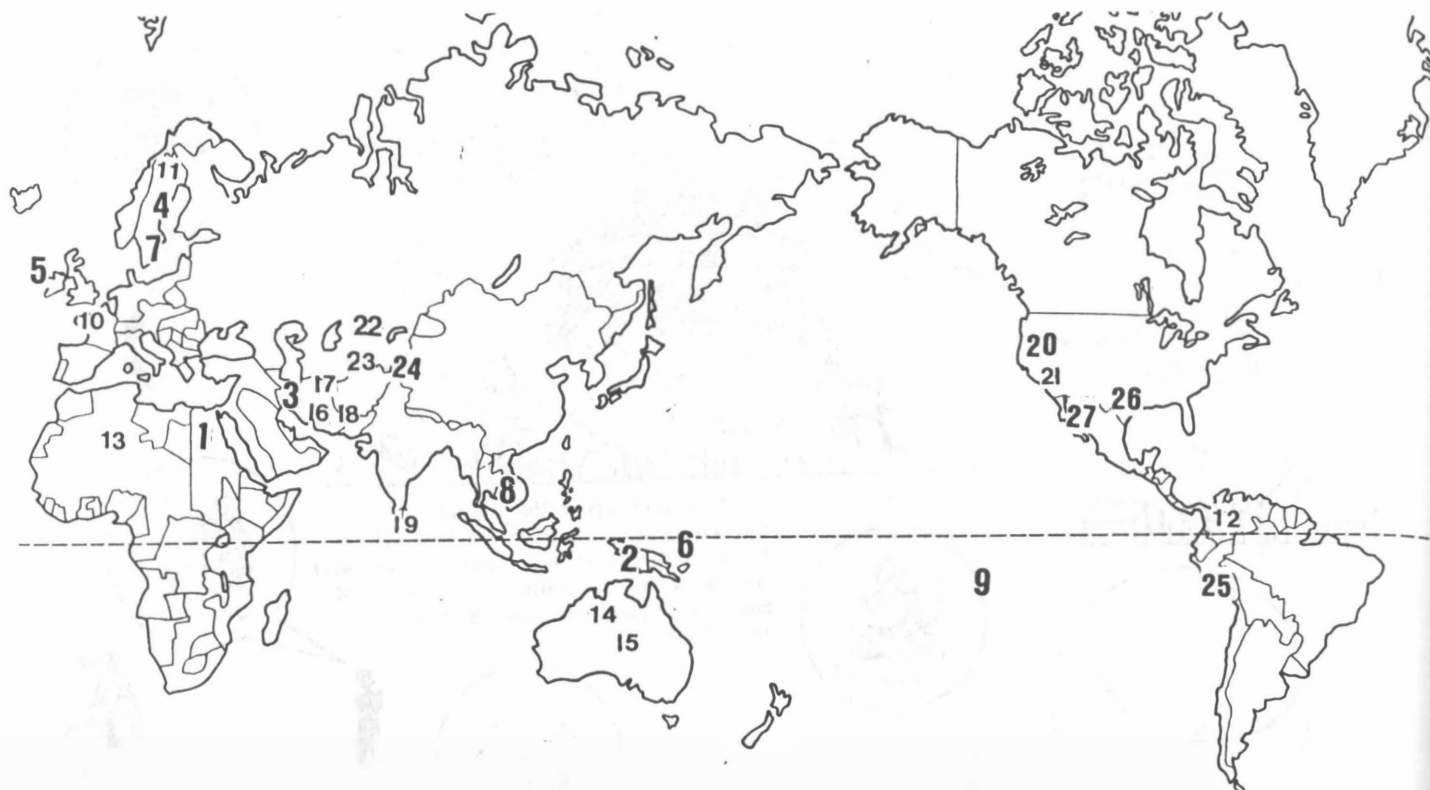
■世界の文化英雄一覧表■

民族名	文化英雄名	背景	出現方法	姿	事	跡	消失方法
インカ	Incahuasi	人々の生活が安定した頃と考えられる。 “結婚の酒宴” “山” “蛇祭” が既にあった。			ペルーの村々を歩き回って、人々に様々なことを教えた。しかし、耳を傾ける者がおらず、人々はあざけり、罵る。ソナバは宿もなく野に眠った。その村は大水のため湖に沈む。別な村でも人々につまみ出された。その村人は石に変わる。彼は十字架を背負ってCarapucuの丘に運び、人々に教えを説き始めたが、捕えられて岩室に押し込められた。しかし、天上界から来た神の使いの若者に助けられて、岩室を出る。彼は自分の考えに従う者に幸福を与え、これに背く者を罰した。	Cuecamarcay川を下って湖に出、そのままを隠す	
トルテック族 ナツェ族	Chucalcanali 他に多くの名をもつ	火を知らない人間世創食物を生で食べ、寒い時はひどく苦しんだ。	太陽の中から飛び出す経路	羽衣のある長い白蛇、象徴は羽の生えた杖、羽の生えた蛇、明日の朝陽、白色の羽衣、蛇、太陽の羽衣、白蛇など	人間を集めて火を与えた。また、トウモロコシの実と他の食物を与え、神々に果物、パン、花々を供えることを考案した。	蛇の腹に乗りトラパランへ向かう（太陽の出る東へ）また自ら雲に包まれ身体を焼く、その心臓だけが火の中に入り、飛び上って天になり、金星となった。	
マヤ族	Volankahil		太陽を住居として時々人界に降る		人間にものを書く技術や建築の技を教えた。		
マヤ族	Tohil	火を持たない頃、夜は真暗、寒さが鋭い。獲物も生で食べていた			脚をこすり、合わせて火をつくり人間に与えた。		
マヤ族	Hun-Apu Xbalanque の双生児	大洪水がまだ大地から引いてしまわぬ頃、怪物が住んでいた。	天海から大地に降る		神々にはむかう怪物Zipacna とCabrakanを退治し、人類の生活を脅かすものを除去して幸福をもたらした。		
セレベス島	Tandooja	神から授かった火を失い、火を起こす術を知らなかった。			タムボエジャは天上界に昇り、火の起し方をぬすみ見て、地上に戻り人々に火のつくろ方を教えた。		
セレベス島 Tokobu族	トゥレング	当時の米は粗く、一粒が握りもあり、貯えて置くことが出来なかった			「天国の民は細い粒の稲を植え、長い貯蔵に堪える」と聞き、天国へと旅立つ。そして足の裏に傷をつけ、米粒をその間に入れて下界へ降り、稲を育てた。		
オーストラリア クリン族	Bunjil	天地創造の神		大きな剣を手に、顔正のようにならぬように空の上に立つ	人として生活する色々な技術を教えた。	天に昇る	
ニュージーランド マオリ族	Māui	太陽の運行が速く、日が短くなった頃	海に流されてから再び現世に帰る	渦巻きの入れ果を皆人間	麻を編んだロープ、あや取り遊び、うなぎのワナ、釣り針などを発明。	地上で死ぬ	
台湾	太陽の子又は兄妹	兄妹の神が天に降って住んでいた頃	天より降る		芭蕉、玉、茅草、茅、ショウガなど地上の生活になくはならぬものを授け、耕作法、粟播きの順序などを教える。	天に昇る	
琉球	アマミキヨ シネリキヨ	国土創成期	天より天降る		天と下界を往復しながら、永い年月をかけて国土を創成し、天より五穀の種をもたらし、栽培方法を教えた。		
奄美大島	タラージ	稲作初期			初穂という良質の品種の米の由来として、昔一人の農夫の田が何度も高潮に流されるのを見た神が、ネリヤから稲の初穂を鳥にくわえて持って来させ、天からグエの種子を落とさせてこれを田の畔に植え田崩れを防ぐ法を教えた。		

■世界の文化英雄一覽表■

民族名	文化英雄名	背景	出現方法	姿	事	蹟	消失方法
エジプト	オシリス イシス	テーベにまだ神殿も王宮もなく、人々は石や木に刻まれた鳥や獣を神としていた頃	天の雷が雷のようにはなる若者にオシリス誕生を伝え、全土に広まった頃、男女の縁人として忽然と現れる	背が非常に高く、白い長上着を着た異星人風	病人を治し「神は石の像ではない。太陽は神の現れである」と見えぬ神について人々に教え、また王を正した。王の死後、人民の願いを受けて国を治め、さらに国外へ出かけて人民を教化していたが、セツトの策略により殺される。しかし、妻イシスの努力で復活、この故事がエジプトにおけるミイラ造りの起源となる。彼は元来動物の神であった。	復活後、エジプト世界を去って世界の王となる。	
ヘブライ	天使長 ミカエル	神がアダムとイブを創造した頃	火の車輪で（来る？）	風のような車輪に座る人	主なる神からの様々な種子をアダムに与え、地を耕す方法を教える。		
ヘブライ	“有って有るもの” （エホバ、ヤウエ）	寄留地エジプトで労役に苦しめられていた。	初め、山に燃える炎の中に現れ、次に空中の火の柱、雲の柱の主として現れる	“神の御座（シェキナ）”に立つ人	預言者モーゼを通じ、イスラエル一族を寄留地エジプトから導き出し、ホレブの山で「十戒」を授ける。一族がカナンに至る40年、上空に在り、移動の過程で過越祭の行ない方、契約を取る箱（聖櫃）、机、燭台、幕屋、祭壇、祭司服等の造り方を教えた。		
ユダヤ	イ エ ス	ローマ帝国支配下にあったパレスチナで、ユダヤ人祭司はモーゼの律法を解釈した律法を、守らせる律法主義を教育していた。	動く星と共に赤子で現れる		病人を癒し、貧しい者や当時“罪人”と呼ばれた人々の友となり、各地を巡って宣教を行なう。特に“悔い改め”と“神の国の到来”を説き、また将来起こる出来事について多くの言葉をのこし、最後に十字架にかかる。そして3日後に復活する。	十字架から雲に入って復活後、オリーブ山から雲に乗って昇天する	
ペルシャ	アフラ・マツダ	天地創造からBC.521のダリウス1世即位にいたる歴史が明記されている。	「速き馬に跨る白輪」（ゼントアグエスタ）と表現される	ダリウス王は翼を付けた白馬の形乗者として描く。	648万の星を創造し、宇宙の四方に配置し終えたが、邪霊の創造した惑星と対決、アフラマツダ率いる天使の群と邪霊率いる悪魔群が闘った。悪魔軍は敗北して閑寂世界に退却。アフラマツダは世界の創造を続け、火、水、草木、国々、人間と続く。人間は神を尊ぶように造られ、神の法に従って生きるよう、悪魔を崇め敬わぬよう人間に教え諭した。病気にきく薬草Haomaを教え、教えられたスリタはこの草から薬酒ハオマを醸して人間界最初の医者になった。世界に壊滅的な冬が到来せんとした時、イマ王を呼んで説明し、人々や家畜のための避難所造りと、それらの選び方を教えた。		
アイヌ	オキクルミカハイ アイヌ・ラックル オйна・カムイ	草木なく荒れた国土の初め		装束を身に付けると白輪の輝きを出す	天の神より人間界を治めるべく命を受けて、姉神と共にハヨビラに居住し、シントという空を飛ぶ乗物に乗じて活動。魔女退治、姫救出、飢饉救済、狩猟技術指示、生活道具制作指示など。	姉神と共にアイヌの国土から隣国へ去る	
和 人	須佐之男命				天地創造後、日本を形成した2柱の神の子、姉神の弟として天下を治める命を受けたが実行しないため、高天原から追放されるが、再び高天が原へ天地を鳴動させて昇り、そこで悪行を働く。出雲へ降ってからは大蛇退治、植林等を行ない、紀伊地方などで災厄を取り除く神、また武甕槌神とも名乗って人間に福祉を授ける恩人とされる。		
和 人	大國主命	“神代”期			須佐之男命六世の孫とされ、国土修理、天下巡遊、国内平定、農業の保護、医療、禁厭の法の制定、国土保護の働きなど数々の文化的事業を行なう。		
和 人	少名毘古那命	“神代”期	天之羅摩船で渡来	熊の皮を服に付ける（記）ササキの羽を衣にする（記）	大國主命と共に国造りを行なう（古事記）大穴持が病人だとき、これを活かさんと大分連見湯をもって治せしめ回復させた。医療禁厭の制定者、酒造りの神でもある。	熊野の御崎から常世郷に渡る	
和 人	にぎ連日命	後世に「神武」と名付けられた倭略民に「長髓彦の神」が祀られる以前の時代。	天の磐船に乗って大空から太利を見下ろしながら降下（書紀）		天降って後、大和鳥見の白庭山に遷り住んだ（旧事本紀）長髓彦の主神。	死後、神々が遺骸を天に迎える（旧事本紀）	





古代世界の太陽崇拝と太陽船 空から降った神々は文化を教示した

古代バビロニアの日神シャマシShamash (18)はいつも両肩から光線を発する姿で描かれるが、神話学では太陽の運航を人格化したものという解釈を踏襲してきた。また、世界共通とされる太陽崇拝文化が生み出した「太陽の船」という独特な主題も“太陽の運航を船に見立てた”という解釈で定説化してきた。

この伝統的な定説に異議を唱えるその筋の学者はいない。学問を大切にすると人は、長年にわたり積み重ねた学問の成果を転覆させるといふ動機が生じないからである。なぜならば、そこに古代世界を固定した標本のようにはしか思えない現代世界の潜在意識があり、「我々の方が昔より優れている」といった思い込みがそうした資料の組立作業に影響していると考えられる。

現代の我々が太陽に人格を与えることをしないように、古代人もまたそういうことはしなかった。ただ、崇高な思いで見つめた特殊な人々にのみ、“太陽の輝き”と“太陽の恩恵”を重ねた。それが「太陽神」の起原である。太陽神の称号をもつ特殊な人々は輝く乗物に乗って地上を訪れた。輝く乗物は古代人の感覚により、自分達が日常使う船や空に見える虹や輝く天体である太陽や月に例えられ、また大空を翔ける姿はその速きことを鹿、馬、鳥をもって表現しようと努力を重ね、特殊な振動を雷の音や稲妻に当てはめた。曲線を描く姿は蛇の飛行に例え、巨大な乗物の羽は牛の角のカーブを以て子孫に伝言された。やがて、子孫達によって伝言の絵画が彫刻に聖なる意味を伴って描かれるようになり、各々の表現や形容が一人歩きを始めて牛の背に神を乗せたり、蛇に翼を付けたりした。今、我々は20世紀の日常の感覚で、古代人が仰ぎ見たものと同じ物を、飛行船(19世紀末)飛行機(戦時中)ロケット、そして「空飛ぶ皿」「未確認飛行物体」で表現しているが幾千年を経てまだ完全とは言えない。

「太陽船」とは太陽を表す円又は光輪形状と船形の合体で、エジプト(1)ウル(3)アイルランドのニューグレンジNew Grange古墳(5)スウェーデンのスカニアScaniaイリュイ彫像(7)フランスのブルターニュ(10)スウェーデンのハランデHalland岸壁彫刻(11)がその例といえ、船室に類似した付随物のあるベトナム青銅器時代ドンソン(東山)文化銅鐘上模様(8)は例外的で「精霊船」というべきであるが、“死後の魂を運ぶ船”という意味では同じである。つまり、「太陽船」とは太陽の運航と魂の運搬を合わせ持つと考えられている。しかし、前述したように、この船は太陽ではない。強いて言えば人の死後、その魂のコントロール作業に従事する神々の運航するもの、という表現が古代人の信仰に基づいた正確な表現ではないだろうか？

この意味でアドミラルティ島の車輪門にはさまれた三日月の上に乗る祖霊像(6)やニューギニアの祖霊像(2)は重要である。一方、殆ど思想的背景を持たないサハラ砂漠ジャバレン地蔵牛銅時代の絵画は、“宇宙人”で知られる円頭人のヘルメットだけを乗せた角形空母(牛の上方に描かれている)(13)や、まるでUFOのスケッチのようなマルケサス諸島ファツヒバ島の岩絵(9)スウェーデンのキビウの図形(4)は船を意識したのか、結果として船の図形に近付いたのか不明である。いずれにしても、円の中に人物を入れ“円盤と宇宙人だ”と現代人の我々が描くような感覚からすれば、そういった描き方がともすれば中世の宗教画のような非現実な絵画になり易い危険を見事に回避して、現実の乗物である舟の形の上に輝きと人を乗せていることに感心する。

さて、つぎは神々を描いた絵画である。簡潔な線で描かれたセイロン島ヴェッタ族(19)オーストラリア(20)(21)北米インディアン(26)(27)やソ連フェルガナ(22)ペルーのナスカ平原(25)の人物は頭部に光の表現を持ち、明らかに原作民とは区別された特殊な人物を描いている。西アジアのカザフ共和国と中国新疆自治区の境にみられる岩絵のタムガルイヤアルマータの博物館に展示されている「太陽神」(23)(24)は民衆より倍程のスケールで描かれており、その特殊性は一目で分かる。神像の彫刻間に配置した“踊る群衆”は、このタムガルイヤ岩絵に描かれたものを使用している。(14)(15)(16)(17)はオーストラリア、オーストラリア、シュメール、ペルシャだが現代風の神像である。こうした人々が当時の各民族の生活技術や道徳律、栽培植物の種子、農耕技術などを教えたという神話伝説は全世界を被っている。

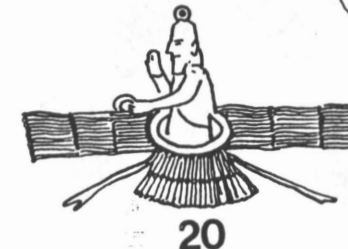
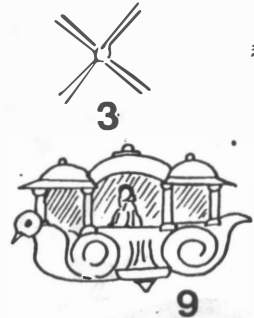
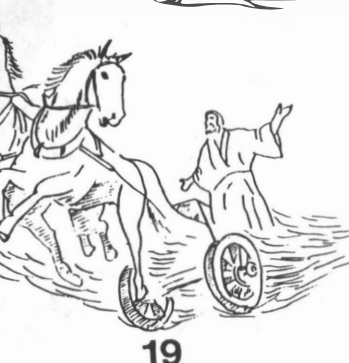
神々の船



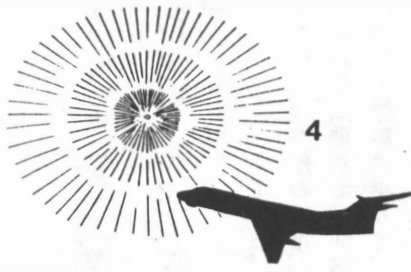
太古の昔から、空間の海は地球をとりまいてきた。地球は銀河の腕の中を母なる太陽を巡りつつ旅した。その永い年月は、文明を榮えさせ、衰退させ、消滅させ、新たな国々を生み出した。しかし、地球の歴史に、他の世界からの船は一隻も到着しなかったのだろうか？…この疑問に答えるかのように、古代美術や物語には、“空間を渡る船”が神々の乗物として数多くみられる。

1~6: 旧約聖書の「出エジプト記」14章に描かれた神の御座の雲 7: BC.2500-2100頃のウナス、テチ、ベビ1世、メレンラ、ベビ2世のピラミッド内部に描かれたファラオ死後の旅行デキストの一つで、星々を伴って神に向かう蛇に乗った人の一部 8: 熊本県宇土郡不知火町村原古墳壁画に描かれたロケット船の形 9: インド西端ボンベイのジャ・イナ教寺院に描かれたビマナの形 10: 古代インド叙事詩『ラーマヤナ』のシーンを模した彫刻。ラーヴァナの車に乗り、アヨードヤに帰るラーマとシータを表す 11: 11世紀のイランの詩人「サディ」は法を想人には恐怖を与える」と説く(在ホノルル、アカデミー美術館)に描かれた雲に包まれた飛船 12: 4世紀の作といわれる『御伽草子』の1つ『大田原』に登場する「飛行自在の車」浮城天皇(AR.1042)の世、雲が降下して天女と童児が金の車に乗るの姿が見え、そこから仙人が人降って来意を告げる、という話で、自在の車は三千里を一瞬に飛べかと思えば状況次第によっては動物だにしない。王を地獄の底へ落とす一方、花の都へ送り届けたりする 13: 福島県原町市原町西のモチーフの一つ。3個の渦巻きが空中に描かれ、それを手をつないで人物が見上げる様子、渦の中心から小さな円盤の形が放たれている状態を思わせる 14: ユーゴスラビア各地の男子修道院の壁には謎の宗教画が多い。ビキソ・デカニ修道院のフレスコ画はその一つでキリスト昇天の飛行物体2個が描かれている 15: BC.4世紀カナン人の貨幣にヤフ(ヤウエ)と銘のある神像が翼の生えた車輪に乗る姿で表現されている。当時のヘブライ人が偶像を禁じていたのに神像の知識にあるヤウエ像といえる 16: 『御伽草子』の「車僧草子」に登場する飛行自在の車 17: 南米コロンビア首都ボゴタの東部の銀行前金博物館所蔵の金細工の車に、生物の形とは懸け離れた今日の飛行機を思わせる5cm程度の細工の形 18: 多量のものにはコスタリカ、ペネズエラ、ペルーでも発見され、スミソニアン博物館、シカゴ自然史博物館、ニューヨーク自然史博物館などに展示されている 19: 1世紀にローマ上空(当時のイタリアでは多数の目撃証言あり)に現れた飛行物体をフィレンツェ派の画家マゾリーノ・ダ・バネ

"I will quietly look from my dwelling like a cloud of dew in the heat of harvest." (ISAIAH 18)
"Seek the Lord while he may be found, call upon him while he is near; ..." (ISAIAH 55)

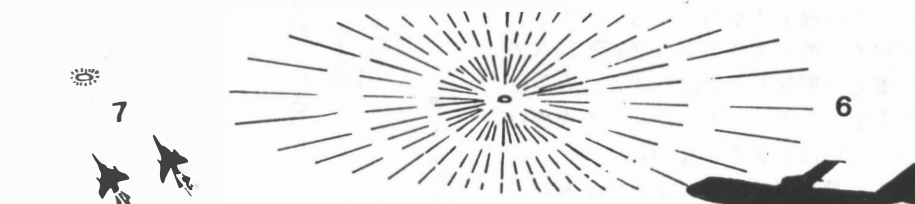


カルガが描いたのもて宗教画風に仕上がりしている 19: 旧約聖書「列王紀下」2章にみられるエリヤ昇天に登場する「火の馬がひく火の車」の再現画 20: イラン、キルマンシャー平原ベヒスタン山脈に刻まれたタリウス1世大王の記念碑に見られる「アフラマツダ像」 21: メキシコのマヤ遺跡ウシュケイ遺跡にみられる、複雑な装飾に囲まれた人物像で、空飛ぶ機械を伴う神とみられる 22: 旧約聖書「エゼキエル書」の19章から始まる意味不明の文を絵にした一つで、解釈により様々に描かれてきたが、いずれも人(神・天使)が乗って空から降下した何物かを意味している 23: 旧約聖書「出エジプト記」に何度も記される「火の柱」「雲の柱」 24~25: 北米ユタ州コロラド川東岸にある古代インディアンの岩絵「ニュースペーパーロック」にみられるもので、現代のUFOスケッチに酷似している 26: 群馬県群馬郡群馬村八幡原古墳出土の土器文様(18.2cm)に刻まれた紋様の一部



1: 1962.5.24 マーキュリー7号 2: 1969.11.14 アポロ12号 3: 1965.6.4 ジェミニ4号 4: 1984年、ソ連アエロフ-70号機 5: 1986.11.17 日航貨物ボーイング747 6: 1985.6.11 中国民航ボーイング747 7: 1967.9.19 イラン空軍F-4ファントム 8: 1948.1.7 米空軍F-51 9: 1948.10.1 米空軍F-51 10: 1952.7.19 1952.7.26 米空軍F-94 11: 1981.7.24 中国全土 12: 1973.10.18 米空軍 13: 1954.9-10 フランス各地 14: 1950.4.13 アルゼンチン 15: 1966.9.30 米ユタ州 16: 1947.7.23 米イースタン航空 17: 1959.6.26-27 ニューギニア、ババア地区 18: 1965.3.18 東亜航空コンベア240 19: 1958.1.16 ブラジル海軍省

"THE heavens are telling the glory of GOD; and the firmament proclaims his handiwork. Day to day pours forth speech, and night to night declares knowledge. There is no speech, nor are there words; yet their voice goes out through all the earth, and their words to the end of the world." (PSALM 19)



U F O の日本史

日本史上のU F O 表現例など

併記された天皇名

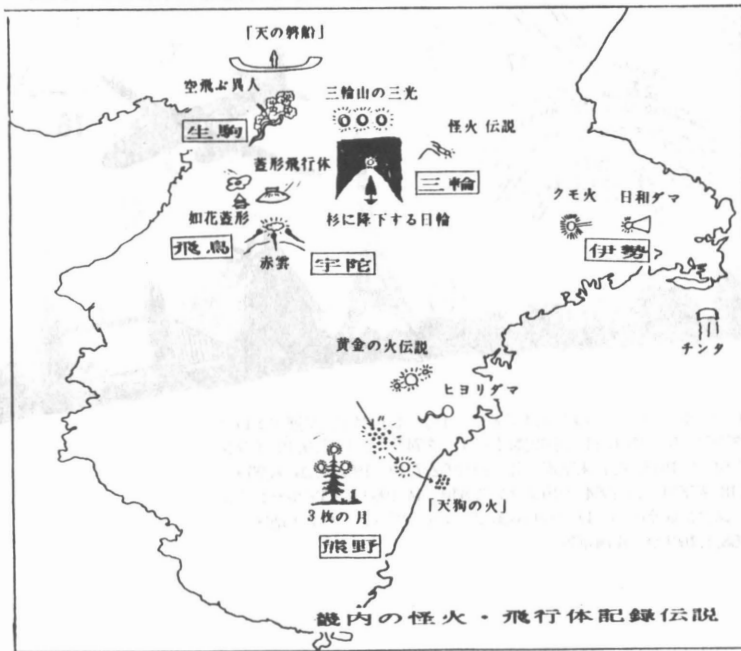
- 神 武：「空から地上に降下した天磐船」情報あり
 考 昭：「3枚の月形になって、天降る」熊野権現伝承あり
 考 安：大和三輪山に「日輪形の神、降下」の記録あり
 崇 神：八代白髪山に「火」が降下。
 天皇この地「火の国」と名付ける
 景 行：八代にて八朔未明、海上に「由知らぬ火」燃えるを見る
 雄 略：葛城山中で天皇一行、同じ装束の「一言主神」と遭遇。
 一説には、天皇、武装放棄して一切を神に献上す。
 継 体：「磐井の乱」。筑紫の国の豪族磐井が大和軍に敗れたことにより、彩色同心円、三角紋、蕨手紋、直狐紋などに代表される原始装飾文化が消滅。
 推 古：大和元興寺上空に「如花蓋形」飛来、人々合掌の記録
 皇極（齊明）：葛城山から生駒山へ飛行する異人の目撃記録
 天 智：大和十市倉橋山に蓋形の形の雲、琴音を伴い飛来の記録

■現代のU F O に似た空中現象の記述が『日本書紀』をはじめとする多数の古文書にみられることはよく知られている。

現代の我々が「皿」「ロケット」「飛行機」「葉巻」「球」「雲」「光」などの既知の言葉でそれを表現するのとはよく似た言葉がそれらの記述に用いられている。だが、皿や葉巻の形状からは離れすぎた表現に出会うと我々は途惑う。例えば「空を駆ける馬上の人」だ。この表現は日本ばかりではない。何故、馬や鹿あるいはトナカイなのか？

現代人の乗物の代表は車、船、電車、飛行機である。空を飛ぶものは飛行機だけだ。だが、U F O を表現した言葉はかならずしも空にある乗物に限ってはいない。「車くらの大きさ」（フランク・マナー）。「巡洋艦ほどの大きさ」（マンテル）といったように、しばしば「U F O の大きさ」を地上や海上の乗物と比較することがあるのだ。ならば、「鹿のように速く」「馬のように人を乗せ」と、体験者が語った言葉が、やがて第三者によって記述されるに及び、かなり実際と異なったイメージになることは当然予測されるのである。現代人の目や感覚は、過去を知る物差しの一部としなければならない。

■紀伊半島におけるU F O 目撃伝説：伊勢における「チンタ」「クモビ」「ヒヨリダマ」、新宮における「天狗火」は、筆者と同志2名が1970年6月と7月に現地調査で見出したもので、共著『U F O 目撃伝説』より見た紀伊半島の古代文化に詳細を記載した。『歴史読本』1976年11月号P.139に引用されている。最澄が見た三輪山の「三光」、長髓彦にまつわる宇陀山の「赤雲」は、村田氏のによる。「三枚の月」は熊野権現神社に語られる表現。



「日本書紀」には、神武天皇が東征するまえに、塩土老翁に聞いた話として、「東に美き地有り。青山四圍れり。其の中に亦、天磐船に乗りて飛び降る者有り」という情報を得ている。神武天皇は、「余謂ふに、彼の地は、必ず以て大業を恢弘べて、天下に光宅るに足りぬべし。蓋し六合の中心か。厥の飛び降るといふ者は、是饒速日と謂ふか」と、ニギハヤヒが天磐船で飛び降りたことをみとめている。

神武紀以外にも『旧事本紀』の天神本紀に天磐船の記事が記されている。

「饒速日尊、天神の御祖の詔を享け、天磐船に乗りて、河内国の河上の峰に天降り坐し、則ち大倭国の鳥見の白庭山に遷り坐す。いわゆる天磐船に乗りて、大虚空を翔行り、この郷を巡り睨て、天降り坐す。いわゆる虚空見つ日本国といは是か」

『旧事本紀』の天孫本紀にも同様の文章がある。

■ニギハヤヒが大和の国に降りたという記述を述べた金田一博士『白鳥伝説』より



左よりニギハヤヒの伴々尊、白庭山の神、白谷にまつる神の像。

赤雲、黒雲に覆われる 日出る国、大和軍に敗れる

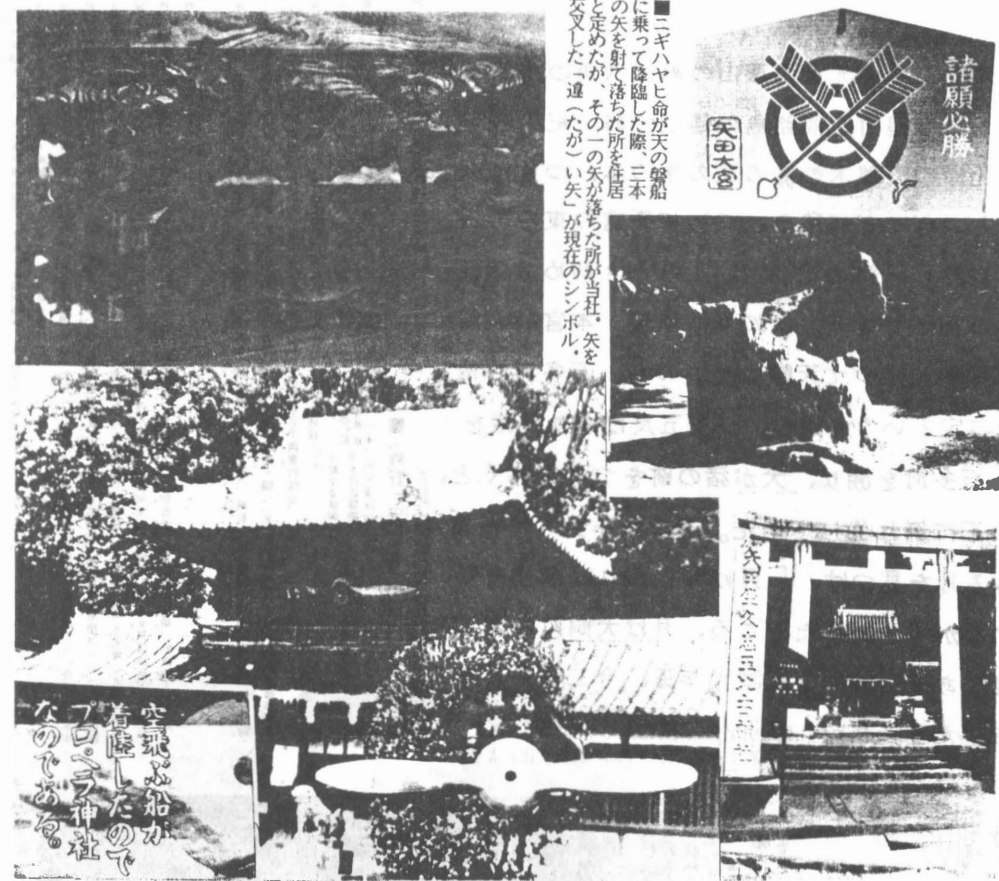
日本の正史外資料には、今日のU F O と似た記述がみられる。以下、勝手ながらこれを発見した村田氏の論文、『神武・長髓彦の対決とU F O 』から引用させて頂く。

「…神武軍は、東征開始以来4年を経て、長髓彦の本拠地大和侵攻に全力を注いでいた。この頃、大和の地には、昔天磐船に乗り、天上より降下した天照日子天火明命（天照日子命）を奉じる先住民族が、一大文化圏を形成していた。

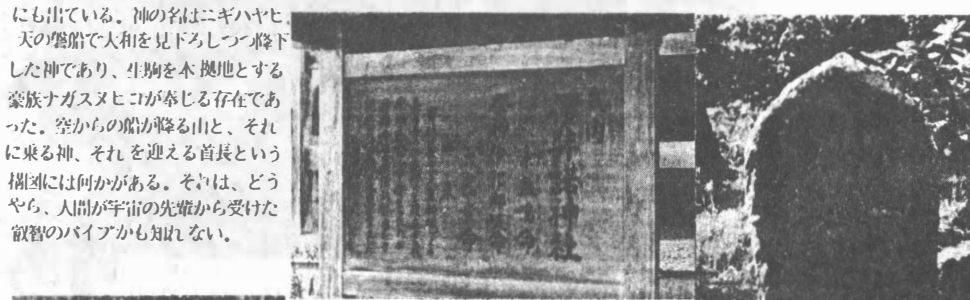
神武軍は、圧倒的に強い軍事力により、大和宇陀地方に武力侵入を計ったが、部族の首長たる長髓彦は、これに對抗し、屈しなかった。しかし、度重なる神武軍の攻撃の前に、やがて部族内部の裏切りが起り、長髓彦の鉄壁のゲリラ戦術も崩れる兆が現れてきた。

（中略）…神武と対決していた長髓彦にとって、弟磯城の反逆は大きな痛手となった。長髓彦の戦略の内情を知った神武軍が一挙に攻撃に出ようとした時、神武軍は、宇陀の山に、不思議な赤い雲を目撃した。（後略）

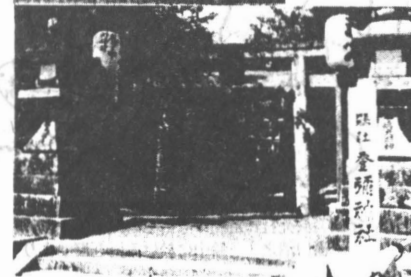
宇陀山の山頂に「赤い雲」が出現して、中空高く上昇し、さらに四方より、「黒雲」が現れ、移動して「赤い雲」を覆い隠したというのである。



■近鉄奈良線御所駅から久田寺行きバスで久田山下下車、民俗博物館へ向かう途中から久田寺方向に10分程歩くと「久田坐久志王古神社」がある。石の鳥居をくぐると木製のアコベを掲げた社殿が目に入る。戦国時代「航空神社」と仰せられ、日本最初の航空機が着陸したと当時信じられて新聞にも出ている。神の名はニギハヤヒ。天の磐船で大和を見下ろしつつ降下した神であり、生駒を本拠地とする豪族ナガスミヒが奉じる存在であった。空からの降参する山と、それに乗り、それを運ぶ首長という構図には何かがある。それは、どうやら、人間が宇宙の先輩から受けた叡智のバリエーションかも知れない。



■長髓彦の旧跡で、ニギハヤヒとその妻御炊屋姫の霊廟があったと考えられている長弓寺。ニギハヤヒは河内の「いかるが峯」に降臨し、その後大和の白庭山に移ったと『旧事本紀』は記す。



■ニギハヤヒを祭る磐船神社

勝井純著「神武天皇御東遷聖蹟考」によると、古図にニギハヤヒを祭神とする磐船神社の所在が記されていたという。位置は今日の四天王寺の北端で、そこを訪れると、2本の石柱（経欄）に刻まれた意味不明の文字がある。サンスクリット文字に雲気を施した、といった印象だが誰も解説してない謎の文字である。左右14文字。計28文字あるが、左手最下部にみられるこの文字は興味深い。それは一見U F O を文字化したような図形であるからだ。天空神ニギハヤヒを祭る「天の磐船」所縁の地に忘れ去られた碑が、偶然の悪戯か、訪れる者に謎をなげかけている。

跡縁起によると熊野権現は、まず九州の彦山の峰に八角の水精の形で天降り、つぎに伊予の石槌山、淡路島の鶴羽の峰、紀伊の牟婁郡切部山の西の海の北岸の玉那木の淵の松の木の本、つぎに熊野新宮の南の神蔵峰、とつぎつぎに移り、ついに新宮の東の阿須加社の北の石淵の谷に勧請し、鎮め祀つた。そのとき初めて結玉家津御子と申し、二字の社ができた。次に63年後、本宮の大湯原の太木の上に三枚の月形となつて天降つた。のち、石多河の南河内の住人、熊野部千与定という犬飼が、一丈五尺ばかりの猪を射、その跡を追つて、石多河を溯り、犬が猪の跡をつけていくと、猪は大湯原の例の木の根の下に倒れ伏していた。その肉を食べて一宿してから、木の枝に月を見つけ、「月は如何なれば虚空を離れて、木の枝におわすのか」と問うたところ、月は犬飼に答えて、「われは熊野三所権現である。一社を証誠大菩薩、今二枚の月を両所権現と申す」と告げたという。

■地引雄一、岡村秀、天宮清共著『UFO、UXXより見たる紀伊半島の古代文化』より

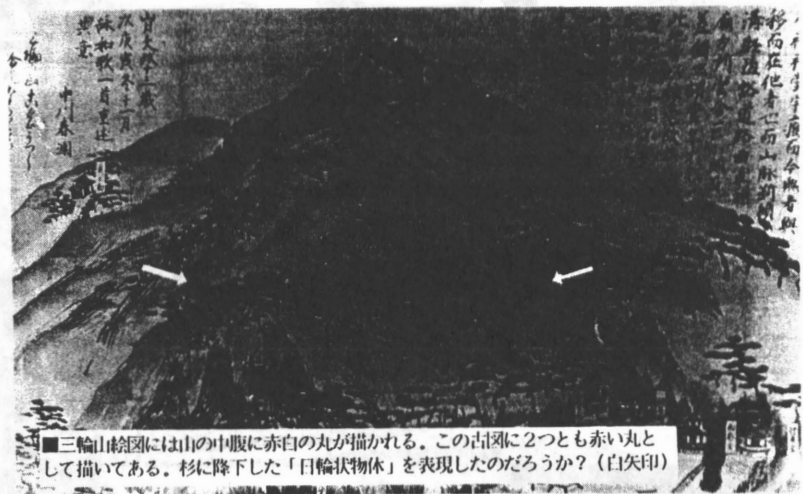
■三輪山神影に降下した「日輪の如き火」の記述。中山和敬著『大神神』より

古代と現代の「意志発現空中物体」

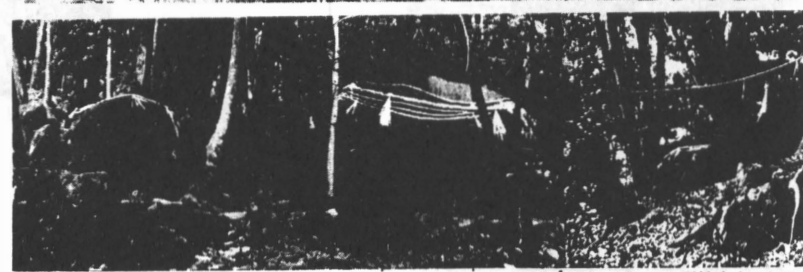
孝昭天皇の御宇、御鎮座なり。天皇元年四月何日（上卯）前夜半、峯の古大杉上に日輪の如き火氣有り、光を放ち山を照す。其時、神天降り、宮女に託宣し謂ふ。我れは日本大國主命なり。いま此國に遷り来れり。山田の古川比古に令して、我が広前に崇秘し奉る、云々。

1916年晩春のある日、ボルトガル寒村ファティマのカソベ山で羊番をしていたアントニオ・ドス・サントスの末娘ルチア、マヌエル・ペトロ・マルトの末子で兄のフランシスコと妹のヤシントは、雨宿りに入った洞窟でロザリオを唱えた時、突風が吹いて振り向くと、かんらんの木の上に真白な人影を見た。それは少年で「こわくはありません。わたしは平和の天使です。わたしに祈りましょう」と言って自ら地に身をかがめて祈った。（セ・バルタス著『ファチマの牧童』より）

1972年5月、ソ連ボログラードから19キロの地点をドライブ中の5人は、エンジンの調子が悪くなって車から降りた時、真上に巨大な金属性の物体が浮かんでいるのを見た。全員まったく恐怖を感じなかった。すると誰とも知れない声が、彼らの心の中に直接語りかけてきた。「恐れることはありません。私たちは平和のためにやってきたのです」この声は5人とも聞いたと証言した。（中村省三編著『赤い国のエイリアン』より）



■三輪山神影には山の中腹に赤白の丸が描かれる。この古図に2つとも赤い丸として描いてある。杉に降下した「日輪状物体」を表現したのだろうか？（白矢印）



三輪山中の磐座群



考古学研究会発行1927年『考古学研究』第1号 樋口清之「三輪山に於ける巨石群」より

ストーンサークル状の石組

公望の私記に曰く、案するに、肥後の國の風土記に云はく、肥後の國は、本肥前の國と合せて一つの國たりき。昔、崇神天皇の御世、益城の郡の朝來名の峯に、土蜘蛛、名は打家・類聚と曰ふもの二人ありき。徒衆百八十餘りの人を率ゐて峯の頂に據り、常に皇命に逆ひて、降服ひ背へざりき。天皇、肥前等が祖國諸祖に勅せて、彼の賊衆を誅したまひき。健甕祖、勅を奉りて到り來り、皆悉に誅ち夷け、便ち、國境を巡りて、消息を察し、乃ち八代の郡の白壁山に到りて、日晩れて止宿りき。其の夜、虚空に火あり、自然に燃え、稍々下りて、此の山に著きぬ。健甕祖、見て大く驚きしと懐ひき。行事遂に畢へて、朝廷に参りて、行狀を陳べて奏言し、云々を奏言し、天皇、驚き下りて曰たまひし、
「賊徒を斬り掃ひて、嶺に西の峯なし。海上の動、誰人か比ふものあらむ。又、火の空より下りて山に燃えしも怪し。火の下りし國なれば、火の國と名づくべし」とのたまひき。又、景行天皇、珠璣國を誅したまひ、衆諸國を巡狩し、しき云々。火の國に幸さむと海を渡る間に、日没れ、夜暗くして、君かむ所を知らざりき。忽ち火の光ありて、遙に往く前に觀えき。天皇、神人に勅りたまひし、
「行く前に火を見ゆ。直に指して往け」とのたまひし。火の國に往くは、果に火の國に著くを得たりき。即ち、勅りたまひし、
「火の國の國は、此は何といふ界ぞ。燦ゆる火は、亦何なるもの火ぞ」とのたまひし。土人、奏言し、
「此は、火の國八代の郡の火の邑なり。但、火の由を審かにせず」とををしき。時に、群臣に詔りたまひし、
「燦ゆる火は、俗の火にはあらず。火の國の由は、然る所以を知りぬ」とのたまひき。

公望私記曰、案、肥後國風土記云、本與肥前國、合爲一國、昔崇神天皇之世、益城郡朝來名峯、有土蜘蛛、名曰打家類聚二人、率徒衆百八十餘人、竊據峯頂、常逆皇命、不肯降服、天皇勅肥前等祖國諸祖、遣兵討伐、健甕祖奉勅到來、皆悉誅夷、便還國界、衆察消息、乃到八代郡白壁山、日晩止宿、其夜虚空有火、自然而燦、稍々降下、著此山、健甕祖見之、大懷驚怪、行事遂畢、參上朝廷、陳行狀奏言云々、天皇下詔曰、剪拂賊徒、頓無西害、海上之動、誰人比之、又、火從空下、燒山亦怪、火下之國、可名火國、又、景行天皇、珠璣國、衆巡狩諸國云々、幸於火國、渡海之間、日没夜暗、不知所著、忽有火光、遙觀行前、天皇勅諸人曰、行前火見、直指而往、問勸往之、果得著燦、即勅曰、火燦之處、此何界、所燦之火、亦爲何火、土人奏言、此是火國八代郡火邑也、但、未審火由、于時、詔群臣曰、所燦之火、非俗火也、火國之由、知所由然、
（日本書紀）



『風土記』に記載された如く、九州「火の國」の由来は火山に非ず「空より火の降る」意である。また年一度八朔の海に出現する「等身大の火球」（不知火接近者桑田力氏1963年証言）は知性的にコントロールされ、海面下に潜る能力をもつ（KJ1981年証言）筆者は巨大な1個の火が数個に分裂する現象と、上空に飛来したUFO、磁気変動を確認。また証の光跡を撮影した。（別稿参照）

伝統や血脈に価値を求めるとすれば、空から地に降り来る乗物と乗員についての理解の度合いに何か意味がないだろうか。人とは理解しなげな記述しない生き物か。もし、そうなら、古代も現代もUFOという理解を越えた現象の記録は知識の外に置かれていただろう。しかし、幸いにして、人の営みは理解を越えた現象でも記録した。その記録はいま、人と人を分類しはじめた。例えば、1800年前の不知火記録を「空気レンズ」で理解しようと勉める側と、その発生源を地球外知性にも求める側である。両者の知的距離は1800年で埋まるだろうか？日本の歴史物語をみると、似たような状況があった模様である。

また一時、天皇葛城山の山に登り幸でましき。ここに大猪出でつ。すなはち天皇鳴鶴をもちてその猪を射たまひし時、その猪怒りて、喰ひ依り來つ。故、天皇その喰ひを畏みて、猪の上に登りましき。ここに歌ひたまひし、
やすみしし 我が大君の 遊ばしし 猪の病猪の 喰ひ畏み 我が 逃げ登りし 在丘の 櫛の木の枝へ
とうたひたまひき。
また一時、天皇葛城山に登り幸でましし時、百官の人等、悉に紅き紐著けし青摺の衣服を給はりき。その時その向へる山の尾より、山の上に登る人ありき。既に天皇の 處薄に等しく、またその装束の狀、また人衆、相似て頗るざりき。ここに天皇望けまして、問はしめて曰りたまひし、
「この倭國に、吾を除きてまた王は無きを、今誰れし人ぞかくて行く」とのりたまへば、すなはち答へて曰す、
「皇の命の如くなりき。ここに天皇大く怒りて矢射したまひ、百官の人等悉に矢射しき。ここにその人等もまた皆矢射しき。故、天皇また問ひて曰りたまひし、
「然らばその名を告れ。ここに各名を告りて矢射したまひき。ここに答へて曰しけらく、
「吾先には名告りせむ。吾は惡事も一言、善事も一言、言ひ難つ神、葛城の一言主大神ぞ」とををしき。天皇ここに懷疑みて白したまひし、
「恐し、我が大神、現しおみあらむとは覺らざりき」と白して、大御刀また弓矢を始めて、百官の人等の服せる衣服を脱がしめて、拜みて獻りたまひき。ここにその一言主大神、手打ちてその捧げ物を受けたまひき。故、天皇の還り幸でます時、その大神、満山の末より長谷の山口に還り奉りき。この一言主大神は、その時に顯れたまひしなり。



上：葛城山より大和三山を見る
下：一言主神社境内

神と人との対話？

雄略「名を名乗れ」
神「一言主神である。」
雄略「なんと、神とは現身だったのか!?!」

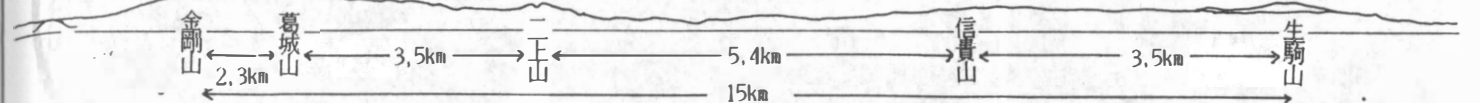
過去の物語は、「現代」を理解するヒントではないだろうか？我々が空中の飛行物体や山の上の光点を「UFO」としか表現できないのと同様、昔の人々は人智を越えた存在を「神」と表現したようである。だが、その存在は信仰や文学だけの飾り物でなく、現実のいたと、雄略伝は語っている。



中国の古書『管子』に記された飛空の仙人



中国の古書『管子』に記された飛空の仙人



龍に乗る唐人 津輕伝承の絵画化

日本書紀 卷第二十六

天豐財重日足姫天皇

天豐財重日足姫天皇は、初に橘豊日天皇の孫、高向王に過して、漢皇子を生ませり。後に息長足日廣額天皇に過して、二の男、一の女を生れま。

日本書紀 卷第二十六

天豐財重日足姫天皇

天豐財重日足姫天皇、初適於橘豊日天皇之孫高向王、而生漢皇子。後適於息長足日廣額天皇、而生二男一女。

葛城山から生駒山へ天駆ける異人

筆者は、生駒山の東天理市に住んで15年以上になり、その間、様々なUFOを目撃してきた。筆者はそれらを「自転する円盤」とか「変化する金属物体」などと表現したが、1300年以上も前の人々の表現はやがや異なっていたらう。

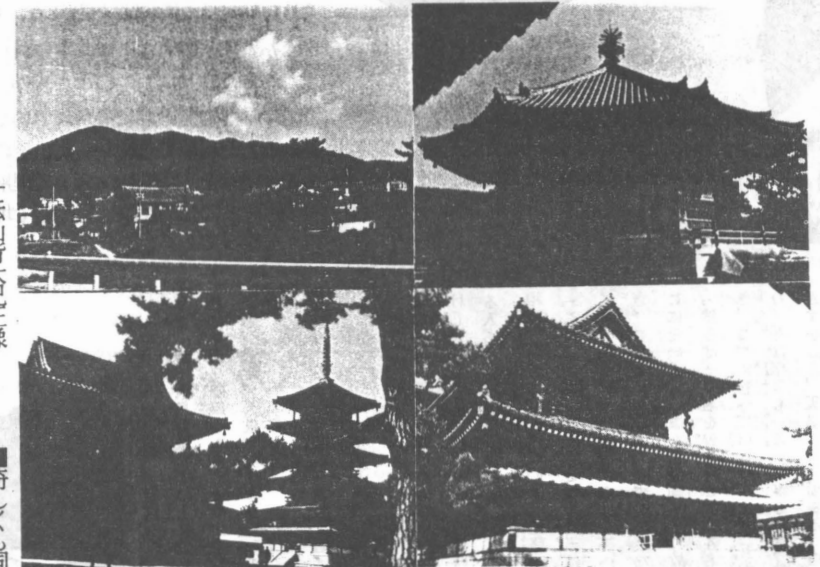
〔扶桑略記〕 推古天皇四年、冬十一月、法興寺造る。天皇殿天降供養。今元興寺是也。

〔帝王編年記〕 天智天皇九年庚午九月六日、大倭寇改葬。王公卿士悉以向葬所、千時空中有雲彩雲、絲竹之音聽其上、大衆歡喜有、大和國十市郡會橋山多武峰葬之。

古代UFO古記録例 古代UFO古記録例：「雲」「花雲」「雲形の雲」という表現が注目される。

法隆寺に最古の飛仙図

7世紀 薬師像台座から発見



伝山背大兄王像



法隆寺金堂壁面の飛天



生駒山の昇天目撃伝承

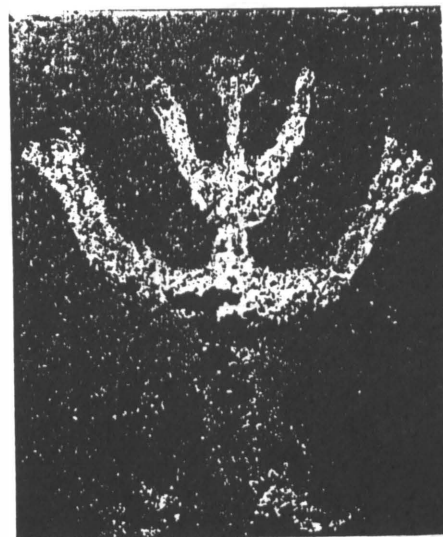


法隆寺の国書、薬師像台座内壁に描かれていた飛仙図

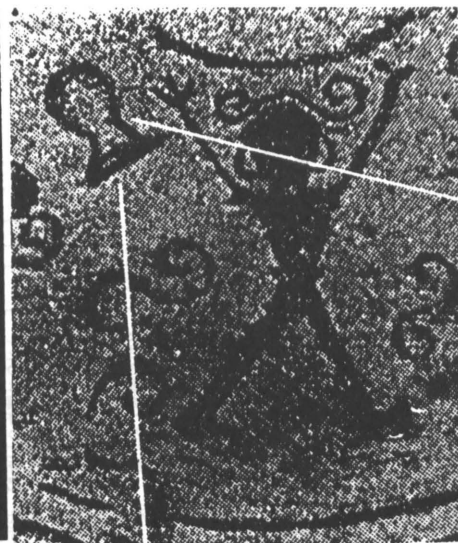


奇しくも同一天皇による2度の治世、生駒山にまつわる空の事件が『日本書紀』にみえる。六四三年十一月、蘇我入鹿が斑鳩宮の聖徳太子長子、山背大兄王を襲った。

十一月一日、蘇我入鹿は小徳臣勢太田大仁土師婆連を遣わして、山背大兄王を不意に斑鳩に襲った。ある本には巨勢太田大仁土師婆連を遣わして、山背大兄王を不意に斑鳩に襲った。



熊本市東山麓市瀬川付近のチブサン古墳石棺壁画の一部



八幡原古墳の石棺壁の模写。前方後円形が写し出されている(1950年『玉川児童百科大辞典』掲載)



図文様を内外に分けて点を除けば殆ど中国の龍の影を受けていない日本人好みの文様を用いた群馬県八幡原古墳出土土器文様。



日本原住民の所三角紋と渦紋は古墳装飾の主要模様である。

渦紋

三角紋



ペルシャの翼門窓を模した形に注目



最も古い形式に属する雲墓の平面図。



熊本県十王前橋穴11号正面上の連続紋(1971年8月 若林吉幸氏の模写より)



最も古い形式に属する雲墓の平面図。

前円後方

太陽舟

蕨手紋

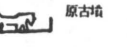
古代の図形



五郎山古墳



原古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳



五郎山古墳

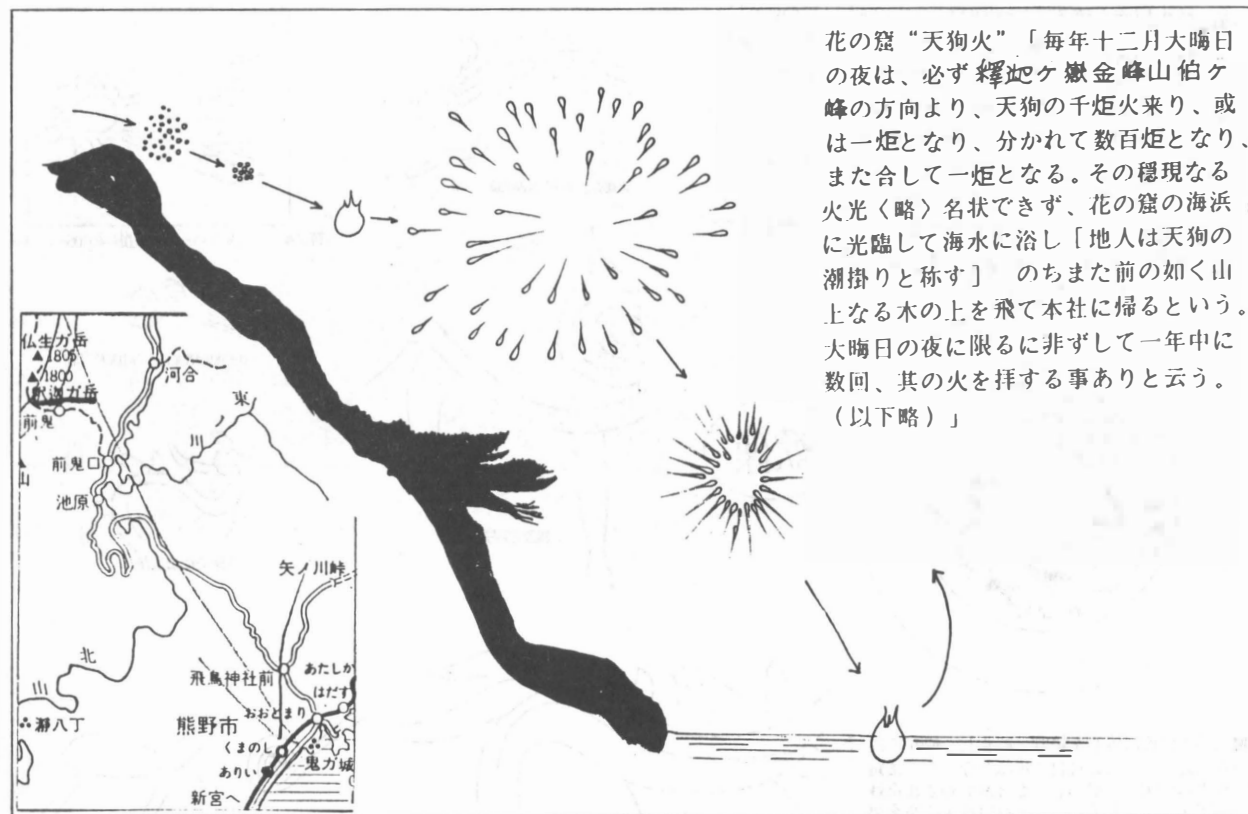


五郎山古墳



五郎山古墳





花の窟「天狗火」毎年十二月大晦日の夜は、必ず輝け金峰山伯ヶ峰の方向より、天狗の千炬火来り、或は一炬となり、分かれて数百炬となり、また合して一炬となる。その秘現なる火光く略名状できず、花の窟の海浜に光臨して海水に浴し「地人は天狗の潮掛りと称す」のちまた前の如く山上なる木の上を飛て本社に帰るという。大晦日の夜に限るに非ずして一年中に数回、其の火を拝する事ありと云う。(以下略)」

UFO考古学とUFO考現学の間

機械的怪火は地表配置された地球外超小型調査機か

古代の岩に刻まれた現代のUFOを思わせる図形は、「何か古代人の空想や願望のシンボルを描いたのではないか?」とか、「天空人來訪神話」も「死者を慰めるために、空や星の世界を結び付けたものだろう」という反論はあるだろう。キッチリと構成された人類の偉大なる歴史に「地球外知性」などが割り込んでもらっては迷惑だという感情論もあるかもしれない。だが、今日の空と同様、過去の空は未知の飛行物体でにぎわっていたという文字の記録があるのも事実だ。その「文字の古記録」が正しく「事実」だと確認できる現象が今も見られる「怪火」の類である。筆者も1800年前の記録そのままの「不知火」を何度も観測した生き証人の一人である。また、観測中に磁針が半回転する現象や、海面に降下したり我々観測者のそばを飛行する未知の飛行物体をも目撃し記録している。生駒山南側でも火事の発生を思わせる「巨火」が脈動し数分で消滅するという現象を見ている。

従って、筆者のこの怪火現象に対する姿勢は、文献資料の研究と実際体験を車の両輪として取り組もうとするものである。同時に何度も云うようだが、UFOについても同様で、知識でこれを論じているのではなく、文献知識と目撃撮影体験による確認作業を同時進行させている。「怪火」とは空飛ぶ円盤、あるいはUFOという名称のなかった昔の目撃者が、それと似た未知の現象を指す一般的な概念である。他に「天火」「龍燈」「天狗」「不知火」「鬼火」などがある。霊的な解釈や、霊的な現象もあるらしく、現象面でこれらを区別する事は難しいが怪火に多いパターンに、一個が数十、数百に分裂し、再び集合して一個になる、という運動は機械的な印象を与えるものであり、未知の自然現象という解釈より、地球外技術が地球上の何らかの目標(人、物など)を継続観察し母機への情報発信機能をもつ耐久的な自動対応機能内蔵の空中機械として考察する理由を与えている。

■「一瞬に数十キロを走る火」
「列を成して空を飛ぶ火の玉」
「海から出る神火、竜燈、神光」
…それらは「火祭り」を発生させ、
…海に囲まれた人々の
……海上信仰となった■

「天狗の火は夜、赤い火を輝かせて、一瞬に数十キロを走る。山の上に出たなと思うもう目の前に来るのだ」(松谷みよ子『現代民話考』)「日本の『神』は、昔の言葉で表せば、たまと称すべきものであった。それが、いつか『神』といふ言葉で翻訳せられて来た。」「神火ヲ施シテ闇

夜ノ漂船ヲ助ケ給ふ…」「…竜が口といふ山より矢を射るごとく飛来せる神火あり。里人、これを拝して年越す」「八月朔日を縁日とし山にのぼる人多し。此夜にかぎり竜燈あり」「竜燈は、信仰ある人々にとっては闇夜の道しるべであった」「…このような“海上の神火”は中国人にも東シナ海域で感得され信仰を生んでいる例は多い」(北見俊夫『日本海上交通史の研究』)

「…竜燈松(杉)は、天然の樹木の上に火を点じ、神の降臨の際の目印とした柱松の風に発展…火祭りとして諸精霊追善のため盆に立てられた

が、これは先祖の御霊を送迎する迎え火や送り火と同様の意味を備え…」(柳田国男『柱松考』他より)

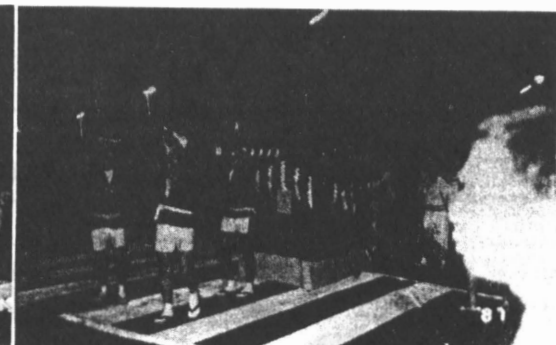
■津川の狐火が祭りに発展■

「夏の夜、山の向うに提灯くらの赤い火が、7つか8つぐらい点いたり消えたりする」「赤い宝珠の玉のようで、後先に点いたり消えたりし移動する」…この様な神秘的火を松明で再現し、それがロープに100個の懐中電燈を吊す形になり、狐の嫁入り行事となった。これは、空の神秘的な火が人の関心を誘い、再現する楽しさを呼び、やがて人々の年中行事へと定着していく民間史の変遷をみるようだ。

(角田義治著『現代怪火考』より)



新潟県東蒲原郡津川村ふるさとまつり
「きつねのヨメ入り」赤城源三郎氏撮影



新潟県東蒲原郡津川村ふるさとまつり
「きつねのヨメ入り」赤城源三郎氏撮影



■正月注連縄
東京 和歌山
輪じめ
■麻呂伝説には天界を追われたスサノヲが、災いからの過ぎ越し法として、シメナフを教示したとある。(「FURUGI」よりみた紀伊半島の古代文化)より)

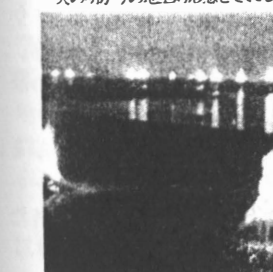
全国怪火例



■狐火: 狐がとすと信じられた怪火で「宇治拾遺3.20」の話などが古い。江戸では「王子の狐火」が有名で、毎年大晦日の夜、王子稲荷に八州の狐が集り、狐火をともし、土地の人はその様子を見て豊作の吉凶を占ったという。のちに松明をともし、これをまわしたという。写真は広重江戸百景の「王子の狐火」



火祭り: 分布は全世界に及ぶ。火は神を招く目印、また神そのものの表徴。火による浄化、治癒などが信仰される。柱松、火提灯、火柱、竿灯など、ペルシャの特殊火祭では、火は天の明かりの地上的形態とされる。



百八燈: 8月16日山梨県南巨摩郡南部の火祭り。河原に高さ10mの竿を立て、その先に松明を掲げて火をつけて炎上させる。広い河原が火の海になる。

秋田県平鹿郡雄物川町宮ノ目の飯塚の上に夜(昼)燐火が燃える。
新潟県津川で大正の初めの頃の或る晩、天満山の方角にパッと火柱が立った。
新潟県津川 ある8月の夜12時〜1時頃、阿賀野川近くの深戸山の向うに、提灯くらの大きな赤い火が7〜8個ボカボカとついたり消えたりする。そして、すぐ目の前にも現れた。
新潟県津川町上川の小倉峠で10月末頃、向うの山に竹ぼうきを逆さにしたような形の、赤味を帯びた火がボカボカ出て、遠くの山からまた近くの山へ移ったりするのが、毎晩8時過ぎになると見えていた。
新潟県津川町で、明治41年か2年頃の6月末の夜9時頃、阿賀野川対岸の金べら山の麓に赤い宝珠の玉のようで後先にボカボカ点いたり消えたりして、真ん中が4つか5つかたまって点いていて、移動する火が出現30分くらい見られた。
新潟県津川町で或る年の春、赤い火出現。こつちが消えるとあつちへ点く。あつちが消えると、こつちが点く。そのようにして約1時感感間くらい近所の人々大勢が目撃。
茨城県 凡天山 地震の前に未確認飛行体出現
群馬県桐生市広沢町で大正10年頃の夏、渡良瀬川対岸の茶臼山斜面をだいたい色の無数の光がチラチラとまたたきながら登っていった。

千葉県木更津市太田山下で夜、点々と提灯がともり町中へ行列をつくる。
埼玉県川越市喜多院の明星の杉は、境内の地から明星が上がり、老杉の梢に輝く。
埼玉県岩槻市慈恵寺では、天変地異のある時、火炎を吐いて鳴り渡る火炎車が現れる。
東京都本所で夜中、前方に提灯の灯が見えるが、追っても近付けない。「送り提灯」という。
東京都西多摩郡奥多摩町の愛宕山に火柱が立つと火事がある。
神奈川県津久井郡青根地区では昔から「飛び玉」が見られ、これには青と赤があつて速く飛ぶという。
神奈川県津久井郡湖底部落荒川で、大正3年頃の冬の晩、三井山の中腹の道に横に並んで点いたり消えたりする狐火がしばしば現れた。

神奈川県横浜市磯子で、8月の晴れた天気の良い日に、決って狐火が通る。
静岡県浜松市に天狗の火が現れる。
長野県東筑摩郡明科町で、昭和27.8年頃8月盆の時、山の方に赤い一つの大きな明かりの固りがあり、それが急に5つにも6つにも分かれて、丁度踊りをおどるように見え、大きくなったり散ったりしながら5分間くらい見えていた。『和漢三才図会』の鬼火に「或ハあつまり或ハ散シ」とあり、松明のような火が、集合離散することが述べられている。

長野県小海町で昭和の初めの秋、国鉄小海線の線路をはさんで山の中後に狐火がチョンチョンとつづら折りの山道を上るように点いて、また返ってくるという具合に、何回も往ったり来たりした。

長野県穂屋町御射山祭りの際、日中に日、月、星の三光が現れる。

長野県下伊那郡生田村天龍川に丸い火の玉が現れ、2つに割れる伝説あり。

長野・岐阜県境木曾御岳山では、懐中電燈光位の大きさの怪光が出没する。色は青白く、フラフラと空中に漂うという。

岐阜県飛騨白川村の山の谷間で、直径30cm程と見える明るい赤い火の玉が乱舞した。

滋賀県で寛政の頃、鏡の宿のほとりの溜池に、小雨の降る夜、あるいは曇った闇夜には、池の中から大きな火の玉が出ると云い、その火は総体が人の形をし、丈が五尺五、六寸(1.7m)、頭部は「横槌」のようで、その色は青く、また黄色のところもありこの火が現れるのは夜半頃で、池から出ると人が歩くように東西南北5.6町(約550m〜650m)行き来し、迎りは月夜のように明るく照らし出される。速水晩斎もこれを目撃、「怪談藻塩草」に実見記を書いている。

京都鴨川筋で宝暦の末、7月下旬八つ時(午前2時)河原町松原より2町(約218m)北の方に、2列になった千ほどの火がしずしずと、河原おもてを南の方へ松原さして進み、次第にまばらになって1時間後、松原に着く頃には消え失せて跡形もなかった。

京都府洛西の壬生寺に近い仏光寺通りの川原はずいぶん安永の頃、「古来この辺に宗玄火という火の玉が出る。雨夜はもちろん闇の夜には必ずこの火出づるなり」との伝説があり、出現時刻は四ツ過ぎ頃(午後10時過ぎ)で西の方から火の玉が現れ、壬生寺の向うの土手のやぶ陰を伝い、南の方へ下って畑の中へ出ると、その火の玉がたちまち3つ4つ5つに割れて、飛び上がり、パッと散ってはまた集り、半時(1時間)ほどそうやって、また一つになり北の方へ去る。

太平洋戦争開戦時、米国本土に謎の空襲

紐育上空を飛翔

日本機か
獨逸機か
大恐慌捲き起す

【フエノスアス本社特電】(十日星) ワシントン十日電、今日午後四時三十分のニューヨーク市に近郊ミチエル・空軍基地が發せられた「アメリカ海軍飛行機」を認識し、右はニューヨーク市近郊ミチエル・フィールド飛行場目指して飛來する敵飛行機を、認めなめた後、右飛行機は一時、間に大急ぎで起したニューヨーク市に目的地に飛去つたが、十日朝露市には、あてど切迫して、右の敵飛行機は果して日本機か或ひはドイツ機かと目下様々の臆説が行はれてゐる。

[illegible]

各都市非常燈火管制

「ストツクホルム本社特電」(十日ロイター通信)によれば、今日傍夕アメリカ海軍艦隊及び砲臺等が都市には

近頃は九月より一戦に昇進を遂げ、日本海軍艦隊に怯る人心轉機に振起してゐる。

聞其米船粉の空襲に隨ひて殺害せし人々

1941年12月8日、日本はハワイの真珠湾を奇襲して、米英両国に宣戦し、太平洋戦争に突入した。その翌日にあたる12月9日夜、ニューヨーク近郊ミッセル空軍基地を目標に“敵機”が飛来。空襲警報が発令されたが、謎の飛行機は“一瞬の間に大恐慌を起こしたニューヨーク市を尻目に何処にか飛び去った”という。

この飛来機が日本機であったか、ドイツ機であったか不明のまま、米国の太平洋沿岸都市、バンクーバー、シアトル、サンフランシスコ、ロサンゼルス、サイディエゴは“日本軍襲來說”に9日より非常灯火管制が実施された。

こうした中、その2ヶ月半後に再び謎の飛行物体がロサンゼルス上空に飛来した。空襲警報が発令されたが爆弾は投下されず、地上からは対空砲火があびせられたが謎の機体からは何の破片も落下しなかった。

現在、この事件は、その正体が後に「UFO」と命名されるようになった地球外飛行物体であったことが結論づけられており、ニューヨーク上空に飛来した飛行物体との関連性が注目されるところである。



ルーズベルト大統領 スチムソン陸軍長官 マーシャル国務長官

人類が飛行船を開発すると、飛行船に似た姿でロサンゼルスやシカゴ上空に「謎の飛行船」として現れ、飛行機が戦闘に出撃すると幽霊戦闘機として広い範囲に姿を現わし、V2号ロケットが登場するとゴースト・ロケットが北欧上空に現れるという、人類の技術発達に対応するかのような出現をみせる未知の存在は、日本軍の真珠湾攻撃に合わせるかのように、その2.5ヶ月後の1942年2月25日未明、ロサンゼルス上空に姿を現わした。

日本軍の空襲と判断されたこの現象に対して、午前3時12分から午前4時15分まで、第375沿岸防備対空砲兵隊は、1430発の砲弾を複数の侵入機に向けて発射した。

侵入した未確認機は総数15機で速度は一定しておらず、「秒速8キロ」から「時速320キロ」までの報告がある。外見は「赤い光点」との表現が報告されているが、撮

影された写真からは円形の面積をもつ発光体として写っている。とくに2個が重なるように写っている部分に半透明の特殊な機体が見られる。また、地上からのサーチライトの光を受けて目撃されている状況からすると、それは物質である。また、砲弾が命中しているにもかかわらず、物体が撃墜されず破片も落下せず、という通常では考えられない現象は、物体が砲弾の爆発エネルギーに対して完全な防御をもち、もしくは爆発力を吸収する特性をもつものと考えられる。

砲撃の目撃談にも「その昨裂音は、吸収されてでもいるように、まのぬけた音だった」というダグラス航空機会社ロングビーチ工場勤務のコリンズ証言がある。（ティモシー・グッド著『トップシークレット』）

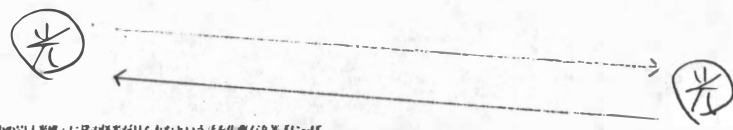
この事件に関係した当時の著名人としては、事件の概要を発表し

た陸軍長官ヘンリー・スチムソン。大統領に報告書を書いたジョージ・マーシャル国務長官。報告書を読んだフランクリン・ルーズベルト大統領となっている。



■1942.2.25 未明、米国ロサンゼルスに飛来した飛行物体群が、地上からのサーチライトを照射されている状態を撮影したもの。この写真では7個ほどが認められる。“敵艦”とされながらこれらの飛行物体からの爆弾は1個も投下されず、飛行体は地上からの砲撃にビクともしなかった。この事件は、UFOに発砲した最初の事件かも知れない。

■鹿児島県阿久根市“光礁”の怪光■

[illegible]

巖と光：「島根県日御碕海岸の経島には、昔この島の上に光が輝いて、日の神の御座宣言があった。」
「奈良春日大社正面の『出現岩』には、昔、雷の神がここに降ったといわれる。」
「兵庫県豊岡市横上の重浪神社の巨石『御船岩』には、岩の上に光が輝いたという老人の話がある。」
（嵯野昇一著「日本の地名とUFOの謎」より）



三重県津市四天王寺に夜半、龍宮より灯明が獻じられる。
奈良県宇陀郡室生村(山)では、月夜に金の輪が見える。
奈良県宇陀郡室生村石割峠の地藏に雨の夜、火がとる。
和歌山県日高郡川辺町小山に天狗のたき火が生じるが山火事を起こさない。
佐賀県鹿島市蓮蔵殿の岩石より白玉が出る。

高知県土佐清水市足摺の天灯・籠灯とは、金剛福寺本堂の前に竜石があり、毎晩竜灯がこの石上来て照らすといわれる。(県立図書館職員広谷喜十郎氏)

広島県豊田郡安芸津町では、8月から11月にかけて、雨や曇った日に青い火が見える。青い火が続いたら3日後には必ず大嵐になる。

広島県佐伯郡宮島町弥山の松明とは、時として火の燃えることあり、通常の火より赤く、樹間を徘徊するように見える。

島根県隠岐の海に出現した怪火「一去ヌル承クノ乱ニ後鳥羽院遷嶋ノ石切り浪高ク風荒レテ御船危ニ及ブ。其ノ時帝此ノ社ヲ念ジ給ヘハ風静セ。其ノ時御詠歌ニ『我レコソハ新嶋守ヨ沖ノ海ノ荒キ波風心シテ吹ケ』此ノ如ク読セ玉ヘバ忽チ夜ニ入テ神火現ゼリー」（正徳6年〔1716年〕刊和漢合類本朝怪談故事巻3『焼火神現神火』）山口県山口市間田中川の群火は、水面に怪火が現れ、雨中を往復する。

大分県宮古郡田浦の後の森から、提灯のような火が夜8時から9時頃の間に見え、また別の火が二つ松山から出て、空中で両火が出合い、戦うようにして海中へさっと落ち、さらに海上で鶴が蹴合うようにしばらくの間ねじり合った後、再び出たところの森へ入ってしまう。4月から5月、また8月から9月に必ず現れる日本一の妙火という。『語り聞かされた』

大分県竹田市榎淵の昼行灯は、真昼に明かりのついた行列が、淵の暗い岩陰を上流に向けてスーッと動くという。
大分県宇佐郡安心院の千丁松火は安心院盆地に小雨の降る宵、灯が幾つも点いたり消えたりして美しい。
熊本県玉名郡長州町では明治の頃、清里村で火の玉が益兵衛に向かって来、そのまま飛び去った。また昭和35、6年頃9月の夜、直径50cm前後のオレンジ色火の玉が低空を飛行消滅するのが見られた。

三重県津市四天王寺に夜半、龍宮より灯明拈獻じられる。
奈良県宇陀郡室生村仏山では、月夜に金の輪が見える。
奈良県宇陀郡室生村石普峠の地蔵に雨の夜、火がともる。
和歌山県日高郡川辺町小山に天狗のたき火が生じるが山火事を起こさない。
佐賀県鹿島市蓮蔵院の岩石より白玉が出る。

高知県土佐清水市足摺の天灯・龍灯とは、金剛福寺本堂の前に竜石があり、毎晩竜灯がこの石上来て照らすといわれる。（県立図書館職員広谷喜一郎氏）

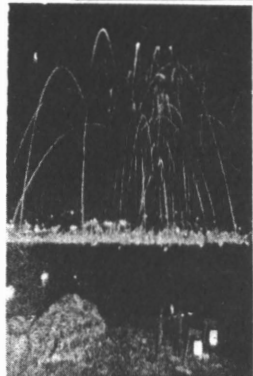
広島県豊田郡安芸津町では、8月から11月にかけて、雨や曇った日に青い火が見える。青い火が続いたら3日後には必ず大嵐になる。

広島県佐伯郡宮島町弥山の松明とは、時として火の燃えることあり、通常の火より赤く、樹間を徘徊するように見える。

島根県隠岐の海に出現した怪火「一去スル承久ノ乱ニ後鳥羽院遷嶋ノ石切り浪高ク風荒レ侍御船危ニ及ブ。其ノ時帝此ノ社ヲ念シ給ヘハ風靜也。其ノ時御詠歌ニ『我レコソハ新嶋守ヨ沖ノ海ノ荒キ波風心シテ吹ケ』此ノ如ク読セ玉ヘバ忽チ夜ニ入テ神火現ゼリ」（正徳6年〔1716年〕刊和漢分類本朝怪談故事巻3『焼火神現神火』）

山口県山口市問田中川の群火は、水面に怪火が現れ、雨中を往復する。
 大分県宮古郡田浦の後の森から、提灯のような火が夜8時から9時頃の間に現れ、また別の火が一つ松山から出て、空中で両火が出合い、戦うようにして海中へさっと落ち、さらに海上で鶏が蹴合うようにしばらくの間ねじり合った後、再び出たところの森へ入ってしまう。4月から5月、また8月から9月に必ず現れる日本一の妙火という。『語り部人談』

大分県竹田市榎淵の昼行灯は、真昼に明かりのついた行列が、淵の暗い岩陰を上流に向けてスーッと動くという大分県宇佐郡安心院の千ノ松火は安心院盆地に小雨の降る宵、灯が幾つも点いたり消えたりして美しい。熊本県玉名郡長州町では明治の頃、清里村で火の玉が益兵衛に向かって来、そのまま飛び去った。また昭和35、6年頃9月の夜、直径50cm前後のオレンジ色火の玉が低空を飛行消滅するのが見られた。



愛宕火：火の神祭りとして近畿山陰で行なわれる火祭り。写真は京都花背。伊丹では燈籠に火を点じてまつ。その様子は「大阪北の町終より見る人星火と疑ふ」（『摂陽群談』）とある。



■紀伊半島突端太地町桃取崎沖100mの岩に刻はれ、同心円刻。現地では「太鼓岩」と呼んでいた。なぜ、アイヌの聖なる形がここにあるのか? (岡村充共著「IFOLOGY よりみた紀伊半島の古代文化」より)



■毎年6月24日に伊弉宮で行なわれる御田植祭に登場する童女が乗る田舟。太陽船を表さしばかり倒されて、この舟が御柱から進みでるのは、降下した神を意味するかも知れない。(地引雄一共著『UFOLLOGY よりみた紀伊半島の古代文化』より)

核分裂の発見から 原子爆弾投下まで

参考までに、地球人類という種が、原子核分裂による爆弾の大量生産に着手するようになった経過を簡単にたどってみよう。

1938年12月、ドイツのベルリン大学で、物理学のオットー・ハーンとフリッツ・シュトラウスマンの二人は、ウラン元素の原子核に中性子をぶつけ核分裂を起こさせる実験に成功した。

このニュースはヨーロッパにいる物理学者からアメリカ在住の物理学者たちに伝わった。

ハンガリーの物理学者シラードは、ナチスドイツがこの核分裂を利用して原子爆弾を作る前に連合軍が原子爆弾製造に着手すべきと考えて当時米国政府に影響力のあったアルバート・アインシュタインに原爆製造勧告書簡ハサインさせた。

アインシュタインは、1938年8月2日付の手紙でルーズベルト大統領に核兵器の製造を促した。

翌1939年9月、ドイツ軍はポーランドに侵入、イギリス、フランスがドイツに宣戦布告して第2次世界大戦が勃発した。

イギリスはウラニウム研究を緊急の研究に切り替え、1941年夏、「ウランを爆弾に利用することについて」と題した報告書の写しを米原子力開発にかかわるブッシュに送った。ブッシュは「核爆発が実現すれば、現存の爆弾を数千倍上回る爆弾が可能になる」といった報告書を大統領に提出した。

1941年8月、米国では原爆製造のための戦略組織マンハッタン計画がスタートし、翌1942年12月シカゴ大学でエンリコ・フェルミ指導の下、史上初の制御核連鎖反応を起こすことに成功。英国に差をつけた。

レスリー・グローブス指揮官率いるマンハッタン計画はすべてが秘密裡に進められた。そこで働いた者は1946年までに54万人にのぼったが、それらの人々は自分が何をしているのか知らず目先の仕事に追われていた。

ドイツが1945年春まで原爆を持ってないことが明らかとなり、これを知ったアメリカの科学者の中には、マンハッタン計画の中止あるいは延期を求める者も出た。しかし、計画の勢いはそのまま持続された。それは既にはっきりとした「狙い」が生れていたからであった。

また、デンマークから亡命した物理学者ニールス・ボーアは英米の原爆開発でソ連が不信感を持たぬよう事実をソ連に知らせ、原爆の製造と使用を国際管理下に置く話し合いをまず始めてから原爆を使用すべきだと主張しルーズベルトとチャーチルに働きかけた。

これに対して両首脳はボーアの提案を蹴り、ボーアを連のスパイ容疑者と決めつけ、1944年9月19日、原爆が完成した時は日本人に対して使用されるだろう、日本人が降伏するまで何回も原爆投下が繰り返されるという警告をすべきであるという覚書を含んだハイド・パーク協定がルーズベルト、チャーチルにより秘密裡に調印された。これが原爆開発推進の当面の狙いであった。

1943年、航続距離5230kmをもつボーイングB-29爆撃機が完成。1944年テニアン島に空軍基地が出来B-29による日本への爆撃が可能になった。

この頃から、奇怪な現象が太平洋、大西洋の両戦場で起こった。「フーファイター（幽霊戦闘機）」の名で知られる飛行物体が連合軍の爆撃機や戦闘機のパイロットたちの間にかなりの論議を呼んだのである。この物体は爆撃機や戦闘機の後を追いかけたり、並んで飛んだり、「鬼ごっこ」をしたり、周囲を飛び廻ったりする輝く小球体で、遠くから飛行機に接近してきて、しばらくついてまわり、最後には進路を転じて飛び去るのが普通だった。最初のうち連合軍側は、これらの物体が出現する場所から判断して、ドイツか日本の秘密兵器ではないかと考えた。しかし、怪物は敵意がないように見えたので連合軍がパイロットの神経をすり減らすために送り出した心理兵器かとも考えられた。だが、戦後になって、ドイツと日本側でもこれらの怪物体を、アメリカの秘密兵器と考えていたことがわかり、地球上の兵器ではない宇宙からのものであると判断された。（筆者も昔、元零戦のパイロットから機窓に接近し周囲を飛び廻る真っ白な飛行物体の体験談を聞いたことがある。）

1945年1月2日付ニューヨーク・ヘラルドトリビューン紙はバリ発AP電として、ドイツ戦線上空の夜間戦闘機の翼の側を並んで飛ぶフーファイターについて、この正体は不明と報じている。

1945年7月16日午前5時30分、米ニューメキシコ州アラモゴルドにおいて、多数の科学者が見守る中、アルトニウムを使った原爆実験が行なわれた。

その日は一帯に雷を伴う大雨が降り、実験延期が科学者側から出されたが、予定時刻を1時間半遅れて悪天候の中、実験は決行された。

実験前ロスアラモスの科学者たちは、原爆の爆発力の予測をTNT 火薬5000トン相当以上と推定した者が一人もいなかったが、実際の爆発力は控え目にみても15000~20000 トンに相当するとグローブス將軍のボツダムに届けられた報告書は記した。

マンハッタン計画のマネージャー的存在ロバート・オッペンハイマーは、立ち昇るキノコ雲を見ながら「われは死となりぬ。三界の破壊者となりぬ」のヒンズーの古典『バガバッド・ギーター』の一節を思い出していた。同様にマンハッタン計画に参加したある科学者も「最後の審判の日は、突如として明日に迫り、以来われわれは常にこの世の終わりと背中合せの世界に住み続けることになった」と語った。

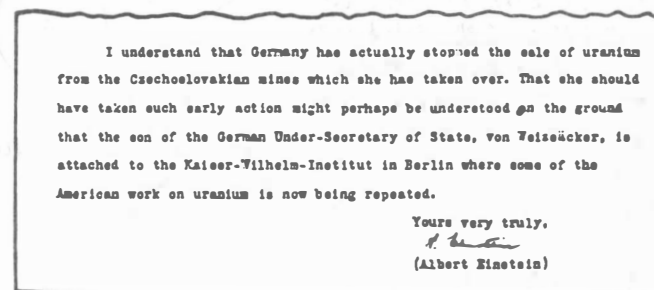
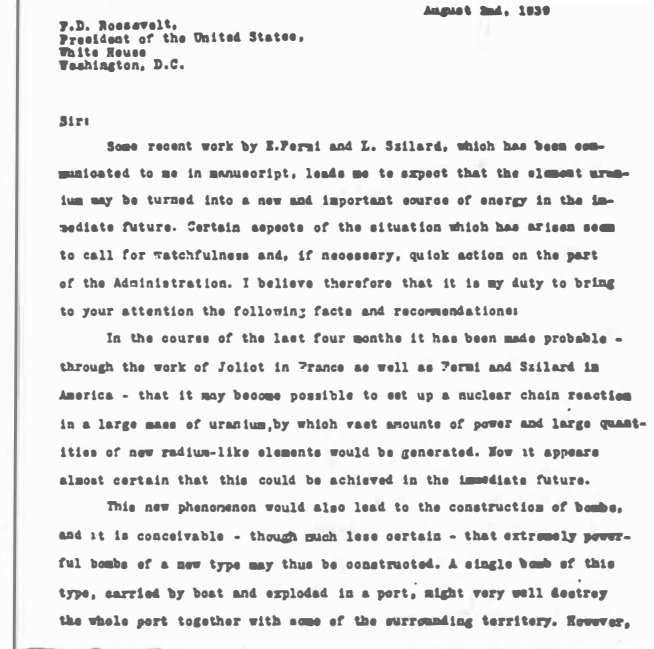
陸軍長官宛原爆実験報告書の覚書はこう記した「爆風と轟音が、あたかもこの世の終わりを警告するかのようになり、そして神に対する冒瀆であると感じさせるかのようになり響き渡った」

ドイツの降伏にもかかわらず、戦争を遂行する日本に対して、原爆投下目標選定委員会はすでに京都を第1目標にしていたが、原爆実験成功後京都ははずされ広島、小倉、新潟、長崎のいずれかと決った。

ルーズベルト急死のあとを継いだトルーマン大統領は、最近明らかになったように、広島、長崎以後も日本が降伏しなければ、さらに数10個の原爆投下を承認していた。このとき科学者チームは原爆が強大な爆発力を持つことは知っていたが、投下後の「放射能の危険については全く知らなかった」といわれる。

1年前の9月、既にポール・チベッツ陸軍中佐が原爆投下飛行隊隊長に任命され、11ヶ月後の1945年8月6日午前2時45分、乗員12人、B-29「エノラ・ゲイ」は最大積載量4トンギリギリの爆弾を積んでやっとのことで離陸。同時に各種観測機器を積んだ5機の僚機も飛び立った。

オッペンハイマーをはじめフェルミ、アーサー・コンプトン、アーネスト・ローレンスといった指導的物理学者たちは、日本への原爆投下に当たって、「我々は原爆の軍事使用に代る満足のいく方法を発見できない」との最終報告を政府に提出。科学者の名において



1939年8月2日付のアインシュタインのルーズベルト宛書簡。

公式に大量殺りくを容認していた。

また、米空軍史によると、原爆を広島の住宅密集地・商業地区へ投下せよとの命令と共に、投下時刻を工場労働者が仕事を始め、市民の子供達が戸外へ遊びに出る時間帯を狙っていた。

「エノラ・ゲイ」に搭載されたウラニウム爆弾はルーズベルト大統領と名付けられ「痩せ男」と呼ばれその後「リトル・ボーイ」となった長さ3m 直径70cm重量4トン。6時間半の飛行で広島上空に達したB-29は、午前8時15分17秒原爆を投下した。

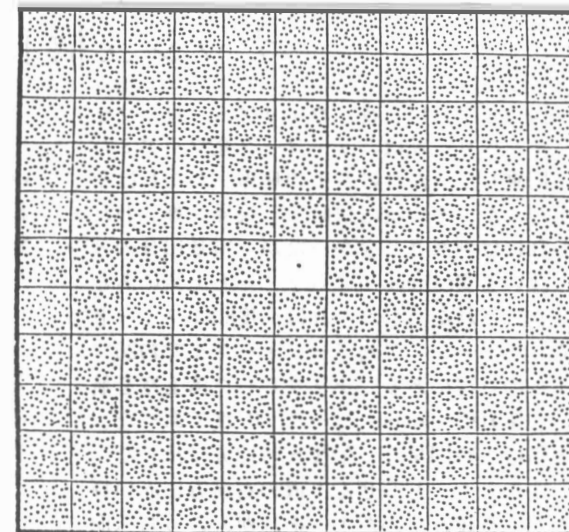
投下された原爆は43秒後広島市の上空580mでさく裂。強烈な閃光と大地を揺るがす大音響と共に半径2Km 以内の地域を瞬時に壊滅させ、同時に今以て正確な数は不明といわれる数万の市民の命を奪った。

3日後の8月9日、北九州の小倉を目標として飛来した原爆搭載機B-29「ボックスカー」は、天候不良のため目標を変更、雲の切れ間をさがして3回小倉に進入45分間を費やし燃料が不足

し始めた。しかし、テニアン帰投を沖縄に変えることで長崎の空を一度だけ飛べる燃料の余裕がある事が判り、厚い雲に被われた長崎の空の一箇所だけあいた雲の切れ間から爆弾を投下した。午前11時2分、長崎市浦上地区上空で原爆はさく裂。2度目の地獄図を現出せしめた。

使用された原爆はチャーチル首相の名が付けられ、「ファットマン」ふとっちょと呼ばれた長さ3.5m、直径1.5m、重量4.5 トンのアルトニウム型原子爆弾で、威力は広島に投下されたリトルボーイより一回り大きかった。

進行中の市電は爆風で破壊され吹き飛ばされた乗客は黒焦げになって即死した。即死を免れた人々は猛烈な吐き気、脱毛、歯からの出血、鼻血、体温上昇、吐血などの症状を見せながら次々と死んだ。当時まだ放射能の知識のなかった広島陸軍病院の記録には火傷の全然ない人々の間で発生したナゾの病気について、赤痢とかチフスの疑いという見解が述べられていたが、これ

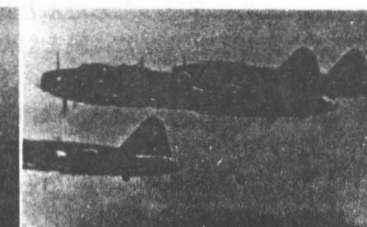


第二次大戦で使われた爆弾の総爆発力と現在、米ソが保有している核兵器の総爆発力との対比図：中央のマスの一つの点は、第二次大戦中に使われたすべての爆弾の爆発力の総計3メガトン（1メガトンはTNT火薬 100万トンに相当）を表す。その周囲の120のマスの点は、現在米ソが保有している核兵器の総爆発力1万8000メガトンを表す。世界の主要都市を壊滅させるには二マスの核爆弾(300メガトン)があれば足りる。

——アメリカ物理学会の「物理と社会フォーラム」機関誌（1983）の資料。毎日中学生新聞（1986年7月3日付）から転載。



1935年中国上空で爆撃に向う第12航空隊所属96式重攻撃機



1941年ラバウル上空を飛行する三菱1式陸上攻撃機11型

が急性放射能障害であった。

外傷のない人々は自分の体に何が起きているか全く分からず奇妙な病気に「毒ガス」を吸ったと思い込んだり、「赤痢」とか「チフス」とかいう病気に加わったと信じ、医者の方もそうかも知れぬと思って赤痢などの療法を施しているうちにたくさんの人々が死んでいった。

原爆投下による20万人の死者を出した日本は、次にソ連の宣戦布告でボツダム宣言を受諾8月15日終戦となった。

8月30日午後2時5分、日本占領軍指令官としてマッカーサー元帥が専用機C-54バターン号で厚木飛行場に着陸。日本の戦後が始まった。当初の「狙い」だった「日本降伏」が成就しても米国の原爆生産は中止されることはなかった。国連による原子兵器の国際管理の提案もむなしく、米国は核の独占の決意を固め1946年6月、太平洋ビキニ環礁における原爆実験を開始したのである。

ナッシュ機長のUFO遭遇

1952年7月14日夜、ウィリアム・H・フォートンベリー私はニューヨーク発マイアミ行に同乗した。かれは右手の座席、わたしは左手だった。その夜は快晴で、視界良好。われわれには判然としなかったが、雪量10分の3の薄い巻雲cirrusが2万フィート上空にあると報告された。われわれは高度8000フィートで、ヴァージニア州ノーフォークまで約20マイルの行程にある、チェサピーク湾上空を航行、羅針盤compassコース200度であった。太陽は1時間早く、午後8時12分に没した。

すると！ とつぜん、機の右前方に赤い輝きが一点現れたのだ！ それが、こっちへ向かってばく進してくるように見えた。そのすごい光はわれわれの眼を射た。どうやら、それは地上からのようにも見えた。そして、方角からいうと、ノーフォーク西方、25マイル前方のニューポート・ニューズ10マイル先に見えた。この光り物を、二人はほとんど同時に気がついた。

「おい、いったいあれは何だろう？」と、ビル（ウィリアムの通称）が言った。

その光輝は、だんだんと見えてくるというよりも、とつぜんに眼を射たといった方があっている。そして、その光点は6個の赤い物体からできており、機の下方をこちらへむけて猛烈なスピードで迫ってくる？……その光は、もえさかる灼熱の石炭のようで、物体が通過したノーフォークの街の灯火の約20倍と思われた。物体は、輪郭あざやかに円形をしており、縁edgeもはっきりとし、すこしも燐光性にかすんだりぼやけたりしていない。

その光体の一つが、それぞれ上部表面にオレンジ色の輝きを放ち、正確な梯形編隊を組んで飛んでいた。

こっちのほうへ向かって進んでくるのだが、その途中、チェサピーク湾の黒い水面上を通過しつづけ、それはあたかも、隊長機が減速したにも拘わらず、後列の2番機、3番機は依然変速せず、つまり“編隊乱し”（loused up the formation）と、パイロットたちが呼んでいる隊形をとっているように、第1梯隊の3機が相互に行きつ戻りつしはじめたのである。（この、明らかに、考えられ工夫された上での錯綜状態を望見していると、どうみても、工夫され、理知によってはたらく誰かによって操縦されていることがわかる。つまり、人間以上の知性ある何者かが、操縦しているのだということが判る）。

はっとして目をみはると、なんとしたことだろう、この6機は、眼下2000フィートの中空中で、わずかに隊列を前進させながら滞空しているではないか！ 大きさはといえば、大体直径はDC-3の全長とほぼ同じくらいの100フィートである。

まさにわれわれの機体の真下を通過しようとしたそのとき、とつぜん、今までのまぶしいほどの発光が、がくんと一段弱り、そのかわり、貨幣型の6機のはっきりとした物体が、驚くべき破天荒な運動を始めたのだ。このときの言語を絶した驚愕を、わたしは永久に忘れることができない。

それはどんな運動かという、つまり、一気に縁edgeを動かして、互いに機体をうしろにすべらせながら、編隊を裏返しに変えてしまったのだ。手の裏をかえす……という言葉そのまゝの変化をみせたのだ。この変隊の際、一瞬輝きがおとろえたかと思うと、かれらが接近した方角から西へ30度くると方向転換して遠ざかっていったのだ。要するに、ほとんど逆方向へ今来た道を逆転して……だんだん遠くなっていったのだ。

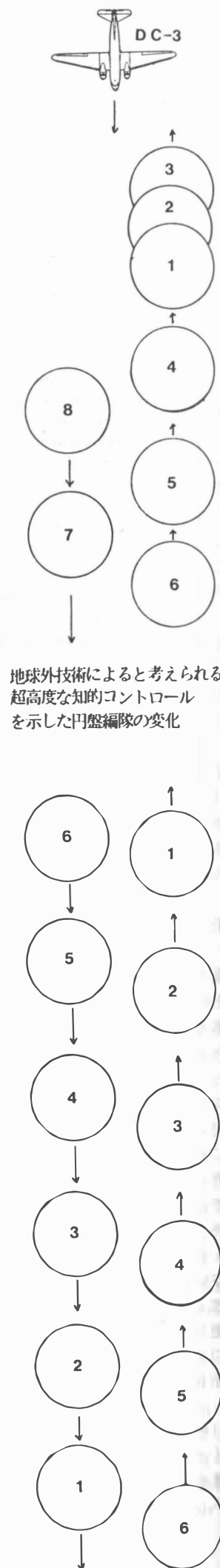
遠くの方へ行ってしまったナ……と、思っで見ていると、こんどは、突然、われわれの右翼下方から、また違った物体が2機現れたのだ。この2機はさっきのよりは高度が高かったせいでもあるのか、大きさも明るさも一段と大きく、はげしかった。それらは、さきの編隊の後部へむけ、はさむような形で急降していった。

と、突然、先行の6機が、ちょうどだれかが電燈のスイッチを切ったかと思われのほど、とつさに、パッとすべての光を消してしまった。かと思うと、つぎの瞬間、後続の2機も同時に消灯したが、1秒ほどすると、全機一斉にパッとまぶしいほどの光で点灯し、こんどは一直線に隊列を組み、ゆっくりと、ニューポート・ニューズの西上空を横切り、同市前方10マイルあたりを飛び去っていった。

それから数秒後、アッと云わせるようなスピードで、上空高く方向を転換し、45度の角度でぐんぐんと上昇していき、非常に高々とおもわれるところで各機混乱隊形をとり、全機再び閃光を消してしまった。わたしはこの時、母船と思われる物の中に1機づつ小型機が吸い込まれていったのではないだろうか……と思った。

ひかえ目に云っても、気を失わんばかりのショックだった。これ以上の珍事がこの世の中にあるものではない。あまりのおどろきと、夢心地にわたしは呆然となってあたりを見回した。が、何も見えなかった。自分もビルも、二人ともすでに今日まで1万時間余の飛行時間をもっている老練パイロットのつもりだが、これまで空中で体験したいろいろな事件の中で、今日のが初めて説明不能の経験だった。

われわれ二人は、あの不思議な編隊がもう二度とふたたび戻っては来ないと知るや、まだ、生々しい印象として頭の中に生きているうちに、この世にもふしぎな出来事の記録を



書き残しておこうではないかと相談した。
あの物体の厚さは、その直径の15~20パーセント、したがって直径が100フィートならば、厚さは15~20フィートということになる。縁edgeは光輝を放っていなかった。が低部は光っていた筈だ。というのは、その翌日、米空軍特別調査官がビルとわたしをインタビューして、『君たちの目撃時刻から30分間以内に、やはり同じ目撃報告が7件ほど伝達され、それらは全部ノーフォークからきたもので、いずれも、6個~8個の物体が、空中で突然方向転換を行なったこと、そして、それらはみな、まぶしいほど強い赤オレンジ色の光を放っていた……』という報告だった。と語ってくれたことによっても、はっきりわかる。

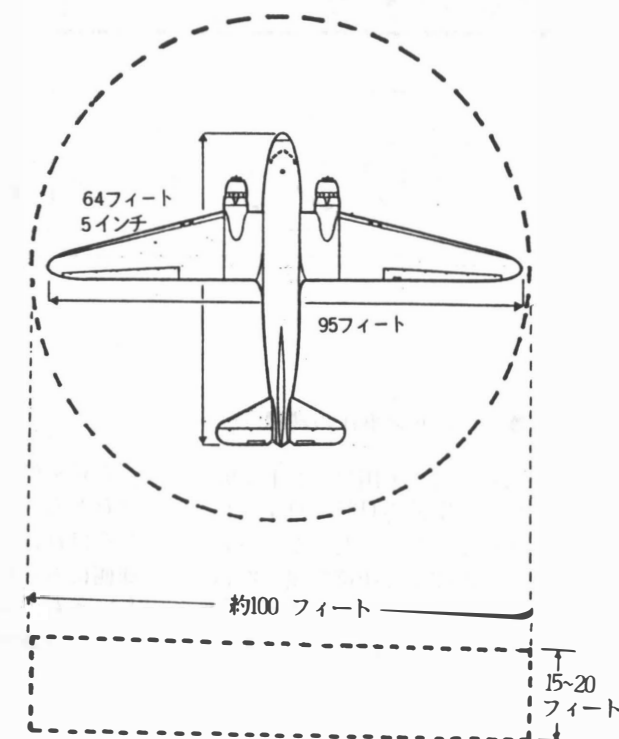
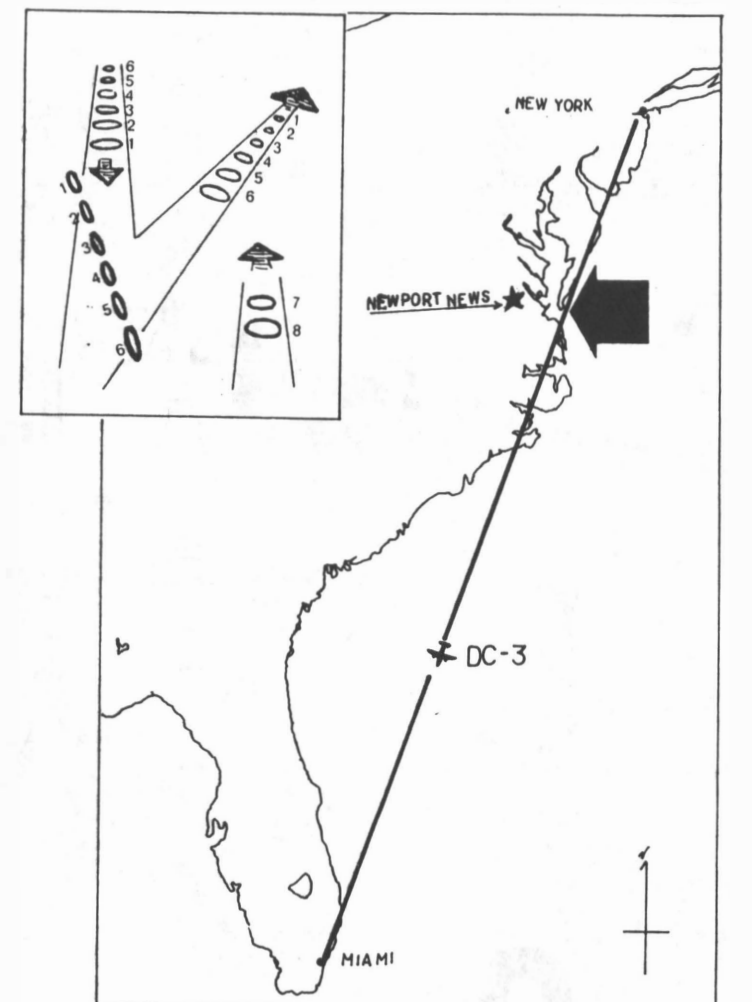
つぎに、あの物体の速度をはかるには、観測された時間の長さと、運動距離を知ることが必要だった。私とビルが、ストップウォッチを押して測定したところ、観測総時間は12秒だった。

UFOの速度をいくぶん割り引きするような結果になるかも知れないが、内輪に計算するとして、タイムを12秒から15秒に増し、また距離についても内輪に見積もり、まず、謎の物体が出現してニューポート・ニューズ市を通り過ぎるまでの10マイルと、次に物体が同市を横切って、われわれから遠ざかった後の20~30マイルの分を控除して、正味の飛行距離を、物体が同市上空からわれわれに接近し、再び同市上空に戻った間の距離として計算した。

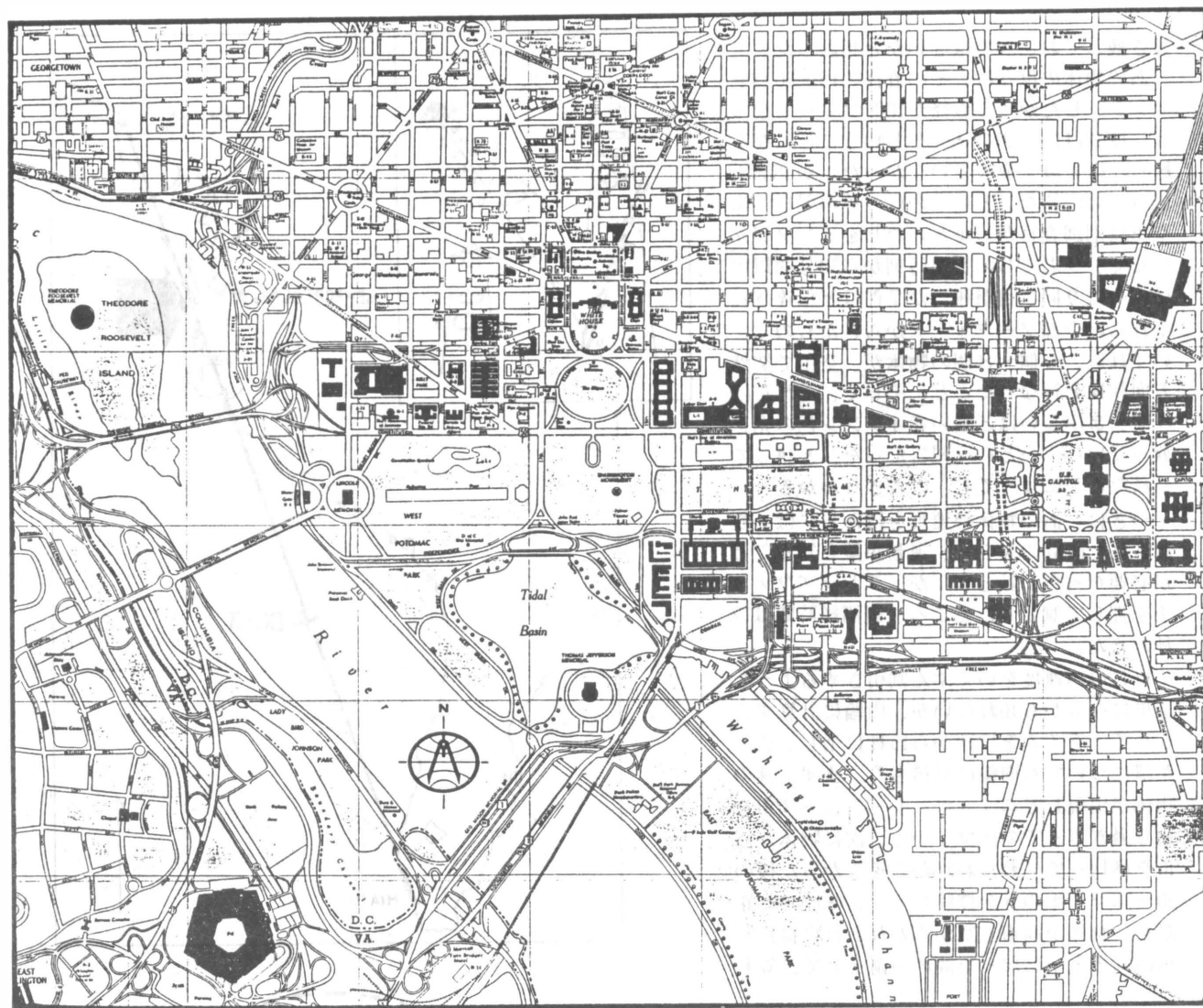
この行程が50マイル。したがって、15秒間に50マイルというスピードは、1分間200マイル……じつに時速1200マイルのスピードということになる。

結論として、わたしたち二人が、何らの疑いもなく納得できたことは次のようなことである。

- (1) あの物体は、高度の知能をそなえた者によってつくられた飛行物体であること。
- (2) かれらの飛行技術は、あまりにもケタはずれな科学的進歩を示しており、われわれ人類がそこまで到達するには、数段階にわたる一般常識の発展過程を経なければ、とうてい及びもつかぬことだということ。
- (3) したがって、あの物体は、地球上のいかなる者の手によっても、造り得ないものだということ。
- (3) あの物体は、絶対に意識的、且つ理知的に操作されていて、あのような突飛な方向転換、完全なる急激の編隊組成、さらには、知的なエラーをしてみせたりするあのような超高等飛行技術から考えてみても、それは、外部からの遠隔操縦remote controlによるというより、おそらく、機内部で操作されているとしか思えないこと。



■上図：大きな矢印がナッシュ機長のDC-3と円盤編隊の遭遇地点。左上が円盤編隊の特殊ターンを描いた状況図。各々の円盤に付けられた番号に注意。下はDC-3の機体との比較。円盤は、ほぼDC-3と同じ大きさで、輪郭の明瞭な厚みのある円盤。果たして“操縦者”は各々の円盤に搭乗していたのか、それとも先頭円盤機が他の円盤をコントロールしていたのか、いずれにせよ地球上の航空技術では不可能な編隊飛行だ。



ワシントンUFO 事件の意味

■ワシントン事件の謎■

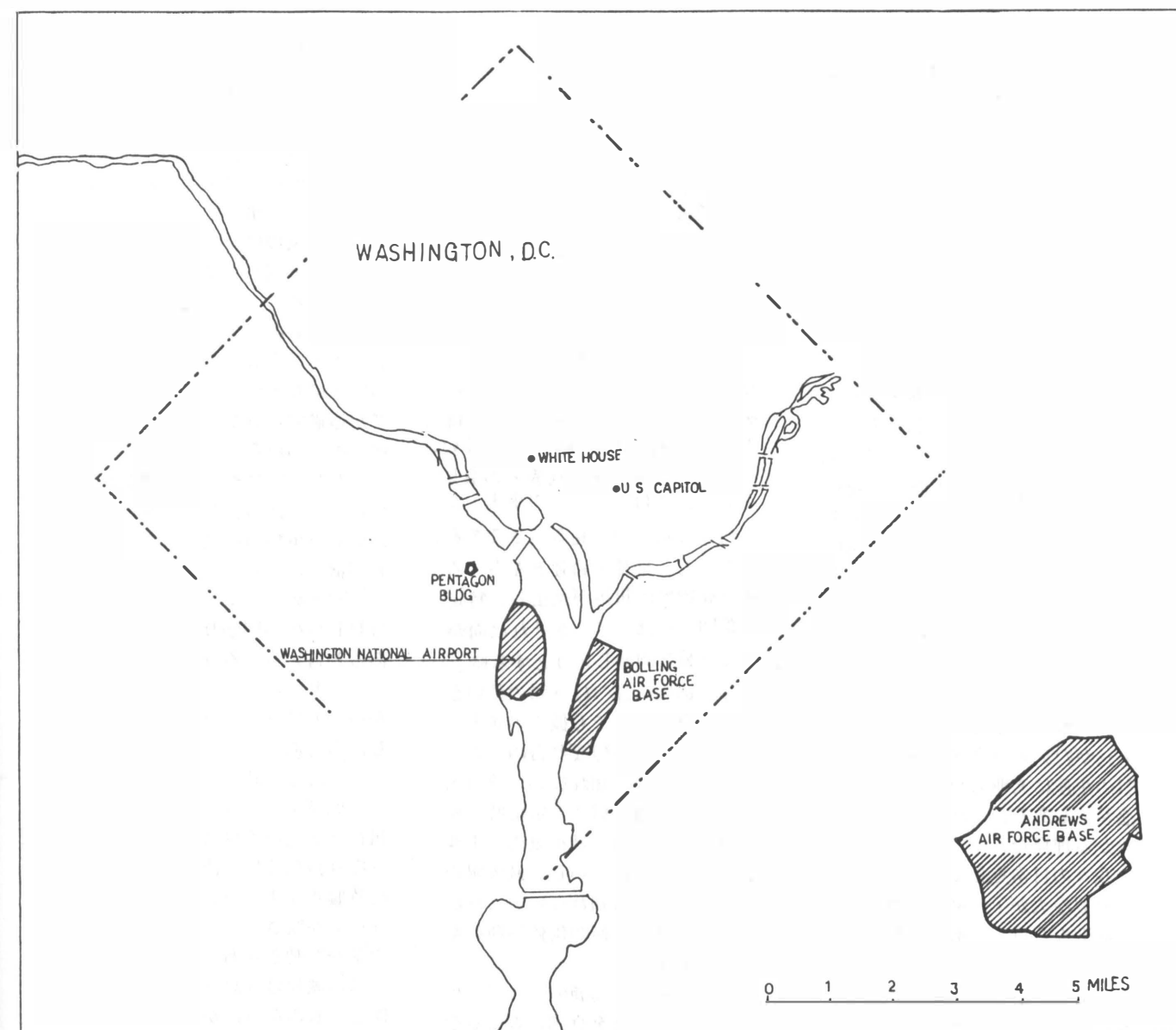
1952年7月、米国ワシントンDCで発生した空前のUFOウェーブは、何ゆえに起こったのか。UFO研究者の間でも明確な説はない。既に故人となったが、人生の半分をUFO調査研究に費やした天文学者J. アレン・ハイネック博士でさえ、著書『THE HYNEK UFO REPORT』（邦題「ハイネック博士の未知との遭遇レポート」二見書房刊）の中で「1952年に、いったい何が起こったのだろうか？ 現在のところ、その点を説明できる手がかりはない」と述べている程である。

このようなUFOの集中出現は、UFO側に「その時と場所」を選んだ積極的な理由があったのか。それとも、UFOが大挙して飛来しなければならぬ「何か」が地球側にあったからなのか。UFOというものを、特にその知的背景について考察しようとする上で、大挙飛来の原因や意味を追求してみることは極めて重要なことであろうと思われる。

古代、中世、近世とUFOに類した未知の飛行物体の日撃記録が存在する。よく知られている集中出現は19世紀末、1897年の米国で4月から9月まで続いた謎の飛行船騒ぎであった。それらの謎の飛

行物体は現代のUFOとはやや趣を異にする緩慢な飛行を呈する葉巻形物体であったが、飛行船に似ているが、まったく違う航空物体であった事が当時の新聞報道の細部に語られている。その50年後、ケネス・アーノルドに始まる「空飛ぶ円盤史」の開幕となった。「円盤史」は、1947年から1949年までの有名事件を米国が独占するような形で始まった。荒野を切り開いた開拓者が築いた「新大陸」アメリカは、原住民を排除して領土とした歴史の上に築かれた国家である。

それまで、たぶん人の口に乗ることは稀であり、好事家の書斎に



眠る程度が話題が、あらゆる人々を巻き込んで騒然と語られるようになったのがこの米国であり、それはまた、第2次世界大戦が終結した直後に始まるものであることは、UFOの意味を考える研究者の多くから指摘されている。その「意味」の一つとして、大戦を契機として人類が所有した核兵器が地球滅亡あるいは宇宙災害につながる危険極まりない代物であるところから、地球文明の監視強化となった故の「空飛ぶ円盤公然出現」である、との説がある訳である。

第2次世界大戦末期に、連合軍側と日独側のパイロットが遭遇した小球体「フーファイター」は、B-29編隊による東京大空襲にも地上から目撃されている。そして、関連性は不明だが、広島で原爆がさく裂した後、無数の火の玉が出現、懐中電燈もいらなかったと、東京在住の被爆者の一人が語るイ

メージも俗にいう怪火の一種と思われ、怪火的フーファイターの原爆投下地集結出現を感じさせる。

我々は、この地球を「危機」という面からとらえ、その危険の規模などを基準にした「順位」づけを仮におこなってみることができる。これは国や人により異なる順位となるだろうが、私は国のような危機のピラミッドを描いてみた。

これと同様に「理想世界」に対するイメージも各人各様であろうが、「理想世界」実現の条件の中には「平和」という要素を挙げるのは文化の違い、民族の習慣の違いを越えた共通点ではないか、と考えられる。

従ってこの「平和」実現に逆行するあらゆる考えと行動の解消が、最大努力の課題として地球に存在するのである。これは誰も否定できない。地球は「闘争の星」であるかのように、今も各地で紛争が

絶えない。

さて、1954年6月、中国首相周恩来とインドのネルー首相との共同声明の中に「平和五原則」が掲げられた。これは国交を規制する五原則で、国と国の関係はこれを守ることににより平和が保たれるものと考えてよいだろう。

後に「10原則」が1955年のアジア・アフリカ会議で決議されるが基本的には五原則と同じく、領土主権の尊重、不侵略、不干渉、平等互惠、平和共存の要素が盛り込

東西核戦争
が招く偶発核戦争による宇宙空間を
含む全地球的規模の危機
局地戦争、民族、宗教戦争の
拡大が招く大団介入による全面戦争の危機
原子力発電、原子力爆弾などの事故による地球自然生態系絶滅の危機
地震、火山噴火、気象変動に現れる地球規模の
物理変動の接近
自然破壊、公害、テロ、暴動、飢饉、
人種差別、流行病の拡大、貧富差、道徳の荒廃、種
民、失業、不況、人口問題、資源枯竭、砂漠化、悪徳政治、
金融支配、大団支配、企業支配、犯罪の拡大、宗教騒動、軍国主義

宇宙空間に座を占める地球の現状

有事に集団安保

吉田首相 抵抗押し切られる

倒閣恐れひた隠し



吉田首相

【ワシントン十四日路透電】米政府は二十日、有事に集団安保を適用する方針を明らかにした。これは、日本が中国に侵襲された場合、日本が自衛のために必要と判断した場合、米軍が日本に派遣されることを意味する。この方針は、冷戦時代の米日関係の重要な転換点となった。吉田首相は、この方針を「日本の安全と世界の平和のために必要」と述べ、米政府の決定に賛同した。しかし、国内では、この方針が日本の主権を損なうと批判された。吉田首相は、この方針を「日本の安全と世界の平和のために必要」と述べ、米政府の決定に賛同した。しかし、国内では、この方針が日本の主権を損なうと批判された。

防務省は、この方針を「日本の安全と世界の平和のために必要」と述べ、米政府の決定に賛同した。しかし、国内では、この方針が日本の主権を損なうと批判された。吉田首相は、この方針を「日本の安全と世界の平和のために必要」と述べ、米政府の決定に賛同した。しかし、国内では、この方針が日本の主権を損なうと批判された。

防務省は、この方針を「日本の安全と世界の平和のために必要」と述べ、米政府の決定に賛同した。しかし、国内では、この方針が日本の主権を損なうと批判された。吉田首相は、この方針を「日本の安全と世界の平和のために必要」と述べ、米政府の決定に賛同した。しかし、国内では、この方針が日本の主権を損なうと批判された。

防務省は、この方針を「日本の安全と世界の平和のために必要」と述べ、米政府の決定に賛同した。しかし、国内では、この方針が日本の主権を損なうと批判された。吉田首相は、この方針を「日本の安全と世界の平和のために必要」と述べ、米政府の決定に賛同した。しかし、国内では、この方針が日本の主権を損なうと批判された。

防務省は、この方針を「日本の安全と世界の平和のために必要」と述べ、米政府の決定に賛同した。しかし、国内では、この方針が日本の主権を損なうと批判された。吉田首相は、この方針を「日本の安全と世界の平和のために必要」と述べ、米政府の決定に賛同した。しかし、国内では、この方針が日本の主権を損なうと批判された。

防務省は、この方針を「日本の安全と世界の平和のために必要」と述べ、米政府の決定に賛同した。しかし、国内では、この方針が日本の主権を損なうと批判された。吉田首相は、この方針を「日本の安全と世界の平和のために必要」と述べ、米政府の決定に賛同した。しかし、国内では、この方針が日本の主権を損なうと批判された。

防務省は、この方針を「日本の安全と世界の平和のために必要」と述べ、米政府の決定に賛同した。しかし、国内では、この方針が日本の主権を損なうと批判された。吉田首相は、この方針を「日本の安全と世界の平和のために必要」と述べ、米政府の決定に賛同した。しかし、国内では、この方針が日本の主権を損なうと批判された。

インドシナ第一次戦争で 中国へ原爆使用検討

米の外交文書

【ワシントン十四日路透電】米政府は、中国に侵襲された場合、中国に原爆を使用する方針を検討している。この方針は、冷戦時代の米中関係の重要な転換点となった。米政府は、この方針を「中国の安全と世界の平和のために必要」と述べ、米政府の決定に賛同した。しかし、国内では、この方針が中国の主権を損なうと批判された。

米政府は、この方針を「中国の安全と世界の平和のために必要」と述べ、米政府の決定に賛同した。しかし、国内では、この方針が中国の主権を損なうと批判された。

米政府は、この方針を「中国の安全と世界の平和のために必要」と述べ、米政府の決定に賛同した。しかし、国内では、この方針が中国の主権を損なうと批判された。

米政府は、この方針を「中国の安全と世界の平和のために必要」と述べ、米政府の決定に賛同した。しかし、国内では、この方針が中国の主権を損なうと批判された。

米政府は、この方針を「中国の安全と世界の平和のために必要」と述べ、米政府の決定に賛同した。しかし、国内では、この方針が中国の主権を損なうと批判された。

米政府は、この方針を「中国の安全と世界の平和のために必要」と述べ、米政府の決定に賛同した。しかし、国内では、この方針が中国の主権を損なうと批判された。

米政府は、この方針を「中国の安全と世界の平和のために必要」と述べ、米政府の決定に賛同した。しかし、国内では、この方針が中国の主権を損なうと批判された。

日本含め集団安保

米、戦後の一時期に構想
反共の拠点づくり図る

外交文書を公表

【ワシントン十四日路透電】米政府は、日本を含む集団安保を構想している。この構想は、冷戦時代の米日関係の重要な転換点となった。米政府は、この構想を「日本の安全と世界の平和のために必要」と述べ、米政府の決定に賛同した。しかし、国内では、この構想が日本の主権を損なうと批判された。

米政府は、この構想を「日本の安全と世界の平和のために必要」と述べ、米政府の決定に賛同した。しかし、国内では、この構想が日本の主権を損なうと批判された。

米政府は、この構想を「日本の安全と世界の平和のために必要」と述べ、米政府の決定に賛同した。しかし、国内では、この構想が日本の主権を損なうと批判された。

米政府は、この構想を「日本の安全と世界の平和のために必要」と述べ、米政府の決定に賛同した。しかし、国内では、この構想が日本の主権を損なうと批判された。

米政府は、この構想を「日本の安全と世界の平和のために必要」と述べ、米政府の決定に賛同した。しかし、国内では、この構想が日本の主権を損なうと批判された。

米政府は、この構想を「日本の安全と世界の平和のために必要」と述べ、米政府の決定に賛同した。しかし、国内では、この構想が日本の主権を損なうと批判された。

米政府は、この構想を「日本の安全と世界の平和のために必要」と述べ、米政府の決定に賛同した。しかし、国内では、この構想が日本の主権を損なうと批判された。

50年代の米極東軍

日本で核兵器貯蔵が

13基地に 秘密文書明るみ

【ワシントン十四日路透電】米政府は、1950年代に日本に核兵器を貯蔵していたと明らかにした。この文書は、冷戦時代の米日関係の重要な転換点となった。米政府は、この文書を「日本の安全と世界の平和のために必要」と述べ、米政府の決定に賛同した。しかし、国内では、この文書が日本の主権を損なうと批判された。

米政府は、この文書を「日本の安全と世界の平和のために必要」と述べ、米政府の決定に賛同した。しかし、国内では、この文書が日本の主権を損なうと批判された。

米政府は、この文書を「日本の安全と世界の平和のために必要」と述べ、米政府の決定に賛同した。しかし、国内では、この文書が日本の主権を損なうと批判された。

「2500万トン級の水爆（複数）が岩国基地内にあり、ファントム機などに数回水爆を積み、上空を飛行した」と聞いたものである。

では問題の1952年にはどうだったのか、これについての文書はない。日米安保と核戦略が同時起点を持つものなら、可能性はある、という推測にとどまるのみである。

■1952.7米国、中国核攻撃の危機■

1952年7月の米国は、人類最初の水爆実験を3ヶ月後にひかえていた。また、1月11日にさかのぼると、第1次インドシナ戦争における対中国への原爆使用が、軍事上得策でないと退けられ、危機は回避された。

ところが、この7月16日、国務省と統合参謀本部との合同作戦会議で、再び中国に対しての原爆使用が議題にのぼった。

ブラッドレー米統合参謀本部議長（当時）が、原爆で中国の交通機関をマヒさせる以外に中国の南下を阻止することは困難、と発言したのである。

「ワシントンのUFOパニック」を書いたパトリック・A・ハイグによると、「7月19日土曜日、大

ガサキの悲劇を繰り返そうとする戦術会議が行なわれていたのである。

朝鮮戦争で前進基地の役割を果たしたこの時の日本の立場は、当然1951年調印の日米安全保障条約にかかってくる。

1985年8月に公表された米軍秘密文書によると1950年代の日本は「核兵器の貯蔵・運搬などの中核基地」となっていた。しかし、50年代前半の朝鮮戦争、台湾海峡危機（第1次インドシナ戦争）、ディエンビエンフー陥落（第2次インドシナ戦争）当時は局地核戦争戦略がなかったとし、核戦争遂行のための極東軍指令官戦域合同作戦センターを東京の同司令部内に設置、補助センターを府中と横須賀に設けたのは後年になってからのこととしている。

また、核兵器の貯蔵基地は、池子、楚辺（沖縄）、嘉手納（沖縄）、硫黄島、ジョンソン（所沢）、板付、三沢、小牧、佐世保、那覇、横須賀、岩国、厚木の13基地となっていた。

この事については、1978年10月、米国のベトナム戦争介入経過を詳述した『国防総省秘密報告』を米国主要紙に流しベトナム戦争終結の一つのきっかけをつくったダニエル・エルズバーク博士の有名な証言が傍証している。

すなわち、博士は1953年から63年まで海兵隊パイロットとして岩国基地配属だった人物（米コロラド州ジェファーソン郡警察副責任者アール・スペナード氏）から、

東京は米軍の戦略拠点

核体系の一翼担う？

横田から米韓演習出撃

[illegible]

A10サンダーボルト機
三東京都昭島市で

「この書は、明治二十二年（一八八九年）に刊行された。その頃、日本は明治維新の熱風が吹く中、西洋の思想が日本に流入し、人々の意識が変化する中、この書は、人々の意識を一新する役割を果たした。この書は、明治二十二年（一八八九年）に刊行された。その頃、日本は明治維新の熱風が吹く中、西洋の思想が日本に流入し、人々の意識が変化する中、この書は、人々の意識を一新する役割を果たした。」

第三次大戦の可能性

請要官令司QH

[illegible]

■1951年9月、ソ連、
中国などを除く48ヶ国
との講和条約と日米安保条約に調印。
この頃から米ソ冷戦の激化により世界大戦の危機
のあったことが伺われる。

飛び出した。この時算出されたU
ドの速度は時速1万2000キロで
ある。

管制官はこの現象が飛行機では
ないと判断、先任管制官を呼び、
レーダーの故障も考えて技術者を
呼んだ。

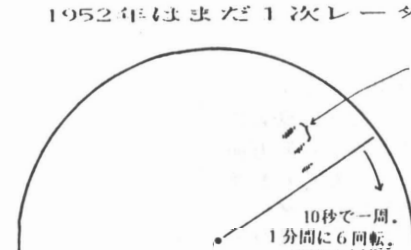
レーダーに異常はなかった。しかも、この物体はボーリング基地とアンドリュース基地でもキャッチされていた。

証のブリックは二主に分かれてホワイトハウスと国会議事堂上空に現れた。いずれも飛行禁止区域である。図1は本事件の記述に伴って使用されるレーダー面上のUFD〇を示しているが、中央の四角がホワイトハウス、その右下が国会議事堂の位置を示している。

UF0はアンドリュース空軍基地の真東の南寄りにも現れた。ターゲットの様子から低速の飛行機の編隊のように見えたが、この空域での編隊飛行は禁止されていた。

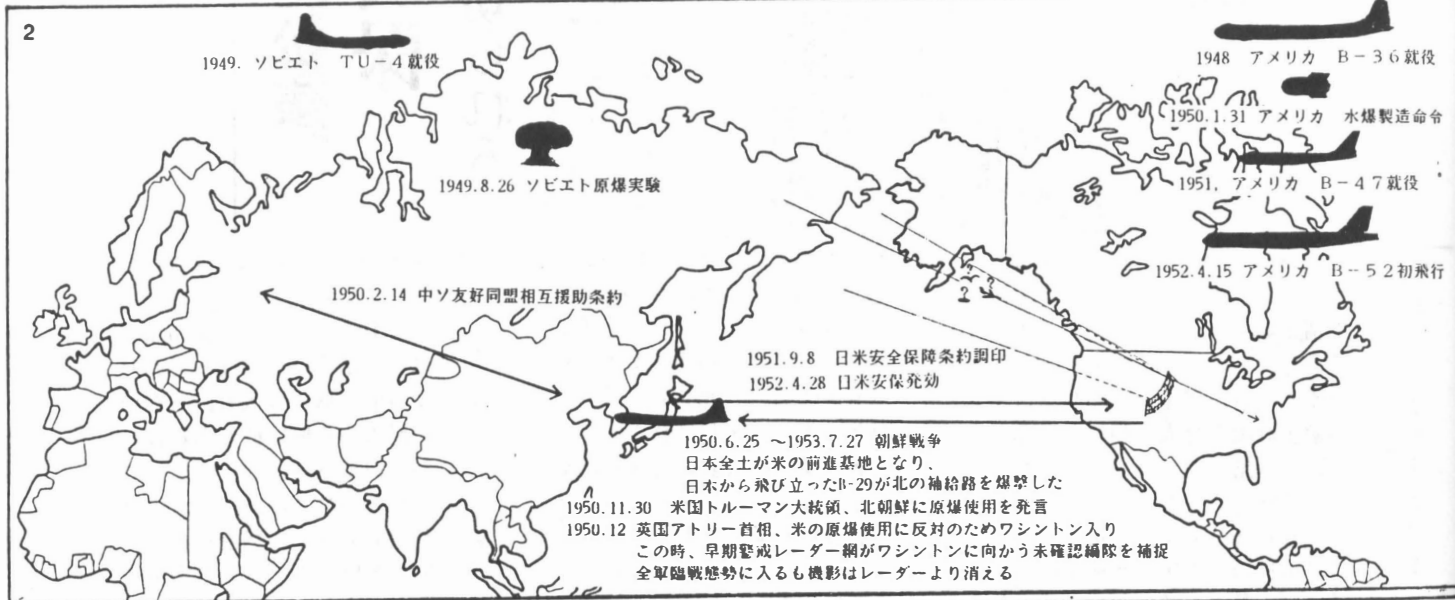
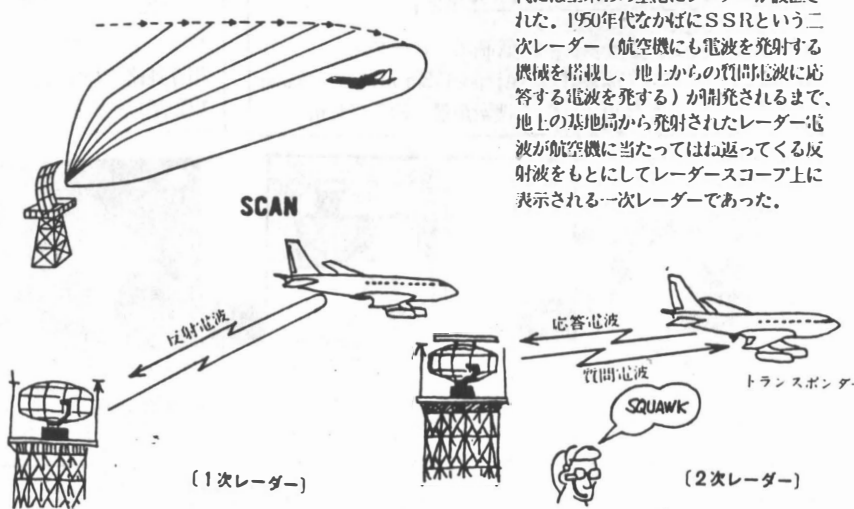
20日午前0時を少し廻った頃、ナショナル空港を離陸したキャピタル航空807便のケーシー・ピアマン機長は、離陸して間もなく、上昇・下降し・旋回する発光体を目撃。それが遠ざかっていくと連絡した。同時に管制レーダーもピアマン機のそばから遠ざかるUF0を確認した。ピアマン機からは「さらに6個の光体が見える」と報告してきた。

約2時間後、南方から空港に接



移動中のブリア（航空機などのエコー）
この間隔でブリアップの移動速度が算定される
このブリアップ（輝点）は、飛行機などが電波を反射
した瞬間の位置を示す。輝点像はゆっくりと約1分
かかって消えていくので、輝点が動けばスクリーン
上に連続して表示される。（エム・シシエル「空飛
ぶ人間は実在する」より）

速度参考：ダグラスDC-2 (1933-)
平均201km/h
この速度は秒速55.8m で、
10秒間に558.3m移動する。
50km範囲のスクリーンでは
10秒間にスクリーン直径の
約100分の1を動く計算

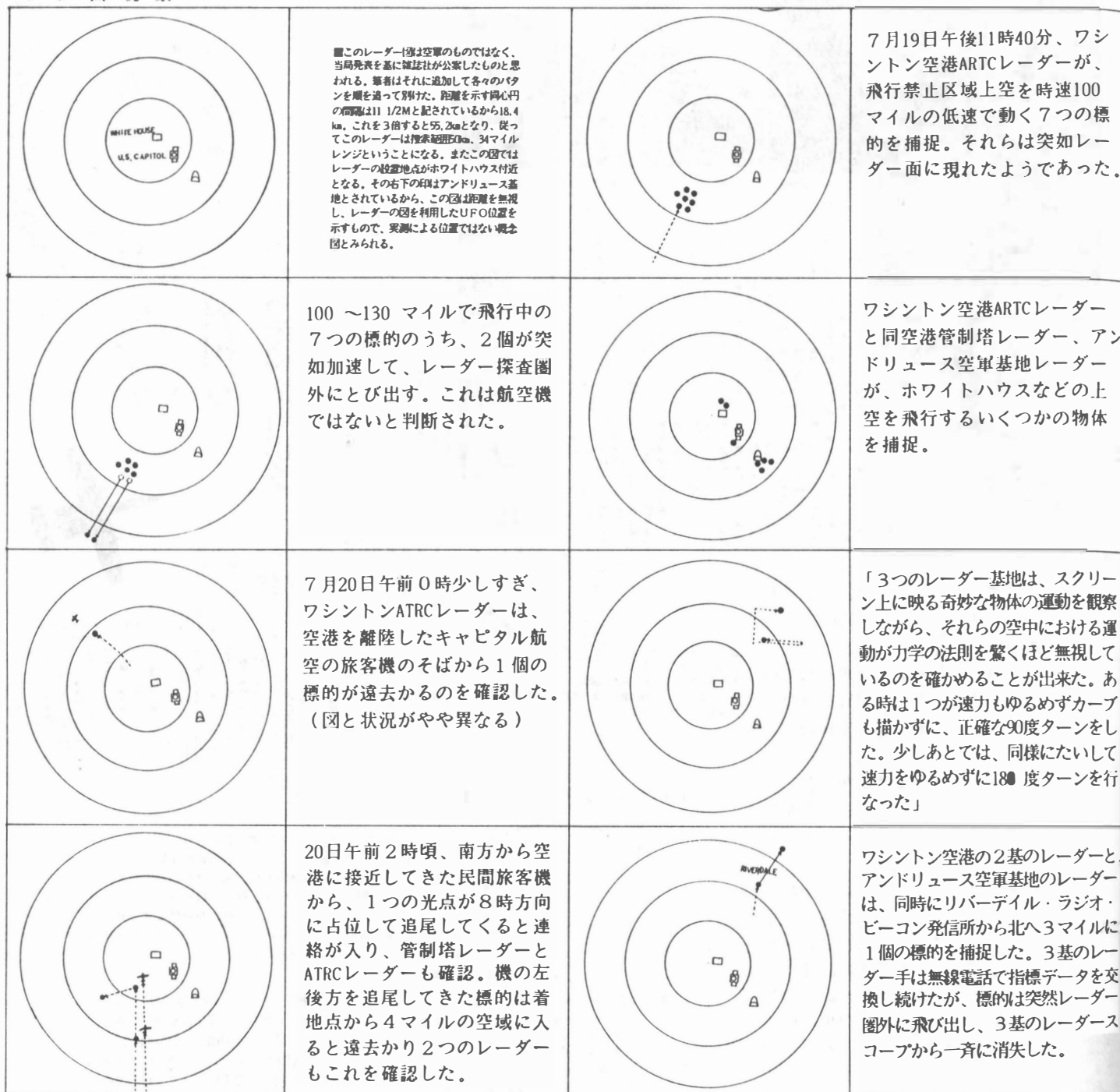


1954年「平和五原則」声明を
宇宙空間に拡大した場合の姿

- ①領土ならびに主権の相互尊重、②相互不侵略、③内政不干渉、④平等の意思、⑤平和的共存
1. 地球の土地管理と責任は地球人にある。
地球の問題は地球人が解決しなければならない
2. 宇宙から来る者は、地球を侵略しない。
地球から出る者も、宇宙を侵略してはならない。
3. 地球人の政治に、宇宙から来る者は干渉しない。
地球から出て行く者も、宇宙の機構には干渉できない。
4. 地球人も地球に来る遊星人も
同じ宇宙空間において、平等の意思が可能
5. 地球人も地球に来る遊星人も
同じ宇宙空間で平和的共存が可能

旧安保条約

レーダー面現象



近してきた旅客機からも管制塔に連絡が入った。

「機の後ろ左寄りを1個の光体がついてくる」というのである。この時、管制塔備え付けのレーダーは旅客機の左後方に1個のターゲットを捕らえていた。

さらに、レーダースコープ上では驚くべき現象が観察されていた。スクリーンを飛び回っていた1つの光点が、突然90度方向転換をやったのけたのである。

また、今まで真っ直ぐに飛行していたブリックが、あつという間に方向を逆転、つまり180度ターンを行なったものもあった。

こうした飛行は地球の航空技術では不可能である。いかなる航空機でも、飛行中の方向転換は慣性の法則に従い、その航跡は円弧の一部を描くのであり、直角といった「角度」を描くことはできない。また、180度ターン「逆戻り」飛行は、たとえ低速のヘリコプターであっても、一旦停止してから、逆方向に進むのであり、まして高速度飛行のまま即座にバックするという飛行は物理的に有り得ない。搭乗者にかかるG(重力: 重力加速度)は、人類が経験したことのない数値となるであろうし、その前に地球製の機体は耐えられず空中分解することになるだろう。

この現象がレーダーの原因によって発生したものではなく、あくまで空中に物理的に存在する飛行物体の反射電波によるものであるならば、その機体は地球製では有り得ない。UFOはその驚異的飛行技術を表すことで、自ら「我々は地球の者ではない」ことを示したのである。

明け方近く、ワシントン空港の航空路管制部レーダーがアンドリュース無線距離測定所の真上に、1個のターゲットを捕捉して基地に通報した。基地管制官たちがその方向を見ると、1個の巨大なオレンジ色をした球体が、距離測定所の真上に滞空しているのが目撃された。

これは、故ハイネック博士や悪名高きコンドン委員会も重要視している「レーダー-眼視同時報告」と定義される最重要目撃である。

この目撃事実から、レーダー面上における謎のターゲット群は、レーダーの故障でないことはもち

ろん、気象現象(逆転層によるレーダーゴースト説)あるいは「エンジェル」と呼ばれるレーダーが映す虚像などではなく、巨大な大きさをもつ球状の物体、未確認飛行物体UFOであることが確認されたのである。

「UFO」という単語は、既にこの年の3月25日、米空軍の秘密調査機関名「プロジェクト・グレンジ」を「プロジェクト・ブルーブック」に改めた時点で、主任のエドワード・ルッペルトにより、空軍公式用語となっていた。

■アンドリュース基地の記録■
ワシントン事件の内容は当時の新聞報道やキーホー、ルッペルト、チョップが公表したものが基礎になっているが、近年になってCIAや空軍の機密文書の一部が明らかとなり、その中に1952年7月20日の記録があるのでリチャード・ホール著『UFOに関する極秘ファイル』を入手した』より概要をみてもみる。

アンドリュース空軍基地侵入管制日誌第1909AACs飛行大隊1952年7月20日付

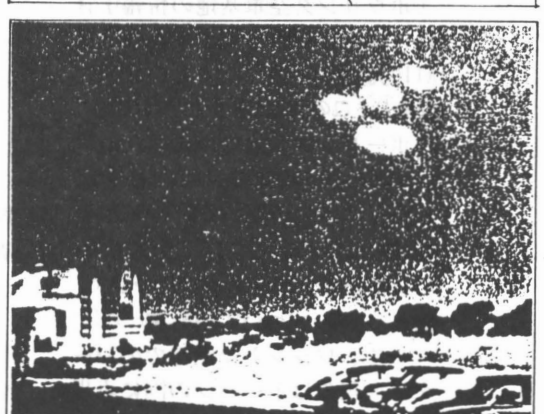
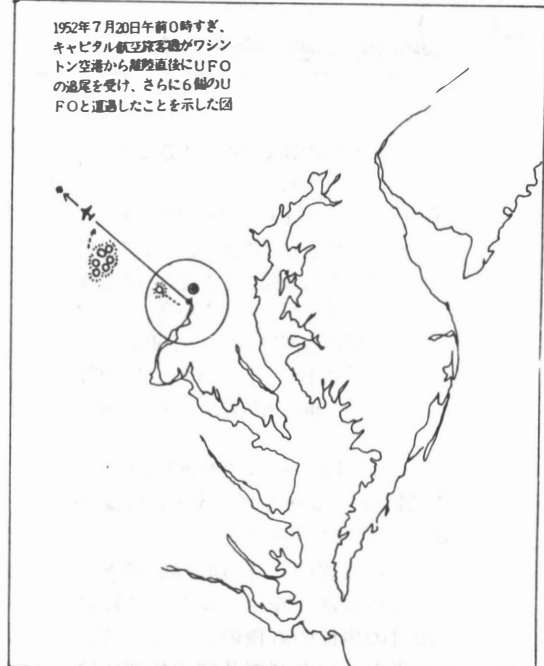
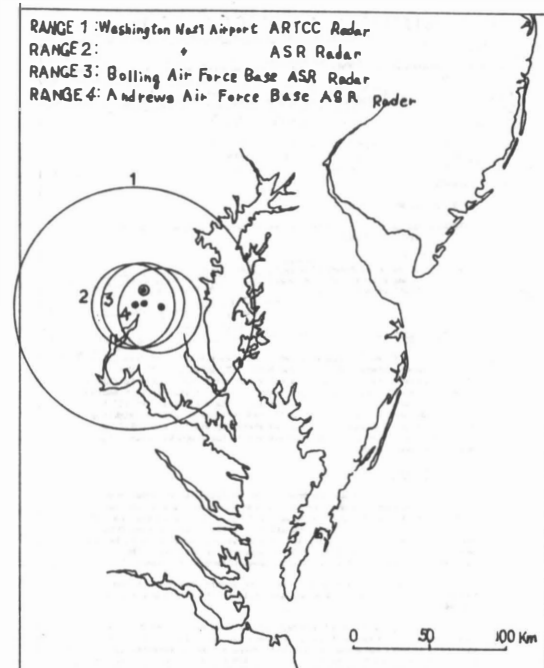
0005 アンドリュースの南に物体ありとの電話。空軍士官学校4年生ブレイディが、南の空に物体が一瞬現れたのを見た。電話の主も、同じ物を見た。ウォッシュセンターも、アンドリュース地域付近に5体の未確認目標ありと電話。管制塔の人員は、管制塔の屋根からの観察に慣れている。

0120 管制塔の屋根から見ていた時に、デバブス氏、三等軍曹イツォ、と私、W. レディング大尉が、2つの流星のような物を観察したが、それらはオレンジ色があり、尾を引いて高速で飛んでいた。

0125 三等軍曹とデバブス氏は、流星のような3つ目の物体も見た。

0235 アンドリュースの諸施設担当将校が、電話による報告を含めた報告を行なう。ウォッシュセンターはキャピタル航空から、ハーンドン近くで3体の物体を目撃し、今までに見たことがないものだったと電話を受けた。またさらに3体を、ハーンドンとマーティンズバーグの間で見たと報告した。ウォッシュセンターは、これらの目標をまず23時40分ごろに目撃し、およそ10分後、それらは アンドリュースに向かって移動した。

0330 ウォッシュセンターは、目標は航空機よりはるかに頻りに動くようだと伝えた。夜明けが近づくと、

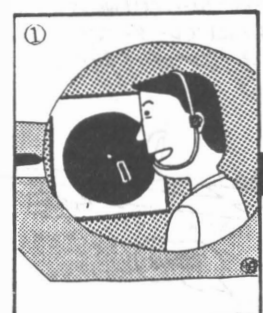


◆1952年7月16日午後9時55分、マサチューセッツ州サレム空港の米空軍航空写真隊カメラマン、ジェームズ・R. アルバートが空軍内写真研究所でカメラの手入れをしようとしていたところ、空中に輝く数個の物体を発見。5秒間それを観察後、付近にいた友人の医師トーマス・F. フラハーティを呼び、彼もこれを確認。その間、白色閃光を放つこの光体は、いくらか弱くなったが、再び低空に舞き回った時、アルバートはカメラをつかんでシャッターを切った。4/5 判カメラ使用。スーパー8カットフィルム、14.7 50 分の1秒

ワシントン・ナショナル空港
航空路管制 レーダー
Air Rout Traffic Control
搜索距離 160 km
管制塔 レーダー
Airport Surveillance Radar
搜索距離 約50 km

ボーリング空軍基地
ワシントン、アンドリュースと相互連絡でむすばれている短距離レーダー

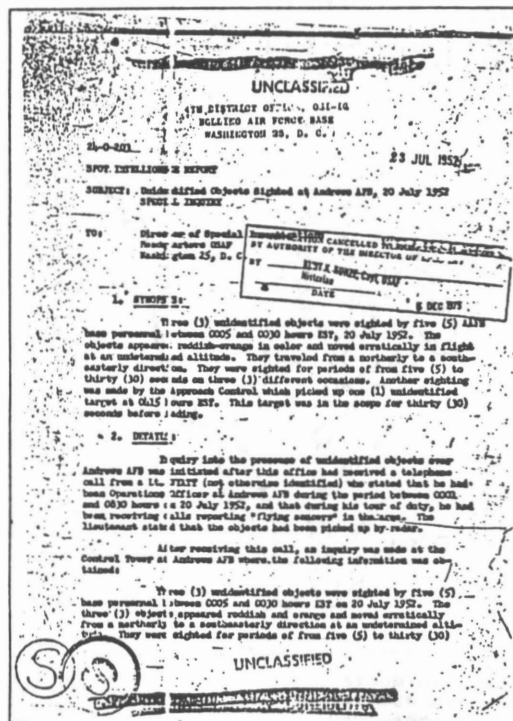
アンドリュース空軍基地
ワシントン、ボーリングと相互連絡でむすばれている短距離レーダー



①ワシントン空港ARTCがアンドリュース基地無線測定所上空に未知の標的を捕捉 ②空港から基地に通報 ③基地管制官が測定所上空に発光する1個の巨大球体を目撃

レーダー-眼視同時報告

レーダー上の異常なエコーが「逆転層」など特殊な気象条件や器械の故障ではなく、実際にその位置にUFOが存在した事実を証拠立てるのが、レーダー波捕捉と肉眼観察による同時視認である。この事例はUFOが単なる「現象」から一歩進んで「地球技術外航空体」が人類の身近に接近したとして考察を拡大できる機会と言える。ワシントン事件ではすでにこの事例が報告されていた。一つは空中にある民間機からであり、一つは基地管制官によるものである。左の画はアンドリュース無線距離測定所で目撃されるまでを描いたもの。



それらの動く頻度は小さくなったように思われた。

0530 ウォッシュセンターがアンドリュースの北に目標ありと伝えた。管制塔からは観察できなかった。テレタイプが、CIA長官、アメリカ空軍本部ワシントン25D.C.とオハイオ州ライト・パターソン空軍基地空軍技術情報センターへ送られた。

「…本件はボーリング空軍基地司令本部情報局ベンジャミン・バーコフ大尉が調整…」となっている。

この文書の宛先はATIAA.26となっているが、ルッペルトの手記に20日の事件の直後のこととして、「ボーリング空軍基地の情報士官は、完全な報告書が出来上り次第ATIC宛送ると述べた」という記述があり、この文書を指すと思われる。

ボーリング基地で作成されたアンドリュース基地での出来事を記したこの報告書が、事件後36年を経過して陽の目を見ることになった訳である。

■ルッペルトのいらだち■

さて、ワシントン空港でのレーダー面現象は前ページの図に表現してみたが、これがすべてではない。また、この図の基となった、レーダー図も空軍発表のものではなく、写真も発表されておらず、よく使用されるレーダー面上のUFO写真は再現映画からのものである。空軍発表の図としては後に掲げる複雑な航跡を示すレーダー

図が昔から知られている。従って筆者が描いたレーダー面現象図も考える上での参考程度である。

20日、ワシントンでは緊張の一夜が終わりとしていた…

管制官は空軍に電話を入れて迎撃を要請したが、明け方ようやく1機のF-94戦闘機が到着したときには、もはやUFO群は姿を消してしまっていた。



エドワード・J・ルッペルト大尉

当時の米空軍UFO調査機関主任エドワード・ルッペルト大尉の手記によると、彼が事件を知ったのは21日月曜朝10時、デイトンからバウアー大佐と共にワシントン空港に到着し、ロビーで買った新聞にこの事件が出ていたという。ルッペルトはすぐ、ペンタゴンのフォーネット少佐と連絡をとり、大佐の事務室で事件の説明を受ける。そしてペンタゴン情報士官らによる会議の進展がないまま時間が経過し、彼は関係者の取組み姿



デューイ・フォーネット少佐

勢の不明瞭さにいらだちを感じつつ、使命感に燃えて空港や基地の当事者達を駆け回るために行動を起こそうとした。しかし、ハイネックも書いている「当時の責任者のラッペルト大尉は調査活動用の公用車一台すら、国防総省からあたえられなかった。」(THE HYNEK UFO REPORT より)

ルッペルトは調査活動を断念してデイトンに戻った。

■アインシュタイン書簡■

この事件発生少し前、7月初めロサイゼルス・ルイス・A・ガードナー神父は、アルバート・アインシュタイン博士に質問状を送り、1952年7月23日付の返事を受け取った。この時期、偶然にもワシントンUFO事件のニュース

が報道されていた。

「拝復

人々が何かを見たということですが、その実体について私は何も存じませんし、べつに知りたいという関心も抱いてはおりません。

敬白

アルバート・アインシュタイン」



アルバート・アインシュタイン博士

■UFO群再びワシントンに飛来■

1週間たった7月26日の午後9時30分、ワシントン空港のレーダーが、1週間前に現れたものと同じいくつかのゆっくり動く未知のターゲットを捕捉した。

それは、ワシントンを囲んでハードンからバージニア、アンドリュース空軍基地にかけて孤状に展開していた。

今度は何のためらいもなく、これらのターゲットの追跡が始められた。100マイルの搜索範囲をもつ長距離レーダーの24インチの大型スコープ上にそれらが出現すると、それぞれのブリップのそばに識別不能標的を表示するアラスティックのマーカ―が置かれた。この作業は前回と同様、ハリー・バーンズを主任とするレーダーオペレーターによって行なわれた。

一方、ペンタゴン勤務の空軍UFO情報担当者アルバート・M・チョップは、連邦航空局からの電話連絡で急遽ワシントンへ向かう



ハリー・バーンズ主任

た。

ルッペルトは事件発生から30分後、午後10時に『ライフ』記者から聞き、すぐペンタゴンの当直情報士官に連絡、士官を通じてデューイ・フォーネット少佐にワシントン空港へ出向いてほしい旨要請した。

こうして、再びUFO飛来を受けたワシントン空港のARTCレーダー操作室には、アル・チョップ、フォーネット少佐、それに海軍電子工学専門家ホルコム中尉といった公式筋がそろった。

しかし、残念なことにブルーブック主任のルッペルト大尉は、この事件を連絡しながらも、彼自身は380マイル離れたデイトンにいた。



アルバート・M・チョップ

■UFO群、F-94の接近をかわす■

国防省のスポークスマン、チョップは空港レーダー室の状況をこう語る。

「私はレーダー室に入った。スコープのまわりに数人の管制官が群がっていた。確認済みの航空機には、小さなアラスティックの指標(マーカ―)がついていたが、ほかにもいくつか“不明(アンノウン)”と印をつけられた物体があった。“不明”物体は6個ないし10個以上もあったが、飛行機にしては速度が早すぎた。それに動きもでたらめだった。一定の経路をたどっていたかと思えば、次の瞬間には消え去る。そして別のやつが現れるのだ。我々はこの“不明”物体を追跡して、一晩中アンドリュースのレーダー管制官、航空管制官とチェックし続けた。

私は国防省内の戦闘指令所に連絡をいれて、要撃命令を出してくれるように頼んだ。私は新聞記者たちに、レーダースコープを見ても良いと許可を出し、要撃作戦の展開を待ち構えた。

ライフ誌がスコープの写真を撮りたいと言いたしたが、準備が終わる前に、この要撃作戦は極秘命令扱いとするという注意がきたので、私はやむなく記者たちに、部

屋の外へ出るよう命じなければならなかった。

われわれはスコープの前に戻った。午前2時40分ごろ、スコープに2機のF-94が現れたが、そのとたん恐るべきことが起こった—ターゲットのブリップがスコープから、パッと消え失せたのだ。要撃機たちは15分ほど飛び回ってから、むなしく基地へ引きあげた。ところが、彼らがスコープから去ったとたん、またもやターゲットが現れた。…」

(ロバート・エメネガー著『UFOs PAST, PRESENT AND FUTURE』より) この状況をルッペルト手記より構成するところなる。

午後11時30分すぎ、UFO出現の空域からすべての民間機が締め出され、2機のF-94ジェット戦闘機がデラウェア州ニューキャッスル空軍基地からスクランブルして問題の空域に到達した。

ところが、戦闘機がその空域に到達するやいなや、ターゲットはレーダースクリーンから消失してしまったのである。戦闘機はターゲットのあった空域を搜索に飛び回ったが、視界は良好であったにもかかわらず、何も発見できないまま、基地に向かって帰投しはじめた。

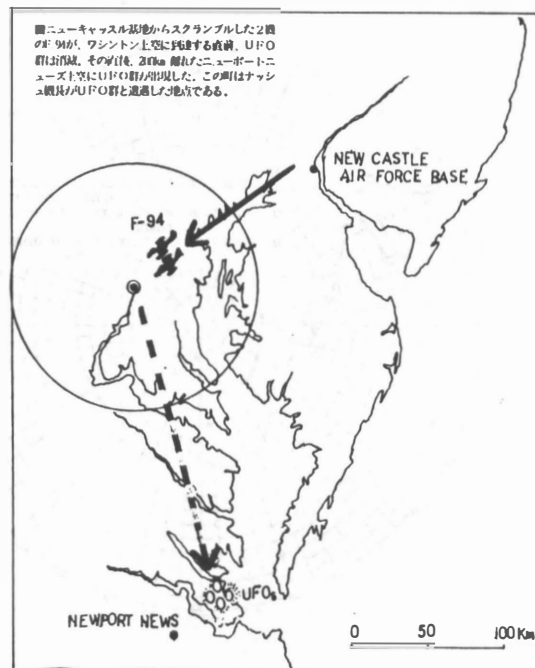
■UFO、ニューボート・ニュースに出現■

ワシントンでターゲットがいずこかへ消失して数分後、南へ200km離れた、ここバージニア州ニューボート・ニューズ近郊のラングレイ空軍基地上空に、回転しながら色彩を変える光体が発見していた。付近住民からの通報を受けて、基地管制官は近くを哨戒飛行中のF-94に連絡、UFOに向けて誘導した。

F-94はUFOを発見、接近を開始した。ところが、そのとたん誰かがスイッチを切ったように、光体は消失してしまったのである。

F-94はそのまま上空を搜索、再びUFOを発見したので、パイロットはレーダー射撃管制装置で1個のターゲットをロックオンすることに成功した。しかし、UFOは数秒間で圏外に離脱、ロックオンは破られた。この状況は、もう1度繰り返され、UFOは完全に空域から消失した。

その数分後、ワシントン上空に



再びUFO群が現れたのである。

■UFOを追った ジェッパイロットの証言■

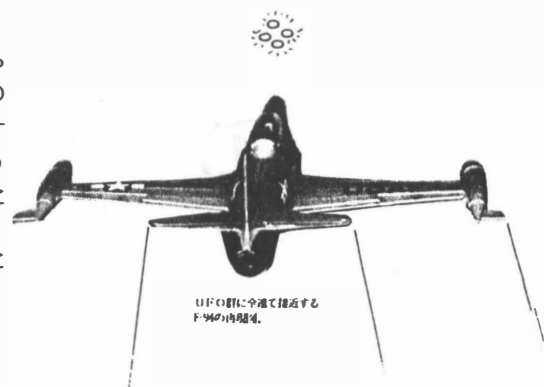
すなわち、F-94が去ったワシントンの空域に、いずこかへ飛び去っていたUFO群が、再びレーダースコープの元の位置に戻ってきた。

空港は再び防空指令部に電話した。再び2機のF-94がワシントン上空に迫ってきた。今度は戦闘機が空域に到達しても、ターゲットはスコープ上にとどまっていた。

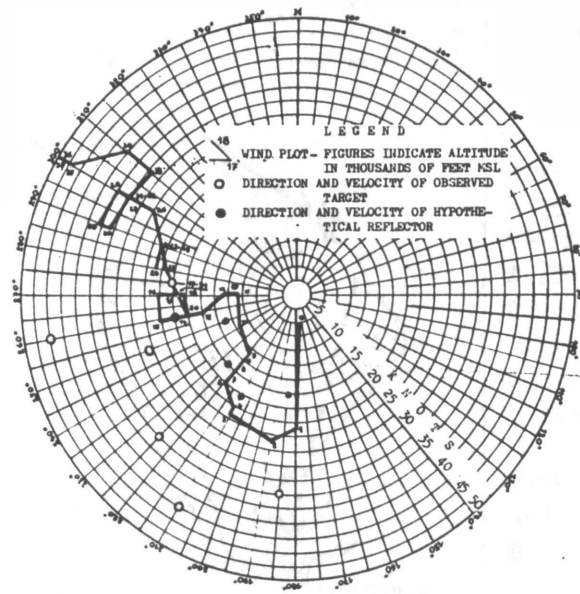
管制官はF-94をUFO群の方へ誘導し、パイロットは目標に向かって接近を開始。すると目標として視認された光体群は加速して飛び去った。それはラングレイ基地の場合と同じであった。

F-94のパイロットの一人、ウィリアム・パターソン中尉は7月27日の記者会見で、そのときの模様をこう語っている。

「レーダー管制官が誘導する方向にいくつかの光点が見えた。私は全速でそれらを追跡したが、まったく近付けないのだ。また、約2マイルまで近付くと消えてしまった。」



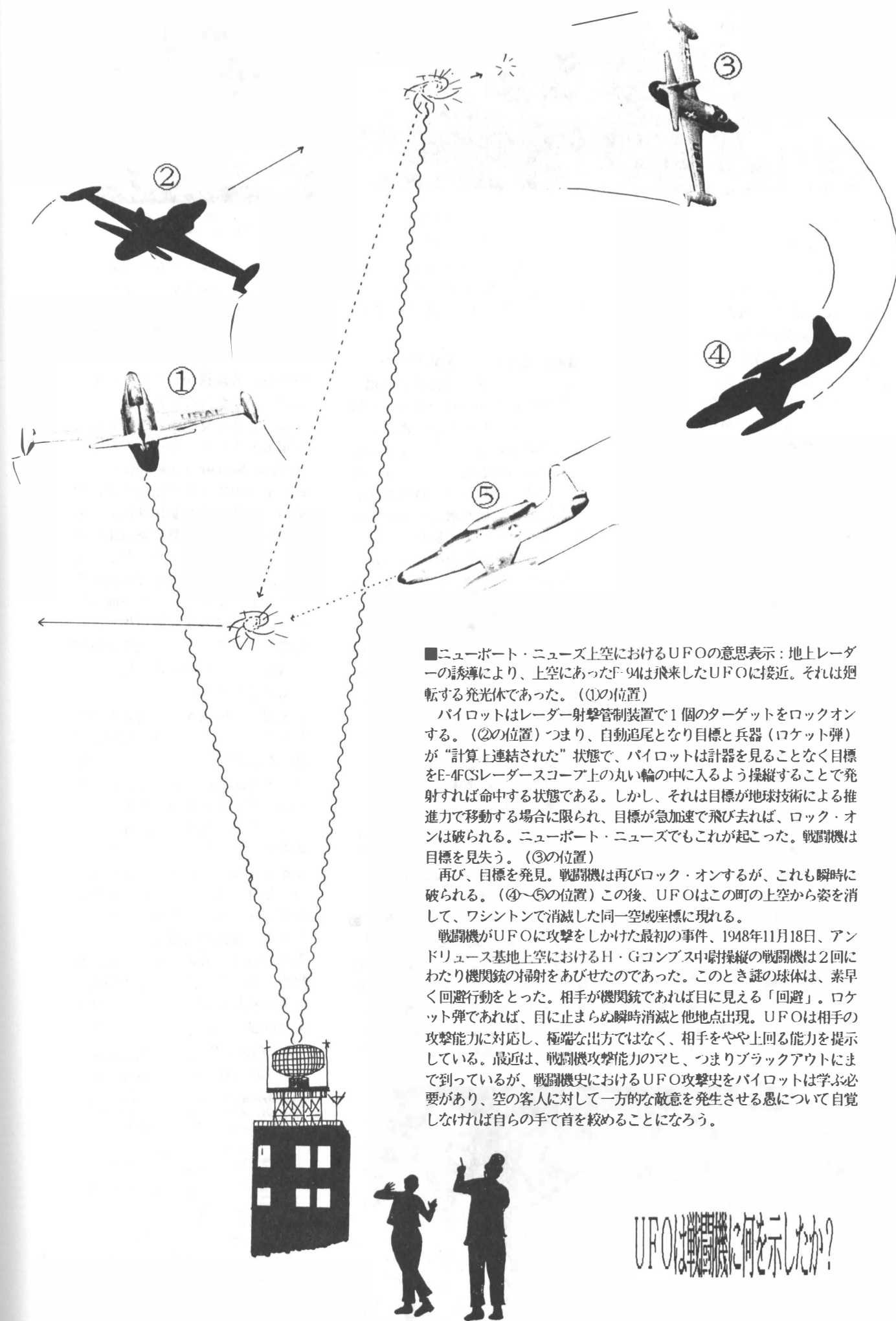
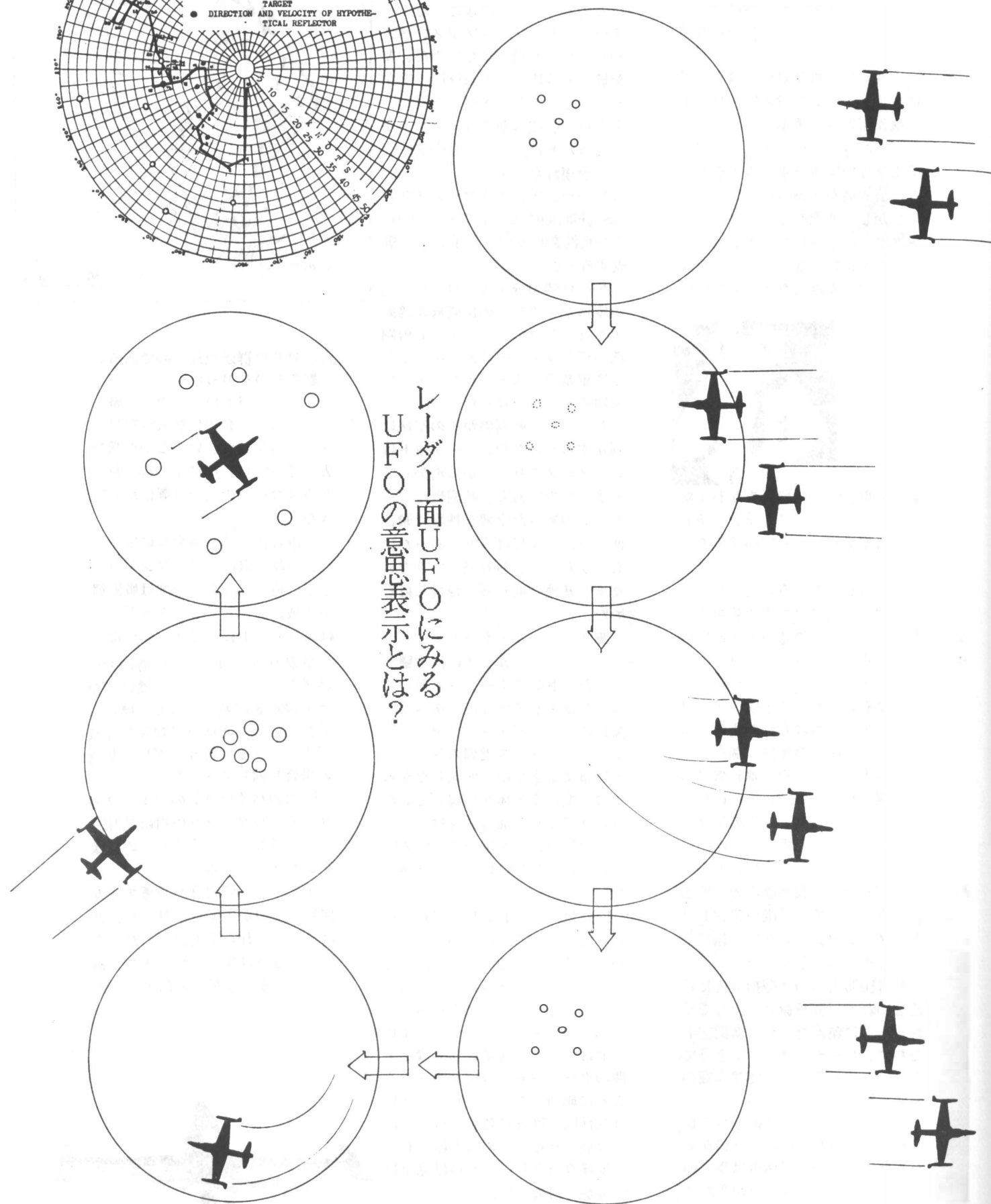
UFO群に全速で接近するF-94の内部機



Officially "unidentified object" denoted by black circles, tracked on the radar scope at Washington D.C. Airport on the night of August 15th, 1952.

■ UFOの飛行経路を示したもので、最初、戦闘機がUFOの出現に警戒する様子を演ずる。そして、戦闘機がUFOから去ると再び追いつく。これは、戦闘機との追いつき合いを示し「我々は追いつき合っている」という意思表示である。戦闘機が追いつくUFOは、ついにUFOが「我々」の一部を示す。戦闘機が追いつくUFOは、次に逆に戦闘機を包囲する。「我々が追いつき合っている」ということが、まだ分からないのかい」の問いである。

レーダー面UFOにみる
UFOの意思表示とは？



■ニューポート・ニュース上空におけるUFOの意思表示：地上レーダーの誘導により、上空にあったF-94は飛来したUFOに接近。それは廻転する発光体であった。(1の位置)

パイロットはレーダー射撃管制装置で1個のターゲットをロックオンする。(2の位置)つまり、自動追尾となり目標と兵器(ロケット弾)が「計算上連結された」状態で、パイロットは計器を見ることなく目標をE-4FCSレーダースコープ上の丸い輪の中に入るよう操縦することで発射すれば命中する状態である。しかし、それは目標が地球技術による推進力で移動する場合に限られ、目標が急加速で飛び去れば、ロック・オンは破られる。ニューポート・ニュースでもこれが起こった。戦闘機は目標を見失う。(3の位置)

再び、目標を発見。戦闘機は再びロック・オンするが、これも瞬時に破られる。(4の位置)この後、UFOはこの町の上空から姿を消して、ワシントンで消滅した同一空域座標に現れる。

戦闘機がUFOに攻撃をしかけた最初の事件、1948年11月18日、アンドリュース基地上空におけるH・Gコンプス中尉操縦の戦闘機は2回にわたり機関銃の掃射をあげたのであった。このとき謎の球体は、素早く回避行動をとった。相手が機関銃であれば目に見える「回避」。ロケット弾であれば、目に止まらぬ瞬時消滅と他地点出現。UFOは相手の攻撃能力に対応し、極端な出方ではなく、相手をやや上回る能力を提示している。最近、戦闘機攻撃能力のマヒ、つまりブラックアウトにまで至っているが、戦闘機史におけるUFO攻撃史をパイロットは学ぶ必要があり、空の客人に対して一方的な敵意を発生させる愚について自覚しなければ自らの手で首を絞めることになる。

UFOは戦闘機に何を示したか？



F-94パイロットの証言を前述エネガー著のチョップ発言からみ

てみよう。「…(7月27日曜日午前)3時頃、私は国防省の戦闘指令所に電話して、事態を知らせた。彼らは言った。『まあ待て、もう一度スクランブルをかけるところだ』

今度は“不明”物体たちは、スコープ上から消えなかったので、我々は要撃機を正しい位置に誘導した。2機をふた手に分け、1機は北へ、もう1機は南へ向かわせ

た。最初のパイロットは『何も見えない—』と連絡してきたが、彼の機はターゲットのすぐそばまできているのが見えた。レッド・ドッグ2(北へ向かったパイロット)が再び報告した。『今度は見える—まっすぐ真ん中だ……でかい青白い光のように見える』

レーダーでは、彼らが非常に接近しているのが見てとれた。次いで2度目の報告がきた。彼は少し興奮していたが無理もない。『まわり中にあるぞ!』一瞬間を置いて『こっちへ迫ってくるように見える…』数瞬ののち、パイロットの言った最後の言葉は、ほとんど哀願に近い口調だったのを覚えている。『おれはどうしたらいいんだ?』

たしかに我々も、“不明”物体が彼の機を、輪のように取り巻いて迫るのを見た。我々は互いに顔を見合わせるだけだった。10秒か20秒後、彼は報告した。『やつらは去っていきます』しばらくして

から彼は、これより帰投すると連絡してきた。UFOたちは土曜の朝5時(編注:土曜の夜に始まったのだから日曜日の朝の筈)ごろまで、レーダー上にとどまっていた。」

■航空機とUFOを観察したレーダー技師の証言■

UFOに向かったパイロットは“全速でも近付けない”あるいは逆に“囲まれた”という矛盾を感じさせる体験を語っているが、これこそまさにUFOの特性だといえるだろう。航空機とUFOの両者をスクリーン上で観察したレーダー官はどう感じたのだろうか。ワシントン空港のバーンズは語る。

「それらが一種の知性にしたがって行動していたことを私は確信する。近辺に飛行機がないと、好んで重要な地点の上に停滞した。すなわちアンドリュース基地、リヴァーデールの飛行機工場、国会議事堂などである。12機がラジオ放送局の上へも飛来した。そして飛行機が現れると去るか、あるいは向かってきて詳しく調べるように後を追った。」(7月19~20の場合。A・ミシェルによる)

■空軍のUFO否定記者会見とメンゼル教授の“気温逆転層”■

7月28日の新聞報道はすべてトップにワシントンUFO事件を掲載。また8月中の各紙は、この事件について種々の記事を書いた。

7月29日、ジョン・サムフォード将軍は報道関係者に記者会見を通知。



■左上: UFOを追跡したパイロット。上: 記者会見における関係者。

7月29日、ルッペルト大尉、ロイ・ジェームス大尉、ドナルド・バウアー大佐といった空軍専門家、情報局高官、気象専門家などが出席し、空軍としては第2次世界大戦後最も大規模かつ長時間にわたる記者会見が行なわれた。

この記者会見の内容を書いた退役軍人ドナルド・キーホーは、『Flying Saucer from Outer Space』の中で「わが国の上空は異星の宇宙船により制圧されている」と指摘。空軍も首都直撃飛来に自慢の防衛能力が役に立たなかった訳だから、当然この事実を認めるべきであったが、レーダー面UFO現象を気温の逆転層が作り出した像とすることで、“地球外原因”を否定。この難局を切り抜けた。

気温逆転の原理は当時ハーバード大学で天体物理学を教えていたドナルド・H・メンゼル教授が提唱したもので、サムフォード少佐はこの理論で押し通した。メンゼルは、円盤史上最初の著書といわれる『空飛ぶ円盤』を書いたが、著書の中で「証言は全然変形することなく報告されなければならない」と自ら述べているにもかかわらず、同じ天文学者のクライド・トンボー教授の目撃に手を加えたのみならず、著書に掲載された怪物や空想上の火星などの挿画を96葉掲載した中に、トンボー博士より直接送られたUFOのスケッ

Air Force Debunks 'Saucers' As Just 'Natural Phenomena'

Intelligence Chief Denies a Menace Exists — 'Objects' Believed to Be Reflections, but 'Adequate' Guard Will Be Kept

By AUBREY STEVENS

Special to The New York Times

WASHINGTON, July 29—Air Force officials said today that the United States has no reason to believe that the flying saucers are a menace. The Air Force is the last of the major agencies to say the latest wave of "flying saucers" reports checked by the military. It called them "natural phenomena" and announced that the Air Force would trust reports of the flying saucers as a United States phenomenon but not as a threat.

Underlying by a new series of sightings of mysterious glowing objects in the air over the Capital and elsewhere, the Air Force called a press conference at the Pentagon to give out what information it had. At the end of one hour and twenty minutes of exchange between the Air Force and the press, the Air Force said it was not convinced that the flying saucers are a menace.

■左: レーダーでUFOを観察した管制官たち。中央がバーンズ。上: ワシントン事件を報じた7.30新聞

チを掲載しないといった偏見の否定論者として知られていた。

空軍はこのメンゼル理論(気温の逆転で生じた空気レンズ作用で電波が空中にないものを地上から拾い上げて像としてスクリーンに映すというもの)を記者団追求を回避する盾として用いた訳である。

しかし、バーンズ管制官は述べている。「…私は6年前からレーダーの前で暮らしてきたが、全速力で走るジェット機でも、暴風雨でも、転位(気温逆転)でも、何でも、絶対にレーダーに対してあんな行動をみせたものはない。あのとときと同じ気象状態には何度も出会っているのだが」

技師長J.L.マック・ジヴァーンも「…7月20日でも、26日でも、地上からの映像は年中スクリーンの中で見えている大きな斑点、つまりレーダーが拾い上げた空港の建物の影以外は何もなかった。」

■7月29日 - ロスアラモスにもUFO飛来■

サムフォード将軍がワシントン上空におけるUFOの現状を明らかにするための記者会見をマスコミ陣に下達した7月29日午前10時、その時、UFOはあたかも“意思”を地点で示そうとするかのようにロス・アラモスに姿を現わした。前述ハイネック著書は、ロス・アラモス研究所職員が報告した4件のUFO目撃を紹介している。

時刻はいずれも午前10時、目撃場所はそれぞれ「オメガ・サイト」「ロス・アラモス溪谷」「滑走路付近」「サイトS」である。それらは「近くなったり遠くなったり旋回したりする白い物体」「ジェット機より大きく光を様々な角度に反射する白い物体」「地上をはうように移動し高空へ去る赤く燃えた紙のような物体」「卵型で翼があるように見え褐色で動き始め

ると猛スピードで去った物体」と表現されており、同一物体の多点観察ではなく、同時刻にロス・アラモス周辺に飛来した複数のUFOとみられる。ハイネックによれば「まだ多くの証言がある」という。ブルーブック特別報告14号でも、1947年から1952年のUFO出現分布がロス・アラモスとワシントンDCに集中したと述べられている。

■8月5~6日 羽田空軍基地でもF-94が追跡■

F-94戦闘機によるUFO追撃事件は、7月29日から1週間後の8月5日、ヒロシマの原爆記念日をひかえた日本に“飛火”したかのように発生した。

その夜遅く、羽田空軍基地の北東に異常に明るい青白い光を管制官が目撃、白井のGLIレーダー隊に警報を発令。米極東空軍日本防衛隊のF-94Bがスクランブルし、機内レーダーで捕捉しつつ追跡。この模様は6日午前0時12分から18分頃にかけて地上レーダーもとらえ、戦闘機は90秒間の追跡を行なった。この事件については元アリゾナ大学大気象学・大気物理学ジェイムス・マクドナルド博士の詳細な論文がよく知られている。

■米国の前進基地として 当時の日本の立場■

ここで、UFO事件を離れて再び軍事的な当時の情勢をみても。前に述べたように、中国への核攻撃が実行に移されるとしたら、核爆弾を腹に爆撃機が飛び立つ前進基地は何処に予定されていただろう。その7年前、B-29「エノラ・ゲイ」はテニアン基地から発進して2700km先の投下目標日本を目指したのであった。

1951年、講和と引換に日米安全保障条約が調印され、1953年には日本の米軍基地には既に2500万ト

ンの水爆があったとするエルズバーグ証言からすれば、その1年前とはいえ、日本が対中国核攻撃の前進基地として機能できる状態にあったことは否定できない。このことは1951年に始まる朝鮮戦争で日本全土が前進基地となった歴史からも言える。この当時から、トルーマン大統領の“原爆使用発言”が世界を脅かしていたのであり、地球と宇宙の安全管理という立場から見れば、ルーズベルト前大統領の急死によって、原爆製造のマンハッタン計画さえも知らされてなかった知識と経験の乏しい副大統領が、にわかに大統領に昇格した時点から、“要注意人物”として“リスト”に載る理由は充分にあったであろう。「この男から目を離すな」が宇宙と地球の安全を考える者同士の合言葉であっても可笑しくない。

■ワシントン上空、“瞬時飛来”の意味■

米国の首都ワシントンは国家の中核である。政治のドラマを専ら演ずべき舞台として人工的に設計され建設された町。軍事的には全世界に展開する戦略空軍など全軍に指令を発する頭脳である。

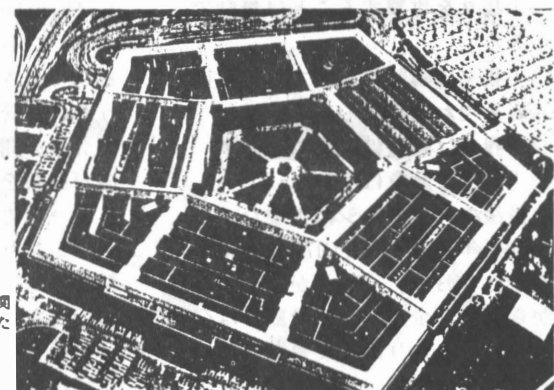
その世界戦略の“頭脳”に到達する“敵”ミサイルがあつてはならないし、敵国上発射から味方国上着弾までの軌道を追跡できる地球式の兵器ならば、迎撃という手段で着弾途中で撃ち落とすことが可能である。そのためにこそ、早期警戒レーダー網や空中警戒機、人工衛星が機能している。このシステムが渡り鳥の群れを敵ミサイルと誤認して警報が出されるという程度の代物であつては永久に役に立つまい。そのためにこそ、あらゆる空中飛行物体の特性をデータ処理して、瞬時に照合する識別機能や敵味方識別機能がある。

ところが、人智の極みを尽くした最新機能を見捨てるかのような謎の飛行物体が、突如“頭脳”の真上に出現した。“頭脳”は狼狽し、混乱した。そんなことが、起こる筈がなく、国家安全保障上、絶対にあつてはならない事だからである。

ところが、現実にはそれは起こった……。しかも、その侵入者は…“敵”ではなかった!“未知の訪問者”とでも言えよ



■上: ドナルド・H. メンゼル教授 右: 米国防総省ペンタゴン。UFO調査関係者は4階の空軍情報部で事件の収拾に当たっていた。



Brief summary: USAF tower operators at Haneda AFB observed an unusually bright bluish-white light to their NE, alerted the GCI radar unit at Shiroy, which then called for a scramble of an F94 interceptor after getting radar returns in same general area. GCI ground radar vectored the F94 to an orbiting unknown target, which the F94 picked up on its airborne radar. The target then accelerated out of the F94's radar range after 90 seconds of pursuit that was followed also on the Shiroy GCI radar.

■1952年8月5～6日にかけて羽田空軍基地で発生した事件の経緯

うか。それとも“地球外の知性”か、宇宙空間の安全保障を維持する“宇宙の警察”か？

とにかく、自分達が兵器で守りを固めている作戦本部の直中に、瞬時に出現した外来者を認めたならば、「軍備」や「国家」といった次元の価値がもろくも崩壊の危機を迎えることになりかねない。

もし、「高度な知性」が自分達の守りを無視して目の前に出現したならば、それは神か悪魔か。たんなる人類の傍観者ではない“超越者”が、言葉や信仰の中ではなく、また錯覚や幻の世界にでもなく、レーダー電波を反射し、パイロットの肉眼で確認できる距離の空間に、現実存在した、という事実を経験したことになる。

その“神技的実在者”によって、何故1952年7月のその日が“選ばれた”のか？その時、その場所、つまり、UFOが滞空した国会議事堂で、ホワイト・ハウスで、アンドリュース空軍基地で、UFOの関心を引く何が進行中であり、また存在したのか。

もし、大統領はじめ関係者が、“超越者の侵入”を国家として認めるならば、同時にこれらの答を公開する義務があるだろう。

■ワシントン上空の“無言劇”

高度な科学力を示したUFO■

地球上の科学の成果は様々先端技術に生かされているが、とりわけ航空宇宙の分野では顕著である。

戦闘機の歴史は、ジェット化により、最高速度はP-51ムスタングの誇る時速711kmが、P-80の時速933kmとなって、米国にジェット戦闘機の時代が到来した。

P-80の機体は、後の単発ジェット戦闘機に広く採用された基本パターンをすべて身につけ、機上レーダーと、これによる火器管制装置(FCS)、遠距離から侵入目標を発見し、その追尾を行なう地上警戒管制装置などが電子装置の開発とともに装備され、F-86D、F-89D、

F-94Cなどが開発された。

F-94は、米空軍が夜間戦闘機にもジェット機を導入しようとして、F-89スコピオンの開発(1953年就役)を始めた頃、その実戦配備までのつなぎとして、F-80を改造したものである。

1952年当時、空軍で使用されていた戦闘機はF-80、F-84、F-86の3種であった。

戦闘機の能力は、速度、上昇率、上昇時間、上昇速度、降下からの回復、旋回能力といった飛行について、また攻撃目標をとらえレーダーで追尾しつつ機銃、ミサイルで破壊する性能について示される。

複座戦闘機F-94Cの武装は2.75inロケットを24～48発搭載。F-84G以降は「核」搭載可能となっているが、UFO事件当時のF-94の装備は明確ではない。

いずれにしても、全速追跡でも接近できないかと思えば、周囲を囲まれる、目標破壊のロック・オンが破られる、瞬時に圏外へ離脱する、直角にターンする、180度ターンする、戦闘機が接近すると去り、圏外に去ると飛来する、というような飛行ぶりの意図するところは誰の目にも明らかである。

すなわち、列挙すれば以下のよう無言のメッセージが、その飛行に含まれていると言える。

- 「我々は諸君の航空技術より高度な技術を所有している」
- 「我々は諸君の動向をキャッチして対応している」
- 「我々を攻撃することは無駄である」
- 「我々は瞬時に意図する位置に姿を現わす事ができる」
- 「我々は瞬時に退去できる」
- 「我々に敵意はない」

最後のメッセージは重要だ。これは近年公表されたCIA文書にも記されており、“敵意がないのだから国家安全保障上の脅威とはならない”という論法で買われている。

■UFOとは何か■

基本的な問題として、UFOとは何なのか、何故飛来したり、去ったりするのか。我々の“常識”としてあるのは、もし宇宙の他の文明が地球文明とコンタクトをとるために飛来するのならアポロシリーズのように宇宙から接近し、大気圏内で姿勢制御しつつ降下し、安全な地点に着陸するという図式を想像する。また、地球接近時にあらかじめ“通信”を送ることも考えられる。

ところが、現実のUFOは、こうした我々の“期待”とは関係のない出現姿勢を貫いているように見える。

UFOの大編隊がレーダーにキャッチされたり目撃されることはあっても、その編隊が消えることなく軌道を示したまま米国から南米へそしてヨーロッパへと飛行を続けたりはしない。そのような飛行の仕方は、地球のやり方であり、軍事的には“領空侵犯”“領空の制圧”を意味している。UFOは出現し、消え去る。追跡をかわし、地球人側の“執ような敵意”には必要とあらば接近して下腹を抜くといった“警告行為”を使い別けている。

同じ空を飛ぶ訓練を積んだパイロットならば、理解はしやすい。複雑な飛行や編隊の知的なパターンは地球航空機ならば高度なテクニックを要する“命がけ”の飛行である。地上へのギリギリの接近と、速やかな退去にしても、予測される地球側の出方を計算しつくした行為が見てとれる。彼らが推定や推理で動いているのでないことは確かだ。彼らは“傍受技術”についても超一流の腕前を見せる。パイロットが何をしようとしているのかを知っているように、急激な変化を見せるのだ。ロイ・ステマンも『Visitors from Outer Space』のワシントン事件の項に書いている「…ときどき光体群は、どういうわけか管制塔とパイロットらとの会話を聞いているらしく、飛行機が進路を変える前に反応しているように思われた。」

ワシントン事件当時のF-94の追撃行為が、それほど敵意に満ちてはいなかったためか、ロック・オンを破る程度で、ブラック・アウトには至らなかった。

■大統領の事件説明要請■

ルッペルトは事件直後の模様をこう書いている。

「…翌日(29日)、空軍情報部が占めているペンタゴンの4階を支配していた空気は、混乱としか描写できないものだった。

およそ語ることの可能な限り、多くの議論が口に出されたが、行動は最小限しかなされなかった。すべての人々は、2回の日撃事件は徹底的に調査すべきだ、という見解を持っている点では一致していたが、誰も何らの行動も実行に移そうとはしなかった。

フォーネット少佐と私は午前中ずっと“何か”を調査するために、“いままさに飛び出そう”とし続けることとなった。ところが、いざ飛び出そうとするたびに、さしあたり、より重要な出来事が持ち上がって、足留めされてしまうことの繰返しであった。

午前10時頃、大統領の航空問題補佐官ランドリィ将軍が、トルーマン大統領の「何が起きているのか明らかにせよ」との要請に基づいて、情報部に電話をかけてきた。どういうわけか私に電話口に出ろというのだ。

私は、ランドリィ将軍に、問題の標的群は天候に起因するものだったという可能性があります、その証拠はありません、と話した」

■CIAとUFO■

正体をつかみ得ない飛行物体が領空を侵犯したという見方からワシントンUFO事件を考えると、必然的に国家安全保障上の情報収集任務に当る中央情報局CIAの関心を呼ぶことになる。ハイネックはこう書いている。

「この1952年の“ワシントンUFO騒動”につづいて、その夏、UFO目撃報告が政府や議会に殺到したので、アメリカ空軍当局とアメリカ政府は、大いに頭を悩ませた。UFO現象に対する空軍当局と政府の立場はそれぞれ異なっ



上：H.P. ロバートソン博士
右：レーダーの運用状況
を描いたマンガ

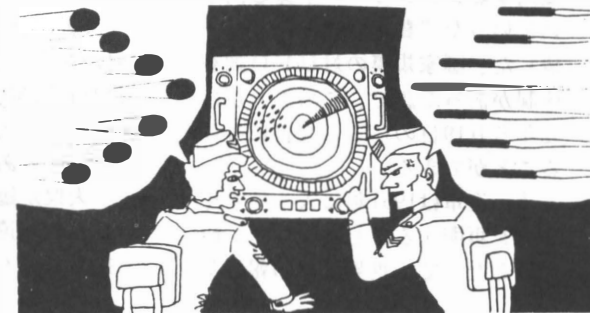
ていて、空軍当局の関心は「UFO現象とは一体何なのか？」という問題にあったが、政府のCIAが関心を抱いたのは、敵方のスパイが偽の空飛ぶ円盤目撃報告をたくさんでっちあげて、アメリカの軍事通信網の攪乱をねらうのではないかという点にあった。」

こうしてワシントン事件の波紋は、UFO説明をCIAに依頼されたロバートソン委員会の発足となり、報告書が作成され、各種秘密文書が政府、CIA部内を循環。合衆国政府にとって「UFOとは一体何なのか？」について意見の交換が活発に行なわれ、空軍からの山のような遭遇報告を前にして、これらをどう処理するか、また必要によっては世論から遠ざけ、代替情報として何が適当かの提案や、それを実行するための工作部隊の編成、実行プログラムや実行した「効果」といったような多岐にわたる問題が闘わされたであろう。

そして、1952年以後16年間一貫して、ペンタゴンの方針となったロバートソン調査報告書の内容はこうである。

「当調査委員会の結論として、このような(UFO)現象の報告を今後も重視しつづけると、政府の防衛機関の正常な機能に対して脅威をまねく結果になる。その一例として、各種通信機関の妨害、虚報の流入によって実際の敵対活動の兆候が無視される危険、全国民のあいだにおける病的心理の拡大などがあげられるが、とくに敵対国がたくみな宣伝工作を行なって、この国民の間の病的心理を利用すれば、アメリカ全土はヒステリカルな状態に陥り、政府の信頼がいちじるしく損なわれるおそれがある。」

「…UFO現象が国家安全保障に対して直接の物理的脅威となる兆候はなく…」としながら“UFOを重視すると防衛機関の正常な



機能に脅威をまねく”とは何を意味しているのか。

“大衆”である我々に、それを知る義務がないとは言えない。

我々大衆は“防衛の信頼がUFOの飛来により損なわれる”ことに危機を抱く側に立つのか、それともUFOの飛来により、何かが変わる世界の到来を招きたい側に立つべきか…

当初は空軍内部でもUFOとは「外宇宙からの宇宙船」であると既に結論していた。しかし、なぜか政府にとって、“進んだ文明からの接触”は好ましくない結論されたのである。

政府は、UFO目撃により“目覚めた”国民に、国家の体制維持発展にとって不利益な何かが生じていく事に気づいたのだろうか？

国家の維持にとってのマイナスとは一体何か。

近年公開されたCIA文書を見ながら、この重大な問題を考えてみよう。

“国家”とは特定個人の所有物ではない。もちろん、この地球もだ。

また特定集団にとって“必要な作物を採取できる自由な畑”でもない。

■「速度」にみる文明差■

為政者にとって、革命思想や反政府主義、はたまた文明の進歩の否定や科学技術への批判分子は一種の“病的心理”の芽生えとして指定できる。つまり、長年にわたり構築され維持された伝統ある仕組みや枠組みにとって、反対要素はそれらの破壊につながる動きとなり、国家に所属するすべてのポストにとって不利益をもたらすからだ。

こういう土壤に“投下”された“種”UFO問題の一つの側面に、UFOの飛行データを読んだ人々が、自国の防衛能力との格差をどう受け止めたかがある。この“差”がケタ外れなのか、「努力すれば近付ける差」なのか、である。

もし、「努力すれば対等になれば、武力で勝てる」という算段が生じたならば、“高度な知性の接近”を歓迎するより“国家の現状維持”を優先させる意見の一致をみるかも知れない。

とてつもなく差がありすぎ、UFOを怒らせたら人類50億は瞬時に消滅する可能性が濃厚、という

ような見解の一致をみたなら国家としての出方は別の方針になっていたかも知れない。

我々が、壊れやすいタマゴを力一杯握りしめないのは日常感覚である。そんなことをすれば、タマゴは潰れてしまうからだ。壊れやすいタマゴと扱う人間を、人類とUFOに置換えたらどうだろう。

また、瞬時に国連本部の会議室に姿を現わす能力があったとしても、乗物で飛来する手続きは、見る者に「安心感」を与える。

飛行機のように旋回して見せれば、パイロットにとっては「空の先輩」であり、民間旅客機と並んで飛べば、異国の代表同士が友好の証として席を同じく並んで立つ姿と同様、「空の友人」として理解される。

また、外宇宙で実験中の宇宙飛行士が、赤い点滅信号を発するUFOを目撃した直後に事故にあえば、「あれは、UFOが事故発生を予告してくれたのだな」と理解される。

以上は実際に起こった事だ。

さて、戦闘機という機械が、文明を代表するメカであるならば、その速度は発達水準を計る一つの目安とも言える。

簡単な計算をしてみよう。

1944年就役のP-59は最高速度が時速666kmである。その28年後に就役のF-15Aは時速1458km。その差は引算して792km。792÷28≒30。乱暴だが、大気中を飛行する戦闘機の速度が一年間に時速30kmの進歩があったことを基礎として、例えばワシントンUFO事件でレーダー圏外離脱時に計測されたという時速11200kmに到達するまでに何年かかるか、を割算してみると373年間となる。大気中でそんな高速を出すためには空気抵抗の問題を解決するだけでも相当な時間がかかるであろうが、単純に考えて、大気中の時速11200kmの数字を航空技術差373年と仮定して、1972年から遡ると1599年がえられる。アメリカ大陸に植民地が建設されはじめた頃である。日本にはオランダ船が漂着していた。世界には自動車も機関車も飛行機もなかった。そういう時代に超音速ジェット戦闘機が飛来したら…という“格差”理解への提案は、非常に少なく見積もった場合の話

である。実際、UFOの目撃記録は紀元前後からある。その頃、すでにUFOは宇宙航行を完成させていたのだから、我々の文明が月に到達するまで2000年かかったとしたら、既にそれだけの差があることになる、もっと古代に遡れば何万年の差になるか計り知れないのが実際の話ではないだろうか。

宇宙空間、物質、生命、文明と惑星上の基本的な認識からして、UFO側のそれと地球のそれとでは一致しない、説明できないとなれば、地球人発生の起原までが問題となるだろう。ロバート・エメガーも著書の冒頭に述べている「何故われわれは、こんなところにいるのだろうか?」。

■ CIA文書にみる
ワシントンUFO事件の意味■

筆者が本稿に着手したのは1987年である。当時は、おおざっぱな文章を知人に配布したが、3年たって“大河に向かって伸ばされた橋”の対岸から一本の強力な橋が伸びてきて、つじつまが合う瞬間を迎えた。

森脇十九男監修『CIA UFO公式資料集成I』の発刊である。この資料が世に出たことで、「当時」の有様の一部を手にとって見ることができるようになった。

国家は何故UFOを避けるのか。あるいは嫌うのか、その解答の一部があるかも知れない。

■米は世界規模の
UFO情報網をもつ■

1952年3月、「プロジェクト・ブルーブック」主任エド・ルッペルトは、当時の組織についての説明の中で「組織の背後には、全空軍基地の情報将校、世界中のアメリカ空軍レーダー・ステーションと通報ネットワークが控えていた」と述べている。

これは、UFO調査のため、世界中に展開する米軍が情報網で結ばれていた事実を物語り、ルッペルトがワシントンUFO調査に使用するレンタカーの予算も出ないといった“貧しい状況”とは矛盾した、国家規模の対UFO調査体制があった訳で、このことが1952年8月19日のCIA文書にもみることが出来る。

「…空軍は1951年に入っすぐ研究を再開することになった。研究にあたって、世界規模の報告シ

ステムを設置し、各基地に警戒体制をとらせた。」

そして、軍部がもっとも頭を悩ませ、何度も文書で言及しているのが、「識別問題」である。

■「UFOと敵襲の識別は急務」
1952年10月13日付『空飛ぶ円盤について』ではこう述べられている。

「…未確認物体を即座に識別できる装置・方法を開発することが先決である。」「…空飛ぶ円盤が米国の警報システムにどのような影響を与えるか」

「米国の空中警戒システムは完全にレーダーと肉眼による観測に依存している。したがって、ソビエトに空から攻撃をされる可能性がないわけではない。…米軍が攻撃されたとき、「本物の攻撃」かどうかすぐに判断できるだろうか。その答えは■■■■■従って、非常に危険な状態といえる。本物を偽物としてしまったり、あるいはその逆もありうるのである。これは基本的には戦略研究上の問題であるが、現実にはその危険性がある以上、空の脆弱性との絡みで情報問題でもあるのだ。」

「a. 視覚的・電子的現象の2点について識別能力の早急な改善が望まれる。そして攻撃を受けた際には、敵の航空機やミサイルを瞬時に識別できるようにすべきである。」

“識別と判断”“誤認と誤報”“システムの弱点と故障”さまざまな要因が、敵襲核攻撃判断と報復命令の間で揺れ動いている。

1952年から38年を経過し、それまで米ソどちらからも核攻撃はなかったが、誤報や未確認飛行物体による警報は数知れない。しかし、実際問題それらの体験の積み重ねが偶発核戦争を未然に防いでいる訳であり、複雑化したシステムの弱点やそれを扱う人間の弱点を知り尽くした“高次の存在の知恵”により、地球の安全が維持されてきたのである。

文書の言う「空の脆弱性」とは何か?「空」とは無限に開かれており無防備な場所だということか。その思考の根拠にワシントンUFO事件があると言えるだろう。

大衆が臆測や想像でUFOを考えるのと違い、UFO事実を多数抱えている責任はきわめて重い■

グアム基地UFO騒動



——レーダーは
グアム島基地上空
1000フィート(300m)
の低空にUFOを
補足。SACの迎撃
機が目標空域に到
達した時、そこには
何もなかった。

レーダーとUFOの関係史で顕著だった1954年秋の英国でも、これとまったく同じパターンの事件があった。戦闘機は燃料を浪費するのみで成果はなかった。

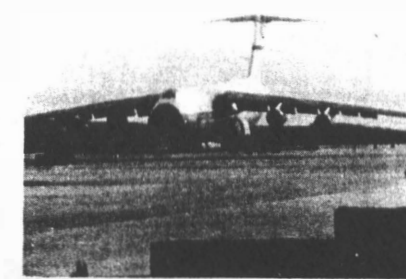
グアム島基地における異変の報告は1966年7月末、同島基地内米戦略空軍指令部第3航空師団から国防総省(ペンタゴン)宛に送られた暗号文に始まる。

グアム島アンダーソン空軍基地は1965年以後のベトナム戦争で、B-52戦略爆撃機の北爆拠点となったが、同機が北爆を開始して4ヶ月後、外宇宙あるいは地球のどこからか来る異常な物体をレーダーに捕捉したという。

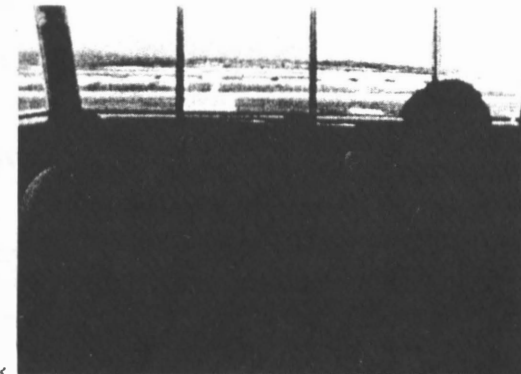
LLOYD MALLANによると、極秘報告書は冒頭に「1965年10月以来グアム島アンダーソン空軍基地FAA(連邦航空局)のレーダーオペレーターは、レーダーのビーコンが未知の確認できない所から跳ね返って来ることに気が付いていた。」とある。

この記録は1966年6月急激となり、SACは事態を警戒。ペンタゴンがUFO報告を受けてから間もなく、科学技術理事会を通じて、研究開発関係の空軍参謀本部副官は、UFO事件調査のため合同運営委員会に特殊エレクトロニクスチームの結成を命令した。

この命令は、1966年7月26日付メッセージNo.83872に記された。チームは半官半民からなる10名の構成員で、空



C-5Aギャラクシー貨物輸送機(354L)



グアム島米空軍基地
管制塔コントロール室

軍科学技術陣の精鋭であった。

この報告書のコピーを、Lloyd Mallanは空軍省官房長官市民課長のジョージフリーマン中佐から入手した。フリーマン中佐はオハイオ州デイトン近郊ライトパターソン空軍基地内UFO調査機関プロジェクト・ブルーブックに関するペンタゴンの公式スポークスマンでもあった。中佐は、レーダー事件の形態と事件総数を削除することで、このコピーNo.5、30ページを外部の者に手渡すことができたという。

ELINT (Electronics intelligence、電子情報収集)の飛行機がMITREコーポレーション(電子工学・防衛分野で空軍に技術協力している非営利団体)、FAA(連邦航空局)、ESD(空軍組織指令部の一部でエレクトロニクス・システム部門)など高度に訓練された専門家で結成された調査団をグアムに運ぶことになった。この合同チームは、No.83872の1966年7月26日付メッセージを受けとってからわずか1日で結成された。同日、調査団はグアムに飛び立つためサンフランシスコ近くのトラヴィス空軍基地に集結。調査団一行が太平洋上を飛んでいる間に、一行が問題の空域を通り、グアムのアンダーソン基地に着くための許可が、即座に太平洋空軍指令官から出された。

グアムでは、一行を迎えるためSAC第3部門戦闘情報部長ハワード・R・シュロダー中佐が待ち受けた。

一行は直ちに仕事にかかった。まず、UFO目撃に関する特殊な技術データを入手したSAC基地のレーダー及び気象専門家と会談した。

次に調査団全員は、実際に薄暗いレーダーコントロールセンターで座席に座り、明るく輝く追跡スクリーンに見入ったのである。

すると何と驚くべし、本物のボーギイが出現したのだ! 「Bogey」とはレーダーオペレーターが未確認飛行物体(UFO)を呼ぶとき使う言葉である。

MITRE/ESDメンバーの一人リアル・ロ

ーランドソンは、「レーダーのIFF(敵味方識別)は既知の飛行機特有の飛行でないと判別した。さらにレーダーの高度判定によると、出現した物体は高度を素早く変える著しい能力を持っていた。物体はステーションの北北東に出現し、北北西に進路を転じるまで、米国本土の方向に向かって進んでいった。物体が方向転換した位置は、レーダーサイトから北方数マイルであった。調査団の報告書はこう述べている。

「速度と高度の変化からみて人工ないしは自然の既知の飛行体ではない。人工衛星の軌道はレーダー反射波の届く範囲内がない」

不思議なことは、グアムの近くでUFOを肉眼で見た者が一人もないという事である。何度となく飛行機がUFOのいる空域に向かって飛んでいったにもかかわらず、目撃はすべてレーダーによるものだった。これらの飛行機はUFOを迎撃すべく、自機装備のレーダー・スコープをにらみながら、刻々と目標に向かって接近。迎撃位置に到達したとき、あるべき筈の目標は見えなかった。迎撃機が目標のいる空域に向かって接近している間にパイロットはレーダースコープに映る見馴れぬ形態のものを凝視していた。それは地上レーダーが補足し測定したUFOの位置とピッタリと一致していた。レーダ



グアム島米空軍基地
FAA(米連邦航空局)
のレーダー室

一面には電磁氣的障害も見られた。

UFOは明らかにグアム島アンダーソン基地北東55法定マイルのロタ島の方から飛んで来たのだった。レーダーに映った航跡ではUFOは東から西へと一直線に飛行している。高度はいつも3万フィート(1万m)かそれ以上だったが、グアムに近づくにつれて急激に高度を下げ、SAC基地上空を通過する頃には実に1000フィート(300m)を下回る低空まで接近した。速度も様々な変化を見せ、250ノットから50ノットまでスローダウンしたかと思うと300ノット以上の高速であつという間にレーダーから姿を消した。

ボーギイあるいはUFOが現れている間、ゲーム周辺の飛行状態はわけのわからぬまま混乱し続けた。UFOは最少17分から長くても51分の間レーダーに映っていた。あるときは25分間で消えたかと思うと再び現れ、レーダーオペレーターを困惑させた。まるで、偵察ついでにアンダーソン空軍基地の電子工学専門家をわざと困らせにやってくるみたいであった。

しかも、更に驚くべき事実は、VHF（超短波）で質問したときUFOの何機かが返答してきたことである。その返答も想像を絶するやり方で答えてきた。

民間機、軍用機を問わず太平洋地域における米国の航空機はSIF／IFF無線装置を備えることを義務付けられている。これは電子暗号発信とその解読部分の組合せから成り、地上基地の同種の装置に連動してお互いを確認し合う装置である。

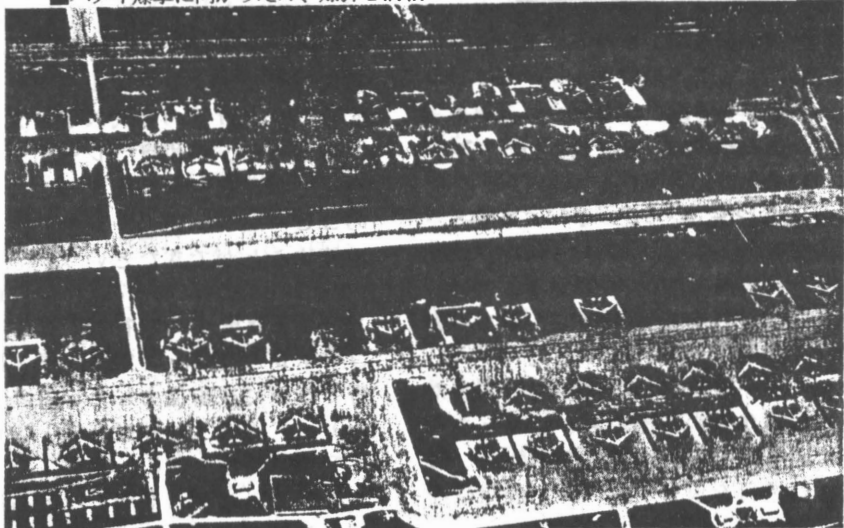
S I F / I F F とは Selective Identification Feature / Identification Friend or Foe (特徴選択識別／敵味方確認) の略語である。

民間機と同じく軍用機の第3様式の電子暗号は毎日変えられており、機密になっている。暗号の設定は計数化された形で出されるから0から2までのあらゆる数の組合せが作られる。例えば、202, 102, 021, 02, 20, 10, 01 などである。

一口に言うと、ゲーム上空のUFOに向かって第3様式コード21で質問したとき、UFOは第1様式のコード01で返答してきた、という事だ。UFOの乗員が空軍の電子工学専門家をからかってやろうとしたのなら、笑って済ませたいところだが、そうはいかない。これは実に大変な出来事であるからなのである。



■ハノイ爆撃に向かうため、爆弾を満載してアンダーソン基地を離陸するB-52



■グアム基地ランブに駐機する155機のB-52の一部。

調査団はこの難問を 解くために、ただただ一生懸命に努力する以外なかった。航空路図でＵＦＯの飛行航跡をたどったり、問題の空域での既知の飛行機との相関関係を探ってみたりした。飛行機が進路を勝手に変更したという事実はなかった。調査団は、ＵＦＯ出現に伴う電磁気障害の原因になりそうなものを一つ一つ消去していった。

調査団の結論として、UFOは外宇宙からの訪問者か、それとも水平線の彼方からのレーダーエコーのどちらかだ、ということになった。

マイクロウェーブを使っているレーダーのパルスは光線と全く同じ様に直進する。丘や建物に遮られるとストップして、地（水）平線の向こう側からカーブして伝わってくることはない。即ちレーダーのエコーが遠か水平線の彼方から、カーブしてきてグアムのレーダーにとらえられることは有り得ない。調査団が出した結論のには無理があつた。

1966年8月8日、調査団がグアムに着いてから6日目に、彼らは自分たちの出した理論を実証するテストを行なうことにした。「理論」とは、“UFOは外宇宙から来たのではなく、最も

考えられる事として、地域レーダーの範囲を越えた空域を飛ぶ飛行機の映像（イメージ）である。”という説である。

実験が失敗したら、「UFOの外宇宙説」を否応でも受入れねばならず、そうすると米国戦略防衛体制の存在価値を問われかねない甚大な影響を及ぼす恐れがある。

テストは、巨大なC-141 スターリフタージェット輸送機が、ウェーク(Wake) 島からフィリピンのアンヘレス(Angels) 近くのクラーク空軍基地へ飛行することで行なわれた。軍用機はすべて3方式のコードS I D / I D F 装置を備えている。(民間機は第3様式の1つだけ)

テストが開始された。グアムのレーダー圏外をC-141は高度3万5千フィート、グアム北方250カイリの空を飛行した。

C-141 はグアムのレーダーには映らなかった。――が、一機のUFOがロタ(Rota)島付近から飛んで来るのがキャッチされた。そこで基地が、UFOに向けてS I F / I F F 第3様式コード21で問いかけると、UFOは第1様式コード01で返答してきた。次に



グーグル圏外に送受信できる無線でC
に向け第3様式コード21で質問
みた。すると返答は同じ様式、同
コードナンバーであった。

今度はC-141のパイロットに自機のすべてのS I F / I F F装置のスイッチを切るよう命じた。すると、U F Oがレーダースコープに映っているにもかかわらず、U F Oに質問しても何の応答もなかった。パイロットが装置にスイッチを入れるように命じられた時、件のU F Oは又も素早く第1様式コード01の信号で、第3様式コード21に対して答えた。無論、C-141はこの2つの様式とコードを持っていたが事態が解決された訳ではなかった。

明らかにした事と言えば、グアムから遠く離れた飛行機内にある装置にグアムから無電で質問したことに対し横取りしてUFOが答えたという事実である。

アンダーソン空軍基地に着いてから丁度2週間目の8月16日までに、調査団はグアム島UFOの謎にケリを付けた。未確認飛行物体は、レーダーの境界外を飛行する飛行機である、ということだ。

メッセージNo01046 がSAC第3空軍部からワシントンに送られ、UFO事件で震え上がっていたペンタゴンはホッと胸をなでおろした。

調査団はいかにしてUFOを飛行機なりと断定したのか。調査団の解釈は次の通りである。

—— 気象物理学で、温度変化に伴って、大気の一部が、何マイルも離れた地平線を越え地上の或る地点から別の地点へ届く光線を“曲げる”役割を果たす巨大なレンズとなることがある。砂漠のしん気様はこの原理による。レーダー波は光線と同じ様に伝わるから、レンズで集光ならぬ“集波”される。このレンズは、ガラスや電線で作られるか、大気中の荷電物質で作られるかの違いだけである。問題は“2次反射波”にある。簡単に言うと、これはレーダーから最初に送信されたエネルギーパルスが、受信されたステーションから遅れて戻ってくることである。第

1 のパルスが送られ、第2のパルスが送られてから第1波の反射波が戻ってくる。従って最初のパルス反射と次のパルスとは混同されることがある。レーダースコープは、第1パルスを第2パルス反射波の様に映してしまう。この誤りによって、ボーギィあるいはUFOが実際の位置より近い位置にあるかのようにレーダーシステムは計算してしまう。距離はレーダーからパルスが発信され、それが反射して戻ってく

1988, 7, 3 イラン旅客機誤認撃墜事件にみるレーダーの識別能力問題

米識別信号の発信を認める
 軍・民間機用の2系統
 米識別信号の発信を認める。米軍機と民間機とを識別する。米軍機は、米軍機用の識別信号を発信する。民間機は、民間機用の識別信号を発信する。米軍機と民間機とを識別する。米軍機は、米軍機用の識別信号を発信する。民間機は、民間機用の識別信号を発信する。

誤認撃墜

[illegible]

SAUCERS RIGHT IN SAC'S BACKYARD

BY LLOYD MALLAN

Radar had them tracked as low as 1,000 feet over the Guam base—but when specially assigned SAC aircraft arrived at the intercept location, no target was there...

For over 20 YEARS now, intelligence personnel of the U.S. Air Force have been investigating sightings of unidentified flying objects. Their official UFO project—called Project Blue Book—has taken in stride even the most weird reports of "flying saucer" sightings.

Little green men, white-garbed humanoids and other strange crewmen allegedly seen clambering out of space ships from another world have been established as hoaxes or hallucinations—with delusions on the part of the witnesses.

Roughly 11,000 cases of UFO sightings are in the automated files at Headquarters, Project Blue Book. All except 600-odd of these cases have been satisfactorily identified as a misinterpretation of natural phenomena or of man-made devices. Not one of those cases—including the minority of those still unidentified—has ever even faintly suggested that the security of the United States was being threatened by creatures from outer space.

This has been scientifically proved time and again. In a phrase, because of their long experience with the subject, intelligence investigations of the Air Force are not apt to get excited when a new UFO is reported.

But last year, toward the end of July, the situation abruptly and radically changed. A coded message expressing great con-

cern about UFOs was sent to the Pentagon from headquarters of the Strategic Air Command's Third Air Division, based on the Pacific Island of Guam. The big SAC air base on Guam would most certainly be an object of unusual strategic interest to enemy of the United States—whether he came from outer space or from somewhere else on Earth. For since June 1965 Andersen Air Force Base on that island had become the staging area for giant B-52 jet Stratofortresses to bomb Vietnam.

Only four months after the Stratofortresses began to bombard Vietnam, unidentified flying objects started to appear on the radarscopes at Guam. The opening sentence of a Secretfinal report on the Guam UFOs states: "Since October 1965, FAA (Federal Aviation Agency) radar operations at Andersen AFB, Guam had noticed radar beacon returns which had no known or identifiable source."

The radar sightings of unidentified objects in flight near the big air base on Guam increased progressively until a very large increase was noted during June of last year. At this point the Strategic Air Command became more than seriously concerned—and alarmed with the situation.

Shortly after the SAC message of concern was received in the Pentagon, the Air Force Deputy Chief of Staff for Research and

Development through his Directorate of Science and Technology ordered an already existing Joint Steering Committee to form an Ad Hoc (special) Electronics Team for the investigation of the Guam UFOs. The order was contained in Message Number 88872, dated 26 July 1966. It involved 10 men, both military and civilian, who were among the cream of Air Force specialists in science and technology.

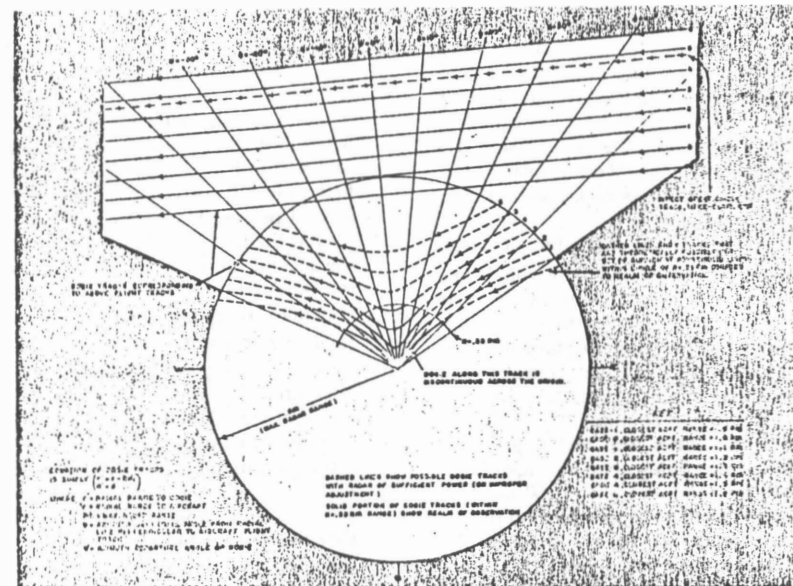
A report of their findings was classified "Secret" until very recently,

when a copy of it was given to me by Lt. Colonel George Freeman, Chief of the Civil Branch, Community Relations Division (Information) in the Office of the Secretary of the Air Force. Colonel Freeman is also the official Pentagon spokesman for Project Blue Book, which is located far from the nation's capital, at Wright-Patterson Air Force Base near Dayton, Ohio. He told me that he was able to place the report in my hands because he had deleted two short sections containing special technical information about the type and amount of radar equipment involved. My copy of the report is marked "Copy 5 of 30 copies."

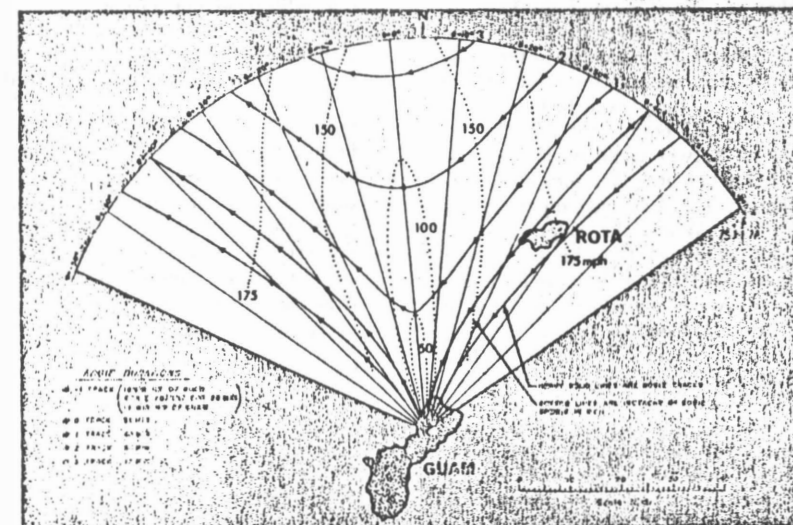
The report reads like a spy thriller. At the time of its inception nobody could be sure that the United States, perhaps the world, was not about to be attacked by unknown alien forces from the sky or space. And that "nobody" was a very small minority of experts in various fields of science, technology and electronics intelligence. The rest of the American population was blissfully unaware of what was happening in the critical airspace surrounding Guam.

In fact, the team of expert investigators finally chosen for the secret mission to solve the mystery at Guam requested in advance that Elint Aircraft be standing by when they arrived there. "Elint" is a contraction of the phrase "Electronic Intelligence."

But no spy thriller was ever written in the language of this one. Unless you are familiar with Pentagonese and the jargon of radar electronics, you would think that you were reading a cryptogram. For example, the Committee that set up the Ad Hoc Electronics Team is called the "Joint AWS-CRL-ESD-SSD Steering Committee," which translated into everyday English means that the Committee was composed of the Vice Commander, Air Weather Service (AWS); the Vice Commander of the Cambridge Research Laboratories (CRL), which is a part of the Air Force Office of Aerospace Research; the Director of Sensors, Electronic Systems Division (ESD), a part of the Air Force Systems Command; and the Deputy for Technology of the Space Systems Division (SSD), also under the Systems Command.



When the radar sightings of unidentified objects in flight near the big air base in Guam increased, the Strategic Air Command became worried. They notified the Pentagon and a massive investigation was under way. A special team went to work, conferring with radar and weather specialists on Guam.



The special Task Force team drew up various charts based on the sighting reports and set down in darkened radar control centers to watch the luminous tracking screens. The objects generally appeared North Northeast of the station and proceeded inbound. Then they changed direction toward North Northwest.

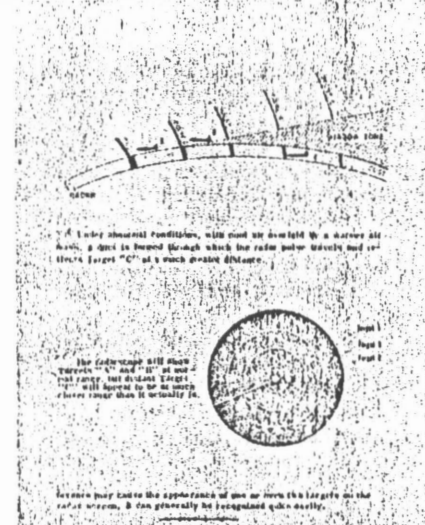
Additionally, the Ad Hoc Team to investigate the Guam UFOs was supplemented by highly skilled specialists from RADC (Rome Air Development Center at Rome, N.Y., which develops advanced radar system), FAA (the Federal Aviation Agency) and the MITRE Corporation, a non-profit organization that acts as scientific and technical advisor to the Air Force in matters pertaining to electronics, among other fields of interest to national defense.

Indicative of the seriousness of the situation was the speed with which action was taken by the Steering Committee. The task-force team was formed within one day after Message Number 83872 was received by the committee members. That same day, the team was flown by jet to Travis Air Force Base, near San Francisco, to pick up a flight to Guam. Even as they were flying over the Pacific, clearance was granted by the Commander-in-Chief, Pacific Air Force, for the team to enter the Theatre of

Operations and land at Andersen Air Force Base, Guam. Waiting to greet them as they arrived was Lt. Colonel Howard R. Schroeder, Chief of the Combat Intelligence Division at SAC's Third Air Division. Colonel Schroeder was assigned to the team as their direct contact with Headquarters. Time was not to be wasted by red-tape complications.

The Team went to work without delay. After conferring with radar and weather specialists at the strategic air base to obtain specific technical data on the UFO sightings, they sat down in the darkened radar control center to watch the luminous tracking screens. A short time later they saw their first bogey. "Bogey" is radar-operator jargon for an unidentified flying object.

In the words of Lyall Rowlandson, a MITRE/ESD member of the Team: "The radar IFF (Identification-Friend-or-Foe) return was not peculiar to known traffic and, in addition, radar height-finder returns in-



This Air Force chart shows how under abnormal weather conditions readings of various targets can be misread by radar.

indicated the apparent object had remarkable ability to quickly change its altitude. The object generally appeared North Northeast of the station and proceeded inbound until it changed direction toward the North Northwest. Its turning point varied from over the (radar) site to several miles North of the site."

This flight-pattern was almost classical with certain types of UFOs sighted in various parts of the United States and in other regions of the world. As the final report of the Team's investigation stated: "The speed and altitude variations did not fit any known aircraft, manned or unmanned. No known (man-made) satellites have orbits compatible with the existing (radar) echo locations."

Even more strange was the fact that no one had ever visually sighted a UFO near Guam. All sightings were by radar, although on a number of occasions aircraft had been vectored to the UFO locations. These aircraft had attempted to intercept the unknown objects and had used their own airborne radar to close in on the targets. When they arrived at the intercept location no target was visible. Yet as they approached that location, they observed an unusual configuration on their radarscopes that seemed to coincide with the UFO position as determined by ground-based radar. They also experienced electronic interference on their scopes.

The UFOs apparently came from the direction of Rota Island, some 55 statute miles Northeast of Andersen Air Force Base on Guam. They flew a straight track from East to West, according to the trails displayed by the radar sets, and usually appeared at an altitude of 30,000 feet or higher. They descended rapidly as they approached Guam, until they were recorded at less than 1,000 feet as they passed by or over the SAC base. Their speed also varied radically, slowing down from about 250 knots to 50 knots and then speeding up to 300 knots or faster as they dashed away out of sight of the radars.

Duration of the bogeys or UFOs, in flight around Guam was also perplexing—and disturbing. They remained within range of the radars for from 17 minutes to 51 minutes. Sometimes one would disappear for as long as 25 minutes—and return again to harass the radar operators. It was as if they were consciously carrying out a reconnaissance mission and trying at the same time to confuse the electronics experts at Andersen Air Force Base.

Probably the most eerie effect of the UFOs was that some of them answered when they were interrogated by VHF (Very High Frequency) radio. Their answers, however, were far from conventional.

All aircraft operating in the Pacific area, both civil and military, are required to carry SIF/IFF radio equipment. This is equipment with electronic coders and decoders which in conjunction with similar ground-based equipment can be interrogated and respond automatically to identify themselves. SIF/IFF is an acronym that means "Selective Identification Feature/Identification - Friend - or - Foe."

The Mode 3 electronic codes for military as well as civil aircraft are changed daily and are classified Secret. Since the code settings are presented in digital form, they may be any combination of whole numbers from zero to 2. Examples: 201, 102, 021, 02, 20, 10, 01.

Putting it more simply, when a Guam UFO was interrogated at a Mode 3, Code 21 setting, the answer came back in Mode 1, Code 01. If the UFO crews were trying to joke with the Air Force electronic experts, they were inspiring more puzzlement than laughter.

The Ad Hoc Electronics Team members only worked that much harder to solve the puzzle. They plotted the strange tracks of the UFOs on navigation charts and tried to correlate the UFO tracks with conventional known flights of aircraft in the area. The two tracks never jibed. Studying all possible clues with the fervor of a Sherlock Holmes, they eliminated one after another as a possible cause of electronic disturbances that might be related to the appearance of UFOs. They finally decided that the only answer possible must be either visitors from outer space—or radar echoes from beyond the horizon.

Radar operates at microwave frequencies, which means that a radar pulse travels in identically the same way as a ray of light. It is stopped by hills and buildings and cannot bend itself over the horizon to see what is on the other side. So how could radar echoes come within range of the Guam radar sets from a distance greater than the horizon? That was the question the Team set out to answer.

On August 8 of 1966, six days after they arrived on Guam, the Team prepared a test for their theory that the

UFOs were not from outer space but more plausibly (if impossibly) were images of aircraft flying far beyond the range of the local radars. If their test had failed, they would certainly have to accept the outer-space hypothesis—which would place our strategic defenses in a rather uncertain position.

A huge C-141 Starlifter jet cargo plane was scheduled to fly from Wake Island to Clark Air Force Base, near the town of Angeles in the Philippines. As with all military aircraft, it carried SIF/IFF equipment coded in three modes (civil aircraft carry only Mode-3 equipment) for identification. When the test began, the C-141 was flying at an altitude of 35,000 feet and was about 250 nautical miles North of Guam—beyond the radar horizon. It did not show on the Guam radar screens—but a UFO coming from nearby Rota Island did show.

The UFO was interrogated by SIF/IFF Mode 3, Code 21. It answered in Mode 1, Code 01. By radio, of a type that can travel beyond the horizon, the C-141 was interrogated by Mode 3, Code 21. It responded in the same mode and code. The pilot of the C-141 was then asked to turn off all his SIF/IFF equipment. After he did so, no answer came back from the UFO when it was interrogated, although it still showed on the radar screens. When the pilot was requested to switch on his equipment again, the UFO again became visible and answered a Mode 3, Code 21 with a Mode 1, Code 01 signal.

The C-141 Starlifter, of course, had both modes and codes in operation. The situation was still a puzzle, but it was evident that the UFOs were answering interrogations by radio from Guam with equipment carried aboard aircraft far away from Guam.

By August 16, exactly two weeks after the electronics task force had landed at Andersen Air Force Base, they had definitely solved the mystery of the Guam UFOs. The unidentified objects with their strange maneuvers were identified positively as aircraft flying far beyond the horizon. Message Number 01046 was sent to the Air Force Deputy Chief of Staff for Research and Development in Washington by SAC's Third Air Division. The Pentagon quieted down from its shakeup over the UFOs.

But how could the Electronics Team members be so positive of their UFO identification? It was a simple matter of atmospheric physics: with certain temperature variations, portions of the atmosphere act as giant invisible lenses that can "bend" light rays from one part of the Earth to another, over many miles and across horizons. In fact, this is what causes mirages over the deserts. Since radar waves act the same as light rays, they can be focused in the same way by lenses—whether these be made of glass, wire or electrified portions of the atmosphere.

The mystery was basically caused by "second-trip echoes." This means,

as simply as I can state it, that the radar energy-pulses which were first transmitted were delayed in their return to the station that sent them. They were reflected back to the radar set after it had already sent out a second series of pulses. So the returning first pulses were confused with the second pulses. The radar-scope displayed the first pulses as if they were the second pulses returning. This error automatically caused the radar system to compute the distance of the bogeys (or UFOs) as being closer than they really were. Distances are computed by radar equipment in terms of the time it takes one series of pulses to travel to an object and return to the radar set. Naturally, the first pulses—being mistaken for the second series—would make it appear that the second pulses had returned much sooner than they would normally.

It was also this phenomenon of second-trip echoes that caused the Mode 3 code-interrogation to be answered in the Mode 1 decoding channel at the radio receiving station.

Certainly I have oversimplified the explanation, for the subject is extremely abstruse and technical. But it is a tribute to Air Force scientific teamwork that an explanation was found. The sharp increase in the number of UFO sightings at Guam in June of 1966—an increase that inspired the investigation—was directly the result of a sharp increase in cargo aircraft carrying supplies to Southeast Asia. Yet this was completely unsuspected at the time.

After all, the Guam UFOs may have been real—and little green men or white-robed humanoids may have been preparing to take over the human race.

The Pentagon itself was shaken up enough at least to believe that the security of the United States was possibly being threatened.

It's good to know they are not the scoffers about an attack from outer space that many UFO "buffs" would have us believe.

●本稿の訳者O氏は、訳後20年たった今、本事件についてこう述べている。

「SAC上空300mをわずか飛んでいるのに、レーダーに映っても肉眼で見えなかった事実実は英国上空における「U=Z」事件と似ている。

さらに、SAC側とUFOとのコードNo.のやりとりが興味深い。先ず眼には見えずレーダーに映り、2度目はSAC側のコードをすべて読み取り、逆にからかっているようなゆとりを示している。」

「たぶん彼らUFOは「我々は、あくまで科学的な存在であり、客観的な実在である。万人に目撃されるようにも出現できるし、電子機器のみにも応答できる存在である。ある人に見えて、ある人に見えないというのではない。そのために、姿こそ見せないようにしたが、諸君の科学の粋を集約して作成したレーダーにはっきりと姿を現わし、又、応答しているではないか」の意志表示に思える」

1991年1月10日付け書簡より■

Mystery Planes Over Vietnam

By BEVERLY DEEPE

Herald Tribune News Service

SAIGON—American pilots are disturbed by a number of mysterious aircraft flying into South Vietnam over the Cambodian border.

One American pilot reported a Russian-built plane, similar in configuration to the American DC-3, repeatedly slipped across the Cambodian border into South Vietnam, presumably to gather aerial intelligence.

He said the plane was equipped with electronic counter-detection devices, which permitted it to evade United States Air Force F-102 Delta Dagger jet interceptors carrying air-to-air missiles.

The pilot said American F-102s, based at Saigon's Tan Son Nhut airport, were scrambled several times a day in attempts to intercept the mysterious plane, and American-operated radar screens consistently picked up the plane at the border.

THE NATIONALITY of the pilots is unknown, and no incidents have been reported.

American advisers in special forces camps along the ill-defined Cambodian-Laotian-South Vietnamese border said they have picked up radio transmissions in Russian.

Another American pilot reported that on a heavily overcast day in August when all American aircraft had been grounded, an unidentified plane flew at 500 feet over airport at Pleiku, 225 miles north of Saigon, and forty miles from Cambodia. Two Americans—an Army captain and an Air Force radar specialist who saw the plane—said it was not American made.

AN INTELLIGENCE report about the incident was rejected by higher headquarters, which identified the plane as an American RF-101 voodoo reconnaissance jet.

However, the American Air Force radar specialist who had worked closely with Voodoo jet in previous years, rejected the decision of the higher headquarters and said that the plane was not a Voodoo jet.

In another example a third American pilot said an unidentified aircraft had flown over the Dan Nang air base at a very low altitude, thus avoiding detection on radar screens, but this could not be confirmed.

During the battle of Pleiku a fourth American pilot claimed he saw a "giant swept-wing bird" which did not fit the design of American aircraft.

A FIFTH American pilot said he recently reported to the control tower that a plane flew into South Vietnam from Cambodia. He explained.

"The tower told me it was all right, that it was the Pan American (commercial) flight coming in from Cambodia. Then suddenly it made a 90-degree turn and darted back across the border. We call these spooky flights the "Phnom Penh Special" ... Phnom Penh is the capital of Cambodia.

American navigators are also disturbed by sophisticated equipment used to jam their radars, to intercept radio transmissions, and to give deliberately inaccurate flight instructions "so we will crash into a mountain."

ONE AMERICAN navigator explained. We know there's a little boat outside of Da Nang that has very good equipment on it, and the people operating it speak perfect English. You can't tell them from an American in the control tower.

"They give us flight information, vector us in just like the control tower. the—pow! You've crashed into a mountain.

We've had several crashes in Dan Nang because of that. Also, on flights from South Vietnam to Okinawa our radio transmissions are always jammed there's a real electronic war going on here"

San Francisco Sunday Examiner & Chronicle Nov. 7, 1965
資料提供：島田隆雄

ベトナム戦争上空の
未確認飛行物体...

「ヘリ」か「UFO」か、「警告」か「介入」か?

◆当時のUFO学徒達が語る見解◆

ベトナム戦争末期の1968年から3年後の1971年当時、ベトナム戦争上空に現れて米軍を混乱させた「謎のヘリコプター」とは、UFOでなかったか?との議論が、東京芝浦工業大学の岡村亮氏や加盟の学生遠藤修氏より提起されていた。筆者はこれら先駆者の膨大な資料による議論を聞く立場であったが、彼らの説を慶応大学UFO研究会が三田祭で行なったUFO展示やスライド映写に際して発行したパンフレットに海外資料翻訳資料を加えて紹介した。

当時、大学連合UFO研究会の会長を勤めていた岡村亮氏によると、北ベトナムのものとみられる謎のヘリコプターが出現し、それに向かってファントム戦闘機からスバロ空対空ミサイルが発射されたものが、「目標消失」によって目標を失ったミサイルが味方であるオーストラリアの駆逐艦ホバートに命中したのは、「ヘリ」とみられたものが、実はUFOであり、UFOによるミサイル回避にミサイルの追尾が追いつかなかったために起こったのではなかったか、との見解であった。これを図にしてみたのが左である。

これら戦場のUFO活動については、日本のUFO学徒ばかりではなく、次に紹介するように広く海外でも論じられている。

ベトナム戦争末期の1968年から3年後の1971年当時、ベトナム戦争上空に現れて米軍を混乱させた「謎のヘリコプター」とは、UFOでなかったか?との議論が、東京芝浦工業大学の岡村亮氏や加盟の学生遠藤修氏より提起されていた。筆者はこれら先駆者の膨大な資料による議論を聞く立場であったが、彼らの説を慶応大学UFO研究会が三田祭で行なったUFO展示やスライド映写に際して発行したパンフレットに海外資料翻訳資料を加えて紹介した。

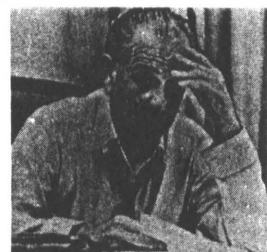
当時、大学連合UFO研究会の会長を勤めていた岡村亮氏によると、北ベトナムのものとみられる謎のヘリコプターが出現し、それに向かってファントム戦闘機からスバロ空対空ミサイルが発射されたものが、「目標消失」によって目標を失ったミサイルが味方であるオーストラリアの駆逐艦ホバートに命中したのは、「ヘリ」とみられたものが、実はUFOであり、UFOによるミサイル回避にミサイルの追尾が追いつかなかったために起こったのではなかったか、との見解であった。これを図にしてみたのが左である。

これら戦場のUFO活動については、日本のUFO学徒ばかりではなく、次に紹介するように広く海外でも論じられている。



■ベトナム上空の「機密」

米国国防総省秘密報告書によれば、ベトナムにおける米国の軍事努力は1965年から1966年後半までたゆむことなく続けられた。1967年春、米南ベトナム援助軍指令官ウェストモランド將軍は北ベトナム大部隊の脅威を封じ込め戦術的主導権を維持するための2個3分の1師団(10万人)から4個3分の2師団(20万人)増派の要請を統合参謀本部に送ったためジョンソン政権内部に激しい論争を巻き起こした。將軍はこの師団追加がなければ「敗北の危機に瀕しないまでも敵の兵力補強に対抗できるかどうか五分五分であろう」とし、「この戦争は、作用と反作用である。我々が何らかの作用を加えれば、いつでもそれに対する反作用があることを予想している。」と1967年4月27日大統領との討議に答えた。これに対しジョンソン大統領は「我々が師団を



苦悩するジョンソン米大統領

追加すれば、敵だって師団を追加するのではない。そうだとすれば、一体どこで終わるのか、きりが無い」と述べた。これは米ソ核戦略の問題の討議ではない。南北に細長いベトナムに米国の兵力を投入する事での話合いの正式覚書記録である。

このような米国国情を背景に、UFOの噂がベトナム戦争の加害者と指摘された米国に広まっていった。事件は南ベトナム駐在の米軍要員の目撃で、軍の安全を保つためと称し内容はすべて「機密」扱いされていた。

この事は戦争というものの見地から

北爆の米軍を混乱させた未確認飛行物体

判断すれば、驚くには当たらない。もし、UFOが敵国ないしその同盟国の兵器であると仮定した場合、UFO目撃事件を公にする事はとりもなおさずその「兵器」の性能・効率に関する情報をみすみす相手方に通牒する結果になる。ましてUFOが正体不明の物体なら、公表することによって生じる利益より、混乱の度合の方が大きいと判断された場合、うやむやのまま闇から闇へと葬られる可能性が多い。

しかし、1967年に南ベトナムで発生した次の3つのUFO目撃は一度「機密」指定されたがどういふ訳か「軍事的に意味なし」として「機密」から外された。が、一般に公表された訳ではなく、或る特別なルートを通じて情報が流れた。

第1の事件はTo-Chou 上空で、3人の軍関係者が2機のUFOを目撃したもので、目撃者の一人ジェームス・G・リングランド軍曹が米軍情報部に報告書を提出した。以下はその全文である。

「1967年5月5日、21時23分、私は下記の如き現象を目撃した。——保安点検を終えTo-Chou にある宿舎に着いてから、建物の西側にあるドアの近くまで歩いた時、天頂285度(コンパスでチェックした)付近の空をオレンジ色の光体が上昇していくのを発見した。私は椅子に座って光体を見つめていた。しばらくしてから、すでに床に着いていたバーデッシュ軍曹に見るよう呼び掛けた。バーデッシュ軍曹は床の中で光体を見ていたが、起き上がってドアの所にいる私の側に来て言った。

「あの光体は高度1万から1万5千フィートのあたりを飛んでいる。」ピークにさしかかった時、光体は左の方へ動き出した。左方へ大分移動したとおもわれた頃、——距離はどのくらいであったか一寸判りかねるが——チラチラと明滅したようだった。光がかすかになり、やがてまた元の明るさに戻

った。しばらくまたたいてから、円を描きながら上昇したかと思うと、上昇時と同じ経路を一直線に下降した。下降を始めると、右方手の幅位の間隔の位置にもう一つの光体が出現した。

最初の光体が4分の1から2分の1ほど降下した時、爆発したように見えた。やがて光体は、下に向かって飛鳥のように降りてきた。

カルソニー等軍曹は丁度最初の光体が下降を始める頃、宿舎に着いたのでバーデッシュ軍曹が第2の光体の進路に注意している間に、カルソンと私は第1の光体を見つめていた。第1の光体が近付くにつれ、パラシュート型の炎になるように見えた。

バンカー(地下掩蔽壕)の上空10フィートのあたりを通過した時、直径1フィート長さ3フィート位のナイロンかプラスチックのような円筒がはっきり見えた。円筒の最後尾部分が発光の源であった。

我々は光体が宿舎の後に姿を消すまで見守っていた。光体は観測に使っていたペリメーター(視野計)の外側を飛行している様だったが、東側にあるキャンプの棟より高くはなかった。

最初の光体を見失ってから、ドアの所に戻って、第2の光体に目を向けた。第2の光体は、初めの光体と全く同じ動きを見せたが、違っていたのは5回ないし6回、別な発光体を発射し、右方へ飛行したことであった。

発射された発光体は非常に弱い光だった。間もなく全部消失してしまった。第2の光体は北北東に飛行し、キャンプの北側にある山の上へと飛んで行った。2つの光体の飛行時間は(観測開始から終了まで)30分間であった。発射された8個の発光体は上昇と同じルートで下降した。強い西風の如く。よく晴れた晩であった。——」

陳述書にはSFCのジェームス・G・リングランド3世が署名した。

後日、この陳述書を批評した情報将

校は次のように附記している。「物体については報告書に述べられてある以上のことは分からない」

第2の事件：これより18日前、サイゴン上空で一群のUFOが目撃されていた。目撃者は一人であるが、第524軍情報部付属の身元のはっきりした熟練したスタッフの一人である。

ロバート・M・ハーキンソン4等特技兵。彼自身直接語ったところによると、次の通りである。

「1967年4月17日午前2時20分頃、私は5個の大きな輝く楕円形の物体が密集した隊形をとり超高速で空を横断するのを目撃した。当時、私はサイゴンの〇〇〇〇にある(住所は軍の安全を保つため公表できない)第524軍情報分遣隊のサイゴン野戦事務所の屋上に上がっていた。

初め、一連の物体は左側の地平線近くで発見した。時間にして少なくとも5秒間見つめていた、と思う。見てみると物体は最初に発見した位置、つまり左側の地平線の近くから飛行して右側の地平線にある一群の雲の後ろに隠れて見えなくなった。

空には所々雲がかかっていたが、物体が飛行した当りはちぎれ雲がかかっているのを除いて晴れていた。物体は雲の後ろを通過している間はぼんやりとしていて反対側から出てくるまでよく見えなかった。また、私の視線にある星の間を通過するまで星の光を遮った。このことで物体が不透明であることが判った。物体は、大きさ、形状、速度や何の音も発しなかったことからして、通常の航空機でないことは判る。この物体を目撃する以前、アロペラ機やジェット機など様々なタイプの航空機を見て知っているが、物体はどんな航空機よりもはるかに巨大であったことは疑う余地がない。

物体の推定速度はジェット機の5倍以上であった。詳しく描写するには物体の位置が余りにも遠方であったし、途方も無い速度だったので一寸無理である。

物体は明瞭な楕円形で落ち着いた白色光で輝いていた。また、地平線に対し垂直の一にあったと思う。飛行の途中で、編隊はくずれていった。

物体が見えなくなってから、5分位して数機のジェット機はるか右の方から現れた。そして、件の物体群の出現した位置に向かって、高高度を猛スピードで飛行していったが、すぐ反転するや今度は物体が消失した付近に向

けて、物体が飛行したのと同じコースを飛んで行った。ジェット機は編隊を組んでおらずバラバラであった。何機飛んでいたかはよく分からなかったが、数機いたことは確かだ。

私は未確認飛行物体(UFO)について、これと言った見解は持ち合わせていなかった。しかしながら、あの物体は光の反射や通常の航空機、あるいは流星や星などでないことは断言できる。ある種の宇宙空間航行機であると思う。——」SP4のロバート・M・ハーキンソンは最後の行でこのように強調している。

第3の事件：1967年月日は不明。ダナンから約30カイリの距離のところで、海軍のジェット戦闘機パイロットがUFOを目撃した。

彼は高度15000フィート、240度の空中で周辺が輝く円盤型の物体を発見した。物体はジェット機に向かって直進してきたので衝突すると思い、とっさに回避動作をとろうとした。ところが操作する直前、円盤はいきなり方向を変え、彼の機と平行の位置に来て飛行し始めたかと思うと姿を消してしま

謎の「ヘリ群」米軍に介入

翌1968年、ベトナム戦線上空のUFO出現は6月になって連日のように報道され始めた。「大量の物資を消耗しながら勝利する」筈だった米軍の「兵器消耗」は、1971年11月『ニューヨークタイムズ』報道によると620万トンの爆弾(第2次世界大戦で米軍が日本に投下した爆弾総量16万トン、参戦国の投下総量300万トンと比較するとその凄さが分かる)が、あの狭い国土に投下されたといわれる。

一説によるとベトナム戦で米軍を混乱させたUFOとは、米軍が実験した最新兵器だと言うが、自分達の投入した兵器によって逆に線場が混乱し、敗北の原因となったという理窟はどう考えてもおかしい。以下、その報道ぶりを見てみよう。

1968年6月17日サイゴン発AP：サイゴンの米軍司令部は17日、非武装地帯近くで先週末に「敵のものとみられるヘリコプター」に対し、米軍艦艇と米軍機が砲火を浴びせた、と発表した。発表はさらに「非武装地帯の東端およびベンハイ川北方地区で、未確認飛行物体を捕らえたとの報告を受けたが、夜のため目で確認することは出来なかった」と述べ、17日に米軍側の攻撃に



米軍ミサイルの誤射

米軍司令部は、17日、非武装地帯の東端およびベンハイ川北方地区で、未確認飛行物体を捕らえたとの報告を受けたが、夜のため目で確認することは出来なかった」と述べ、17日に米軍側の攻撃に

また北のヘリ群

米軍司令部は、17日、非武装地帯の東端およびベンハイ川北方地区で、未確認飛行物体を捕らえたとの報告を受けたが、夜のため目で確認することは出来なかった」と述べ、17日に米軍側の攻撃に



米軍司令部は、17日、非武装地帯の東端およびベンハイ川北方地区で、未確認飛行物体を捕らえたとの報告を受けたが、夜のため目で確認することは出来なかった」と述べ、17日に米軍側の攻撃に

米軍司令部は、17日、非武装地帯の東端およびベンハイ川北方地区で、未確認飛行物体を捕らえたとの報告を受けたが、夜のため目で確認することは出来なかった」と述べ、17日に米軍側の攻撃に

米軍司令部は、17日、非武装地帯の東端およびベンハイ川北方地区で、未確認飛行物体を捕らえたとの報告を受けたが、夜のため目で確認することは出来なかった」と述べ、17日に米軍側の攻撃に

米軍司令部は、17日、非武装地帯の東端およびベンハイ川北方地区で、未確認飛行物体を捕らえたとの報告を受けたが、夜のため目で確認することは出来なかった」と述べ、17日に米軍側の攻撃に

米軍司令部は、17日、非武装地帯の東端およびベンハイ川北方地区で、未確認飛行物体を捕らえたとの報告を受けたが、夜のため目で確認することは出来なかった」と述べ、17日に米軍側の攻撃に

米軍司令部は、17日、非武装地帯の東端およびベンハイ川北方地区で、未確認飛行物体を捕らえたとの報告を受けたが、夜のため目で確認することは出来なかった」と述べ、17日に米軍側の攻撃に

米軍司令部は、17日、非武装地帯の東端およびベンハイ川北方地区で、未確認飛行物体を捕らえたとの報告を受けたが、夜のため目で確認することは出来なかった」と述べ、17日に米軍側の攻撃に

米軍司令部は、17日、非武装地帯の東端およびベンハイ川北方地区で、未確認飛行物体を捕らえたとの報告を受けたが、夜のため目で確認することは出来なかった」と述べ、17日に米軍側の攻撃に

米軍司令部は、17日、非武装地帯の東端およびベンハイ川北方地区で、未確認飛行物体を捕らえたとの報告を受けたが、夜のため目で確認することは出来なかった」と述べ、17日に米軍側の攻撃に

米軍司令部は、17日、非武装地帯の東端およびベンハイ川北方地区で、未確認飛行物体を捕らえたとの報告を受けたが、夜のため目で確認することは出来なかった」と述べ、17日に米軍側の攻撃に

米軍司令部は、17日、非武装地帯の東端およびベンハイ川北方地区で、未確認飛行物体を捕らえたとの報告を受けたが、夜のため目で確認することは出来なかった」と述べ、17日に米軍側の攻撃に

よる戦果の確認と情報収集のための偵察が行なわれたが、その結果はまだわからない、としている。さきに南ベトナム政府軍筋が、15日と16日に北ベトナムのソ連製中型ヘリコプター12機が米軍側によって撃墜された、と述べていたが、こんどの米軍発表はその情報を部分的に確認したものとみられる。

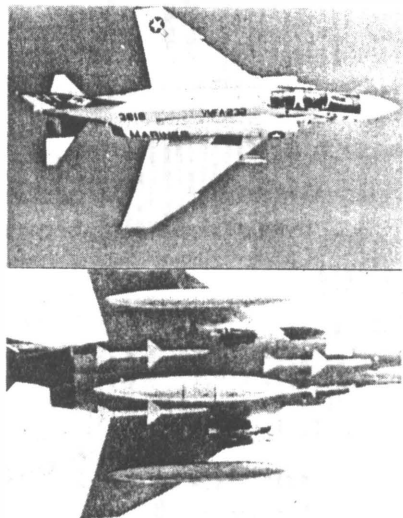
キャンベラ6月18日発AP: オーストラリア海軍指令部は18日、同国のミサイル駆逐艦ホバートが17日早朝北ベトナム沿岸で米軍機の空対空スパロー・ミサイルで誤射され乗組員2人が死んだほか、7人が負傷したと発表した。

事故直後の段階では、同艦は非武装地帯北側の北ベトナム軍沿岸砲による砲撃を受けたものと推定されていたが、オーストラリア海軍指令部の発表はこれを否定、「状況からみて、同艦は友軍機の空対空スパロー・ミサイルを被弾したものと考えられる。現在正式の原因調査がはじめられている」ことを明らかにした。

サイゴン6月18日発AP: 米軍司令部は18日、オーストラリア駆逐艦ホバートに当たったのは米軍の空対空ミサイルだったと次のような声明を発表した。

17日午前3時15分、非武装地帯沿岸のトンキン湾での夜間作戦中、オーストラリア駆逐艦ホバートの乗組員2人が戦死した。現在までの報告によると、ホバートに当たったのは米軍の空対空ミサイル「スパロー」だったらしい。目下公式調査を行なっている。

サイゴン18日発UPI: サイゴンの軍消息筋が18日語ったところによると、同日朝、北ベトナムのヘリコプター少なくとも20機が、米軍によって撃墜された共産側ヘリコプター7機の乗員救助のため南ベトナムに侵入した。また、



■F-4 ファントムIIとスパローミサイル(下)

同消息筋はソ連製ミグ・ジェットとみられる国籍不明機1機が16日南ベトナム領海に侵入し、米海軍のパトロール船1隻を破壊したと語った。米軍スポークスマンは、この情報の事実確認を避け、ただ2つの事件について報告を受けており、調査しているとだけ述べた。

また同スポークスマンは米海軍のファントム機が16日、北ベトナム上空でミグ21に撃墜されたと発表した。このファントム機は空母から出動したもので、ベトナム戦争中にミグに撃墜された米ジェット機としては48番目。乗員2人は行方不明である。

サイゴン18日発AP: 米軍司令部スポークスマンは18日、さる16日に非武装地帯沖合で撃墜された米海軍のパトロールボートは、「国籍不明機」おそらくは米軍機によって沈められたものであろう、と述べた。

17日朝にはオーストラリアの駆逐艦ホバートが米軍機に空対空ミサイルで誤爆されたとみられる事件が起っており、もしこれら2つの事件が米軍によるものだとすれば、費武装地帯沿いにはなほだしい混乱が起きているためであろう。

こうした混乱は、米軍レーダーが同地帯で「北ベトナムのヘリコプター」かもしれない飛行物体をキャッチして

■ベンハイ川上空の未確認飛行物体 13個の黄白色、発砲に効果なし■

1968,6,17AP は、米軍が南北ベトナム国境非武装地帯のベンハイ川北方地区で、未確認飛行物体をレーダーで捕ら米軍艦艇と米軍機が攻撃したが、夜のため目で確認できなかった、という公式発表を掲載しているが、『ニューズウィーク』1968,7,1号は現場に居合わせたベトナム特派員の報告を掲載している。

「午後11時、米陸軍のウィリアム・ベイツ大尉はドン・ハの連隊指令部で無線通信機の前に座っていた。ちょうどその時、ある海兵隊の前線監視兵が無線で、13個の黄ばんだ白い光の一群が、ベン・ハイ川上空を500 ないし1000フィートの間の高度で西方に移動しつつあるのを電子望遠鏡で認めた」と報告してきた。ベイツはただちにドン・ハ当局に問合せ、目撃のあった地域に友軍機がいるかどうかを確かめた。そういうものはないという返事だった。次に彼は、第1軍団の最北端の前哨地点アルファ2の迎撃レーダー基地に問合せた。何分もたたないうちにアルファ2のレーダー追跡者から答えが返ってきた。「ブリップ」が彼の周り全部、360 度にあった。

午前1時には空軍と海兵隊のジェットパイロットが、いまヘリコプターを1機、射ち落としたと無電してきた。しかし、空軍の偵察機が、熱をキャッチする赤外線探知機を装備してその地帯の上空を飛んでも、残骸が燃えている証拠は何も発見できなかった。その飛行機の報告によると、確認できたのは「燃えた地点」がすべてであった。」

※枠内英文は、『ニューズウィーク』の記事をアレンジしたもの

THE WAR IN VIETNAM

Mystery: In South Vietnam, meanwhile, U.S. officials were trying to explain the significance of a phenomenon as elusive as Clifford's "bits and straws." Nearly every night, American radar operators, stationed at small outposts just below the Demilitarized Zone, reported tracking what appeared to be dozens of unidentified aircraft moving down from North Vietnam's border. With bland assurance, the South Vietnamese Government promptly claimed that the mysterious "blips" were set off by Communist helicopters—and that twelve such craft had already been shot down. But Newsweek's Robert Stokes, who was present when the first radar reports came in, found no such easy explanation. Cabled Stokes:

"It was 11 p.m. and U.S. Army Capt. William Bates sat in front of a radio set at his regimental headquarters at Dong Ha. Just then, a Marine forward observer came on the air reporting that he had spotted, through his electronic telescope, thirteen sets of 'yellowish-white lights' moving westerly at an altitude of between 500 and 1,000 feet over the Ben Hai River which runs through the middle of the DMZ. Bates immediately checked with authorities at Dong Ha to see whether there were any friendly aircraft in the area of reported sightings. He was told there were not. Then he checked with the counterbattery radar unit at Alpha 2, the northernmost allied outpost in I Corps. Within minutes, the answer came back from Alpha 2's radar tracker: the 'blips' were all around him, 360 degrees.

"By 1 a.m., U.S. Air Force and Marine jets were scrambling at Da Nang in pursuit of the unidentified objects. Forty-five minutes later, a Marine pilot radioed that he had just shot down a helicopter. But when an Air Force reconnaissance plane, equipped with infra-red detectors which pick up heat, flew over the area, it could find no evidence of burning wreckage. All it could confirm, the plane reported, was 'a burned spot.'"

以来続いている。

サイゴン6月19日発AP: 米軍スポークスマンが19日発表したところによると、南北ベトナム間の非武装地帯で同日も北ベトナム側ヘリコプターが飛来するのが発見されたが、米軍の対空砲火は浴びせられなかった。

サイゴン6月20日発AFP: 米軍スポークスマンは20日、非武装地帯の南方上空で19日まで連続5日間にわたって正体不明の航空機を肉眼とレーダーで発見、現地調査のためエイブラムズ米南ベトナム援助軍指令官を団長とするトップレベルの軍事調査団が現地へ向かったと発表した。

米軍司令部は当初、北ベトナムのヘリコプターと伝えられた飛行物体が何であるかまだ確認していない。

サイゴン20日発UPI: 米軍消息筋が20日明らかにしたところによると、北ベトナム軍ヘリコプターが15日以来19日夜まで連続五晩、非武装地帯を経て、南ベトナム陣地上空に侵入している。これらヘリコプターの目的は明らかでない。非武装地帯のすぐ南方コンチエンの米海兵隊は19日、侵入ヘリコプターに対空砲火を浴びせたが、損害は与えなかったもよう。

サイゴン6月20日発UPI: 米軍筋は20日「非武装地帯に現れたと伝えられた北ベトナムのヘリコプターを追跡中のドイファントムとみられる米軍機が16日、米海軍巡視艦PCF19 一隻を撃沈、乗員7人のうち五人は現在も行方不明である。救助された二人の乗員のうち一人も、PCF19 は米軍機により撃沈されたと語っている」と述べた。

サイゴン6月21日発AP: 米筋が21日語ったところによると、米戦闘爆撃機と砲兵部隊はこのほど、同盟諸国軍の船舶五隻を低空飛行中の敵ヘリコプターと見誤って攻撃し、二隻に砲弾を命中させた公算が大きくなった。

同筋り言明やその他各種消息筋の情報によると、これで18日夜から21日午前にかけて、共産側のヘリコプター10数機を撃墜したという報道をめぐるナゾがある程度はつきりするようだが、米軍司令部は論評を差控え、目下調査中とだけ答えている。しかしある筋は、共産側のヘリコプターを撃墜したにせよ、2、3機に過ぎないようだと説明した。

サイゴン6月22日発AP: サイゴンの米軍司令部は22日非武装地帯の北半分北ベトナムのヘリコプターらしいものを探知したと発表した。

スポークスマンによると、探知したのは非武装地帯の南8~10%のクアンチ省北部にある米軍レーダー監視員で、21日深夜に探知された。非武装地帯付近で北側のヘリコプターらしいものが探知されたのはさる15日以来これが6度目。米軍筋では、もしこれがヘリコプターだったとしても、ソ連製M14型機のごく少数だろうと示唆し、レーダーの読み違いの可能性もあるとしている。

サイゴン6月22日発AP: 米軍スポークスマンは22日、同日サイゴン港湾区域で砲撃された英商船「ロンドン・ステーツマン」について、これは南ベトナム民族解放戦線をねらって目標に届

かなかった米軍ないし南ベトナム政府軍の砲弾によるものであることをほのめかした。

同事件については南ベトナム政府軍スポークスマンは「敵の砲火」により英国船が攻撃され、若干の損害が出たと述べていた。

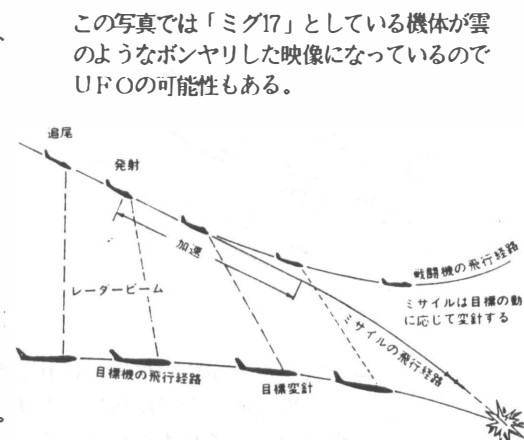
サイゴン6月23日発AP: エイブラムズ南ベトナム米援助軍指令官は23日、「北ベトナムのヘリコプターが、非武装地帯に出動したという具体的な証拠はない」と語った。同指令官の言明は北側のヘリコプターとみられる飛行物体が先週末、同地帯で米軍機に撃墜されたという報道から始まった最近の混乱した論議に関連して行なわれたもの。

ベトナム上空のミサイル誤射とは?

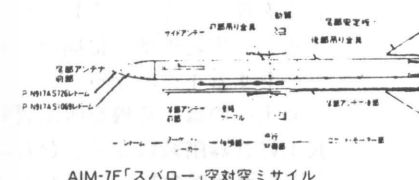
ベトナムの戦場で相次いだ誤爆事故のうち、戦闘機が空中の目標に向けてスパローミサイルを発射した場合を考えてみる。

スパローミサイルは自己のもつレーダーで目標を追尾していく方式で、目標がミサイルのレーダー追尾範囲に入ってくると、ミサイル自身のレーダーが目標にロック・オンし、狙いを付けて追尾可能の状態になる。同時にミサイルはパイロットに対して「目標をとらえた。いつ発射されても目標に命中できる」という信号を出す。このオーラル信号がパイロットの耳に入り、パイロットは確実に命中できるとされる時点でミサイルを発射する。もし目標が「消滅」したならばミサイルが海上の艦船に命中するかも知れない。

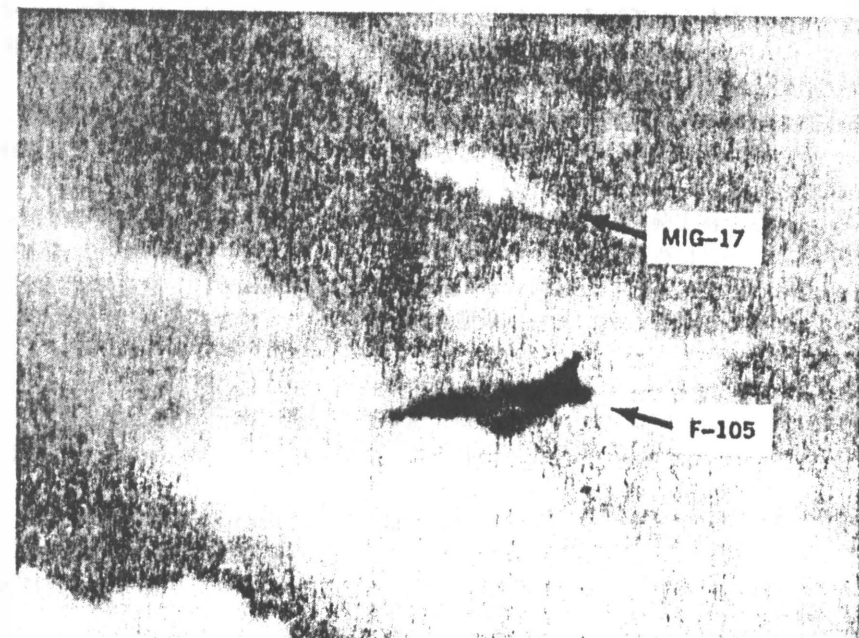
下の写真は1967年8月28日、「北ベトナム上空でミグ17と格闘するF-105」という説明になっている。普通、このようなガンカメラで撮影された戦闘機同士は、似たような陰影の明確な機体としてキャッチされているが、

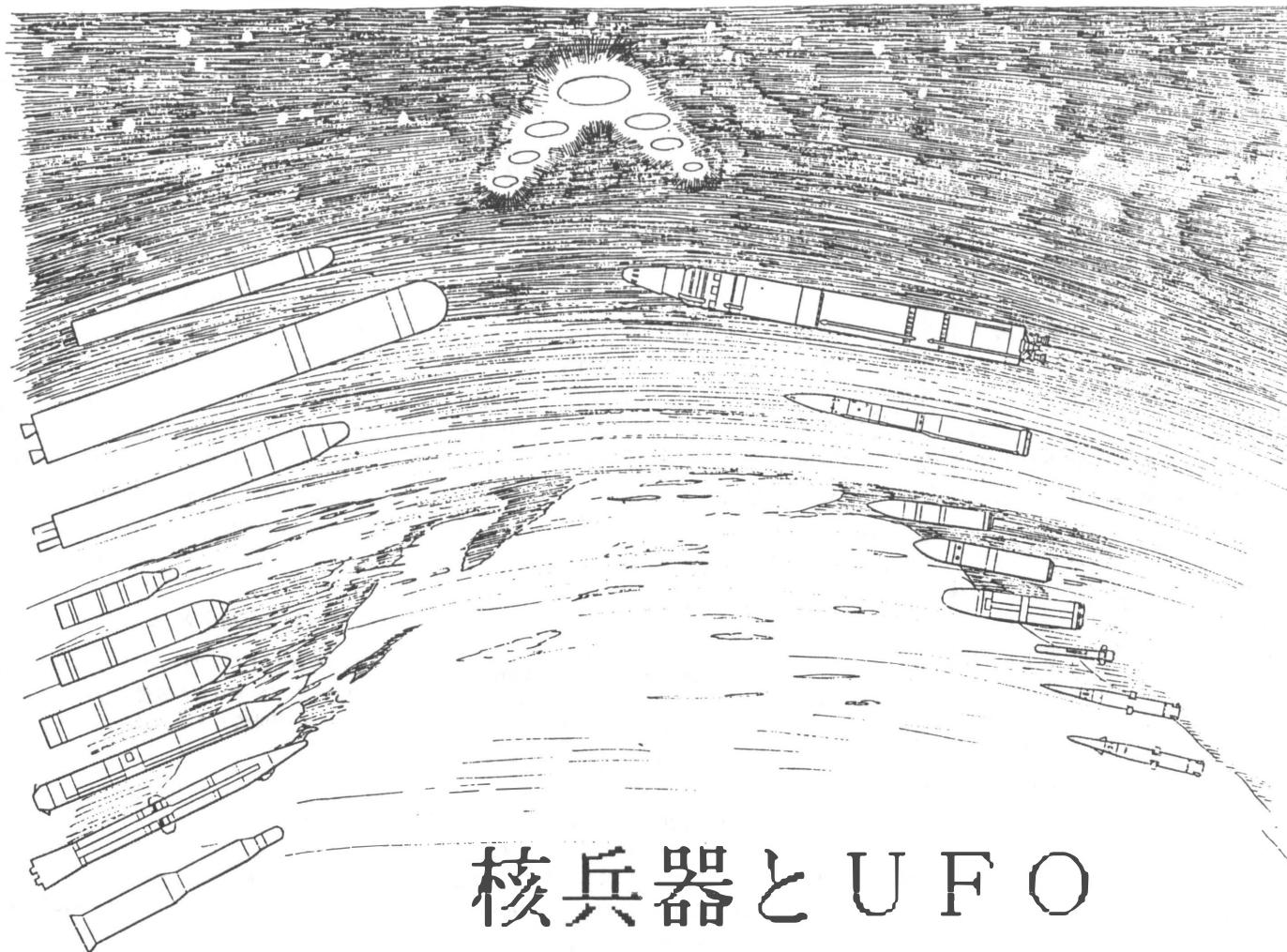


アクティブ誘導方式によるミサイル命中の経路



AIM-7F「スパロー」空対空ミサイル





核兵器とUFO

■宇宙からの知性の接近と核兵器■

“世界危機”や“反核”に関する書物の伸びと逆行するかのよう、生産の終止符をもたない核物質は、世界を埋めつくし「人類全面死」の実現と「宇宙破壊」に向けて世界をリードする主役となった。

確実なのは、危機を叫ぶ書物の延長上に兵器削減はなく、ひと握りの大國指導者層の総意に我々の運命が委ねられているように見えることだ。

そして、彼らの手から武器を取り上げない限り、我々の世界は製造された使用可能な武器の全面使用という最悪事態に近付いていることである。

核実験の目的の一つに「核爆弾が正常に爆発するか」の確認があるとされる。これは何らかの理由により核爆弾が機能しない事態の発生を示唆している。

我々は核爆発の回数から放射能汚染を論じることはできるが、惑星崩壊にまで結びついたりしない。

だが、過去を振り返れば、「エリコ城壁破壊」のような“累積力破壊”のような現象も“伝説的な知恵”の中に存在している。

我々は核爆発を、その時だけの爆発現象としてしか捉えられない。それが“蓄積される”とか“地球のメカニズムを連動させる”というような理論は確立していない。

地震発生や異常気象と核爆発との因果関係を論じた説は過去のものとなった感もある。

反核デモのエネルギーが、核兵器を消滅させたり無能化したりすることはないが、核兵器管理現場やミサイルサイトの要員が密かに怖れている事実がある。

それは「未確認飛行物体」の侵入による核兵器やミサイル弾頭部分への工作である。

それらの未確認航空機、あるいはヘリコプターのように滞空可能な飛行物体とは、地球技術では説明できない特徴をもつことから、UFOによる特殊活動と考えられる。

UFO書籍『CLEAR INTENT』（明確な意志）は、米国モンタナ州リュイスタウン(Lewistown)南にあるミニットマン・ミサイル基地“K7”に飛来したフットボール場大の輝く円盤が退去した後、ミサイル弾頭内にあるコンピュータの目標番号が変

えられ、ミサイル1基が取り換えられたという1975年11月7日の事件を記している。

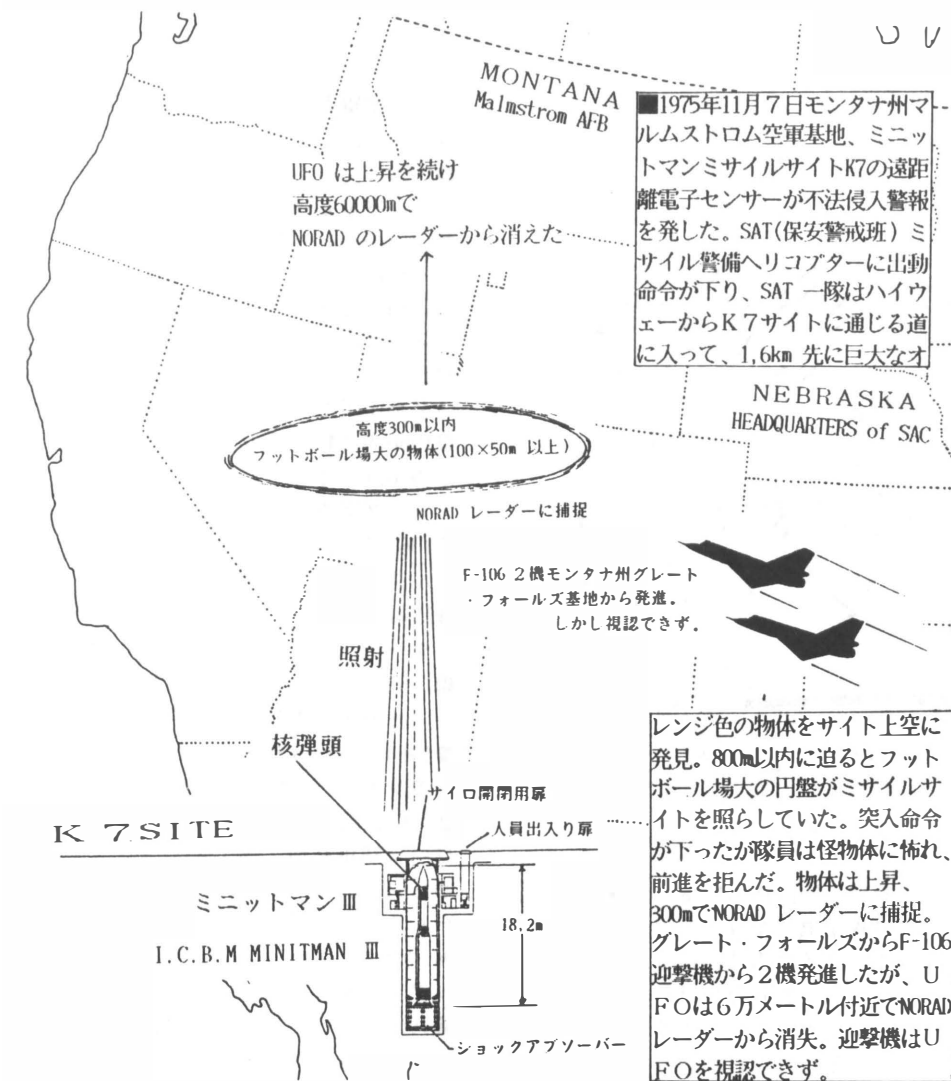
もし、地球外の知性が、「宇宙安全保障維持」の立場から、地球上の危険要素の一つである核兵器に着目し、その対策として核貯蔵施設や基地に接近するものならば、至極もつともな理由だと考えられる。

また、彼らが一方的にそれらの作業を行なっているのか、地球人の求めに応じて「援助」しているのかという問題もある。

こうした「UFO観」がUFOのすべてとは言えないにしても、現実路線でUFOと関係する意味では、ほとんどの人々の胸に抱く宇宙ロマンの期待を裏切るような“現実”が進行中だといえる。

宇宙からの“知性”が地球を訪れる“図式”とは、宇宙空間の安全保障と結びつくものだという考え方は、“地球世界の安全”を乱そうとする動き、例えば最近のイラク軍クウェート侵攻排除の軍事行動を連想する。

しかし、地球内部のめも事とは、今回のように資源や領土の利害に関係した出来事であって、原理的な考



察としては、純粋に弱い国が強国の脅威にさらされている場面を想定しなければならないだろう。

そこにおける“侵略排除や紛争解決”に駆け付ける“正義の軍隊”とは利害関係や人種の血縁を超越した倫理感を動機とするものとなろう。彼らには行為の宣伝も必要ない。

ミサイルを破壊することなく、着弾目標プログラムを変更させることで、ミサイル1基を無能化し、地球破壊行為の端末に「力」をみせたUFOの行為をみると、実に理想的な“危機解消に駆け付けた正義の軍隊”に思えてくる。

UFOの行動を、宇宙の警察的動機に限定すると、UFOと我々との直接関係さえもが“核戦争危機回避意識”の有無に関係してくるようになる。

それは、我々地球人類が個人的利害や民族や国家の枠を越えた価値の中へと進化し、宇宙というあまりにも巨大すぎる世界への参入にとって、回避できない関門であるのかも知れない。

およそ、すべての地球の価値とは脆弱な危機管理の上に存在している。

その危機管理の脆弱性を直撃するUFO問題とは、最も現実的な“地球改造”の力学を浮上させているのである。

たとえば我々は、核基地や核ミサイルを直接手にしてこの危険極まる存在を無能にしたり、破壊することで“反核の意志”を示したりはできない。

ところが、この作業がUFOによって“代行”されることが可能だと知ったら、あなたはUFOに対して（この場合、UFOとは地球外知性の装置の意）何ができるだろうか？

この設問はまた、善意の人々による“平和への祈り”や“献身的犠牲”行為にも意味をもたせているし、反戦反核の士にも勇気を与える。

■UFOと敵襲警戒システムの関係■

1960年代の米ソ冷戦時代、アメリカが北極方面から飛来するICBMを探知するためのレーダー警戒システムBMEWS 弾道弾早期警戒組織を設置して以来、誤認による報復攻撃の危機が繰り返された。

それら“敵ミサイル米本土接近”事件が“渡り鳥”の誤認と処理された事の一部は、別項『ワシントンU

F O事件の意味』（米の原爆使用に懸念を示すべく訪米したアトリー英首相の後を追う如く首都に接近した不明機）でも触れたが、よくよく考えてみると、この判断はおかしい。

渡り鳥とは、例えば北アメリカから南アメリカへとカリブ海を渡るルートにレーダー観測資料（日経サイエンス社『渡り鳥の体内時計』）によると、飛行高度500m～6000mの間を、飛行速度25km/h～80km前後で飛ぶものであり、音速に近い爆撃機の飛行速度や宇宙からマッハ20で降下するICBMと比較すること自体、ナンセンスと言わざるを得ない。

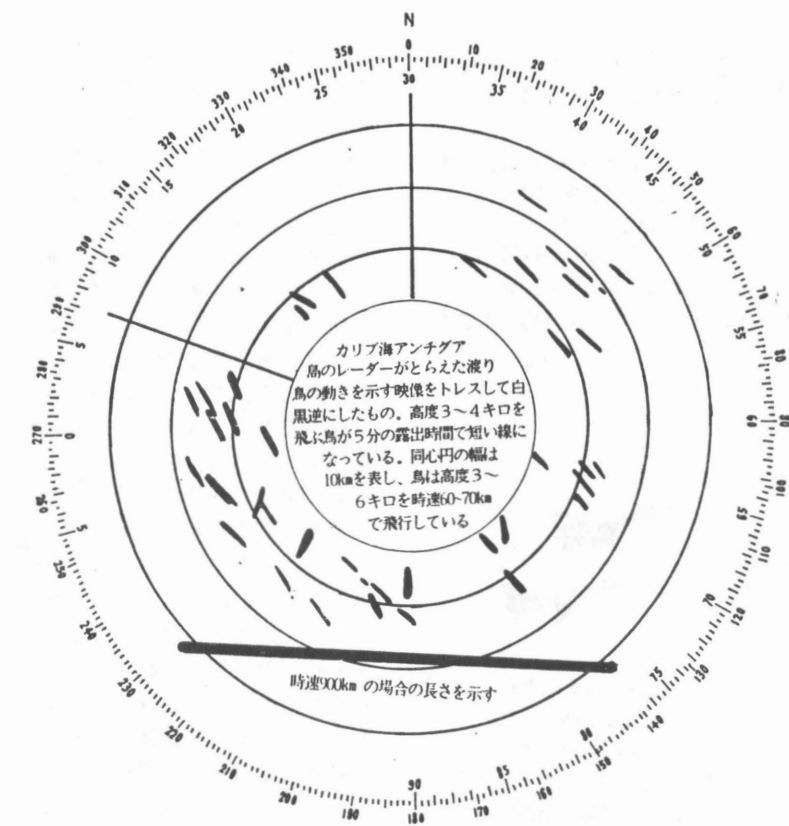
C I A文書1952年8月15日『CIAから空軍へ』は、レーダーがキャッチした「速度3万フィート、高度300フィートで飛行する物体群」について述べているが、これはレーダー局のサーチライドで物体を照らし「雁の群れ」であったと判明した事を記している。このように渡り鳥とは、ライトで照射するまでもなくその速度と飛行高度からそれと判るものである。わざわざ“判った”事例を記して、“これらの事件はすべてこの類である”という幼稚な作戦がCIAの“得意技”であった。

すべてがそうしたもののなら、「未確認飛行物体と本物の敵襲とを即座に識別する装置の開発」に真剣にならなくとも良いのである。（C I A文書：1952年8月19日『空飛ぶ円盤』1952年10月13日『空飛ぶ円盤について』）

こうした警報システムにおける誤認事件とは装置の故障を除いて、多くは未確認の高速飛行物体、つまりUFOを捕捉したものであり、UFOと敵ミサイルとの識別が核抑止システムの維持にとって極めて重大であったことを伺わせるものであって、このことはNATOのチェイスン元大将も訴えているし、識別ソフトの開発により、UFOを敵襲と誤認することによる偶発報復の危機が回避されてきたといえる。

つまり、『空飛ぶ円盤』は警戒システムの中に“正式な”口座を占めることにより、安全保障の外、つまり国防上の脅威から外されて今日に到っている。そして、この“UFOと敵襲識別”の問題提起は、1952年7月にUFO側から積極的に示され（ワシントン上空レーダー面UFO事件）たものである。

したがって、40年近い歳月を経た以



上、宇宙からの人工物体の特性（飛行パターン・速度変化・隊列形態・サイズなどが含まれるであろう）は国防上の敵味方識別ソフトの中に今も健在に連いの。

■世界を覆う核事故の恐怖■

我々“生き物”が最も脅威を抱くべき相手は“宇宙”にはいない。

我々の同種族の構築した危険極まりない核武装こそ、明日の世界を消滅させるしか役目のない、我々が徹底的に敵視すべき相手なのである。

そして“宇宙があって地球あり”を自覚した現代人ならば今こそ“地球人消滅不安”という“自己本位”を捨て、より大きな世界を脅かす悪行への罪悪感を噛み締めるべきかと思う。

我々の物を見つめる意識は、ミクロからマクロへと広がりを得た。人間本位の過ちに気づき始めている。

先に述べた米ソ間の敵襲行為識別における偶発戦争危機問題とは別に、核物質の生産、爆弾の組立、貯蔵、運搬、配備、運用といった軍事的な国際活動が、以外なよろさで環境破壊に発展する事故がたびたび発生してきた。それらの核事故は、U-2機撃墜やキューバ危機にみられた政治的解決の余地を持つ緊張とは違って、危険物質の人間による管理や運営の限界を露呈し、我々がいかにスレスレの“平和”の綱渡りを強いられているかを知らされる。

以下に列挙するのは核爆弾搭載爆

撃機・戦闘機の墜落、爆弾落下、核付攻撃機の空母からの落下、ミサイル・サイロ事故、核基地の爆発事故などの発生した日付と場所である。詳しくは引用した『朝日ジャーナル』1982年12月10日増刊号「核戦争は起きるか」、立花正照著『世界破滅への道—恐怖の選択』を御覧願いたい。

以下、米政府報告『核兵器事故』他より

- 1950,2,13:カナダ・ブリティッシュ・コロンビア州沖太平洋
- 1950,4,11:ニューメキシコ州マンサノ基地
- 1950,7,13:オハイオ州レバン
- 1950,8,5:カリフォルニア州フェアフィールド
- 1950,11,10:米国外の海上
- 1956,3,10:地中海
- 1956,7,27:海外基地
- 1957,3,22:テキサス州ビッグス空軍基地
- 1957,5,22:ニューメキシコ州カートランド
- 1957,7,28:大西洋
- 1957,10,11:フロリダ州ホームステッド空軍基地
- 1958,1,13:場所未公表
- 1958,1,31:海外基地
- 1958,2,5:ジョージア州サバナ川
- 1958,3,11:サウスカロライナ州フローレンス
- 1958,11,4:テキサス州ダイエス空軍基地
- 1958,11,26:ルイジアナ州シェン

- 1959,1,18:太平洋の基地
- 1959,7,6:ルイジアナ州パークスデール空軍基地
- 1958,9,25:ワシントン州ウィードビー島沖
- 1959,10,15:ケンタッキー州ハーディンズバーグ
- 1960,6,7:ニュージャージー州マクガイア空軍基地
- 1960,9,14:アイルランド沖
- 1960,12:カリフォルニア州バンバーグ空軍基地
- 1961,1,24:ノースカロライナ州ゴールズボロ
- 1961,3,14:カリフォルニア州ユバイチー
- 1963,11,13:テキサス州サンアントニオ原子力委員会核貯蔵庫
- 1964,1,13:メリーランド州カンバーランド
- 1964,12,5:サウスダコタ州エルズワース空軍基地
- 1964,12,8:インディアナ州バンカーヒル空軍基地
- 1965,8:アーカンソー州リトルロック空軍基地
- 1965,10,11:オハイオ州ライトバターソン基地
- 1965,12,5:太平洋
- 1966,1,17:スペイン・パロマレス
- 1966,12,12:ケンタッキー州マッキニー

- 1968,1,21:グリーンランド・ツーレ基地
- 1968春:大西洋(5,21アゾレス諸島?)
- 1978,8:カンザス州コーネル基地
- 1980,9,19:アーカンソー州ダマスカス

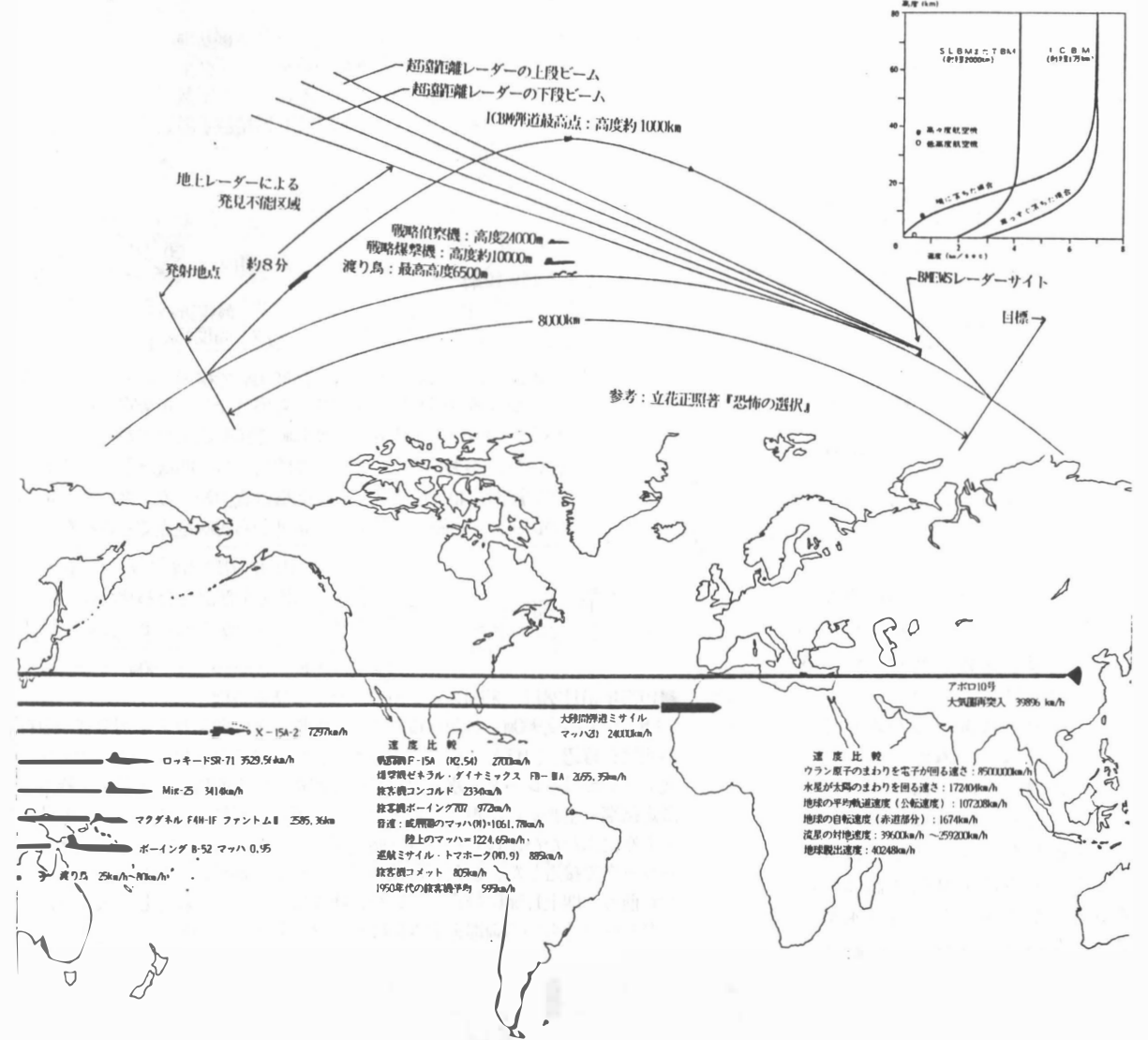
このような核事故、誤認による偶発報復攻撃が、いつ起きても不思議ではない世界に我々は生きている。“理想世界”も個人の希望も、この現実の上にある。

国家を信じ、大国指導者を信じるのは個人の自由だが、人の機能が現状改善に追い付かないのも現実であることを、我々は毎日のように新しいニュースで知らされている。

■レーダー網を衝く 大気圏飛行のUFO■

前述のように、正体不明の飛行物体の領空飛行による混乱とは、1952年より始まっている。

米国政府NSC国家安全保障会議科学情報部がCIA長官に提出した1952年9月24日付文書『空飛ぶ円盤



について』では、“領空の脆弱性”の項でこう記されている。

「米国の領空警戒システムはレーダースクリーンと人間による観測に頼っている。現在ソ連が、アメリカに対して空からの攻撃をしかける可能性がないわけではない。現在公式の目撃報告が12件、さらに非公公式のものが1件ある。攻撃のあったとき、われわれは現状では不明物体の識別ができない。また緊張状況の中で、まちがった警報を出す恐れもあり、また逆に本物を不明物体と誤認し、大きな危険を犯すことも考えられる。…」

「8. 作戦的な側面から見て、次の行動が必要である。……a. 視覚的・電子的現象の2点について識別能力の早急な改善が望まれる。そして攻撃を受けた際には、敵の航空機やミサイルを瞬時にかつ確実に識別できるようにすべきである。」

米ソ所有の航空機能力に大差はないだろう。

すなわち、異常な飛行物体との識別に必要な既知航空機データとは、地球科学技術の範囲にあるからだ。

だが、地球外起原としか考えられない未確認飛行物体とは、ミサイルを追い越す速度(1949,7 ホワイットサンズ)から、48時間も滞空しつづける(1942,4サハラ)飛行速度の幅をもち、静止からレーダー圏外へ瞬時に離脱するとてつもない急加速、そして数センチから1000メートルを超すサイズのバラエティー、直線、波形、各種ターンなどの異常飛行経路の特徴をもつため、それらをすべて数値的に把握するには、数千から万を超す事例が収集されなければならない。そうでなければ既知飛行物体との識別に必要なデータとはなりにくい。そのためには何年も時間をかけて、空軍機による空中遭遇報告、基地周辺における目撃報告、レーダー面観察報告を徹底的に回収する事が必要になってくる。また、規則を設けて民間など外部への漏泄を防ぐと共に、違反者には厳罰をもって臨み、そして、収集したデータの痕跡を抹消し、「吾が軍はUFOと関係なし」をキャンペーンし続けなければならない。この作戦は国家の最高機関から末端の兵士までを貫くものとなろう。

■それでもUFOは 核兵器に接近する■

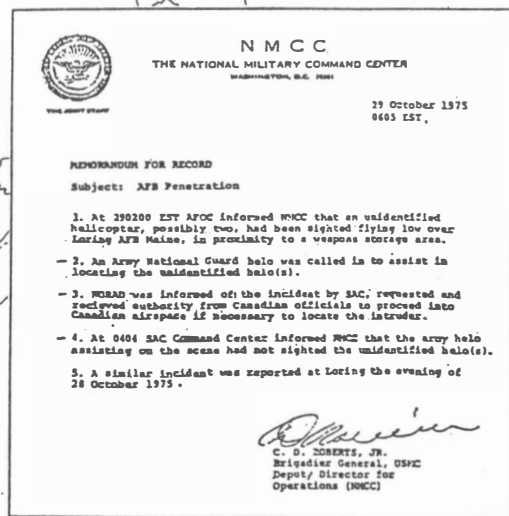
人間の知恵と仕組みが、いくら報告書を内密にしたところで、様々な思惑で集まった集団である。1万件のうち1件くらいは表ざたになるのが普通であろう。そうした書類のいくつかが、情報自由公開法に基づき入手した米国UFO研究者によって世の中に登場するようになった。

UFOの真の性質とは、どうやら軍当局に独占されていた感がある。民間のUFOマニアが胸ときめかせて語り合う課題は、それらを稀薄にする効果を生んでいる。これは注目すべき現象である。

『CLEAR INTENT』に使用されたUFO報告書の一つを見てみよう。

1975年10月と11月、未確認航空機がメイン州ローリング空軍基地、ミシガン州ワーストスミス空軍基地、モンタナ州マルムストロム空軍基地、ノースダコタ州マイノット空軍基地、カナダ空軍オンタリオ州ファルコンブリッジ基地に集中出現したという。

10月27日、ローリング空軍基地第42空軍憲兵大隊所属の隊員ダニー・



■リチャード・ホール著『UNINVITED GUESTS』より

K・ルイス3等軍曹が駐機区画北端の核兵器貯蔵エリアに接近した不明航空機を目撃、警報が発せられ、基地は総待機状態に入った。

この出来事の状態をつかみ易くするために図を描いてみた。

“未確認機”とは一体何だったのか。また、なぜこの時期、それが核兵器に接近したのか。そして最大の謎、この出来事により核兵器に何の影響があったのか。これらは永久に公開されないだろうが、先に紹介したミニットマン弾頭の一件からその結果を類推することは可能であろう。

■1954年英国“U=Z”事件の謎■

時は40年遡って1950代。当時の米国の推測によると、ソ連は猛スピードで軍事計画を推進し1954年までには米国に先んずるだろう、とみられていた。1954年のメーデーにソ連初の大陸間爆撃機バイソンが姿を現わした、米国はその対抗手段として大陸間弾道ミサイルの生産計画を進め、さらにB-52大陸間爆撃機の生産に拍車をかけていった。

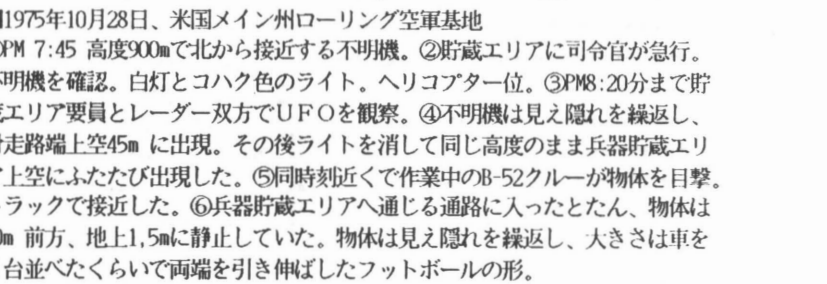
1954年3月1日、米国はそれまでで最大の15メガトン水爆をビキニ環礁で実験。原爆の1000倍の威力の登場により水爆競争の幕開けとなった。一方、ビキニ水爆実験による科学者も予測しなかった死の灰の恐怖が世界を包み、第5福竜丸の被爆は反核の大きなうねりに発展した。

この頃、インドシナ戦線でフランス軍の敗色が濃くなったことで、フランス軍への支援として、中国への原爆使用が提案された。米国による中国への核攻撃提案はこれまでも何度か繰り返されていたが、この最終決断を迫られたのがダレス國務長官であった。

■1975年10月27日、米国メイン州ローリング空軍基地
※核貯蔵庫の図は日本国内の基地にある通称「イグルー型」を参考にした。中の核兵器も日本にある米軍基地で確認された核爆弾B61（米空軍『核兵器積載手順』より。資料：石川巖著『核さがしの旅』

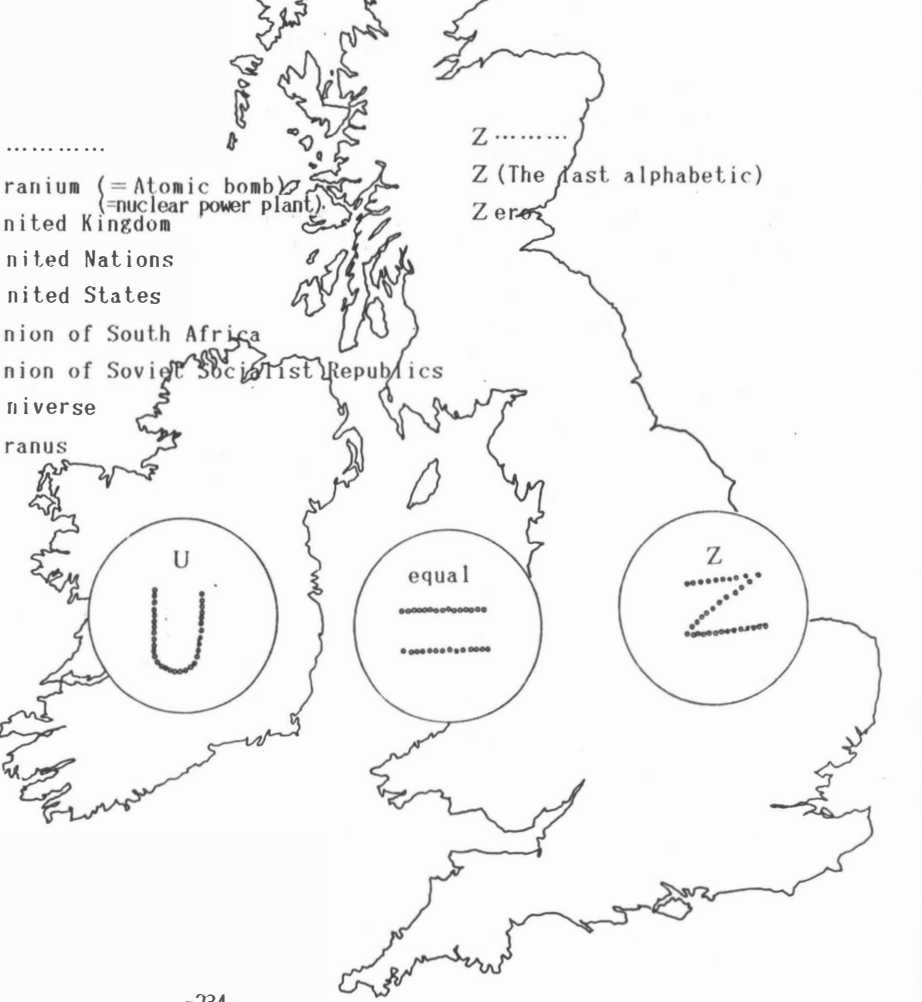


①東北東16~20kmに不明機、高度90mで接近。レーダーにも確認。
②全ゆる通信周波数で通信するも応答なし。司令官貯蔵エリアへ向かう。③ついに不明機は高度45mで核貯蔵エリアから300m以内に近付いた。④PM8:45レーダー追跡開始。⑤不明機は基地東北東16km上空で旋回。40分後消失。⑥不明機は旋回後、カナダ方角へ飛行。
⑦レーダー追跡は方位65度、基地から20km地点でとぎれた。



■1975年10月28日、米国メイン州ローリング空軍基地
①PM 7:45 高度900mで北から接近する不明機。②貯蔵エリアに司令官が急行。不明機を確認。白灯とコハク色のライト。ヘリコプター位。③PM8:20分まで貯蔵エリア要員とレーダー双方でUFOを観察。④不明機は見え隠れを繰り返し、滑走路端上空45mに出現。その後ライトを消して同じ高度のまま兵器貯蔵エリア上空にふたたび出現した。⑤同時刻近くで作業中のB-52クルーが物体を目撃。トラックで接近した。⑥兵器貯蔵エリアへ通じる通路に入ったとたん、物体は90m前方、地上1.5mに静止していた。物体は見え隠れを繰り返し、大きさは車を4台並べたくらいで両端を引き伸ばしたフットボールの形。

■1954年ロンドン■



このダレス長官には秘められた物語が語られている。その4年前のクリスマスの夜、彼は国連会議の席に、忽然と現れた東洋風の風貌をした未知の人物の言葉を聞いていたのだ。

古代史研究家アンドリュー・トマス著『SHAMBHALA』（邦訳ユニバース出版1979）にその詳細が記されている。密閉された第12会議室に現れ、人類の悪と正義について語ったその人物は、「あなたの方には何一つ正義がない」とダレス等に告げたという。議長のベネガル・ラウ卿は、その人物に「…あなたが話しになったことを書いてくださればと、そのような知恵を本にまとめて、われわれに…」と言うと、男の目に怒りの炎が走り、「本に書かれているではないか。聖書に！」と答えたという。事実とすれば、古代から人類を観察し聖書にその叡智の一部を反映させた存在と密接な関係にある人間が国連を訪れたことになる。

4年後、対中国核攻撃の決断に迫られたダレス長官の脳裡に、未知の人物からの警句がよみがえったかどうかは分からない。

5月25日、ダレスはアイゼンハワー大統領と会談。原爆使用を主張する統合参謀本部の見解に対し、ソ連の介入を招きかねないと反対を表明。大統領もこれに賛意を示し、危機は回避されたのである。

同月、英国では空軍のドウディン元帥が記者会見を行ない

「私は他の遊星の人々が、空飛ぶ円盤を操縦して現今の吾が世界の危機に、援助の手を差し延べんとしていることを確信する」と言明している。ドウディン元帥はいかにしてこの心境に到達したのであろう。

元帥という公的な立場を考えれば、“確信”の根拠が個人的体験にある

「I Believe in Flying Saucers!」
By Sir Cyril Marshall and Douglas
I say there has been something about these strange reports and reports which they describe as flying saucers, and which would also make human beings believe in them. It is impossible. In a book article I cannot do as much with the question as I can in a book. I say this because most of the reports which he reads have been given by the intelligence branch of the United States Air Force. They contain the names of the witnesses, and the names of the witnesses are given in the reports. I say this because most of the reports which he reads have been given by the intelligence branch of the United States Air Force. They contain the names of the witnesses, and the names of the witnesses are given in the reports. I say this because most of the reports which he reads have been given by the intelligence branch of the United States Air Force. They contain the names of the witnesses, and the names of the witnesses are given in the reports.

とは思われない。むしろ、真性のUFO情報が集中する軍の中核にいる者のみが知り得た「事実」から、彼は“宇宙からの援助の手”を確信したのであろう。

6月11日、ワシントンで開かれた米、英、仏、豪、ニュージーランド5ヶ国軍事代表者会議では、中国がインドシナに侵攻すれば核兵器を使用すべきだとの結論に達した。

イギリスでは7月の閣議で、米国のアジアで誤った介入政策をとったり、ソ連の攻撃を未然に防ごうとして、再び世界大戦を引き起こす恐れありとの論議がなされ、チャーチル首相は「英国は世界の大国としての影響力を行使するために、最新式の核兵器をもつ必要がある」と述べた。ここに英国は水爆開発を正式に決定したのであった。

こうした、英国の水爆開発に対する警告か、対中国核使用についての5ヶ国決議への警句か、それ以前の根源的命題としての啓示か、それはわからないが、明らかに関係があるとみられる事件が、この年の秋（9月とも10月～11月ともいわれる）英国上空に発生することになる。

今や、“UFO研究家”を名乗る誰もが口にしくくなった、それは伝説的事件なのである。

おそらく日本で初めてこの事件を紹介したとみられる朝日新聞社1958年9月25日発行バンビブック第18号『空飛ぶ円盤なんでも号』から引用してみよう。タイトルは“イギリス上空の見えない円盤、U=Zのナゾ”である。

「そのころ、イギリスでは、また別のふしぎな現象が目撃されていました。それは、この年（1954年）の10月中ごろから11月初めにかけて、7日間おつづけに、毎日正午かきりになると、ナゾの飛行物のUの字形編隊がイギリス各地のレーダーで目撃されたのです。

ところが、初め2日間は天気が悪かったので、その飛行物の正体はわからずじまいでしたが、さて3日目になってみると、空はカラリと晴れ上がり、上々なのに、待ちかまえていたジェット機などはしり目に、たしかに上空を飛んでいるはずのナゾの飛行編隊のあたりには、何もありません。しかも、レーダー面を見れば、何かナゾの飛行編隊がうやうやと飛んでいるのがアリアリとうつつているのです。

その上、最も奇妙な出来事だったことには、これらの円盤編隊は、初めUの字形の編隊を組んで現われて、次にその編隊をといて、2本の平行線の形になり、最後は形を変えて「Z」型になって、飛び去っているのです。つまり、何か「U=Z」というナゾのような文句を残して飛び去っているのです。これは一体何という意味なのでしょう。

結局、この出来事も、今なおナゾのまま残っていますが、円盤研究者たちは、これは円盤が飛ぶ場合に、何か重力のような場を発生し、その場のために付近の光線が屈曲させられて、円盤の姿が見えなくなっているのではないかと考えています。またこの「U=Z」の略号は、

U=ウランウム=原子爆弾、Z=アルファベットの最後の文字=（地球の）最後を表わし、“原子爆弾を使って盛んに戦争し合っていると、いまに地球の最後が来るぞ”と警告しているのではないかと、とも言われますが、これは正しい解釈かどうかはわかりません。」

事件を報道した『サイデーディスバッチ』紙など他の資料によると、レーダー面に図形を構成したブリッパ（輝点）の数は40個から50個としている。

報道官制によってか「U=Z」事件はUFO研究の外に放置されたまま40年近い歳月が流れた。

いったい誰が「U=Z」を“ウランウム兵器使用による地球破滅の警告”などと解釈したのだろうか。民間研究家なのか？軍部中核なのか？英国政府なのか？

それさえもハッキリしない。筆者は1986年頃、長年頭の中にあつたこの事件が、本当に事実なら、その後の英国に何か変化はなかったのだろうか？と、図書館に通って当時の新聞を調べてみたことがある。

そのきっかけとなったのは、1982年1月に日本テレビ系で放映された「第3の選択」なるSF番組の中で、次のようなナレーションが聞こえてきたからである。

「…1955年7月18日、米ソ英仏の四大国首脳会談で、宇宙開発計画に関する国際協定がむすばれた。その半月前、不思議な記事がAP電で送られた。巨頭会談開催には秘密の理由があり、それはある惑星の住民から地球へ、最後の警告が寄せられており、これといかに折衝するかを討議

も消し去ってしまったのだろうか。せめて死傷者だけは出さないようにと配慮して、工員たちが避難する余裕を与えるために異星人が警報を鳴らしたのかも知れない……

■残された道の模索…

人類の内なる敵との対決■

1991年2月5日、湾岸戦争のさなか、他国籍軍がイラク軍の化学兵器使用に対応するため「核兵器による報復を検討した」とのシュミット仏参謀総長の発言が報じられた。同日、米世論調査で、米国民の間に核兵器使用論が急増、賛否が並んだことが報じられた。しかし、米『タイム』誌2月4日号は“核兵器使用は米国に益なし”との米国防総省担当者の回答を報じた。

湾岸における核使用はなかった。だが、核兵器は依然として全世界に配備され使用をまわっている。

クウェート政府はさる1978年11月、未知の物体が舞い降りたため油田の掘削装置が停止した事件で、UFO調査特別委員会を設置した(国務省文書)という。これがOPECの取決めに無視したクウェートの石油輸出が危機を招くと予測した知性による警告かどうかは知らない。

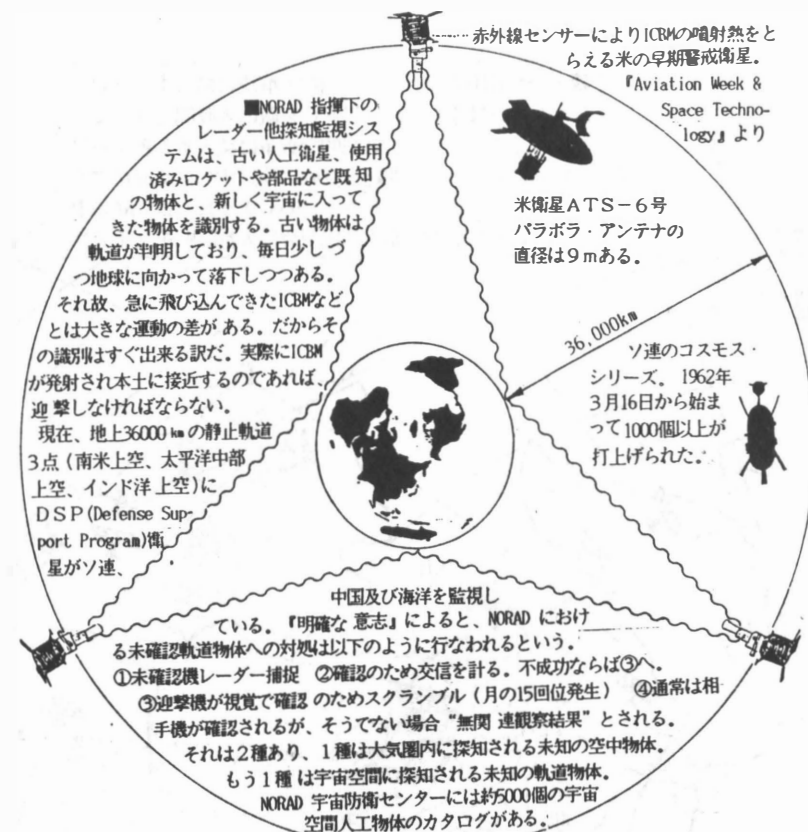
1975年の米SAC基地侵入UFOによる工作で、かなりの混乱が生じた様である。フォーセットはこう記している。

「…こうしたミサイル妨害事件の結果、軍ではほかのミサイルが無事かどうか、点検調査の必要を感じて、大わらわの事態になったという。…」
軍当局発表は氷山の一角である。反核のUFOは何千万人の反戦デモや何千万部の反核出版でも実現できない核戦争阻止に向けての実際的行為を示した。

この事実はUFOなるものが、平和を願う人々の味方であるように見える。これは同時に、逆な立場の役割にとって脅威となり、UFOの正確な事実を葬り去る仕事は彼らの義務として生じることになる。

軍協理論に準じた醜悪な仮想敵としてUFO像を広め、識者の防衛本能を刺激したり、愛とロマンの洪水で反社会分子を骨抜きにする宣伝、“軍の方がUFOと親しい”とした廣作公文書の流通といった作業が、UFO排除の目的で運用されるかも知れない。

“地球の他人間の住む星なし”と



ソ連千島列島から 米本土を核攻撃

【ソ連】千島列島の北緯38度、東経130度の地点に、米本土を核攻撃するための施設が建設されている。この施設は、米本土を核攻撃するための施設であり、米本土を核攻撃するための施設である。

ミサイル演習を誤警報 緊急の迎撃態勢

【米】米本土を核攻撃するための施設が建設されている。この施設は、米本土を核攻撃するための施設であり、米本土を核攻撃するための施設である。

スポーツはけて、スポーツをねげる。

【米】米本土を核攻撃するための施設が建設されている。この施設は、米本土を核攻撃するための施設であり、米本土を核攻撃するための施設である。

1980年10月30日 毎日

の地球唯一思考の理想である「地球軍の宇宙進出」。“宇宙最高の知性”を自認する多くの識者の描く未来社会とは「閉鎖された世界」である。一方、宇宙の他の知性との接触に向けての世界観とは「開かれた世界」である。それぞれの陣営には、我々

ひよわな者を動かす何者かが存在するのだろうか。敵とか味方とか言っても皆始めは赤児である。その赤児が核を振りかざす意志を完成させたのは教育である。UFOが最初から存在しないのなら、こんな話もありえなかったのだ。



UFOの意思表示

UFOというものが、たまたま我々の世界を通過した別世界の物体でなく、我々の世界を目標に訪れている何者かであるならば、無意味に姿を見せるというより、何か理由があつてのこと、と考える方が自然である。我々はその出現の意味、飛行の意思表示というものを知る義務がある。UFOが「前もって電波で天文学者に連絡してから飛来する」という「我々の考え」より、彼ら独自の考えで出現している事は明白であり、その独自のものを訓むのもUFOの研究にとって重要課題といえるだろう。ここでは、そのために、我々の世界で、今までどうやって意思を通じ合ってきたかという原点から、UFOの意思表示解明を試みた。相手を知るためには自分自身を知らなければならない。UFOが20世紀の空に突如として出現したのでないこと、これは重要事実である。我々の言葉以前の時代には合図があつた。合図は絵文字となり記録に使用された。北米インディアン、スー族の“友好”を表す合図は“両手を挙げた姿”である。異種の相手に接近する場合、この姿はまた“武器を持たない”意思表示でもあろう。また、異種同士が並ぶ姿、形はインディアンの絵文字に限らず「お互いの友好」に使用される。ここで言う“異種”同士とは男女、異国、異文化などを指す。また、繰返しの動作は、一つの記号、信号の意味を持ち、注意信号、警告灯にみられる。また救難信号SOSは……で表すが、ボーイスカウト、きこり、平原くらしの人々にとって、3つの合図(3回叫ぶ、3回口笛を吹く、銃を3回発砲、3吹き煙、一列になった3つのたき火等)は「災難」の合図であり、どんな状況にあつても、本当に必要な場合以外はこの合図を用いてはならないとされている。(北米の場合)我々の生きる世界でのこうした姿について知ることは、UFOという異種ではあるが空間の隣人として接近しつつある知性の本質を知る上で、必ずや手がかりとなるに違いない。UFO活動は案外、地球人を知り尽くしての活動であるかも知れないのである。

UFOの不可解な“ふるまい”には証が多い。何か知的な意思を感じたという報告も含めて、UFO飛行の真意を考えることは、UFOのコントロール者もしくは搭乗者から直接話を聞く前段階として重要な作業である。

天体物理学者ジャック・バレーはハイネック博士との対談で、こう述べている。「この物体は、ある種の特別なふるまい、つまり以前目撃された物理的物体には決して見られなかったものすなわち…

1. 航空力学に基づく飛行物体とは違ったふるまいをする。つまり、我々が知っている航空力学の法則にそむく運動のしかたで飛ぶ。

2. にもかかわらず、そのふるま

い方には一貫性がある。世界中どこからくる報告も、物体が同じある特殊なしかたで飛ぶと述べている点で一致している。

3. 目撃者にとって違う飛び方をしたり、観察者の社会的、心理学的状況によって影響を受けたりはしない。

4. 地表へ接近するときも、ある特定のふるまいをする。たとえば、地表への接近は、考えられるように、人口密度に比例してはいない。

このように、UFOは今までに観察されたことのない(編注:「今まで」という時間帯が人類発生からを指すのであれば、この表現は間違っている。各自の人生時間帯の範囲とするのが妥当であろう)特殊な存在

である。その他、内部から小型の物体が出てくる大型の物体と、大気圏を単独で飛ぶ小型の物体との間にも、一貫した相違が見られる。」

さらにバレー教授は追求を続けて言う。

「…この現象の核心は、ある種の技術的な装置、すなわち、搭乗者を輸送できる一種の機械であると思われる。そして、この機械装置と搭乗者が示すふるまいは、我々が未知の種類の生命に直面しているという仮説と合致していると考えられる。ところが、この機械装置とその搭乗者が示すふるまいは、宇宙からの訪問者として普通予想されるものや、我々が物理学で知っているものに、必ずしも一致しない。ここにジレンマ

がある。」(1979年の対談より引用)

確実な事は、UFOの目撃報告は人類によってなされており、チンパンジー、イルカ、昆虫などの種族がUFOを感じて集まるとか、UFO側でも人間以外の生物に特別な関心は示していないということで、UFO出現の対象は人類であって、人類に対する出現ないし訪問であろう、ということである。そして、上記の対談でも指摘されているように、羽の生えた宇宙人が空を飛ぶとか、雲突くような巨人が町の真ん中に現れる、というのではなく、我々の大気中を、飛行機や宇宙船にたとえられる、ある種の乗物を通じて人類に接近している事実である。その乗物の高度な性能に比例して、搭乗する知性が地球人類の知性よりも上回るのであれば、我々の努力次第で、その知性に近付くことが可能であろう。

そのためには、我々が固執する物

「我々は、知性を持ち、かつ敵意はない。」

UFOs are controled by high intelligence without having hostility toward human beings on the earth.

「我々は、あなたがたの飛行技術より優れている。」

The UFO flight technology employed by ufonauts is superior to the one by you in turning capacity, the climbing power, target approaching capacity and all the like.

「我々は、あなたがたを観察している。」

UFOs are overboring our behavior, thought and all that.

「我々は、あなたがたと同じ航空機である。」

「我々は、あなたがたと同じ宇宙船である。」

UFOs are aircrafts and spaceships similar to the ones made by us which intelligent crew on board control so that they may fly in formation in the air and space.

指しを捨て去ることから始めなければならぬ。現象がすべての地球法則を逸脱している、となればその一面だけでも理解したいと願う我々は地球常識の鎖から解き放たれなければならないだろう。

例えば、国家間の交流というものがある。この活動は、国の元首、各界の代表で行なわれるという常識がある。しかし、これらの人々は我々の世界の基準で選ばれた能力者・血統集団であり、基準が違えばまったく異質の集団が形成されるだろう。

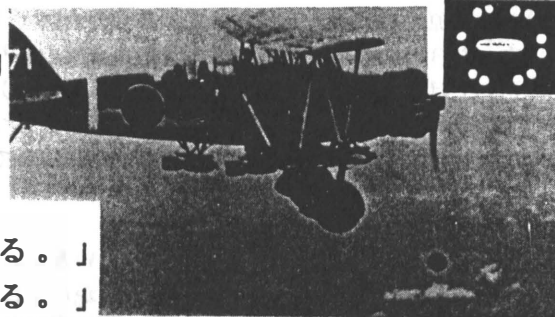
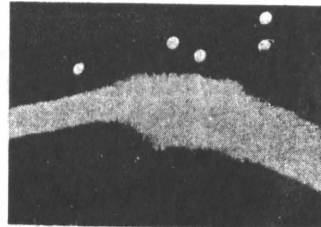
一例として「偽証しない人間」に限るとなったら、どのような人々の集団になるだろうか。

こうしたちょっとした発想の転換が、UFO目撃者の割合が地球各国階層の序列に比例しない点や、星や宇宙を研究する集団との特別な接点がないという疑問点を解く手助けになる。

しかし、宇宙という広大な領域からの訪問が地球を一つの単位としてとらえているならば、かれらが、その対象とする人類に何かを表示する任務も飛行活動に含まれるのならば、「万国共通の意思表示」か、「国籍」「仕事」「個性」などの種別に応じた対応を行なっているものとみて異論はないだろう。対応が細くなればなる程、彼らUFOは我々の実情をよく知っているということになる。

我々はまず、UFOがどのような相手にどのような姿と飛行で出現して見せたかを、整理してみることで、何か共通点なり、法則性なりが見い出せる筈と考えるべきである。

そのためには信頼度の高い、詳しい目撃資料が必要となる。そして、特に軍民航空機については、建造目的、飛行任務や乗組員職歴、積荷に至る「その時の状況」が重要になると考えられる。



未確認現象の検討

■衛星軌道との比較例■

■大阪上空UFO撮影後 衛星との比較検討に至る経緯■

1990年6月7日夕、大阪の根岸氏より電話で、又もUFOをビデオで撮影したと連絡があった。5月20日の撮影から17日目である。「昨夜9時40分、8mmビデオでアークトゥールスに向けた時、殆ど同じ光度の光が北斗七星の下から現れてアークトゥールスに向かった。タイミング良く撮影できたが12秒で光が薄くなり消失した」との話だった。また「中之島のレーザー光反射が曇った夜に見られるが、それとはまったく違う。当夜は雲もなかったし、時刻的にレーザー照射は終わっていた」とも付け加えてくれた。

8月26日、日本橋の根岸宅にてビデオの映像を見せてもらい、研究誌『UFO RESEARCHER』表紙用に画面から撮影。テープは後日、VIS にダビングしてもらった。

5月20日撮影の光体は、満月の3分の1程(図1参照)の形の明瞭な丸型で、

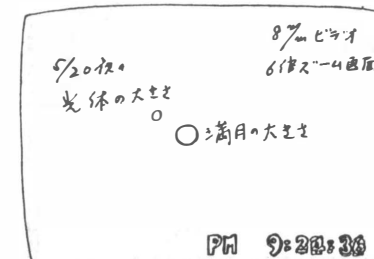


図1

面積のわりに弱い光。明るさは一定せず、強くなった瞬間を狙ってカメラのシャッターを切った。光が弱い時は背後の暗い空との識別が難しかった。これに比べて6月6日の方は、見かけ上、星と変わらず、ただ急速に5秒程の間に面積を縮め消えていくのが星とは違っていた。この現象は、光が移動状態で起こったのだから星ではない。既知現象の可能性があるとしたら人工衛星が最も近い。 図2

9月中旬、根岸氏より「近所の研究者から、あれは人工衛星が地球の影に入った瞬間を観測したのではないかと意見があった」と電話があった。筆者は早速人工衛星データをパソコンに入力してシュミレーションを行なっているS氏に資料を要請した。

9月23、S氏より人工衛星の資料が到着した。図7は、『天文ガイド』90年8月号のデータ(5月測定分)の軌道要素を入力し、根岸氏が撮影した6月6日前後のシュミレーションを行なったもので

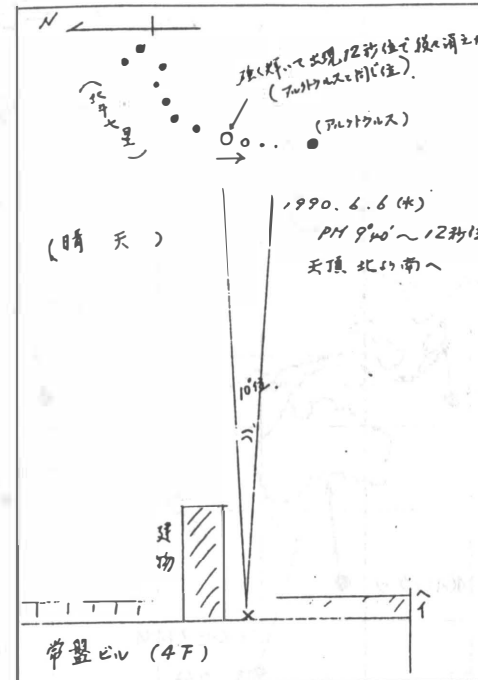


図2

ある。

人工衛星は、地上数百キロの軌道上で地球を巡る人工物体だが、重力や抵抗により次第に高度を下げ、ついには大気圏に突入する。従って軌道計算の要素は刻々と変化するものである。しかし、5月に観測測定された要素を基に6月初旬のシュミレーションを行なったのであるから、誤差は少ないであろう。

この結果、『天文ガイド』記載の肉眼観測可能な明るい衛星のデータ(表1の上段No.0~19までが比較的明るく観測しやすい衛星とロケット。下段No.0~10までが大気圏突入の近いとされる衛星)計31個については該当する衛星はなかった。

根岸氏による観測図は、パソコン・プラネタリウムと北斗七星その他が逆になっているが、その下の星座図を、北を右にして見上げる位置で見ると根岸氏の図と一致する。 図5 図6

さて、筆者は根岸氏からの通報当夜、(6月7日)、天理でも何か見られるかも知れないと、早速ビデオカメラを持って妻と外に出てみた。あいにく空は低い雲がうっすらと覆い、1等星だけが薄雲を通して見えるだけであった。ただ、問題のアークトゥールスと、北斗七星の位置は確認できた。

筆者がビデオカメラをアークトゥールスに向けて録画を始めて間もなく、「動いている!」との妻の声で、カメラを向けようとしたが、ファインダー(超小型モニターテレビ式)の明るさから、曇った暗い空に目を転じると目が馴れるまで時間がかかるのと、妻ほど視力のない筆者の目にはそれが確認できず、「いま北斗七星のしっぽを通過!」といった妻の声を録音するだけとなった。人工衛星とみられるその光は、北極星の手前で小さくなって見えなくなったという。ビデオ

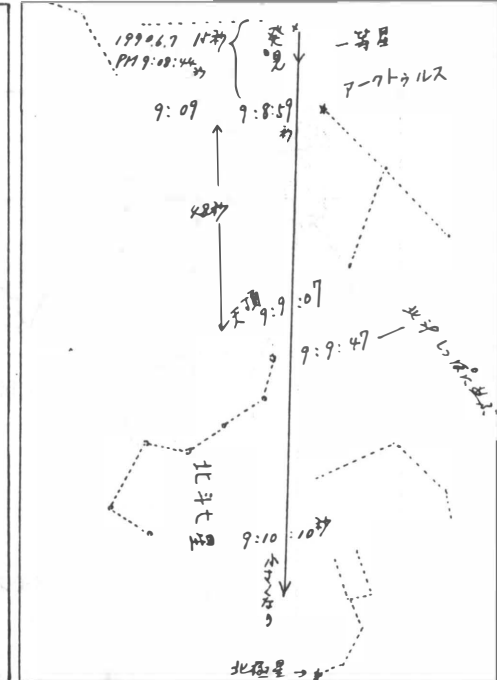


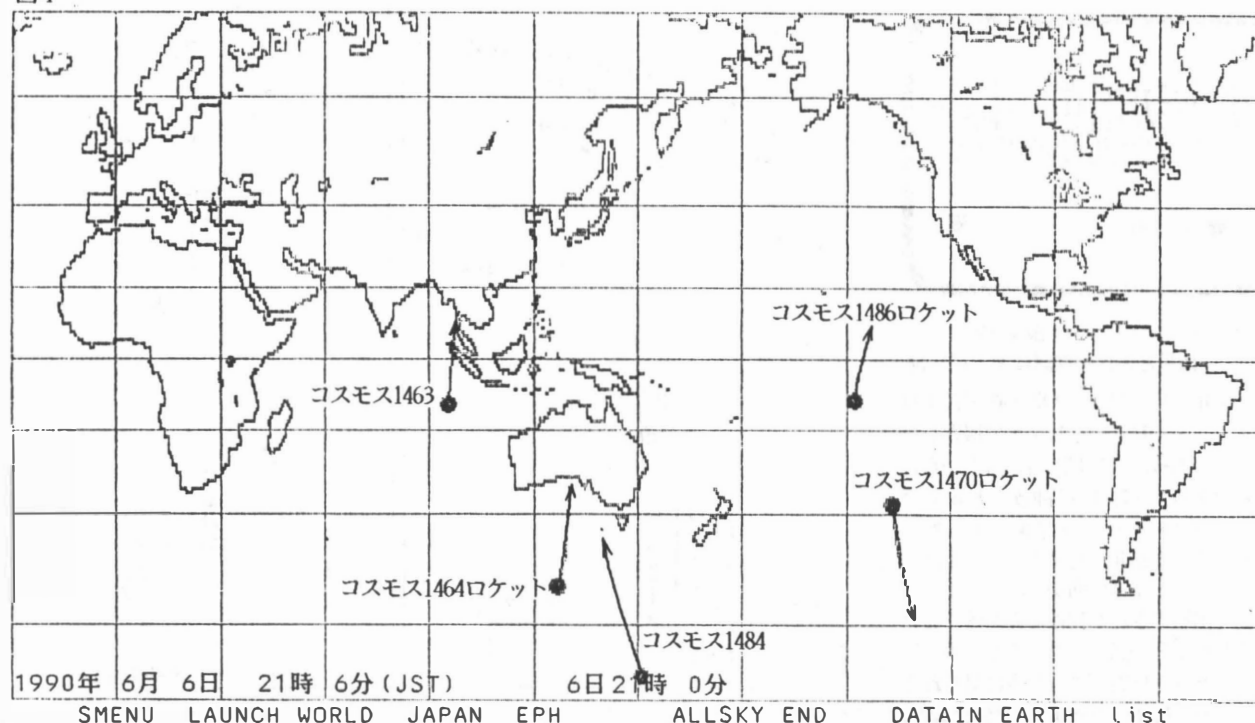
図3

には、何も写ってない画面に、秒刻みの表示だけが「どこそこを通過」の声がいつ発せられたかを示しており、図に記入してみた。この衛星の確認も同時にS氏に依頼したが、「該当衛星なし」であった。光度は2等星くらいであろう。図3衛星軌道の未確認衛星の観測は昔からある。筆者は、1963年頃、東京の町なかで子供たちと一緒に1等星を3つ横に並べたような細長い光体が、当時よく見られた風船衛星エコーのような直線等速で移動するのを何度も見ている。最近では8倍双眼鏡で天頂付近の星を観察中、青白い3~4等星の光が、機械的に1秒間に3回以上の明滅を繰り返しながらパッパッパッと移動するのを観測している。この現象は反射面の回転によるものと考えられるが、ロケット本体のスピン速度によるのか不明である。衛星本体の一部が強く反射しつつ回転する場合、『天文ガイド』によると点滅周期は7秒とか11秒というケースが多いという。

■未確認衛星観測例

1987年9月号『天文ガイド』に紹介された鳴門市の広田天文台観測の衛星も奇妙であったという。それは同年5月4日に観測されたもので、ペガスス座に2等級の星が出現、15秒ほど動かず、2秒ほどしてスーッと消えたとの事。観測者はそこで、静止軌道にある人工衛星と考え、260個の静止軌道に近い衛星を調べた結果、その付近にソードデメタの3段階が位置していたことが分かったが、この3段階は赤道上空46360kmにあり、大きさが1.8mで、直径が0.94mのほぼ円筒形。この物体が、果たして2等級の大きさに見えるかどうか、観測した橋本氏も疑問視していたとの事である。

図4



パソコンによる人工衛星軌道のシミュレーション図。一般に、衛星の軌道は楕円形である。ここでは、衛星の軌道を楕円形と仮定し、衛星の位置を楕円上の点として表示している。衛星の位置は、楕円の中心からの距離と、楕円の長軸に対する角度によって決まる。衛星の位置は、楕円の中心からの距離と、楕円の長軸に対する角度によって決まる。衛星の位置は、楕円の中心からの距離と、楕円の長軸に対する角度によって決まる。

■LAT橋本氏データによる検討

一個の光物について、それが何であるかを既知の資料との比較で検討する手続きは、極めて常識的であるが、実行となると地味な数値入力作業の膨大さに、大抵は素通りしてしまう。

しかし、逆に更に“徹底さ”を追求する方向もある。9月下旬、S氏より電話があり、「原稿着手を2週間ほど伸ばしてほしい。徳島の天文家が運営しているBBSにコンタクトして、LAT（民間人工衛星追跡組織）の橋本氏が発表している観測データを入手できそうなので。全部で300個ほどだが、入手したい入力し、データを送る」ということだった。

10月17日、資料到着。今日は22日である。橋本氏のこの分野の活動よりは、スカイラブ落下やコスモスの原子炉落下でコースと落下日時を計算したことで知られる。今日の新聞報道でも、イラク侵攻の数日前の今年7月下旬、ソ連の写真偵察衛星が突然軌道を変えて、クウェート上空を集中的に飛行した事実をつかんでいる。

■検討の推移■橋本氏データから、6月6日に最も近い5月31日の観測分を捜し出した。衛星、破片を含むおよそ7100個の中311個である。1960年代打上げ衛星もまだ飛んでいるのは驚く。生データは、表2に表示した項目以外に軌道の変化率など2項目がまだあり、ケタ数の多い数値なので、入力ミス

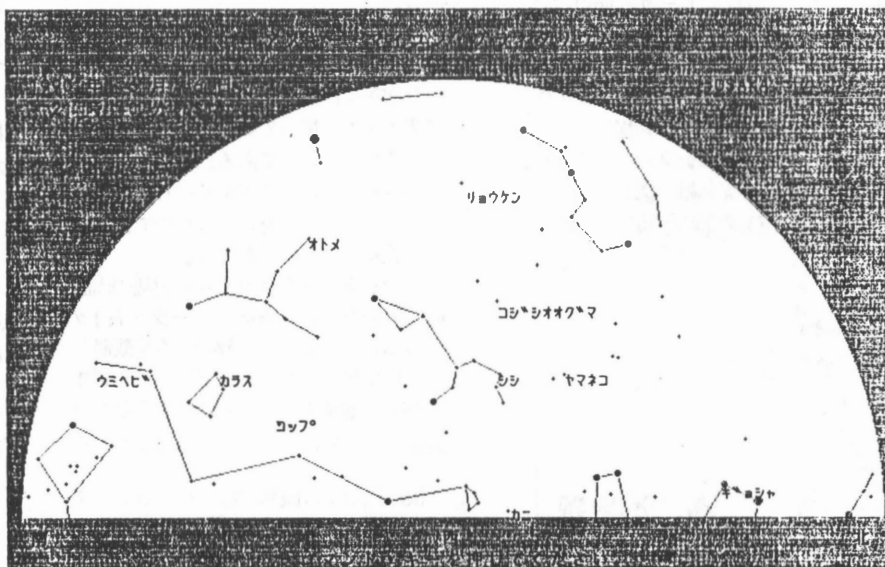


図5

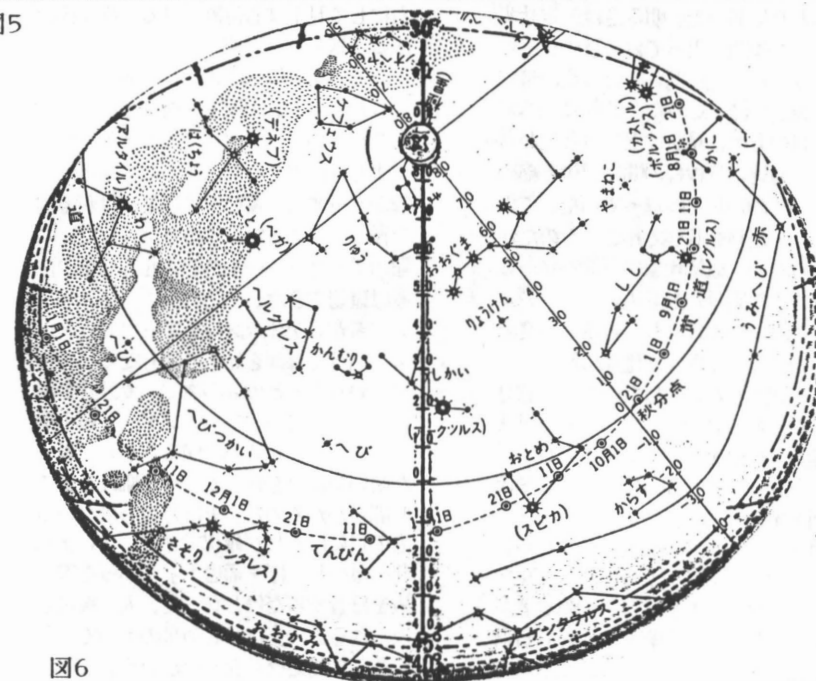


図6

がないか確認しながら行なった。入力した311個から、日本付近通過分をセレクト。プログラムでは同時に5個までシミュレーション可能で、ディスプレイ画面では5個の衛星が異なった色で表示される。

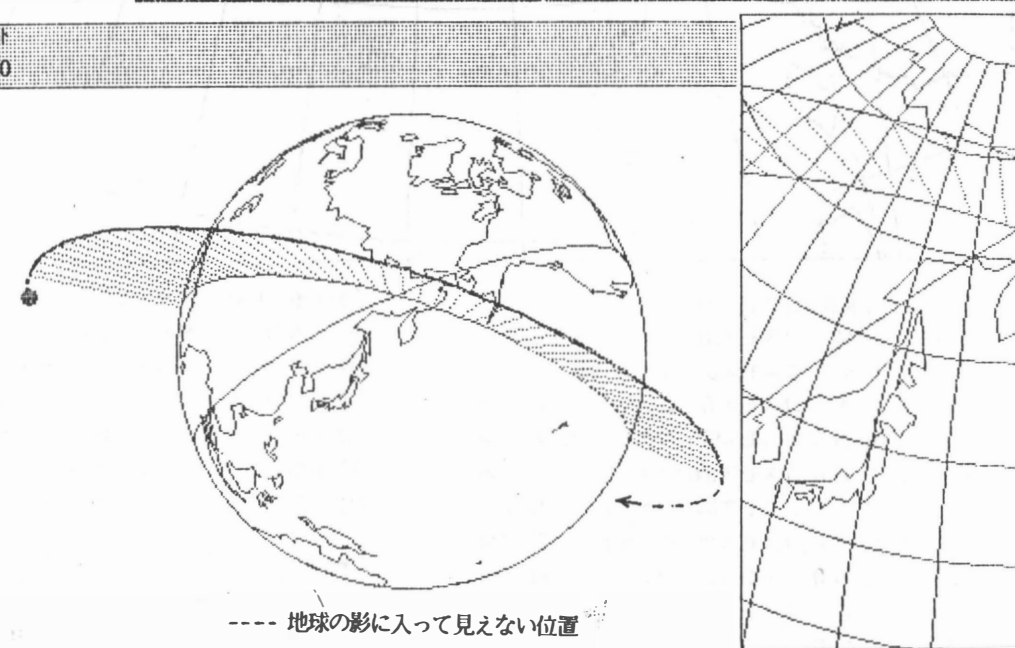
対象とした時刻は、観測撮影者根岸邦明氏の目撃時刻9時40分をターゲットに、8時30～10時30分の間に日本付近を通過するものを選出。これは日本から観測可能という意味ではない。結果は311個から59個に絞り込むことが出来、その通過コースをプリントした。（編者はこの59枚もの出力図を3枚に分けてトレスした。図8～9）

次に、この59のうち、目撃と同じ北方から南方へ飛行するものは25個となる。そのうち、時刻に関係なく頭上の天空を通過できると思われるのが4件。具体的にはコスモス226ロケット、コスモス1743ロケット、コスモス1898、そしてDMSP-2-04である。さらに大阪の目撃地点を北緯39度東経135度30分として、その位置から見える星に、4個の衛星をプロットした。（図10）右上の日時はプリンターへ出力した時点での時間を示し、左側の日時はシミュレーションの日時である。従って星座はシミュレーション・スタート時の位置を示しており、シミュレーションの経過に伴って星座の位置が変わらなければならないが、このプログラムでは変化しない。

■結果として、図11に示したDMSP-2-04のコースが、最も近いものとなる。これは高度830kmを飛ぶ自動車より小さい物体。

コスモス 185ロケット
+262.0 -53.0

図13



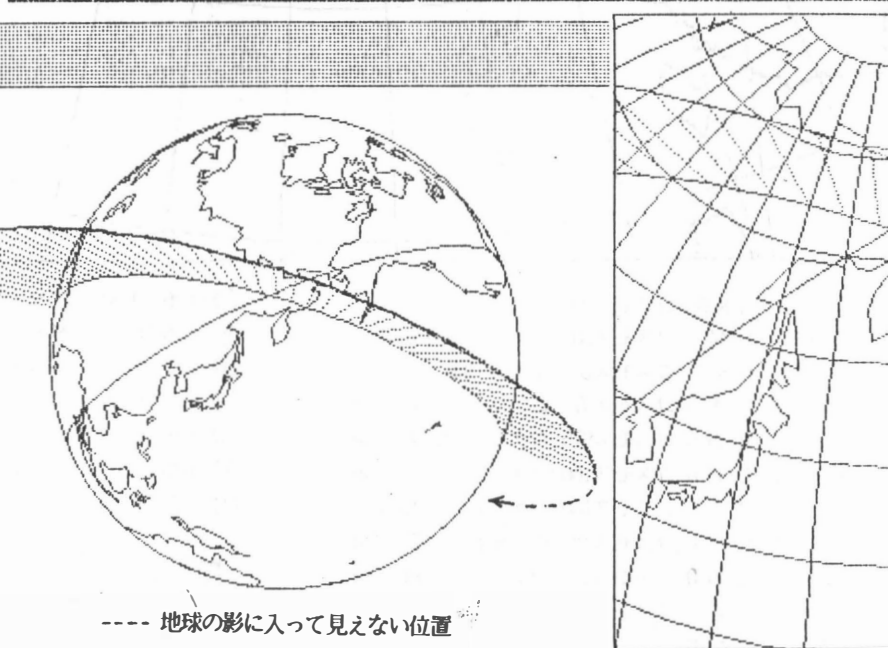
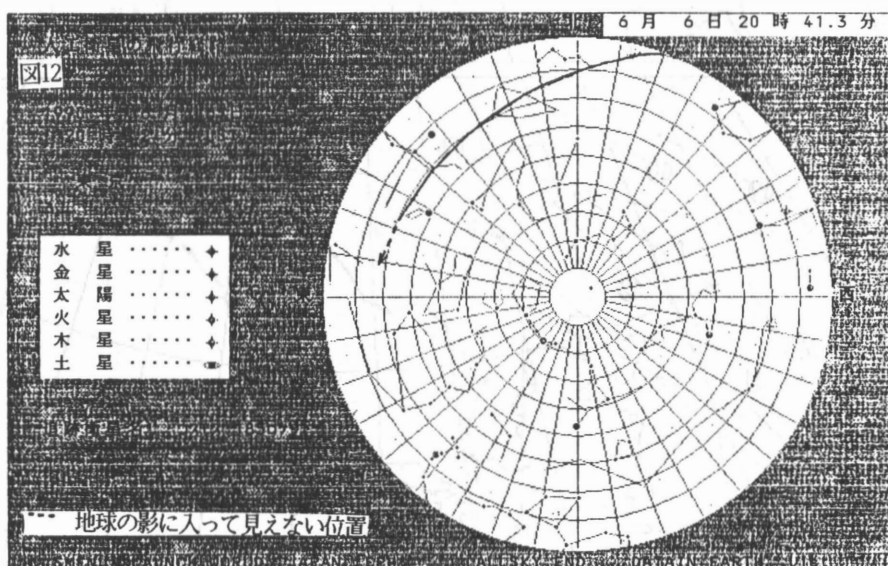
1990/ 6/ 6 21h 9m (JST)

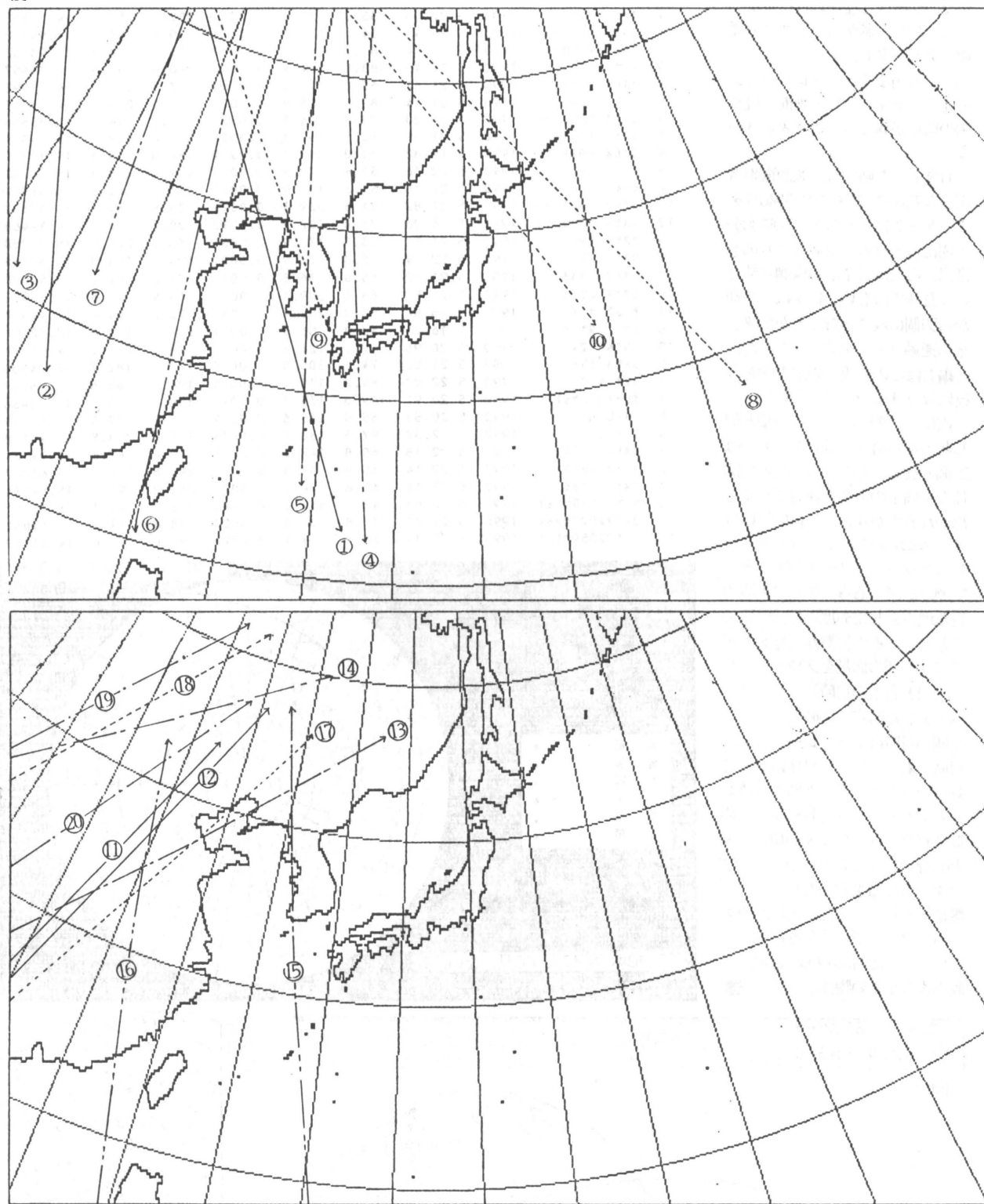
明暗 20h 43m

SMENU LAUNCH WORLD JAPAN EPH ALLSKY END DATAIN EARTH List

表1

No.	Name	Epoch	i	node	e	peri.	Mo	M1
0	0AO 3 ロケット	1990	5 22.03	35.0	27.0	0.0050	202.7	157.2
1	コスモス 185ロケット	1990	5 20.40	64.1	118.0	0.0178	179.4	180.7
2	コスモス 975ロケット	1990	5 21.24	81.2	42.2	0.0049	176.4	183.8
3	シーツ	1990	5 21.15	108.0	264.4	0.0002	260.6	99.5
4	コスモス 1220	1990	5 21.82	65.0	216.2	0.0185	3.3	356.9
5	コスモス 1602	1990	5 21.14	82.5	26.0	0.0025	61.0	299.3
6	コスモス 1602ロケット	1990	5 21.20	82.5	26.3	0.0026	66.1	294.3
7	コスモス 1733	1990	5 21.09	82.5	167.8	0.0018	230.0	129.9
8	コスモス 1844ロケット	1990	5 19.82	71.0	206.1	0.0014	354.8	5.3
9	ザリコト 7	1990	5 22.16	51.6	75.8	0.0002	111.6	248.5
10	ミール	1990	5 22.16	51.6	101.9	0.0011	317.4	42.6
11	コスモス 1943ロケット	1990	5 21.82	71.0	309.3	0.0025	208.8	151.1
12	コスモス 1980ロケット	1990	5 16.26	71.0	282.3	0.0012	108.7	251.6
13	コスモス 1985	1990	5 21.57	73.5	179.9	0.0006	130.3	229.9
14	コスモス 2027	1990	5 22.24	65.8	72.9	0.0021	195.1	165.0
15	コスモス 2033	1990	5 21.62	65.0	36.8	0.0011	275.8	84.2
16	コスモス 2046	1990	5 21.57	65.0	209.1	0.0010	265.4	94.6
17	ア・シ・リ	1990	5 16.84	50.0	352.4	0.0012	113.8	246.4
18	シ・ン・タ・イ	1990	5 16.71	50.0	86.6	0.0071	217.0	142.6
19	CHINA 24	1990	5 20.96	99.2	121.6	0.0077	120.3	240.5
0	コスモス 358	1990	5 21.50	74.0	308.0	0.0005	177.5	182.7
1	メチオール 8	1990	5 22.07	81.2	135.7	0.0010	194.5	165.6
2	ラジ・オス ロケット	1990	5 20.91	109.6	135.3	0.1090	358.1	1.6
3	アリール 6	1990	5 20.53	55.0	235.6	0.0011	82.7	279.5
4	S M E	1990	5 22.57	97.6	188.5	0.0005	131.7	228.5
5	コスモス 1534	1990	5 22.18	65.8	147.3	0.0021	312.4	47.6
6	コスモス 1631	1990	5 22.14	65.8	33.8	0.0023	245.8	114.1
7	コスモス 1788	1990	5 22.14	65.8	24.7	0.0025	260.2	99.6
8	ラ・ツ・カ・19ロケット	1990	5 22.01	46.6	349.0	0.3742	275.3	44.1
9	コスモス2027ロケット	1990	5 21.78	65.8	66.8	0.0023	208.8	151.2
10	コスモス2059ロケット	1990	5 22.31	65.8	101.4	0.0772	95.0	274.0





- ①・6/6 20:8.0 コスモス2027 h=455.5km
 ②・6/6 20:44 コスモス2027ロケット h=426.7km
 ③・6/6 21:8.0 コスモス2027 h=459.3km
 ④・6/6 20:29.5 コスモス975 ロケット h=560.5km
 ⑤・6/6 20:35.5 コスモス975 ロケット h=561.4km
 ⑥・6/6 20:32.0 コスモス1602ロケット h=653/3km
 ⑦・6/6 20:57.0 コスモス1602ロケット h=661.8km
 ⑧・6/6 20:44.0 コスモス185 ロケット h=476.3km
 ⑨・6/6 22:19.0 コスモス185 ロケット h=483.1km
 ⑩・6/6 20:47.0 コスモス185 ロケット h=485.2km
 ⑪・6/6 20:45.0 コスモス1844ロケット h=848.2km
 ⑫・6/6 20:30.0 コスモス1844ロケット h=850.4km
 ⑬・6/6 20:50.5 アリエル6 h=399.4km

- ⑭・6/6 20:30.0 アリエル6 h=399.4km
 ⑮・6/6 20:54.0 SME h=423.4km
 ⑯・6/7 21:39.5 SME h=421.5km
 ⑰・6/6 20:56.0 コスモス1220 h=623.0km
 ⑱・6/6 21:36.0 コスモス1220 h=639.5km
 ⑲・6/6 21:0.0 コスモス2046 h=431.0km
 ⑳・6/7 20:10.5 コスモス2046 h=429.2km

■軌道要素人力によりシミュレーションされた衛星軌道図。これは、その1件1件を、同じコンピュータ処理にトレスし、2枚に収めたもの。衛星の数が多いので、点線などで同じ衛星名を表した。しかし、本体とロケットとは同じ番号でも違う場合がある。13のアリエル6は、高度399.4kmとなっているが、1980年の天文年報では高度410km 近地点4km となっているから、10年間での約7km 落ちたことになる。衛星の高度は例えばソ連の気象衛星メテール2 180.0 99km(当時)で7等星、ひまわりなど静止衛星は13~15等星。高度はkm。*表1・2の軌道要素の項目1記号の意味は次の通り。Epoch=元期 i=軌道傾斜角(赤道に対する軌道の傾き) e=軌道離心率(軌道の丸み) Mo=平均近地点距 所=11月出の公転数

表2 人工衛星の軌道要素の人力登録されている人工衛星は次のとおりです。

No.	Name	Epoch	i	node	e	peri.	Mo	M1
0	トント-2	1990 5 31.14	30.4	108.5	0.0721	346.3	11.9	13.69704
1	トント-44	1990 5 30.27	65.1	108.3	0.0151	0.7	359.4	14.56517
2	トント-100	1990 5 30.81	90.3	85.9	0.0032	53.9	306.5	12.91565
3	トント-220	1990 5 30.74	74.0	251.0	0.0048	279.9	79.7	14.66772
4	トント-5	1990 5 31.24	81.2	48.3	0.0032	190.9	169.1	15.54650
5	トント-358	1990 5 31.02	81.2	228.3	0.0061	135.1	224.4	14.12948
6	トント-389	1990 5 31.10	81.2	284.2	0.0002	190.9	169.3	16.00878
7	トント-7	1990 5 31.45	81.2	191.0	0.0068	227.8	131.8	14.85214
8	トント-405	1990 5 31.37	81.2	114.3	0.0083	23.9	336.6	14.97247
9	トント-9	1990 5 30.10	81.2	6.7	0.0004	303.7	56.4	14.81244
10	トント-10	1990 5 31.37	81.2	284.1	0.0076	94.7	266.3	15.03196
11	トント-11	1990 5 30.31	92.7	276.4	0.0018	309.9	50.1	14.39249
12	トント-12	1990 5 31.49	73.9	324.9	0.1083	263.7	84.0	13.12816
13	トント-604	1990 5 31.05	81.2	323.8	0.0010	84.7	275.5	15.24795
14	トント-604	1990 5 31.02	81.2	342.8	0.0040	27.1	333.2	15.19724
15	トント-23	1990 5 30.02	81.2	343.0	0.0028	188.6	171.5	14.08655
16	トント-808	1990 5 31.12	81.3	85.5	0.0041	291.4	68.2	15.11718
17	トント-925	1990 5 31.56	81.2	208.2	0.0045	83.1	277.5	15.07451
18	トント-975	1990 5 31.15	81.2	31.1	0.0051	144.4	216.1	14.93850
19	トント-2	1990 5 30.35	108.0	283.3	0.0002	251.6	108.4	14.35684

新規登録ですか (yCR/n)?

人工衛星の軌道要素の人力登録されている人工衛星は次のとおりです。

No.	Name	Epoch	i	node	e	peri.	Mo	M1
0	トント-169	1990 5 30.95	71.0	254.2	0.0008	340.8	19.3	14.14842
1	トント-1733	1990 5 31.51	51.6	54.8	0.0010	349.6	10.6	15.50856
2	トント-1733	1990 5 31.10	82.5	158.5	0.0020	190.3	165.8	14.79394
3	トント-1733	1990 5 31.13	50.0	308.4	0.0012	150.6	209.5	12.44387
4	トント-1110	1990 5 29.53	98.9	356.3	0.0023	174.3	185.8	15.38883
5	トント-1805	1990 5 30.88	82.5	124.8	0.0020	110.7	249.6	14.78671
6	トント-1833	1990 5 30.90	71.0	54.1	0.0006	237.8	122.3	14.15241
7	トント-1933	1990 5 29.38	82.5	101.1	0.0019	173.9	186.2	14.76153
8	トント-1943	1990 5 30.93	71.0	290.1	0.0025	195.7	164.3	14.17304
9	トント-1	1990 5 30.79	82.5	174.7	0.0022	175.0	185.1	14.76974
10	トント-1	1990 5 28.56	82.5	177.4	0.0022	186.7	173.4	14.75191
11	トント-24	1990 5 30.82	99.2	131.5	0.0077	93.8	267.2	14.01320
12	トント-1980	1990 5 29.34	71.0	254.9	0.0013	88.6	271.6	14.14470
13	トント-1985	1990 5 31.20	73.5	158.9	0.0005	103.0	257.1	15.27223
14	トント-1992	1990 5 30.59	74.0	195.3	0.0006	197.9	162.1	14.33619
15	トント-36	1990 5 31.49	47.7	324.2	0.0003	176.4	283.7	15.29491
16	トント-2027	1990 5 31.04	65.8	44.8	0.0018	190.9	169.2	15.33251
17	トント-2027	1990 5 30.79	65.8	37.6	0.0022	203.5	156.5	15.43739
18	トント-2033	1990 5 31.47	65.0	3.5	0.0011	270.7	89.3	15.51995
19	トント-2046	1990 5 31.50	65.0	175.5	0.0010	268.0	92.0	15.52089

新規登録ですか (yCR/n)?

人工衛星の軌道要素の人力登録されている人工衛星は次のとおりです。

No.	Name	Epoch	i	node	e	peri.	Mo	M1
0	トント-2083	1990 5 31.53	82.3	20.4	0.0009	313.5	46.6	16.03269
1	トント-1	1990 5 30.93	80.5	299.8	0.0017	288.5	71.4	16.07324
2	トント-100	1990 5 31.17	90.0	214.6	0.0028	130.3	230.1	13.55355
3	トント-8	1990 5 10.04	90.0	56.2	0.0071	68.5	292.4	13.35831
4	トント-80	1990 5 31.19	56.1	43.8	0.0099	266.4	92.6	12.55995
5	トント-2	1990 5 31.30	79.9	229.2	0.1424	71.2	303.8	12.07362
6	トント-100	1990 5 31.50	65.0	321.6	0.0098	281.2	77.7	15.01484
7	トント-100	1990 5 31.56	65.0	214.1	0.0019	242.0	117.9	15.07067
8	トント-100	1990 5 29.80	35.0	313.1	0.0008	117.9	242.3	14.35554
9	トント-2	1990 5 30.09	100.6	346.4	0.0056	160.6	199.7	13.35268
10	トント-10	1990 5 31.04	70.0	20.2	0.0012	232.9	127.1	14.12122
11	トント-8	1990 5 31.54	58.5	306.4	0.0003	243.4	116.6	15.39906
12	トント-184	1990 5 30.31	81.2	113.4	0.0067	38.1	322.5	15.31693
13	トント-192	1990 5 30.23	74.0	69.0	0.0008	175.9	184.2	14.50366
14	トント-2	1990 5 30.89	35.0	344.9	0.0056	139.0	221.4	14.44857
15	トント-1	1990 5 31.15	81.2	212.7	0.0026	141.4	218.8	14.91252
16	トント-2	1990 5 29.53	99.1	345.3	0.0005	93.3	266.9	13.57536
17	トント-332	1990 5 31.10	74.0	90.8	0.0017	347.0	13.1	14.49856
18	トント-6	1990 5 30.57	81.2	193.9	0.0003	93.5	266.7	15.09864
19	トント-6	1990 5 31.23	81.2	238.6	0.0080	306.1	53.3	15.04209

新規登録ですか (yCR/n)?

人工衛星の軌道要素の人力登録されている人工衛星は次のとおりです。

No.	Name	Epoch	i	node	e	peri.	Mo	M1
0	トント-15	1990 5 29.01	81.2	162.0	0.0029	80.3	280.2	14.07922
1	トント-574	1990 5 31.28	83.0	152.2	0.0014	5.9	356.2	13.72746
2	トント-586	1990 5 31.07	82.9	184.6	0.0023	147.8	212.5	13.75942
3	トント-207	1990 5 31.08	74.0	35.3	0.0787	25.3	338.5	13.80843
4	トント-16	1990 5 29.52	81.2	337.5	0.0042	44.3	316.1	14.11442
5	トント-17	1990 5 29.47	81.2	129.7	0.0021	340.4	19.7	14.06371
6	トント-673	1990 5 29.98	81.2	20.3	0.0013	235.9	124.1	15.36474
7	トント-689	1990 5 31.32	82.9	146.4	0.0032	239.3	120.5	13.73059
8	トント-20	1990 5 31.20	81.2	206.1	0.0022	175.6	184.5	14.09201
9	トント-700	1990 5 29.33	82.9	81.7	0.0017	1.5	358.6	13.77405
10	トント-3-20	1990 5 29.35	115.0	272.9	0.0055	290.5	69.0	14.20777
11	トント-726	1990 5 30.23	83.0	220.6	0.0016	249.9	110.1	13.78798
12	トント-729	1990 5 31.26	83.0	93.2	0.0020	23.4	336.8	13.73739
13	トント-2	1990 5 29.62	99.6	17.0	0.0005	242.5	117.6	13.42965
14	トント-744	1990 5 30.05	81.2	39.0	0.0014	110.7	249.5	15.29021
15	トント-755	1990 5 29.44	82.9	133.9	0.0021	325.8	34.2	13.74764
16	トント-756	1990 5 31.39	81.2	129.1	0.0011	100.7	259.6	15.17409
17	トント-22	1990 5 29.29	81.3	249.7	0.0061	224.0	135.6	14.07089
18	トント-773	1990 5 30.42	74.1	298.9	0.0012	145.5	214.7	14.31370
19	TIP 2	1990 5 31.39	90.4	98.4	0.0063	169.8	190.4	15.17619

新規登録ですか (yCR/n)?

人工衛星の軌道要素の人力登録されている人工衛星は次のとおりです。

No.	Name	Epoch	i	node	e	peri.	Mo	M1
0	トント-985	1990 5 30.75	82.9	78.5	0.0047	276.8	5.9	13.77057
1	トント-990	1990 5 31.12	74.0	132.4	0.0016	110.8	249.4	14.34860
2	トント-991	1990 5 30.64	83.0	228.2	0.0023	17.0	343.1	13.76328
3	トント-13-20	1990 5 30.97	98.6	144.6	0.0152	281.3	77.1	14.31154
4	トント-996	1990 5 30.48	82.9	164.9	0.0037	72.6	288.0	13.77269
5	トント-1000	1990 5 30.62	82.9	12.3	0.0027	122.8	237.6	13.76148
6	トント-1005	1990 5 30.39	81.2	125.5	0.0010	276.0	84.0	15.02988
7	トント-1011	1990 5 30.44	82.9	136.3	0.0029	274.3	85.5	13.75940
8	トント-1023	1990 5 30.63	74.1	27.5	0.0026	310.5	49.4	14.35480
9	トント-1025	1990 5 30.87	82.5	82.2	0.0018	39.9	320.4	14.90950
10	トント-1027	1990 5 30.38	82.5	116.3	0.0021	148.7	211.5	14.79028
11	トント-1027	1990 5 30.29	82.9	70.8	0.0021	69.7	290.7	13.76549
12	トント-1043	1990 5 30.07	81.2	265.5	0.0007	262.0	98.0	15.08914
13	トント-7-20	1990 5 30.78	99.5	101.3	0.0029	172.0	188.1	13.84054
14	トント-1048	1990 5 30.42	74.0	58.7	0.0038	119.3	40.5	14.33216
15	トント-1066	1990 5 30.47	81.2	143.5	0.0051	339.3	20.6	14.09838
16	トント-1072	1990 5 30.64	82.9	215.1	0.0040	246.5	113.2	13.74611
17	トント-29	1990 5 31.08	97.6	139.5	0.0042	7.1	353.1	14.89471
18	トント-1076	1990 5 30.49	82.5	142.2	0.0021	135.4	224.9	14.79921
19	トント-1077	1990 5 30.68	81.2	231.2	0.0003	310.6	49.5	15.03835

新規登録ですか (yCR/n)?

人工衛星の軌道要素の人力登録されている人工衛星は次のとおりです。

No.	Name	
-----	------	--

表2続き 人工衛星の軌道要素の人力
登録されている人工衛星は次のとおりです。

No.	Name	Epoch	i	node	e	perl.	Mo	M1
0	SP-1 2-06	1990 5 30.94	81.2	333.3	0.0035	324.7	35.2	14.08442
1	SP-1 1222	1990 5 31.01	81.2	31.2	0.0003	350.0	10.1	14.91870
2	SP-1 122507	1990 5 30.40	82.9	120.8	0.0049	339.4	20.6	13.75720
3	SP-1 122607	1990 5 30.62	82.9	18.8	0.0031	11.5	348.7	13.75623
4	SP-1 124107	1990 5 30.26	65.8	68.3	0.0049	7.9	352.3	13.75705
5	SP-1 1242	1990 5 31.56	81.2	221.9	0.0018	93.5	266.8	14.87116
6	SP-1 124407	1990 5 30.33	82.9	94.3	0.0030	143.8	216.5	13.75470
7	SP-1 124707	1990 5 30.57	74.1	194.2	0.0005	190.5	160.6	14.30278
8	SP-1 2-07	1990 5 30.36	81.3	274.0	0.0032	306.5	53.4	14.07656
9	SP-1 1271	1990 5 30.94	81.2	306.5	0.0013	346.0	14.1	14.87235
10	SP-1 129507	1990 5 30.63	82.9	198.7	0.0035	311.8	48.1	13.77269
11	SP-1 130007	1990 5 30.26	82.5	234.7	0.0019	323.4	36.6	14.77142
12	SP-1 130407	1990 5 30.39	82.9	282.5	0.0041	257.3	102.3	13.87650
13	SP-1 130807	1990 5 30.66	82.9	236.3	0.0025	66.6	293.8	13.75419
14	SP-1 1315	1990 5 30.59	81.2	183.5	0.0024	156.6	203.6	14.84308
15	SP-1 2	1990 5 31.43	50.7	174.0	0.0009	164.0	196.1	15.40043
16	SP-1 132807	1990 5 30.46	82.5	293.7	0.0020	293.0	67.0	14.76854
17	SP-1 133107	1990 5 30.50	74.0	163.6	0.0021	155.8	204.4	14.33141
18	SP-1 133307	1990 5 30.50	82.9	157.9	0.0034	34.2	326.2	13.74150
19	SP-1 133907	1990 5 30.64	82.9	47.9	0.0045	130.0	230.5	13.76166

新規登録ですか (yCR/n) ?

No.	Name	Epoch	i	node	e	perl.	Mo	M1
0	SP-1 144707	1990 5 30.67	82.9	20.2	0.0028	157.9	202.3	13.75478
1	SP-1 144807	1990 5 30.30	83.0	94.3	0.0037	175.6	184.5	13.75639
2	SP-1 145207	1990 5 30.78	74.1	71.2	0.0006	335.0	25.1	14.31321
3	SP-1 1455	1990 5 31.13	82.5	214.5	0.0020	123.4	236.9	14.79552
4	SP-1 145907	1990 5 30.58	83.0	186.6	0.0043	263.5	96.1	13.76995
5	SP-1 1463	1990 5 31.49	82.9	177.2	0.0550	281.1	72.9	14.64468
6	SP-1 146407	1990 5 30.60	82.9	216.7	0.0029	343.0	17.0	13.74799
7	SP-1 147007	1990 5 30.41	82.5	118.5	0.0026	352.2	7.8	14.75809
8	SP-1 1484	1990 5 30.93	97.7	201.6	0.0043	124.7	235.8	14.88530
9	SP-1 148607	1990 5 31.14	74.1	301.9	0.0017	286.0	73.9	14.31431
10	SP-1 150007	1990 5 30.76	82.5	71.1	0.0022	276.4	83.5	14.76014
11	SP-1 150607	1990 5 30.44	82.9	332.2	0.0038	21.7	338.6	13.76560
12	SP-1 2-10	1990 5 30.45	81.2	305.4	0.0094	174.9	185.3	14.22764
13	SP-1 2-02	1990 5 31.06	98.4	10.7	0.0012	176.6	183.5	14.22288
14	SP-1 151307	1990 5 30.67	82.9	241.3	0.0048	135.6	224.9	13.75924
15	SP-1 151507	1990 5 30.39	82.5	281.2	0.0019	180.0	180.2	14.75956
16	SP-1 153107	1990 5 31.03	82.9	126.2	0.0020	224.1	135.9	13.73146
17	SP-1 153507	1990 5 30.49	83.0	158.3	0.0035	315.0	44.8	13.75249
18	SP-1 153607	1990 5 30.56	82.5	344.3	0.0023	3.2	356.9	14.75928
19	SP-1 153807	1990 5 30.61	74.0	191.4	0.0031	317.2	42.7	14.31166

新規登録ですか (yCR/n) ?

No.	Name	Epoch	i	node	e	perl.	Mo	M1
0	SP-1 200407	1990 5 29.35	83.0	252.6	0.0028	75.0	285.4	13.72654
1	SP-1 2-1807	1990 5 29.33	82.5	243.7	0.0019	48.8	311.5	13.83594
2	SP-1 2016	1990 5 29.07	83.0	191.2	0.0039	205.3	154.6	13.74047
3	SP-1 202607	1990 5 29.38	82.9	97.2	0.0037	20.2	340.1	13.76581
4	SP-1 2027	1990 5 28.80	83.0	299.3	0.0039	91.2	269.3	13.73593
5	SP-1 2034	1990 5 31.01	83.0	297.1	0.0034	64.4	296.0	13.74994
6	SP-1 2034	1990 5 28.60	82.9	221.5	0.0032	141.7	218.6	13.72513
7	SP-1 2037	1990 5 31.44	35.6	166.9	0.0326	47.8	315.0	14.50448
8	SP-1 2037	1990 5 30.07	99.0	160.5	0.0010	61.0	299.2	14.02217
9	SP-1 2037	1990 5 30.50	97.1	130.6	0.0082	53.9	307.0	14.40604
10	SP-1 2037	1990 5 30.80	35.6	273.4	0.0325	558.0	1.9	14.51841



通称	国際標準	元期 (通日 U. T.)
コスモス226 ロケット	1968-049B	1990年151. 2364001
メテオール 5	1970-047A	1990年150. 6158018
コスモス925 ロケット	1977-061B	1990年151. 5604837
メテオール2-05	1979-095A	1990年151. 0910831
コスモス1500	1983-099A	1990年151. 2177623
コスモス1689	1985-090A	1990年150. 7899253
コスモス1697 ロケット	1985-097B	1990年150. 9497888
コスモス1833 ロケット	1987-027B	1990年150. 9023786
ベガサス	1990-028A	1990年151. 5525902
USA 55	1990-028B	1990年150. 7142094
アプレスター-ロケット	1964-063A	1990年151. 1665320
アルotte 2	1965-098C	1990年151. 3016498
コスモス100ロケット	1965-106B	1990年151. 5568879
コスモス192ロケット	1967-116B	1990年150. 2325251
メテオール 1	1969-029A	1990年151. 1487630
コスモス332ロケット	1970-028B	1990年151. 1045334
メテオール6ロケット	1970-085B	1990年151. 2326425
コスモス381ロケット	1970-102B	1990年151. 2059723
コスモス426ロケット	1971-052B	1990年151. 2114741
コスモス521ロケット	1972-074B	1990年151. 0925367
メテオール 20	1974-099A	1990年151. 1968015
コスモス744	1975-056A	1990年150. 0523124
メテオール 22ロケット	1975-087B	1990年149. 2849725
メテオール 24	1976-032A	1990年150. 2778946
コスモス851ロケット	1976-085B	1990年150. 7928460
コスモス923ロケット	1977-059B	1990年151. 5537260
コスモス985ロケット	1978-007B	1990年150. 7521682
コスモス991ロケット	1978-022B	1990年150. 6352975
コスモス1025	1978-067A	1990年150. 8667974
コスモス1027ロケット	1978-074B	1990年150. 2917119
コスモス1072ロケット	1979-003B	1990年150. 6387789

人工衛星の軌道要素の人力
登録されている人工衛星は次のとおりです。

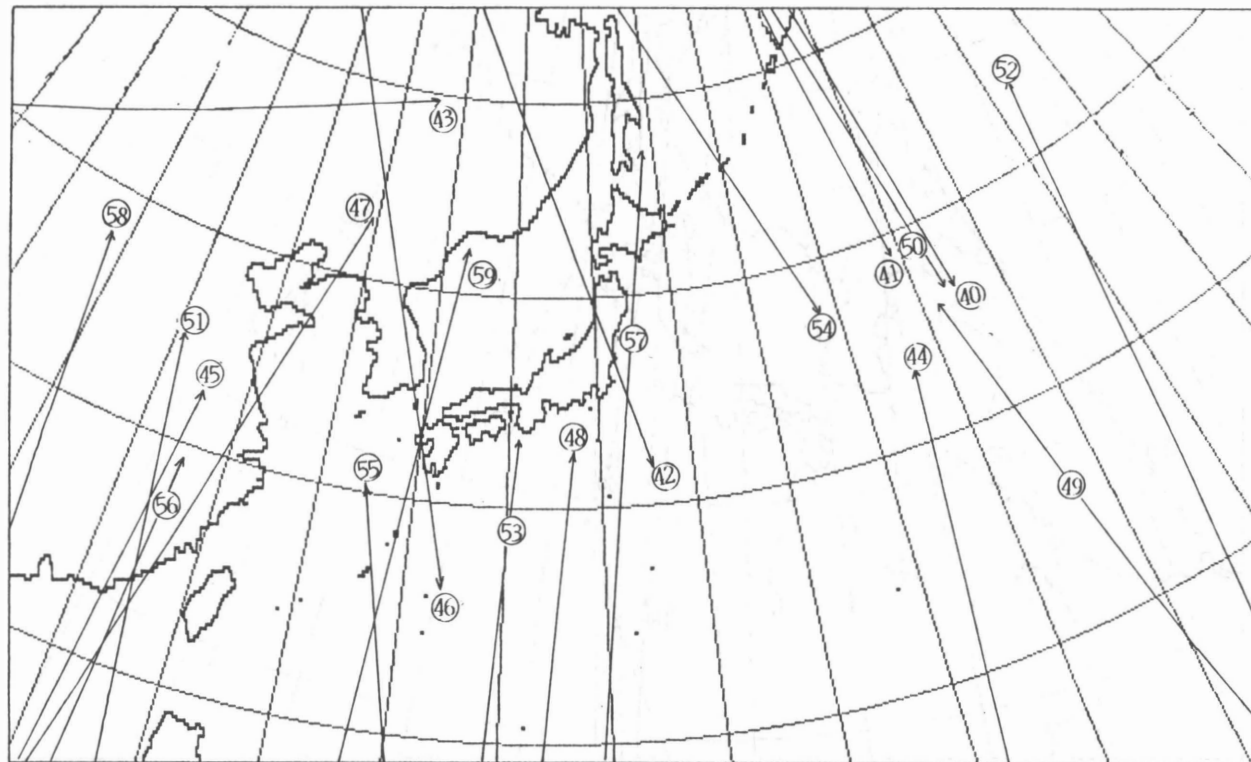
No.	Name	Epoch	i	node	e	perl.	Mo	M1
0	SP-1 1340	1990 5 30.46	81.2	136.3	0.0010	266.1	93.9	14.83460
1	SP-1 134407	1990 5 30.29	82.9	91.4	0.0040	276.1	83.6	13.74557
2	SP-1 1346	1990 5 31.21	81.2	70.2	0.0024	318.3	41.7	14.84102
3	SP-1 134907	1990 5 30.60	82.9	182.1	0.0028	267.2	92.6	13.74611
4	SP-1 135407	1990 5 30.46	74.0	306.9	0.0014	45.0	315.2	14.30640
5	SP-1 1356	1990 5 30.65	81.2	37.3	0.0022	154.5	205.8	14.80504
6	SP-1 137507	1990 5 30.50	65.8	159.4	0.0043	265.1	94.5	13.73480
7	SP-1 1377	1990 5 30.09	82.5	12.7	0.0020	165.3	194.8	14.79655
8	SP-1 138307	1990 5 30.93	82.9	309.2	0.0018	181.8	178.4	13.80504
9	SP-1 138607	1990 5 30.38	83.0	122.2	0.0053	134.7	225.8	13.77444
10	SP-1 1400	1990 5 31.10	98.2	214.0	0.0003	164.5	195.6	14.57124
11	SP-1 1400	1990 5 30.60	81.2	187.8	0.0015	23.0	337.2	14.84616
12	SP-1 1407	1990 5 30.64	44.6	334.0	0.0011	151.9	208.3	13.70041
13	SP-1 1408	1990 5 30.63	82.6	31.2	0.0023	120.4	240.0	14.80287
14	SP-1 140807	1990 5 30.64	82.6	33.6	0.0025	133.5	226.8	14.76523
15	SP-1 142007	1990 5 30.49	74.0	161.3	0.0019	107.2	253.1	14.31961
16	SP-1 2-09	1990 5 30.48	81.2	301.7	0.0057	89.9	270.8	14.13521
17	SP-1 1437	1990 5 30.99	81.2	343.5	0.0018	194.7	165.4	14.82648
18	SP-1 2-07	1990 5 30.48	100.1	308.1	0.0022	251.9	108.0	14.06479
19	SP-1 1441	1990 5 31.25	81.1	257.8	0.0004	284.4	75.7	14.85522

新規登録ですか (yCR/n) ?

No.	Name	Epoch	i	node	e	perl.	Mo	M1
0	SP-1 154407	1990 5 30.51	100.1	178.2	0.0093	30.2	330.4	15.17756
1	SP-1 154407	1990 5 31.47	82.5	169.1	0.0023	102.5	257.9	14.76127
2	SP-1 155007	1990 5 31.48	83.0	166.7	0.0015	223.7	136.3	13.73203
3	SP-1 157007	1990 5 30.77	74.1	83.8	0.0020	216.5	143.5	14.30229
4	SP-1 157707	1990 5 30.66	83.0	217.2	0.0026	18.2	342.0	13.75902
5	SP-1 2-11	1990 5 30.29	82.5	89.2	0.0013	356.6	3.5	13.83978
6	SP-1 160607	1990 5 30.64	82.5	226.6	0.0026	89.1	271.3	14.76415
7	SP-1 162607	1990 5 30.69	82.5	38.8	0.0025	23.9	336.3	14.76643
8	SP-1 166607	1990 5 30.34	82.5	101.6	0.0022	244.9	115.0	14.75885
9	SP-1 170307	1990 5 29.54	82.5	338.8	0.0023	345.6	14.5	14.75643
10	SP-1 170707	1990 5 30.78	82.5	283.7	0.0023	22.9	337.3	14.75959
11	SP-1 173307	1990 5 30.51	82.5	159.8	0.0019	202.4	157.6	14.76531
12	SP-1 1-11	1990 5 30.64	98.6	220.3	0.0024	225.3	134.2	14.27343
13	SP-1 174107	1990 5 30.48	74.0	312.9	0.0016	152.8	207.4	14.31229
14	SP-1 174307	1990 5 30.70	82.6	49.0	0.0023	142.8	217.5	14.75996
15	SP-1 175807	1990 5 30.90	82.5	93.7	0.0026	273.0	86.8	14.75721
16	SP-1 176307	1990 5 30.46	74.0	301.0	0.0036	277.5	82.2	14.34608
17	SP-1 176607	1990 5 30.79	82.5	76.5	0.0025	52.3	308.1	14.75539
18	SP-1 177707	1990 5 30.25	74.0	63.5	0.0011	112.8	247.4	14.32632
19	SP-1 178207	1990 5 30.52	82.5	159.1	0.0019	260.9	99.0	14.75643

新規登録ですか (yCR/n) ?

人工衛星の軌道要素の人力								
登録されている人工衛星は次のとおりです。								
No.	Name	Epoch	i	node	e	peri.	Mo	M1
0	SP-1 1788	1990 5 30.99	65.8	355.3	0.0026	255.8	104.0	15.59807
1	SP-1 180505	1990 5 31.09	62.5	125.1	0.0021	115.4	245.0	14.76187
2	SP-1 181204	1990 5 31.26	82.5	219.7	0.0020	236.7	123.2	14.75804
3	SP-1 181404	1990 5 30.62	74.1	194.4	0.0027	332.6	23.7	14.52805
4	SP-1 1797	1990 5 30.28	97.5	77.0	0.0179	80.5	281.6	14.39540
5	DMSP-2-03	1990 5 31.36	98.8	342.2	0.0016	71.6	268.7	14.14045
6	SP-1 1867	1990 5 30.90	65.0	132.0	0.0012	268.0	71.9	14.29580
7	SP-1 189204	1990 5 30.05	82.5	31.2	0.0024	72.7	289.7	14.76505
8	SP-1 1898	1990 5 30.95	73.1	103.6	0.0025	275.0	29.3	14.76505
9	DMSP-2-04	1990 5 31.31	98.7	35.0	0.0007	330.8	29.3	14.1452
10	SP-1 193704	1990 5 29.25	74.1	73.7	0.0029	165.8	19.4	14.33167
11	SP-1 1939	1990 5 30.83	97.9	211.5	0.0028	42.6	317.7	14.83222
12	SP-1 195304	1990 5 29.19	82.5	40.1	0.0026	125.4	235.0	14.75670
13	SP-1 195404	1990 5 29.49	74.1	317.9	0.0024	356.4	3.7	14.52247
14	JF 11	1990 5 31.30	99.0	99.6	0.0012	337.4	22.7	14.11611
15	SP-1 1975	1990 5 30.53	73.1	103.6	0.0025	275.0	29.3	14.76505
16	SP-1 197504	1990 5 31.23	82.5	337.0	0.0026	332.9	227.4	14.75809
17	SP-1 1980	1990 5 30.35	71.0	256.7	0.0009	132.5	47.5	14.12599
18	SP-1 198504	1990 5 30.61	73.5	166.2	0.0008	157.8	202.3	15.18797
19	SP-1 1992	1990 5 30.89	74.0	198.1	0.0023	41.3	319.0	14.31278



②・6/6 21:33.0	メテオール20 h=877.4km	④5・6/6 21:58.0	コスモス925 ロケット h=522.8km
③①・6/6 21:34.0	アプレスターロケット h=1054.9km	④6・6/6 22:02.0	コスモス1777ロケット h=782.4km
③①・6/6 21:38.0	メテオール2-05 h=875.4km	④7・6/6 22:02.0	コスモス381 ロケット h=1009.8km
③2・6/6 21:40.0	コスモス426 ロケット h=1141.9km	④8・6/6 22:02.5	コスモス1077 h=561.5km
③3・6/6 21:42.0	メテオール1 h=599.3km	④9・6/6 22:03.0	メテオール30 h=502.3km
③4・6/6 21:45.0	コスモス1697ロケット h=845.7km	⑤①・6/6 22:05.0	メテオール24 h=850.9km
③5・6/6 21:46.0	DMSP 2-04 h=830.0km	⑤①・6/6 22:05.0	USA 55 h=506.0km
③6・6/6 21:50.0	コスモス1766ロケット h=657.6km	⑤2・6/6 22:05.5	コスモス851 h=521.7km
③7・6/6 21:50.0	コスモス100 ロケット h=561.3km	⑤3・6/6 22:09.5	コスモス991 h=969.6km
③8・6/6 21:50.0	コスモス1500 h=644.6km	⑤4・6/6 22:10.0	コスモス332 ロケット h=745.8km
③9・6/6 21:54.0	コスモス744 h=481.2km	⑤5・6/6 22:16.0	コスモス1689 h=602.9km
④0・6/6 21:54.5	コスモス1025 h=609.1km	⑤6・6/6 22:26.0	コスモス1072ロケット h=1015km
④①・6/6 21:55.0	コスモス985 ロケット h=998.0km	⑤7・6/6 22:27.5	メテオール6 ロケット h=594.6km
④2・6/6 21:56.0	コスモス1898 h=804.0km	⑤8・6/6 22:30.0	ペガサス h=479.8km
④3・6/6 21:58.0	バスカラ2 h=459.9km	⑤9・6/6 22:32.0	メテオール5 h=850.4km
④4・6/6 21:58.0	メテオール h=918.8km		

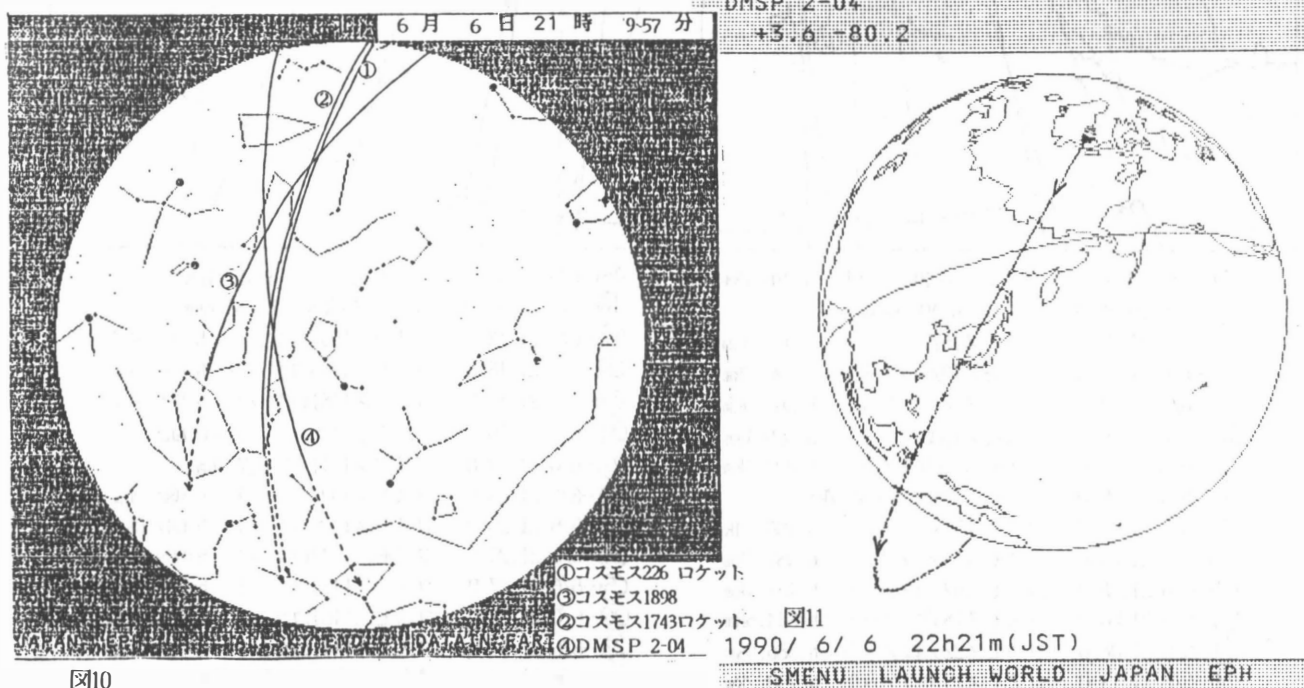
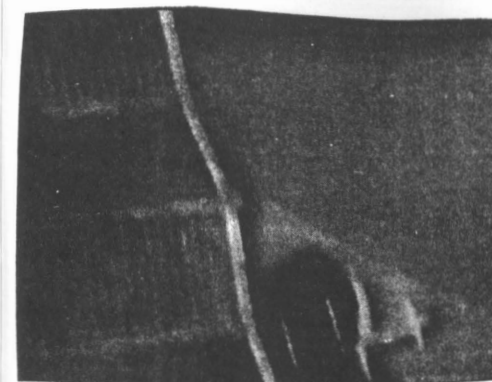
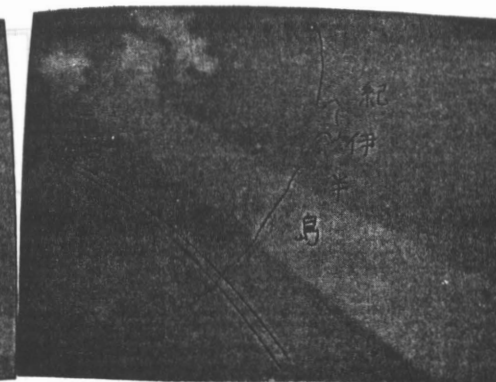


図10

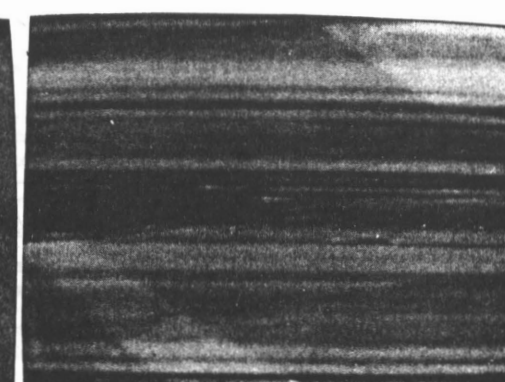
図11



◆1990年12月6日、ズームアップ前の画像



◆紀伊半島田辺付近を背景に影の動きを記入



◆乱れ画面2コマ目。上半分青、下半分赤

1991年新春UFO討論

1月4日午前10時、乾氏運転のライオンバンで、山野氏と共に西名阪を大阪に向かう。途中、大阪空港に進入する航空機を観察。機種の識別は乾氏が詳しい。淀川付近で航空機のそばに白点を発見。それを瞬と確認した頃だったと記憶するが、山野氏が「白い丸いものが見える。いま雲に入った。しかし出てこない。変な…」と話す出来事があった。筆者はこの様子を後部座席で聞きつつそれを撮ろうと8ミリビデオを構えるも確認できなかった。視力1.5の山野氏と、右0.9左1.0の筆者の視力の差と、後部座席からでは見にくい事によるものだろう。乾氏は高速運転中なので長い観察の余裕がない。

豊中でメンバー1人が乗り込み、箕面市の藤田宅に到着。藤田、山野、乾、茨木、栗原、天宮の6名で、まず乾氏制作の羽田国際シンポジビデオの導入部とフィナーレの試作を見る。本格的な活字文字によるスーパーインポーズで、バックグラウンドミュージックの選定もプロ並みと感じた。

また、同氏が大阪空港で撮影の航空機発着などを撮影した資料映像、その取材中偶然撮影した飛行船の正面・側面映像など、UFOとの比較観察資料として良質の映像が紹介された。

次に、山野氏が昨年ソ連が行なった日本人初飛行のソユーズ・ミールドッキング飛行録画で見つけた映像を皆で検討した。これは、『UFO RESEARCHER』Vol.1.2 No.4 掲載記事を見て当該シーンを捜すうち同氏が発見したもの。「形も変化している」と山野氏は指摘する。

ミールからの謎の映像

秋山氏撮影のミールからのテレビ映像は黒いゴミが目立つ。それが宇宙船の窓ガラスに附着しているため、カメラを動かすたびに逆方向へ動く。宇宙空間の間部を背景にする時は地球からの照り返して白く光って見える。秋山氏によると昼間の地球上空を飛行中、星はまったく見えないという。夜の部分に入った瞬間、星が見えるようになるのだ。

と語っていた。従って、何かの本に書かれていた「宇宙空間に出ると星は全然見えない」という議論は怪しくなる。

問題の像はカメラがズームアップして高知上空にさしかかる頃、画面を右下から左上へと横切っている。濃度が薄いので一見ゴミの拡大として見過ごすようなものだ。形はボンヤリと丸い。画面を横切る時間は1秒以内。しかし、その間、画面が乱れ、一瞬縦スジも見える。

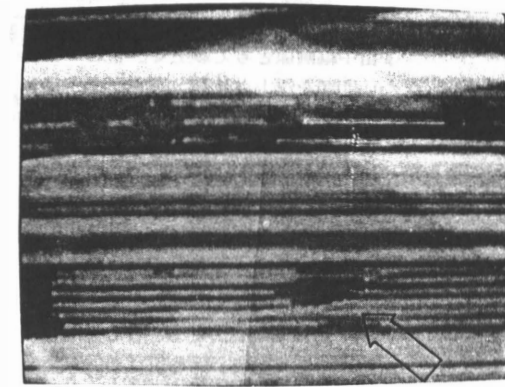
この映像の瞬間「アッ」というアナウンサーの声がしたが、次に続く状況説明のための感嘆符なのか、この映像に気づいた発声なのか、不明である。

よく判るようにと、藤田氏がコマ送りにした時である。問題の影が画面に入ったとたん、画面が乱れた状態になったのだ。その乱れた画面にもクッキリと丸い影が見える。そして次のコマには画面中央を上から下に一定の円で等間隔の「目盛り」が走り、その「目盛り」と丸い影が画面中央で重なっているのだ。

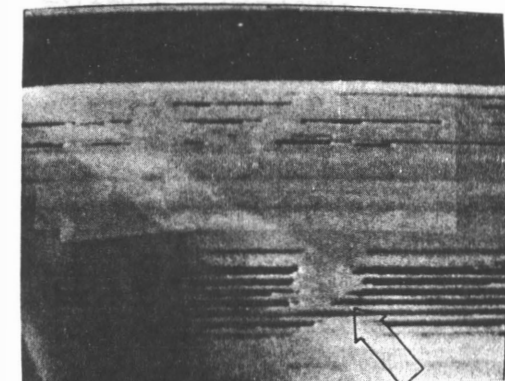
「何だ、これは!!」一同の目が緊張した。その画面の乱れの中に表れた、どう見ても「スケール」としか思えないモノ。これは一体、何を意味しているのだろうか。単なる画像の「乱れ」が作り出した偶然なのか。それとも異常映像（登録外物体の接近を含め）に対処する目的で、あらかじめプログラムされた何らかの自動処理の結果なのか…。

「公表できない秘密の衛星ではないだろうか?」との意見もあった。可能性は否定できないが、横切る速度は相対速度の差が開き過ぎている感じだ。

この画像はミールの秋山飛行士が撮影し、ソープ宇宙飛行管制センターを経由して、TBS系列のテレビ同時中継で日本全国に放映されているものと思う。この場合当然だが、管制センターでは画面チェックが厳密に行なわれている筈である。



◆乱れ画面3コマ目。全体が青、紫色調に影が強調される



◆乱れ画面4コマ目。3コマの目盛りの状態。薄い青に紺の筋



◆13コマ目。画面中央に目盛り状の36本。



◆乱れない影の像。影が画面にあるのは33コマ。

12月5日のモロッコ上空からの映像で、アナウンサーが「…飛んでいるように見えますね。画面の左の方にちょっと…飛行機かな?…」と言った際も画面が2段になって乱れ、ロシア語が聞こえた。

この場合の“乱れ”の原因を考えると、中継回線上の技術的な問題か、外部からの異常接近(衛星、いん石、UFOなど)研究資料作成用の意図的な対策が考えられる。

いずれにしても、この現象は今後の宇宙中継画像を考える上で、看過できない問題を浮上させた。

航空機無線傍受録画観察

途中から出席した津田氏と共に2台の車に分乗し、池田市の五月丘日の丸展望台に登り、そこから西へ約6キロ離れた大阪空港に離着陸の飛行機を観察。乾氏が、エア・バンド傍受の音声の間かしてくる。「今、あそここの機が誘導路に入る…」等と傍受通信を読みながらアプローチの機体やデパーチャーの機体を確認しつつ当該機をビデオに収めようとするが、発着の回数が多く、離陸したジャンボを追っている、もう生駒の山から進入機が迫ってくる、といった具合。航空管制のあわただしさを感じられる。この上、UFOが飛行機に追尾などしたら大混乱になるかも知れない。

空港をフカンする位置からの観察は初めての経験。屋根つき展望台の上は風が寒い。防寒着なしのメンバーもいるので日没後に展望台を下りた。再び藤田宅へと車は向かう。

U F O 史 概 説

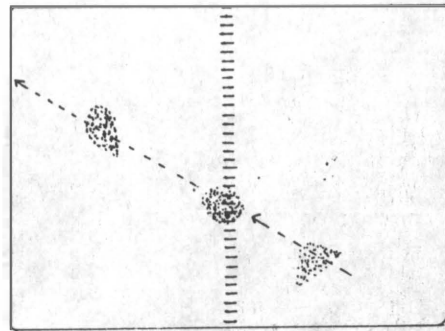
夕闇迫る頃、筆者が4年前の空飛ぶ円盤40周年を記念して制作した資料集を提示しながら30分ほど急ぎ話をした。その内容は以下の通り。

「アーノルドは、このレイニア山付近の地理に詳しく、当時の飛行機の機体についての知識から、目撃した物体の異常を知った。彼は山の嶺と嶺の間を通過する編隊の速度を操縦席の時計で計った。

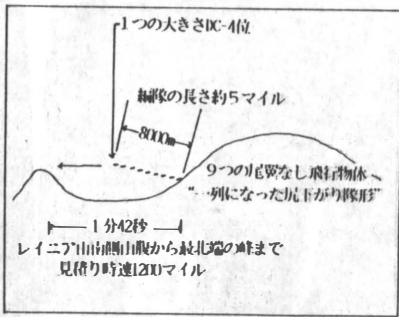
1948年1月7日、ゴドマン基地周辺の住民から円盤目撃の通報があり、付近を飛行していたP-51編隊が追跡に向かった。マンテル隊は3機で接近したが、僚機2機は目標を見失った。マンテルは単独で追跡、そして墜落した。

円盤に対して最初に発砲した事件では、白い球体はたくみに攻撃をかわした。

日本の学者の中には“天文学者はUFOを目撃していない”等と言うが、



◆影の動きと画面中心に表れた筋との位置関係を示す。つまり画面では、影に影の形に変化が見られる。



◆アーノルドが3分間の目撃録中に測定した数値

クライド・トンボー博士はニューメキシコの自宅裏庭から家族、つまり夫人と母親とで目撃している。また、ニューメキシコの原爆実験場付近で騒がれたグリーン・ファイアボールも目撃し、いん石研究のリンカーン・ラバズ博士も目撃してこのようにスケッチを残している。

有名なルッペルトは、UFOという言葉をも米空軍に定着させた。1952年7月、ワシントンにUFOが大挙飛来した。この事件はUFO側の事情によるのか、それとも地上にUFO飛来の原因となる何かがあったのか重要な問題だ。その出現はレーダー面だった。通常の航空機像は、ブリップが少しずつ移動していく。ところが、UFOはある場所に突然現れた。この図は真ん中がホワイトハウス、その下が国会議事堂、その右がアンドリュース空軍基地と説明されているが、距離が正確でない、雑誌社が資料に基づいて作成したものだと思う。とにかく、この時のUFOは大統領や国会、空軍基地に目標をおいていた。これが本物の空軍発表のレーダー図だが、何を表したのかよくわからない。

このレーダー面UFO写真は再現映画のシーンと思う。

1954年秋、ロンドン近郊のレーダーサイトに、毎日正午になると謎のブリップが現れた。それは始めUの字形で、次に2本の平行線となり、最後にZ字形になった。これを“Uはウランウムで原水爆、Zはアルファベット最後の文字だから地球の最後、核兵器をもてあそぶと地球の最後が来る”と何故解釈したのか、誰がそう解釈したのかは不明だが、この事件に伴って語られている。最初にこれが日本に紹介された

のは昭和33年の朝日新聞『パンビ・ブック』だった。その情報の出所はドナルド・キーボー少佐らしい。一方、新聞では『サンデーディスパッチ』で、翻訳した人も知っている。しかし、それ以後、知られなくなった。

UFOとは、またこのようにミサイル基地で活動している。また、米ソ核体制の中、疑似ミサイル編隊で本土に接近し、核攻撃誤認による偶発戦争の危険性に身をもって警告している。

ミサイル弾頭内蔵コンピュータに記憶させ攻撃目標の番号を変えた事件もある。

航空機とUFOの遭遇は二つに別けられる。民間機の飛行目的は旅客や貨物の輸送だが、戦闘機は領空侵犯に対して攻撃するためにある。この両者の発生の違いと、UFOの接近の違いに意味があるようだ。イラン空軍では戦闘機がミサイル攻撃に移ろうとした瞬間、ブラックアウトに陥った。

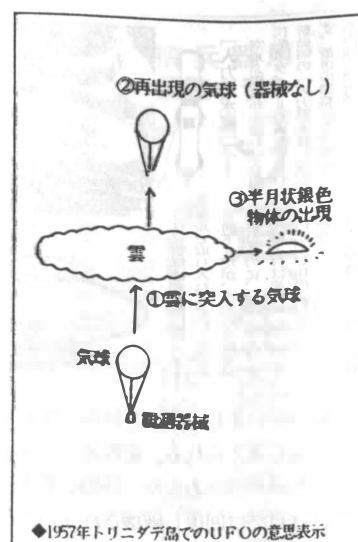
有名なブラジル海軍省公認の円盤写真は大西洋の無人島トリニダデで撮影された。直径70m。これが本物の空飛ぶ円盤だ。窓はなくシンプルな形をしている。この最も鮮明なものはデセヤド峰で反転する際の瞬間をバロウナが捉えたもの。彼は連続6枚撮影した。

この事件が起ったのは地球観測年といって、地球をくまなく調査する計画の一環として、ブラジルではトリニダデに観測基地が設置され、練習船が観測船に仕立てられて様々な観測が行なわれようとした時に発生した。撮影に至る経緯の中に、このような出来事があった。

観測気球が観測器械を吊り下げて吊上げられ、上昇していく。すると上空の雲に突入した。ところが、雲から再



◆1954年ビキニ水爆の年、ロンドン近郊で騒がれた「U=Z」レーダー面事件



◆1957年トリニダデ島でのUFOの意思表示

び出てきた気球から器械がなくなっていた。そして雲から円盤が現れたのだ。これをどう思うか? この意味は“地球をくまなく観測するのなら、我々に目を向けよ”という意味表示だ。“大気の調査より我々を調査せよ”という事だ。

これは学者・専門家によるUFO観察例の一覧だ。ザカテカス天文台の太陽面通過物体の観察記録も存在する。

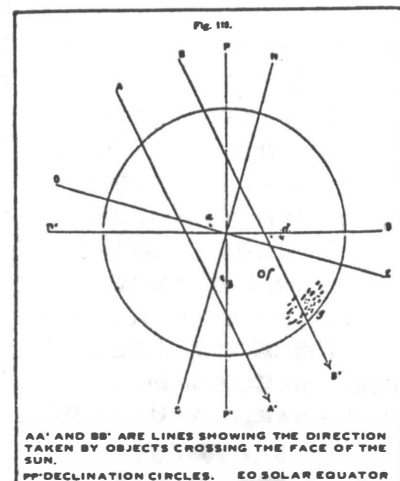
科学者とUFOを語る上で、故ハインリッヒ博士の場合をみってみる。彼は米空軍の下請けとしてUFO報告を既知の現象で説明する役割だったが、やがて自分が今まで何をやってきたかに気づいたらしい。パウロの改心に似ている。

これは宇宙飛行士の観察例。私の友人が昔、宇宙飛行士とUFOの遭遇事件を調べて感想を述べてくれたが、彼はこう言った。「どうも、宇宙カプセルの事故や故障に前後してUFOが目撃されているようだ」と。ここに好例がある。

(1971年のデータを読み上げる) “6月25日、サリュートステーションの周囲に赤く輝く4個の物体が、何か信号を発するかのように輝度を変化させるのが目撃された”この時の飛行士たちは帰還途中死亡した。

このチトフの撮影した編隊の写真が私が最初に見たときはカラーだった。グレンの見た宇宙ホテルが微粒子と騒がれたが、新聞のトップに出たこの写真を見て、私は“円盤じゃないか”と思った。今でもUFOとして紹介されている。

月は古来、クレーター内の建造物とか、移動する“山高帽子”、リンネクレーターの変化など様々な異常が観察されてきた。これはアポロ11号が撮影したもの。ゴーストだという説もあ



◆ザカテカス天文台の太陽面観測より

るが、私はNASAのフィルムを見た一人だ。二つの球体の間から何か出ていた。ゴーストイメージではない。

この(アルゼンチンの天文台)写真は客観的状況で撮影されたものだ。付近の住民から“月に何かが見える”と通報があり、レイナ博士が撮影した。

月はソ連の学者によると人工の天体らしい。ガス噴出も内部の気体が破れ目からもれた現象だとしている。月と太陽が地球から見ると同じ大きさとか、公転と自転が同じ周期で裏側をみせないとか、人為的に思える。古代人のいう“天国”とは月であったとか、月から人類が移住してきたなど、考えるべき点が多い。

第2次世界大戦末期1944年頃、ヨーロッパのライン河上空や太平洋戦線に謎の飛行物体が出現した。フランス語でフーファイター、英語でゴーストファイター、日本では空飛ぶシャボン玉などと呼ばれた。直径50センチとか20センチの球体で、戦闘機の翼端でグルグル回ったりした。太平洋戦争突入に前後して米本土を謎の空襲がおそった。これらの飛行物体は地上からの対空砲火にビクともせずゆっくりと飛行した。砲火による落下物で住民の方が被害を受けた。“天にツバする行為”という訳だ。

ベトナム戦争では、ファントムから目標に発射されたスバローミサイルが味方の軍艦に命中した。これを誤爆という。

(以下、UFO事件史、UFO飛行バタン、UFO写真、著名人の発言、1946年以前のUFO史、キリスト宇宙人説、ブグダと傘状UFO、ファティマ事件、古代オリエント史におけるUFO的要素、旧約聖書出エジプト記の“雲の柱”問題、古代絵画の中のUFO図形、遮光式縄文土偶と沙流オйна

種 類	意 味		
	航空機が地上にある場合 Aircraft on the ground	航空機が飛行している場合 Aircraft in flight	走行地域における車輦又は人 Vehicles, personnel on the maneuvering area
緑色の不動光 STEADY GREEN	離陸支障なし Cleared for take-off	着陸支障なし Cleared to land	横断(又は通行)支障なし Cleared to cross, proceed
緑色の閃光 FLASHING GREEN	地上滑走支障なし Cleared to taxi	飛行場に帰着せよ Return for landing	
赤色の不動光 STEADY RED	停止(又は待機)せよ Stop	道路を他側に譲り場 道路を飛行せよ Give way to the other aircraft and continue circling	停止(又は待機)せよ Stop
赤色の閃光 FLASHING RED	滑走路の外へ出よ Taxi clear of landing area in use	着陸してはならない Airport unsafe, do not land.	滑走路又は誘導路の外へ出よ Clear the taxiway /runway
白色の閃光 FLASHING WHITE	飛行場の出発点に帰れ Return to starting point on airport	この飛行場に着陸し、エプロンに進め Land at this airport and proceed to apron.	飛行場の出発点に帰れ Return to starting point on airport
緑色及び赤色の交互閃光 ALTERNATING RED AND GREEN	注意せよ Exercise extreme caution	注意せよ Exercise extreme caution	注意せよ Exercise extreme caution

◆航空機が通信機故障などで他の航空機や管制塔から指示を受ける時に用いられる可視信号(ライトガン)の種類と意味

におけるアイヌ文化神の関系、日本朝鮮同祖文化と原日本文化、装飾古墳の図形、不知火とUFO、地震とUFOを簡単に触れる。)

宇宙飛行士と宇宙人の面会は
何故行なわれなかったのか?

夜に入り、メンバーは藤田氏の母上より善哉に招かれ、席を移した。

以下に出席者の発言から再現してみよう。解説したり答えているのは主に筆者である。

「MJ-12 がニセモノと半信半疑して、米政府は、それらの行為を訴えないのだろうか?」

「陰謀が国家ぐるみとしたらどうか」「そんな組織は関係ない、と言うかも知れない」

「月に行った宇宙飛行士は月面で、UFOの基地に接近したが、何故、基地にいる宇宙人は面会に現れなかったのか?」

「アポロ宇宙飛行士は地球の代表として平和のために来た、と書いている。彼らだけ“平和です”なんてありえない。まず、自分達の世界を平和にしてから行くのが筋道ではないか。」

「家の中であなたが仕事をしているとき、犬が近付いて糞尿をたれても、知らぬふりして作業することができる。

観測(年)	観測者・場所・機関	アンテナ直径(m)	対象
1960	Drake 米 国立電波天文台	26	2機
1968-69	Trochaki ギリシャ Zimen 米	15	2機
1970 2/1	Trochaki ギリシャ	ダイポール	パルス電波
1972	Venushur 米 国立電波天文台	91	2機
1972 7/6	Palmor 米 国立電波天文台	43	10機
1972 2/1	Kardashov ソビエト連邦	91	400機
1972 2/1	Bowyer 米	ダイポール	パルス電波
1973 2/1	Dixon & Cole 米 空軍無線電台	40	ダイポール
1974 2/1	Bridle & Feldman カナダ アルゴンティン天文台	46	500機
1975	Drake & Sagan 米 フレンド	305	4機
1976	Clarke 米 国立電波天文台	43	4機
1976 2/1	"Sensory" 米 パーシ	26	5機
1977	Black 米 国立電波天文台	91	200機
1977	Drake & Skull 米 フレンド	305	4機
1978	Horowitz 米 フレンド	305	200機
1980 年代	Lord & O'Day 米 マサチューセッツ工大	7	千機
	Israel & Tarter オランダ フェスターボーク	千機	千機
	Shostak & Tarter オランダ フェスターボーク	千機	千機
	Tarter 米 フレンド	305	千機
	Brenard & Tarter フランス デンセイ	300x35	千機
	Horowitz 米 フレンド	305	千機
1982 2/1	Horowitz 米 オークワッジ	26	5機

◆電波望遠鏡による受信計測例

画題『天の白い傘』

『喜び笑っていて清らかな衣をまとう30人の神々の群は、衣をとって恭しく帝釈天を仰ぎて讃嘆するのを、アシタ仙人は11月の休息に見た。』

『こゝろ喜び踊りあがっている神々を見て、こゝに仙人は恭しくこのことを問うた。……「神々の群は極めて満悦している何故ですか？どうしたわけか、かたはらは、衣をとってそれを振り廻しているのですか？……」』

『これに対して神々は答えて言った。』

『無比の妙宝であるかのボーディサッタ（菩薩、未来の仏）は、もろひとの利益安楽のために人間世界に生れたまうたのです。……シヤカ族の村に、ルンビニーの繁樹に。……』

『神々は、多くの臂あり千の輪ある傘を空にこがした。黄金の柄のある仏子を上下に輝いた。』

しかし、傘を手にしている者は見えなかった。』

※傘蓋は王者の標識である。註は「天の白い傘」(dibhasat-acchatta)と解する。

『ゴータマ・ブッダ-釈尊の生涯-』

中村 元選集 第11巻 (p.53-54 p.61)



画題『ウルヴェーラーの神変』

『ウルヴェーラーの神変 その2』

『1. さて、尊師は、ほら見結びの行者ウルヴェーラー・カッサパの底の近くにある、或る密林に住しておられた。』

『ウルヴェーラーの神変 その3』

『1. さらに世界の主、梵天は深夜に優美な彩光によってあまねく密林を照らして、尊師のおられるところ近づいて、尊師に敬礼して一瞬に立った。それはあたたかき大きな火むらのごとくであり、前の色彩や光輝よりもさらに優美であり、さらに絶妙であった。』

『そこでほら見結びの行者ウルヴェーラー・カッサパは、その夜が過ぎてのち、尊師のおられるところへ赴いて、尊師にこういった。』

『大尊よ、もう時刻です。食事の用意ができました。いったい誰が深夜に優美な彩光によってあまねく密林を照らして、あなたのおられるところ近づいて、あなたに敬礼して、一瞬に立ち、あたたかき大きな火むらのごとく、前の色彩や光輝よりもさらに優美であり、さらに絶妙であったのですか？』

『カッサパよ、あれは世界の主、梵天であつたが、教えを聞くために、わたくしのいるところへやって来たのです。』

『ゴータマ・ブッダ-釈尊の生涯-原典1巻』

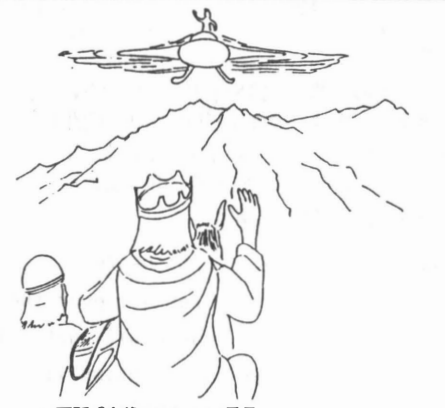
中村 元選集 第11巻 (P.298-301)



画題『古代ペルシャの風景』

アフラ・マツダはスピタマ・ザラスシュトラに仰せられた。汝は、教え人及び裁き人たる職務を掌理すべし。――我らは、月と住居にミヤズダを祭る。すなわち、我に、月を先頭に輝ける星辰が来たり、男たちに栄光を与えんがために、住居の賦与者なるティシュトリヤを、ザオスラもちて我は祭らん。

ティシュトリヤ星、富める者、輝ける者を我らは祭る。[彼は]安寧なる住居を与え、好きな住居を与える者、白く、輝き、まぶしき者にして、きらめく者、治癒力あり、飛行するに速く、背高き者、遙かなたより、その汚れ無き輝ける光にて、きらめく者なり。『アヴェスタ抄』-ティシュタル・ヤシュト-第1章1節、9節



画題『変容と輝く雲』

これらのことを話された後、8日ほどたつてから、イエスはベトロ、ヨハネ、ヤコブを連れて、祈るために山に登られた。祈っておられる間に、み顔の様が変わり、み衣がまばゆいほどに白く輝いた。すると見よ、ふたりの人がイエスと語り合っていた。それはモーセとエリヤであつたが、栄光の中に現れて、イエスがスルサレムへ送ばようとする最後のことについて話していたのである。

――新訳聖書 ルカによる福音書(第9章28-33)

彼がまだ話終えないうちに、たちまち輝く雲が彼らをおおい、そして雲の中から声がした。「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。これに聞け」弟子たちはこれを聞いて非常におそれ、顔を地に伏せた。

――新訳聖書 マタイによる福音書(第17章5-6)

作画：天宮ユキ(アンダラインも)



UFO観測の方法

UFO観測とは？

従来より野外科学の分野では、野鳥観察や航空機の撮影、雲などの気象観測や星空の観測、人工衛星や流星観測が行なわれている。しかし、それらの観測では既知の生物や飛行物体・現象を対象とするので、見掛けの大きさとか、空のどの当りに見えた等の要素は問題視されない。

UFOの場合は、相手の大きさや種類といった要素はまったく未知であるから、「見たありのまま」を正確に表現・再現することが最も重要になってくる。けっして誇張したり嘘をついてはならないし、空想による解釈も不要である。そこに人間個々の人間性に関係する課題がある。



■快晴の夜間観察には星座や惑星の確認が大切。空の現象の位置の記録には大変参考になる。



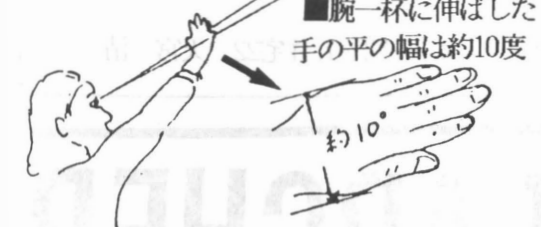
STOPWATCH



■見掛けの大きさを計る器具

■分度器を利用した仰角測定器

■空の観測に用いられる用語



■野外観測の準備

実際には一人でビデオとスチルカメラを同時に使う事は出来ないので、複数の人で分担するか、得意な機器を一つ持つ事になる。ビデオ映像は後の分析に役立つので、やはり映像として残したい。



■空中にある物は、角度で表現するのが望ましい。そのためには腕を一杯に伸ばした指先との比較が万国共通測定方法である。

大指 約2° 月球=0.5° 2°は月球4分

■昼間観測の装備

- ①視直径測定器
- ②仰角測定器
- ③方位磁石
- ④メモノート
- ⑤ボールペン
- ⑥予備バッテリー
- ⑦8-16倍ビデオカメラ
- ⑧ビデオ用三脚
- ⑨最大300mm 望遠付カメラ
- ⑩8-24倍ズーム双眼鏡



■突発的なUFO出現に充分対処できるためには、フィルムやテープの予備、バッテリーの充電や電池の消耗に留意し、すぐ使用できる状態を保つ必要がある。

